魔法少女リリカルなのは～黄泉路への案内人～

楽一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは～黄泉路への案内人～

【Ｎコード】
Ｎ２０６９Ｘ

【作者名】
楽一

【あらすじ】
かつて彼は『黄泉路への案内人』と呼ばれ民も、国からも恐れられた。
在る者を助ければ在る者は見捨てる。
死後彼は何を求め闘うのか、誰のために戦うのか。
※処女作なので誤字脱字はあるかもしれません。更新もきまぐれです。
それでも楽しんで読んでいただければ幸いです。

登場人物紹介（前書き）

とりあえず設定を先にきめとかなきゃという思いから作りました！

登場人物紹介

神無月（かんなづき）　葵（あおい）

本作の主人公

転生前年齢　２０歳

転生後年齢　９歳

転生前後の体重　平均より１ｋｇ軽いぐらい

好きなこと　家事全般、小物作り、可愛い物をめでる、読書

嫌いなこと　いい加減なこと、正義（過去何かあったらしい）

容姿

典型的な日本人だが、瞳の色だけは青色。顔はまだ幼さが残っている。いわゆる女顔だが

本人は全く気にしていない。魔法を使う時に限り髪の色がなぜか白銀に変わる。

性格

基本は優しい。だが、相棒であるエクスとルミルに暴言やひどいことをするとたとえ相手が友人でもトラウマになるほどの後悔という名のトラウマを与える。

エクス

主人公の神姫　（いわゆるデヴァイス）

年齢　転生前後ともに不明

体重　「いっちゃだめー！」

好きなこと　マスターと一緒にいること

嫌いなこと　マスターと離れていること

容姿　武装神姫アーンヴァルＭｋ．？

性格

素直だが、葵のことになると周りが見えなくなる。葵をこよなく愛している。

モード白騎士

恰好はＭＨ２Ｇのウカム装備（男性）　主に攻撃と防御に主体を置いている。

遠距離、中距離に主体性を置いており砲撃魔法と銃撃戦が得意。

接近戦用も装備しているがあくまでも非常事態専用。

ルミル

主人公の神姫

年齢　転生前後ともに不明

体重　「良い度胸だ。塵と化すか？」ガタガタガタ

好きなこと　マスターと共に戦うこと

嫌いなこと　一人でいること

容姿　武装神姫ストラーフＭｋ，？

性格

クールだが頼りになる一面もある。葵をこよなく愛している。

モード黒騎士

恰好はＦａｔｅのアーチャーの全黒！　そして外套の上が無い感じ。

主に近距離、中距離に主体を置いており、速度と攻撃性重視。

武器は両翼刀という翼の形をした白翼刀（はくよくがたな）という刀と黒翼刀（こくよくがたな）という刀。

中距離武器は弓矢。

神姫（しんき）　葵たちがいた世界のデヴァイスみたいなもの。

人型、精霊型といわれるモードに変更できる。

登場人物紹介（後書き）

こんな感じで書き続けていきたいと思います。

プロローグ（前書き）

処女作です。楽しんで読んでいただければ幸いです！

プロローグ

プロローグ

「はて？　ここはどこでしょう？」

そこにたっていたのは上下全て黒で統一されところどころ白い刺繍が入っている服（イメージはＦａｔｅのアーチャー。ただし上の外套は着ず、外套も赤ではなく黒）を着ている男性。

見た目は２０歳。髪の毛は白銀、瞳は青色。右の耳に黒と白のイヤリングをしている。

そして彼の目の前にいるのは土下座をしている白髪に白髭のやせている御爺さん。

「すみません。そこの御老人」

「は、はい！」

「ここはどこでしょう？」

「こ、ここはいわゆる天国じゃ」

「ほぉ。ここが天の国。ん？　ということは私は死んだことになるのでしょうか？」

「はい。おっしゃる通り」

「ふむ。エクス、ルミル」

彼がそういうとイヤリングが光り、そこに二人の女性が現れた。

「なんでしょう。マスター」

そういって白色のイヤリングから現れたのは金色の髪に青い瞳、白を基調とした服を着ている女性。といっても身長は１５０後半だろう。エクス（武装神姫アーンヴァルＭｋ．？参照）。

「呼んだか？　マスター」

そしてもう片方の黒色のイヤリングからは黒色を基調とした服を着て、オレンジの瞳、水色の髪の毛をしたクールな女性。身長はやはりエクスと同じ。ルミル（武装神姫ストラーフＭｋ．？参照）

彼女たちがイヤリングから人の姿に変わると、私の髪の色も黒色に戻った。髪の色の変化は魔法を使う際に私の過去が原因でこうなるらしい。

「私は死んだらしい。でも、まぁ世界を敵に回して生き残れるわけはないと思っていましたがね」

「マスター。ですが、今またこうして出会うことができたのです。私は嬉しいです」

「はい。マスターは悪くありません！　悪いのはあいつと世界です！　と、話を折って申し訳ないのですが、マスター。ここで頭を下げているご老人は誰ですか？」

「え？「ほぅ。白か」いやあああああああああ！！」

何かを言い当てた御老人にエクスは白騎士に切り替え砲撃を放ち御老人は星の彼方へ。

「落ち着いてください。エクス」

「うぇえええん。ひっぐ、まずだー、みられぢゃいまじた・・・」

泣きながら、エクスはマスターと呼ばれる男性に抱きついた。

「あ～、よしよし。大丈夫ですよ」

「えへへへ／／／」

男性がエクスは泣きやみ、頬を朱に染めながら笑っていた。

「ん？　ルミルどうかしましたか？」

「エクスばかりずるい」

「ルミルもおいで」

「ん」

するとルミルも撫でやすいように頭の角度をずらすと、男性も優しくルミルの頭をなでた。

「おーい。話を続けていいかのぅ？」

「あ、はいどうぞ。あと、私の相棒に不埒なまねは二度としないでください。じゃないと
私もあなたを殺してしまいそうで」

そう言い終わると男性は不気味な声で「フフフッ」と笑っていた。

「わ、分かった。約束するからその笑い声をやめてくれ」

「分かりました。ところでここは？　そしてあなたは？」

すると老人は髭を整え、

「わしは神。ここは天国じゃ」

「・・・・」

「マスター、病院へお連れした方が・・・」

「エクス。もう手遅れだ。マスター黒騎士になってこの方の介錯をしてあげた方が」

「本物じゃ！　なら、これを見ろ！」

そういって神（自称）は一枚の紙をこちらに手渡した。

「自称じゃない！　本物じゃ！」

「無視して、どれどれ。ほぉ。私の個人データですね」

「ふむ！」

そこには彼の名前、生年月日、出身地、そして今までこなしてきた依頼の数々。

「さすがじゃの。『黄泉路（よみじ）の案内人』、神無月葵（かんなづきあおい）」

「いえいえ。私はただ自分の成すべきことをしてきたまでです。それで私は死んだのでしょう？　どうしてここへ？」

「うむ。簡潔に言おう。お前さんの力を貸してくれんか？」

「どういうことでしょう？」

「うむ。その前にお前さん、アニメは知っておるか？」

「えぇ。たまに見る程度で」

「ならこれは知っておるか？」

そういって神は一つのＤＶＤを見せた。タイトルは魔法少女リリカルなのは。

「これがどうかしたんですか？」

「うむ。その中にイレギュラーがはってしまっての」

「イレギュラー？」

「本来物語というのは作られた物。設定や登場人物もあらかた決め

れらた者しか出てこない。じゃが、いくつもの世界のうちの一つのなのはの世界にイレギュラーが現れて物語が変わってしまっての」

「そのイレギュラーを排除してほしいということですか」

「そうじゃ」

「どうします？」

そういって葵はエクスとルミルの方を見ると、二人とも、

「「マスターの身心のままに」」

その目には強い意志が宿っており、決意もある。彼は彼女たちに何度も助けられ支えられてきた。

「なら、決まりですね」

「ありがとう。それでじゃ。何か欲しい能力があれば３つまでならあげられるが？」

「三つ。うーん。武力は今までのままでいいし、せいぜい住む場所とお金ですかね」

「その辺はすでに手配しておる。安心して構わん」

「わー、太っ腹ですね」

「むしろそれぐらいは前準備でしてもらわないと困ります」

「となると、特にありませんね。後で決めてというはありですか？」

「構わんよ？」

「ではそれで」

「分かった。では行ってらっしゃーい！」

「「「へ？」」」

すると、葵達がいた場所に穴が急に開き、

「イヤ――――――――――！！！？？」

「なぜ――――――――！？」

「後で覚えておいてくださいね？」

葵だけ何か黒い笑顔だった。

ＳＩＤＥ神

「葵だけ怖かった・・・・」

そういって穴を見ると、ぱっちり目があった神はガタガタと震えていた。

「そうじゃ、こっちも準備しておくかの。制服と、そうじゃった。

お前さんもあいつらの
もとへ送るとしよう」

そういって神は一匹の山猫を制服と同じ段ボールに入れた。

プロローグ（後書き）

楽しんでいただけたでしょうか？
更新は次はいつになるかわかりません。ですががんばって物語のほうもがんばっていきたいと思います！
ではまた次回で会える機会があれば。

※話上おかしい部分を修正せしました。

第一話（前書き）

やっぱ文才いｏｒｚ
でも頑張る！　そして後悔はない！

第一話

第一話

「エクスとルミルの視線が近いと思ったら私が縮んでいるようですね」

転生後、葵の身長はおよそ9歳の平均身長より少し高いぐらいにまで縮んでいた。容姿なども子供化していたが性別を言われるまで恐らく誰もが女というほどの顔立ちに変化していた。

その直後エクスとルミルにもみくちゃにされたのは別の話。

その後、エクスとルミルから解放された葵たちはある一軒家の前に立っていた。

「ここですか」

目の前にあるのは二階建ての一軒家。表札には神無月と書かれていた。

「ただいま。でいいのでしょうか?」

「さぁ? でもお邪魔しますではないかと思いますよ」

「そうだな。とりあえずお帰り。マスター」

「えぇ。こういうのもいいですね」

中に入ると整理されているのか家具全般を始め電化製品など一通りそろえられている。だが、一つだけ問題があった。

――数分後

「それに戸籍までである。準備が良いですね」

当然ルミルとエクスにも同じ物が与えられている。内容は両親が不慮の事故により他界。今は親戚の叔父の家に居候させてもらっているという感じだ。

さらに、銀行口座にも信じられない額のお金が入っていた。

「単位が違いすぎますよ！　マスター！？」

「億。しかも軽く兆のギリギリ前。これだけあれば普通に遊んで暮らせるな」

「とりあえず荷ほどきをしましょう」

葵の言葉と同時に荷ほどきが開始された。荷物といっても生前にあった衣類や食器や包丁、なべといった調理器具のみだ。

「ふぅ。ん？　マスターこれはマスターの荷物か？」

「どれ？　いえ、私の荷物ではありませんね。ですが宛名は私ですね。衣類の類ですね。開けてみましょう」

そういってガムテープを外し段ボールを開けるとそこにあったのは新品のどこかの学校の制服と、

「猫？」

「猫ですね？」

「か、かわいい！」

「ま、マスター？」

「ヤバい。エクス、マスターの悪い癖が発動した」

「あぁ、あれですか・・・」

すると、猫はゆっくりとその眠りから目を覚ますと、

「むぎゅ！？」

その瞬間、葵が猫を抱き抱えモフモフし始めた。

「はぁ、最高の毛並みですね。これはなかなか。少し肌が荒れてますね、シャンプー買ってくるべきでしょうか？（だが、何かが違う。魔力？　使い魔の類か？）」

葵は葵で冷静さと猫の毛並みと抱きごこちを堪能していた。

すると、猫の方も急なことであわてたが、すぐに冷静さを保ちつつ、

「あ、あなた達は誰ですか！？」

と人語を話した。

「しゃ、しゃべった！？」

「化けネコか！？」

エクスはすぐに砲撃体制に入り、ルミルは両翼を構えた。

「やはり。あなたは誰かの使い魔ですか？」

「ご、御存じなのですか！？」

「えぇ。まぁ、そっち側の者ですから」

すると、猫は光り輝き、一人の女性が現れた。

「私の名はリニス。ある方に仕えていたのですが、突然契約を打ち切られどこかの世界においやられてしまったんです」

「猫が人にー！」

「マスター下がってください！　すぐに」

「はぁ。少し待ってください」

そういって葵は調理場に行き、ある物を持って帰って来た。

「ふ、フライパンなんかを持ってどうするのですか？」

「決まっているでしょ？」

にっこりと眩しい笑顔をリニスに見せながら葵は二人に近づき、

そして、

「ふん！」

ガン！　ガン！

「「きゅ～～～」」

フライパンをエクスとルミルの頭にちゅうちょなく殴りつけ、二人は目を回しながら気絶した。

「・・・・だ、大丈夫なんですか、あれ？」

リニスは床で大の字になっている神姫たちを指差す。

「大丈夫です。他の神姫よりも頑丈ですから。で、あなたの主人はなんでお前を追いやったんですか？」

すると、彼女は顔を俯きながら、

「分かりません。突然逃げなさいといったと思ったら、足元に転移魔法が展開されて、後は・・・」

「なるほど（これがイレギュラーか？　まぁいい。情報は得られた）。となると住むところとかありませんね？」

「え、えぇ」

「ならウチに泊りませんか？　幸いなことに部屋も余っていますし」

「え？」

「それに私もそのイレギュラーを討つように依頼されていますから」

「信じてもらえるんですか？」

「えぇ。事前に情報があったのでおそらく」

「あ、ありがとうございます！」

そういって彼女は深々と頭を下げた。

「自己紹介がまだでしたね。私の名前は神無月葵です。そしてあそこの金髪の子がエクス、青髪の子がルミルです」

その後学校の制服をみるとここから見てバスで数分した場所にある私立聖祥大附属小学校のものと判明。

「学力もそれなりにありますが、小学校って・・・・」

「神無月様は小学生ではないのですか？」

「いえ、私はある世界から流れ着いた者、こっちではなんというか分かりませんが、私たちは『漂着者』といいます。あと神無月はそこの子たちもそうですから葵で。様付けも不要です」

すると、リニアは少し考え、

「分かりました、か、いえ。葵さんはおそらく時限漂流者ですね」

「漂流者という意味では変わりありませんね。意味も大体同じでしょう。時限のはざまにはじき出され漂流、その後ここに到着。こん

な意味じゃないでしょうか？」

「大体同じですね。あと、一つお尋ねしますがここと、あなたがもといた世界は違うのですか？」

「えぇ。ここは魔法文化が無い。私がもといた世界は同じ地球でも魔法が確立された世界でしたから。世界人口のおよそ９８％の人間が魔法を使えますからね」

「９８％も！？」

「えぇ。『生まれながらにして素質がある』というのが一般的でしたからね。ただ一概に魔法といってもファンタジーのような魔法もあれば検索魔法に特化した者、代用品がすでにある魔法とさまざまなので我々は魔法使いとは言わず『ウィザード』と呼んでいますがね」

　すると、リニスはなにやらモニターを出し何かを調べ始めた。

「どこかに通報しますか？」

「ち、違います！！　命の恩人に仇を返すわけありません！！　ただ、あなたから魔力が感じ取れ・・・あれ？」

「どうかしましたか？」

「リンカーコが無い・・・・」

「なんですかそれ？」

リニスの説明によると、リンカーコアとは魔道師が持つ魔力の源で、大気中の魔力を体内に取り込んで蓄積することと体内の魔力を外部に放出するのに必要な機関で、魔力資質にも影響するものらしいです。

「なるほど。こちらではない者ですね。我々は体に流れる気みたいなものですかね。それを魔法に変換し放出する場合の自立型。自然から得られるエネルギーを魔力に変換し放出する自然型、そしてその二つを併せ持つ共同型の三つに分かれます」

「なるほど。では彼女たちは？」

リニスは再びエクスとリニスの方を見る。

彼女達はすでに気絶から立ち直り再び作業に取り掛かっていた。

「彼女達は、あまりこういう言い方は嫌いなのですが武器であり防具ですね」

「デヴァイスみたいなものですね」

「まぁ、そうなりますね。さてっと。とりあえず片づいたので夕飯にしましょう。エクス、
ルミル何かリクエストはありますか？」

「はい！　ハンバーグ！」

「私も、それで」

嬉しそうに挙手して答えるエクスに、少し恥ずかしそうに答えるルミル。

「その前に食材の買い出しに行かなきゃ。悪いのですがリニス。エクスとルミルを見ていてもらえませんか？」

「えぇ、構いませんよ」

「お願いします。エクスとルミルは申し訳ありませんがこの世界の情報整理をお願いします」

「了解だ、マスター」

「はい。分かりました」

そういって葵はＭｙ買い物袋とお財布（３万ほど）を入れて出かける。葵は意外と倹約かで口癖は「贅沢は弾にするから贅沢なんです」だそうです。

「（なにやら今変な電波が？　まぁ気にしちゃダメですね）では行ってきます」

そういって家を後にした。そのご葵は激安スーパーでこの海鳴市全域を検索し一番近場のスーパーで買い物を済ました（キャットフードを買おうか買わないかで数分悩んだのは別の話）。

「結局買ってしまった・・・・。でもリニスは人型にもなれるし、どうなんでしょう？」

荷物は人目がない場所で転送魔法で家に転送した。荷物は少ない

に越したことはない。また、ちょっとした買いだめをしたため子供が持てる量じゃなくなった。買い物は計画的に。神無月家に新たな教訓が加わった！

（最近疲れているのかな？　変な電波が・・・）

そして帰り道の公園で一人の少女が泣いていた。

「どうかいたしましたか？」

「ふぇ？」

これが葵となのはとの出会いだった。

第一話（後書き）

感想や意見をお待ちしています。
ちなみに私からの質問ですか「」の前に葵がしゃべる時は（例：葵「」）のようにしたほうがいいのでしょうか？

第二話（前書き）

なんか文才もないくせに楽しんで書いてる楽一です。
こんな駄文にもかかわらずお気に入りに三件と書かれていました！
マジっすか！感謝感激です！これからもがんばっていきたいと思います！

第二話

第二話
ＳＩＤＥなのは

「どうかいたしましたか？」

「ふぇ？」

そこにいたのはわたしとおなじぐらいの一人の少女でした。

「泣いていたようにお見受けしますが？」

「え、えっと・・・」

同じ年齢ぐらいなのに大人びて見えます。お姉ちゃんのような、でもお母さんのような。

「よければ相談に乗りますよ？」

「えっと」

わたしはその子になんで泣いていたのかを話した。

「そうですか。ですが、一つだけ言っておきます。あなたのお父さんはまだ生きていますよね？」

「うん」

「なら泣く必要はありません。まだこちらに帰ってくる希望はあるのです。希望を捨て去ることはいけません。それになのはちゃん。あなたも注意しなければ」

え？　どうして？

「人には言葉があります。言葉にしないとわからないこともあります。あなたのお母さん、お兄さん、お姉さんも人です。分かりますよね？」

「うん」

「今、あなたのお家はお父さんが倒れたことによってパニック状態になってます。いったん冷静になるように言ってちゃんとお話しましょう。話さないとわからないことだっていっぱいあるんです。分かりあうために人には言葉があるんです」

「でも、迷惑かけちゃう」

「子供は遊んで、学んで、食べて、寝る。これ子供の仕事です。仕事というのは少し変なのかもしれませんね。甘える、迷惑をかけると言うのは親から見れば信頼の証です。まあ限度はありますがね。それに伝えたいことは言葉にしないとね」

「うん！　分かった。お母さん達と話してみるの！」

そういってわたしは葵ちゃんの手を握る。

「ありがとう葵ちゃん！」

「感謝を言われることはしてません。それにあなたは、笑顔の方が似合いますね」

「あ、ありがとう／／／」

女の子だけどほめられたらやっぱりすごくうれしいの！

「あと、忠告を一つ」

「ほえ？」

「私は男ですよ」

「へ、ほぇえええええええええええええええ！？？！？」

ＳＩＤＥ　ｏｕｔ

「（まあ、そうなりますよね。）さて、ではお家までお送りしますよ」

「え？　でも」

「時刻を確認してみましょう」

「えっと・・・あれ？」

そういってなのはは公園の時計を見る。時刻は６時。空は少し薄暗くなっている。

「あ、あの！」

「はい。なんでしょう?」

「て、てを、にぎ・・・ても・・・」

後半はなかなか聞きとりずらい音量になったが、

「はい、どうぞ。お嬢様?」

「お、お嬢様!?」

「冗談です。どうぞなのはさん」

「う、うん。あと、もう一ついい?」

「どうぞ。子供の時が一番甘えてもいい時期ですから」

「こどもって。葵君も子供だと思うの?」

「そうですね。で、もう一つのお願いは?」

「お、お友達になってほしいの!」

「喜んで。さて、では参りましょうか」

「うん!」

そういって公園を後にしながら他愛もない話をしながらなのはの家に向かっていった。

「へぇ。じゃあ葵君も付属小学校に？」

「えぇ。おっと、ここみたいですね」

喫茶店翠屋。なのはの両親が経営している喫茶店らしい。

「ただいま」

「なのは！」

そこにいたのはなのはのお姉さんが二人と兄一人。すると、メガネをかけたお姉さんがなのはの前に来て、

「心配したのよ！」

「ごめんね、お姉ちゃん」

「ごめんなさいね。迷惑かけちゃって」

そういうとメガネをかけていない方のお姉さんが葵に向かって話しかけてきた。

「いえ。それと、なのは」

「うん。あ、あのね！」

なのはの父が倒れてみんなが頑張っているから迷惑をかけないように耐えてきたこと。でもそれでもやっぱりさみしく、悲しかったこと、辛かったこと。全てを家族に話した。

「そう。ごめんね。ごめんね。なのは・・・」

「ひっぐ、・・・お、かあさん」

（え、お母さん？　あの人が！？　３人の子供産んであの若さ・・・・あり得ない）

家族愛に艦どうしようと思った葵だがなのはによく似ているお姉さんがなのはの母と知り驚愕した葵であった。

「葵君もありがとうなの！」

「い、いえ。どう、いたしまして」

いまだに彼女がなのはの母とは思えず驚愕しっぱなしである。

「なのは？　彼女は女の子じゃないの？」

「ううん。葵君は男の子だよ？」

「「「・・・・・」」」

発射５秒前。葵はなのはの耳をふさぎ、自分は耳に耳栓を、え？どこから取り出したか？　無論葵が魔法で作りました。

「「「えぇえええええええええええ――――――――――――！？！？！？」」」

耳から手を離すとなのははなぜか顔が真っ赤だった。

「（そんなに嫌でしたか・・・。）大丈夫ですか、なのはさん？」

「う、うん。ありがとうなの。葵君／／／」

どこかまだ顔が赤いなのはでした。

その後、お礼としてコーヒーとチーズケーキをごちそうになり、自己紹介もすませた。

翠屋を後にした葵はその後急いで家に帰りエクスとルミルの要望通りハンバーグを作り、リニスにはキャットフードと普通のご飯どちらを食べさせるべきか聞くと。

「キャットフードや猫缶もなかなかいけますがこれは非常食にしてください」

と、なかなかの好評だった。

第二話（後書き）

今後もよろしくお願いします。非才のみですが皆さんが楽しんでいけるように全力を尽くしてまいりたいと思います！

第三話（前書き）

自己満足の形を読んでいただいていつもありがとうございます。
では、第三話どうぞ！

第三話

第三話

葵と人型の形態をとっているルミルとエクスはとある病院の一室に来ていた。

そこに書かれてあるプレートには『高町士朗』と書かれていた。

「マスター。まさかとは思いますが本当に？」

「助ける価値のある人は助ける。殺す価値しかない者は殺す。私はそういう人間です。いえ、もう人ではありませんでしたね」

「マスター。我等はマスターのためにある。いつ、いかなる時も共に」

「ありがとうございます」

そういって病室に入ると、酸素マスクに隣の機械が規則正しく電子音で彼が生きていることを表していた。

「・・・これは、なんというか」

葵が驚くのも仕方がない。あちこちに包帯が巻かれて、まだ血がにじむ場所がある。普通の人間なら死んでもおかしくないはずの重傷だ。だが、それでも彼は生きようとしていた。

「家族のため・・・か」

そういうと彼は士朗のベッドの上にいる『何か』に向け、視線を向けた。

「家族のために生きようとしている人にお前は似つかわない。去れ」

だが、一向に『それ』は消えようとしない。『それ』は人型を模しているが明らかに人ではない。黒紫の身体に赤い目。明らかに人間ではない者がそこにいた。

「警告はした。ルミル。シンクロ、モード黒騎士」

「了解だ。マスター」

「漆黒の闇夜への誘(いざな)う者、黒騎士!」

「シンクロイン!」

そういうと彼を包むように青黒い光が広がり子供バージョンの黒騎士の姿になった葵がいた。

「警告はした。無に還ってもらおう。【不の者】よ」

そういって両翼刀をかまえ、彼が【不の者】と呼んだものに向け斬りつけた。すると、【不の者】はそれを避け、逃げようとした。だが、

「逃がすと思うか?」

――ヒュッ　ドスッ

葵はすかさず黒翼を投擲し、黒翼刀は【不の者】の腹部を貫通し【不の者】ごと壁に突き刺さった。

そして、

「お前に生きる権利もなければ存在を有する意味もない。無に還れ」

そういって白翼刀で【不の者】の首と胴体を切り離した。

すると、【不の者】の首はゴロンと床に落ちたかと思ったら次の瞬間には粒子になり胴体も首同様になった。

「マスター。【不の者】がいると言うことは、もしかして」

「えぇ。イレギュラーは奴でしょう。どこまでも腹の立つ」

そういって彼はギリっという嫌な音を立てていた。

「・・・んっ」

するとベットの方から声が漏れたのを聞き葵はそっちへ駆け寄った。

「お目覚めですか？　高町士朗殿」

「君は？　死神かい？」

「いえ。黄泉路への案内人です」

「？」

「まぁ、今は知らなくていいことです。それよりも、あなたは生きなければならない。奥さんや娘さんたち、息子を悲しませるのが一家の大黒柱の役目ですか？」

「ち、がう」

「なら、早く元気になってあげてください。なのはさんは笑顔の方が似合いますからね。私も心から笑う彼女の顔が見てみたいですから」

「なのはを、知っているのかい？」

「えぇ。泣いてましたよ」

そういって今までの経緯を士朗に話した。

「なるほど。すまないね」

「いえ。ではこれで私は失礼しますね」

「いえ。ではこれで私は失礼しますね」

ＳＩＤＥ士朗

「いえ。ではこれで私は失礼しますね」

そういうと彼の足もとに青色の何かが光り次の瞬間には彼はもういなかった。

「そうだな。一家の大黒柱が家族を悲しませてはいけないな」

そういって彼は天井を見た。

「早く元気にならないとな！」

そして徘徊に来た看護士が士朗の姿を見て急いで医者を呼んだ。

何でもその時に「１１９番！　１１９番通報！！」といっていたらしい。

いや、病院はここですよ？　看護師さん。

ＳＩＤＥ　ｏｕｔ

士朗いた病院から帰宅後、葵はすぐにリニスにあることを相談した。

「何かに取りつかれたようにですか？」

「えぇ。些細なことでもいいんです」

「そう言えば」

「？」

「性格がいきなり変わったように思えました」

「性格が？」

「はい」

リニスの話によるとある実験中の時に事故にあいリニスの主の娘が事故に巻き込まれ死亡。その後、まるで性格がコロコロと変わるようになったという。

「間違いないか。でも確証はない。しばらくは様子見だな」

「「「はい」」」

第三話（後書き）

オリジナルは以上です。
次回からは無印に入っていきたいと思います。
ただ、原作を知らない！　どうしよう・・・。

第四話

第四話

高町士朗を死の淵から呼び戻して月日が流れた。

「ということで、引っ越しに伴い転入してきました神無月葵と申します。以後よろしくお願いします」

そういって葵は自己紹介をする。本来葵は２０歳。それに飛び級による大卒の資格もある。

が、なぜこうなったかというと、

――回想・なのはと出会った日

リニスと同時に贈られた制服はここからバスに乗って少し行った場所にある聖祥大付属小学校と分かった。レベルはここら辺では高いらしい。

段ボールには神様から送られてきた手紙があり、そこには『いずれ必要になる』とだけ書かれていた。

「と言われても私は小学校に行く必要もないと思うんですよね」

エクスとルミルの情報収集によりこの地球の学習レベルが葵から見ればかなり低いというのが分かっていた。

「中学校でまだルート計算はおろか、因数分解も入っていないとは・・・」

「歴史もかなり古い物を使っていますね」

「これって小学生レベルじゃないのかな？」

その光景を見ていたリニスは、

（この人たちの頭脳派チートです。小学校で因数分解はしませんよ普通は）

「さて、どうしましょう。明日からはとにかく情報収集に――」

「葵さん。やはり小学校に行ってみてはいかがでしょう？」

「いえ、しかし」

「思うに葵さんはこちら側の情報をほとんど手にしてませんよね？」

「ええ。ほとんど言うよりかは全くですね。元いた世界は魔法にあふれていましたがこっちはゼロ。まずそこも注意しないと」

「そこでですね。小学校に行って情報を収集。些細なことでも引っ掛かることもあると思いますよ。それに学校の帰り道にばったり。ということもあるのではないのでしょうか」

リニスの意見を聞いて葵は少し考え。

「そうですね。その意見には一理ありますね。リニスにはその間、

家を護ってもらうことになると思います。あと、エクスとルミルは連れて行くので」

「そうなんですか？　でも大丈夫なのですか」

「えぇ。彼女達はいろんな形態を取れるので問題ないかと。あとリニスの方でも情報収集をお願いします。意見をくれてありがとうございますね。リニス（ニコ）」

そういって葵は満面の笑みでリニスに感謝した。

「／／／！！　い、いえ！　どういたしまして！（あの笑顔は何ですか！？　反則です！）」

「あぁ、マスターまたフラグ立て・・・」

「はぁ、私たちですら落とせないのにどんどんライバルが・・・」

などとエクスとルミルが呟いていた。

――回想終了

ちなみにエクスとルミルは不可視の魔法によって見えないようにしている。

そして現在。女子からは「きれいー！」とか「お人形さんみたい！」とか「お持ち帰りー！」とか。言われている。

（最後のは犯罪ですよ？）

男子からは「イケメンだと!?」とか「コロスコロスコロスコロス」とか「討伐令」など物騒な発言が出ていた。

（なぜ女と勘違いされなかったんだ?）

と考えていたが、すぐに制服のおかげですぐに男子と分かったんだという結論に至った。

（小学校ですよねここ?）

葵がそう思うのも無理はない。明らかに子供の行動力プラス大きい子供の発想が加わり（特に男子）はあまりに物騒だ。

「あ！　葵君！」

「おや、なのは「なのはだとー!!」え?」

「聖祥の三美少女の高町さんを呼び捨てだと!?」

「許すべからず!」

「殺す！　滅殺する!!」

「あ、あははは・・・・」

葵はただ苦笑するしかなかった。

「先生。とりあえず私の席は?」

「そうね。高町さんの隣に「殺す気ですか？」だってそっちの方が面白いじゃない♪」

「・・・・（ここ、本当に小学校？）分かりました」

しぶしぶながらも葵はなのはの隣の席に座り、

「よろしくねなのは（ニコ）」

「う、うん／／／（かわいすぎなの！　ほんとうに男の子だよね！？）」

と、フラグを立てるのでした。

（ん？　またか。だんだん距離をつかめてきたぞ？）

はい？　まぁいいや。そしてＨＲが終わり一時間目の授業に入ると、

「さて、一時間目の準備を・・・あれ？」

すると、葵の周りには人垣ができていた。

「神無月君はどこから来たの？」

「前にいた学校ってどんな感じ！？」

「神無月君、趣味は！？」

「神無月君は女の子？　男の子？」

などと質問を受けていると。

「あんた達、いい加減にしなさい！　彼も困っているでしょうが！」

そういってあの人が気を突破してきた金色の髪の女の子がいた。

それに遅れてどこかおっとりとした女の子となのはもきた。

「えっと、あなた方は？」

「わたしはアリサ・バニングよ」

「月村すずかです」

「よろしくね二人とも。あと助かったよ」

そういって笑顔で返すと、

――ボンっ

「あれ？」

「え、な、なんでもないわよ！（な、なによ、今のかお／／／）」

「な、なんでもにゃいよ！？（か、かわいかった／／／）」

しかし一人だけ、

「ぶ～～～～！！（ライバルふえちゃったよ！）」

「さて、質問に答えようか。最初の人。北海道（嘘だけど）から来たよ。次の人は前の学校との比較だったね。あまり変わらないというのが答え。趣味は家事全般。小物作りも得意かな。あと読書もね。次は女か男なら私は男だよ」

そういてって次々と質問に答えるが、途中でアリサから順番にという指示が出たので周りがそれに合わせた。

その後授業を難なく答えた。それにあまりよくしない先生が因数分解というこっち側の小学生が答えられない問題を出してきたが難なく答え、かわりにフェルマーの最終定理を出し返り討ちにしたりなど意外と茶目っ気も出した。

そして昼休み。

「さてと、お弁当に「葵君！　いっしょに食べよ！」はい？」

声がした方に目を向けるとなのはとアリサ、すずかの三人がいた。

「よろしいのですか？」

「えぇ。というかその敬語やめてくれない？　あとなのはと一緒で名前でいいから」

「わたしもそれでいいよ」

「と申されましても、これが素、いや、ごほん。これでいいか？アリサ、すずか」

「「「／／／」」」

「ど、どうした？」

「な、なんでもないわよ！（しゃべり方変えるだけでこれって／／／）」

「そ、そうだね！（かわいいからかっこいいになったよ～／／／）」

「は、はやくいくの！（葵君かっこいいよ！／／／）」

「分かった。〈エクス、ルミル。この口調、何か変か？〉」

〈〈ぷしゅ～～～～／／／〉〉

「〈あれ？〉」

神姫二人とも撃沈。その後口調を変えた葵。だが、一人称は癖で変えなかったらしい。

その後屋上にて昼食。

「「「「いただきます」」」」

そういって各自弁当箱のふたを開ける。

「葵君のお弁当おいしそうだね？」

「そうか？　これぐらい普通だと思うが？」

「ひとつもらっていい？」

「どうぞ。どれがいい？」

そういってすずかは卵焼きをチョイスした。

「わかった。はい、あーん」

「ふぇ！？」

「ん？　どうした？　あーん」

「（あーんって／／／）あ、あーん・・・」

そういって照れながら食べるが当然味など恥ずかしさのあまり分からない。

「どうだ？」

「お、おいしいです／／／」

「そうか。それは良かった。自信作だから」

「え！？　これあんたが作ったの！？」

「あぁ。叔父はではらっている時間が多くてな」

「そ、そうなんだ・・・」

「ご、ごめん」

「気にするな。それより食事中だ。湿っぽい空気と食事は合わない。ほれ。二人ともどれがいい？」

「え！？　じゃ、じゃあこれ」

そういってアリサが選択したのはアスパラのベーコン巻。

「はい、あーん」

「（うっ／／／　すずかがしているのを見て思ったけど、いざやるとなったら恥ずかしいわね。でも！）あーん」

咀嚼（そしゃく）し、そして、

「お、おいしい・・・／／／」

「そうか。良かった。なのはは？」

「じゃあこれ」

指差したのはミートボールだ。

「あーん」

「あ、あーん／／／（ふにゅ～～／／／　恥ずかしさとうれしさが～～～）」

そして咀嚼。

「おいしい！」

「なのは、それはいくらなんでも冷凍「それも私の手作りだ」えぇえぇー！？」

『神無月葵――――――――！！！！！』

「これは、クラスの男性陣。何か用か？」

「決まっている。クラスの三美少女と食事だけでなく、あまつさえ「あーん」だと！？　うらやｍ・・・じゃなくてけしからん行為を！」

「気にするな。好きでやっているだけだ。ならお前らもしたらどうだ？」

「な、んだと？」

「その前に三人の許可を取るのが前提だがな」

「お前はしたのか！？」

「・・・忘れてた」

『殺す！！』

そういって全員がこっちに向かってくるので葵は、

「よっと」

そのまま前に突き進み、一気に棒高跳びの要領で飛び、人間離れした跳躍力で一気に屋上の入り口まできた。
「さらば！」
そういって階段を下りて行く。
「後を追え！」
「逃がすなー！」
屋上に取り残されたクラスは葵の後を追う。そして屋上にはなのは達しかいなくなった。
「にゃはははは、葵君大丈夫かな？」
「さぁ？」
「し、心配だよ～」
そして全員がいなくなったのを見計らって、
「全く、落ちついて昼食も食べれないな」
「「「なんで！？」」」
「なにが？」
「あんた、あいつらに追いかけられて屋上から！？」
「あぁ。屋上の扉の裏に隠れた。たまた入り口周辺誰もいなかった

からな」

そして何事もなかったように昼食を再開した。

その後授業も難なく受け、あっという間に放課後。

（確かにつまらなかった。割愛してもらった方が私としてもうれしいな）

「葵君！　これからひま？」

「なのは。いや、今日の御勤めも終わったし後は帰えるだけだが？」

「ならちょうどいいわ。これからあんたの歓迎会するから」

「よかったらこない？」

「翠屋？　あぁ、なのはの両親がやっている喫茶店！」

「うん！」

「知ってるの！？」

「まぁ、成り行きでね。いいよ。じゃあ行こうか」

「「「は～い♪」」」

そういって帰り道に翠屋に寄っていき、あっという間に翠屋。

――カランコロン♪

「いらっしゃい、ってあらなのはにすずかちゃん、ありさちゃんに、葵君だったかしら？」

「はい。御無沙汰です桃子さん」

「おや、君は」

「はじめまして。神無月葵といいます」

そういって葵は士朗に一礼した。

「はじめまして。私はなのはの父親で高町士朗だ。ここのオーナーもやっている」

すると、士朗は葵の近くに行き、

「やはり君かい？　私を助けたのは？」

「えぇ。あの時も言いましたがなのは達を悲しませるのはいやでしょ？」

小声で相手にしか聞こえないように話す。

「本当にありがとう。今日は私のおごりだ。好きなだけ食べて行くといいよ」

そういって最後の言葉はアリサとすずかにも聞こえるように言った。

「ありがとうございます」

そういって葵はコーヒー（ブラック）とモンブランをいただいている。

「そう言えば葵君は本当に見れば見るほど女の子に見えるわね」

そう言ったのは桃子だ。

「えぇ。よく言われます」

「あら？　怒らないの？」

「ん～どうでしょう。この顔は生まれつきですし、それにこれはこれで結構気に入ってるんですよ」

「あら、そうなの？」

「はい。レディースデーとか、女性限定の割引とかいろいろと」

「あらあら、意外と主夫しているのね」

「えぇ。最近だと外食でも結構安く買えますしね」

と、何とも言えない話をしていた。

「なら、これ着てみる？」

そういって取り出したのは一着のメイド服。

「・・・なぜに？」

「かわいいからよ」

「はぁ。まぁ着てみましょうか」

「「「着るの！？」」」

――数分後

「ふむ。悪くない。というか女ものの服というのは動きやすいですね」

「「「～～～／／／」」」

そこには悶絶する三人の少女と、

「あらぴったり！」

「ではこれでお手伝いをしましょうか？」

「いいの！？」

「えぇ」

その後お人形さんみたいな男の娘がお手伝いしていると一気に広まり、その噂の影響で翠屋は過去類を見ない売り上げをしたとか。

第四話（後書き）

かっこの使い方ですが「」通常会話・《》デヴァイス・「◇」念話・（）心で思ったこと
という感じで行きたいと思います！
ただエクスとルミルの「」は人型の状態、《》だとイヤリング、もしくは騎士モード中だと思ってください
※指摘があったので強引に修正をしました。

第五話（前書き）

戦闘描写難しい。効果音だけには限界が・・・・、かといって説明だってのも・・・・
どうすりゃいいんだーーーーーー！？

第五話

第五話

だいぶ学校にもなじみ始めた葵。今日も何事もなく過ごした。帰ったら情報収集を行っているがやはりイレギュラーの手掛かりは士朗の一件以来何もつかめずに終わっていた。

そんなある日の晩の夜。

「〈誰か、僕の声を、聞いて。力を貸して！　魔法の力を！〉」

「・・・わけがわからん」

翌日

学校での授業もそつなくこなし放課後。・・・え？　その間の話？　そんなもの物割愛。小学生の授業風景見て何が楽しいのやら。

「そう言えば、葵君学校に慣れた？」

「あぁ。問題もいたって楽だしな」

「うぅ～～～～なんであんたはいっつもわたしを上回る成績を叩きだすのよ！」

「簡単だ。問題を解き終わった後に問題の間違いを先生方に問いただしているからだ」

「え？」

「それで、葵君って何点取ってるの？」

「大体百点越え」

「無理じゃない！！」

そう言っているうちにある公園の雑木林の前にたどり着いた。

「ここから行くと塾への近道なのよね」

「そ、そうなんだ」

「あ、葵君。て、つないでいいかな？」

「ん？　構わんが」

そういって葵はすずかの手を握る。

「あー！　すずかちゃんだけずるい！　なのはもするの！」

「すずか、あんたはー！！」

すると、また今朝と同じ声で助けを求めるＳＯＳが聞こえた。

「（またか。一体何なんだ？）ん？　なのは、どうかしたか？」

「え？　ううん、な、なでもないよ」

しばらく歩いていると、なのはが立ち止りあたりを見渡すと、

「あれ？」

「どうしたのよ、何か見たの？」

「う、ううん、なんでもないよ？」

「そう？　ならいいのだけど」

「〈たすけて！〉」

（なるほど。なのはが挙動不振だったのはこれが原因か）

「ねぇ、何か聞こえなかった？」

「なにかって？」

「声みたいな。たすけてって」

「声なら聞こえたな」

「「「えっ！？」」」

「こっちだな」

おおよその見当をつけ、葵は道を奥に進みだすと、そこに一匹のフェレット（？）を発見した。

「葵君、すずかちゃん、アリサちゃん。この近くに動物病院はあったけ！？」

「ちょっと待って、この近くだと」

「家に連絡してみる！」

（このかすかな魔力。リニスと同じか？）

その後近くの動物病院にて治療などをしてもらった。

翌日休み時間。

「あの子どうしようか？」

「わたしのいえには猫がいるし・・・」

「わたしの家も犬が。あんたは？」

「悪い。私の家にも猫（リニス）が一匹いてな」

「猫飼ってるの！　葵君！」

すると、急に食いついてきたすずか。

「あ、あぁ。叔父の猫だがな。とりあえず理由はすずかと同じで無理だな。」

「そっか。とりあえず家に帰ったらみんなに相談してみるね」

その後授業も終わり自宅に帰ると、このことをリニスに伝えることにした。

食後の紅茶の時間にエクスとルミルも人型に戻りリニスを交えこのことを報告した。

「そうですか。魔力があるフェレット」

「あぁ」

「ところでフェレットって何ですか？」

――ズゴォォォー

「あら？」

「ふぇ、フェレットというのはイタチ科の動物だ。まぁ、だが私が知識と知っているフェレットとは違ったな」

「もしかしたら私と同じ使い魔かもしれませんね」

「とりあえず害はなさそうだな」

――ピキーン

「これは、魔力反応」

「ですがここに魔法文化はありませんでしたよね？」

「エクス反応地は？」

「はい。出ました！　あのフェレットがいた病院の近くです」

「まずいな。エクス、ルミル。行くぞ」

「はーい！」

「了解だ」

そういってエクスとルミルを人型からイヤリングに戻しすぐに場所まで飛翔（片方は白、片方の翼）で空に飛び立った。

「いたな」

「あれはなのはさんですね？」

次の瞬間ピンク色の光にあたりは包まれそこから出てきたのは学校の制服をモチーフにしたなのはがいた。

「エェ――――！　なにこれ！？」

「知らんのかい！？」

知らずに突っ込みを入れていた葵。

「っとその前に、なのは！　前！？」

「え？　ッ！？」

すると、そこには魔物がなのはに体当たりをしようとしてたとこ

ろだった。

《ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

あの杖から女性の機械音声が聞こえるとなのはの周り障壁がはられ難を逃れていた。

「仕方ない。ルミル。シンクロイン」

《今回はルミルちゃんなのか～》

《了解だマスター》

「漆黒の闇夜への誘う者、黒騎士！」《シンクロイン！》

すると、葵の髪は白銀になり上下全て黒で統一されところどころ白い刺繍が入っている装備に切り替わった。

「風を纏いて宙を舞え！　鶴翼の舞！」

白と黒の翼の形をした剣は風を纏い葵はそのまま魔物足元を狙ってその風を放った。

すると、風は竜巻状に変化し魔物を宙に上げたそのすきに葵はなのをとフェレットを抱きかかえ人が少ない場所へ避難した。

「あ、葵君！？　あれ？　でも髪の色が！？」

「そうだ、お前も知っている神無月葵だ。あまりしゃべるな。舌をかむぞ！」

ある程度人目の少ない場所に行きつき、葵はフェレットの方を見る。

「あなたはあれが何かを存知でいるようだが？」

「はい。あれは忌まわしい力によって生み出された思念体。あれを封じるにはその杖で封印して元の姿に戻さなければならないんです！」

「なるほどな。ならなのは。そのフェレットから封印の仕方を教えてもらってくれ。こっちはお客様を出迎えねばらないようなのでな」

すると、その場には先ほどいた魔物がもう目の前にまで来ていた。

葵は再び両翼刀を構えるが、すぐに上に放り投げる。

「その翼に終わりはない」《終わりがないことが悲しく》

すると、葵の手には再び両翼刀が現れていた。

「永遠に紡がれ、終えることを知らない」《永遠に負の連鎖がつながる》

さらに上に投げ、さらに手に両翼が、

「神は憐れんだ」《そしてその翼に使命を与える》

そして六枚の翼は魔物の周りを舞うようにあたりを囲んだ。

「咎人を裁く役目を」《裁きの時は来た》

その詩が謳い終わることには白黒合わせて6本の翼が舞を舞っていた。

「翼による（ウィング・オブ）」

すると、剣の羽の部分が一枚ずつ離れ白き羽と黒き羽が咎人めがけ一気に向かった。

――ザシュ　ザシュシュ

肉に刺さる音が聞こえる。魔物の姿は白黒の羽に刺されて見るも無残な形になっていた。

「裁き（ジャッジメント）！」

そう葵が叫ぶと羽根がいきになり爆発する。

「ん～。手ごたえなし。本当に倒したのか？」

すると、魔物がそこにはいたが、明らかにさっきの一撃が効いたのか弱っているのが目に見えた。

「相手はだいぶ弱っているようだな。これは好機。なのは！」

「うん！　リリカル、マジカル・・封印すべきは忌まわしき器！ジュエルシード封印！」

《ｓｅａｌｉｎｇ　ｍｏｄｅ　ｓｅｔ　ｕｐ》

レイジングーハートの先端部分が変わり、桜色の光のリボンを出し魔物を捕える。

《スタンバイ　レディ》

「ジュエルシード、シリアル２１封印！！」

《ｓｅａｌｉｎｇ》

さらに追い打ちをかけるようにレイジングハートからもリボンが出て魔物を貫いて行き、まばゆい光が出る。

「ま、まぶし」

光が収まるとそこにはひし形をし【ＸＸ？】と書かれた宝石が出てきた。

「これがジュエルシードです。レイジングハートで触れてみてください」

フェレットの言うとおりになのははレイジングハーとの先端の赤い部分で触れると吸い込まれるように宝石は消えた。

それを合図になのはの服装も私服に変わった。

「お、おわったの？」

「はい。あなた方の・・・きょうりょく・・・」

そういってフェレットは倒れた。

「あ、あれ!?　大丈夫なの!?」

すると、葵がすぐにより、

「息はある。気絶しただけだ。それより」

周りからはサイレンの鳴る音が聞こえた。

「ここから逃げよう。何を聞かれるかわかったもんじゃない」

「う、うん」

「というわけで」

葵はなのはを抱きかかえ（いわゆるお姫様だっこ）をして飛翔をする。

「へ、ふえぇえええ!」

「安全な場所までだ。少し我慢してくれ」

「う、うん・・・／／／」

第五話（後書き）

・お、終わった。ようやく・・・・燃え尽きたぜ、真っ白にな・・・・・

第六話（前書き）

連続投稿。
駄文なのに書いていると楽しくなってしまう今日この頃。

第六話

第六話

ＳＩＤＥなのは

今わたしはお空を飛んでいます。しかも大好きな葵君に抱えられてです。

葵君の背中には白と黒の翼が広がっていて何とも言えないきれいな光景です。

そして近くの公園に下りて、わたしもおろします。もう少しあの状態でもよかったのにな・・・。

「さて、人語を話すフェレットとは。まぁ、その辺はどうでもいい。まず君の名前を教えてくれないか？」

「はい。僕の名前はユーノ・スクライア。スクライアは部族名だからユーノが名前です」

ユーノ君か。かわいい名前だな。

「ユーノ君か。わたしの名前は高町なのはなの。小学三年生。友達や家族はなのはっていうの！」

「私は神無月葵だ。神無月は呼びずらいと思うから葵でいい。代わりに私もユーノと呼び捨てで呼ばせてもらうが良いか？」

葵君がそういうとユーノ君も、

「はい。あの・・それよりも・・・その巻き込んですみませんでした！」

そういって頭を下げるユーノ君。

「別に私は構わない。好きでやっていることだ」

「で、ですが・・・・」

「なのは。君はどうなんだ？」

ふぇっ！？　ここでわたしにふるの！？

「当たり前だ。今回の一番の被害者は私ではなく君だ」

心が読まれた！？

「・・・よくわかんない」

「そうか。まぁ、いきなりこうなったんだ。それも仕方ないだろう。それよりもユーノ」

「はい。なんでしょう？」

「その、抱かせてもらってもいいか？」

「はい？」

葵君は何言ってるんだろ？

「良いですけど？」

「そうか。では！」

そういって葵君は目にもとまらない速さでユーノ君に抱きついた。

「ん～。なかなかいい毛並みですね。それに、イヌとも猫とも違う毛並み、そしてこの愛くるしい目。なんとも、たまりません！」

そういって葵君はユーノ君に頬ずりをしている。

「あ、葵君？」

「はっ！？　また悪い癖が。でもいいといったのです。許可は取りました。というわけで続行です！」

そういって再び再会した。

――数分後

「満足しました。ありがとうございます」

そういって葵君は礼儀正しく頭を下げお礼をした。なんかいつもと違った一面を見れて新鮮だったの。

「葵君って動物好き？」

「ん～。というよりかはかわいい物好きですね」

「かわいい物好き？」

「成長した犬より仔犬。猫より子猫。ぬいぐるみ。そういった類のものかな」

「あぁ。なるほど」

すると、葵君も私服の姿に戻ると、髪の色も銀色からいつもの黒色の髪に戻っていた。

「ねぇ、葵君。なんで髪の色変わるの？」

「まぁ、魔法の影響と思っていただければ幸いだな。それよりももう遅い。家の人も心配するだろう。帰るとしよう」

「うん。ユーノ君は・・・そうだ！　私の家に来ない？　実はお父さん達にあなたを飼っていいか聞いておいたの」

「それは助かるけど・・・いいの？」

「うん！」

「そうか、ではなのはとユーノを高町家まで送ろう」

「いいの？」

「言い訳を考えているならな」

うぐっ、そう言えば全く考えてなかった。

「はぁ。とりあえず考えているから行こうか」

そういって葵君と一緒に家にむかって歩き出した。

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

さて、フェレット改めユーノを連れてなのはの前に来ると、

「（人の気配か・・・）なのは。玄関で二人誰かいる」

「え！？」

「まあ心配するのも納得だ。二人で入ろう」

「うん」

そういって門を開けると、玄関にいたのは恭也と、美由紀がいた。

「こんな時間にどこに言っていたんだ？　葵君、君もだ」

そういって何気に殺気を飛ばしてくる。まぁこんな時間に男女二入りというのは世間的に悪いが相手は小学生だ。

「なのはがフェレットが心配だと言うので私のところの保護者と一緒に病院まで行っていたんです」

そう言って葵は恭也に事情を説明すると、

「この子がさっき言っていたフェレットね。なのは、この子が心配だから様子を見に行ったのね」

「まぁ、葵君と葵君の保護者がいたのならいいものの。なのは、葵君と葵君の保護者に後でいいからちゃんとお礼を言うんだぞ」

「うん！」

「さて。では私はこの辺で失礼します」

そういって葵は高町家を後にしようとすると、

「ちょい待ち」

「え？」

美由紀に両肩をつかまれた。

「ご飯を一緒にしない？　それにもう遅いし」

「いえ、しかし家に人を待たせてますし」

「それなら心配いらないわ」

そういって玄関から出てきたのは桃子であった。

「はい？」

「お家の人には連絡をすでにとってあるわよ」

「・・・・電話番号教えましたか？」

「いいえ」

「ではなぜ知っているのでしょうか？」

「ふふふ」

「（まずい。この笑いは非常に笑い。絶対に聞いてはならない。後でリニスに聞いてみるか。）では夕飯だけ」

そうして高町家にて夕飯をごちそうになり、今後のユーノについて話し合った。その後はそのまま家に帰った。

「そうですか。あの反応はジュエルシードだったんですね」

「知っているのか？」

「えぇ」

リニスの説明によるとロストロギア、過去に何らかの要因で消失した世界、ないしは滅んだ古代文明で造られた遺産の総称でありジュエルシードもその一つらしい。

そしてジュエルシードとは全部で２１個存在し、一つ一つが強大な魔力の結晶体で、周囲の生物が抱いた願望を叶える特性を持っている。

「はぁ、何ともややこしい物を」

ルミルは溜息をしつつもっともなことをつぶやいた。

「ですが、これも所詮人が創りし物。仕方ない。発見次第、なのはが行った封印は、無理だから強制的に魔力を無力化するか破壊のどちらかをしよう」

その言葉を聞いたリニスは、

「は、破壊！　あれを破壊できるんですか！？」

「不可能ではないでしょう。もともといた世界ではあれよりも危険なものなんていくらでもありましたからね」

「そんなことまで」

「ただし、危険な仕事なので私のいた世界の国家機関またはそれに許可を得た組織そみなんですがね」

葵は昔を思い出しながら紅茶を飲み、

（もうあんな思いをさせるのはごめんだ。なのはにもさせたくはない。傷を負うのは私だけでいい）

そう新たに誓いを立てるのであった。

第六話（後書き）

駄文ですが楽しんでいただければ幸いです。
感想、アドバイスお待ちしています。

第七話（前書き）

楽しいが一番、楽が一番がもっとうの楽一です！
スピードを取ったら何も残らないこの小説を読んでいただいて感謝です！

第七話

第七話

翌日　学校

「おはよ～」

「おはよう。相変わらず寝むそうだな」

「うみゅ～」

「まぁ、昨日あんなことがあったばかりだったから仕方ないか」

クラスに入ると、アリサとすずかがこっちに来て、

「なのは、昨夜のこと聞いた？」

「ほぇ？　昨夜って？」

「昨日言った病院で、車の事故があったらしくて・・・壁が壊れちゃったんだって」

「あのフェレットが無事かどうか心配で」

「うん・・・・」

「あの・・・えっとねぇ～・・・・そのけんは・・・」

「はぁ～」

葵は軽くため息をついて、なのはに話を合わせるように言って、適当にごまかした。

「そっか～。無事でなのはの家にいるんだ」

「でもすごい偶然だったね。たまたま逃げだしたあのこと道でばったり会うなんて」

「「ね～♪」」

適当に嘘ついたことを信用してくれ何とか難を逃れた葵となのはであった。

「ねぇ、葵君。本当に良かったのかな・・・な、なんというか、その」

「嘘はついていない。多少、ちょっと脚色を加えただけだ」

「あ、あははは・・・そ、それでね。なんかあのこ飼いフェレットじゃないみたいで当分家で預かることになったよ」

「そうなんだ～」

「名前つけてあげなきゃ。もう決めてる？」

「うん♪　ユーノ君って名前」

「ユーノ君？」

「うん。ユーノ君」

「へぇ～」

ユーノがいない場所でユーノについて授業開始まで話し合う三人。

その時葵はこんな些細なことでも話し合えるというのはやっぱり女子がお話し好きなのだからだろうかと考えていた。

（そう言えばリニスやルミル、エクスも些細なことで三時間ぐらい話してたっけ？）

授業中葵が黒板に集中していると、

「〈葵君、聞こえる？〉」

（ん？　なのはの声が？　どこから？）

「〈念話っていうだって。ユーノ君から教わったんだ！〉」

「（念話？　テレパシーみたいなものか。なら）〈こうか？　ユーノ、なのは。聞こえるか？〉」

「〈うん。聞こえるよ葵〉」

「〈そうか。で、どうかしたのか？　急ぎの用か？〉」

「〈ううん。でも、二人には知っておいてほしいことかな〉」

そういってなぜ、ユーノがこう言ったことが起こってしまったのか。そして、なぜジュエルシードが海鳴市に散らばったのか。という経緯を話してきた。ジュエルシードのことについては、葵はリニスから情報を得ていたので分かっていたが知らないなのははは驚いていた。

なのははユーノの話を聞いて自分自身もジュエルシードを集めるのを手伝うといってきた。

「〈だけど、昨日みたいに危ないことだってあるんだよ！〉」

「〈ユーノ。それは言い訳にしかならない〉」

「〈え？〉」

「〈話を聞いた限り君は発見しただけだ。そこまで君が責任を持つ必要はない。まじめなのもいいが君の場合は度が過ぎている〉」

「〈うん。でも、やっぱり僕が〉」

「〈話は最後まで聞け。それになのはや私も、もう無関係ではない。なら、手伝えることだけでも手伝おう。力になれることは力を貸そう。それが友というものではないのか？〉」

「〈いいの？〉」

「〈私は構わないが。なのはは？〉」

「〈うん！　わたしもいいよ！〉」

「〈だそうだ。協力関係は結ばれたのだ。これ以上君が責任を負う必要はない。分かった？〉」

「〈ありがとう。葵〉」

「〈そうそう。それにユーノ君。いざとなったら葵君が護ってくれるよ♪〉」

「〈あぁ。全力で守らせてもらうよ〉」

そういって念話を切ろうとしたら、

「〈そうだ葵！　君の使っていた魔法は何なんだい。あの翼のような形の剣も六本出したし、あのジャッジメントという魔法も見たことがない。さらに言うならあの背中の翼は？〉」

「〈そ、そうだよ！　あの時は言えなかったけどなんなの！？〉」

「〈ふむ。そうだな。説明には時間をとる。帰りを共にするならその時に話そう。ユーノ。学校までは来れるか？〉」

「〈うん。なのはの魔力を辿れば何とか〉」

「〈ではその時に話そう。それよりなのは。授業に集中しておけ〉」

「〈はーい♪〉」

そして昼休み

「葵君。そのリュックの中身って何？」

「ん？　すずか。君が知らなくてもいいものだ。当然アリサとなのはもな」

「どういうこと？」

「いい加減毎日あの時間過ごすのも飽きた。というわけで制裁を加える道具を持ってきた」

「制裁？」

「見たければ見ていていい。途中で嫌になったらこれをつけるといい」

そういって葵は三人に『完全光り遮断アイマスク』と商品名がデカデカと書かれた物を渡した。

「そうだ。葵君、来週の週末は暇？」

「ん？　あぁ。そうだな、別にやることもない。どうしたんだ？」

すると、アリサが、

「来週の週末にすずかの家でお茶会をするつもりなんだけどアンタも来ない？」

「お茶会？」

「そ、お茶会。アンタ、すずかの家に行ったことないでしょう？こういう機会でもないとアンタ行きそうにないし、どうかと思ってね」

「そう言えばすずかは猫を飼っているのだったな」

「え？　うん」

「そうか。では参加させてもらおう！　手土産にケーキでも持っていこう」

そういって目をキラキラさせながら遠足を明日に控えた子供のように気分が浮かれていた葵だった。だが、次の瞬間には、

「ふむ。とりあえず今日もか」

溜息を少しはきながら屋上の入り口を見た。

「？　あんた、何一人で納得したような顔してるのよ？」

「アリサか。なに。飽きずにまた男子達が来たなと思ってな」

「ふぇ？」

「「「「「神無月葵――――――――――！！！！！」」」」」

そこにいたのはいつも通りクラスの男子。

「またか。飽きないな、君達も」

「ほざけ！　このハーレム野郎！！」

「オレたちの青春を返せ！」

などと、葵にとってはわけのわからないことをほざいている。

「はぁ～。いい加減ゆっくり昼食をしたいから、今日はお前らに、いや、貴様らに痛い目を見てもらおうか。フッ、フフフフッフフフッ」

―ゾクッ

葵の不気味な笑いによって楽しい昼食は一気に崩壊。愉しいＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩの時間がやって来たようだ。

「な～に、一瞬にして最大のトラウマを植え付けるだけだ。私にとって憩いの時間を毎日毎日変にとられるのもいい加減あきた」

そういって葵は弁当が入っていたリュックから二つのフライパンを取り出した。

「これは特注品のフライパンでフライパンの上にダイナマイト２０本置き同時爆破しても壊れないという素晴らしいフライパンだ。これで今から貴様らとＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩする！！」

それを聞くやいなや男子達は一気に屋上から逃げるが、

「逃がすと思うか？　生け贄共」

その言葉と同時に葵が屋上から消え、数分後。

「ふぅ。やはりすごいな。ここの会社のフライパン。全員を昇天（無論生きてます）させた後にもかかわらず一切のへこみ、キズが無い。後でトマホークの爆撃にも耐えられるフライパンでも買うか」

「あ、あの、あ、葵君？」

「ん？　何だ？」

「だ、男子達は？」

「なに気にすることはない。そう、気にすることはないよ」

その後、頭にマンガのようなタンコブ数段を創った男子達が発見された。なにやらフライパンだの葵怖いだの三途の川が見えただの言っていた。ただ、その後フライパンという言葉を聞くとガタガタとまるでヘビに睨まれた蛙のように震えていたとのこと。

余談だがこの日以降男子達は昼食に屋上に現れなくなったとか。

そして放課後、ユーノと合流したが、さすがにアリサ達と一緒なのでリュックの中（後でなぜフライパンが入っていたのか聞かれたがスルー）に入れ、アリサとすずかと別れ、リュックからユーノを取り出すと、ユーノは授業中にした質問をしてきた。

「〈それで、葵。君の魔法は何なんだい？〉」

「〈あぁ。その前に私はこの世界の住人じゃないんだ〉」

「〈うにゃ？　どういうこと〉」

「〈簡単に言うと平行世界の住人。可能性の世界から来たということだ〉」

なのはの方を見ると頭の上にまだ？マークが浮かんでいた。

「〈簡単に言うとこの世界にはいくつものに多様な世界がある。その世界には例えばなのはが魔法と出会わなかった世界。また、なのはと私が出会わなかった世界。はたまた海鳴市という存在そのものがない世界という物があるんだよ〉」

「エェ――――――！！！」

「声が大きなのは」

そういって葵は急いでなのはの口をふさぐ。

「〈でも、それと君が魔法を使えるという意味にはつながらないと思うけど〉」

「〈ユーノ。さっきも言ったが私は可能性の一つの世界から来た。私のいた世界は、魔法が一般化された世界。つまり日常いたるところに魔法があるという世界からこっちに来た。とすれば私が魔法を使えるのも納得するのでは〉」

「〈なるほど。そう考えれば納得できる。それなら僕がいた世界とは全く異なる魔法というのもうなずける〉」

「〈ご納得いただけたかな？〉」

「〈うん！〉」

「う、うにゃ～～～～」

なのはは納得できていないどころかのうない処理が追い付かず頭から煙をふかしていた。

「〈ユーノ。なのはに後でかみ砕いて説明してやってくれ〉」

「〈わ、わかった〉」

すると、何か時が止まった感じを察知し、

「〈ユーノ君これって！？〉」

「〈新しいジュエルシードが発動している！〉」

「〈方角は・・・神社の方だ。急ごう！〉」

「「〈うん！〉」」

神社の階段を駆け上り、そこで見たのは、

「犬？　いや、地獄の番犬といった方が合うな。今回はエクス。白騎士！」

《はーい！　いきます！》

「光の道を指し示す者、白騎士！」《シンクロイン！》

すると、葵の姿は白い光に包まれそこから現れたのは白銀の髪をし、白い全身鎧に包まれ、右手には白を基調としたアドミック・ジャベリンと呼ばれる砲が、左手には魔力によって形成されるビームソード内蔵のシールドに、さらにアルヴォＰＤ１１と言われる白を基調としたハンドトガンを内蔵している。

「飼い主を安全な場所に避難させる。エクス、アルヴォに魔力弾セット」

《魔力弾セット、いつでもどうぞ！》」

「ファイヤ！」

―ダンッ　ダンッ　ダンッ

すると、白色の魔力弾が犬めがけ数発発射され、多少の時間を稼いでいる間に葵は、加速魔法を使い一瞬にして飼い主の場所まで行き、比較的安全な場所においてきた。

「なのは！　時間は私が稼ぐ！　その間にジュエルシードを封印してくれ！」

そういってアドミック・ジャベリンをしまいもう一つアルヴォを取り出し、連射して足止めする。

（くっ、思った以上に固い！　それに速度もなかなか・・・）

そういって少しすきを見せたのがいけなかった。犬（？）はその

一瞬のすきをついてなのはの方に向かった。

「しまった!?　なのは、逃げろ!!」

「こっちに来る!　なのは!　レイジングハーとの軌道を!」

「え!?・・起動ってなんだっけ?」

「【我は使命を〜】から始まる起動パスワードだよ!」

「ええ〜!?　あんな長いのおぼえてないよ〜」

「も、もう一度言うからそれを繰り返して!」

「う、うん!」

起動パスワードを言おうとするなのはだったが、敵がそれを待つわけもなく、なのはに向かって跳躍する。犬に向かって威嚇射撃をしようとした時、レイジングハートが光りだした。

「レ、レイジングハート!?」

《ｓｔａｎｄｂｙ，ｒｅａｄｙ　ｓｅｔ　ｕｐ》

光が収まると杖は持っていたが、なのはは制服のままであった。

「（まずい!）シールド展開!　アルヴォ収納。ジャベリン起動後魔法エネルギー８％で収束砲セット」

《イエス　マスター》

急いでなのはの前にいき、楯を前に出し、魔力でエネルギーシールドを展開した。

「私が全力でなのはを護る！　その間に防護服を着ろ！」

「う、うん！」

「ユーノ！　やり方を教えてやれ！」

「わ、分かった！」

葵が時間を稼いでいる間にユーノが説明をしていると、レイジングハーとが、

《ｂａｒｒｉｅｒ　ｊａｃｋｅｔ》

バリアジャケットが展開された。

（オートモードでもあるのか？）

《マスター！　チャージ終了！　いつでもどうぞ！》

「分かった！」

そう言って照準を犬の脳天めがけ、

「その一筋の光は道」《闇夜を切り裂く一途》

すると、砲口の前に魔法陣が展開された。

「光りの道は何を示す」《人の歩むべき正しき道を》

白銀に輝く球体状の光が集まりだす。

「されどその道に外れるものも在り」《神はそれを見て嘆いた》

球体はさらに大きくなり、光はさらに輝きを増す。

「神はその者に罰を下す」《人はそれ恐れ慄(おのの)いた》

球体はある程度の大きさになると、収束は終わった。しかしそれは裁きの時だった。

「ギュリーノス・ブレイカー！」

そして裁きは下された。

―キィイイイイイイイイイイン

甲高い音と共に、魔物はその砲撃をゼロ距離から暗い数メートル飛ばされた。

「「・・・・・・・」」

「エクス。冷却モードへ移行。その後アルヴォを頼む」

《りょ～か～い♪》

久々の活躍なのかエクスはかなり上機嫌であった。

「なのは、封印を頼む」

「・・・・・」

「なのは？」

「え、な、なに！？」

「封印を頼む」

「わ、わかったの！　レイジングハート」

《イ、ｙｅｓ　ＭｙＭａｓｔｅｒ　ｓｅａｌｉｎｇ　ｍｏｄｅ　ｓｅｔ　ｕｐ》

あのレイジングハートがどもった！？

（少し黙ろうか？）

サーイエッサー！

さ、さて・・・魔物に向けたレイジングハートから桜色のリボンが放たれ、魔物を包み込む。

《ｓｔａｎｄｂｙ　ｒｅａｄｙ》

「リリカル、マジカル！　ジュエルシードシリアル？？封印！」

《ｓｅａｌｉｎｇ》

封印されたジュエルシードは吸い込まれるようにレイジングハートの中に入っていた。

《Ｒｅｃｅｉｐｔ　Ｎｏ．ＸＶＩ》

「これでいいのかな？」

「うん。これ以上ないくらいに・・・・・」

ユーノがそう言うとなのははほほを染め少し照れくさそうにしていた。

（なのはは魔法の才能がある。だが、出来れば私と同じ道を歩んではほしくない。そのためにも・・・・いや、余計な御世話だな）

そういって葵はなのはのそばにより。

「お疲れ様」

「ううん。葵君もサポートありがとうね。でも、あれはやりすぎじゃないの？」

「大丈夫。出力は抑えてあるし殺さないようにしてある」

「非殺傷設定のこと？」

「あぁ。ユーノの世界にもあるのか」

「うん。でも葵はなんで攻防に徹していたの？」

「私の魔法は封印ではなく対人専用の兵器だ。封印や相手の封ずるのを目的ではなく殺すのを目的として設計されている。だが今までの攻撃はあくまでも訓練用にプログラムされたものだからダメージだけで済んでいる」

「「葵（君）は何者なの！？」」

「秘密だ」

そう言って葵達は帰路についた。

第七話（後書き）

いやぁ、自己満足だけですが楽しんでいただいたら幸！
これからもよろしくお願いします！

第八話（前書き）

お気に入り件数が１６件もあった。
こんな、こんな多分にお付き合いしてもらっている方々本当にありがとうございます。

第八話

第八話

あの神社での一件後なのはも徐々に力をつけてきて、ジュエルシードも五個目を確保した。

ちなみに葵は・・・・。

「くっ・・・」

（あの子は一体。なのはと同様の魔法使いか？）

目の前で繰り広げられている戦いに目をやっていた。

片方は金色の髪に鎌を持った少女。おそらくなのはと同じ歳だろう。

片や、カラス。

「カラスにしては大きい。ジュエルシードであなったのか。何ともややこしいものだな」

そう言いつつも観戦を決め込んでいたが明らかに速度で負けているのか金髪の子が押されている。

「止むえないか。ルミル。黒騎士」

《了解だ。マスター》

「漆黒の闇夜への誘う者、黒騎士」《シンクロイン！》

そして黒塗りの弓と、鋼鉄製の矢を構え、

「走れ、光よりも早く駆けよ」

魔力で形成された魔力の矢。強度はむろん軽さも自分が想像した形になるためある意味でチートである。そして、魔法陣が射線上に三つ重なるように現れ、そして矢は放たれた。

「疾風！」

―キュィィイイ――――――ン

そして、その矢は見事にカラスの眼に刺さった。

ＳＩＤＥ？？？

「おかしい。ジュエルシードが無い」

ジュエルシードの反応があったので反応があった場所に着てみた。でも、そこにはもうジュエルシードは無かった。

「もう誰かが？　でも、探してみる価値は・・・！？」

わずかな可能性を信じ近くを探してみると急に魔力反応があった。そして、振り返るとそこにいたのは、

「原生生物・・・・もう発動している」

私の何倍も大きい鳥。おそらくジュエルシードはによる影響だろう。

すると、いきなりその鳥は襲いかかって来た。

「くっ、バルディッシュ！」

《ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

間一髪でバルディッシュのプロテクションが間に合う。そして鳥は少し取り乱した。

「（この隙に）やぁあああああああ！」

バルディッシュで攻撃するが、それを飛ぶことによって鳥は回避された。まずい、下手をすればこっちより早い。

でも、それでも母さんのために。

「負けられないんだぁあああああ！」

しかし、これもよけられた。それだけでなく、相手はこっちに突っ込んでくる。

「まずい！　プロテ・・・ぐっ」

そのまま体当たりを食らい、その衝撃でバルディッシュを手放し

てしまった。

「くっ、な、なんで、こ、こんな・・・ところで・・・・」

相手は再び攻撃に入ろうとしている。あぁ、ごめん、アルフ、母さん。

――ザシュ

ギャァアアアアアアア

「え・・・？」

すると、カラスはいきなり暴れ出した。良く見ると左目に矢が刺さっていた。

「ふぅ。ここの魔法使いは無茶をするのが当たり前なのか？」

そういって私の目の前に下りてくるのは私と同じクロノバリアジャケットを着た白銀の髪の女の子。

「しばらく休んでろ。数分、いや、一分以内で終わらせる」

「でも！」

「大丈夫だから」

そういって振り返って笑顔を見せてくれる。でも、嫌じゃない。何だろう。心が落ち着く。彼女の背中を見るとどんなことでも乗り越えて行きそうだった。

「両翼刀」

すると、彼女の手に白い翼の形の剣と黒い翼の形の剣が現れた。

アァアアアア

鳥はそのまま彼に突っ込んでくる。

「許せ」

そういって彼女はカラスの真上に飛び込み、双剣を構える。そして、

「炎を纏いし剣よ。その刃を持って彼者(かのもの)を焼き尽くさん！」

そう言うと双剣は真っ赤に燃え始め、

「鳳墜閃！」

剣を振り落とす。ただ振り落とすだけじゃない。鳥が気付いた時にはもう遅かった。すでに振り落とされた後だったのだから。

鳥はそのまま地面に墜落。気を失っているのだろうか、ピクリともしない。

「す、すごい・・・・」

あり得ないほどの魔力に、あり得ないほどの力。どれだけの経験を積めばあそこまで行けるのだろうか。

「ふぅ。意外と楽だったな。それよりも君はこれが封印できるのか？」

そういってジュエルシードを指差す。

「は、はい！　バルディッシュ。ジュエルシード封印！」

そのまま私はジュエルシードを封印し、回収した。

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

「ふむ」

「え、な、なに？」

「いやなに。ひどい怪我をしているなと思ってな。そこに座ってくれ」

葵は近くにあったベンチを指差す。

「でもこれぐらいなら・・・」

「怪我をした女性を放っておくほど腐ってはいない。例え君が拒んでもだ」

そういって葵は無理やりベンチに座らせる。

「癒しの風よ。汝の力を持ってこの者の怪我を癒したまえ。ヒーリ

ーングフール」

そう言うと、優しい風と共に、優しい光が彼女の怪我の部分を包む。そして光が晴れた瞬間には。

「す、スゴイ。怪我が治ってる」

「それは良かった。それではこれで失礼する」

「あ、あの！」

「ん？」

「えっと、そ、その・・・・」

彼女はもじもじしながら何かを葵に伝えようとしていたが、何を言おうとしているのかが分からない。

「深呼吸してみようか。吸って～」

「すー」

「吸って～」

「すー」

「まだまだ」

「すー・・・」

「おまけにもう五回ほど～」

「すー・・・・え！　これ以上したら死んじゃいます！」

驚きながらも彼女の緊張感はほぐれたようだ。

「ふむ。落ちついたみたいだな♪」

そういって葵は彼女に微笑みかけると、

「！は、はい／／／」

だが、次の瞬間には顔が赤くなった。（フラグメーカー発動！）

「（・・・またか）それで、何を言おうとしたんだ？」

「あ！　その、助けてくれたことと、怪我を治してくれて、その、ありがとう・・・」

「気にすることはない。私の名前は神無月葵だ」

「私はフェイト・テスタロッサ！」

「ふむ。あと、言っておくことが一つだけある」

「なに？」

「私は男だ」

「え・・・エェエエエエええ――――――――！」

その後、フェイトが落ち着くまで彼はフェイトの頭をなでていた。
なぜかって？

（かわいいですね。でもこれは一歩間違えれば犯罪。人間のかわいさというのはなかなか難しい）

との理由。

それから数分後

「それでは失礼する」

「あ・・・・」

手をのけると少しさみしそうにするフェイト、

「（何とも護ってあげたい感じだな。）また会えるさ。その時までの我慢だ」

「う、うん！　絶対また会えるよね！　葵！」

「あぁ」

そういって笑顔で手を振りながらフェイトと別れた。

今後フェイトがどう葵と絡んでくるのか。これはまだ誰にもわからない。

第八話（後書き）

フェイトさん登場！

感想、ご意見、アドバイスお待ちしています！

第九話（前書き）

一日一回投稿。

・・・・死ねる・・・・

第九話

第九話

現在、葵は近くの川原にあるサッカーコートに立っていた。

高町士朗がコーチ兼オーナーを務める翠屋ＪＦＣの試合の日らしい。だが、葵は全くの無関係にもかかわらず翠屋ＪＦＣのユニフォームを着つつ、コートに立っていた。

なぜか、それは・・・

回想

「サッカーですか？」

「うん。悪いんだが、補欠で入ってくれないか？　その、一人おたふくかぜで寝込んでしまって」

「はぁ、構いませんが。家の人も呼んでもいいですか？」

「ん？　それぐらいはかまわんよ」

「では、参加させてもらいますね。あといっておきますがど素人なのであまり考えず、ね」

「そこまで気負いすることはないよ。こっちも無理を言って頼んでいるのだから」

そして当日

「あ！　葵く・・・ってその子たちは？」

「だれ？」

「あんたの彼女？」

葵の後ろにはエクスとルミル、そしてリニスがいた。

「違う。私がお世話になっている叔父の娘さんと家政ｈ「メイドです」は？」

「ですからメイドです」

「いえ、でも家政「メイドです」・・・・ｋ「メ・イ・ド」・・・・・。メイドのリニスです」

「はい♪」

「「「あ、あはは・・・」」」

「〈なのは、ユーノ。聞こえるか？〉」

「〈え、うん〉」

「〈聞こえるよ〉」

「〈エクスとルミルについて簡単に説明する。彼女達は私のデヴァイスみたいな存在だ〉」

「〈え!?〉」

「〈そ、それ本当なの!?〉」

「〈あぁ。彼女たちの能力で人型、待機モードでイヤリングにもできる。だからといって物扱いはできればやめてほしい。彼女達は私にとってかけがえのない大切なものなんだ〉」

「〈うん！　分かった〉」

「〈もちろんだ！〉」

「〈ありがとう。いつか、何か御馳走しよう〉」

「〈ほんとう！〉」

「〈あぁ〉」

そう念話でなのはとユーノと話していると、

「葵君！　すまないがレギュラーで出てくれるか？」

「分かりました。では、行ってくる」

「がんばってね！　葵君！」

「まぁ、がんばんなさい」

「がんばってね」

「がんばってください、マスター」

「ファイトです！　マスター！」

「「ますたー！？」」

「「あ・・・・」」

後ろで何か言っているが無視して駆け足で進む葵。

そして試合開始のホイッスルが鳴った。

「素人だがよろしく頼む」

「あぁ。頑張ろうな」

「あぁ。それより一つ確認したい」

「なんだ？」

「一人で突っ込んでもいいか？」

「・・・・」

「どうした？」

「い、行けるのか？」

「あぁ。これぐらいなら」

「じゃ、じゃあ、お手並み拝見としよう」

そして、ボールを持っていた味方が葵にパスをした瞬間、

「フッ」

ドリブルで一気に中央を駆け抜ける。

「速い！」

「な、なんだあれ！？」

敵側のスライディングはおろか、突っ込ますすきも与えない。とりあえず速度でほんろう。そして、

「ほっ」

そのままシュートしゴール。

「「「「・・・・・・・・・」」」」

観客のなのは、アリサ、すずか、リニスは唖然。

「さすがマスターです！」

「当然だ。マスターなら」

エクスとルミルはさすがといったように称賛している。

「ご、ゴール！」

開始数秒でゴール。このことに観客はおろか味方、敵とも唖然としていたがいち早く回復した審判によってみんなが元に戻る。

『おぉおおおおおおおお！！！』

「あ、葵君。君は一体どこまですごいんだい・・・・」

「お前やるな！」

「勝てるぞ！　あれだけの速度なら！」

と見方からは称賛され、

「あ、ありえねぇだろ・・・」

「お、追いつける奴いるか？」

「無理だろ！？」

と、敵は意気消沈。

「葵君すご～い！！」

「へぇ～。やるじゃない」

「かっこいいよ！　葵君！」

その後、葵の速度の翻弄により敵は一点取れずに２２―０で翠屋ＪＦＣの圧勝に終わった。

帰り際になぜか「陸上部の試合に来ないか？」や、「いやいや、バスケだろ！」とスカウトの嵐が来たが、丁重にお断りした。

その後、翠屋にて祝勝会が行われた。だが、そこでキーパーの子がジュエルシードを持っているのを見えた。

「〈エクス、ルミル。タイムストップを使う。なのはとユーノにそれらしいことを伝えといてくれ〉」

「〈分かりました〉」

「〈了解だ〉」

「〈時を統べる神の身業。タイムストップ！〉」

すると、周りの光景がピタッと止まる。誰一人として動かない。葵の魔法の一つ。タイムストップはその名の通り時を停める。魔法を使用した本人以外いかなるもの、いかなる存在の時をも止める魔法だ。

「さて、ジュエルシードは確保。後これをごまかすために」

そういって魔法でジュエルシードと同様の形、色の宝石を創り、キーパーの子のポケットに戻す。

「これでよしっと。解除」

そういうと、泊っていた時間が動き出すように周りの日々とも再び動き出す。

その後、なのはにジュエルシードを渡し封印してもらった。

なのはも、「これからもっと頑張って一生懸命手伝う！」といって張り切っていた。

第九話（後書き）

こんな駄文で申し訳ない。
感想や意見も待っています

第十話

第十話

こんにちは。葵です。えっといきなりで申し訳ありません。なぜかいきなり私が今回から天の声も務めるようになりました。なぜかというとこんな置手紙を預かりました。

拝啓
益々私がいる場所は寒くなり、手がかじかんで動かなくこの頃。皆さまはどうお過ごしでしょうか。
さて、私は今日から冬眠に入ります！　天の声は葵に任せたので安心してください
ｂｙ　楽一

とのこと。安心してください。ウイング・オブ・ジャッジメントとギュリーノス・ブレイカーで塵にしときましたんで　。あとつでにステルス性能つきのフライパンで後ろから・・・・・いい加減な人間は嫌いなものですから、フフフフッ。

こほん。さて、今私はどこにいるかというとすずかの家の前にいます。というか豪邸ですね。大きいです。さすがお金持ち。え？嫌みにしか聞こえない？　そんなわけないでしょう。私の貯金通帳はあの迷惑極まりないクソ神のおかげで日本の借金をプラスにしたぐらいありますよ。

「さて、なのは。なのははいるとわかるんですが、恭也さんは何かすずかにご用でもあるんですか？」

そう。この場にいるのは私となのはと恭也さん。なのははすずかの友達として理解できる。だが恭也さんはなぜ？

「うん。すぐにわか「葵！　貴様なのはを呼び捨てにいるのか！？」るよって、え！？」

私が恭也さんの方を見ると、すごい殺気を飛ばしていた。

「え、えぇ。なのはがそう呼んでくれといったので。友達なら当然なのでは？」

「うっ・・・そ、そうだな。友達なんだな！」

「そうですが。（他に何があるんだ？）」

（うぅ～。葵君は鈍感なの～～！！）

（あ、あははは っ。はぁ～）

なのはリスみたいにほほを膨らませ、ユーノは溜息をついてた。ユーノ。溜息をつくと幸せが逃げるぞ？

「〈君のせいだよ！〉」

あれ？　口に出てました？　もしかして心読まれた？　そんなバカなこと無いですよね。

「「〈マスター。もう少し乙女心を理解してほしい（な）・・・・〉」」

ん？　今度はエクスとルミルが。最近疲れているのか？　前世では万対一の戦場を何回経験しても疲れなかったのに。ちなみに一が当然私です。

そう思っているとなのはがチャイムを鳴らし中からメイドが出てきた。何とも落ち着きのある人だ。

「恭也様、なのは様、それと・・・神無月葵様。いらっしゃいませ」

「あぁ。お招きに預かったよ」

「こんにちは～」

「なのは？　こちらの方は？」

「あ、そうか。葵君初めて会うんだっけ？」

「失礼いたしました。私の名前はノエル。この月村家でメイド長を務めさせてもらっています。神無月様のことはすずかお嬢様からきいています」

「あぁ～、なるほど。私のことは葵でいいです。神無月は呼びづらいでしょうから。あとこれ、お土産です」

そういって私は私が作って来たケーキを手渡す。

「ありがとうございます。おやつの時間にでも出させてもらいます」

「そうしてください」

そういって微笑みかけた。

「どうぞこちらです」

そういってノエルに案内された場所にいたのはすずかと、アリサ。
それと見知らぬすずかに似た女性が一人いた。

「あ。なのはちゃん、葵君、恭也さんいらっしゃい」

「すずかちゃん」

「いらっしゃい。なのはちゃん、恭也さん。それと、神無月葵様」

「葵で結構ですよ。神無月は呼びづいらいでしょうから」

「では葵様」

「来たのね。葵」

「お招きに預かったのだ。こないと無礼だろう」

「まぁ、当然ね。私たちが誘ったのだから」

「アリサちゃんったら」

そして葵は億で紅茶を飲む女性とその隣にいる女性を見る。

「（微量だが魔力か？　人とは違う何かを感じるな。）そちらの方々ははじめましてかな？　神無月葵だ」

すると女性は立ち上がり、私の近くまで来て視線を私のところまで下げて、

「はじめまして。私の名前は月村忍よ。すずかの姉」

「ファリンと申します。すずかお嬢様の専属メイドを務めさせもらっています」

「恭也いらっしゃい。あと、すずか。葵君を借りて行っていいかしら？」

「え？　う、うん」

「それでは三人の御茶はそちらにお持ちしましょう。何がよろしいですか？」

「任せるよ」

「なのはお嬢様と葵様は」

「わたしも、お任せで」

「私もそれで」

「かしこまりました」

そして私は忍と恭也について行き、ある一室に案内された。

そしてそれぞれが席に座る。忍さんが口にした質問に私は少し驚いた。

「下手な探り合いはしないわ。あなたは何者？」

それはそうだ。いきなりなに者と聞かれても、ねぇ？

「神無月葵。それ以上でもそれ以下でもない」

すると恭也さんが、

「君からは人の気と異なるものを感じた。だが「忍さんとも違う。ですか？」ッ！？」

すると、恭也さんが立ち上がり、私の胸ぐらをつかんだ。それでも私は言葉を続ける。

「おそらくですが、忍さん、いえ。月村家そのものが夜の一族。吸血鬼と呼ばれる存在。違いますか？」

時が止まった感じがした。だが、忍さんが、

「えぇ、そうよ。私たちは夜の一族。吸血鬼の類に入るわ」

「忍・・・・」

「いいわ。それと恭也、彼女を放したら？」

「あぁそうだな。あぁ、後忍」

そういって恭也さんは胸ぐらから手を離した。

「ん？　なにかしら」

「彼、葵は男だ」

「・・・えぇえええええええええええええ！！！」

しばらくたち忍さんが落ち着いたのを確認し、話を再開。いやぁ、久しぶりでしたね、あの感覚。

「大丈夫なのですか？　日光や血などに関しては？」

「日光においては問題ないわ。それに血においても人から吸ったとしても少し貧血になる程度よ。間違ってもホラー映画みたいに血を吸った人が全員吸血鬼になったりはしないわよ」

なるほど。知識で知っているものとは違う。まぁ所詮知識は知識だ。あてになるものではない。そもそも、こちらとあちらでは世界観そのモノが違う。

「さて、私たちの秘密は話したわ。次はあなたの番よ」

「知らない。では通してもらえないようですね」

「ええ」「そりゃそうだ」

はぁ、めんどくさいんだよね。平行世界理論って。

「まず。私の存在の前に私はこの世界の住人ではありません」

「どういうこと？」

「私は平行世界の住人なんです」

「平行世界？」

恭也さんが何言っているんだという顔をしている。

「簡単に言うと【ｉｆ】の世界です。たとえば恭也さんと忍さんが知りあっていない世界、私があなた方と知り合わなかった世界、恭也さんと忍さんに妹がいなかった世界。こう言った【もし】の世界から来たというわけです」

「はぁ、何ともにわかには信じられないな」

「まぁ、そうでしょうね。ですが私がいた世界とここの世界の最大の違いは魔法が一般化されいているか否かということなんです」

「魔法！？」

「こういうのですね」

そういって私は手のひらを出し、

「ファイヤーボール」

―ボッ

そう言うと、私の手の上に炎の球体が現れた。

「移行。アクアボール」

―コポッ

そう言うと炎は水に、

「こう言ったものです。ご納得いただけましたか？」

「「・・・・・」」

沈黙する二人。沈黙は肯定として受け取ろう。

「はぁ、何ともでたらめな。だが、それと最初の質問は違う。それはあくまでも気みたいなもの。だが、君という存在は」

「えぇ、一応世界観を納得していただこうと思いまして。で、最初の質問にかえります。私たちの魔法概念は自然との共有。つまり自然、精霊という存在から魔力を借り受け形と成す。これが私たちの魔法の概念です」

「ということは君は精霊か！？」

「半分正解で半分外れ。半妖とはご存知ですか？」

「えぇ。半分人間、半分妖怪。いわゆる人間と妖怪のハーフでしょ」

「はい。私は半分人間、半分精霊の人工半精なんです」

「人工？」

「人間は何事においてもわからないモノは実験し証明、利用したが

る。私がいた場所も様々な実験を受けました。その結果投薬、魔法による改変などによって人工的に精霊と融合させられたというわけです。まぁ、これはあくまでも一部に過ぎませんがね」

そういって私は冷めきった紅茶を口に含む。すると、恭也が、机をたたき、

「巫山戯ている！　君はなぜそんなに平気でいるんだ！　国は、警察は！？」

「無駄ですよ。このバックについていたのは日本政府、魔法省、環境省、文部科学省、国際ウィザード連合といった国際がらみなんですから」

「魔法省とその何とか連合、って何？　あと環境省がなんで？」

「魔法省はいわゆる魔法に関することを専門に取り扱っている日本の行政機関。国際ウィザード連合、通称ＩＷＵは国連にとって代わった国際機関のことです。で、環境省がなぜ出てきたかというと魔法発動に必要なのは自然環境の整備。つまり私たちの世界では森林などを破壊する国交省より環境保護や整備を行う環境省が力を持ったんです」

「国がらみでそんなことを・・・巫山戯ている」

「恭也さん。所詮人は己が欲望に忠実に生きているんです。例え一人が違うといっても強大な権力の前では無駄なんです」

「すずかやなのはちゃん、アリサちゃんはこのことは？」

「知りません。むしろ一生知らないでおいてほしいですね」

「どうしてだ？」

「彼女たちには重すぎること。彼女達は純粋でいてほしいんです。私がいる場所はあまりにも汚れすぎている。出来れば彼女たちにはあのまま笑顔でいてほしいんです。そのためなら私はどんな罪でも汚れでも背負っていきます。私が再び幸せをつかめたのも彼女たちのおかげなのですからね」

「・・・・・・」

ＳＩＤＥ忍

「彼女たちには重すぎること。彼女達は純粋でいてほしいんです。私がいる場所はあまりにも汚れすぎている。出来れば彼女たちにはあのまま笑顔でいてほしいんです。そのためなら私はどんな罪でも汚れでも背負っていきます。私が再び幸せをつかめたのも彼女たちのおかげなのですからね」

「・・・・・・」

そういって葵君はすずかたちがいる場所を見降ろしていた。

その目はどこまでも悲しく、どこまでも透き通っていた。なんでこの子が、なんでそんなひどいことができるんだ！　彼が何をしたっていうんだ！？

『所詮人は己が欲望に忠実に生きているんです。例え一人が違うといっても強大な権力の前では無駄なんです』

たった9歳の子供が言えるセリフじゃない。でも彼は言ってのけた。どれだけ重いものを背負い、どれだけ辛い思いを、悲しい思いをしてきたのだろう。

「私は守りたいだけなのかもしれないな。幸せという物をくれた彼女たちを」

彼がそうつぶやいたのがこの静寂の中ではよく響く。

「あら。その中にはすずかも入っているのかしら？」

そう、彼に聞いてしまった。これ以上彼に重い罪を背負わせたくないのに聞かずには居られなかった。

だが彼は、

「無論、すずかもなのはもアリサも最優先で護ってみせますよ。我が体を楯にしてでも」

彼の眼はまるで鋭い刃物のように光っていた。だが、その光がどこか安心させてくれる。

でも次の瞬間には穏やかな笑顔になって、

「さて、紅茶も冷めてしまっていますが、ケーキでも食べましょう。自信作なのですが感想を聞かせてもらえれば幸いです」

「そうね」

そういって私たちはケーキ（ティラミス）を口に運ぶ。口の中には甘いクリーム味と風味が一気に・・・って！

「これ、君が作ったの！？」

「えぇそうですが？」

「・・・パティシエ並み・・・いえ、三ツ星並み・・」

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

そのころなのはたちは、

「このケーキ美味しい！」

「見た目も、形もいいしこれ、なによりおいしいし！　三ツ星レストランに出されてもおかしくないわよ？」

「ファリン、これどこのケーキ？」

「えっと、さっきお姉さまに聞いたら、その・・・」

「どうしたんですか？　ファリンさん」

「これ、葵君が作ったみたいです」

「「「・・・・え？」」」

彼女達は葵が作ったという情報を聞いて頭を悩ませていた。その

理由はというと、

「「「女としてなんか・・・・負けた気が・・・・・」」」

第十話（後書き）

ということで葵の一部過去を暴露！
早いような今更のようなでたらめな話のような・・・・。
まぁ、あくまでも自己満足小説なのでそこは突っ込まないで

第一一話

第一一話

忍さん達に私の秘密（一部）を暴露し終わった数分後なのはから念話が入った。どうやらジュエルシードが発動したらしい。

「〈分かった。急いでいく〉」

そういって適当に恭也さんと忍さんに理由を言って部屋を退室した。

それから少し経った場所に結界がはられた。おそらくユーノかなのはだろう。

「とりあえず。エクス。白騎士」

《りょ～か～い》

「光の道を指し示す者、白騎士」《シンクロイン！》

白い光に包まれ、白木の甲冑を纏う。急いでなのはたちと合流しなきゃ。

「飛翔」

そういって空を飛び、なのはたちを探す。が、それよりも先に、

「な、なんだ、あれ・・・・」

《うわ～、おおきい～》

《いや、限度を超えいるだろう。大きいというものの》

そう目の前にいるのは巨大がした猫。と、とてもかわいいです。今あそこいにって抱きつきた。そうときまれば《ダメ（だ）（ですよ）マスター！》え～～～。

《なのはたちを探さな――！　これは・・・》

《マスター！　魔力をもう一つ確認》

「なに！？」

すると、黄色い魔力の矢がなのはめがけ飛んでいた。

「まにあえぇえええええええ！！！！」

急いでなのはの前に行き、シールドを展開！

結果は・・・

「全く、なのは。戦闘中によそ見とはバカか君は？」

「あ、葵君！！」

「あ、葵なの！？」

ん？　この声は

「フェイトか？」

「う、うん！」

「ふぇ！？　あ、葵君知ってるの！？」

「あぁ。それよりも、あれか」

私は猫を見る。これが捨て猫ならまだ手荒なまねも許されるだろうが、あいにくあの猫はすずかの家の猫だ。さらにまだ子供。となると、

「ユーノ。ジュエルシードは魔力を帯びているだよな？」

「え、うん。そうだよ。でもなんで？」

「確認までだ」

なら後は簡単だな。

「アルヴォ、ジャベリン収納。ディゴソードシールド展開」

そう言うとシールドの先端から水色の魔力を帯びた刃が現れた。

「照準固定。目標巨大猫の額」

《照準固定。目標巨大猫の額。ロック終了。発射スタンバイオールグリーン♪》

この刃は特殊で触れる者の魔力を完全に無効化するちょっとしたチート能力を有する。あ、ちなみに訓練用の刃なので無論非殺傷設定である。

「無に帰する刃、ファイアー（ルーンヴォルヴァ）！」

すると、ものすごいスピードで猫めがけ水色の刃が向かっていき、

《目標まで3、2、1・・・ヒット！》

猫に水色の刃が刺さり、その水色の刃は猫に吸収されていった。

《無力化魔法注入完了。ジュエルシードの魔力吸収中。放出まで5、4、3、2、1。ジュエルシード放出！》

エクスがそう言うと、猫の身体はみるみる元の姿に戻り、そしてジュエル意思一度も排出された。

と、それよりも♪

SIDEフェイト

葵の姿は最初であった時と違い今度は白色の鎧をまとっていた。

それだけじゃない。魔力も全く違った。黒だったものが白色に変化していた。

「なに者なんだろう、本当に・・・・」

でもすごかった。水色の刃を猫に射出する時の正確な狙い、点を点に向けて発射しそれを見事に命中させる正確さ。私には無理かも・・・。

そのあと、葵はなぜか少し鼻歌を歌いながら、猫の元へ向かった。

「いや～、かわいい！　なんですかこの毛並みの良さ！　ここが良いんですか？」

そういって頬ずりしながら、こっちに向かってきていた。猫もいやそうじゃない。むしろ好意的だ。

（う、うらやましいな／／／）

すると、あの白い魔法使いの子が私の前までやって来た。

「あの、わたし高町なのは。あなたの名前は？」

「フェイト。フェイト・テスタロッサ」

なのはっていうんだ。明るい子だな。私とは逆の子。

「あ、そうだ。これどうしましょう？」

そういって葵が取り出したのはジュエルシード。

「「あ！　ふ、封印！」」

ほぼ同時にあの、白い子と封印をしたが、若干私が早かったのかな？　バルディッシュに吸い込まれていった。

「御苦労さま」

「うん、って葵！　御苦労さまじゃないよ！　どうして彼女に封印させたの!?　あれは危険なものだって・・・」

なのはだっけ？　その子のそばにいるフェレットがしゃべった。

「ユーノ。彼女はそんなよこしまな思いをしていない」

「なんでそんなことがいいきれるの!?」

「簡単だ。私みたいに汚れた目をしていない。純粋でまっすぐな目をしている。それだけで十分信用に値する理由になると思うが」

「え？」

どういう意味だろう？　葵の眼も十分きれいだと・・・おもうけどな／／／

「どういう意味？」

フェレットもおんなじことを思っていたみたい。

「いずれわかるよ」

そういって葵は私の頭に手を置いて撫でてくる。なんか落ちつく

な。猫があんなに気持ちよさそうな顔をするのも納得できる。

　すると、私が葵を見ているのに気付いたのか葵がこっちに向けて笑いかけてきた。

「ん？（ニコ）」

――ドキッ！！

え！？　な、なに！？

　顔が熱いし、心臓のドキドキが早いし、頭が真っ白になるし、な、なにこれ！？！？

「大丈夫かフェイト？　顔が赤いぞ。風邪か？」

「わ、わかんない！　そ、そうかもしれないから私帰るね！！」

「そうか。無理はするなよ」

「う、うん！　じゃあまたね！」

「あ！　ちょっとまって！　お話を聞かせて！」

「なんでジュエルシードを集めているのか聞かせて！」

　後ろで女のことフェレットが何か言っているが聞こえない。私はそれだけ気が動転してそれどころじゃない！

「まだドキドキいってる・・・・どうしちゃったんだろ私／／／」

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

第二一話（後書き）

短いかな。ただ長文になると自分でもわけがわからなくなっちまう！

第一二話

第一二話

「・・・・・・」

「ぐぬぬぬぬぬ」

恭也さん、あなたがシスコンだと今初めて分かりました。士朗さん。無言はやめてください。逆に怖いです。ときどき出すその殺気も控えてください。

さて、現在私たちは高町家からのお誘いを受け、海鳴温泉に向かっています。

なぜこうなったかというと、数日前、高町家から電話がありました。

「温泉旅行ですか？」

『あぁ。連休中は翠屋を店の人に頼んで家族全員と月村家、アリサちゃんと海鳴温泉に言っているのが恒例でね。君もどうかなっと思ってね』

「でも、いいんですか？　久しぶりの家族だんらんの時に私なんかが加わって？」

『君には命を救ってくれたことと家族のきずなを深めてくれた恩が

あるからね。それのお礼だと思ってくれ』

と、なると断るのも無粋だな。

「分かりました。ではお邪魔させてもらいます」

『あぁ、家族の人と家政「メイドです！！」・・・メイドさんも誘うといいよ』

あぁ、電話越しにも聞こえたんだ。リニスの声。

「分かりました。三人にも伝えておきます」

そういって電話を切った。

「というわけなんだがエクスとルミルは防水加工しているから大丈夫だし、リニスはどうする？」

「はい。フェイトがいた。ということはアルフもいます。彼女たちをもしかしたら説得できるかもしれません」

「分かったなら連れて行こう」

「ありがとうございます！」

そして現在。私の隣にはすずかとアリサ。ここまでは納得できる。だが一番納得できないのが、

「なのは、なぜ私の膝の上に？」

「ぶ～！　わたしだって葵君といっしょが良いの！」

との理由で私の膝の上に座っています。前からエクスとルミルがうらやましそうにこっちを見ています。

それから数分後。目的地に着き、早速温泉へ。

「ユーノ君、いっしょに入ろうね」

「〈え！　な、なのは！　僕は！〉」

「〈なのは、ユーノを借りていいか？〉」

「〈え？　どうして？〉」

「〈ジュエルシードの封印魔法を覚えようと思ってな。ユーノから知識だけでも学ぼうというわけ。ということで借りれるか？〉」

「〈そっか。うん！　いいよ〉」

そういってユーノを解放。そのまま女性陣は女湯の方に入っていった。私たちも男湯の方へ入っていくと、ユーノが涙を流しながら、

「〈た、助かったよ、葵〉」

「〈君も嫌だろう淫獣の称号がつくの〉」

「〈うん！　本当にありがとう！〉」

そういって泣いていた。

その後、一応封印魔法の仕組みを学んだが、基礎があまりにも違いすぎ無理ということが判明。これは封印はなのはかフェイトに任すしかないな。

ＳＩＤＥなのは

「うわ～すご～い！」

「ホントですね～広いです～」

広いんです！本当に。目の前には大きなお風呂があるし、エクスちゃんの気持ちもわかるの！

「なのはちゃん、エクスちゃん。走ったら危ないよ！」

「はぁ、何やっているんだあのバカは。エクス！　風呂に入る前に体を洗え！」

「えぇ～、でも目の前にあんな大きなお風呂があるんだよ？」

「マスターに嫌われるぞ？」

「うっ」

そ、それは嫌なの。体をきれいしてからお風呂に入ろう。

ルミルちゃんの一言が効いたのかエクスちゃんも渋々ながらシャワーの前に言った。

「それにしても、エクスちゃんもルミルちゃんも肌きれい」

「そうか？」

「最近はリニスさんと一緒に入ることが多いからその時にきれいに洗ってもらえるからかな？」

「そうですか？　では今日も一緒に洗いっこしましょうか？」

「は～い」

「では頼む」

そういってリニスさんの後を追ってエクスちゃんとルミルちゃんはシャワーの前に行った。

「ジ――」

「ん？　なに、エクスちゃん？」

「忍さん。おっきいですね。胸」

「えっと、急にどうしたの？」

「どうしたらそんなに大きくなるんですか！？　マスターに喜んでいただくにはどうしたらいいですか！？」

「お、落ちつけエクス！？」

「でも、ルミルもマスターに喜んでいただきたいですよね！？」

「そ、そうだが、そうだがアップで話すな！」

確かに。葵君ってやっぱり大きい方がいいのかな？

「ううっ、私たちって・・・」

「大丈夫よなのはちゃん！」

「え？」

「そうよ。わたしたちはまだ子供！　まだ成長するわ！」

そ、そうだよね！　いつか忍さんみたいになって葵君をわたしの彼氏にするの！

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

「はぁ～、いい湯だ～」

「あ、葵・・・。君はなぜそんなに余裕なんだい？」

「気にするな。気にしたら色々とヤバイ。というか彼女達は本当に９歳か？　発想がいきすぎなような気もするが」

「う、うん。僕もそう思う」

「それよりも私は今ここに士朗さんと恭也さんがいないことが不幸中の幸いだと思う」

「やっぱり思った？　僕も」

「「はぁー」」

まぁ、私にはそういう免疫は一応備わっているからな。前世であのはた迷惑な精霊皇によって鍛えられた。

そう言えば最近聖歌を歌ってなかったな。まぁ、契約聖霊もいないし大丈夫か。

その後、ユーノの体と自身の身体を洗い温泉から出ると、目の前になのはとアリサ、すずかがいた。あと知らない女性が一人。

「どうした？　何かあったか？」

「え？　あ、葵君／／／！？」

すると、なのはは顔を赤くなっていた。

よく見るとアリサとすずかもだ。

「のぼせたか？　それよりもこの現状はどうした。目の前の女性にでもぶつかったか？」

「う、ううん（男の子なのになんでこんなに湯上りで色気が出るのよ）」

「そうか？　あの、連れたちが何かしましたか？」

「え？　あ、ううん。違うよ。知っている子によく似てたからついね。ただ違ったようだよ」

すると、女性はなのはに近づき、

「〈今のところは挨拶だけね〉」

急になのはの顔色が変わった。

（念話か）

「〈忠告しとくね。子供は良い子にお家で遊んでなさいね〉」

子供ね。

「〈なら、フェイトに伝えておけ。フェイトもお家に帰るように。な〉」

「〈！？〉」

「〈安心しろ。この念話はお前にしか聞こえないようにしている。それとお前にも警告しておく。もしなのは達を傷つけてみろ。その時は、お前を殺す〉」

「〈なっ！？（こ、この子本当にフェイトと同い年かい！？　こ、

こんな殺気、あり得ないだろ！？）フェイトも殺すきかい？〉」

「〈過去の私なら迷わずしていただろうな。だが、今はその気はない。フェイトにも伝えておけ。君とは敵対する気はないがなのは達を傷つけるようなら迷わず君を殺すとな〉」

「〈わかった〉」

そういって女性はなのは達の下から離れる。

「あ、葵君・・・・」

「ん？　どうした？」

「え？　う、ううん！なんでもない！」

「そうか」

ＳＩＤＥなのは

葵君の目、とても冷たかった。まるで刃物のような冷たさ。でも、なぜかその目を見ると、とても悲しかったの。

なんか、葵君がとても遠くに行ってしまいそうで。

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

そして、割り当てられた部屋に戻ると、一匹の赤色犬？がいた。

「・・・さっきの女性か？」

「へぇ。良く分かったね」

「魔力がよく似ていた。で、何か用か？」

「まずは、お礼を言いたくてね」

「お礼？　感謝をされるようなことはしていないが？」

フェイトと出会って何かしたか？　いや、思い当たる節は何もないが。

「そう。あたしはフェイトの使い魔のアルフ」

「使い魔ね。それで、その使い魔さんが私にお礼をしにきた――と」

「そ」

そういってアルフは人型に戻った。

「ジュエルシードにフェイトが襲われた時あんたが助けてくれたんだって？　その時のお礼」

「なるほど」

「後確認だ。さっき言ったことは・・・」

「本当だ。ただし、彼女が本気でなのはを殺しに来ない限りはこち

らも殺す気はない。それにあの子自身がジュエルシードを使うために集めているというわけではなさそうだしな」

「分かるのかい！？」

「分かるも何も、ジュエルシードを集めて使うためならなりふり構わず集めるだろう。だが、彼女はそれをしない。理由があると考えるのが筋だろう」

「そ、そうなんだよ！　聞いておくれ！」

「ま、待て。それよりお前はフェイト・テスタロッサの使い魔で間違いないんだな」

「ん？　そうだってさっき言ったろ」

「そうか。なら」

そういって葵はリニスに連絡をとり始めた。

「〈リニス。聞こえるか？〉」

「〈はい。どうかなさいましたか？〉」

「〈今この近辺にフェイトがいるらしい。話をしたいからついてきてくれないか？〉」

「〈フェイトが！？　わ、分かりました〉」

数分後、リニスが私の部屋に来たと同時に防音魔法を使った。

「り、リニス!?　あんた生きてたのかい!?」

「はい。この方に助けられまして」

「話したいこともあるだろうが、とりあえずアルフ。フェイトに会えないか？」

「あ、あぁ。分かった。案内するよ」

第一三話（前書き）

ＰＶが１万超えた・・・えぇえええええええええええええええええええええ！？！？

ユニークも１０００を超えたのにはさすがに驚いています・・・・

いやぁ、本当にうれしい限りです！

第一三話

第一三話

「でさ、最近フェイトがあんたのことばかり話すんだよ」

「そうなのか？」

「あぁ。口を開ければあんたの名前ばかりだよ」

「そうか。それは助けた甲斐があるというものだ」

「・・・・リニス。この子もしかして・・・・」

「えぇ。かなりの鈍感です」

ん？　どうかしたか二人とも？　なんかかわいそうな子を見るような眼でこちらを見ているんですが。

「なんでもないよ。っとフェイトー！」

ＳＩＤＥフェイト

なんか急にアルフが私に合わせたい人がいるといって待ち合わせ場所を決めて待っています。

「フェイトー！」

「アルフ、合わせたい人って・・・・あ、葵!?」

「うむ。私だ」

「え？　なんで？」

「高町家から旅行のお誘いがあったので来た。フェイトは・・・ジュエルシード集めか？」

「うん」

葵に隠し事をしてもなんか無駄っぽかったので素直に話した。

「そうか。で、君に合わせたい人がもう一人いる」

「え？」

「リニス」

「はい。お久しぶりです。フェイト」

「え・・・り、リニス？」

「はい」

「え、あ、う、うわぁあああああああああ」

私はリニスに抱きつき、思いっきり泣いた。

「ひっぐ、り、にす、よ、よかった、よかったよ。いきて、いたんだ！」

「はい。葵様に助けてもらいました。今では葵様の家でお世話になっています」

え！？　そうなの！？

「リニス。もしかしてと思ったが彼女の関連のある人物が君の主か？」

「えぇ。彼女の母親。プレシア・テスタロッサが私の主です」

「なるほど・・・。ふむ。ピースはすべてそろったな。だが、ただ確証がない。さて、どうしたものか」

葵は何かを考えるように空を見上げていた。

「あ、あの。葵、どうかした？」

「ん？　いや、なんでもない」

その時の笑顔を見た時、以前に葵が話した言葉を思い出した。

――私みたいに汚れた目をしていない。純粋でまっすぐな目をしている。それだけで十分信用に値する理由になる。

なら、教えてもいいかな。

「ねぇ、葵」

「なんだ？」

「聞いてほしいことがあるの？」

「それは大切なことか？」

「うん。私がジュエルシードを集める理由だから」

「ふぇ、フェイト！？」

「いいのか？　無理に話す必要はないぞ？」

「ううん。あなただから教えたいの」

「そうか。なら聞かせてもらおう」

そういって葵は微笑む。やっぱり彼は優しい。その笑顔だけで心の疲れがとれるような気がした。

そして話した。私がジュエルシードを集める理由を。母さんがジュエルシードを集めるために私は戦っていることを。

「そうか。よく話してくれたな」

「うん。私が頑張れば前のようにまた母さんが笑ってくれるような気がしたから」

「前？　ということは性格の変化があったというのは事実なのか・・・」

「どういうこと？」

「リニスからきいた。アリシアだったか？　君の母のもう一人の娘が亡くなって性格がよく変わるようになったと聞いたから」

「うん。そうだね。以前は優しかった」

「・・・まさか。いや、だがやつは死んだはずだ。でも、もし・・・」

葵がぶつぶつ言っているけどどうしたんだろう？

「葵？」

「いや、なんでもない。そうか、なら頑張れよ」

「え？」

「どうした？」

「いいの？　私、葵の邪魔しちゃうんだよ？」

「構わんよ。なのはも最初は巻き込まれただけだったが今は自分の意思でジュエルシードを集めている。互いに譲れない意思と思いがあるのであるのであれば、私はただ傍観するだけだ」

「そっか・・・」

「ただし！」

そういって葵は私の目線を合わせてきた。

「怪我だけはしないでくれ。君もなのは達同様私にとって大切な存在なのだから」

「え・・・えぇえええええ／／／！？」

「どうした？」

「大切って！？」

「言葉を交わし、名を交換する。友として十分な理由だと思うが？」

「そ、そうなんだ。そうだよね」

って、私なにがっかりしてるの！？

「それに君は私にとって大切な存在だ。なら大切な者を護るためなら我が体を楯にしてでも君を護るよ。フェイト・テスタロッサ」

そういって彼はまた優しく微笑んでくれた。

あぁ、そうか。私は彼が

――好きなんだ

SIDE Out

第一三話（後書き）

皆様の期待にこたえるよう頑張っていきます！

第一四話

第一四話

さて、フェイトと別れ再び旅館に戻ってくると目の前からなのはがやって来た。

「おやなのは。どうしたんだ？」

「あ！　葵君！」

なにやら、私を探していたようだな。

「心配させたか？」

「そうだよ！　みんなと遊ぼうと思ったら葵君が突然いなくなっちゃうんだもん！」

するとなのはがリスみたいにほほを膨らませる。

その膨らんだほほをつついてみると、

「ぷひゅ～～～」

と空気が抜ける音がした。

「なにさせるの！？」

「いや、なんかしなければならないような感じがしてな」

そういってアリサ達がいる場所へと向かおうとした。その前に、

「なのは。君は何のために戦う？」

「え？」

ＳＩＤＥなのは

「なのは。君は何のために戦う？」

「え？」

突然葵君からこんな質問が来た。

何のために？

「えっと、ユーノ君のジュエルシードを集めるのを手伝うためにだけど？」

「そうか。そのジュエルシードを集めるためにフェイトとぶつかり合うことになっても君は戦うか？」

「うん。でも本当は嫌だよ！　戦わなくいいなら戦いたくないもん！」

「でも君は戦う。それは本当にジュエルシードを集めることを手伝

うためだけかい？」

「・・・・・」

「よく考えてみて」

わたしは何のために戦っているのか。ユーノ君のため？　何のため？　誰のため？　そんなのわからないよ。葵君は何のために戦っているの！？

そう言えば、葵君は何のために戦っているんだろう。

「・・・り・・・たい」

「ん？」

「護りたい。みんなを！」

「そうか。それが君が戦う理由なんだな」

「うん！」

「でもなんで？」

「お父さんが病院に運ばれた時、わたしに力があればって思ったことがあるの。もうあんな思いするのは嫌！　だから、わたしが今度はみんなを護るの！」

「そうか。なら私は君を護ろう」

「え？　エェエエエ／／／」

あ、葵君が、わ、わたしを／／／！！？

「フェイトにも言ったが」

「え？」

フェイトちゃんにも言ったんだ。そっか。そうだよね。

「お、お～い。なのは、聞いているか？」

「え？　う、うん」

「続けるぞ。フェイトにも言ったが君達は私にとって大切なものだ。なのは達は特に私にもう一度幸せをつかませてくれた。ならその恩に報いるためにこの身体を楯にしてでも君をもろう」

「う、うん／／／ありがとう」

これが、葵君の戦う理由なんだ。

「なに。私も君には感謝しているんだ。さて、みんなの元へ行こう」

そういって葵君は微笑んでみんなの元へ行った。

そっか、わたし高町なのはは神無月葵君のことが好きなんだ。

こう思うと心臓がドキドキします。でも、嫌じゃありません。むしろ、嬉しいです！

ＥＮＤ

なのはが戦う理由を聞いた後、私たちはアリサ達と卓球をした。
卓球は白熱したが、三勝〇敗で私が圧勝した。

「あんた、嫌がらせのつもり！？」

と、アリサが言ったが、なぜかピン球を返す場所が全て端っこだったり、変な回転がかかってピン球がはねずに停止したりと色々あった。

その後、夕飯を食べた。味付けも実にあっさりしていた。
その後も何も無くそのまま子供達（私とエクス、ルミルも含む）は就寝した。

え？　リニスはどうなったかって？　それは・・・

「さぁさぁ、リニスさんも一杯どうぞ」

「え？　わ、私は・・・」

「遠慮せずにはい！」

「さぁ、グイっといちゃって、グイっと！」

「〈ふぇえーん。助けてください！　葵様～！〉」

と、念話でＳＯＳを送られたが、実際行きたくない。

女性陣は酒によって乱れ、士朗さんは部屋の隅に避難し、ちびちびと一人で飲んでいた。

恭也さんは最初の生け贄に捧げられた。

その後、時刻は進み深夜。ジュエルシードの反応で私とエクスとルミルは目を覚ました。

エクスとルミルをイヤリングにして、まず大人達のところに向かった。リニスに連絡を取ろうとしたが、なぜか念話が通じない。が、着いてみたら納得した。

「う、わ、私なんか、どうせ・・・・」（リニス。君の犠牲は忘れない）

「な、なのはー。メイド服も似会うぞ～」（恭也さん。妹に何してるんですか）

「うふふ、なのは、あと一〇着しちゃくしましょうね」（桃子さん。いつものことでしょ）

「あら、すずか、そこは、ぬいじゃダメよ？」（あなたもシスコンだったんですね）

「なのは～、ついに君も、その子と結婚か！　パパは、パパは――」

（幸せな夢です「そいつを殺すから、パパと結婚しなさい！」前言

撤回・・・・）

と、心の中で突っ込んでいる暇はなかった。これだったら放置してても大丈夫だな。

すぐに魔法で毛布を形成し、それぞれにかぶせた。

さて、なのはでも探しますか。

そういってその部屋を後にすると、すぐになのは出合った。

「あ、葵君！　ジュエルシードが！」

「分かっている。行こうなのは」

「うん！」

そういってジュエルシードが反応した場所に向かった。

「ジェルシード。この先にフェイトちゃんも」

「あぁ、いるだろうな。だが、これは避けられないことだ」

「・・・うん」

やはり戦うことが嫌なのだろうか、少し落ち込んでいるな。

「フェイトにはフェイトの戦う理由がある。なのはにはなのはの。互いに理解し合えとは言わない。でも、己が信念だけは曲げるな、なのは」

「うん！」

ふっきれればいいんだが、まぁこの歳の子にそんな難しいことを言っても無理だろう。

しばらく歩いていると、フェイトとアルフがいた。あちらもこちらに気付いたのか振り返ってきてた。

「レイジングハート、セットアップ」

《ｓｅｔ　ｕｐ》

バリアジャケットを纏い、対峙するなのは。

「は～い、おチビちゃん。また会ったね」

アルフがなのはに声をかける。

「それより！　それを・・ジュエルシードをどうするつもりだ！それは危険なものなんだ！」

「さぁね、答える理由が見当たらないよ」

ユーノの問いを軽く流し、アルフの姿が女性の姿から、力強い狼の姿に変わる。

「や、やっぱり。あいつ、あの子の使い魔だ」

「使い魔？」

「そうさ、あたしはこの子に作ってもらった魔法生命体。製作者の魔力で生きる代わりに、命と力の全てを掛けて守ってあげるんだ」

その咆哮はまさに自然界の戦士を思わせる咆哮だった。まぁ、それはさておき、あの狼姿のアルフ、仔犬バージョンとかできないのかな？　絶対かわいいと思う。今でも十分、あの毛並み。もふもふしたい・・・・。

「ん？　葵、どうしたんだい？」

アルフが私に何か言っている。これはもしかしてチャンス！？

「あ、アルフ。戦闘を始める前にお願いが一つあります」

「え？　何？　というか口調が変わってる！？」

「これが素です。それより、あなたを抱かせてもらえませんか？」

「え？　それぐらいならいいけど？」

「本当ですか！？　ではさっそく！」

そういってふん～ふふ～♪　あの毛並みはどんなさわり心地なんだろう。絶対よさそう♪

そういってアルフを抱きかかえ、毛並みに顔をうずめる。

「う～ん。やっぱりいいですね。ですが、イヌとも猫とも違う。でもこれはこれで・・・。新しいモフモフ感！　最高ですね～♪」

「ちょ、葵、そ、そこはダメ！　というか、なんでそんなになでるのがうまいんだ！？　あ、そこ、ダメ～～」

「確かに、葵のなでるのはうまかったな。あれはある意味病み付きになる」

なのはの隣でユーノが今のアルフの現状を見て納得しているが気にしな～い。

あ～。幸せです。こっちに来てからかわいい動物とめぐり合う機会が多いです。これは何ともあのクソ神に感謝しなくては。

「動物の毛並みというのはいいモノです。また、その愛くるしい顔は人々の心の癒しになります。ユーノもなかなかでしたが、アルフもこれはこれでアリです！」

「あ、相変わらずだね葵君」

「相変わらずって葵っていつもこうなの？」

「う～ん。というかかわいいものを見るとこうなっちゃうかな」

「なら私も・・・・／／／」

「ちなみに人はしませんよ？」

「「えぇっ！？」」

なぜに二人とも驚く？

「犯罪ですよ。それやれば。まぁ了承、許可、許しがあれば別ですが」

なにせ肉体年齢は9歳でも精神年齢は２０歳ですよ、私。

「「やってもいいよ！！！」」

マジですか二人とも？　了承は得ましたよ？　許可もいただきました。これは犯罪じゃないですよね？　多分・・・。

「ではなのはから」

そういってなのはに抱きつく。そっと、手に頭をやり、ゆっくりと頭をなでる。

「ふにゃぁ～／／／」

何かかわいらしい声を上げるなこの子は。というか女の子の髪ってこんなにサラサラアしてるもんなんだ。

それから一分後。

「では次にフェイト」

「う、うん／／／」

なのはと同様、抱きついて頭をなでる。

「ん・・・・／／／」

なのはと違い、どこか緊張してるのかな？　でも顔は紅潮している。大丈夫か？

そして、これまた一分後に終了。

「ふぅ～。今日は最高の日です！」

「うん。確かに・・・／／／」

「わ、私も満足・・・／／／」

「それより忘れていましたが、ジュエルシードどうしましょう？」

「「「「あっ・・・そうだった！？」」」」

忘れていたんだな。あなた方も。

「さて、ではこんなのはどうだ？」

口調が変わったって？　気にしない気にしない。意外と丁寧な口調もこっちになれると疲れるのが分かったから基本はこっちで。

それに物事を頼む時は丁寧に頼まないとね。

「どんなのだい？」

「なのはとフェイトの一騎打ち。当然アルフとユーノは手出し無用」

「あ、葵！？」

「葵君!?」

なのは・ユーノペア動揺、

「いいよ、それで」

「フェイトが負けるはず無いしな」

フェイト・アルフペアは余裕。

「（この差はやはり大きいか）さて、「葵！　君は一体何を考えているんだ!?」ユーノ少し聞け」

そういって私はユーノと念話で話し始めた。

「〈これはなのはのためだ〉」

「〈え?〉」

「〈なのはに足りない物は戦闘経験だ。だがなのはに比べフェイトはかなりの実力者だ。これは誰が見てもわかることだ〉」

「〈うん〉」

「〈今後ジュエルシードを集めるとなると彼女との戦闘は避けられないだろう。それに両方のジュエルシードを集める理由を知っている私としては手伝うことはできても戦闘への介入はできれば避けい〉」

「〈知っているのかい、君は！　あの子がなぜ集めているのかを！？〉」

「〈あぁ。でも話さないと約束した。あの子もそれを信じているからな〉」

「〈そっか。それで、話の続きだけど〉」

「〈あぁ。おそらくなのはが実力をつけるまであちら側は待ってはくれない。なら実戦本番で経験を積むしかない。百回見たり聞くよりかは実際その場にたって経験する方が自分の実力にもつながる。それになのはは魔法の才能がある。これは君にもわかるはずだ〉」

「〈・・・分かった。でも君もかなりの無茶をさせるね〉」

「〈百も承知だ。本当なら二人とも普通に笑って生活を送ってくれた方が私もうれしいよ。でも、もう戻れないんだ。なら私がすることはただ一つ。全力で二人を災いから守ることだ〉」

「〈分かった〉僕も葵の提案を押すよ」

「ユーノ君！？」

「大丈夫なのは」

「ユーノ君がそう言うなら」

そういって二人とも空に舞い上がる。

「ユーノ人よけの結界を展開できるか？」

「え、うん。出来るよ」

「人に知られてまずいなら展開した方がいい。私の方でもある程度は展開しているが念には念で頼む」

「分かった」

結界の展開が終了するとそれを合図に黄色と桃色の魔法の色がぶつかり合う。

「二人ともすごいな。天才か。本当にいるんだな」

「あんたも十分すごいと思うけど？」

隣でアルフが私に向かって言う。ちがうよアルフ。私の力はただ才能でもなければ自ら進んで努力して手に入れた力でもない。

私の力は力を手にしなければ明日をつかめないから嫌でも手にしなければいけなかった負の力なんだ。そう。人を【殺すために】手に入れた力。

「しかし、なのはを砲と例えるならフェイトは剣。どっちが不利かというと明らかになのはですね」

なのはは不利と悟り、距離をとり、

「あんたがあそこに加わるとどっちから叩く？」

《Ｄｉｖｉｎｅ　ｂｕｓｔｅｒ》

ピンク色の砲撃を撃つ。

《Ｔｈｕｎｄｅｒ　ｓｕｍａｓｈｅｒ》

それに対抗するようにフェイトも黄色い砲撃を撃つが、

「お願い！　レイジングハート」

《Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ》

なのはがそう言うとなのはのディバインバスターがさらに威力を増す。だが、葵はアルフの質問に、

「無論フェイトでしょう。速度と攻撃を兼ね備えられたら怖いですからな。それに戦闘経験はフェイトの方が上。しかしなのはも成長しています。あと数日実戦を交えれば分からなくなる」

そういっていると、私の予想で通りフェイトがなのはのディバインバスターを回避してバルディッシュの鎌をなのはの首に当てる。

「勝負あり。勝者フェイト」

「・・・まけ・・た？」

「・・・・勝った」

すると、レイジングハートからジュエルシードが一個放出され、バルディッシュに吸収された。

「う～負けちゃったよ～」

「残念だったね」

その光景を下から見ていた葵は。

「あの子たちはもっと成長する。でも、戦場には出てほしくないな」

彼女たちの成長に嬉しさもあるが、同時に彼女たちの力を戦争に使われると思うと悲しくなる。

「でも、あの子たちにとってはいいライバルになるんじゃないのかい？」

「僕もそう思うよ」

「お忘れかもしれんが、二人とも敵同士だろ？」

「う～ん。そうなんだけど何っていうかさ」

「怨めないんだよね」

「君たちにとっても好敵手といったところか。さて、なのはとフェイトのところに向かうか」

そういってなのは達の元へ行くと、なのはが、

「お疲れ、二人とも」

そういって服の中から取り出したアク〇リ〇スをとりだし、二人

に渡す。いつ買ったかって？　気にしない、気にしない。

「う～、負けちゃったよ、葵君！」

「負けることも経験。その悔しさをばねに強くなればいい。でも、限界以上はしないこと。怪我の元だからな」

なのはの頭をなでながらアドバイスといっていいのだろうか。ありきたりの言葉を言う。

「フェイトもお疲れ。最後の回避には驚かされたよ」

「ありがとう」

そういってなのはと同様にフェイトの頭をなでる。

「やったね！　フェイト！」

「ありがとう。アルフ」

「ごめんねユーノ君」

「仕方ないよ。でも葵の言うとおり何がいけなかったのか反省して次に備えよう」

「うん！」

本当にうらやましいな。彼女たちは互いに目標とする存在を見つけた。私は、ただただ目の前に来る人（邪魔者）を殺すだけだったからな。

「さて、時刻も遅いから帰るとしよう。フェイトもしっかり休むんだぞ」

「うん。ありがとう」

「ん？　感謝をされることはしていないが？　まぁ、礼は受け取っておこう」

「ふふっ。葵らしいね。じゃあ、またね」

「あぁ。またな」

そういってフェイトとアルフは去っていった。

「仲いいんだね、葵君とフェイトちゃん」

ん？　何かすごい禍々しいオーラがなのはから出ているんですが？　それよりもなのはさん。なぜレイジングハートをこちらに向けているんですか？

「な、なのは！？　それを葵に向けて何するつもり？」

「もちろん。Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩだよ？」

――ゾクッ

「え、エクス！　白ｋ・・・・」

「ディバインバスター！」

「ぎゃぁあああああ！」

白騎士のシンクロが間に合わずまともに食らってしまいました。
というか何であんなに不機嫌だったんですか、なのはさん？

（（（間違いなく君（（マスター））が鈍感だから（だ）（です））

ユーノとエクス、ルミルの心の声が聞こえたような気がした。

第一四話（後書き）

感想やご意見をお待ちしています！

第一五話（前書き）

最近ＰＶとユニークについて語りました。１万越えすごいんだろうがその前にＰＶってなに？

第一五話

第一五話

温泉地での戦闘でなのははは何かをふっきれたのか「今度はフェイトちゃんに勝つの！」と気合を入れていた。（そのための犠牲。葵初めての魔王によるＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩ）

余計なことは言わなくていいんですよ？（りょ、了解です！！）

さて、そんなこともありなのはの特訓を私とユーノが見て、その御希望に応えるようにしていた。

え？　アリサ達とのすれ違い？　なんですかそれ？　原作知らないの？　えぇ。あのクソ神にＤＶＤ渡されてこの世界行って来いと言われてそのまま直行。そう言えば原作知らないな。（え！？　いまさら！？）

作者よ。かいているのは貴様だぞ？（そうでした）

なので、そんなことお構いなしに日常を楽しんでいます。

そんなある日。

「さて、そろそろ黒幕に会いに行きますか」

「？　誰のことです？」

「プレシア・テスタロッサ」

「!?」

そう、私が今考えているのはプレシア・テスタロッサに会いに行くということだ。

「なぜ、今?」

「ピースはすべてそろった。組み立てる部分もほぼ終了。後は確証のみ」

「??」

「ほぼ何が原因なのかは分かっているんだが後はそれが本当に正しいのかを確認するだけだ」

「確認が終わったら?」

「今回は様子見だ。出会って即戦闘。なんてことになったら準備もなしに行くんだ。負けるにきまっている」

すると、リニスが少し考え、

「なら、私はいかない方がいいですね」

「あぁ。夕飯の準備だけ頼む」

「はい」

そういってリニスから時の庭園の座標を教えてもらい、

「我、次元の扉を開く者。我が望む場所への橋をかけ、我が望む道となれ」

すると、足元には水色の魔法陣が広がり、次の瞬間には私はその場にいなかった。

ＳＩＤＥリニス

「毎回見て思いますが、葵様の魔法は不可思議ですね」

葵様の魔法は戦闘用にこそエクス様とルミル様をお使いになさいますが、基本はあのお二方を使わなくても十分強いと思います。

内緒で簡易魔法測定器を使って魔法を調べてみると、測定器の方が壊れてしまいました。

ですが、あの方なら、

「プレシアを、フェイトとアルフを助けてくれるかもしれませんね」

そう思ってしまうのです

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

―時の庭園

「はぁ、立派な中身だな。まるでお城だな・・・・」

そういって奥へ奥へと歩を進める。

すると、なにやら鞭のような音がしてそこにいくと、

「アルフ？」

「あ、葵！？」

すると、アルフがいきなりこっちに来て、目に涙をためながら、

「お願いだ！　フェイトを！　フェイトを助けてくれ！」

「え？」

すると、鞭の音がする部屋からフェイトの悲鳴が聞こえた。これは、

「・・・・ルミル。黒騎士」

《イエス。マイマスター》

「漆黒の闇夜への誘う者、黒騎士」《シンクロイン！》

そして、そのままそこの扉を両翼刀で切り開く。

「あ、あおい？」

そういってフェイトの近くまで行き、フェイトの手首に巻きついていた鎖を斬る。

「フェイト！？」

アルフが私の後に続いて入って来た。

「君達は地球に戻れ。私はこの者と話し合う必要性があるようだ」

そういって時の庭園に来たのと同じ魔法をかけ、フェイトとアルフを地球に飛ばした。

「あなたは？」

「あなたがプレシア・テスタロッサか？」

「そうだと言ったら？」

「娘を、人を、命をなんだと思っているのですか？」

ヤバい。怒りが収まらないな。おそらく彼女の意思で無いにしろ、これでは下手をすれば殺してしまいそうだ。

ＳＩＤＥプレシア

「娘を、人を、命をなんだと思っているのですか？」

いきなり、殺気が・・・いえ、殺気だけじゃない。魔力も上がっている。なに、この子はいったい何者なの！？

「申し遅れました。私神無月葵と申します。昔の異名でよろしけれ

ばお教えしますよ？」

この子は本気で怒っている。

「へぇ。私はプレシア・テスタロッサ。ちなみに聞いておきましょうか、その異名とやらを？」

「【黄泉路への案内人】あの世、地獄まで案内するものという意味らしいですがね。知っているんだろ？【不の者】」

「グッ、な、なに、を・・・」

急に、あ、あたまが・・・・

「あの子は作り者よ？」

違う！　あの子は、たとえそうであっても！　私の、大切な

「問おう、プレシア・テスタロッサ！　汝は本当にそう思っているのか！？」

「そ、そうだ。私の、（違う違う違う

「そ、そうだ。私の、」

彼女がそう言葉を続けようとしたが、彼女の声があまりにも女性とは思えない低い声で確信をした。

彼女は【不の者】に浸食されつつある。

「邪魔をするな！　【不の者】よ！　今はこの者に直接聞いているのだ！　貴様が出しゃばるな！？」

「ダ、マレ。ダイエイユウ（サツジンキ）。キサマハ、ダレモスクエナイ」

すると、いきなり念話が入って来た。

「〈あの子を、フェイトを助けてあげて！〉」

この声は・・・・プレシア！？

「〈まだ意識はありますか！？〉」

「〈えぇ、でも保っているのがやっとよ〉」

「〈あなたは、フェイトを〉」

「〈彼女はアリシアの、私の一人の子供のクローン。でも勘違いしないで！　あの子がクローンだろうと関係ない！　私の、私の大切な娘よ！〉」

「〈そうですか。今の私ではあなたを犯している者の浸食スピードを遅めるのがやっとです。ですが必ず助けます。あなたも、フェイトも、そしてあなたのもう一人の子も〉」

「〈でも、あの子は！？〉」

「〈大丈夫です。ですから、少しの間ですが、あの子に、幸せを与えてやって下さい〉」

そういって私は弓を取り出した。そして、飛翔を行い、自分の背中から翼を出し、白い翼から一枚羽根をちぎる。

「聖なる羽根よ。その形を矢と成し、彼者を犯すものを抑えよ！」

詠唱を終えると、羽根は矢となりそして、プレシアめがけ放つ。

――グサッ

「ぐっ！？」

見事に胸に命中し、矢は霧散する。すると、

「はぁ、はぁ」

「プレシアさんですね？」

「え、えぇ」

「さっき私が言ったこと約束してください。あと、意志を強く持っ

ていください。じゃないと、あれに飲み込まれますので」

「えぇ、分かったわ。それよりこれはどの程度持つのかしら？」

「もって3日。その間にフェイトに言いたいことがあったら言ってあげてください」

「分かったわ」

「では」

そういって私は時の庭園を去った。

そして自宅に着き、リニスをまじえて今日のことを話す。

「なるほど。それで、確証は持てたのですね」

「あぁ。だが厄介なことに人に浸食するタイプだ。今の私ではとうてい彼女を助けて尚且つ【不の者】を倒すのは無理に近い。むしろ両方犠牲にするな」

「ならどうやって！？」

「う～ん。考えても仕方ないか。とりあえずあそこに行きましょうか」

「あぁ、あそこですか」

「確かに資料もたくさんありますしね」

「あそこって、どこですか？」

そういって私とエクス、ルミルはどこへ行くかは分かったがリニスが分かっていないようだ。

「私の心の世界だ」

「え？」

第一六話

第一六話

さて、私たちが今どこにいるかって？　場所は私の心の中です。

簡単に言ってしまえば某子供先生のあの別荘だと思ってください。

By　作者

「（今変な声が・・・まぁいいか）心の鍵よ、我が心の門を開け」

そういって地面に鍵を落とすと吸い込まれるように鍵が沈み波紋が広がった。それと同時に目の前に大きな扉が出てくる。

「では、参ろうか」

「は～い」

「久しぶりだな」

「・・・・・・」

リニスは唖然としていたが、とりあえず意識がすぐに戻り後をついてきた。

そして、

「すごい、きれいです」

そう。そこにあったのは一面桜。そして、その奥にある平安時代の公家屋敷のような作りの屋敷が一つあった。

「これが、葵様の心の世界・・・・」

「ここでの一日は外では一時間と時間。変更も軽くでるから、調べ物をするときは便利なんだ」

「へ、へぇ（もはや何でもありですね）」

今リニスからなんか変な声が聞こえましたが、まぁ気にしない。

「他にはどんな場所があるんですか？」

「ん～。イメージすれば大体は可能かな。後はそれを固定、安定化すれば出来上がりだ。まぁ、代表例であれば戦闘訓練地の火山、海、豪雪地帯、山岳、平原などなどだ」

「そ、そうなんですか。でもあの屋敷に調べ物をする図書室でもあるんですか？」

「あぁ。あそこは寝泊まりする場所専用だ。見えるか？　あそこの塔が本を調べる場所だ」

「あ、あそこですか！？」

そう。塔とは雲も突き抜けるほど天高くそびえたつ塔。通称図書天国とまぁ、精霊皇が命名した。

「では、移動魔法でいきますのでつかまってください」

そういってみんながつかまったのを確認すると、移動し、あっという間に塔へ。

その後は徹底的に本を調べたが、該当するものはなく、

「どうするかな」

すると、ルミルが一冊の本を持ってきた。

「マスターこれなら」

「これは？」

「十二年前、ある学者が書いた神姫の可能背のレポートです」

「確かに。これならいけるかもしれない。これにかけてみますか」

「「はい！」」

その後、ありとあらゆるケースを想定しエクスとルミルを使いそのレポートの内容通りで行ったり、多少改良したりして魔法を行使した。

すると、以外にもこのレポートに書かれていることが正しいことが判明しプレシアを助ける手段を見つけた。

「あとは、安定化させるだけですね」

「あぁ」

その後、心の扉をしまうときっちりこっち側では一時間しかたっていない。

「・・・本当にチートですね」

「まぁ、マスターはそれだけ苦労しているんですよ」

それからまぁ後は練習に次ぐ練習で何とか安定させるために必死だった。はぁ、疲れた・・・

第一七話

第一七話

プレシアとフェイト、そしてアリシアを助ける策を見つけた数日後、町中でジュエルシードの発動が感じたので急いで駆け付けると、すでにフェイトとなのはが封印した後だった。

「で、なんで今なのはとフェイトは戦闘をしているんだ?」

上空を見ると、黄色い光と桃色の光がぶつかり合っている。

「いや～、それがさぁ」

「・・・ジェルシードを封印したら」

―回想

「リリカルマジカル」

「ジェルシードシリアルX?!」

「「封印!!」」

なのはとフェイトは何とも珍しくジュエルシードを二人で封印したそうだ。

「お疲れさま、フェイトちゃん」

「ううん。なのはもありがとう」

すると、フェイトがきょろきょろとあたりを見渡したのでなのはが、

「どうしたの、フェイトちゃん？」

「え！？　えっと、その、葵がいないなって」

「葵君ならもうすぐ来るんじゃないかな？　でもどうして？」

「え！？　あの、助けてくれたお礼が言いたいなって」

「助けてくれたって？」

するとアルフが、

「あの婆にいじめられたところに葵がさっそうと現れて助けてくれたんだよ」

「あ、アルフ！？」

「ぶ～！（いいな。ピンチなところに現れる王子様みたいなの）い、いいもん。わたしだって葵君にお姫様だっこされたことあるもん！」

「そ、そうなの！（わたしだってされたこと無いのに）」

「「う～～～」」

そういって互いににらみ合って、

「バルディッシュ！」

「レイジングハート！」

そういって互いのデヴァイスを再び構えた。

「あれ？　なんか、地雷踏んだ？」

「うん。ばっちり・・・」（苦笑）

「葵君をかけて」

「勝負！」

―終了

「・・・何をしているんだあの二人は」

私はあきれてものも言えない。ジュエルシードを封印してその後もこれだけ派手に暴れる体力。ある意味でうらやましいが、内容が私？

「私よりいい男はいると思うのだが」

「あんた、自分を過小評価しすぎだよ？」

「はぁ～、葵。君は自分を卑下しすぎだよ。君は十分男の僕から見ても魅力的だと思うけど？」

過去を知らないから言えるだけだ。過去を知れば彼女たちも遠ざかる。まぁ、彼女たち次第だけど。

上空ではいまだにまばゆいばかりの光がぶつかり合っている。

だが、それが時として剣舞ではないが、たがいに魔法で舞うように踊っているようで美しかった。

「それより、ジュエルシードはどこに？」

「え？」

「そう言えば・・・・あ、あそこに！」

「ウソ・・・・」

「なのは、フェイト！　今すぐ戦闘をやめろ！！」

「「え？」」

しかし、遅かった。再び互いのデヴァイスがぶつかり合った瞬間ジュエルシードからまばゆい光が空に向かって延びた。

「「え！？」」

「どうして！？」

「封印したはずなのに」

おそらく、なのはとフェイトがジュエルシードの近くで魔法バトルを繰り広げたからそれに反応したのか？

魔力波によってフェイトとなのはが飛ばされた。

「大丈夫かなのは？」

「うん、ありがとう葵君」

なのははたまたまこちらに飛ばされてきたので、こちらで押させた。

レイジングハートを見るとあちこちにひびが入っており、封印できる様子ではなかった。これを見るとバルディッシュもおそらくそうだろう。

「ユーノ！　こういう時の対処法は！？」

「わ、分からない・・・僕もこういう現象は初めてだ」

「くっ。どうすれ「なにやってんだい！フェイト！？」え・・・」

アルフの叫びが聞こえ、フェイトの方を見るとフェイトがジュエルシードを両手でつかんで封印しようとしていた。

「あのバカ！！！」

あのバカは何をしようとしているんだ！？

「エクス。白騎士展開！」

《イエスマスター》

すかさずエクスを起動して、フェイトの近くに来てみると、フェイトの両手の手袋は破れていてそこから血がにじみ出ていた。

「ッ！？　このバカ野郎が！！」

「え！？」

急いで、フェイトからジュエルシードを手放させ、ジュエルシードに向け、私はディゴソードシールドを展開。無に帰する刃（ルーンヴォルヴァ）をジュエルシールドに向かって発射したが、

――カーン

「は！？」

「ふぇ！？」

「え・・・」

三者三様の驚きだった。なにせ魔力を無効化する刃をはじき返したのだ。驚くなという方が無理だ。

そしてその刃はユーノの近くに、

―ザグッ

「ひぃいいいいい！？」

あ、ちなみにユーノには刺さりませんでしたよ。近くの地面に刺さりました。ただ、ユーノとの距離４センチ。数字的にも不吉でした。

「ユーノ、すまん。それより！　え、エクス！？　どうなってんだ！？」

《え、えっとですね、周りの魔力波があまりにも強すぎて、出力を最小でも１２２％で放出しないとまずいです！》

「・・・クソっ。エクス、シンクロパージ。ルミル、シンクロイン！」

《申し訳ありませんマスター》

「お前のせいじゃない。ジュエルシードのせいだ」

《マスター、まさかとは思うが、あれを使うつもりか？》

さすがルミル。あまり使いたくない手段だが、あれは無に帰する刃（ルーンヴォルヴァ）よりも無効化力が強く条件下も一切無視したものを使うしかないか。

ルミルをシンクロさせ、私は弓矢をセットした。共に黒塗りの。

「フン！」

迷わず私は矢を自分の太ももに刺し、血を吸わせる。

「あ、葵君！？」

「葵、何やってるの！？」

「黙って見てろ！」

そういって矢を引き抜き、照準をジュエルシードに合わせる。

「我が血は精霊の血。いかなる邪も退ける聖なる血。その血を吸った矢は聖なる矢。セイントアロー！」

すると、矢はまばゆい光を放ちながらジュエルシードに向かい、ジュエルシードと激突。その光に飲み込まれたジュエルシードはまるでなすすべもないように光りを失った。

「きょ、強制封印、というか、強制無効化成功・・・」

「あ、葵、大丈夫？」

顔を真っ青にしながらフェイトが訪ねてくる。が、その前に、

「フェイト」

「・・・なに？」

そのままフェイトの頭にチョップ。

「このおバカ娘が！」

「ひぅ！？」

「お前は私が以前に怪我をするなと注意しただろうが！　その約束をもう忘れたのか！？」

「ご、ごめん・・・」

「はぁ、良いから手を出せ」

「うん」

「癒しの風よ。汝の力を持ってこの者の怪我を癒したまえ。ヒーリングフール」

あの時と同じ魔法をかけ、フェイトの怪我を直し終えると、

「もう、心配をかけさせないでくれ。大切なものを失うのはもうごめんなんだ」

「うん。ありがとう。心配してくれて」

恥ずかしそうにしながらもお礼を言うフェイト。

「なのは、ごめんね。決着をつけられなくて」

「ううん。気にしないで。それより葵君、足大丈夫？」

「もう大丈夫だ」

そういって無事なのを確認させるために怪我の部分を指す。

「本当だ。傷跡もないの！」

「すごい」

そういって二人とも矢を突き刺した場所の足を触りまわる。

（足細いの。それに色肌もきれい・・・なんか）

（色白。肌もすべすべ・・・なんか）

（（女として負けてはいけない部分が負けた））

触るのを終了すると、二人ともｏｒｚと落ち込んでいた。

数分後、復活するとフェイトとアルフは私となのはに今回のことを感謝して飛び去っていった。

「ねぇ、葵君」

帰り道、なのはが話しかけてきた。

「わたしがもし興味フェイトちゃんと同じことをしたらどうする？」

「出来ればしてほしくないんだが、まぁやったら怒るだろうな」

「今日みたいに？」

「当たり前だろう。フェイトも、なのはもわたしにとっては大切な人間なんだ。傷つくのを見るのはごめんだ」

「うん・・・／／／　ありがとうなの」

第一八話

第一八話

もはや、ジュエルシードの反応がほぼ数日おきとなり、現在もその場所に向かって移動中。

「はぁ、のんびり過ごしたい」

そう思ってしまうのも仕方がないと思いませんか？

「終わってるし。やっぱり」

ついてみるとジュエルシードの封印は終わっており、たがいに談笑し合っていた。

「お疲れ。差し入れだ」

そういって途中で買ってきたドーナツを二人と二匹に渡した。

「おっ！　いいのかい！？」

「あぁ。全員の分を買ってきた。参加できなかった分のわびとして取っておいてくれ」

そういって私は勝ってきた缶コーヒー（ブラック）を飲む。

「フェイト」

「うん？　なに？」

「何かいいことでもあったか？」

「うん！　えっと聞いて葵！　「ストップだ！　此処での戦闘は危険過ぎる！！　僕は時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか？」え！？」

「構うなフェイト。あいつはバカかあほだ。私たちは戦闘をしていない。つまり無関係だ。で、話というのは？」

ただ談笑しているだけであり、ここにいる全員武器も何も持っていない。まぁ、バリアジャケットぐらいしか着ていないようだが。

「なっ！？」

「・・・あ、葵。時空管理局の執務官にそれは無いと思うよ？」

「私はその組織を知らない。無関係だ。それに間違いは「武器を下せと言うのが聞こえないのか！？」・・・・」

そこのハラウオンだっけ？　それに今はなのはとフェイトが再びデヴァイスを構えてくるが、これはお前がこちらに向けてデヴァイスを向けたせいでこちらの二人も向けたんだが？　お前が下せばこちらもおろすだろうに。

「これは正当防衛だろ。それ以前にお前の言うことを聞く必要性はないと思うが？」

「なに！？」

「執務官とはなんだ？　そんな役職聞いたこともない。ましてや時空管理局だ？　そのような組織この日本には存在しない。よって我々日本に住む住人としては聞く必要性がないというわけだ。分かったか少年」

「黙れ！　これ以上命令無視をすると言うのであれば公務執行妨害で逮捕するぞ！」

――――プチっ

隣でなのはが何か言っているが聞こえない。今は奴をどのように葬り去るかが重要だ。

「人の話を聞かないどころか、自分の意見のみを言う愚か者・・・ましてや、こっちはフェイトが何か吉報を持ってきてそれを話そうとしてそれを邪魔する・・・切れていいよな。あぁ切れよう。そうだ切れよう。よし、殺す」

ＳＩＤＥなのは

「あ、葵君？」

「人の話を聞かないどころか、自分の意見のみを言う愚か者・・・ましてや、こっちはフェイトが何か吉報を持ってきてそれを話そうとしてそれを邪魔する・・・切れていいよな。あぁ切れよう。そうだ切れよう。よし、殺す」

「あ、葵！？」

ユーノ君もびっくりしているそりゃそうだろう。最後の言葉が・・・

「お、落ちついて葵、ね？」

「安心しろフェイト、あいつを海の藻屑にしたあとちゃんと話を聞くから。後これ。なのはもこれ」

そういってフェイトちゃんと私に渡して来たのはあの【完全光り遮断！　アイマスク！】

・・・あの子、大丈夫かな？

「さぁ、愉しい愉しい裁きの時間だ。フフフッフフフフフフッ・・・」

すると、葵君は一瞬にしてその場から消えた。あ、まずい早く着けないと。そう思い急いでアイマスクをつける。

「なに！？　どこだ！？」

あの子も驚くよね。わたしも最初驚いたもん。で、多分後ろから、

「さぁ、海の藻屑となれ！！」

「ふ、フライパン！？」

フェイトちゃんも驚いているけど葵君が持っているのはフライパン。以前いっていたけどあのフライパンの硬さはすごいと思うの。ダイナマイトにも耐えれるぐららしいから。フェイトちゃんは間に合わなかったのかなあアイマスクつけるの。・・・だったらあの光景みているかもなの

―ゴンッ

「・・・うわぁ」

アルフさんも思わず声を漏らすけど、すごくいい音がしたの。でも終わった「まだまだ！」え・・・

終わったと思いアイマスクを外してしまった。

「オラッ！」

「・・・がはっ」

「燃えろ！　５０００度の熱にも耐えるフライパンによる技！　煉獄炎」

すると、フライパンが急に燃え始め、それであの子の身体を叩きつけるように・・・・

―ガンッ　ドゴッガキッ　ベシッ　ゴチュ

「・・・・」

そのまま、あの子は海へとまっさかさまに落ちていったの。大丈夫かな？

「安心しろ。運が良ければ生きている」

葵君。すごくいい笑顔なの。というか、そのところどころについている赤いものは・・・・まさかね・・・

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

「安心しろ。運が良ければ生きている」

そう、運が良ければな。

それにしてもすごいなこのフライパン。普通１０００度ぐらいしか耐えられないのにその五倍も耐えた！

「ところでフェイト、何があったんだ？」

「え！？　う、うん・・・じ、じつは・・・」

先ほどとは違い若干顔が青が・・・というか、全員顔が青いぞ？どうした？

『いや、葵（君・あんた）のせいだから！』

「そうなのか？　まぁいい。どうせ生きてるだろ・・・たぶん」

その後フェイトの話に聞くと珍しくプレシアから褒められたそうだ。『さすが私の娘ね』と、昔のように優しく笑ってくれたらしい。

あの矢が効いたのだろう。その時の内容がよっぽどうれしかったのかフェイトは終始笑顔だった。

「それは良かったな」

そういってフェイトの頭をなでる。

「うん。君にはやはり笑顔が似合う」

「ふぇ／／／！？」

そういってフェイトと話し合いが終わり、フェイトは時空管理局から増援がくるかもしれないということで早めに退散した。

「さて、なのは」

「なに？　葵君」

「私たち戻るとしよう。君の「ちょ、ちょっと待ってくれないかしら？」なんだ次は？」

そういって声がした方を見ると、何やらモニターがあり、そこには一人の女性映っていた。

ＳＩＤＥリンディ

まさか、あのクロノをふ、フライパンであそこまで・・・・それにフライパンで戦った挙句に勝つなんて。

「か、艦長、フライパンってあんなにすごいものでしたっけ？」

局員がそう思うのも仕方がない。私だって驚きを隠せないのだから。

「私たちも戻るとしよう」

まずい！　今この時を逃すと！

「君の「ちょ、ちょっと待ってくれないかしら？」なんだ次は？」

会話に割り込む形になったけど何とか間に合った。

「だれだ？　あの屑の仲間か？」

く、屑って。さすがに実の息子を屑呼ばわりされるときついわね。

「く、屑って…葵君」

となりの女の子も若干引いている。まぁ、ああも堂々と人を屑呼ばわりする人はまずいないわよね。

「私は時空管理局提督、戦艦アースラの艦長リンディ・ハラオウンです。そこにいるクロノ・ハラオウンの上司であり母親でもあります。い、一応あの子は私の息子なの」

「左様で。で、ご用件は？」

「とりあえず、事情聴取をしたいのだけど。こちらにｋ「断る」え

？　どうして？」

「あ、葵君、どうして！？」

「時空管理局と今名乗りましたね。つまりあの屑と同じ組織。つまりいきなり攻撃される可能性がある」

「そ、それはあなた方が！」

「それにこちらは正当防衛だ。ここにいた連中の様子を見ていたか？　ただ飲食をしていただけだ。デヴァイスを持ったのはあの屑がいきなり現れ、デヴァイスをこちらに突き付けたたことによる自己防衛手段だ。いきなり現れたら何をされるか分かったもんじゃない。それだけで武器を下せと言われても納得がいくか」

「・・・そうね。ではどうしたら話し合いの席に座ってくれるかしら」

「明日は日曜だ。明日の１３時ここに来ること。人数は貴様とあの屑、あと一人の計三人だ。こちらは私とこの子、そしてそこに要るフェレットの以上だ」

そういって彼はあたりを見渡すと、

「後もう一つ言っておこう。この機械もすべて撤収させること」

そういうと、彼は指を鳴らす。すると、

「か、艦長！　サーチャーの一つが撃墜！　原因は不明です！」

ど、どいうこと!?　まさか!

「お分かりいただけただろうか。もし、後を追跡するようならこの機械同様君達もチリと化す覚悟あると見る」

でも、こちらの座標を「ちなみにだ」え?

―シュンッ

そこにあったのは、

「【バファ○ン】?」

「こちらの世界の薬だ。これで分かったたと思うが君達の場所はすでに特定しているのでね。下手な行動をするとどうなるかは・・・・分かるな?」

「・・・・」

この子は本当に子供なの?　魔力は不明。さらにどんな魔法を使っているかも不明。まずいわね。

「では、私たちは失礼する」

そういって画面上から彼は消えた。

「どうします!?　艦長!?」

「二人の追跡はやめましょう。本当に彼なら私たちを塵にするかもしれないしね」

彼は絶対に敵に回してはいけない。本能的な何かが警鐘を鳴らし続けている。なんとしてもこちら側に引き込めないかしら。

第一九話

第一九話

翌日。私となのは、ユーノは同じ場所に来ていた。

「あ、葵君。そのリュックの中みって・・・・・」

「無論。フライパンだ」

「にゃははは・・・・やっぱり」

当たり前だ。あの屑がいるんだ。後エクスとルミルは魔力を感知させないようにさせてある。

近くのベンチに座っていると、あちらも来たようだ。

昨日の屑に、艦長さん、あと一人分からないが女性が一人。

「改めて自己紹介ね。時空管理局提督、戦艦アースラの艦長リンディ・ハラオウンです。で、こちらが」

「同じく時空管理局執務官クロノ・ハラウオンだ」

「時空管理局執務補佐兼アースラ通信就主任エイミィ・リミッタです。よろしくね」

最後の人は好感が持てそうだ。元気な人だね。

「高町なのはです」

「ユーノ・スクライアです」

「神無月葵だ」

そういって局組も向かいのベンチに座った。

「それよりも君も元の姿に戻っていいと思うが」

「そうですね。じゃあ「待て、ユーノ」え、なに？」

いや、少し考えろユーノ。

「まさかとは思うがここで変身を解くつもりじゃないだろうな？」

「そうだよ？「周りを見ろ」周り・・・・あ・・・・」

はぁ、全く。

「ふぇえええええええ！　ユーノ君人だったの！！！！！！」

「なのはうるさい。周りの視線が痛い」

「うっ。ごめんなさいなの。でも、葵君はなんで驚いていないの！？」

「少し考えればわかる。人語を話す動物はいない。となれば理由は誰かが変身しているか機械。後者は無いから人の可能性となったと

いうわけ」

さて、それよりも認識阻害の魔法をかけ、変身させますか。

「これでよしっと、変身といても大丈夫だぞ」

「うん」

そういうと光化にユーノが包まれ、それが晴れると人になったユーノがいた。

その後は、また驚いたなのはを黙らせるのに必死だった。

ちなみに、

「ねぇねぇ。葵君。そのリュックの中みって」

「えぇ。フライパンですよ?」

クロノの肩を見ると顔が真っ青になってガタガタブルブルと小刻みに震えていた。トラウマのすりこみには成功したみたいだな。

「そ、そんなの持っててても大丈夫なのか?」

屑改めクロノがそう尋ねてきた。

「あぁ。大丈夫だ。なぜｎ「ちょっとそこの君」はい?」

私の後ろには一人の警官。

「そのフライパンどうしたんだい？」

「お母さんに買ってきて言われたから御遣いしてきたの！」

かの有名な某少年探偵もびっくりの性格、声全てを変えた。

「そうか。お使いだったのかい。えらいね。こちらの人たちは？」

「友達がたまたまいたからちょっと遊んでたの！」

「そうか。最近物騒なので気をつけてあげてくださいね」

「え、えぇ。ご丁寧にどうも」

リンディさんもびっくりのようだった。警官がその場を去ると。

「き、君の演技はすごいな」

「学べばどうにでもなるさ。これも生きて行く上の知識だ」

さて、話はもどり、ユーノがジェルシードがなぜこの海鳴市に落ちたかの経緯を話す。以前に説明したと思うのでここは割愛！

「そう。立派ね」

「だが、無謀だ。あれほどの物を一人で回収しようなど」

「はい。僕もそう思いました。でも、今の僕にはなのはや葵がいます。友達として、仲間としても信頼できます」

「ユーノ君」

ふむ。嬉しいね。ユーノからからそう頼られると。

「・・・・そうですか。ではこちらも」

そして、次にリンディ提督から時空管理局というものとロストロギアおと鋳物の説明をされた。

ロストロギアとは、過去に何らかの要因で消失した世界、ないしは滅んだ古代文明で造られた遺産の総称。多くは現存技術では到達出来ていない超高度な技術で造られた物で、使い方次第では世界はおろか全次元を崩壊させかねない程危険な物もあり、これらを確保・管理する事が時空管理局の任務の一つであると言うことだ。

（ふむ。何か怪しいな。エクス、ルミル。時空管理局のデータを集めてくれ。アースラをハッキングしてもかまわん）

《《イエス、マスター》》

そしてジュエルシードの説明もあったが、これはリニスから教えてもらった知識以外もあった。

なんでもジュエルシードは【次元干渉型のエネルギー結晶体】で、複数発動させることで次元空間に影響を及ぼす【次元震】と呼ばれるものを引き起し、最悪の場合、幾つもの並行世界を壊滅させるほどの災害【次元断層】の切欠になる、と。

何とも物騒なものを人は作るものだ。

なのはやユーノを見ると暗い顔をしていた。

《マスター管理局についてのデータ集めてきました》

（ふむ。どれ）

そういって脳内に直接電波を送り、管理局についてのデータを見る。司法、警察、軍隊を一手に担う巨大組織。

（バカか。これでは独裁体制国家と変わらない。まさかこの子たちも・・・・。あり得るな。クロノも見たところまだ１５以下だ。何を言うか分からないな）

そういって私は表目状は出していないが、リンディの言葉を一つ一つ聞き逃さないようにしていた。

「ところで、神無月君、高町さん。なぜあなた方はジュエルシード集めをしているのかしら」

リンディさんの質問を受け大雑把にだが説明をした。

クロノとなのはが出会い、なのはが危険な目に合わないためにジュエルシード集めに協力し始めたこと。

ジュエルシードを集めている途中で出会ったフェイトという子。

だが、たがいに理解を含め良い好敵手になっていったこと。

そして互いに協力し合って封印した昨日のことを。

「クロノ君。そりゃあ葵君も怒るよ。それにその、フェイトちゃん

だっけ？　その子何かうれしいことがあって葵君達に教えてあげようとしたのに邪魔しちゃねぇ」

「うっ・・・申し訳ないことをした」

そういってクロノは私に向かって頭を下げた。だが、

「クロノ。それは私に謝っても意味がない。一番の被害者は私ではなくフェイトだ。それを忘れるな。さもなくば」

そういってフライパンを手にする。

「わ、わかった！　分かったからそのフライパンに手を伸ばすな！」

昨日のあれがやはり聞いたか。トラウマにしておいて恐怖を植え付ける。じゃないと連鎖は繰り返されるからな。

「こほん。そろそろいいかしら？」

「どうぞ」

そういって私はコーヒーを飲む。リンディさんも近くにあった極甘珈琲を口にして、

「これよりロストロギア・ジュエルシードの回収については時空管理局が全権をもちます」

「「え・・・」」

「ほぉ。大口をたたくな。ということは私たちは元の生活に戻って

いいということか。クロノ？」

「あぁ。君達は今回のことは忘れて、それぞれもとの世界に戻り普通の生活を送るといい」

「でも・・・そんな・・・」

「次元干渉にかかわることなんだ。民間人に介入してもらうレベルの話じゃない」

「でも！」

（まぁ、そうだな。これだけ危険なことだ。さて、フェイトとの約束もある。どうするか）

そう私が今後のことを考えていると、

「まぁ、急に言われても気持ちの整理がつかないでしょう。今夜一晩ゆっくり考えて、三人で話し合ってそれで改めてお話しましょ」

・・・はっ？　まて、今この人は何と言った。エクス、ルミル。認識阻害の魔法をここだけにかけろ。後防音も。

《《い、イエス！　ま、マスター！！》》

「おい、貴様」

「ひっ・・・」

なのはを怖がらせてしまったか。だが今はいい。それよりも。

「貴様、よくもそうぬけぬけと戯言が言えるな？」

ＳＩＤＥリンディ

「おい、貴様」

え？　な・・・ひっ

葵君から低い声がしたのでそちらに振りむいてみると、鋭い目でこちらを見ている葵君がいる。それだけじゃない。殺気も子供、いえ常人が出せるレベルじゃない。そのせいか、クロノ達も震えている。

「貴様。よくもそうぬけぬけと戯言が言えるな」

「ど、どいう意味かしら」

「おい、クロノ」

「は、はい！」

「お前はさっき今回の事件が民間人が介入するレベルじゃないといったな。それは今回の事件はお前らにとって最優先項目で対処しなければならないということで間違いないか？」

「あ、あぁ」

「そうか。なら、リンディ・ハラウオン。お前は何を考えている。なぜ、私たち民間人が介入するべきものじゃないにもかかわらず、気持ちの整理や、もう一度話し合う必要性がある？」

「え、どういうこと？」

「なのは。管理局というのは簡単に言うとこの世界で言うと軍、警察みたいなもんだ。そんな組織が最も危険だと言っている事柄に民間人は手を出すなといっているんだ。ここまではわかるか？」

「え、うん」

「なら次だ。手を出すなといっているのになぜ気持ちの整理をして、もう一度こいつらと話し合う必要性がある」

「・・・・あ！」

「たしかに。これはどういうことですか！」

「違うわ！　私たちは・・・」

でも、葵君は次の一言で私にチェックメイトをかけた。

「違うも何もないだろ。お前らは私たちを使い捨ての駒としたいんじゃないのか？」

「な！　適当なことを言うな！」

クロノが神無月君に飛びかかろうとするが、

「なら、クロノ。なぜお前が昨日あんなにボコボコニされたのに、増援がこなかった？　最優先項目以上に大切なことがあるのか？」

「そ、それは・・・・」

「昨日君の元へ増援がこなかったのが証拠だ。さらにいうなら」

そういって彼はその鋭い目のままこちらを睨みつけてきて、

「お前は危険感をあおり、なのは達から協力させてくれというように仕組んだんじゃないのか？」

すると、彼と私以外がはっと顔を上げる。

「なのはならこう思う。自分で切ることがないか必死に探す。そして自分には魔法がある。なら、それを生かせれば！　とね」

「う、うん。ユーノ君やみんなのためにジュエルシードを集めるって決めたから」

さらに、彼はとどめの一言を言い放った。

「さらに管理局は慢性な人手不足だそうだな。そこに現れた高レベル魔法保持者。あなた方から見ればよっぽどのどから手が出るほど欲しいんじゃないのか。さらに今回の事件を乗り越えられるほどなら適性もあるでしょうね」

「そうなんですか艦長！？」

「ち、違いますよね！？」

・・・・・・

「沈黙は肯定」

「そ、そんな」

「ウソ・・・だろ」

彼は、神無月君はおそらくクロノやエイミィより年下だろう。にもかかわらず子の洞察力、情報量の多さ、殺気。全てにおいて彼らだけでなく私以上なのかもしれない。

「さて、私たちはこれで失礼しましょうか。あなた方の目的も分かりましたからね。なのはいくｚ「待ってください！」まだなにか？」

彼の視線はさらに鋭くなっていた。それこそ比喩でも何でもない。視線で人を殺せるぐらいに。

「白状します・・・。立場上こちらから協力要請するようなことは言えないんです。だからああいう風に誘導するようなことをしまいました。こんな卑怯な手段をとってごめんなさい」

もう、頭を下げるしかない。立場も関係ない。

「母さんどうして！？」

「彼が言った通りよ。管理局は慢性な人手不足。それだけにたまたま見つけた魔法保持者二人。それもかなりレベルが高い。正直今の戦力だけじゃ不安なのよ」

すると、彼は考えるように。

「正直でよろしい。ここで嘘をつかれるようであれば迷うことなくあなた達と敵対していたでしょうね」

そういって彼は笑顔を向け、もう一度席に座った。

「一つだけ忠告しておきます。あなた方の組織を信用したわけではない。少なくともあなた方という人間を信用したんです。そこをはき間違えないようにお願いします」

「はい」

「後も一点。だまそうとしたことは変わらないのですからこちらの要求をのんでもらいます。難しいことではないので」

「出来うる限り善処します」

「一つ。私となのは、ユーノの独立行動権を認めること。二つ。協力体制は今回のみ。三つ。なのは並びになのはの周りの人へ手を出さないこと。四つ、私の魔法に関しての情報提供並びに撮影は一切禁止すること。以上の四点を守っていただければ結構です」

「分かりました」

「では、今後ともよろしくお願いします」

そういって彼は手を差し伸べてきたので、私はそれを握り返す。

彼の手はどこか、とても懐かしいぐらい暖かかった。

ＳＩＤＥＯｕｔ

「なのは、勝手に進めて悪かったが良かったか？」

「うん！　大丈夫だよ」

なのはもどうやらこの内容で満足してくれたみたいだ。

「ところで、一つ聞かせてくれないか？」

すると、クロノが何か話しかけてきてた。

「ん？　なんだ？」

「も、もしもだ。もしもさっき言ったうち一つでも破ったらどうなる？」

「一つ目はまぁ、状況によるが、後半三つは絶対厳守だから破った瞬間管理局をつぶす。あと、君達はしないと思うが上層部がやってもつぶすから」

そういうと彼らは顔を真っ青にしていた。

ちなみにこの後私が男だと言ったらやはりアースラメンバーが全員が驚いた。

ただ、リンディ提督だけ、

「じゃあこれ着てみる？」

そういって取り出したのは黒色のゴスロリ服。着てみたけどヤッパ動きやすかった。

第二十話（前書き）

ＰＶ２万超えた・・・・えぇえええええええええええええ！？！？！？
こ、こんな小説を読んでくれている方々に感謝を！
すっげぇうれしいです！　これからもがんばりたいと思います！

第二十話

第二十話

その後、アースラに移り、しばらくの間こちらで生活することになった。その後、神姫を見せると、

「ゆ、ユニゾンデヴァイス！？」

といっていた。似たようなものなのかは分からんが、とりあえずそんなものだといっておいた。変に研究されたらたまったもんじゃない。

まぁ他にもクロノと何度か模擬戦を繰り返していた。

まぁ、結果は言わんでも分かってくれ。というか、コイツぐらいの相手なら魔法を使うまでもなかった。

「はぁ・・・はぁ。君は一体どれほどの力を持っているんだ！？」

「クロノ。なのはもフェイトもそうだが君達は明らかに魔法に頼り切っている。それが勝敗を分けると言うことがなんでわからんのだ？」

「ど、どいう・・・ことだ」

「とりあえず座れ。後これ」

そういって近くの自販機で買ったポ○リがなぜかあったので買っ

てそれをクロノに渡した。

「済まない」

「遠慮するな。で、続きだが魔法の前にお前の場合は体ができていない」

「だからどういう意味だ？」

「君はもし【魔法が使えなかったら】ということを想定して訓練したことがあるか？」

「そういえば、無いな」

「その時点でアウトだ。魔法は万能ではない。もし使えなかったら、武器がなかったら、最終的に頼りになるのは己が身体だ。そのためには最低その場から逃げれるほどの足、護身術程度の武術を習得しておく必要性がある。君の場合はそれをスルーして魔法の基礎、応用に走っている。それでは負けるのは当たり前だ」

「君はそれもこなしているのか？」

「当たり前だ。基礎体力をつけることは戦闘においては必須だ。両手腕立て、片手腕立て、腹筋、背筋、スクワット。それぞれ最低でも二千はする」

「に、二千！？」

「そうだ。君も私もそうだが才能がない。なのはみたいな恵まれた才能がな」

「そうなのか？　僕から見れば君は才能に満ち溢れている気がするが」

「あぁこれは努力の賜物だ。愚直なまでに地道にな。それでもまだ君は私より才能はある方だ。だが、その才能も開花させねば意味がない。なら地道に努力し続けるしかないと思うぞ」

「あぁ、そうだな（だが、これだけの戦闘力、どれほどの年月をかければ。それに彼はあの子と同い年だろ！？）」

才能か。私には縁遠いものだな。

「あとクロノ。君の悪い癖はもう一つある」

「なんだ？」

「勝ったと思い油断をしている。勝って兜の緒を締めろと言う諺がある。勝っても気を抜けばそのすきにやられる可能性がある。勝っても気を緩めることなくありとあらゆる可能性を考え行動しなければならない。君の悪い癖は必殺技を撃った後に油断が生まれそこから隙ができている。それを注意しろ」

「・・・あぁ、わかった」

すると、突如緊急事態を告げるアラートが鳴り響く。

「何事だ！？」

クロノの顔が局員の顔に戻る。

「分からんがとりあえずブリッジに向かおう」

ブリッジに着くとそこには荒れた海と、嵐のように荒れ狂う空が映し出されていた。

「・・・・天気予報だと台風はこないはずだが？」

―ズガァアー

「どうした？」

私がそんなことを言うとみんながこけた。足腰弱いな～。

「あ、葵君。じゅ、ジュエルシードが反応したんだよ？」

「神無月君。もう少し緊張感を持ってね」

「そうか、場を和ませようとしたんだが」

それよりも、あの荒れ狂う場にフェイトがいた。

「あのバカ・・・」

はぁ、あれほど怪我をさせるな、人に心配させるなといったのに早速これか。

「すまないが現状の説明を頼めるか？」

「えぇ。残り六つのジュエルシードが海にある可能性が高かったの。彼女達は魔力を繰りそれを半ば強制的に発動。そして今に至ると言うわけ」

リンディ提督もどうやらあきれた様子だ。確かにあれは一人で抑えられるものではない。私でもあと一人、いや二人支援系の魔法使いがほしいぐらいだ。

するとなのはが、

「あの！　わたし、急いで現場に！」

「その必要はないよ」

クロノがそうなのはに言い放った。

「放っておけば彼女は自滅する。仮に自滅しなかったとしてもそこで彼女を叩けばいい」

なるほど。

「そうだろうな。君達組織は常に最善の方法をとる――というわけか」

「えぇ。そうね」

「葵君！？」

「だが、私は組織の人間ではない。というわけで私は私のとるべき道を進ませてもらうよ」

エクスに起動命令を出して白騎士の格好をする。

「なにを言っているだ、君は！？」

クロノがそう言い放つが、

「クロノ。最初の契約時に言ったはずだ。私となのはは独立した行動権を持たせるように言ったはずだぞ？　それを今行使するだけだ」

「うっ」

「それに、彼女は私にとって大切な者だ。それを護って何が悪い？　友を、仲間を護って何が悪い？　友や仲間を助けるのに理由がいるのか？　それを悪というのか？　ジュエルシードなど後回しだ。今は彼女の安全確保を、人の命を護る方が優先すべきことではないのか？」

「・・・・・」

「あぁ、あといっておくことがある。私を止めたければ止めるといい。だが、その時はこの艦がどうなるかは分かっているな」

私の身体からは魔力だけでなく、殺気、覇気と呼ばれるモノを一気に放出する。

「クロノ。そう言えば君とはエクスとルミルのどちらかを使って戦ったことはなかったな。今からでもどうだ？　ちょうどエクスを使っている。間違ってあの世に案内することになるかも知れんがその時は許せ」

そういってジャベリンの銃口をクロノに向ける。

「・・・・はぁ。止めておくよ。まだ僕も死にたくない」

「そうか」

すると、リンディ提督がこちらを向いて、

「あなたはどうしてそこまでするの？　彼女は――」

「さっきも言ったはずだ。彼女は大切な者だ。なのはやユーノと同様にな。それにリンディ提督。あなたはなぜ管理局に入ったのですか？　人を助けるためじゃないんですか？」

「！」

その顔を察するにあたったようだ。

「・・・そう、だったわね。歳は取りたくないものね」

「おや？　私から見ると十分若いと思いますが？」

「そう？　嬉しい言葉ね。それより、神無月君。お願いしていいかしら。彼女の救出と保護を」

「無論そのつもりだ。なのは、君はどうする？」

「いくよ！　わたしも、フェイトちゃんを助けたい！」

「そうか。では、行くとしようか」

待っていろフェイト。お前が望む未来を必ず作ってやる。誰もが幸せな世界は無理かもしれない。だが、せめてお前達が、私にとって大切な者たちが幸せな世界を創るために。

第二十話（後書き）

リンディ提督ってなんで管理局は言ったんだろ？　あくまでもご都合主義なのでちょっと間違っていたらすいません。

第二一話

第二一話

モニターで見たときより悪化してませんかこれ？

「とりあえず。エクス、ジャベリンセット。出力１２％に設定。なのは！　発射と同時にアルフとフェイトの救出を頼む。ユーノ。あの竜巻をどうにかするのを手伝ってくれ」

「うん！」

「分かった！」

さて、一時的処置だが竜巻とあの雷をどうにかしなければ。

《マスターセット終了！》

「じゃあ行きますか。ギュリーノス・ブレイカー！」

―ズガァアアアアアアアアアン

まばゆいばかりの光の光線があたり一面を包み、竜巻は一瞬にして静まった。

「急げ！　これは一時的な処置にすぎない！　また竜巻が発生する前に安全な距離を保て！」

そう言っているうちに再び竜巻発生。これはいっぺんに六個を同

時に封印する必要性があるな。

「あんたのあの一撃であれだなんて。どうすれば・・・・」

「まぁ１００％の出力で撃ってもいいんだが・・・」

「え！？　あれで１００％じゃないの！？」

私のどうやらあの一言に驚いているらしい。

「いや、１００％で撃ったらモーゼの十戒みたいに海が真っ二つに割れて津波で近隣に被害が出てもいいならやるぞ？」

「「「「・・・・・・」」」」

沈黙が痛いな。だから最大でも地球圏内だと数十％ぐらいまでしか出せないんだよな。

「というわけでなのは、フェイト。お前らの魔法とこっちで同時に抑える。一人二つの割合なら封印できるな？」

「うん！」

「任せて」

「良い返事だ。ユーノ、アルフ。全力で二人をサポートしてやってくれ」

「言われなくてもするさ！」

「うん。支援なら任せて！」

「では始めようか！」

「「「「おー！！」」」」

なんだろう。めちゃくちゃ今ピンチだと思う場面なのに、まるでみんなでこれから遠足に行くぞー。みたいな空気は。

《シリアスよりよろしいのではないのか？》

《楽しければいいんですよ！》

「（そういうものか？）まあいい。とりあえず封印作業に入ろう――か！？」

周りを見ると、なのはとフェイトがいきなり最大級魔法を放とうとしていた

「これは私いらなくないか？」

《とりあえず一人二つなので》

《マスター冷却終了。いつでも充填ＯＫです！》

《張り切っているな？》

《もちろんです！》

「まぁいいか。照準セット。出力１５％で行く。ターゲットロック」

《出力１５％　目標ロック確認。いつでもどうぞ！》

「ギュリーノス・ブレイカー！」

ＳＩＤＥフェイト

なのはと葵の協力で一人二つまで減った。でも、相変わらず葵の砲撃はすごい。もしあれを食らったら・・・・やめよ。

「あ、葵君の砲撃すごいの・・・・。でも、きれい」

「・・・うん」

以前詠唱で聞いたけど光りの道というのはあの砲撃を見たらうなずける。

本当にきれいなのだ。

本当に、誰もが光りの道を歩めるような気がする。

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

ＳＩＤＥアースラ

「あ、あれで１２％だと・・・・」

クロノがモニターを見て唖然とする。

その気持ちもわかる。なにせ竜巻を撃つというより切り裂くような砲撃なのだ。

「もし１００％ならどうなるのかしら・・・・」

想像したくはないが知りたいと思ってしまうのが人間の感情なのだろうか。

すると、葵がもし１００％うったらということを想定して話をしていた。それを聞いて、

「う、海が割れる！？」

「え、エイミィ。先ほどの１２％でどれ位の魔力ランクなの？」

「え、えっとですね・・・先ほど測ってみたみたんですが、１２％でＡＡＡ＋です」

「・・・彼って生きるロストロギアじゃないんですか？」

「・・・ははは、もう、笑うしかないわね」

その後１５％でＳ＋になりさらに驚いたアースラクルーたちであった。

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

その後ジェルシードも封印し終え、少し談笑していた。

「あ、葵。ありがとう。また助けてくれて・・・／／／」

ほほを染めながらこっちに来るフェイト。だが、

「あのな、フェイトよ。もう心配させるなといっただろ。だからこれは罰だ」

そういって軽くでこピンをする。

「いたい・・・」

「なのはもそうだが、こちらの世界の魔法使いは無理をするのが当然なのか？　なら、一から鍛え直してやろうか」

もう溜息しか出てこないな。全くユーノもアルフも心配させて早死にさせられるぞ。

「え！？　わたしもなの！？」

「当たり前だ。最初よりかはあまり無茶しなくなったが、みていてハラハラするときは何度もある。お前らを見ていると心配で胃に穴が開く。この歳で胃潰瘍とかやめてくれ」

「「ごめんなさい」」

そういって二人ともシュンとするが、

「まぁ、無事だからよしとしよう。あとフェイト、一個は君に」

そういってフェイトにジュエルシードを一個渡し、もう一個は、

「もう一個はなのはに」

「え、でも・・・」

フェイトはやはりもらうのに後ろめたさがあるんだろう。

「私が持っていても何も意味がない。ちょうど二つあるんだ。分け与えた方がいいだろう。

そしてそれぞれ封印すると、

「さて、ではそろそろ」

そのままアースラに戻ろうしたら、

(魔力反応!?)

空を見上げると、紫色の雷がフェイトめがけていた。

「なに!?　フェイト、なのは!　逃げろ!!」

「え・・・!?」

「うそ・・・レイジングハート!」

フェイトは私の声を聞き驚いたが、すぐに自分の置かれている状況に気付く。

なのはもレイジングハートでガードしようとするがおそらく間に合わない。

「間にあえぇえええええ!!　ディゴソードシールド全面展開!」

―ブォン

という音共に水色の魔力シールドが展開された。間一髪でフェイトとなのはをガードする。

「ぐっ・・・・」

「葵君!?」

「葵!」

私がこの場で逃げればこの二人に雷があたる。それは何が何でも避けなければ。そのためならこんなものなんて耐えきってみせる!

―ゴキッ　ブチっ　ビシャッ

シールドを備えている甲冑部分が壊れ、そこの血管が破裂し、血が出る。白騎士の装甲を壊すか。

【不の者】が力を与えているのか?

「耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐え

ろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろォオオオオオオ！！！！」

痛くない怖くない。こんなものなんて、こんなものなんてエェエエエエえええええ！！

「はぁあああああああああ！！！！！！」

雷をはねのけ、二人の安全を確認すると二人は無事のようだ。

「エクス、損傷確認」

《い、イエスマスター。破損部分甲冑右腕部、右胸部、ヘッド部分ですが修復は可能のレベルです。それよりもマスターの方が！》

焦ったようにエクスがいうが、こんなときに冷静に分析してくれるのが、ルミルだ。

《マスターすぐに自己治癒を開始してください。マスターほどなら数分もあれば完了するはずです》

「分かった。エクス、ルミル。ありがとう」

そういって私服に戻り、治癒魔法を右腕に集中する。

「ごめん葵。お母さんが・・・」

「なに、なのはと私がいたのだ。敵だと思ってフェイトを護ろうとしたのじゃないのか？」

「そう、なのかな？」

「これぱっかりは君の母親じゃないとわかないがな」

違うな。これは明らかにフェイトを狙っていた。だが、プレシアの魔法ではあったものの行使したのはおそらく。

「フェイト。一つだけ頼みを聞いてくれないか」

「な、なに？」

「どんな時でも心を強くもて。たとえ自分の親が君のことを嫌いと言われようとも、どんな残酷なされても」

「え・・・どいうこと？」

「そのうちわかる。今はこれしか言えない」

「うん。わかった」

「良い子だ」

そういって私は傷ついていない左手でフェイトの頭をなでる。

なのはがほほを膨らましていたので、フェイトが終わるとなのはの頭も撫でた。

「ジュエルシードの捕獲はできなかったがとりあえず任務は終了のようだな」

「そうだね」

「では、戻るとしよう。またなフェイト」

「うん。またね。なのは、ユーノ、葵」

「毎回すまないね。助かったよ」

「大切なものを護るのに謝る必要はない。それに助け合うのは当然だろ？」

「う、うん。そ、そうだね／／／」

犬型のアルフがなにやら顔を俯いている。

「「ライバルが増えた――！？」」

「ち、ちがうよフェイト！？」

「ライバル？」

《《マスター。フラグ製造機の称号を手に入れたー》》

何を言っているだ神姫ｓは？

その後、アースラに戻るのに数十分遅れた。

第二二話

第二二話

「戻りました」

そういって無事アースラに戻り報告をしていると、クロノが、

「きみを敵に回さなくてほんっっっっとによかったよ」

そういって私の両肩に手をのせて半ばあきれ顔で言っていた。

「そうだな。敵に回して暴走でもしてみろ。太陽系が無くなるぞ」

「「・・・・は？」」

「冗談だ」

「君の場合冗談に聞こえないんだが！？」

「やろうと思えばできる！」

「しなくていい！」

「まぁまぁ。神無月君もそんなことはしないわよね？」

「えぇ。それよりもあの雷は何だったんですか？」

「あぁ。そのことについてたが」

そうクロノが言うと一つのモニターが現れ、そこにはプレシアの写真があった。

「彼女の名前はプレシア・テスタロッサ。僕達と同じミッドチルダ出身の魔導師だ。専門は次元航行エネルギーの開発。偉大な魔導師ながら違法研究の失敗によって放逐された人物です。登録データと先ほどの魔力波も一致しています」

「クロノ君、プレシア・テスタロッサの追加データ持ってきたよ！」

扉から出てきたのはエイミィだった。

「彼女は二六年前まで管理局の中央技術開発局の第三技局長でしたが、当時彼女が独自に開発していた、次元航行駆動路【ヒュードラ】使用の際違法な材料を使用し失敗。結果、中規模次元震を引き起こし、中央を追われ地方へ異動となりました。随分もめたいみたいですよ？　事故は結果に過ぎず実験材料には違法性はなかったと。辺境に異動後も数年間は研究に携わっていたみたいです。しばらくして行方不明になったと・・・」

「他の情報は無いのか？　家族構成、その研究内容とか」

「抹消されているみたいですね」

抹消？

「おかしくないか？」

「え？」

「どういうことだ？」

周りの人間が一気に私の方へと注目する。

「エイミィ、その研究内容に使われた材料も抹消されたのか？」

「え？　うん、そうみたい」

「それはおかしくないか？　普通なら失敗は成功の母というように、失敗データは二度と事故をおこなさないためにも保存しておくだろう。ましてや、違法な材料ならなおさらだ」

「確かに」

「それに実験内容だけならまだ分かるが、なぜ家族構成まで消す必要性がある。おかしいだろ明らかに」

「確かにそうね」

これは徹底的に調べてみる必要性があるな。

「クロノ。確か君は執務官だったな」

「あぁ」

「悪いがプレシア・テスタロッサのその違法実験の内容や実験材料について調べてもらえないか？　あと、リンディ提督も彼に権限を使わせて調べれるところまで調べてもらえませんか？」

「そうね。確かに謎が多すぎるわ」

「それに、事の発端はもしかして・・・・あり得るな」

あいつが関わっているとなれば・・・・。それにあいつならやりかねん。

「あれが、フェイトちゃんのお母さん」

なのはがプレシアの画像を見ながら、そうつぶやいた。

「何か気になることでもあるのか？」

「葵君。さっきの雷、フェイトちゃんを狙ってたよね」

鋭いな。気付いていたのか。

「あぁ。間違いなく。だが、それが果たしてプレシアの意思なのか、他の者による介入かは定かではないな」

「？　神無月君。どういうことですか？」

「確証を持てないからいまだに保留。ということでお願いします」

出来れば、そうであってほしくないな。でも、そうなるとあの雷はプレシアの意思だったということになる。

どちらに転んでも結果は最悪だな。

ＳＩＤＥアルフ

あの女がフェイトに用があるといったから呼ばれたとおりに来てやった。だけど、

―パシンッ！！！

「なにをやっているの。フェイト。私はジュエルシードを集めるよう言ったはずよ」

容赦なくフェイトに鞭を振るう。

「ごめ・・・んな・・・さい」

「それに、あれだけの好機を持って、ただボーっとしているだけなんて。それにあそこにいた二人は敵なのよ！　何のんきにしていたの！？」

「ご、めんな・・・さ・・い」

フェイトの声が小さくなるが、それでも容赦なく鞭の音が場を包む。

「なにが違うの！　あの娘とあの少年、神無月葵は敵なのよ。それとも、私を裏切るつもり？」

「ち、ちがいます・・・私は！」

もういいよフェイト！　なんでそんなにも、あの女を！

「黙りなさい！」

―パシンッ

「うぐっ・・・・・」

「プレシアーーーーー！」

もう我慢できない！　よくも、よくもフェイトを！！

「きちゃ、だめ・・・・アルフ・・・」

それを最後に、フェイトは気を失った。

「ふん・・・」

そのままあの女は地下へと降りて行った。

「フェイト！　フェイト！！」

あの女は絶対に許せない！　この怒りを数十倍、いや数百倍にして返してやる！

そのままあたしはプレシアの後を追った。

「プレシア、あんたよくもフェイトを！」

そういってあの女に向かって殴りかかる。だが、障壁が展開され拳が届かない。でもかまわず、拳を振るい続け障壁を破る。

「あんたは母親で！　あの子はあんたの娘だろ！　あんなに頑張ってる子に・・・あんなに一生懸命な子に・・・なんであんなひどいことができるんだよ！？・・・え？」

そのときあたしは目を疑った、うっすらだがあの女の眼に涙があった。

でも、次の瞬間。

―バシュゥウ

腹部に魔法を叩きこまれ、あたしは壁に激突する。

「・・・いつも、いつも、フェイトを心配して、ときには怒っていやったり、時には笑ってあげたり、時には心配してやったり、よっぽど、よっぽど葵の方があんたより家族だよ！　それなのにあんたは！！」

あの女の眼を見ると、もうその目には涙は無かった。見間違いだったのか。

「あの子は使い魔の作り方が下手ね。余分な感情が多すぎる」

「フェイトは、あの子は、あんたに笑ってほしくて、以前の笑いあえる家族に戻ってほしくて、一生懸命厳ばってるんだろうがぁあああああ！」

一撃、一撃でいい。あいつに入れられるなら！

「邪魔よ・・・きえｎ・・・ぐっ」

すると、あの女が、頭を抱え始め何かを言い始めた。

「あ、アルフ。は、はやく、ここから、逃げ・・・な、さい」

「え？」

「あ、の少年に、伝え・・・て・・・。私は・・・・・も・・・いい。あの・・子・・・。フェ・・イトだけでも・・・助けてあ・・げて」

「な、何を「アァアアアアアアアアアアアアアア！！！！」な、なによアレ！？」

あたしは目を疑った。あの女の背中から黒い、黒色の影の化け物が姿を現した。

「行きなさい！　アルフ！」

そういってあの女は移動魔法を展開させてあたしをどこかに移動させた。

な、なんだったんだい、最後のは。あいつなら、葵なら何かわかるかもしれない！

そう思いつつあたしは意識が途切れた。

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

SIDEプレシア

「はぁ、はぁ」

いまだに頭の中で何かがうなっている。

―ナゼ、タスケタ

―モウ、ホロブシカナイノニ

―オマエモ、モウ、シヌ

―アノ、ムスメモ

―キボウナンテナイ

子供、女、男、老人さまざまな人間が恨みや憎しみを私に言い放ってくる。

「黙りなさい！」

あの子だけ、せめて、あの子だけでも！

「カハッ！？」

吐血。あの事故のせいで体を病がむしばみ、さらに研究を続けた結果がこれだ。さらに、この化け物のせいで浸食速度が上がっている。

でも、ここで意識を手放せば、あの子・・・が・・・

そう言って目の前が真っ暗になった。

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

ＳＩＤＥフェイト

「フェイト、起きなさい・・・・フェイト」

「はい、母さん」

どれぐらい時間がたったんだろう。母さんが呼ぶ声が聞こえ、起きる。そこには私が母さんのために集めたジュエルシードと母さんがいた。

「あなたが手に入れてきたジュエルシード９つ。でも、これじゃまだ足りないの。最低でもあと５つ、出来ればそれ以上欲しいの。急いで手に入れてきて母さんのために」

「はい」

そういって私は起きて、すぐにでも母さんのためにジュエルシードを集めようとした。でも、母さんから予想外の言葉が来た。

「それより、あなたのそばにいた少年のことを聞かせて。フェイト」

「え？」

葵のこと？　でも、なんで？

「あなたが以前、あなたを助けたのを思い出してね。お礼がしたいの。それにその子はとてもいい子なんでしょ？」

「はい。葵はとても優しくて、強い男の子です。でも、彼は今管理局に」

そう、葵は今管理局にいる。管理局がそれを見逃すわけがない。私が言ったら葵に迷惑がかかるし、下手をすれば母さんが捕まってしまう。

「大丈夫よフェイト。それに彼はかなりの魔力を保持しているみたいね。きっと管理局から無理難題を押し付けられているわ。そのまま放置しておくと彼が死んじゃうかも。それを助けてあげるの。あなたが」

あ、葵が死んじゃう！？　そんなの嫌だ！　絶対に助けないと！

「わ、分かりました。葵を、葵を説得してみせます」

葵。絶対にあなたを助けてあげるから。

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

「さて、リニスと久々の再会だな。後いろいろ相談しないと」

あの後、リンディ提督から相手方が動かないからと新しい情報が

入るまでゆっくりしていていいと言われた。その後帰宅許可をもらい一度家に戻ることにした。

《でも、なのはちゃん、家族に会えるんだ。嬉しいだろうな》

「そうだな。久しぶりの再会だしな」

《はい、家族というのはいいものです》

帰宅時にリンディ提督が高町家に説明するという提案があった。まぁ、あの高町家の全員を納得させるのは私でも疲れる。特にシスコンと士朗さん。

帰宅後、リニスと今まであったことを話し、今後アースラと協力するのでリニスにも協力してほしいとお願いをしてリニス自身も自分の身内のことなので協力することになった。

翌日、私は普通に学校に行くと、

「おはよー」

「あ！　葵君！」

「あんた、ここ数日何してたのよ」

「んー。秘密。というか叔父の用事を手伝っていただけだ」

「おじさんって、お世話になってる？」

「あぁ」

「へぇ。何やってるの？」

・・・そこまで考えていなかった。

「まぁ、人には言えないこと？」

「なんで疑問形！？　というかそんなやばいことしてるのあんたの叔父！？」

「すずかちゃん！　アリサちゃん！　久しぶり！」

なのは。ナイスタイミング！

「あんたも何やってたのよ！」

「え？　えっと・・・その・・秘密」

「はぁ～、あんたも？」

「ふふふふっ」

この三人の光景を見るのも久しぶりだな。やはり三人は大切な友人同士なのだろう。誰かが欠けてもいけない。かけがえのない者たちなんだ。

昼休み。久しぶりの四人での昼食にアリサが、

「ねぇ、今日うちに遊びに来ない？」

と、アリサの家へご招待されました。

「〈葵君、どうすればいいの？〉」

「〈別にかまわんだろう。いざとなれば私だけでも行けるし、あちらにはクロノもいる。問題はないだろうしな。それになのは自身も久しぶりに遊びたいんじゃないのか？〉」

「〈えへへへ。分かっちゃった？　じゃあお言葉に甘えて〉うん、行く！」

「よかった。すずか、あんたももちろん来るでしょ？」

「うん。もちろん」

「そういえば、葵。あんたまだ家に来たこと無かったわよね？」

「そう言えばそうだな」

「じゃあ決定ね」

「なにが？」

「来ること」

「どこに？」

「うちに」

「・・・初めから主語つけようなアリサ。今ので四行無駄にしたぞ

？」

「？　何のこと？　それより来るでしょ」

「あぁ。お邪魔しよう。それよりデザートというほどのものではないが。久しぶりに作ったこれなどどうだ？」

そういって取り出したのは動物の形をしたクッキーだ。

「「「いただきます！」」」

さすが女の子。甘いもの好きだ。

食べた瞬間。

「おいし～！（葵君の料理もおいしかったし、甘いものもおしいの！）」

「うっ、まあまあね（おいしい。そこらへんのものよりもおいしい！）」

「おいしぃ～（そう言えばお家に呼んだ時のケーキ、葵君が作ったんだっけ？）」

その後も昼食も終わりお茶を飲んでいると、アリサが。

「あ、そう言えば昨日の夜に家がしてる犬を拾ったの」

「犬？」

「うん。すごい大型で、なんか毛並みがオレンジ色で、おでこに、こう、赤い宝石がついてるの」

その話を聞いてアルフを思い出した。

「〈葵君。それって・・・〉」

「〈間違いないな。アルフだ〉アリサ。その犬の写真とかないのか？」

「写真？　あるわよ」

そういって携帯の写真を見せてくれた。

「わぁ～。本当にオレンジ色なんだ」

「〈間違いない。アルフだ〉」

「〈うん〉」

「どうしたの？」

「いや、どこかで見たことのある犬だと思ってな。どこだったかな？」

「心当たりあるの！？」

「あぁ。アリサの家に行くまでには思い出しておく」

そして放課後、アリサの家に着き早速アルフがいる檻の前についた。

「〈あ、葵・・・〉」

「〈休んでいていい。無理をするな〉」

「どう？　知っている犬だった？」

「あぁ。知り合いの犬だ。間違いない。休み時間にそいつとも連絡を取った。叔父の家を知っているのでこちらで引き渡したいが良いか？」

「えぇ。良いわよ」

「ありがとう。それと、もう少しこの子を安心させたいから檻から出してもらっていいか？　あと三人には悪いが下がってもらえないか？」

「え？でも・・・」

「アリサちゃん。行こ」

「すずかちゃんの言うとおりだよ。葵君。すぐに来てね」

「あぁ分かっている」

檻からアルフを出した後三人が行ったのを確認して。

「リニス。出てきてくれ」

茂みから一匹の猫が出てきて、アルフの前に座る。

「〈アルフ!?　大丈夫ですか!?〉」

「〈り、リニスかい?　あぁ、このぐらい・・・ぐっ〉」

「〈無茶をするな。今、治癒魔法をかける〉」

そういって詠唱を始めるとアルフの下に魔法陣が展開され傷口が収まっていく。

「〈すごい・・・痛みどころか魔力も回復してる・・・〉」

「〈それより何があったんだ?〉」

「〈葵、フェイトを、フェイトを助けてやってくれ!　お願いだ!〉」

アルフは泣きながらも、しっかりと自分の目の前で起きたことを放した。

フェイトがプレシアからの虐待を受けていたこと。そして我慢の限界が来てプレシアを殴ろうとしたら彼女の後ろから黒い魔物が出てきたこと。

「〈そうか。つらかったろ。もういい。我慢しなくていいんだ。泣いてもいいんだ。アルフはよく頑張った〉」

そういって子供をあやすように優しくアルフを抱きしめてやる。

「〈う、うわあああぁあああぁあああああああああ！〉」

ダムが決壊したかのようにある府は泣き始めた。

間違いない。奴だ。あいつが！　また誰かの幸せを踏みにじったんだ！　覚悟しておけ、貴様だけは絶対生きていてはいけないんだ！

心に怒りの焔がついた瞬間だった。

第二三話（前書き）

今更だけど一日一話・・・きつい！！

まぁ、好きでやってるから何とも言えないこのモヤモヤ・・・・・

第二三話

ＳＩＤＥすずか

「葵君」

わたしは葵君を探していると、たまたま一人になっていたのを見つけた。

「すずかか。どうした？」

「えっとね。お姉ちゃんからきいたんでしょ？　わたしの本性」

「・・・・そうか、忍さんは君に言っていなかったのか」

そういって彼は指を鳴らす。すると、結界っていうのかな？　あたり一面の景色が一気に変わった。

「さて、今張ったのは結界というものだ。今ここには私と君しかいないし誰も入ってこれない」

彼はわたしを見つめる。でも、何か違う。

「怖くないの？」

「なにが？」

「わたしは夜の一族。吸血鬼なんだよ！？」

「あぁ聞いた。忍さんからね」

「やっぱり。でもお姉ちゃんはなんで葵君にそのことを・・・・」

「私が人外だと言うことに気付いて話しかけてきたらしい」

「じんがい？」

「人以外の生き物ということだ」

それって、わたしみたいな存在ということだよね。でも、なんで彼が？

「私は人であって人で無いんだ」

彼は微笑むがいつものように明るい笑顔じゃない。どこか悲しそうだった。

「私の半分は人。半分精霊の血が入っているんだ」

「精霊？　あの御伽噺の？」

「あぁ。信じられないか？」

「ううん。でもまだそれなら「吸血鬼よりまし。か？」うん」

彼は、そっと目を伏せて、次の一言にわたしは驚いた。

「それが人体実験で生まれた存在でもか？」

「え・・・・」

「私は人と人の間に生まれたれっきとした人だった。でも、大人の勝手な都合の実験で精霊と融合させられた半精なんだ」

え、それって・・・

「実験って・・・・」

「そのままの意味だ。すずか。これを知っても私が人だと思うか？化け物のように見えるか？」

「そんなこと無い！　葵君は葵君だよ！　たとえそれがどんなものであっても、それに違いなんて無いよ！」

すると、彼は少し驚いたように目を見開くが、すぐに笑い出した。

「え？　あ、葵君、い、いくらなんでも失礼だよ！？」

「いや、なに。すずか。私は君とおんなじことを君に言おう。私もすずかはすずかだと思う。たとえそれがどんなものであってもな。私が忍から君たちの素性を知って、君が吸血鬼だと知って態度を変えたか？」

「ううん」

「それが答えだ。君は君だ。何者でもない」

彼のその一言で全てが変わった。あぁ、こうもわたしが吸血鬼だと知ってもいつも通りに接してくれる人がいるんだ。理解してくれる人がいるんだ。そう思うと心が落ち着いた。

「あ、あれ？　なんで・・・」

なぜか目から涙が出てきた。すると、彼はそっと私を抱いてくれた。

「なにがあったかは知らん。でも、泣きたいときは泣くといい。幸い結界も維持されているしな」

「う、うわぁぁあああああああ」

思いっきり泣いた。でもこれは悲しい涙じゃない。嬉しい涙だ。

それから数分後、葵君が抱きしめているということと、葵君の前で泣いたということで嬉しさと恥ずかしさがいっぱいで顔が真っ赤になった。

でも、ありがとう。それだけは伝えた。

（葵君。わたし、月村すずかはあなたが大好きです）

そう、心の中にそっとつぶやいた。

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

すずかのことがあり、その後アリサとなのはにこってりと絞られ、ゲームをしたり、とまぁ色々あったが日が暮れたのを合図に今回のお遊び会はお開きとなった。

あの後なのはとアリサ、すずかと別れアルフとリニスを連れ、公園に来た。

「リンディ提督、ユーノ。聞こえるか？」

「えぇ、聞こえています」

「アルフの情報を踏まえ今回の黒幕が分かりました」

「え！？」

「なんだって！？」

二人の驚きはごもっともだ。なにせ、プレシアが犯人ではないのだから。

私は公園一帯に不可視と人よけの結界を張り、そこにリンディ提督とクロノを招き入れた。

「本来ならフェイトやなのはがいるのがベスト何だが贅沢は言っていられないか」

「それより黒幕がプレシアじゃないってどういうことなんだ！？」

「そうだな。今回の黒幕の説明をする前にこのことを知っておいてほしい。じゃないとわけがわからなくなる」

「？　わかったわ」

リンディ提督が納得したのを合図に

「まず一つ言っておく。私は君達の言うところの時限漂流者という者らしい」

「「「え!?」」」

リニスは知っていたが、やはり知らない人間にはきついか。

「それでは、神無月君は別の世界の?」

「いや、私は確率の世界の住人だ」

「確率・・・じゃあ！　君は平行世界の住人ということか!?」

「あぁ」

「でもどこの・・・・」

「ここ地球のね。そして根本の違いは魔法が一般化されているかどうかだ」

そういって自分がいた世界のことを話した。元いた世界では世界に魔法使いが全人口の９８％もいて魔法も違えば全てが管理局のとは違うことを説明した。

「なるほどね。あ！　これは録音していないから安心して」

「そうですか。で、アルフ。この写真のうち君が見たという化け物はどれだ？」

手に出したモニターに四種類の化け物の姿を出した。

一つはレベル１と言われるこの世界に来て士朗さんの病室で士朗さんに取りついてた物。

レベル２の大きさは成人男性ぐらいだが、顔はイヌ科の動物を思わせる顔で瞳は赤く染まり、手、足も人とは程遠い。手は爪が鎌のように発達し、足は犬の足をさらに大きくしたようなものだ。

もう一つの大きさはレベル２と同じぐらい。そして、頭は動物から人に近いものにはなっているが角が二本、さらに目が４つある。まるで悪魔を連想させる化け物。レベル３と言われるモノ。

そして最後は、

「これは明らかに人じゃないか！？」

そう、レベル４と呼ばれるモノ。これは完全に人だ。違いと言えば肌が明らかに死人だろと言わんばかりに白く、目が人間でいう白い部分が黒く、瞳の部分が赤いということぐらいだ。

「これだ、この獣のやつ！」

そういって指を指したレベル２か。

「葵、これは一体・・・」

「【不の者】と言われる者だ。私の世界の狂王や狂乱者と言われた科学者、零始（れいし）が生み出した兵器だ」

「兵器？　ただ壊せばいいじゃないのか？」

あぁ、ただの兵器ならアルフの言うとおりだ。

「アルフ、これはただの兵器じゃない。これは人間の感情を餌にして成長し続ける兵器なんだ」

「感情？」

「あぁ、特に人間にとっての負の感情。怒りや悲しみ、憎しみ、ねたみ、怨み。そういった人間がいる以上絶対に終えない負の化け物なんだ」

その説明にこの場にいる全員が顔を青くなっていた。

「さらに厄介なことにこいつらは進化をする。レベル1から2に変化するのにはどれだけ人を不幸に陥れたか、レベル2から3になるためにはどれだけ多くの人間を殺すか、そしてレベル3から4になるためにはどれだけ人を喰らったかだ」

「喰らうって・・・・まさか・・・」

「文字どおりの意味だ。食す。我々人が野菜、肉を食べるようにこいつらは人間のことを餌としか見ていない」

「オェエエ・・・・」

クロノが我慢できずについに吐いた。吐き終えると、クロノはこちらを見て、

「き、君はこれらと戦ってきたのか、その元いた世界で」

「あぁ。もともと、この零始によって私は強化されたのだからな」

「・・・どういうことだ？」

「人体実験を行われた。精霊と人間の融合実験。魔法の威力を図るために死刑囚、子供、大人、老人、男、女関係なく殺したりさせられた。そして、最後に自分自身の本当の両親も・・・大切ない妹もな」

「「「「ッ！？」」」」

ＳＩＤＥクロノ

「人体実験を行われた。精霊と人間の融合実験。魔法の威力を図るために死刑囚、子供、大人、老人、男、女関係なく殺したりさせられた。そして、最後に自分自身の本当の両親もな」

その言葉を聞いて正直驚きよりも、その零始の残虐非道な行いに怒りを覚えた。

（実験のために人を殺させる？　しかも、それで、この葵の親をだと！？）

「では、あなたが髪の色が変わるのも」

「あぁ。実験の影響だ」

「君達の国は何をしていたんだ！　違法どころじゃない！　道徳的に、倫理的にもそして人間的にも違反してる！」

「クロノ覚えているか。私がなぜ組織は信用しない。だが、君達は信用しようといったのは」

「あ、あぁ」

何を言っているんだ彼は？

「この研究のバックには日本政府、魔法省、環境省、文部科学省、国際ウィザード連合がついているんだ。無論警察や日本軍、今こちらではまだ自衛隊かな。それがついているんだ。頼れると思うか？」

だが、彼の言葉は終わらなかった。

「その後、あっちの世界では選ばれた１２人の子供を使って最強の人間兵器を作る計画が立った。通称？ｆａｍｉｌｙｓ計画。その選ばれた１２人のには日本の旧暦が性として与えられた」

「なんだいそれは？」

アルフの疑問はもっともだ。達体１２人で何ができるんだ？

「神無月。これは今の暦で十月を表す。つまり私は十番目に選ばれ

た子供だと言うことだ。兵器になるためにね」

もう、言葉も出ない。実験で得られた魔力。それも葵並の人間があと11人もいる。だが、それよりもなんで、そんなことを！

「そっからはもう地獄だった。投薬、人殺し、魔力注入。そして、神姫と出会った」

「え？」

「この子たちはその実験室で出会ったんだ。だが、それで終われればよかった。両親を殺した後私の魔力が暴走。そして、研究室は消失。その後は通常の生活を送たというわけだ」

それだけじゃない。葵はまだ何か隠している。でも、それを聞いてはいけないと思ってしまう。そうでもしないと、今の自分を保てなさそうみたいだ。

「すまないな。こんな変な話をして」

「いえ」

母さんも顔色が悪い。それだけじゃない。どこか悔しそうだ。

僕だってそうだ。世界が違うが、恐らくこの話を聞いて管理局も似たようなことをやっていると思ってしまう。彼が組織を恨んだり、信用できないと言うのがよく分かった。

それよりも、彼を友として迎えたいと、心の支えになってやりたいと思った。確かに僕は彼より弱い。でも弱者は弱者なりに葵を支えてみせる。

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

ＳＩＤＥリンディ

「さて、話はずれたな。アルフ。もう一度確認する。君が見たのはレベル２でいいんだな」

「あ、あぁ」

彼は少し考え、

「なら対応できるな」

「神無月君。レベル３と４だとまずいの？」

「えぇ。まだ、レベル１と２なら。３と４になると倒せなくはないんですが、意思を持つようなるため面倒くさいんです」

「意思？」

「はい、レベル１と２はただ己が欲のための身に行動します。簡単に言えばゴーレムみたいなものです。ですがレベル３と４は自らの意思を持ち、行動します。そのため人に近くなります。ですが、や

はり己が欲には逆らえません。ですから、作戦を立てたり計画性を持って厄介になります」

「なんとも、本当に厄介ね。それで、プレシア女史からそれを取り外せる作戦はあるの？」

「無論。そのため協力をお願いします」

「分かったわ」

もう、彼に辛い思いをさせたくはない。偽善と思われるかもしれない。でもそれでもいい。

「では、私はこれで」

「まって」

「なんでしょう」

「なんであなたは戦うの？」

でも、聞かずにはいられなった。でも、彼は満面の笑みで、

「大切なものを護るため。ですよ。エクスとルミル。なのはやフェイト。アルフやリニス、無論リンディ提督やクロノ、ユーノ、エイミィ、今ではアースラの皆さんもね」

そういって彼はその場を去っていった。

参ったわね。あんな子供に護られる大人なんて。でも、嬉しいわ

ね。

SIDE Out

第二三話（後書き）

過去話を少し加えてみました。
感想やご意見お待ちしています！

第二四話

第二四話

リンディ提督たちと別れ、一旦家に戻り食事と睡眠をとったのち再び公園を訪れた、

「この魔力反応。フェイトか？」

「さすがだね。葵」

「フェイト！　お願いだ！　もうやめよう！　葵が、葵が全てにけりをつけてくれる。だから！」

アルフが必死にフェイトを説得する。これでこちら側についてくれれば楽なんだが。

「アルフ。ごめんね。私は、あの人の娘だから」

悲しげな表情を浮かべながらアルフの願いをけったか。それだけの思いを持って母を愛するか。

「葵。いっしょに、私と一緒に来て」

「・・・何を言っている？」

フェイトが言った言葉に私は驚愕した。

「母さんがいってた！　葵は管理局にこき使われているんだって！

葵をこのままほおっておくと、葵が死んじゃうんだって！　私は、私は葵がいないなんて嫌！」

「・・・・（人の一番弱い部分をつくか。どこまで卑劣で下衆なんだ）」

「だから葵。今度はわたしが助ける番。いっしょに来てくれれば私が護ってあげるから、だからお願い！」

このまま乗り込めば作戦などを踏み倒して【不の者】を叩ける。だが、どうする・・・・

「ダメだよ！」

すると、後ろからなのはとユーノが現れた。

「・・・なのは」

「葵君。ここはわたしが！」

決意に満ちた目。吹っ切れたような、覚悟を決めたような。いい目をしている。

「分かった」

そういって私は一歩下がった。

「・・・なのは、どういうつもり？　私は葵を助けるんだ」

一瞬フェイトは悲しい表情を見せた。だがフェイトもフェイトで

私を助けるという【不の者】によってふきこまれた情報を信用しているんだろう。だが、それでも決意をした眼だ。

「フェイトちゃん。少しお話しない？」

「話す必要なんてない。私は、葵を助けて、母さんの笑顔を取り戻すんだ。邪魔をしないで」

そう言ってフェイトはバルディッシュを構えた。

「そんなのずるいよ！　フェイトちゃんは葵君を連れて行こうとしてるんでしょ！　わたしだって葵君とずっと一緒にいたいもん！　そんなの許せないよ！」

あれ？　論点だんだんずれてません？

「きっかけはジュエルシード。だから賭けよう。お互いが持っているジュエルシード全部を」

全部のジュエルシードをかけるか。それだけ互いにｋ「そして葵君を！」・・・・はい？

「待てなのは。今私の耳が確かなら私をｋ「やっぱり戦うしかないんだね。いいよ。全部かけよう。お互いのジュエルシードと葵を！」・・・もういいです。好きにしてくれ」

私がｏｒｚとなっているのをよそに彼女達は互いのデヴァイスを構えて互いの出方を探らあっていた。

「あんたも大変だね。でもフェイトを不幸にすんじゃないよ」

犬型で私の肩にポンッと前足をのせてきたアルフ。その気持ちだけでも十分ありがたい。

落ち込んでいると、二人は空へと飛びあがったようだ。

「ありがとうアルフ。もう大丈夫だ。それと無論だ、二人とも守り通すさ」

「そうかい」

そう言って私とアルフ、ユーノは空を見上げる。

「いいの？　なのはに任せて」

「いいさ。あの目を見ればな」

「でもいいのかい？　フェイトは強いよ？」

「以前のなのはなら負けていただろう。だが、彼女には魔法の才能がある。あとはどれだけ経験を積むかが問題だった」

「そうか。だから君はなのはにつきっきりで訓練してたんだ！」

「鍛えるのはしんどかった。基礎体力から全てを底上げしたからな」

なのはは運動が下手なんてものじゃない。運動音痴だ。だから基礎体力からの底上げが必須だったため短時間の底上げは無理だった。だから、アースラの訓練施設を使いその無理を無茶で押し通すしかなかったんだ。

「じゃあ今は？」

「正直分からない。これが答えだ」

「どっちが勝ってもおかしくない。ってことだね」

「あぁ」

なのはが勝てばプレシアが何らかの形で介入してくるのは見えている。たとえフェイトが勝ってもフェイトを追跡するか、私が座標を教えればすべて済む。どっちにしろ決戦は近い。

空を見ると、黄色と桃色がぶつかり合っていた。

決戦前の序章曲を奏でるように。

ＳＩＤＥフェイト

「速い！？」

最初の方こそ互角だった。いや、むしろこっちの方が有利だったのに今では形勢が逆転されていた。

それに速度の方も私について来れるぐらい速くなってる。なんで！？

「ディバイン・シュート！」

「くっ」

それに接近戦にも慣れている。これほどの魔導師なんて・・・いた。

そう、身近にいた。なのはと私の近くにいる最高にして最強の魔導師が。

（葵だ。葵に教えてもらったんだ）

教えると言うことはその人は少なくても教える人間よりレベルが上じゃないといけない。それも一段階ぐらいじゃない、二、三と最低でもそれぐらい。そんな人、なのはの魔力を考えると少ない。でも、葵ならやってのける。

（ずるい。私だって教えてもらったこと無いのに！）

よく考えるとなのはは、いつも葵と一緒にいる。

（ずるい）

それだけじゃない。学校というものも一緒だ。

（ずるいずるいずるい）

そうだ。なのはのそばには葵がいる。いつでも、すぐに守ってもらえる。

「・・・ずるい」

「え？」

「ずるいよ、なのは！」

そうだ、なのははずるい！

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

ＳＩＤＥなのは

「・・・い」

「え？」

フェイトちゃんが何か言ったけど、なんて言ったんだろう。

「ずるいよ、なのは！」

「な、何がずるいの！？」

フェイトちゃん、なにいってるの！？

「いつもいつもいっつも、葵がなのはのそばにいる！　いつも葵が護ってくれる！　それに今なのはがここまで強くなったのだって葵のおかげなんでしょ！？」

「そ、それは・・・」

「私だって葵のそばにいたい。葵に護ってもらいたい！　だから葵を連れて行くんだ！　じゃまをしないで！！」

「・・・・ムッ」

フェイトちゃん。それは自分勝手っていうんだよ？

「・・・・フェイトちゃんだって。フェイトちゃんだってずるいよ！」

「え？」

「フェイトちゃんは葵君に怪我を治してもらったり、ジュエルシードが暴走したときだって助けてもらったり、頭なでてもらったり、わたしだってしてもらったことないことといっぱいしてもらってるの！」

「そ、それは・・・」

「わたしから見たらフェイトちゃんの方がずるいの！」

そういってわたしは砲撃を放つ。

そしてまた、戦闘を開始しする。それは最初の時より白熱してたと思うの。

すると、両手が金色のバインドで拘束された。

「え！？」

SIDE Out

「おや？」

こちらから見ると、なのはが金色の何かによって両腕か拘束されて自由が利かなくなっている。

「あれは！？」

「知っているのか、アルフ？」

「ライトニングバインド。相手を拘束する魔法だ。つまりその後に来るのは・・・」

「フェイトの一撃必殺を確実に当てるための布石か。でも手を出しちゃだめだ」

「でも、あれじゃあなのはがやられちまうよ！」

「それでもだ。あれはなのはとフェイトの真剣勝負。神聖な一騎打ちだ。それを邪魔することは許されない」

ユーノの方を見ると、ユーノも悔しそうに見ている。だが、この勝負がどういうものかを知っているから手を出さない。

「僕だって・・・本当はなのはに手を貸したい。でも、それじゃあ意味がないんだ。今回はなのはとフェイトの真剣勝負なんだ」

「あぁ。それに言ったろ。なのはも成長しているんだ」

おそらくここで手を出そうとしたらなのははそれをいらないと言うだろう。まだ負けたわけじゃない。なのはの眼を見ればそれがわかる。

「でも、あれはまずいんだよ！」

「アルカス、クルタス、エイギナス」

フェイトの詠唱が始まると同時に今までとは比べ物にならないほどの大きさの魔法陣が展開される。

「疾風なりし天神、今導きの元へ撃ちなかれ」

すると、いくつもの球体状のプラズマが現れた。その数はす十とも数百とも数えられる。

「バルエル、ザルエル、ブラウゼル」

すると、さらにその魔力が強くなっていく。

「おいおい、あれってまさか・・・・」

「フェイトの最強魔法だよ」

あれが、フェイトの・・・

「フォトンランサーファランクスシフト」

そしてフェイトが命令を下した。

「撃ち砕け、ファイア！！！！」

すると、いくつもの雷の矢がなのはに向け放たれた。

なのはは抵抗できずにそれを喰らった。

「なのは！！」

ユーノがそう叫ぶ。だが、フェイトの攻撃はまだ続く。いくつもの小規模の爆縁が広がり、さらに追い打ちをかけるようにまたいくつもの雷の矢が飛んでくる。

そして、フェイトの攻撃がやむ。

フェイトもフェイトでかなり魔力を消費したらしく肩で息をしていた。

「ん？　フフフッ」

「なにがおかしいんだ！？」

「いや、フェイトの攻撃もすごかったが、それをまともに受けて、耐えきったなのはもすごいと思ってね」

「「え！？」」

私が爆煙の上がっているところを見ると、アルフとユーノもそれ

につられてみる。

爆煙は次第に晴れて行き、そこからは、

「いたぁ～～～い！！」

多少ボロボロになっているなのはだが、みたところ、それほどダメージを喰らっていないようにも見えた。

「バインドって撃ち終わると解けちゃうんだね。今度はこっちの」

《ｄｉｖｉｎ》

レイジングハートが砲撃のスタンバイに入り、

「番だよ！！」

《ｂａｓｔａｒｄ》

放たれる桃色の砲撃。

フェイトも余ったランサーを集め魔力弾としてなのはの砲撃に対抗するが、一瞬にしてなのはの砲撃に飲み込まれる。

急遽フェイトもバリアを張るがやはり、先ほどの攻撃で魔力を使い果たしたのか、押されている。

「くぅううう・・・（なのはも耐えきったんだ。私だって耐えて見せる！）」

ディバインバスターを耐えきったフェイトだったが、その直後に、桃色のバインドによって両足両腕を拘束され固定された。

「バインド！？　ッ！！」

「受けてみて、ディバインバスターのバリエーション！」

なんとか抜け出そうと試みようとするフェイトだが、やはり、先ほどの魔力の消耗が激しいのか、抜け出すことができない。

「これがわたしの全力全開！」

そして今まで見たことのない大きさの魔法陣とも力の収束が始まった。

「あ、あれって・・・・」

かという私も驚いている。あれは、確実に今のフェイトにはきつい。

それでもお構いなしにまだ増大し続け、攻撃準備を整える。そして、その時が来た。

「スターライト・ブレイカァアアアアアアアアア！！！！！！！」

まばゆい桃色の光がフェイトめがけ一気に駆け抜けた。

「明らかにオーバーキルだろあれ・・・・」

そのオーバーキルの魔法はフェイトを飲み込み、さらにフェイトを突き抜け海に直撃。

《ジャッジメントより・・・いえ、止めよう》

《ま、マスター！　なのはちゃんのあの技、ギュリノース・ブレイカーの３５％相当と一緒です！？》

「・・・・あの子は将来破壊神でも目指すのか！？」

「そ、そんなにすごいのかい！？」

「３５％もあれば一国の軍隊を壊滅状態に近いことができる・・・・」

「「・・・・・・」」

まぁ、そうなるよね。私も驚きを隠せない。それを放った子が若干９歳だ。私がこの意気にたどり着いたのは１４だぞ。

そして、砲撃が収まり、フェイトはそのまま海へと落下。だが、海に入る前になのはが救出した。

「・・・あの子が２０になる時、私を追いぬく確率が出てきたな」

《はい、マスター。それと》

《なのはちゃんを怒らせないようにしましょう》

「あぁ、怒らせたらあれが自分に来ると思ったら私でも怖いぞ・・・

」

あれって非殺傷設定だったよな。あれ解除すると・・・・止めや
め。今背中に変な汗が出てきた。

ＳＩＤＥなのは

ギリギリのところで、フェイトやんの救出に成功。

「フェイトちゃん！　フェイトちゃん！」

「ん・・・・」

すると、フェイトちゃんがうっすらとだけど、目を開けた。

「・・・そっか、私、負けちゃったんだ・・・」

でも、フェイトちゃんの顔はどこか満足そうだった。

「フェイトちゃん。葵君はね、わたしのこともそうだけど、フェイ
トちゃんのことも心配していたんだよ？」

「え？」

「ジュエルシードを六つ封印した時あったよね？」

「うん」

「あの時管理局の人はフェイトちゃんが弱ったところを捕まえればいいって考えてたの」

「そうなんだ。でも、作戦だったら正しいと思うよ。私は敵だったもん」

でも、あの時わたしは命令を無視してでもフェイトちゃんのところへ行きたかった。でも、心のどこかで戸惑っていた。ううん。あの場所にただ行くのが怖かったのかもしれない。

「でもね、葵君は迷わず行ったんだよ。友達を、大切な人を護るのに理由なんかいるのか？　って言ってね」

その時の葵君はかっこよかったな～。

「葵が？」

「うん。そんな葵君の気持ちを分からないで自分勝手なことといったでしょ？　だから、その、頭に来ちゃって」

そう。葵君は自分と関係ある人なら自分のことなんてお構いなしでその人たちを護る。そんな人なんだよ。

「葵君にとってみれば、葵君は大切な人たちを護る。それだけの理由・・・でも、難しい理由で戦っているんだよ。それにわたしやフェイトちゃんなんて関係ない。葵君なら迷わず二人とも守るって言うんじゃないかな？」

「そうだね。葵なら絶対そう言うね」

すると、フェイトちゃんが、

「ねぇ、なのは。葵は許してくれるかな？」

「ん～。どうだろう。心配をかけさせたという点では起こると思うけど、それ以外は起こらないんじゃないかな？」

葵君は大切な人が傷つくところを見たがらない。だから、その点では起こるかもしれない。けど、それ以外は、怒らないと思うな。

そう思っていると、葵君はあの白い翼と黒い翼をはばたかせながら、ユーノ君、アルフさんがこちらに向かってくる。

「フェイト」

「・・・ごめんなさい！」

そういってフェイトちゃんは頭を下げた。

「はぁ。まあ分かっているならいいが、あまり心配かけさせるな。あと、無事でよかった」

そういって葵君はフェイトちゃんを抱きしめた・・・って

「えぇえええええええー！！！！！」

「あ、葵！？」

「よかった。もう本当に心配かけさせるな。無茶をするな。いいな？」

「うん。ホントにごめんなさい」

そういってフェイトちゃんは葵君の胸の中で泣き始めた。

ぶ～～～。こ、今回だけなの！　でも、うらやましいな。

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

フェイトがある程度落ち着き、アースラへ向かおうとしたその時、

―ズカアァアアアアアアン

あの雷がこちらめがけて落ちてくる。

「（エクスは間に合わない）精霊結界発動！」

精霊結界。精霊が使える結界の一種で、通称絶対防壁と呼ばれている。属性攻撃（火、水、雷などの自然系攻撃）であれば完全に防ぐことができる。ただ物理攻撃などにおいてかなり弱い。

それをなのは達を護れるぐらいの大きさにして、雷を防ぐ。

「デヴァイスなしで障壁を！？」

ユーノが驚くが、ユーノ。以前にわたしはこちらの人間ではないといったからそれで押し通せるか？

それよりも！

「・・・・やられたか」

「え？」

「あれはおそらくただの目くらましだろう。目的はジュエルシードの確保。目的は達せられたようだ」

「葵。なんで、母さんはこんなことを・・・・」

「分からない。ただ、君は君の母親を信じろ。以前も言ったと思うが、たとえ母親にひどいことを言われても自分の意思を強くもて。いいな」

「うん」

そういってフェイト達を連れアースラへと戻った。

第二四話（後書き）

最近思うこと。それは・・・

前書きと後書きに何と書けばいいんだろ？

第二五話

第二五話

私たちがアースラに向かっている間にどうやらエイミィが座標を割り出し、武装局員を転送したみたいだ。

「葵！　母さんは、母さんはどうなるの！？」

「落ちつけ。話を聞くだけだろう。今回のことをなぜ起こしたのか」

そうだ。なぜこのようなことを引き起こした？　あの部屋の奥に何やら生命反応、あれがおそらくアリシア・テスタロッサだろう。彼女に何か関係があるのか？

「そうですよ。フェイトちゃん」

するとエクスが人型に戻り、フェイトをなだめる。

「心配する必要はない。マスターがどうにかしてくれる」

そういってルミルも人がだになった。

「え・・・。この人たちは？」

「私の家族だ。エクスとルミルだ」

「フェイト！」

すると、リニスがこちらに向かって走って来た。

「無事でよかった」

「うん。ありがとう。リニス」

リニスはそのままフェイトを抱きしめた。

「どうやらリニスも来ていたようだな」

「はい。少しでもお役にたてればと思い、リンディ提督に頼んで」

「そうか」

すると、こちらに向かってくる人、クロノが来た、

「クロノ。現在の状況は？」

「あぁ。武装隊をプレシア・テスタロッサのいる場所に転送し、逮捕。うまくいけばの話だろうがな。とりあえずブリッジに行こう」

そういってなのはとフェイト達を連れ、ブリッジに向かった。

そしてブリッジのモニターでは武装した局員とプレシアが対峙していた。

「母親が目の前で捕まる処を見るなんて気分がいいものではないがな」

「母さん・・・」

「ん？」

おかしい。プレシアの眼はあんな目の色だったか？

「プレシア・テスタロッサ。時空管理法違反、及び管理局艦船への攻撃容疑であなたを逮捕します」

「武装を解除してこちらへ」

武装局員は素早くプレシアを囲むと、一人が隠し扉を発見し数人と共に中に入る。

すると、プレシアの表情が変わった。

「こ、これは・・・・」

その中には複数ものカプセルと、カプセルの中に入った一人の少女がいた。

それはまるで、

「・・・フェイトちゃん？」

なのはがそうつぶやいた。フェイトの方を見るとフェイトも驚きを隠せない様子だった。

「〈マスター〉」

「〈あぁ、あれが、アリシアだろうな〉」

すると、紫色の雷が庭園内で轟音を響かせたと思うと、次の瞬間には武装局員が倒れていた。

「私のアリシアに近づかないで！！！」

「いけない！　すぐに転送を！」

リンディ提督があわてて武装局員の撤退命令を下した。

「もう駄目ね。時間がないわ。たった九個のロストロギアではアルハザードにたどり着けないかもしれない。でも、もういいわ」

すると、プレシアはアリシアの入ったカプセルを愛おしい者をなでるようにゆっくりとなで、サーチャー越しにこちらを睨む。

「この子を亡くしてからの暗鬱な時間を・・・この子の身代りの人形に記憶を与えて娘扱いするのも・・・聞いていて？　貴方のことよ、フェイト」

「！？」

「え・・・」

フェイトとなのは驚いた。そりゃそうだろう。フェイトは自分のことを娘として扱われていなかったことに、なのははそれを、友人を物扱いされたことに。

「せっかくアリシアの記憶を上げたのに、そっくりなのは見た目だけ。役立たずでちっとも使い物にならない。私のお人形」

すると、エイミィが、

「プレシア・テスタロッサが引き起こした事故の話はしたよね。その時に彼女は自分自身の娘アリシア・テスタロッサを亡くしているの。それで、彼女が最後に行っていた研究。使い魔とは異なる、使い魔を上回る人工生命の生成。そして死者蘇生の秘術。そしてフェイトって名前はその開発コードの名前」

馬鹿げている。何を考えているこいつは。不の者】は！？

「死者蘇生？　そんなものなど無い。死んだものは二度と生き返らない。それに使者を生き返らせることは禁術だぞ！？」

つい声を荒げてしまう。だが、そうだ。死者は安らかに天に召され、そこで蘇りの時を待つ。死者蘇生はそれを無視した非道な術だ。

「そうね。でもそれも失敗。ちっともうまくいかなかった。作りモノの命は所詮作りモノ」

フェイトは、それでも母親を、プレシアを見ていた。

「でも、でも！　ほめてくれた！　さすが私の娘だって！　あの時の「黙りなさい！」え・・・・」

「バカなことを言わないで！　私の娘はアリシアだけ！」

「やめて・・・」

なのはが呟くが、当然その言葉はプレシアには届かない。

・・・・もう我慢の限界だ

「私にとっての娘はアリシアだけ！　フェイト、あなたはただ私がアリシアをよみがえらせるまでのお人形であり、わたしが必要とするモノを言われたとおりに集めるだけの駒。　でも、もうあなたはいらないわ。どこへなりと消えなさい！」

すると、フェイトの眼から光が消えた。

「やめてよ！・・・・！？」

なのはも気づいたか。プレシアの瞳から涙が流れる。

「フェイト。私の言った言葉を忘れたか？」

「・・・・え？」

「意思を強くもて。今からプレシアの心の声を聞かせてやる」

そういうと、フェイトの眼にわずかだが光が戻った。

「そろそろいいかな」

そういって私は一歩皆より前に出て、プレシアの眼を見る。

そして、足元に、ある魔法陣を展開する。これは、相手の心の中に住む本当の心を引き出す特殊な魔法陣。まぁ、モニター越しに通じるかは不安だが。

「我、汝に問う」

「ッ！？」

すると、プレシアが頭を抱え始めた。どうやら通じたみたいだ。

「汝の思う心の声は真実か」

「う、くっ・・・・・・」

「汝の心の声真実にあらず」

「あ、あぁ、あぁあ！」

プレシアは何かに抵抗するように頭を抱える。

「心を開き、汝の真の声をこの者に聞かせろ！」

「アァアアアアアアア！！？？！？！？！？」

すると、プレシアの瞳の色が、赤色から紫色に戻り、

「ふぇ、フェイト、逃げなさい。こ、こに、来ては、ダメ！？」

「え・・・」

フェイトも動揺するだろう。いきなりわけのわからないことを聞かせられたのだ。

すると、プレシアの背中にアルフが見たといっていたレベル２の魔

物が姿を現した。

―ナゼ、ジャマヲスル

―オマエハ、ダレダ？

「あ、葵、あれ、なに・・・・」

フェイトが震えながらそう聞いてきた。

「あれが黒幕だ。まさかあちらから姿を見せてくれるとは予想外だがな。まぁ、答えるか。私は神無月葵、君に分かりやすく言えば【黄泉路への案内人】と言えば分かるか？」

―アンナイニン

―ダイエイユウ（サツジンキ）・・・カ

―オレノ、ミライヲウバッタモノ

―ワタシノ、アスヲウバッタモノ

―ボクノ、スベテヲウバッタモノ

「ッ！？　そうか、あの時の生き残りか・・・・」

―オマエガ、レイシとタタカワナケレバ！

―オマエガ、セカイヲ、テキニマワサナケレバ！

―ワタシハ

―オレハ

―ボクハ

―アシタヲ、ツカメテイタ

―ミライヲ、ミテイタ

―ソレヲ、キサマハ、ウバッタ！！！

「・・・・貴様らは何をしようとしている！」

―アルハザードへ、ムカウ

―ソコデ、モウイチド、イキル

「・・・そのための犠牲だと言うか！？」

―ソウダ

「貴様らがしていることは、私がやったこととなにも変わらない！
他人の幸せを踏みにじり、自分達が幸せをつかみそれが真の幸福だと思うのか！？」

―コレイジョウ、ハナシテモ、ムダ

―イクマエニ、オマエ、コロス

そういってモニターが消えた。

「・・・・」

「葵。母さんの言葉は？」

「最後のが真実だ。フェイトが危険な目にあわせたくない。だから逃げろといった。今までの言葉は【不の者】、あいつらがいわせていたようなものだ。気にするなといっても無理があるかも知れんが、あれはプレシアの言葉ではないということだけは分かってやってくれ」

「・・・うん」

すると、エイミィの声が艦中に響いた。それは、

「庭園内に魔力反応を複数確認、いずれもＡクラス、数は・・・な、何これ！？百、百五十、どんどん増えていきます！！」

「ジェルシードの発動を確認！」

「小規模ながら次元震が発生！　し、しかし徐々にですが、規模が拡大中！」

「プレシアは、いえ、【不の者】は何をしようとしているの！？」

「もう一度人として蘇り、新たな人生を歩むつもりだろう」

「そのために、こんなことを！？」

「そうだ」

すると、リンディ提督が決断を下した。

「私も現場に出て次元震を抑えます。クロノは時の庭園へ突入しプレシア・テスタロッサの救出並びに【不の者】を倒してください！」

「了解」

「神無月君もクロノと一緒に出てもらえますか？　武装局員の壊滅の影響で人手が不足しているので」

「言われなくても」

「なのはさん、ユーノさん、リニスさんもお願いします！」

「「「はい（分かりました）」」」

すると、フェイトが、

「私も、行きます！」

「フェイト。あたしも行くよ！」

「いいのですか？」

「はい。母さんを、助けます！」

その目に揺らぎはなくまっすぐ前を向いていた。

「気持ちをくんでやれ。彼女の眼は本物だ」

「・・・そうね。では、フェイトさんとアルフさんもお願い」

「「はい！」」

さて参るとしよう。【不の者】を黄泉路へ案内するための戦いを。

第二六話

第二六話

転移が完了し、現在時の庭園内。

目の前にいるのは、地面を覆い尽くさんがあまりの多さの傀儡兵。

「なにあれ！？」

「傀儡兵。ただ目の前にいるモノだけを殺す機械兵にすぎない。まぁ、機械というのなら。エクス」

「は～い」

「行くぞ。光の道を指し示す者、白騎士」

「シンクロイン！」

そして、白騎士になり、ジャベリンを構える。

「よく見ておけ。とくになのはな。収束魔法の本質を見せてやろう」

そういって、砲を固定化した。

《一〇〇％はやめてくださいね。下手をすれば全員落ちちゃうんで》

「了解。５０でいい。収束開始と同時にライトニングアロー展開。

接近してくる屑を叩け」

《イエス。マスター》

そう言うと、わたしの周りにボワッボワッと雷を纏った光りの球体が数十の単位で出てくる。

それを知らずに、傀儡兵はこちらに向かってくるが、

「葵！？」

「あぁーフェイト、多分だ大丈夫だ。あいつは」

アルフがそう言うと、フェイトが、

「え？」

唖然とする。理由は近くにいた傀儡兵は葵が展開した球体が光りの矢となって頭、脚、腕、胴体に刺さり爆発した。

「・・・・ね？」

「うん。今ようやく分かった。葵を敵に回しちゃだめだって」

「「「「「うん」」」」」

どういう意味だ。フェイトがそう言うと、ユーノとクロノ、なのは、リニス、アルフが同時に首を縦に振った。

《マスター。チャージ終了！　発射どうぞ！》

「では行きますか」

砲口に白い魔法陣を展開させる。

「光りの道は何を示す」《人の歩むべき正しき道を》

白銀に輝く球体状の光が集まりだす。

「されどその道に外れるものも在り」《神はそれを見て嘆いた》

球体はさらに大きくなり、光はさらに輝きを増す。

「神はその者に罰を下す」《人はそれ恐れ慄(おのの)いた》

球体はある程度の大きさになると、収束は終わった。しかしそれは裁きの時だった。

「ギュリーノス・ブレイカー！」

―ズガァアアアアアアアアアアアン

その光の道はＳＬＢクラス、いや下手すれば以上の砲撃によって周りの傀儡兵を無と化した。

直撃した傀儡兵は無に、例え直撃しなくてもかすったものはその部分が熱によって溶け、それでも安全圏と思われるモノは爆風によって吹っ飛んだ。

まぁ、要するに・・・・

「やりすぎた。４０％以下でもお釣りでたな」

門まで壊してしまった。というか、

「あの門番みたいな傀儡兵はどこだ？」

「君が跡形もなく消したんだろ！！」

クロノがそう言ってきた。

『く、クロノ君！　みんな無事！？』

「え、エイミィ？　あぁ、無事だがどうした？」

『今さっき高エネルギー反応があって、そしたらさっきまで数百以上いた傀儡兵が数十以下になっちゃって！　もう何がどうなってんのって話で！？』

「あぁ、それはさっき葵がぶっ放した砲撃の性だ・・・・」

『あれ葵君の砲撃だったの！？』

「うん。葵君の出力５０％の・・・・」

『・・・・、が、がんばってね・・』

そういってエイミィからの通信が切れた。

「行くぞ」

私はそのまま置くへと進む。

すると、所々に黒い空間がいくつもあった。

「その穴。黒い空間がある場所は気をつけて」

クロノがそう警告してくるモノの、

「？　なんなんだこれ？」

その質問のユーノが答える。

「虚数空間。あらゆる魔法が一切発動しなくなる場所なんだ」

「そうなのか？　試しに無に帰する刃（ルーンヴォルヴァ）を撃ってみるか」

そういって私はディゴを展開し、無に帰する刃（ルーンヴォルヴァ）を撃つと、

―シュゥウウウウ・・・・・

「おいクロノ」

「なんだ！！」

「虚数空間収まったぞ？」

「「はぁっ！？」」

クロノだけでなくユーノまで驚いていた。

後ろにいたアルフとリニスは今起こったことが理解できず目が点になっていた。

「魔法資質が違うからか？　まぁいい。とりあえず先に行くか」

そういってみた目危険そうな場所の虚数空間は消しながら先に進んだ。

その時虚数空間というモノがどんなものかを知っている人たちは

「あり得ない」「なんなんですかあなたは！？」「葵らしいね」「もう、何も言うことがないよ」「・・・僕達の常識が通じない非常識やろうか君は！？」などと言われた。

まぁ、アルフ、リニス、フェイト、ユーノ、クロノの順に言われた。なのははというと、

「にゃ、にゃはは・・・」

と、笑ってごまかされた。

「？　どうしたお前」

私はある壁の一部分を見た。良く見るとフェイトによく似た人物だった。

「どうしたの？　葵君」

なのはがそう言ってくるので、試しに、

「なのは、あそこには何がある」

そう言って指差すと、

「なにもないよ？　壁ぐらいかな」

なのはには見えていない。つまりあれは世間一般で言う幽霊か。

「え！？　何か見えたの！？」

「いや、気のせいだろう。それより行くぞ。〈君は、君の身体があるポットのそばにいろ。そしたら助けられる〉」

すると、少女はコクリとうなずいて消えて行った。

（絶対に助けないと、すべてを）

すると、道が二手に分かれていた。

「なのはとフェイト達は駆動路を、葵は僕と一緒にプレシアの救出を」

「わかった」

「急ごう。時間がない」

そういって二手に分かれた。

まぁ、すぐ目の前に大きな扉がある。おそらくここが玉座の間だろう。

え？　今までどうやって来たか？　簡単だ。アルヴォとソードで切り裂いたり、四肢を撃ちおとしたりした。

「君を敵に回した彼らに少し憐みを覚えるよ・・・」

とりあえず、作戦を開始しよう。

「エクス。シンクロパージ。ルミル。シンクロイン」

《《イエス、マスター》》

黒騎士を纏い、目の前の扉を両翼刀で切り裂き中に入る。

「・・・来たようね」

目の前にはプレシア、そしてポットに入ったアリシアがいた。

「時空管理局執務官クロノ・ハラウオンだ！　プレシア・テスタロッサ、大人しく投降してください」

「さっきの振動で分かったろ。駆動路も、次元震もこちらが抑えた。後いつまでその者をしばりつけておくつもりだ？」

「私は、取り戻すの！　こんなはずじゃなかった。幸せな世界を！」

すると、クロノが一歩前に出た。

「世界はいつだってこんなはずじゃなかったことばっかりだ！　いつだって、誰だって、ずっと昔からそうだったんだ！」

そうだな。だから人は後悔しないように生きてきた。後悔しても未来がある。明日がある。それを私が、つぶしてしまった。

上を見ると、フェイトやなのはたちが降りてきた。どうやら駆動路は制圧したようだ。

「こんなはずじゃない世界で逃げるか、戦うかは個人の自由だ。だけど、自分勝手な悲しみに無関係な人を巻き込んでいい権利は誰にもありはしない！」

「葵・・・」

「伝えるんだろ。お前の思いを、全てを。解放してやれ。お前の母親を、あの【不の者】から」

「うん！」

―ごほっ、ごほっ！？

プレシアの方を見ると、せき込み、そして吐血した。

「母さん」

「・・・ふぇ、いと？」

「お願い！　母さんを！　私の大切な母さんを返して！」

「う、に、・・・げ・・・・・・・て」

「私にとってどんなに酷いことをされても、母さんは、わたしにとって大切な人なの！　だから返して！！」

「うぁあああああああああああああ！？！！！」

すると、黒い影がプレシアから分離する。

「（いまだ！）邪悪なる影よ！　聖なる矢を持って彼者から離れよ！　ホーリーアロー！！」

一筋の光の矢を【不の者】目がけ放つ。すると、【不の者】は完全にプレシアから離れ、プレシアと【不の者】は完全に分離した。まぁ簡単言うと神姫の武器なら人に寄生した【不の者】でも分離ができるという理論をそのまま利用した。それだけ。

「フェイト！　プレシアをこっちに！　クロノはあのカプセルを回収しろ！　なのはは二人の援護を」

「うん！」

「分かった」

「任せて！」

矢を喰らった【不の者】はゆっくりと立ち上がり、

―ナゼ、ジャマヲスル

―ワタシタチノ、ミライヲ

―カノウセイヲ

―カエセ！　ワタシタチノ、カノウセイヲ

「!?　逃げろフェイト、なのは！」

そういって三人がいる場所に向かって突進してくる。

「（!?　目的はこっちじゃないのか!?）エクス、ルミル。あまり使いたくはないがやむえない。Wシンクロ！」

《《Wシンクロ。起動を確認！》》

「我が体は大切な者を護るための盾、我が剣は我が大切な者に牙を剥いた者を討つために在り。故に我に敗走も敗北も許されない！蒼騎士!!」

あたり一面にまばゆい水色の光が輝いた。

第二七話

第二七話

ＳＩＤＥなのは

【不の者】さんがこちらに向かって突進してきたけど、次の瞬間目の前に葵君が来て、まばゆい光があたりを包みました。

そして、その光が晴れると、そこにいたのは、

「くっ！？　全員いるか？」

青色の騎士甲冑に青と金色がきれいな剣を持った一人の男性がいました。

「は、はい！　だいじょうぶです！」

「え、お前は誰だ！？」

クロノ君。助けてもらってそれは無いと思うよ？

―ヨミジヘノアンナイニン

―オマエカ

―イツモジャマバカリ

「悪いな。こいつらは私にとって大切な者たちなんだ。そうやすや

すと殺されてはたまらないんでね！」

そういって一気に剣を振り払うと、【不の者】さんが壁に激突した！？

あれ？　でもこの人・・・どこかで・・・

「も、もしかして、葵？」

フェイトちゃんがたずねると、その男性が、

「そうだが？」

「「えぇえええええええええ！？」」

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

蒼騎士を展開すると、元の年齢に戻っていた。久しぶりの感覚だな、我が体ながら。

「さて、お前らがここにいると危険だ。アースラに戻ってもらおうか」

「で、でも！？」

「アルフ、リニス、ユーノ！」

「「「は、はい！」」」

「こいつらを連れて行け。後、プレシア」

「な、なに？　時の庭園を壊すことになるが許せ。後で弁償もする」

「壊しても別にかまわないわよ」

「そうか。では遠慮なくいかせてもらおうか。エイミィ。転送を頼む」

『りょ、了解！』

そして、時の庭園には私と【不の者】だけとなった。

そういってこの姿の相棒【絶対的勝利を約束されし剣】を構えた。この剣は簡単に言うと全欧州教会が聖剣エクスカリバーを魔法によってさらに強化し現代によみがえらせた神剣らしい。青は空と海を表し、金色は太陽をらわす。この三つは古来より神の領域とたたえられ神聖とされ来たためこの三つの意味を持つ剣は最強という名にふさわしい。

さぁ、始めよう。この戦いを終わらせるために。明日をつかむ者たちのために。

ＳＩＤＥアースラ

なのは達がアースラに戻ると、リンディが、

「ねぇ、彼誰？」

と、モニターに映っている葵（二〇歳Ｖｅｒ．）と【不の者】が戦っている姿が映し出されていた。

「あ、あれは葵君です」

「えぇ！　あれ、葵君なの！？」

エイミィがかなり驚いた様子でこちらを見た。

「そうですけど。どうかしたんですか？」

「こ、今後のことも考えて【不の者】と彼の魔力値を測っていたんですが、【不の者】はＡ＋」

「まて、そんなにあるのか！？」

「クロノ君。驚くのはこの後だよ。それで、次に彼の方を測ったんですが・・・・」

「どうなったの？」

「計測器が壊れちゃいました」

「「「「「「・・・・・・・」」」」」」」

再びモニターを見ると、黒と水色の光がいまだにぶつかっていた。

『憐れみもある。同情もする。だが、自分たちの都合に無関係な人

間を巻き込むのはどうかと思うぞ。それで不幸に突き落としたお前らは昔私が行った殺戮行為と変わらん』

―ソレデモ

『それでも生きたい？　ふざけるな！　命は誰にだって一つだ！　その人生を悔いなく生きるためにみな後悔しないために必死に生きているんだ！　こんな台詞言えた義理ではないが貴様らが行った行為は自分勝手すぎる。振り返ってみろ！　お前らにもチャンスはあったはずだ！』

―ダマレ！！

そういって爪をふるい落とす。

その一言一言になぜか重みがあった。

―ガキィン

それを彼は受け止め、

『そのチャンスを生かさず、死んでいった者たちもいる。だが、それでも受け入れた者たちだっていた！』

―フォン！！

まるで全てを知っているように、

そして剣を振るい、【不の者】の右腕を斬る。

―アァアアアアアア！！

苦痛。その悲鳴はまさにそれを表していた。

『お前たちだって受け入れられたはずだ！　なぜ受け入れなかった！』

―イキタカッタ

―タダ、ミライヲミタカッタ・・・・

―シニタクナカッタ

『辛かったろ、苦しかったろ。戦いはでもいつでもそうだ。後悔と無念がある。それでもそれを乗り切り生き残ったものたちを恨んではいけない！』

そういって彼が剣を構えると、剣を金色の光がまとう。

『これで終焉にしよう。全ての戦いの。お前達を天に導くために！』

―あぁ、そうしよう

『示すは天への架け橋、全てに祝福を、全てに幸福を、全てに幸あらんことを。エクスルミオン！！！！』

そういうと、剣の金色の光が【不の者】に向かって伸びる。そして、【不の者】に当たると、

―ありがとう

そういう声が聞こえた。

「おわったの？」

なのはがそう言った。だが、

『残念ながらここからが本番だ』

そう言うと、彼の眼がより一層鋭くなった。

その前にいたのは【不の者】だった。だが、今までの人の声は聞こえてこない。代わりに、

『ＧＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡａａａａａａａａＡＡＡＡＡＡＡＡ！！！！！！！！！！』

この世の終焉のような咆哮が聞こえた。

『本当に不幸中の幸いか。さて、あの者たちの思いを、テスタロッサ家の運命を踏みにじった償いをしてもらおうか！』

そういって彼は、剣を振るう。

『これはフェイトの分！』

―ザシュッ

最初の一振りは、左肩に入り、

『これはプレシアの分！』

―グサッ

腹に入り、横腹を切り裂く。

『これはお前に喰われた、迷えるものたちの魂の分！』

―ズバッ

首と胴体を斬り離す。

だが、それでも、【不の者】はうごめいていていた。

『まだ生きるか。でもまぁ、プレシアから許可はもらっているから久々に行くか！』

そういと葵は飛翔を使い黒い翼、白い翼を展開し宙へと舞う。

『汝、愚かな存在であり最大の罪人』

怒りを込め、

『殺めし者は幾万にもなりこれからも続く』

憎しみをこめ、

『汝に価値はなく意味もない』

まるで、ゴミを見るように

『故、我汝を許すこと無し』

生きる価値を否定する。

『滅び去れ』

そして裁きの一言。

『オールブレイク・ファンタムゥゥゥ――――――!!!』

すると、エクスルミオンとは違い青黒いまるで、魔の焔のような色をした砲撃が【不の者】と、時の庭園を破壊した。

「あのバカ！　あんなことをすれば余波がこちらに来る！」

クロノがそう言うと、リンディが全員にショックに備えると同時に防御展開を命ずるが、それが一向にこない。すると、

『その辺の準備はとうの昔にしてある』

そういってその辺の準備にぬかりの無い葵であった。

「か、艦長大変です！」

「どうしたのエイミィ？」

「時の庭園並びに虚数空間消滅!!　さらに、次元震停止しています！」

「もうなにも驚かないと決めていたけど、これはいくらなんでも・・・」

そう言って驚いていたリンディに、プレシアが、

「彼の辞書には不可能という文字が無いのかしら」

「「「「「「「「「「無いんだろうな・・・」」」」」」」」」」

と、皆が思っていたらしい。

『それよりリンディ提督。そちらに戻りたい。転移してもらえるとうれしいのだが？』

「あ、はい！　すぐにします！」

そういってすぐに準備し、数秒後にはアースラについていた。

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

最終話（前書き）

無印編最終話です。
葵の過去話も織り込んでいます。

最終話

第二八話

ＳＩＤＥフェイト

「久しぶりのこれはつかれる」

あの後、【不の者】を倒し無事に葵がアースラに戻る。

「さて、早速で悪いがアリシアの場所に「その前に一つ聞かせてほしいの」なんでしょう？」

皆を代表してリンディさんが質問してきた。

「あなたの名前は？」

「神無月葵ですが」

「次に、あなたが神無月君だとして、なぜ、その、大人なんですか？」

「こちらが元の姿です。年齢は二〇歳」

え！？　そうなの！？

「でも確証が・・・・」

そうだよね。葵のお兄さんかもしれないし、あ！

「〈ねぇ、アルフ〉」

「〈なんだい、フェイト？〉」

「〈こういうのって出来る？〉」

「〈ん？　可能だけどどうしてだい？〉」

「〈みんなに葵だってわからせるため。少なくてもなのはは分かると思う〉」

「〈あぁ、そっか〉」

アルフに頼んで、アルフを仔犬バージョンにした。

「！！！！」

すると、葵は眼の色を変えたかのようにアルフを凝視した。目の輝きが違う。

「えっと、葵？」

アルフがあまりの葵の今まで見たこと無い目の輝きにたじろいでいた。

「フェイト！　こ、この子犬を抱いてもいいですか！？」

「う、うん！」

「では早速！」

気付いた時にはアルフは葵の腕の中にいた。

「ん～～～。仔犬はやっぱりいいですね。特に戦いの後のこの愛くるしさ。はぁ～。癒されます♪」

葵のあの顔に私もなんか嬉しいけど、

（うらやましいな）

「うん。葵君だね」

なのはが確証を持ったように言った。

「どういう意味？　なのはさん」

「葵君ってかわいいモノ好きなんです。犬より仔犬。猫より子猫みたいな」

「で、それを見たらああなると？」

「はい」

だってそこだけ場違いな幸せ空間を出してる。

「あ、あの神無月君」

「はい、なんでしょう？」

「聞きたいことがいくつかあるんですが」
「その前にアリシアを起こしましょうか」
「え！？」
「案内してもらえますか？」
アリシアを起こす？　でも、確か、
「大丈夫ですよフェイト」
そういって葵は腰をおろし、視線を合わせてくれた。そしてそっと抱き包んだ。あったかい。心が落ち着く。
「言ったでしょ？　あなた達にもう一度幸せにすると。それに、今まで頑張ったんだ。それでご褒美なしというのはいけないだろ？」
そういって優しく頭も撫でてくれた。これでも十分の御褒美だよ。
「ぶ～～～～～」
隣ではなのはのほほが膨れていた。
「なのはもよく頑張ったな」
そういってなのはも抱き包んだ。
「ふにゃ～～～～／／／」

数分後、なのはと私を放して、アリシアのいる部屋に入った。

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

ＳＩＤＥクロノ

「さて、始めますか・・・と言えると思ったんだが」

彼は医務室に入ると、何やらあきれていた。

「さすがに、ポットから出すように言っておくべきだったな」

そう、アリシアは救出してすぐにここに運んだためポットから出していたない。

「どうすればいいんだ？」

「そうだな。プレシアを除いた女性陣は彼女をポットから出して、体を拭いて服を着させてあげてくれ」

「は～い」

「分かった」

そういってフェイトとなのは。そして母さんがその準備に取り掛かった。

「ほら、お前らは外だ。後プレシア」

「なにかしら？」

「あなたも治療するからこっちに」

そういって向かいの空き部屋に入った。

「プレシア。一つだけ約束してくれ」

「何かしら」

「例えアリシアが蘇ってもフェイトをないがしろにしないことを」

そんなことはない。だが、確証がほしかった。

「変なことを聞かないで。フェイトがどんな姿であってもあの子はわたしの自慢の娘よ」

「それを聞いて安心した」

「でも、わたしの病は不治の病なのよ？」

「関係無い。それに、最初にあったときに言っただろ。フェイトもアリシアも、あなたも助けて見せるとね」

そういって彼はプレシア女史に背中を向けるように指示を出し手に緑色の魔力を集め出した。

「癒しの風よ。汝の力を持ってこの者の病を癒したまえ。ヒーリングフール」

すると、その魔力は彼女を包み、そしｔ「あっ、制御ミスった」
て、
「なにぃいいいいいいいいい!?」
「安心しろ。病が悪化したわけじゃない。まぁ光が晴れたらわかる」
そういって光りが晴れると、そこには確かにプレシア女史がいた。
ただ、
「「・・・・若返ってる!?」」
ユーノと僕の声が重なった。見た目確実に一〇歳は若返っている!
「あ～。とりあえず体の調子はどうだ?」
「え、えぇ。今までの身体の重さや、気だるさなんかもないわ。それに昔のように体が軽いわ」
「それは良かった。とりあえず医者に診てもらっておいてくれ。さて、次は」
彼は失敗（?）したことを秘密にして、向かいの医療室の前に来
て、
「準備はいいか?」
「ＯＫだよ」

なのはの声が聞こえたのでは言った。

「か、母さん!?」

「あ、あら・・・・・」

「え？　プレシアさん？」

「あ、あんた、本当にプレシアかい!?」

「・・・彼女は確かにプレシアです。ですが、その・・・・」

「みんなどうしたの？」

プレシアが、みんなの反応に戸惑っている。そりゃそうだ。若返っているんだ。

そこで僕は、

「プレシアさん。鏡で自分の姿を核にしてみてください」

そういって、鏡をプレシア女史に渡すと、

「・・・・あら」

プレシア女史は驚きよりもうれしさの方が大きいようだ。

「あ～。すまん。勢い余って体内機関をはじめそう言ったものまで若返ってしまったようだ」

「あらいいわよ別に？　それよりもアリシアを」

「あぁそうだな」

だが、彼女はそれを気にしない様子だ。葵は葵で何かあたりを見渡し、そして、

「もういいぞ。お前の身体に戻って」

誰もいない入り口近くに向かって話した。

「え？　葵君。誰もいないよ？」

「ん？　そうかお前らは見えないんだったな。まぁ気にするな」

「え！？　そ、それってもしかして・・」

「幽霊！？」

「まぁ、あたりでもあり外れかな。よし、もどったな」

何がどこに戻ったかはわからないが、多分知らない方がいいような気がする。

「どうやってよみがえらせるの？　あの、金色の光を？」

「エクスルミオンはあくまでも浄化の光、今からやるのは蘇生術です」

そういって彼は権を鞘に刺したままアリシアの体の上にのせた。

「彼魂をもう一度器に戻りて汝蘇らん。黄泉路を歩むには若くまだ遠い。再び命に息吹を吹き込みもう一度目を覚まさん」

すると、アリシアの身体がプレシアのとき同様輝き始め、そして、

「んっ、ん～～～～」

「アリシア！」

「ふぇ？　お母さま？」

「あぁっ！　良かった！　本当に良かった！」

目の前のことが信じられない。本当に蘇った・・・

「不幸中の幸いだな。完全なる死だったら不可能だったからな」

「？　どういう意味だ？」

「それは後で話すよ。フェイト」

そう言うと彼はフェイトの背中をポンと押す。

「ん？　あなたがフェイト？」

「うん」

「そっか。ついに私にも妹ができたんだね！」

「え？」

「私のことはお姉ちゃんでも姉さんもお姉さまでも何でもいいよ♪」

「あ、お、お姉ちゃん！」

すると、フェイトもアリシアの下へ行き、泣き始めた。

「さて、ちょっと私たちは席をはずすとしよう」

そういって葵は医療室を出る。

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

その後、フェイト、プレシア、アリシアを除く人たちは言ったん食堂に来て、その数分後遅れて三人も来た。

「さて、聞きたいことが山のようにあると思うがなにから答えようか？」

「まず、先ほどの【不の者】から。なぜ二段階に？」

「それは最後に戦ったものが本体。つまり人の魂とでもいうべきものを喰いすぎ、逆に乗っ取られたと言うところか。だがあのケースは稀だ。私も初めてみた」

「だから、成仏させた後、本体を叩いた」

「では次に、アリシアさんをどうやってよみがえらせたんですか？」

すると、わたしは少し考えて、

「ふむ。質問を質問で返して悪いが、君達はいくつ人間には死の種類があると思う？」

「え？」

「なのは。たとえば私がここで君の首をちょんぱ（切る）したら当然君は？」

「死ぬ。というか危ないよ！？」

「たとえ話だ。そう、これが実質の死。つまり蘇らせることができない死だ。二つ目は脳死。いわゆる植物状態のことだ」

「では、アリシアさんは植物状態だったと？」

「それはあり得ないわ。アリシアはあの後脳も、心臓も動いていなかった。どちらかと言えば前者よ」

「そう。これ意外に死の定義を言えるものはいるか？」

私はそう言って周りを見渡す。誰もいないようなので知らないということだな。

「私の元いた世界ではもう一つ幽体剥離死というモノがある」

「？　どういうことだ」

「簡単に言うと魂が体という器から何らかの外的なショックによって剥離された。という意味だ。この状態が長く続くと、実質死に直結するんだが、アリシアの場合そのすぐ後にプレシアがポッドに入れた影響で魂と体をつなぐ線が切れずに長く魂と体がつながれた状態になっていたんだ」

「つまり、あなたはそのアリシアさんの魂を身体に戻した。ということ!?」「

「まぁ、簡単に言うとね。あと固定化もしたためもう大丈夫だと思うぞ」

「はぁ、君は本当に何でもありなんだな」

クロノが溜息を吐くが、私だって死人を蘇らせることはできない。

「では最後に。【不の者】が言っていた大英雄とはどういう意味ですか、あと殺人鬼という意味も」

まぁ、当然その質問が来ますよね。

「はぁ。話したくはないんですが、まあいいでしょう」

そういって以前に私がリンディい提督とアルフ、クロノに話した説明をもう一度した。

すると、やはり皆憤りを感じていた。

「まぁ、その後ゆっくり暮らせればよかったんだが、零始があるプロジェクトを開始した」

「プロジェクト？」

「世界ゼロ計画」

「なにそれ？」

「世界を一変全てにおいてリセットを行い新たに世界を開始することだ」

「どういう意味？」

「簡単に言えば世界にある国家全てに宣戦布告し、世界を破壊しつくしたのちに、もう一度世界を創りなおすという計画だ」

「なんだその計画は！？」

「で、その情報を聞いた私は友人や、零始に恨みを持つ者、同じ志を持つ者を集め騎士団を創設した」

「騎士団？」

「簡単に言えばウィザードの集まったギルドだと思えばいい。ただ、当時は国家権力がガタ落ちしていたから国家よりも騎士団の方が権力は強かった。その影響でユーラシア騎士連合、アフリカ共同騎士隊、オーストラリア連邦騎士政府、北アメリカ騎士団、南アメリカ騎士連盟などという騎士団による国連みたいなものなんかができるほどだ」

「国家権力が落ち、かわりに騎士団が勢力を伸ばした。つまり治安

維持や政府機関なども・・・」

「あぁ、騎士団が担うようになった。まぁ、その中でも例外はやはりあるがな。で、私も零始と決するために騎士団を創り、いつの間にやら大層な肩書きも貰ったというわけ」

「どんなものなの！」

なにやら子ども組が目を輝かせているな。

「私の作った騎士団の名前は蒼穹の騎士団。青空という意味だ。で、肩書がユーラシア騎士連合盟主蒼穹の騎士団騎士団長ってね」

「じゃ、じゃあ、あ、あなたはユーラシア大陸の支配を許された。ということと等しい物を持っていたの！？」

リンディ提督がかなり驚いていた。

「あぁ、というか実質支配してたしね」

これには全員が驚いていた。

「で、最初に戻すが、零始の計画に私たちの実験体や【不の者】が作られたというわけ。当然世界も黙っていないが、たった４日で北米大陸全土が零始の支配下に収まった」

「４日で！？」

なのはも驚いている。大陸一つを４日で落とす。どれほどの国家であってもまず無理だ。

「その後、世界は動かなかったんだ。まぁ北米大陸が四日で落とされるなんて思ってなかったんだろ。だから国家どもは服従か抵抗かという道を選択していた」

「バカか！　そんなことをしても結果は変わらない！　なら抵抗すべきだろう！」

クロノが机を叩いて叫んだ。

「そう。だから私はあてにならない国家よりも、蒼穹の騎士団を中心に騎士連合軍を創設し零始に宣戦布告をし戦争が始まった。第一次ウィザード大戦が始まった」

そういってあくまでも資料映像だが、エクスを起動さえ見せた。

その映像はすさまじい者だ。腕を斬る者、銃弾で頭をぶちぬかれた物、【不の者】に体を喰われる者、それを殺す者。当然殺す者の中には私もいる。砲撃を撃ち人を殺す姿、両翼刀で四肢を斬り、首を刎ねる姿など様々だ。

その光景に皆が皆顔を青ざめていた。

「結果は騎士連合の勝利で終え、後は残党狩りとなった」

「そ、そうなんだ・・・あれ？　じゃあなんで葵がここに？」

「・・・・世界が裏切ったんだよ」

「え・・・・」

その意味がわからずみんなが唖然としていた。

「零始の作った兵器は世界を壊すほどだ。それを倒した私は世界から危険と判断され、世界から追われる羽目になった」

「まって、葵君は世界を助けた大英雄なんだよね？　なのになんで世界に追われなくちゃいけないの！？」

「そうだよ！？　そんなのおかしいよ！！」

「なのは、フェイト。大英雄とは殺人鬼をほめたたえるためにある言葉だ。たとえ世界を救ったものと言え、私も人を殺した殺人鬼だ。その力に対し世界が恐怖し、始末すべきと判断したんだろう」

「それで、君は殺されたということか？」

ユーノの言葉にうなずいた。

「・・・最低ね」

リンディ提督が初めて感情を表した。

「まぁ、仕方がない。その時に追ってくる者を殺し、兵士を殺し、時には巻き添えで関係ない民も殺した。その時のことと、先の大戦の時の殺戮からあの世への道への案内人。つまり【黄泉路への案内人】と呼ばれるようになったというわけだ。
で、あの思念体は、大戦時かその時に殺したのがあいつらだろう。だがある意味では感謝せねばな」

「どうして、どうして君はそんなのんきなことが言えるんだ！」

「もし、あそこで死ななければ私は君達と出会おうことはなかっただろう。だから感謝しているんだ。それにここあそこは違う。なら、私も最初っから始めようと思うしな」

そういって私は微笑んだ。本当に君達には感謝している。君たちに出会えて本当に良かった。

そして、この事件の名前を操っていた【不の者】をそのまま利用して不の者事件と総称し、終了をリンディ提督が宣言した。

その後、【不の者】がプレシアにとりつき操っていたということを管理局上層部に戦闘している姿（最後のはリンディ提督のはからいで編集しカットした）ものを送り、プレシアの罪は無罪となった。リニスに関してはもともとの主であるプレシアに返した。フェイトやアルフも内容が内容なだけに行った行為は無罪となるらしい。だが、一応事情聴取という形で三人はミッドチルダに一回向かうことになった。その後は、フェイトがいたマンションで家族と一緒に暮らすらしい。アリシアにおいてもリンディ提督がうまくごまかしてくれた。

「「「あ、葵（君）！」」」

「遅くなった」

あの後、魔力消耗が激しかったのかしんだように私は寝て、目が覚めると、数日たっていた。姿も子供に戻っていた。で、起きたちょうどその時間に電話が鳴り、フェイト達が今日ミッドチルダに向かうとのことで急いでその場所まで来た。

フェイトやなのはを始め、アルフ、アリシア、プレシア、リニス、ユーノ、クロノがそこにいた。

「葵君。もう少しフェイトちゃんとお話してもいい？」

「その後に私から話があるの。聞いて」

「あぁ、分かった」

そういって私は近くのベンチに座ると、プレシアが近づいてきて、

「あなたには本当に何から何まで。何と言ったらいいのかしら」

そういってプレシアが、頭を下げてきた。

「なにも言わなくていい。私は当然のことをした。助けを求めていたら勝てを差し伸べた。それだけだ」

そう言ってほほ笑んだ。

「プレシア。あなたももう一度幸せをつかんだんだ。二度と手放すなよ」

「えぇ。もちろんよ。それとこの子からも話があるみたいよ？」

「ん？」

そういってプレシアの視線の先を見ると、アリシアが、

「あ、あのね、お母様とフェイトとアルフとリニス。みんなを助けてくれてありがとう！」

その笑顔はまぶしかった。もう見ることはなく、自分に与えられるものでもないと思っていたからな。

「あぁ。どういたしまして。君も幸せになってくれよ」

そういって微笑み返す。

「う、うん／／／！！」

ん？　アリシアの顔が赤いような？

すると、フェイトが私を呼んでいたので、そちらに向かう。

「もういいのか？」

「うん。フェイトちゃんとお友達になろうっていったの」

「今さら感があるんだが？」

「ううん。そんなことない。気持では友達だったけど。声にしてちゃんと言ったから。これで、ちゃんとした友達」

なのはもフェイトも満足そうだ。これはこれでいいんだろう。

「葵君も友達だよね」

「いい、かな？」

「私はフェイトもなのはも大切なものといったはずだ。無論。友達でもある」

そうだな、なら。

「なのは、フェイト。ならこれをやろう」

そういって飛翔で翼を展開し、黒と白の羽を一枚ずつ取り、ネックレスにした。

なのはには白、フェイトには黒を。

「これは？」

「簡単なもので割るが友の証だ。私の翼は特殊でね。精霊の翼なんだ。守護力というモノがあってね障壁が間に合わなくてもそれが君たちを護る。あと、それがある限り、どんなところでも君達を護ろう。」

「ありがとう／／／！！」

「大切にするね／／／！」

「それでフェイト。話って？」

そういうと、なのはは気を利かせたのかその場から少し離れた場所に行った。

「えっとね。母さんを、お姉ちゃんを、リニスを助けてくれてあり

がとう！」

「フェイト。私はただ私ができることをしたまでだ。私の方こそ、君に感謝しなければならない」

「え？」

「生きる目標を、目的をくれてありがとう。もし、君に、なのはに出会わなかったら私はまた以前のように生きていたかもしれない。でも、君達を護りたいと思ったからそうならなくて済んだ。だから私の方こそありがとう」

「ううん。私もね。葵がいたからあきらめずにいれたんだと思う。ううん。そうなんだよ。【不の者】に乗っ取られた母さんにひどい子とされても、言われてもあなたが心の支えになって私を支えてくれた。嬉しかったんだ。ありがとう」

そういって互いに互いが感謝しあう変な場になった。だが、おのずと笑みが出て、笑いあって、とても心が温かかった。

その後、時間が来て、彼女たちとの別れが来た。

「さよならは言わない。また会えるんだからな」

「うん！　フェイトちゃん！　またね！」

「うん。ありがとう。それからまたね！　葵、なのは！」

泣いているが笑顔で手を振るフェイト。

「ありがとね。葵、なのは！」

そう泣いているアルフ。

「あなた達には心から感謝しているわ」

微笑みながらこちらに手を振るプレシア。

「またね！　またね！」

元気に手を振っているアリシア。

「本当にありがとうございます！」

律義に礼をするリニス。

今回黄泉路への案内人は人を殺すのではなく人と心を救った。

彼女たちを救い、彼もまた生きる新たな目標ができた。

小さいが大きい幸せ、彼もまたつかんだ幸せ。

彼は心に決めた。いつまでもこの幸せを護りぬいて見せようと。

魔法少女リリカルなのは～黄泉路への案内人～無印　終

最終話（後書き）

次回からはA'sに入ります！
これからもよろしくお願いします。
非才で駄文ですがこれからもがんばっていきたいのでよろしくお願いします！！

用語解説（前書き）

そのまんまです。御話し中に出てきた用語の説明です。

用語解説

魔法省・・・日本における魔法に関する行政機関。法律の作成から始まり、文部科学省などと連携し魔法教育や魔法研究を子なっている。かつてS・L・P（サイドルピアプロジェクト）と呼ばれる非人道的研究を行なった機関でもある。だが、これは表ざたになることなく闇に葬り去られた。

日本軍・・・旧自衛隊。魔法により日本も独自の国防力を保持できるようになり、安保条約破棄後、憲法9条を改正、永世中立国となった。現在は北は占守島。南は尖閣諸島までを護る日本の国防軍。

国際ウィザード連合（ＩＷＵ）・・・国連に変わっておかれた国際機関。しかし行っていることは丸っきり国連と変わりない。常任理事国は日・英・独・仏・伊・の5カ国で編成されている。

騎士団・・・ウィザードが独自に編成したギルド。昨今Ｉ・Ｗ・Ｕ・でも問題視されている国家権力の衰退になり替わり頭角を現し国家になり替わり治安維持を始め、国家に変わる機関となっている。

精霊皇・・・その名の通り精霊を統べる皇。魔法とは切っても切り離せれない存在である精霊を統べる者。彼者をなくせば精霊は暴走し消滅。故に皇の選定には世界も目を向ける。

各大陸騎士連合組織・・・ユーラシア騎士連合、アフリカ共同騎士隊、オーストラリア連邦騎士政府、北アメリカ騎士団、南アメリカ騎士連盟などという騎士団がある。
ギルド連合みたいなもので騎士団を創設した場合このいずれかに所属しなければならない。

蒼穹の騎士団・・・ユーラシア騎士連合の盟主。葵が創設し対零始戦を想定して作られた騎士団。

第一次ウィザード大戦・・・零始と騎士連合軍による戦争。被害は莫大過ぎていまだに把握できていない。ただ世界人口の６分の１減ったと発表されている。この戦火に恐怖した各国は葵を特級危険人物と指名し殺害命令を下すきっかけたとなった。

用語解説（後書き）

まだ不明なのがあったらお知らせください。

プロローグ（前書き）

A'ｓ編に突入！
これからもがんばってまいります！

プロローグ

プロローグA，ｓ

こんにちは。【黄泉路への案内人】こと神無月葵です。

私は今自分の家にいるはずなんです。そう。はず。

葵「・・・・エクス、ルミル。ここは私たちの家で間違いないんですよね？」

エ《イエス。私たちの家ですね》

ル《まっ黒ですね。何があったんでしょう？》

貴重品や魔法具に関しては心の世界に入れているため何とかなるが、服、家事道具、調理器具はもう駄目だろうな。

エ《！　マスター！　直上に高エネルギー反応！》

葵「はぁ！？」

そのまま私に雷が直撃しました。

？？？「・・・き・・・」

あれ、なんか声が・・・

？？？「・・・ん・・・か」

ようやく意識がはっきりしてきた。

？？？「起きんか！！」

葵「フンッ！！！」

――バギッ

神「ぶるべふぁ！？」

嫌な者を見た。

寝起きにあのクソ神の顔を見たので思いっきり右ストレートをかましてやった。

神「いきなりなにするんじゃ！？」

葵「寝起きに貴様を見たのだ。また、どうせ貴様の失敗で天界に来たのだろ？」

神「・・・・」

無言。つまり肯定か。フフフッ、一度ならまだしも二度もあいつのミスで私は、よし、殺ろう。死んでも、まだ殺りつくそう。そうだ、この恨みを晴らすまで！

葵「フフフフフフフッ。エクス、ルミル。いますか？」

ル「はい、ここに」

エ「いま～す」

私のすぐ後ろにエクスとルミルがいた。おそらく同じ気持ちなのだろう。

葵「蒼騎士。クソでも神は神です。一応ＡＢＰ（オール・ブレイク・ファンタズム）が効くでしょう。殺しましょうか」

エ・ル「「はーい」」

元気よく答える二人。それを見てダメ神は、

神「ま、まつんじゃ！　お前さんに良い情報を与えるためにここに呼び寄せたんじゃ！」

葵「家を破壊した揚句に、人に雷を落とす。これでいい情報・・・・。笑わせないでほしいな・・・」

さぁ、殺しの時間だ。神殺しの称号でも貰おうか。

神「まて！　というか、その称号はまずいじゃろ！？」

葵「勝手に人の心を読むな。とりあえず理由だけ聞いてやろう」

一応理由だけでも聞いてやろう。一応。

神「そ、その、お前さんは覚えているか、わしがお前さんのお願いを三つ聞いてやると言うのを」

葵「あぁ。覚えている」

神「じゃがのう、わしはさみしいんじゃ。一向にお願いしにこないから、出番も・・・って、剣をふりかぶるな、狙いを定めるな！」

葵「そんなくだらない理由でか？」

神「お、落ちつけ！　じゃが上からの命令でいい加減さっさとお前さんの願い事を叶えんと色々とまずいんじゃよ！　主にわしの給与にって冗談じゃ！！」

その後、ダメ神の言い訳を永遠と聞かされた。というか神って給料制なのか？

葵「はぁ、つまり最低でも一個、ここで叶えろと言うことか？」

神「そうじゃ！」

葵「と、言われても」

もともと力はチート、というよりそうさせられた。あの師匠たちに。

足りない物、足りない者・・・・・・ない

神「そんなことわないで～、おねがい～！！！」

そう言って泣きついてくるダメ神。キモい。

神「そうじゃ。お前さんの世界を調べておったらこんなものが出てきたぞ？」

そこにあったのは私が高校まで使っていた魔法の授業の教科書。なぜある？

神「そこでこんな物を見つけたんじゃが、これなんじゃ？」

神の癖に知らんのか！？

神「神だって万能じゃない。それはお前さんもしっとるじゃろ！？」

でした。ミスって、間違って全く殺す予定の無い人間殺したりしますもんね。

神「グサッ！？」

葵「はぁ、どれどれ。あぁ、魔力回路契約」

神「魔力回路契約？」

葵「通称パス契約。つまり――」

そう言って説明して、2時間。

神「なるほどの。簡単にえばネギ〇の仮契約みたいなものか。仕組みも似とるし。ただ、カードではなく左手にお前さんとおんなじ模様がうめ込まれると。他にも、契約者は交えた者と一体となることができる。まるでユニゾンデバイスになるといっとるようなものか。なになに、契約した者によって【相対】【付属】【強化】と、違う

内容で契約者をサポート強化する。どういうことじゃ」

まぁ、簡単に言えば相対というのは水を扱う者ならば火を使えるようにする。付属とは武器で言うならその死角となる部分を補うモノがプラスされる。強化は言葉通りだから説明は省こう。

葵「まぁ、普通ならな。でも私にはそれが無いからキスはただのキスになるぞ？」

神「―キュピーン」

・・・なんかいやな予感・・・

神「ではさっそく！　でぇ「させるか！！」ゲベェラッガ！？」

再び右。神は地平の彼方へと消えた。

そして、右腕で汗をぬぐっていると、右手に黒い翼と白い翼の刻印が記されていた。

そう。いわゆる魔力回路契約のために必要なｋｅｙを渡したのだ。

葵「・・・・あのクソ神！！！」

その後すぐに神を見つけ殴り、叩き、つぶした。

葵「はぁ、はぁ、はぁ。ここまで勢いよく殴ったのは逃走中以来だ」

神「わ、わしも、ここまで瀕死の状態になったのは数百年ぶりじゃ」

その後、これでお願い一つ消費ということで、何とかなったが問題がある。

葵「それで、私は今後どこにすむ予定だ？」

神「ん？　お前さんならさっき車いすの少女が引きずっていったぞ？」

葵「・・・・はい？」

神「おそらくこれの重要人物じゃ。というかお前さん無印の時も原作を見ずに行きおったな」

確かに。で、ボケ神が渡して来たのは魔法少女リリカルなのはＡ’ｓとかかれたＤＶＤ。

葵「続編ものか？」

エ「みたいですね？」

ル「ん？　こっちにこんなものもあるぞ？」

そういってルミルが持ってきたのはＳｔｒｉｋｅｒＳと書かれた物。なのは達の成長した姿も映っていた。

葵「まぁ、みちゃったらおもしろくないしな。みないでおこう。あれ？　そう言えばあのクソ神は？」

そういってあたりを見渡すがそこにあのジジィの姿は見えない。あれ？　なんか口調どころか性格も変わって来たような・・・まぁ

いっか。

???「みーっけ！」

―ふにゅん

なにやら大人っぽい声と共に、背中に柔らかい感触が・・・って！　この声は！

葵「こ、孤狐！？」

エ・ル「「孤狐様！？」」

そこにいたのは白銀の髪に、日本人離れしたルックス。紫の瞳をもった女性。そして人とは絶対に違うのは、頭のてっぺんにある犬のような耳と、お尻あたりにある９つの尾。ぞくに言う九尾。俗に言うお稲荷様という豊作の神様の一柱だ。

孤「ん～～～♪　この匂い、この感触、間違いない！　葵だ～～～！！」

そういって私のほほに孤狐の頬をすりつける。

孤「久しぶりだな」

葵「うん。ホント、あの時以来かな」

彼女は私が精霊だと思い契約した神だ。なぜ、精霊と神を見間違えたか？　分からん。なぜかわからんがその愛くるしさになすがままに契約した。

孤「でもさ、あんた、大変な目にあってるらしいね。まぁ、あっちよりかは楽なんでしょうが。でも子供の葵もかわいい！」

そういってさらに密着度を増す。まずいまずいまず！　特に理性が、精神が！！！

ル「こ、孤狐様。そろそろその辺で！」

エ「じゃないと、マスターが！！」

孤「ん？　あ、そっか。いくら精霊皇で耐性ついていてもこれはキツイか」

そう言って私を放した後、

葵「なぜあなたが？」

孤「あっちじゃ死んじゃったじゃん。でもね、契約が切れなかったの」

葵「？　おかしいですね。それに平行世界でも契約が？」

孤「まぁいいじゃん。出会えたし――――あぁあああああああ！！！」

―キ――――ン

耳元で騒ぐな。鼓膜が破れる。

孤「これ！ｋｅｙじゃん！　なんで、どうして！？　葵持ってない

はずなのに！？」

何やら興奮気味に騒いでいる孤ｋ「いただきまぁす！」むぐっ

いきなり唇に暖かい感触が宿る。・・・・これってまさか！？

―シュゥウウン

すると、血管状に流れるパスが、孤狐とつながった。

孤「ごちそうさま♪」

葵「・・・・・きゅう」

―バタン

孤「あら？」

それから数分経ち、ようやく意識を取り戻した。

葵「はぁ、やっぱりパスがつながっている。それに白書まで」

白書。その名の通り白い書物。契約を示しまとめた書物のことでその者がだれと契約を交えた者がどんな魔法を使い、さらに交えた者に【付属】【相対】【強化】のいずれを与えたのか。それはどんな力なのかを記しまとめたモノだ。

葵「はぁ、とりあえずおきますか。私を助けた少女にも出会いたいので」

孤「そっか。じゃあボクは狐の姿になって葵のそばにいるね」

さぁ、目覚めるとしよう。そして始めよう。

――新たな物語を

プロローグ（後書き）

A-ｓ編からはこんな形式でやっていきたいと思います。
時間ができたら無印編もこっちに合わせて編集していきたいと思ってますので。ご迷惑をかけますがよろしくお願いします！

第一話

第一話

葵「んっ・・・ん？　こ、ここは？」

起きれば見知らぬ天井。本当にあるんだ、こんなことって・・・。

エクスとルミルも待機状態（イヤリング）になってる。孤狐は？　そうだ孤狐は！？

孤「〈はろ～。起きた？〉」

葵「孤狐」

みれば私のお腹の上で丸くなっている子狐が一匹。間違いなく孤狐だ。

葵「〈子狐になったんですか。で、ここは？〉」

孤「〈さぁ？〉」

？？？「おっ、起きたんやな」

そういって入って来たのはなのはやフェイトぐらいの年齢の子だろうか？　ショートヘアーの子がいた。

葵「あぁ、すまない助かった」

こっちの言葉にも慣れたな。一人称も変えるか？　オレとか・・・。止めよう。私じゃない。

？？？「それよりもその狐、どこから入ったんや？」

葵「あぁ。その窓から入って来たようだ。安心してくれ、私が飼っている狐だ」

孤「〈飼ってる・・・奴れ「〈それ以上はやめろ。色々とまずい〉」は～い・・・〉」

？？？「いやぁ、でも驚いたで。目の前の人間が雲ひとつない快晴の日に雷当たるなんて。それに、目の前には真っ黒な家が」

葵「・・・そうだな。私も一生に一度あるか無い経験をできて新鮮だったよ。ところで君は？　私は神無月葵。この狐は孤独な狐と書いて孤狐だ」

？？？「へぇ～。珍しいなぁ。かんなぢゅき・・・・」

あ、噛んだ。

葵「葵でいい。言いにくいだろ」

は「そか？　じゃあ葵君に孤狐ちゃんやな。私は八神はやてっていうんや。ひらがなではやて。おかしいやろ？」

何を言っているんだこの子は？

葵「なにがおかしいんだ？　別にどう思うと勝手だが、私は少なからず立派な名だと思うぞ」

は「そ、そか？」

葵「あぁ。君に似会っていると思うぞ（ニコ）」

は「！？／／／　あ、ありがとな・・・（い、今の笑顔は反則や／／／）」

葵「ちなみに私は男だ」

は「・・・・・・・・」

葵「あぁ、孤狐耳をふさげ」

孤「〈ＯＫ〉」

　孤狐が耳をふさぐと、

は「えぇえええええええええええええええええええええ！！！！！」

　その後、「ほんまか！　ホンマに男の子なんか！？」と、久々の経験をした。

　数分後、落ち着きを取り戻したはやてが、

は「なぁ、葵君。家どうするん？　あんな状況だと・・・」

葵「貯金通帳はある。というか貴重品は大体あるが、まぁ住む場所だよな。うーん、よし」

は「・・・なんか当てがあるん？」

　どこか悲しそうな顔をするがなぜだ？

葵「テントを買って、そこでのじゅｋ「あかん！」する。て、せめて最後まで言わせてくれ」

は「あかんで！　そんなん許されるわけないやろ！」

葵「でもどうするんだ？」

は「せや、家に泊まるといい！」

葵「親御さんに迷惑じゃないか？」

は「私、両親おらへんのや」

葵「・・・・（悪いことを聞いたな）そうか。ふむ。なら、お言葉に甘えよう。これから私と君は一つの家族だ」

は「え・・・・」

いきなりで失礼だったか？　すこしでも気持ちをまぎらわせれば幸いだと思ったんだが。

は「いいの！？」

葵「あぁ無論だ」

は「やったぁあああ――――――！！！」

はやてが万歳の格好で大喜びしていた。

とりあえず、自己紹介をはじめいろいろなことを放した。無論魔法

や前世のことなどは内緒にしておいた。

家族・・・ね、手にして何だが、私が手にとっていいものだろうか。

そう考えていると、

孤「〈別に葵が手にしてはいけない物じゃないと思うよ？　葵、君が考えるほど君は悪ではない。悪というのはあの零始みたいなやつのことを言うんだよ〉」

葵「〈そうか。まぁ、それにこの顔を見ると今更無しって言うのはいけないな〉」

一度自ら捨てた家族か。

翌日。場所は変わりデパート。

まぁ、服などが全部焼失・・・でいいのか？　したわけで新しい服を適当に買った。

その時、バカジジィ（神のこと）が渡した黒光りするカードで支払いをすましたが、これには店員が驚いていた。あの後身分証明などを行い本物とわかると店員全員で頭を下げられた。

は「葵君って何者なん・・・・」

葵「さぁ？」

は「自分のことやで！？」

葵「まぁ、気にするな」

は「気になるわ！！」

そして今は近くの公園で休憩中。

ＳＩＤＥはやて

葵「これでいいか？」

は「うん。ありがとな」

葵君は二つの缶、ココアの方を私に、ブラックコーヒーを葵君が。って、けっこう大人やな葵君。あんな苦いもん私は飲めへんで。

は「なぁ、葵君」

私は、葵君に聞いた。ほんとは聞きたくなかったんやけどヤッパどうしても聞いときたかった。

葵「ん？　なんだ」

は「葵君はなんで私の足のこと聞かんの？」

そう。足のこと。生まれつき、なんやけど普通の人とは違う。原因不明の病。石田先生、あ、私の主治医な。石田先生も全力で治すっていっとるけど治るかどうかはいまだに分からへん。

葵「足？　あぁ、車いすのことか。別に足が悪いから車いすに乗っている。それだけだろ？」

予想していたのとは違う。でも、なんやろ？　この変な気持。

は「でも！　怪我って言っても骨折しとるわけやない」

葵「下半身不随の人間なんて探せばいくらでもいる」

は「学校行って無いし」

葵「足が悪いなら仕方がない。義務教育といってもあくまでも義務だ」

は「・・・・・」

葵「言いたいことはそれだけか？」

まるで何を聞いているんだ？　という顔をしてこちらを見る葵君。私はそのあっさり切り返してくる葵君にびっくりや。普通は不憫に思ったり、頑張ろうなみたいな情けをかけたりする人が多い。

は「な、なんでそんなことといえるん？」

葵「君はどう見てほしいんだ？　そこら辺を歩いている、いわゆる一般人として見ほしいのか？　それとも【八神　はやて】という一人個人として見ほしいのか？」

は「え？　どういう意味や？」

葵「簡単にいえば君を普通として見てほしいのか、それとも個性を見てほしいのかということだ」

普通か個性。そりゃ、もちろん葵君には私をと私としてしっかり見てほしい。だって、一目ぼれした相手やしな／／／！！！

は「そりゃ、できれば個性を見てほしい／／／」

葵「なら、君は君でいればいいだろう。べつに足がなんだ、学校がに行っていないがなんだ。それは関係ないだろう。君が普通として見てほしいならそれなりに言ったかもしれない。でも君は君個人を見てほしいといった。なら、私は何も言うまい」

そっか、私の個性は私だけのもの。なら、別に他の人たちと比べる必要もない。新しい考え方やな葵君のは。

は「そっか。ありがとな」

葵「それにな。はやて。君は生きとし生けるものだ」

はやて「どういうこと？」

葵「君は生きている。命があるんだ。生きているならば君には幸せになる権利も未来を見る権利もあるんだ。そんなに卑屈になるな。いずれ君にも幸せがくる」

そうなんかな。でもな葵君。一つだけ言えることがあるで。私はもう幸せや。葵君という存在がそばにいるだけで。

葵「さて、日も落ちてきたし変えるとしよう」

は「は～い」

葵君は優しいな。優しいだけやない。強い。強い言っても力じゃない、心がや。こんな人は初めてやな～。よし決めた！　ぜったい葵君を私のモノにする！！！

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

ブルッ

エ《どうしましたマスター？》

葵「〈エクスか。いや、今変な悪寒が走ってな・・・・〉」

ル《風邪かもしれないな。マスター今日は早く寝た方がいいぞ》

葵「〈あぁ、ありがとなルミル。そうする〉」

何だろう。風邪とは違う。寝ても治らないよう気がする。それに一瞬だが、白い魔王と、金色の死神二人とタヌキが争う姿が脳裏によぎったような・・・・。うん、気のせいだ。そう気のせい。

登場人物2

神無月　葵
本作の主人公
転生前年齢　２０歳
転生後年齢　９歳
蒼騎士
恰好は青を基調とし、金色の模様を入れている騎士甲冑。騎士甲冑の腰辺りに白色の外套を纏っている。
接近戦のみを主体におき、武器は青と金色を基調とした『絶対的勝利を約束された剣』一本のみ。
金色に輝く一筋の光と共に浄化の光として放つエクスルミオン。
そして敵を無に化すほどの威力を放つオール・ブレイク・ファントズム（全ての幻想を破壊する者）は葵の中でも最強クラスの魔法攻撃。かの有名な魔王のＳＬＢをも上回るとか・・・

孤狐（ここ）
主人公の契約獣（神様だけど）
年齢・・・もう分からないぐらい生きている
体重・・・分かってくれ殺されそうなんだ、だからぎゃぁあああああ・・・
好きなこと　葵といることは当然！　どこの料理がおいしいかめるぐり
嫌いなこと　人を見た目で判断する奴
容姿　ＨＪ文庫　埋まったままＤＥ宇宙戦争！からユー・ウィル・ファー
契約理由・・・葵がかわいかったからしい。
主に炎・雷系・氷系の術を使う。
融合時は孤狐が主体にならず葵に全権を渡している。

補足・・・通常パス契約を行使した場合、主体は契約者ではなく契約を交えた相手が主体になる。

第二話

第二話

今日ははやての付き添いで海鳴大学病院に来てます。

???「こんにちは、はやてちゃん。おや、そちらの方は・・・・もしかしてはやてちゃんのボーイフレンド？」

は「ちちちち、違います／／／！　い、いっしょにすんでるあ、葵君です！！」

はやてよ、何をそんなにあわてているんだ？

???「ふ～ん。というか一緒に住んでるの！？　同棲！？　最近の小学生は進んでいるのね」

は「・・・・」

あ～あ。はやてがついにしゃべらなくなった。

葵「あ～、石田先生？」

石田「あら？　なんで私の名前を？」

いや、あなたの胸元にある名札は何のためにあるのでしょう？

石田「なるほど。これで分かったわけね。で、葵君ははやてちゃんとどこまで行ったの？」

そういって名札を見る。視線がはやての方をいったん見て私に向いた。

葵「どこまでと言われましても、家が修復するまで居候しているとしか」

石田「修復？」

葵「はい。つい最近買い物から帰るといが真っ黒に焼け落ちていて、さらにそこに雲ひとつない快晴の時に落雷が直撃しまして・・・・」

石田「・・・あなた頭大丈夫？」

は「先生。葵君がいっとるのはホントのことです。目撃者がここにいますんで」

はやてが補足と目撃者は私ですと言って手を挙げる。

石田「・・・・検査しましょう。今すぐに」

すると、石田先生はそのまま私に精密検査を行い、体に異常がないことが分かった。というか魔法で何とかした。検査でもばれるものはばれるから何とか防いだ。

石田「本当に何ともないのね」

葵「えぇ」

はやて「そうですか。よかったな、葵君♪」

葵「まぁ、そうですね」

いや、何かあったらまずあの神のせいだ。その時は殺す。神殺しの称号なんていらんが、というかあんなのが神やれているのがまず不思議だ。

石田「ところで葵君」

すると、耳元で石田先生が何か話しかけてきた。

石田「えっとね、明後日はやてちゃんのお誕生日なんだ」

葵「は？」

明後日がはやての誕生日？　そんなこと聞いてませんよ？

石田「多分はやてちゃんのことだから葵君に余計な御世話をかけないようにしたんじゃないかな？」

葵「はぁ～。子供なら甘えればいい者を。でもまぁ、これで少し考える時間があるか」

石田「おっ。なんかサプライズでもする気かな？　というか君も子供なんだけど」

葵「そんなことは気にしないでください。あと、サプライズについてはそんなところです。情報ありがとうございます」

石田「いえいえ」

そういって私ははやての後を追うように病院を後にした。

さて、場所は変わりまして私の心の世界。調理道具をはじめいろいろなモノは一式揃っています。予備ですが。

葵「さてと、とりあえずケーキとプレゼントを考えないと。ケーキはすぐできるな。とりあえずそっちから取り掛かるか」

そういって調理に取り掛かる。無難にイチゴのショートケーキがいいかなとも思ったが、フルーツケーキに変更。少し華があった方がいいでしょ。

葵「生地を作って、あとは～」

数十分後、ケーキは完成した。

問題は、

葵「プレゼントね・・・・」

ちなみにはやてはというと、

はやて「孤狐ちゃんええ毛並みしとるな～♪」

孤狐「こーん」

はやて「ここか！　ここがええんか！！」

孤狐「く、く～ん！？（な、何この撫で方のうまさ！　葵には劣るかもしれないけどかなりの上位、ううんG級ナデリスター！）」

と、はやての巧みな撫で方に堪能していた孤狐がいた。

場所はもどり、葵の心の世界。

葵「結局、夜になってしまった。外ではまだ数十分でしょうが・・・やばい、眠たくなってきた。というわけでおやすみ」

そのまま自分のベッドにだいぶ・・・ではまた明日。

第二話（後書き）

感想を待っています！　といういまだ一件ってさみしい・・・

第三話

第三話

さて、おはようございます皆さん。現時刻は日付が変わって数分後です。目の前には黒色のインナーを着た二人の女性と幼女。そして犬耳に尻尾をつけた、痛い人。

今ようやくこの時期に転生した皆さんがたの気持ちがわかるような気がします。

ピンク色の髪をポニーテールにしている人は剣先を首に向け、幼女はハンマーを今振り下ろそうかとしています。

葵「はぁ、なぜこうなった」

私の率直な疑問にお答えください。

―数時間前

私ははやてと一緒に晩御飯を食べている時に私ははやてに、

葵「はい、はやて。本当は明日ですが、少し早目のお誕生日プレゼント」

私がそう言ってはやてにプレゼントが入った箱を渡す。

は「え・・・・・？」
　おや、なんというかかなり驚いていますね。これはなかなか面白い。

ＳＩＤＥはやて

葵「はい、はやて。本当は明日ですが、少し早目のお誕生日プレゼント」

は「え・・・・・・？」

　葵君がそういって小さな小箱を渡してくる。あれ？　私、葵君に誕生日のことは教えたっけ？

　たぶん、あの後石田先生から教えてもらたんやろな。でも、嬉しいな／／／　こうやってお誕生日プレゼント貰うんいついらいやろ。あかん、嬉しくて涙が／／／

は「あ、ありがとな！　葵君／／／！」

　そういうと、葵君は優しく微笑んでくれた。これだけでご飯三杯お代わりできるで／／／！！！

は「あ、空けてええか？」

葵「どうぞ。それははやてのために作ったのだから」

わ、私のために／／／！！　しかも葵君の手作り／／／！？

箱を開けるとそこには見る角度によって青色や白色に輝くまるで月のような石をネックレスに加工した物があった。

は「きれいやな～。これなんていう石なん？」

葵「ムーンストーン。はやての誕生日の誕生石なんだ」

は「誕生石？」

葵「簡単言うとその月にちなんだ宝石のこと。まぁジンクスだが、その誕生石を身につけていると幸運が訪れるとも言われているな」

そうなんか、なんか嬉しいな。

は「あ、葵君、これつけてくれん？」

葵「いいよ」

そういって葵君はネックレスを受け取り、私の首にネックレスを着けてくれる。

は「に、にあっとるやろか？」

葵「あぁ。かわいいよ」

は「／／／／／」

は、反則や葵君！！　い、今そんなこと言ったら／／／

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

孤「〈あ～あ。また一人落ちた〉」

葵「〈何がだ？〉」

何を落としたんだ？　なにも落ちてないように見えるが。

エ・ル・孤「〈〈〈はぁ～〉〉〉」

神姫二名と孤狐が溜息をついた。それほどまでに重要な者を私は落としたのか？

は「な、なぁ葵君・・・」

葵「ん？　なんだ？」

は「きょ、今日は一緒に寝てええか？」

葵「・・・・はい？」

は「だから！　今日は一緒に寝てええ？」

葵「Ｒｅａｌｌｙ？」

は「ｏｆｆ　ｃｏｕｒｓｅ」

というか英語出来たんだはやて。

は「本読んどったら覚えた！」

そういってグッて親指を突き立てていって来た。というか心を読まれた・・・

葵「まぁ、良いだろう。孤狐も来るか？」

孤「こーん〈もちろん〉」

そのまま、私とはやて、孤狐はベットに入り、すぐに眠りに落ちた。

ＳＩＤＥはやて

ベットに入りすぐに葵君は寝てもうた。でも、こうやって自分以外の人がおるのは安心感があるな。

は「葵君。「ん～、牛丼食べるなら」すきやで～。ってちゃうわ！」

なんかようわからん葵君の寝言に付き合ってしまった。

すると、いきなり後ろから変な光が出ていたので、反射的にそっちを見ると、

は「え・・・な、あ・・・・」

本が、目の前で本が勝手に開き、というか宙に浮いとる!?

???《Ｉｃｈ　ｂｅｆｒｅｉｅ　ｅｉｎｅ　Ｖｅｒｓｉｅｇｅｌｕｎｇ（封印を解除します）》

本から変な声が聞こえる。というか本がしゃべった!?

すーっとゆっくり本が降りてきて、こっちにおりてきた、

は「あ、葵君・・・・」

???《Ａｎｆａｎｇ（起動）》

すると、本がいきなり光り出し、

―キィイイイイイイイイン

そんなおと共に私の身体から、白い球体状の光が出てきて、

―カッ

そのまばゆい光と共に、目も前に現れたモノを見た瞬間私は意識を手放した。

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

ＳＩＤＥ???

？？？「闇の書の起動を確認しました」

？？？「我等闇の書の蒐集を行い、主を護る守護騎士にございます」

？？？「夜天の主に下に集いし雲」

？？？「ヴォルケンリッター。何なりとご命令を」

どれ位経ったんだ？　今回の新しい主からの命令が無い。って、あれ？

？？？「・・・・〈ねぇ、ちょっと、ちょっと〉」

？？？「〈ヴィータちゃん。しーっ〉」

ヴィ「〈でもさぁー〉」

？？？「〈黙っていろ。主の目の前での無礼は許されん〉」

ヴィ「〈無礼っていうかさ、コイツ。気絶してるように見えんだけど〉」

？？？「え？」

？？？「うそぉ！！」

は「うぅ～～～～・・・・」

？？？「ん？　この少女は・・・！？」

この少女とこの場に要る狐から須さまじい魔力を感じる。こいつは一体・・・

？？？「シャマル、ヴィータ！　こいつをバインドで縛り上げてくれ！」

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

―で、現在

葵「はぁ、どちらさまでしょうか？　泥棒か？　警察を呼ぶぞ」

こっちも呼ばれてはまずいんだが、脅し程度になればいいんだが。

？？？「黙れ。お前からすごい魔力を感じる。お前は管理局の人間か！？」

？？？「管理局？　あぁ、あの独裁体制の。個人的な友人はいるがそれ以上は無い。というかはやては無事なのか？」

？？？「貴様が主の心配をする必要はない」

葵「・・・〈エクス、ルミル。この拘束魔法を解けるか？〉」

エ「〈イエス、マスター〉」

ル「〈すでに解析は終了している〉」

葵「そうか。なら」

そういって少し腕に力を入れると、鎖はもろくも砕け散った。

葵「弱いな。これで拘束？」

？？？「なっ！？」

後ろの方で、金髪の女性がびっくりしているようだが、気にしない。それよりはやてだ。

？？？「とまれ」

？？？「じゃねぇと、どうなるか分かってんのか？」

ピンクのポニーテールの人は剣、幼女はハンマー。

葵「黙れよ」

？？？「「！？」」

葵「どうなるか分かっているのかだと？　貴様らの方こそ分かっているのか？　貴様らを殺すことなど赤子の手をひねるより簡単だぞ？」

二人は、まぁ、顔が真っ青だわな。

そんなことよりはやての方が心配だ。何かされてなければいいんだが。

そういってはやての脈を確認すると、

葵「脈拍正常。ただ、気絶しているだけか」

そういってはやての寝ているベットのすぐそばにある椅子に腰かける。

葵「さて、貴様らは何者だ？」

すると、犬耳を生やした人？　でいいのか？

？？？「我等は主を護る守護騎士ヴォルケンリッターだ」

？？？「ザフィーラ！？」

ザ「構わん。それにこいつは信用に値する。もし我が逆な立場なら同じことをしていただろう」

？？？「・・・・・」

ザフィーラという者が言った言葉に周りが黙りかけた。

葵「なるほど。守護騎士ね。主を護り主の盾となり、主の剣となる。そのものが急に現れ、主を気絶させるとはね」

ヴォルケンズ「「「「うっ」」」」

葵「まぁ、その辺はどうでもいい。私の名は神無月葵。この者、ある事情から八神はやての家に居候させてらっている。そこにいる後ろの狐は・・・・まぁ、はやてが起きてから説明しよう。それより、ザフィーラでいいか？」

ザ「あぁ」

葵「外出するときはその耳としっぽを隠しておけ。この世界では魔法が一般的な代物ではない」

ザ「分かった。注意しよう」

とりあえず、諸注意やら、こちらの魔法の存在が確認されていないなどの話を一通りしはやてが起きるのを待った。

第四話

第四話

数分後はやてが起き、闇の書の説明を始めた。

は「なるほどね。で、次は葵君の番なんやけど？」

シ「主はやて？　その少女は女の子では？」

は「いややな～、葵君は男の子やで」

葵「正真正銘のな。あ。あと孤狐耳をふさげ。あとはやては」

そういってはやての耳をふさぎ、私は魔法で耳栓をした。

シ・ヴィ・シャ「「「えぇえええええええええええええええええええええ！！！」」」

まぁ、予測通りだな。ザフィーラは声は出していないが表情が驚いている。はやてもいやか。顔が赤いしな。

さて、説明に戻るか。そう思いぱっとはやての耳から手を放すとちょっと残念そうなはやての顔があった。

葵「落ち着いたか？　一応私について説明するぞ。私は簡単にいうと私はここの世界の住人ではない」

シ「どういうことだ？」

ピンク色のポニーテールの女性、烈火の将シグナムだったか？
彼女が質問してくる。

葵「平行世界。簡単にいうと【ｉｆ】や【もし】と言われている確率の世界から来た。たとえばはやてと私が出会わなかった場合の世界、はやてがヴォルケンズと出会わなかった場合の世界。そう言った確率の世界の一つから来たというわけだ」

そこから平行世界の説明と、どういう世界から来たのかという話をした。無論、リンディ提督に話した過去の話はさすがにしなかったが。

は「へぇ～。つまり、葵君も魔法は使えるけど、シグナム達とは違う魔法をつかうんやね」

葵「あぁ。最も簡単にいうと御伽話やＳＦ、そう言った類で使われる魔法だ。現に孤狐だって」

そういってみんなは孤狐の方を見ると、孤狐はザフィーラと話をしてた。

孤「しかし驚いたな。あんたも神の類なの？」

ザ「我は守護獣だ」

は「・・・・孤狐がしゃべったー！？」

そうだった。孤狐の説明を忘れていた。

葵「孤狐。元に戻っていいぞ？」

孤「そう？　じゃあ」

そういって、孤狐は人型をとると全員がかなり驚いていた。

は「孤狐って、人間やったんか！？」

葵「違う。どちらかというと神の分類だ。簡単に言うとお稲荷様、というたぐいの神だな。確か母親が宇迦之御魂神（うかのみたまのかみ）で、京都の伏見稲荷大社の主祭神の娘だ」

ヴィ「もっと分かりやすく説明しろ！」

と、幼女。ヴィータだったか？　その子がかなりいらついている。めんどくさいなとりあえず孤狐との関係と孤狐がどういう存在なのかを簡単にまとめて説明した。

葵「簡単に言うと孤狐は神様。私と孤狐の関係はやてとヴォルケンリッターのような関係。お前らの中で一番近いとすればザフィーラだろうな」

ヴィ「そうか」

そこからは、またそう言った説明をしていただけなので割愛させてもらう。

葵「しかし、いきなり大所帯になったな」

は「そやな。でも、分かったことが一つだけあるで！　闇の書の主

として守護騎士みんなの衣食住きっちり面倒みなあかんゆうことや。幸い住むところはあるし　料理は得意や　みんなのお洋服買うてくるからサイズはからせてな」

　すると、みんなの顔がなにいってるのこのひと?みたいな感じになっていた。

葵「料理ぐらいなら私も手伝おう。服に関しては・・・買った方が早いか」

は「ん?　葵君は他にもいい手段知っとん?」

葵「まぁ、作ろう思えば無理ではない。昔、というか前世に何回か作って金にしてたしな」

は「そっか。じゃあそれお願い!」

葵「・・・・はい?」

は「そやから、それを創ってくれへんかっていっとるんよ」

葵「・・・わかった。何着か試すからそれを試着てくれ。あと、下着に関しては・・・買ってきてくれ」

　その後、服を何着か作り、シグナム、ヴィータ、シャマルに渡しザフィーラと私は外に出た。

　その時なぜか孤狐もいっしょに試着してたな。

　外に出ているときに、ザフィーラが、

ザ「葵殿。先ほど言っていたことはすべて」

葵「あぁ、事実だ。嘘も何も言っていない」

ザ「さみしくないのか？」

葵「寂しいかと聞かれると答えはノーだ。はやてがいて、新たに君たちも家族になった。賑やかな家族がいるんだ。それのどこがさみしいというのだ？」

ザ「我らを家族として見るのか？　我等はプログラムだぞ？」

　こいつらも自分を卑下してみるか。家臣は主人に似ると言うが、まさかな。

葵「プログラムだろうがなんだろうと関係ない。お前らは生きているんだ。命があるんだ。なら幸せになる権利も未来を見る権利もある。当然なことだろう。ただのお飾りの人形じゃないのだろ？」

ザ「生きているかどうかはわからない。だが人形ではない。意志もあり考える力もある」

葵「なら生きてることとイコールだ。それに八神家の家主が家族といったのだ。ならお前らも八神家の一員だろ。私もそれに異存は無い」

ザ「そうか。ありがとう。葵殿」

　感謝をされることはしていないのだがな。すると、中から入るよ

うに声がしたので入ると、まぁ服に着替えたヴォルケンズ達がいた。

ＳＩＤＥシグナム

神無月が作った服を着てみると、どれもこれもサイズが合う者もあれば、合わないモノもある。まぁ、サイズを知らないのだ。仕方ないか。

シャ「あら、これかわいい」

シャマルは何やらはしゃいでいるが服など着れれば良いのではないのか？

とりあえず動きやすそうなモノを選んで私はそれを着た。

扉の近くの壁にもたれていると、扉の向こうから、ザフィーラと神無月のしゃべり声が聞こえてきた。

ザ「葵殿。先ほど言っていたことはすべて」

葵「あぁ、事実だ。嘘も何も言っていない」

ザ「さみしくないのか？」

そうだ。あんな小さい子供が見知らぬ土地に降り立つのだ。どれだけ不安でさみしいか。そのとき私もそう、彼が言うだろうと思った。だが、

葵「寂しいかと聞かれると答えはノーだ。はやてがいて、新たに君たちも家族になった。賑やかな家族がいるんだ。それのどこがさみしいというのだ？」

我々もなのか？　あって間もないと言うのになぜ彼はそうも我々を信じられる。

ザ「我らを家族として見るのか？　我等はプログラムだぞ？」

葵「プログラムだろうがなんだろうと関係ない。お前らは生きているんだ。命があるんだ。なら幸せになる権利も未来を見る権利もある。当然なことだろう。ただのお飾りの人形じゃないのだろ？」

幸せか。我等の手は血に染まっているのにか。それでもつかんでいいのか？

ザ「生きているかどうかはわからない。だが人形ではない。意思もあり考える力もある」

葵「なら生きてることとイコールだ。それに八神家の家主が家族といったのだ。ならお前らも八神家の一員だろ。私もそれに異存は無い。仮に私が君たちのマスターであってもおそらく同じ家族として見ていただろう」

ザ「そうか。ありがとう。葵殿」

さっきまで敵対していたが、あれは主はやてが心配だったから取った行動。そう考えればすべてに納得がいく。

すると、主はやてが入ってきていいというのを合図に神無月とザフィーラが入って来た。だが、ザフィーラは服を着ようとしない。

シャ「ところでザフィーラの服はいいの？」

ザ「我はこれになれる」

そういうと一匹の大きな狼になった。

ザ「これになれるから構わん」

葵「・・・・・・」

神無月がなぜか黙って狼になったザフィーラを凝視している。

ザ「・・・葵殿。どうした」

葵「いえ、ザフィーラ。お願いが一つあるのですがよろしいでしょうか？」

神無月の眼が異常に輝いている。

ザ「あぁ、構わんが」

葵「なら！」

そういうと、さっきまでいた場所に神無月はおらず、いつのまにか神無月はザフィーラに抱きついた。

葵「うぅ～ん、いい毛並み。なかなかの上等な毛並みです。ふかふかです！　もふもふです！　はぁ～、幸せです♪」

なんだ、あの幸せ空間は？　しかもまんざらザフィーラもいやそうではない。

孤「いいな、あれ」

孤狐、なぜ指をくわえてあの空間を見る。

は「なぁ、孤狐さん。あれ、なんなんや？」

孤「ん？　あれ？　葵の癖。かわいいモノや動物好きなんでそれらを発見するとああなるの」

は「かわいいモノやったら人は／／／？」

主はやて！？　なんでそこで顔を赤らめているのですか！？

孤「さすがにそれは犯罪になるから手を出さないの」

は「まぁ、そやな。でもあれは・・・・」

主はやてが言うのもわかる。あそこにいる神無月はまるで別人だ。私たちが最初であった時に殺気を飛ばした者とはまるで違う。あの時の殺気、まるで本当に殺気だけで人が殺せると思ってしまうほど。だが、先ほどあの者が言った言葉にウソ偽りはない。彼のような者が騎士というのだろうか。そう思ってしまう自分がいる。

ＳＩＤＥＯｕｔ

しかし、どうしたものか。

は「なぁ、どないしたんや。さっきから何か考えごとしとるようやけど？」

葵「え？　あぁ、はやてか。あの黒やけになった家をどうしようかと思ってな」

シ「黒やけの家？」

ヴォルケンズになぜはやての家に居候になることになったのかの理由を話した。

葵「というわけ」

ヴォルケンズ「「「「「・・・・・」」」」」

まぁ、予想通りだな。

シャ「よ、よく生きていましたね」

えぇ、まぁ私もそう思いましたよ。

シ「雷直撃。それだけでなく、なんの怪我も負わなかった・・・・」

不思議ですよね。

ヴィ「お前本当に人間か？」

半分精霊の血が混ざっていますよ。ヴィータ。

ザ「・・・まぁ生きているんだそれでいいだろう」

そうですね。ザフィーラ。

と、それぞれの感想にうなずく。

は「ところで葵君。あの家どないするん？」

葵「もう住める云々ではないだろう。業者に頼んで壊すことにしよう」

はやて「で？　その後はどうするん」

葵「新しく建て直そうかとも思っている」

は「なら！」

はやてが、何かとてもいきごんで、

は「私の家に住んだらいい！」

葵「は？　はやて、私は立て直すと」

は「すんだらええ！」

葵「いや、だから」

は「す・ん・だ・ら・え・え・の！　家主の私が許可しとんねんから！」

葵「迷惑では？」

は「かまへん！　部屋は余っとるし」

葵「そっか。ではお言葉に甘えるとしよう」

そういって夜ももう遅いので寝ることになった。しかし、またここで問題があった。

葵「ヴィータ・・・だったか？」

ヴィ「あん？　なんだよ？」

葵「今日ははやてと一緒に寝てあげてくれ。交友を深めると言う意味でもな」

ヴィ「いいのか？」

葵「あぁ。はやてもいいですか？」

は「ＯＫや！　いこヴィータ、孤狐さんもいこ」

ヴィ「う、うん」

孤「さんはいらないよ～。じゃあ変身！」

そういって孤狐は子狐モードになってはやての後を追った。

葵「あと、シグナムとシャマルですが、余っている部屋の布団を明日洗濯して使えるようにしますので、申し訳ないが私の部屋のベットを使ってくれ」

シ「いいのか？」

シャ「でも、その申し訳なくて」

はぁ、この人たちは自覚は無いのか？

葵「いいか？　あなた方は誰が何と言おうと女性だ。女性がソファーや地べたで寝るなどもってのほか。自分の体を多少はいたわってください。いいですね？」

シ・シャ「「は、はい」」

葵「あと、男くさいかもしれませんが、そこは申し訳ありませんが」

そういって部屋について、二枚毛布を取り出す。

シ「・・・なぁ、神無月。ここはお前の部屋なんだよな？」

葵「えぇ。そうですが、どうかしましたか？」

シャ「いえ、一部だけすごいメルヘンだな～って」

メルヘン？　あぁ。あそこか。

シャマルがおそらくメルヘンだといったのは本棚の隣にあるカラーボックスを横に二列並べた場所。そこにあるのは大小色とりどりのコレクション（ぬいぐるみ）だ。

葵「私のコレクションだ」

シ「・・・お前のコレクションなのか？」

シャ「えっと、ザフィーラを抱いていたときに孤狐さんからききましたが可愛い物好きと」

葵「はい。犬より仔犬、猫より子猫、後ぬいぐるみとか」

シ「まさかとは思うが人は・・・」

葵「しませんよ。犯罪ですよそれ」

シ「あぁ、そうだな。じゃなければ「あぁ、ただし許可、了承、承認をいただいたらするかもしれませんが」・・・本気か？」

葵「はい。相手から了承などを得た場合のみですが」

シャ「・・・ま、まぁ、たがいに許可しているからいいんでしょうね」

葵「今日はもう遅いですし、ゆっくり休んでください。では、お休み」

そういってザフィーラのいるリビングに向かい毛布を渡し、ソファーでその日は就寝した。

第五話（前書き）

今回は短めです

第五話

第五話

ＳＩＤＥシャマル

不思議な子ね。はやてちゃんも今までの主と違う。葵君はもっと不思議。主じゃないのにもかかわらず私たちを受け入れた。

シ「なぁ、シャマル」

シャ「なにかしら？」

シグ「あの子供、神無月といったか。あいつは、変わっているな」

シャ「どういうこと？」

シグナムがそんなことを言うなんて珍しいわね。

シ「あいつの背中を見た時、怒りと同時に悲しみわいた」

言ってることがむちゃくちゃね。それにあって間もないのにそんなことわかるわけがない。

シ「なぜかはわからんがそういう感情がこみあげてきたんだ。まるで自分自身の背中を見ているようで」

シャ「そう。でも、それなら誇りと思うんじゃないの？　なんで怒

りや悲しみなんかしら？」

シ「分からん。あと、シャマル。見たところ神無月は主はやてと同い年だ。にもかかわらず私とヴィータを一瞬にして黙らせる殺気、さらに我らを簡単に殺せるといったのだ。お前があいつの立場なら同じセリフを吐き実行できるか？」

シャ「・・・無理ね」

でも、あの時の葵君なら可能だと思ってしまう。ほんとうに私たちを簡単に殺してしまえるような気もした。

シ「あぁ。だから私も真っ先に、主はやてに嫌われてもあいつを排除すべきだと思ったんだ。だが、ザフィーラと話しているのを聞いてな」

どんなことを話してたんだろう。やっぱり、彼の魔法のことなんだろうか。

シ「彼は私たちのことを家族として見ているらしい」

シャ「・・・・え？」

シ「そうなるのもわかる。だが、ザフィーラはその真意も確かめたらしい。それを踏まえたうえで言ったらしい。プログラムである私たちでも生きていることには違いはない。なら、幸せを、未来をつかんでもいいんだとな」

今回は幸せな場所に来た。そう心から思ってしまった。

シャ「こんかいは、主だけじゃなくて、友達にも恵まれたみたいね」

シ「あぁ」

それに、

シャ「この布団に包まれてるとなんか幸せにならないシグナム？」

シ「ん？　そうだな。なぜか心が温かい」

あれ？　そう言えば、この布団って・・・・あ

シャ「ねぇ、シグナム」

シ「なんだ？」

シャ「この布団って彼の、葵君の布団じゃなかったかしら／／／？」

シ「／／／！？　なななななにをいっているんだ！？」

あら、顔真っ赤。こういうシグナムも新鮮ね♪

シ「だが、その、いやでは、ないな・・・・／／／」

シャ「え？」

シ「な、なんでもない／／／！　寝るぞ！」

そういってシグナム反対を向いてしまった。

シャ「えぇ・・・」

まさかね。

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

第六話（前書き）

感想いただきました！！
これをばねにさらに精進していきたいと思います！！！

第六話

第六話

葵「さて、そろそろエクスとルミルの定期健診でもしようかと思います」

そういえばあの【不の者】以降あんまりメンテナンスしてなかったな。

はやて「？　誰やそれ？」

葵「簡単に言うと、私のデバイス。まぁ、戦闘におけるパートナーですね」

シグナム「ほぅ。つまり、あちら側のデバイスか」

葵「えぇ。というわけで行ってきます。一時間後には「ちょい待ち」はい？」

すると、肩にはやての手がのっかる。

はやて「どこにいくんや？」

葵「え？　ですからメンテナンスに」

はやて「葵君。葵君は魔法使いで、こっちの世界は魔法に関する知識は一切なし。つまり修理する場所もない。つまりや！　葵君はどっかの世界にワープするつもりや！」

・・・当たらずともとうからず。なにこの推察力。

葵「・・・まぁ、ご名答と言えばご名答だな。折角だから、みんなとハイキングとでもしゃれ込むか」

それからすぐに孤狐、シャマル、ヴィータ、ザフィーラが居間に下りてくる

全員が来たのを確認し鍵を取り出す。

はやて「どこの鍵や?」

葵「私の心の。まぁ、見てればわかる。あと、孤狐、酒は出さないから」

孤「えぇ～、ケチー！」

葵「はぁ。とりあえず。心の鍵よ、我が心の門を開け」

そういって地面に鍵を落とすと吸い込まれるように鍵が沈み波紋が広がった。それと同時に目の前に大きな扉が出てくる。

葵「では参ろうか」

そういって全員が門をくぐると、

は「うわぁ～～～」

ヴィ「すげぇー・・・」

シ「これは・・・・」

シャ「綺麗です」

ザフィーラ「・・・うむ」

一面桜。散ってもまた咲く。これが私の心の世界らしい。この核となる部分は増築可能な部位と違い変更が効かない。故に桜＝私見たいだという方程式が成り立つというわけだ。

葵「ここでの一日は外では一時間だ。だから勉強、修行、調べ物の時にはうってつけなんだ」

は「はぁ～、便利やな。シグナム達もできるん？」

シ「いえ、これは私たちには無理です」

葵「エクス、ルミル。具現」

すると、エクスとルミルが人型になる。

葵「自己紹介」

エ「マスターの神姫。白騎士のルミルです！」

ル「同じく、マスターの神姫。黒騎士ルミルだ」

シ「ユニゾンデバイス！？」

葵「まぁ、そんなところ。後これを君たちに渡しておこう」

そういって心の世界への鍵を渡す。

は「これ使ったらいつでもここに来れるん？」

葵「あぁ。だが、一応その時は私に一声かけてくれ」

全員「わかった」

さて、あとは一日が経過するのを待ちますか。あ、そういえば。

葵「孤狐」

孤「ん？　なに？」

葵「パス契約の行使をしたいんだが、いいか？」

孤「ＯＫ。あ、でも一つだけ言っとくけど、力の行使は葵がすることになってるよ？」

葵「・・・は？　普通私がサポートに回るんじゃないの？」

そう。なぜパス契約が普通人には無いのか。それはパス契約を執行できるのは精霊のみだ。契約後は精霊と人が一体となり戦闘をする。その際、人が主力となり、精霊はサポートに回る。

だが、私は半精つまり半分精霊の血が流れている。つまり主力かサポートどちらかと聞かれれば間違いなくサポートに回る。

孤「まぁ、そうなんだけどね」

あれ？　口に出てたか？

孤「葵の考えなら分かるって。で、あんたは完璧な精霊じゃない。血で言うなら５０％精霊、５０％人間。これはわかるわよね」

葵「あぁ」

孤「で、あたしは１００％神。どっちの血が強くどちらが優先されるかもわかる？」

なるほど。つまり孤狐の血が優先され、ここがサポートに回る。半分でも人間の血が入っている私が主力となる。そういうわけか。

葵「あとで、力の確認もしたいので付き合ってもらえるか？」

狐「了解」

さて、まずは神姫のメンテナンスを開始するか。

葵「少し時間を喰うから好きにしてもらって構わない。ただ迷うなよ」

そのまま、研究室に向かおうとした。そう、そのまま行こうとしたんだ。すると、

シ「少し待て、神無月」

肩を掴まれ、そのまま１８０。回転されました。すると、そこに

は今まで見たことのないかなり真剣な目をしたシグナムがいた。

葵「・・・・な、なんでしょう、シグナムさん？」

昔のような口調になっている。それほど恐ろしいんだ今のシグナムは！

シ「ここの使用目的で【修業】と出たがどんな場所があるんだ！？」

葵「え、えっと、さまざまな戦場を想定しているので、火山、山岳地帯、雪原地帯、熱帯、ジャングル、海など地球のありとあらゆるものもあれば、宇宙を想定した無重力地帯、重力魔法を想定したものなど様々ありますが」

シグナム「そうか！」

すごい目が輝いています。なんで？　なぜに？

葵「使いますか？」

シ「いいのか！？」

すごく目が輝いてる。なんか、すごく怖い気がする。

葵「・・・・えぇ。一応使い方を説明しておきますね」

そういって移動方法の仕方、敵の設定などを教えた。それが終えると、レヴァンティンだっけ？　それを持って移動した。

葵「バトルジャンキーだったのか。シグナムは・・・・」

そうつぶやきながら、おっと、そういえば研究室に向かいエクスとルミルの定期検診を行わなきゃ。

目的地に向かって私は歩み出した。

ＳＩＤＥはやて

それにしてもすごいわ～。こんなにも大量の桜の木。それもすべてが満開で散り際がとってもきれいやわ～。

私とヴィータ、シャマル、ザフィーラは屋敷の庭の縁側から桜を見ていた。

孤「どうここ？　葵の世界は」

は「ん？どういうこと？」

ここって葵君の世界ということやろか。でも、それならかなりきれいやと思うけど。

孤「ねぇはやてちゃん。古来の日本人は桜よりもね梅の花を好いていたらしいの」

はやて「ん？　なんでや？」

孤「まぁ、歴史的に古代中国、唐からの影響というのもあるんだけどね。けどね、遣唐使の廃止や唐の滅亡によって唐文化が衰退。そ

の後桜の人気が平安時代には急上昇したの。でも何より現代日本における桜の習慣はそれよりもその儚さだろうなってボクは思う」

は「散り際が一番きれい。て言うこと？」

孤「うん。ぱっと花を咲かせた後、散って行く桜の儚さや潔さ。それを人間にとっても当てはまると日本人は考えてるの。それは葵の心はまさにそうなのかなって。桜のようにはかなく散るって」

どういうことや？　葵君は生きとる。桜のように散って無いやん。

孤「葵はね、一回死んでるんだよ。世界を敵に回して」

孤狐さんはゆっくりと語りだした。葵君がどういう存在で、どうして生まれたのか。その後実験やら、投薬、魔法の改変などで今に至る。そこから解放されたと思ったら次にまっとったのは葵君をそこまで貶めた人間が世界に宣戦布告した。それを抑えるために葵君が立ち上がった。そしてその戦争で勝利を勝利で収めたと思ったら、世界が葵君を殺すように命令したこと。

は「・・・ひどい」

その場にいた全員が全員暗い顔しとった。シグナムもおそらく念話で聞いとるやろう。

ヴィ「でも、なんであいつは逃げ出したんだ？　世界を敵に回してもあいつの力なら勝てただろう？」

孤「余計な人間を巻き込みたくなかった。戦争で多くの人間が体はむろん心も疲弊しきっていた。それでまた周りの人間を巻き込んで

戦争を引き起こせばそれこそ世界は終焉に向かう。なら自分一人の命で世界が救われるのなら。って考えたんだよ。おそらくこの心の世界はそれが影響してるんじゃないのかな？」

孤狐さんはさみしそうな顔で桜を見つめた。

は「葵君は何を求めてとるんやろ」

支えたい。何かを求めるんやったらそれを叶えてあげたい。

孤「ん～。もう叶えてるんじゃないかな？」

ヴィ「なんでそんなことといえるんだよ？」

孤「簡単。葵と久しぶりに会ったら昔みたいに悲しい笑顔じゃなかった。本当に心から笑ってくれていた。そして、はやてちゃんとの生活、ヴィータちゃんやシャマル、シグナム、ザフィーラが加わってさらに笑う機会が増えた。それだけ幸せなんじゃないかな。もし葵の求めることを叶えたいなら今まで通りにしてあげて」

は「もちろんや！」

だって、葵君は家族であって、私の初恋の人や！

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

定期検診も終わり、みんながいる場所に戻る。エクスとルミルはそのまま人型を保っている。

さて、戻ったらなぜかみんなが一瞬だが暗い顔をした。・・・つまり、

葵「・・・・孤狐。お前、話したな」

孤「え!?　な、ナンノコトデショウ?」

なら、なぜ目を合わさない。なぜ目をそらす。そして、はやてたちもなぜ目をそらす。

葵「はぁ～。そのうち話をする予定だったから別にいいがせめて本人の了承を取れ」

孤「ご、ごめん。だからその、フライパンの刑だけは・・・・」

葵「あぁ～。あれは男性専用だ。安心しろ」

孤「ほっ」

そりゃ女性の頭にフライパンでぶん殴るのはまずいだろ。せめてげんこつか、チョップ、デコピンぐらいだろ。

葵「あれ?　ところでシグナムはまだ戻っていないのか?」

見渡すと、縁側で緑茶を飲んでほっと一息しているはやて。せんべいをバリボリ食べているヴィータ。日向で犬「我は狼だ」・・・狼姿で休んでいるザフィーラ。シャマルは・・・

葵「あれ?　シャマルもいない」

孤「ん？　シャマルなら台所に行って何か作ろうとしてたよ？」

は「シャマルって料理作れるんやな。これやったら三人でまわってつくれるな♪」

葵「そうだな。あれ？　ヴィータ、ザフィーラなんで顔が青くなっているんだ？」

　すると、ヴィータは幽霊でも見たようにガタガタとふるえ、ザフィーラは人型に戻り臨戦態勢をとっていた。

ヴィ「ザフィーラ！　シグナムを今すぐ呼べ！　あたしはシャマルを抑える」

ザ「承知した！」

　すると、ザフィーラはおそらくシグナムのいる訓練場所へ、ヴィータは台所に向かった。

葵「なにが起こったんだ？」

は「さぁ？」

エ「あれ？　ヴィータちゃん戻ってきたみたいだよ？」

　すると、エクスの言うとおり今さっき出て行ったはずのヴィータが顔を青くして、

ヴィ「逃げろ！　じゃないと「お待たせしました～」遅かったか・・・」

ヴィータはｏｒｚとかなり落ち込んで、落胆していた。すると、エクスとルミルがシャマルの持っている鍋を見て、

ル「っ！？　マスターあれは危険だ！」

エ「い、色が！？　紫！？」

葵「・・・・シャマル一応聞く。何を作った？」

これは料理の色じゃない。むしろ科学、毒だ。誰がどう見ても毒だ。

シャ「クリームシチューよ？」

は「葵君。私はクリームシチューってクリームのような白色やからクリームシチューって言うんやと思うんよ」

と、はやてが私にシャマルに聞こえないように話してくる。はやてよ。私もそう思う。だが、シャマルのは明らかに紫だ。もしかしてどっかの世界では紫色のクリームシチューが、

―ボゴッ　ピッ

・・・今ボゴッて言わなかったか？　で、今飛んでいった紫色の液体が、畳について煙が上がっているんだが？

葵「・・・とりあえず食うか」

は・シ・ヴィ「「「えぇえええええええええ！？」」」

というかシグナム。戻って来たのね。

ザ「お前のことは生涯忘れん」

シャマル「はい。どうぞ♪」

そういってさらに置かれた紫色の液体と向き合う。スプーンで一すく・・・ジュ

葵「・・・・シグナム。お前はシャマルと同じベルカの騎士だったな」

シグナム「あ、あぁ」

葵「ベルカという国の料理は金属製のスプーンも溶けるのか?」

シ「そんなわけないだろうが!!」

とりあえず、行儀は悪いが皿から直接飲むか。一口口に含んだ瞬間。

葵「#$%$#$=?<*」

シャ「あ、葵君!?」

シャマルのその言葉を聞いて私は意識を手放した。

どれ位経ってだろう。私は再び目を開けるとそこに神がいた。

神「・・・なぜお前さんがここにいる」

葵「いいところで出会った。もう一つの願いが決まったぞ」

神「なに!?　本当か!?」

葵「シャマルの作る料理をどんな料理でも食べれるようにしてくれ」

神「・・・・・」

あれ。どうしたんだ神よ!?　お前はクソでもダメでも仮に神なんだろ?　全知全能のはずだ!

神「すまん。それだけはできないんだ。というか仮でもないしクソでもない!　れっきとした神じゃ!」

葵「なぜだ!?」

神「お前さんに直接加わるようにせねばならないんじゃ」

葵「・・・なら、シャマルの料理を食べても丈夫な内臓器官とシャマルの料理を誰でも食べれるような神の料理人の腕をくれ!　いや、ください!」

神「なぜ、そんなに必死なんじゃ?」

葵「今回ここに来る原因を作ったのがそいつだ」

神「・・・あの紫色のクリームシチューか?」

葵「あぁ、何度も三途の川を渡るのはごめんだ」

神「そうか。じゃが、二つ消費することになるが良いか？」

葵「構わん。背に腹は代えられない」

神「・・・わかった。じゃが残りの二つがこれとはな」

あほか！　あれを喰った後に贅沢を言っていられるか！？　まずはあれをどうにかしないと！

その後、神と別れ現世に蘇った。で、早速シャマルの料理を改造し、普通のクリームシチューにするとはやてから感動され、シグナムやヴィータからは救世主とあがめられ、ザフィーラは泣いて手を黙って握ってくれた。

・・・本当にこの能力もらってよかった。

第七話

第七話

翌日

葵「図書館？」

は「せや。そろそろ新しい本を読みたいから。付き合ってくれへんか？」

葵「あぁ。別にかまわない。ついでだしここら辺の地理を教えると言うことでシャマルとシグナム、ヴィータもつれて行くか」

は「おぉ、そやね。ヴィータ～、シャマル～、シグナム～」

はやてが二人のいるキッチンに向かう。さて、私は新聞でも読みながらコーヒーでも飲むか。

その後、準備を整え、図書館に向かっていると、

葵「（・・・この気配は魔法？　それになのはやフェイトのとも違う）〈孤狐、魔力を感じるか？〉」

孤「〈うん。確認した〉」

葵「〈では、一つはこちらでやる。もう一つを頼む〉」

孤「〈りょう～か～い♪〉」

葵「はやて、済まない。財布を忘れた」

シャ「葵君にしては珍しい忘れ物ですね」

葵「私だって人だ。失敗もする。おそらく玄関に置きっぱなしなんだろう。すぐに戻るから先に行っていてくれ」

は「いややな。まっといてあげるからすぐに戻ってきてや」

葵「ありがとう。シグナム、ヴィータ、シャマル。はやてを頼むぞ」

ヴィ「おめーに言われなくても分かってるって！　速くいって来い。はやてをまたすんじゃねぇぞ」

葵「あぁ」

まったく、どこのどいつだ？

しばらく行って人気のない場所に来て、

葵「・・・・・（どこにいる）」

？？？「にゃ～」

すると、そこに一匹の猫がいた。

ＳＩＤＥ？？？

あの子がそうか。

私の視線の先には闇の書の守護騎士と、その主、そしてイレギュラーの男がいた。

???「あ、分かれた？」

どうやら財布を忘れて家に戻るらしい。これはチャンスだ。

そのまま男の子を追っていると、近道なのか人気のない場所に来た。

???「ここなら」

そして、私は猫の姿のまま男の子に近づくと、

男の子「お、かわいいですね。おいで、チチチチ」

そういって手招きしたのでそのまま行くと、

―キュピーン

???（え？）

次の瞬間には男の子の手に抱かれていた。

男の子「至福のひと時ですね～。やっぱりこの抱き心地、毛並みのふかふか感！　たまりません！」

な、何この子!?　何者なの!?　な、撫で方がプロ!?　いえ、それ以上ある!?

すると、男の子の手が、急に止まり、

男の子「さて、一つだけ忠告しておこう。これ以上はやてにかかわるな。お前の主にも伝えておけ。さもなくば貴様も、その仲間も殺すとな」

???「!?」

急いでその男の子の腕から離れ、威嚇する。だが、

???（変身が、解けない!?）

男の子「この辺一帯に結界を張った。お前らの変身魔法だっけ？それを維持し、元の姿に戻さないようにするためのな」

何言っているんだ？

男の子「つまりこのエリアにいる以上お前は猫から元の姿には戻れないと言っているだ」

ば、バカな!?　そんな魔法聞いたこともない！

男の子「お前の主が闇の書とどんな関係があるかは知らない。だが、あの小さな命の灯を消すと言うならお前に一生の悪夢を見せるとお前の主に伝えておけ」

この子の殺気、なんて、重いんだ・・・。本当に9歳の子供!?

男の子「結界は解除した。去れ。そしてはやてやヴォルケンズ、そして私の目の前に現れるな。さもなくば、分かるな」

そういって男の子はその場から去る。恐怖、畏怖とはあの子のことを指すための言葉なんじゃいのかと考えてしまう。それだけ恐ろしい存在だ。

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

ＳＩＤＥはやて

は「騎士甲冑？」

シ「えぇ、我等は武器はありますが、甲冑は主より賜わらなければなりません」

シャ「自分の魔力で作りますから、形状をイメージしてたたければ」

は「そっかぁ～」

武器とか甲冑とか物騒やなぁ。私はみんなと一緒にいられればいいんやけどな。

は「そやけど私は皆を戦わせたりせぇへんから・・・」

ん～戦わずに、でも甲冑はほしい。どうしたら・・・あ！

は「服でええか？　騎士らしい服！　な？」

シ「えぇ、構いません」

は「ほんなら資料探して、かっこうええの考えてあげなな～」

　すると、後ろから、

葵「すまん。待たせたか？」

　葵君が戻って来た。ほないこか！　資料探しに！

ＳＩＤＥＯｕｔ

葵「〈そっちは片づいたか、孤狐？〉」

孤「〈えぇ。幻術でちょちょいと。といか弱いね、その管理局だっけ？　魔法使い〉」

葵「〈油断は禁物。とにかく警戒は怠るな〉」

孤「〈了解〉」

　とりあえずはやてたちの元へ戻るとしよう。そう思い、駆け足ではやてたちの元へ戻った。

葵「すまん。待たせたか？」

ヴィ「遅い。なにやってんただよ!?」

ヴィータが怒りながらこちらに迫って来た。

葵「なにをって、財布を取りに戻って来たんだ」

は「そやでヴィータ。葵君を悪気があってしたんやないし。それに、お詫びに好きなもんでも買ってもらおう!」

葵「・・・はやて、それは「ちなみに拒否権はないで？　家主命令や!」・・・わかった」

はぁ、財布の中身を見るとブラックカード、諭吉さんが、ひい、ふう、まぁ軽く十人はいるから大丈夫か。

さて、目的地の図書館・・・ではなく【といざ○す】というおもちゃ会社に来ました。なぜに?

葵「はやて。なぜおもちゃ屋さんに?」

は「あぁ、それはね――」

話を聞くとシグナム達の騎士甲冑を創るための資料を集めるためらしい。ガン○ムもモデルとかにでもするつもりか?

ヴィ「・・・・・・・」

シャ「ヴィータちゃん?」

シャマルがヴィータを呼び掛けたのでそちらの方を見ると、ヴィータは一つのぬいぐるみを凝視していた。

葵（あのぬいぐるみがほしいのか？）

そういってヴィータの方へ歩み寄り、

葵「ほしいのか？」

ヴィ「ち、ちげぇよ！」

そういってシャマル達の方へ向かう。すると、

は「〈あーあー、聞こえるますか？　葵君？〉」

葵「〈あぁ。聞こえる。というかはやても使えるんだな、念話〉」

は「〈シャマルに教えてもろうた。で、葵君。ヴィータにそのぬいぐるみを〉」

葵「〈無論だ〉」

ＳＩＤＥヴィータ

あの後、おもちゃ屋から出て服屋で服と下着を買いに行った。葵が作る服でもいいけど、下着は勘弁してくれってドゲザっていう恰好をして涙声で許しを請いていた。

葵（いや、それだけ精神的にきついんだ。だから、頼むから）

ん？　今葵の声が。んなわけねぇか。で、今はその帰り道だ。

は「ヴィータ。はい、これ」

はやてが紙袋を渡して来た。なんだ？

は「開けてもいいからな？」

はやてがそう言ったので、紙袋を開ける。

―ガサゴソ

そこにあったのはおもちゃ屋であたしが気にいったウサギ（？）のぬいぐるみだった。

は「それな、私と葵君からのプレゼントや」

ヴィ「え？　葵も？」

葵「家族の信頼の証。とでも言っておこうか？　それとも家族記念の品」

そういってあいつは微笑む。その笑顔は反則だ／／／。でも、いやじゃない。

・・・葵とはやてからのプレゼント。家族の証。

ヴィ「あ、ありがとう／／／」

出た声は思ってたより小さかった。

葵「ん？　どうした？」

ヴィ「なんでもねぇ／／／／！」

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

ＳＩＤＥはやて

あの後、夕飯を葵君と作り、今はシグナムにだっこしてもらい夜空を見てます。

は「うわぁ～、きれい」

今日は晴れてて良かった。満天の星空や。

シ「主はやて」

は「ん？」

シ「本当に良いのですか？」

は「なにが？」

シ「闇の書のことです。命あらば闇の書のページを蒐集しあなたは大いなる力を手に入れることができます。この足も治るはずですよ

？」

　足が治るという言葉を聞いて少し嬉しかった。でも、

は「あかんって。闇の書のページを集めるにはいろんな人にご迷惑かけなあかんのやろ？」

シ「え・・・」

は「そんなンはアカン。自分の身勝手で他人に迷惑かけるのはよくない。私は今のままでも十分幸せや。父さん母さんはもうお星さまやけど遺産の管理はきちんとおじさんがしてくれとる」

シ「お父上の御友人――でしたか？」

は「うん。おかげで生活に困ることもないし、それになにより今はみんながおるからな」

　そや。今は一人やない。しっかり者のシグナム。お母さん的なシャマル、元気なヴィータ、ペット（せめて守護獣で）今変な電波が？　まぁ、きにせん。ザフィーラに、大好きな葵君。みんながおる。

ヴィ「はやて！」

は「ん？　どないしたヴィータ？

ヴィ「はやて冷凍庫のアイス食べていい？」

シ「お前、夕食をあれだけ食べてまだ食うのか！？」

葵「良いんじゃないか？　育ち盛りなんだろ。後でちゃんと歯を磨

けよ」

ヴィ「もちろんだ！　それにはやての料理はギガウマだしな♪」

孤「ボクも食べる～♪」

は「しゃあないな。ちょっとだけやで？」

ヴィ・孤「「お～♪」」

そう言うと、孤狐さんとヴィータは冷蔵庫の方へ向かった。

は「シグナム」

シ「はい？」

は「シグナムはみんなのリーダーやから約束してな」

シ「はい？」

は「現マスター八神はやては闇の書になんの望みもない。私がマスターでいる間は闇の書のことは忘れてて。みんなの仕事は家で一緒に仲良く暮らすこと。それだけや。約束できる？」

シ「誓います。騎士の剣にかけて」

ありがとなシグナム。

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

第八話

第八話

シ「ん？　シャマル、主はやてとヴィータ、ザフィーラはもう行ったのか？」

シャ「えぇ」

朝食を終えるとシグナムが言った三人・・・二人と一匹は図書館に向かった。

さて、私は何をしよう。あ、そう言えばこないだはメンテナンスと試運転だけで終えたせいでパス契約の執行を忘れてた。

そうときまれば今日のやることはそれだな。

そう思い席を立つと、シグナムがこちらを振り返り、

シ「どこへ行くんだ？」

葵「ん？　いや、今日は暇なのでこないだできなかったことを」

シャ「あら、興味あるわ」

・・・しくじったか？

エ「〈はい。おそらく。シャマルさんはともかく・・・・〉」

ル「〈シグナムは・・・〉」

シ「ところで何をするんだ?」

葵「イエ～。ベツニ、タイシタコトデハ・・・・」

二人がすごい見つめてくる・・・・え、何これ・・・ヤバイ。頭がそう言っている。

孤「ん?　あれ、葵。今日はパス契約の執行実験行うんじゃなかったの?」

あ・・・・終わった・・・・

シ「なんだそれは?」

孤「簡単に言うとボクと葵が合体するの!」

シャ「・・・・葵君説明お願い」

まぁ、今ので説明すると卑猥な方に聞こえるな。というかシャマルとシグナムの視線が痛い。違うからね。

葵「シグナム、確かエクスとルミルを見た時ユニゾンデバイスといったな」

シ「あぁ」

葵「要するにそれを私と孤狐が出来るように契約をしたんだ。それがどれほどのものかを測る力量実験を行おうと話していたんだ」

シ「そんなことができるのか！？」

葵「まぁ、説明はあっちに行ってからにしようか」

そういって扉を開き中に入る。その後は直接コロッセオに向かう。
コロッセオの名の通りローマのコロッセオ風に作ってみた。

葵「で、さっきの契約の説明だが――」

そういって簡単に魔力回路契約（以後パス契約）の説明を終えると、

シ「なるほど。確かにそれだと自分のとっても相手にとってもメリットはでかいな」

まぁ、そうなんだけど、最大のデメリットは契約の執行の仕方だ。
まぁ、孤狐以外はもうしないだろう。

シャ「でも、どうやってその契約をするんですか？」

シャマル。今お前は禁止区域に足を突っ込んだぞ。

葵「・・・・キス（ぼそ）」

シ「なに？」

シャ「え？」

・・・・もう言いたくない！

シ「男ならしゃきっといえ！」

葵「怒らない？」

恥ずかしいのか目から汗と、顔が赤いのがわかる。

シ「うっ・・・／／／　や、約束しよう。な、シャマル（何だこの表情は！　か、かわいい／／／）」

シャ「え、えぇ・・・／／／（男の子と分かっていてもこの表情はずるいです／／／）」

作（お忘れかもしれませんが葵は女顔です。まぁ、ギャップもあるんでしょうね）

葵「えっと、キスをする」

シ・シャ「「・・・は？」」

葵「だからキス！　接吻！！」

もうやけだ！

シ「わ、分かった、分かったから。で、その、つまり葵は、孤狐とその、き、ききききキスをしたんだな」

孤「は～い／／／」

シ「そうか（何だろう。孤狐がうらやましい。というかずるい）」

シャ「そうですか（孤狐さん。うらやましいです）」

葵「で、契約の証がこれ」

そういって私は右手を、孤狐は左手を出した。

シ「同じ模様だな」

葵「これが契約の証とパスをつなぐ重要なモノだ。あと、契約者のことはこの白書に書かれる」

そういって一冊の本を出した。

シャ「闇の書を白くしたみたいですね。これには何が？」

葵「契約者。といってもまだ孤狐しかいないんだが孤狐の魔力値、魔力量、属性、契約を執行した場合に何がつくのかと他にもこと細かく書かれている」

シ「ほぉ。つまりお前は今日はその契約を使うということか？」

・・・やっぱりこうなるのね。シグナムがバトルジャンキーであることはこないだので薄々分かっていただけど。というか、いつの間にセットアップしたんだ！？　すでにバリアジャケットもレヴァンティンもかまえているし！？

葵「え、えぇ。まぁ・・・」

シ「なら、練習相手が必要だな？」

葵「・・・・〈シャマル。どうにかならないか？〉」

念話で現状の回避を試みようとするが、

シャ「〈ごめんなさい、葵君。これぱっかりはどうしようもできないわ・・・・〉」

やっぱり・・・・はぁ、仕方ない。

葵「良いだろう。相手になってもらおう。烈火の将シグナム。孤狐、準備」

孤「りょ～か～い♪」

葵「エクスと、ルミルは今回の戦闘を録画、分析を頼む」

エ・ル「「了解」」

では、参るとしましょう。

シ「な、なななな、何をしているんだ!?」

葵「なにって？　こうしないと執行できないんだ」

孤「行くよ」

孤狐の眼はいつになく真剣な目だ。

孤「我汝に問う。汝何のために力を欲す」

葵「我、護るために力を欲す」

孤「誰を」

葵「大切なものたちを護るために」

孤「汝の意志しかと受け止めた」

　すると、周りを水色と白銀の光があたりを包み込んだ。光が晴れる。

ＳＩＤＥシグナム

　い、いいいきなり神無月と孤狐がだ、だだだだ抱き合い、なにやら詠唱みたいなものを唱える。そして唱え終えるとあたり一帯に光が周りを包む。そしてその光が晴れるとそこにいたのは背丈は葵位の身長。

　だが、神無月ではない。髪の色は水色がかった白色。長さは腰にまで上る。

　そして何より違うと言えるのは髪の色と同じししっぽが九尾、さらに獣、ザフィーラや孤狐のような耳が生えていた。

服装は神社の神主が来ていそうな服を着ているな。

シ「それが、孤狐とユニゾンした時のお前か？」

葵「見たいだな。というか、耳、しっぽ・・・ふかふかです～」

なにやら自分のしっぽを抱いて幸せそうな神無月がいた。

葵「と、それよりも早速始めますか。試合形式だがどうする？」

シ「そうだな。非殺傷設定でどちらかに傷をつけた方が勝ち。でどうだ？」

葵「妥当だな。では審判兼回復にシャマル頼んでいいか？」

シャ「はい」

そういって神無月は反対側に向かう。

シ「武器は無いのか？」

そう。神無月は武器は一切持っていないのだ。剣も、ましてや盾すら持っていない。

葵「まずは実力を測らせてもらう。それからだ」

ほぉ。私の実力を測る。ならばこちらも見さえてもらおう。

シャ「では、始め！」

シ（先手はもらう・・・なっ！？）

先ほど、そうほんの一瞬前まではそこに葵はいた。

葵「狐火」

シ「ふっ！」

先ほどまでいた場所には青い炎がそこを燃えていた。ただの火炎玉を投げただけか？

葵「炎火狐刃（えんびきつねは）」

すると、先ほどの火が剣状になりそれが矢のようにこちらに向かって飛んできた。

シ「だが、追尾性は無いのだろ！」

おそらくこの刃の弱点は追尾性がないこと。なぜならそのまま一直線に飛んで行くのだ。

葵「そう。追尾性は無い。だがな」

すると、私の周りを複数の見たこと無い魔法陣を囲む。

葵「発現場所を選ばないんだ。炎火狐刃！」

シ「くっ」

それを何とか防ぐ。だが、発現場所を選ばないなんてでたらめなんだ。

葵「シグナム。言っておくがこれでもかなり抑えている方だぞ？本気を出せばここを中心に半径５０キロのクレーターが出来上がる」

シ「はぁ！？」

葵「あくまでも本気でいけばだ。さて、どうする烈火の将。怖気づいて降参するか？」

降参？　まさか。

シ「フフフッ。久しぶりだ。これほど心躍るモノと戦うのは！」

葵「やれやれ。ならこちらも少し力を出すか。参れ【白桜（しろさくら）】」

すると神無月の手におさめられたの一本の真っ白な剣。あれは日本刀と言うモノだったか。レヴァンティンよりも細い。

シ「ベルカの騎士に一騎打ちで勝のか？」

葵「間違いなく勝てる」

シ「いざ！」

レヴァンティンで攻撃するもすべてかわされる。読み切っている！？

すると、

葵「円樹（えんじゅ）」

まるで、円をその場で描き、そして私の右腕を狙い蹴りを入れる。

それを、ぎりぎりで回避した。

葵「よけられたか」

―ドゴォオオオオン

その音を聞いて後ろを振り返ると、コロッセオの一部に何かをぶつけたような跡が残っていた。蹴りの風圧だけであれだけの威力だと!?

気付くのが遅かったら間違いなく右腕は使い物にならなくなっていただろう。

だが、後ろを向いたのがいけなかった。葵はそのすきを狙い。

葵「・・・・無名流、散り桜」

―シュッ

神無月の攻撃は隙をついての突き。それぐらい甘く見られているのか私は!?

シ「甘い！　なっ!?」

だが、一撃だけではなかった。速い、神速の速さといっても過言ではない。それぐらいの速度で繰り出す突きを防ぐの容易ではない。だが、一瞬動きが止まった。

シ（ここだ!）

葵「無名流、陽炎」

―フッ

切りつけるように剣を振り下ろすが、まるで影を着るように空を切り、そして

葵「チェックメイト」

私の首に神無月の刀が突き付けられた。

完敗だ。一太刀も交えることもなく、一撃も入れることができなかった。完全なる敗北。

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

シグナムが負けを認め勝利を手にした。だが、ある意味私も予想外だった。円樹をよけられるのは想定内であったが、散り桜を防がれたのは予想外だった。そのため陽炎を使わざる得なかった。

シ「見事だった。私の完敗だ」

葵「いや、シグナムも強い方だ。本来なら散り桜で蹴りをつける予定だったんですが」

シ「・・・お前は本当にでたらめだな」

そうか？　まぁ、鍛えた師匠方があまりにもでたらめだったから

な。

葵「・・・・はぁ～、嫌なもの思い出した」

シ「どうした？」

葵「いや、なんでもない。というよりシグナム。お前の敗因は何だと思う？」

シ「ん～、まず相手の力量を測り間違えた。そして未知の攻撃に対応できなかった。これか？」

葵「バカか」

シ「なに？」

葵「シグナム。お前の敗因は明らかに武器に頼り切っている。もしおまえはお前自身のデバイスがなかった場合、魔法がもし使えなかった場合。こういったありとあらゆるケースを想定して戦ったか？」

シ「・・・ないな。お前はあるのか？」

葵「まぁ、最初の時点でそこから入ったからな。体の基礎を作り、武器を持たない武術をマスターした後剣、弓、槍などといき魔法といったところか」

シャ「すごいですね」

葵「あのなシャマル。普通はこうだと思うぞ。武器が無くなって何もできずに死ぬなんて嫌だろ。最低でも護身術程度は身につけてお

くことを勧めるぞ」

幸いこちらの地球は魔法文化無いため魔法を使わない武術が発展している。ならそこから学べばいい。

葵「後は自由に過ごすといい。エクス、ルミル。報告を頼む」

そういってここでの一日はパス契約の能力を研究しようとしたのだが・・・

シ「神無月！　剣の修行に手伝え！」

葵「は？」

いや、ここからは自由行動であってですねシグナム、

シ「つべこべ言わずに手伝え！」

葵「え、え、えぇ！？」

そういって襟元をつかまれパス契約も解除されずにそのままシグナムの剣術の手伝い並びに最低限の護身術の手伝いをした。

その後、はやての家に戻ると、はやてが、

は「あ、葵君！？　ど、どないしたん！？　ちょ、なんでそんなにやつれとん！？」

そりゃ完徹でシグナムにみっちりと剣術やら武術やらを叩きこんだらこうなりますよ。

一方のシグナム、

シ「ヴィータ、今から神無月の世界で一戦どうだ？」

ヴィ「い、いや、やめとくよ・・・（じゃないと今は死にそうだ。非殺傷設定でも殺される！）」

と、青い顔で全力で首を縦に振ろうとしなかった。

第九話（前書き）

今回は短めです、

第九話

第九話

―海鳴大学病院

今日ははやての定期検診のため、石田先生の元へ訪れている。

石「シグナムさん　シャマルさん・・・ちょっといいかしら？」

石田先生から二人に話しがあるそうだ　。

なんだ？

ＳＩＤＥシグナム

シ「命の危険！？」

石「ええ。はやてちゃんの足は原因不明の麻痺だとお伝えしましたが、この半年で麻痺が少しづつ上に進んでいるんです。この二ヶ月は特に・・・このままでは内臓機能の麻痺に発展する危険性があるんです・・・」

シ「何故！　何故気付かなかった！！」

シャ「ごめんっ、ごめんなさいっ・・・私っ」

シ「お前にじゃない・・・自分に言っている」

そう　主はやての麻痺は病気などではなく【闇の書】の呪い・・・

　主はやてが生まれた時から共に有った【闇の書】は、主の身体と密接に繋がっていた。
抑圧された強大な魔力はリンカーコアがな主の身体を蝕み、健全な肉体機能どころか生命活動さえ阻害していた。そして、主が第一の覚醒を迎えたことでそれは加速した　。
それは四人の活動を維持するためごく僅かとはいえ主の魔力を使用している事も無関係とは言えないはずだった。

私はヴィータやザフィーラに現在の主の状態を話した…

ヴィ「・・・なきゃ、はやてを　助けなきゃ!!　シャマル、シャマルは治療系得意なんだろ!そんな病気くらい治せよ!」

シャ「ごめんなさい・・・私の力じゃどうにもならないの・・・」

ヴィ「なんでだ…なんでなんだよっ！　うっううぅ・・・」

ザ「・・・シグナム」

・・・解っているザフィーラ

シ「我らに出来る事はあまりに少ない…だが」

このまま主を見殺しにする訳にはいかない！

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

ＳＩＤＥヴォルケンズ

―深夜・あるビルの屋上

シ「主の身体を蝕んでいるのは　闇の書の呪い・・・」

シャ「はやてちゃんが闇の書の主として真の覚醒を果たせば！」

ザ「我らの主の病は消える…少なくとも進みは止まる！」

ヴィ「はやての未来を血で汚したくはしたくないから人殺しはしない…だけど、それ以外なら何だってする！！」

・・・申し訳ありません我らが主・・・ただ1度だけ　あなたとの誓いを破ります。

シ「我らの不義理をお許し下さい！」

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

葵「・・・石田先生の話で聞いて少し闇の書のせいかとも考えたが、あんなことになっているとはな」

孤「こうなっちゃったね。どうする葵？」

はぁ～、あのバカどもが。少しは相談したらどうなんだ。

羽根のお守りをあいつらの分を作らないとな。あと、シグナムとザフィーラは大丈夫だろう。シャマルは見た感じ戦闘向きではないから戦闘出る機会は少ない。と、考えると問題はヴィータか・・・・。あいつははやてのこととなると無茶をするのが当然になる。

第九話（後書き）

というわけで葵はヴォルケンズ側に付かせることにしました！

第十話

第十話

ＳＩＤＥヴィータ

いまあたしがいるのは一面が砂漠の星。

見る限り一面が砂漠。水も何も無い。

太陽の光はそこにいる者の体力をじわじわと奪う。だからそこには人はいないはずだ。

ヴィ「クソッ・・・はやてからもらった・・・騎士服をこんなにグチャボロにしやがって・・・」

あたしはそう言いながらグラーフアイゼンを引きづりながら砂の丘を登っていってる。

後ろにはこの砂漠という過酷な環境に適応した魔法生物が一匹倒れていた。頭からは体液らしきものも出ていた。

ヴィ「まぁ、騎士服は直るし、そこそこページが稼げたから良いけどよ・・・・！？」

足に力が入らねぇ。そのせいで頭から倒れた。

ヴィ「い・・・たく・・・ない！」

そういって再び起きあがった。これも全部はやてのためなんだ！

ヴィ「痛くない。こんなのちっとも痛くない！　昔とはもう違うんだ」

グラーフアイゼンを杖代わりに再び砂の丘を登っていく。

ヴィ「帰ったらきっと、あったかいお風呂と、はやてのご飯が待ってんだ。優しいはやてがニコニコまってんだ！　そうだよ、あたしはすっげぇ幸せなんだよ！　だから！」

すると、地面から先ほど倒した魔物と同様の魔物が出てきた。

―グォオオオオオオオオオオ！！

ヴィ「こんなの全然いたくねぇ！」

グラーフアイゼンをふりかぶった。

しかし、後ろから、

―ゴゴゴゴ・・・ドパァアアアア

地面が盛り上がったと思えばそこから出てきたのは目の前にいる魔物と同じモノがもう一匹いた。しかも場所が悪い。あたしのすぐ後ろだ。

ヴィ「なっ！？」

やばい。そう思った。だけど、

???「ギュリノース・ブレイカー！！」

すると、白い光が後ろの魔物の頭を直撃した。死んではいない。が、かなりの致命傷だろう。

???「ザコが！　どけぇ！！！」

すると、さっきの声のやつが前の魔物も盾らしきものから伸び出た魔力刃で切り倒した。

ヴィ「な、なにもんだ！？　てめぇ！？」

そこにいたのは純白の騎士甲冑に身にまとった奴。武器は盾と大砲みたいなもんを持っていやがる。

???「無事か？　ヴィータ」

え、この声って・・・まさか！？

ヴィ「な！　あ、葵！？」

葵「蒐集するならさっさとしろ。後、シグナム達を呼んで先に心の世界に行くように言っておけ」

ヴィ「う、うん。わかった」

今の葵に逆らっちゃだめだ。あいつ今めちゃくちゃ怒ってる・・・

蒐集し終え、葵の前に行く。とりあえず、

ヴィ「ご、ごめ「それよりヴィータ、動くな」え？」

すると、葵はあたしの背中に触れると、

葵「癒しの風よ。汝の力を持ってこの者の怪我を癒したまえ。ヒーリーングフール」

優しくて、暖かい風があたしを包むように纏う。光も暖かい。気持い。何だろこの感覚。

光が晴れると、キズは一つもない。それどころか魔力も回復してる。騎士甲冑だって直ってる！！

ヴィ「す、すげぇ・・・」

葵「無事でよかった」

そう言うと葵があたしに抱きついてきた。

ヴィ「な、ななにゃ、にゃにしてんだ／／／！？」

わけがわからず、あたしも何言ってんのか分からない。

葵「もう、こんな無茶をするのは止めてくれ。こんなことをしても誰も喜ばない。頼むから」

ヴィ「・・・できねぇ。これもはやてのためなんだ」

葵「はぁ。そう言うと思った。だからお前らと一度はなしをさせてくれ」

ヴィ「分かった」

そのあとすぐにあたしと葵は葵の心の世界に戻った。

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

葵「で、言い訳は？」

帰ってきてすぐに全員に強制的に正座をさせています。なぜかって？　真っ先に斬りかかってきそうな奴を封じるためです。もうプルプル震えて立とうにも足がしびれているようだ。

シャ「あ、あの、葵君。その前にこれをやめｔ「ダメだ。お前らは説教が終わるまでそれだ」えぇ～～～・・・・」

葵「当たり前だ。実行する前に私に一言声をかけろ。お前らに何かあって真っ先に悲しむのは誰だ？　私か？　違うだろ、お前らの主はやてじゃないのか？」

全員「・・・・・」

葵「はぁ～。怒るのもバカらしい。今後私も協力する。そうすれば負担も軽くすむし怪我の対応も二人に増える。そうすれば何とかなるだろう」

シ「だが、どんな理由があってもこれは犯罪だ。お前にこれ以上罪を重ねさせるわけには」

葵「知るか。それにそれは前世だ。それよりお前ら、魔力は人間から蒐集したらどうなるんだ？」

シャ「よほどのことがない限りは命に別条はないわ。魔力が当分使えなくなるかもしれない程度」

葵「管理局との戦闘及び蒐集は？」

ヴィ「してねぇ。シグナムが管理局に目をつけられると厄介だっていうからよ」

葵「なら、ヴィータ。お前ははやてを犯罪者として祭り上げたいのか？」

ヴィ「そんなわけねぇ！」

葵「ヴィータ、管理局の局員から収集してみろ。間違いなく躍起になってでもお前らをつかまえるだろう。そして例え蒐集が完了しはやての足が治ってもその先に待っているのは管理局に牙をむいた犯罪者として逮捕される姿のはやてだ。シグナムの判断は正しい」

ヴィ「そ、そうだったのか」

なるほど。ある意味これで人からの蒐集は回避できるか。

葵「お前らに言っとくことがある。はやてを助けたいという気持ち

はわかる。ただし条件がある」

ザ「その条件を飲まなかったら？」

葵「はやてに悪影響が出るかも知れんが力ずくでも止める」

シャ「な！？」

ヴィ「おめぇ、はやてが心配じゃねぇのか！？　それにあたし一人でもお前を「止めろヴォータ」シグナム？」

シ「私たちでは束になっても葵には勝てない。葵と一戦交えたが私では手も足も出なかった。それに辛いのは葵も一緒だ」

ヴィ「シグナムが負けた！？」

ザ「まことなのか！？」

シャ「えぇ。私が審判を務めてみていたけど多分シグナムの言う通りになるわ」

ヴィ「でも！」

シ「その条件とは？」

　すると、シグナムの声によってヴィータの声が遮られた。

葵「一つ、私と孤狐を蒐集に手伝わせること。二つ誰かがこの場に残りはやてと一緒にいること。これははやての護衛とはやて自身に要らない心配と不安を与えないためだ。三つなるべく人からの蒐集

は抑えてくれ。以上だ」

ヴィ「あの白騎士はどうなんだよ？」

シ「白騎士？」

ヴィ「あぁ、これだ」

そういってヴィータのデバイス、グラーフアイゼンだったか？
それからヴィータを助けた映像が出る。

シャ「こ、これって・・・・」

シ「すごい・・・・」

ザ「・・・・」

全員が全員唖然としている。

エ「私とマスターのシンクロ状態の白騎士です！　主に攻撃と防御に主体を置き中距離、遠距離を得意としています！」

その補足に全員がさらに唖然としている。

葵「だが、今回はエクスとルミルは使わない。孤狐とのパスのみで戦う」

シャ「どうしてですか？」

葵「お前らには最初に言ったよな。管理局とは個人的な友人がいる

と。さすがにそこにばれたら元も子もない。それを避けるためだ。
シグナム、戦った時私の魔力は変わっていたと思うが？」

シ「あぁ、孤狐の割合の方が強かった」

葵「なら、ごまかしがきくか。あと、これを渡しておく」

そういって白と黒の羽がついたお守り。フェイトとなのはに渡した物にシグナム達の魔力色を付け加えて加工したものを渡す。

ザ「これは？」

葵「御守りみたいなものだ。ただ、肌身離さず持っていてほしい。いざとなったらそれがお前らを護る。まぁ、それ以前に全員まとめて私が護るがな」

そおういって部屋を出た。

ＳＩＤＥヴォルケンズ

ザ「ふっ。何とも頼もしいな。ん？　どうしたお前ら、顔が赤いぞ？」

シ「！？　な、なんでもない／／／／！！（あ、あんなこと言われたのは初めてだ／／／だが、こう胸の動悸が速くなる。どうしたのだ／／／！？）」

シャ「え、えぇ／／／／（か、カッコよかった／／／／　葵君／／／／）」

ヴィ「そ、そうだよ、な、なんでもねぇよ／／／（なんなんだよ、最後のあれ／／／）」

ザ（・・・葵殿よ。葵殿は我が同胞すらも恋に目覚めさせるか。背中を刺されぬよう注意してくれ）

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

第一一話

第一一話

私が蒐集に参戦することが決まって数日後。久しぶりに学校に登校する。あることをするために。

先生「転校ですか？」

葵「はい。叔父が急な出張でスイスのベルンに。そのために今まで書類事項や手続きなどで学校に来れなかったんです」

場所は職員室。蒐集のために時間が作れないのと、恐らく遠くないうちになのはとフェイト、下手をすればアリシアとの戦闘になる。フェイトが戦闘の才能があるんだ。アリシアもあってもおかしくはない。そのためには学校に行くと正体がばれるかもしれない。そのための退学だ。

先生「そう、ドイツの首都に」

葵「・・・・それはベルリンですよ先生。私はベルンと」

先生「そ、そうだったわね、知ってるわよそれぐらい！　ほほほほほっ」

必死にごまかす先生。まぁ、これで何とかなるだろう。

先生「まぁ、細かい書類などはこちらからがするわ。いつ行くの？」

葵「今日の昼には。それなのでできればもう行きたいので」

先生「そうね。あっちでも元気にやってね」

葵「はい」

そういって教室を後にする。さて、まずは成田に行きますか。

ＳＩＤＥなのは

葵君の席を見るが、やっぱり来てないの。

ア「今日も来てないわね、あいつ」

す「うん。どうしたんだろ？　なのはちゃんは何か聞いている？」

な「ううん。分かんない」

チャイムが鳴り先生が入ってくる。すると、

先生「えっと、今日は残念なお知らせがあります」

なんだろ？

先生「神無月君がおじさんの都合でスイスのベルンに引っ越すことになりました」

クラス「えぇえええええええええ!?」

えぇ!?　き、聞いてないよ!?

先生「今まで、どうやらその手続きなどで来れなかったそうです。先ほど来て教えてくれました」

そ、そんな～。

休み時間ではやはりそのことが中心になって話をしていた。

このことをクロノ君に教えると、

ク「〈そうか。ん?　だがおかしくないか?〉」

な「〈え?　何が?〉」

ク「〈彼は次元漂流者だ。叔父もいなければ身よりもいないはずだ。何か理由があるのかもしれない〉」

確かにそうなの。でも何か理由があるのかも。

な「〈そうだね。クロノ君頼める?〉」

ク「〈あぁ、そうだな。何とかしてみよう〉」

その後念話を切って授業に集中したの。

SIDE　Out

―ジャジャジャジャーン♪

葵「やっぱり来たか」

電話の着信音（運命：ヴェートーヴェン作曲のやつ）が鳴り誰からか見るとやはりクロノだった。

場所は当然このことを予測して成田国際空港にいる。

葵「どうした？」

ク『どうしたじゃない。なのはから聞いた。スイスに行くそうだな？』

葵「あぁ、それがどうした？」

ク『どうしたじゃない！　君は何をしにスイスに行くんだ!?』

葵「簡単だ。情報収集だ。【不の者】の事件でこの世界に【不の者】のいる確率が0から1になった。そのためにスイスに行くんだ。私が以前いた世界でもヨーロッパが一番の被害があったからな」

まぁ、実際はスイスに行くつもりはない。それにいざこちらに電話がかかっても転移魔法でスイスに行けばいい。電波で探知されるようならそれをごまかす方法もいくつもある。

ク『だが！』

葵「クロノ、契約を忘れたか？　管理局という組織と協力するのはあの一回限りだ。つまりあの後私がどう行動しようと勝手というわけだ。そろそろ搭乗の時間なので失礼する」

そういって電話を切る。

さて、ではスイスに土地と小屋を建てそこに電話を置いて、電話が鳴ったらこちらに知らせるよう魔法でも作るか。

その後は、まぁ、さっき言ったことを実行した。

それを終え、はやての家に帰宅する。

帰宅すると狼形態のザフィーラが脱色されたように真っ白になっていた。

葵「ざ、ザフィーラ!?　どうしたんだ!?」

ザ「あ、葵殿か・・・・あ、主を、私に代わって守ってくれ・・・（ガク）」

と、とりあえず回復を。

急いでザフィーラの回復に取り掛かろうとした時、キッチンから辛いのか甘いのか酸っぱいのか苦いのかわけのわからない臭いがした。しかも、マンガやアニメでよく見る悪臭の色が目に見えた。

葵「ま、まさか!?」

エ《マスター・・・もうだめですぅ～》

ル《待機状態の私たちにもダメージを与えるとは、シャマル、お前の料理は・・・》

え!?　待機状態のエクスとルミルにもダメージが!?

キッチンに近づくにつれそのにおいが強烈になってくる。まずい。これはすごくまずい。

急いで空間から防護マスクを取り出し、キッチンに行くと、予想通り、

葵「シャマル!!」

シャ「あ。葵君。帰ってたんですね？　って、そのマスクは何ですか!?」

葵「（この匂いをかいでも無事なのは君ぐらいだぞ）お前は皿を出してくれ、あとは私が「ただいｍ・・・な、なんやこの匂い!?」はやて・・・何とタイミングが悪い」

その後、急いではやて、ヴィータ、シグナムがキッチンに向かうと、

シ「な、誰だお前は!?」

葵「私だ。これがないとまともに呼吸ができない。これはお前らの分だ」

帰ってきたメンバーに防護マスクを渡す。

は「た、助かった」

ヴィ「便利だなこれ」

シ「原因は、やはり・・・」

葵「あぁ、さっさと料理を改造する。あとシグナム、犠牲者（ザフィーラ）を頼む」

シ「・・・すまん。ザフィーラ」

そういってシグナムはザフィーラの元へ行き、私は料理の改造に取り掛かり無事昼食を乗り切った。あのあと、鍋の元へ行くと、

―ピキッ

葵「防護マスクのレンズにヒビ！？　目が、目がぁあああ！？」

割れたヒビから目にしみるわけのわからない空気が・・・思い出したくもないので割愛させてもらう。

第一一話（後書き）

というわけで半ば強引になのはたちとあわないようにしました！
最近また感想をいただきました！　いやぁ～元気の源になっていいですねぇ～。
頑張って続けていきたいのでよろしくお願いします！

第一二話

第一二話

ＳＩＤＥはやて

―図書館

もうちょい、もうちょいでこの本が取れるんやけど・・・というか、この図書館障害者にもう少し配慮しいや！！　不便でならんわ！！

もう少しで本に手が届きそうなところで、別の手が、その本に手を伸ばす。

？？？「これ、ですか？」

は「はい。ありがとうございます」

その後場所を移しいろいろな話をした。彼女の名前は月村すずかちゃん。同い年の女の子や。

は「へぇ、その男の子好きやったんや～」

す「えぇ！？　そ、そんなんじゃ・・・でも、そうなのかな」

すずかちゃんは学校の話をしてくれた。どうも最近ある男の子が

お家の都合で海外に引っ越すことになったらしんやけど、何も言わずに行ってしもうたらしい。

日も暮れ始めたし、シャマルも迎えに来たらし。

は「ありがとうすずかちゃん。ここでええよ」

す「うん。それじゃあ」

は「お話してくれておおきに、ありがとな」

す「うん、またねはやてちゃん」

すずかちゃんとさよならをして、シャマルに車いすを引かれながら家に向かう途中、シグナムと合流し家に向かった。

は「そう言えばヴィータと葵君は今日もお出かけ？」

シャ「えぇ、ヴィータちゃんは多分またおじいちゃんとおばあちゃんとゲートボールをしに行ってます」

シ「神無月は、ベルンという場所に行くといっていました」

は「ベルン？　ドイツの首都！？　ってあれはベルリンやったな。どこやろ？」

シ「それにザフィーラがついています。御心配はいらないかと」

そやな。それに葵君もかなり強いやろうし。

は「そっか・・・・」

なんかみんな用事があって一緒にいること少なくなっとるからなぁ。

シャ「でも」

は「ん？」

シャ「少し距離が離れても私たちはずっとあなたのそばにいますよ」

シ「はい。我等はいつもあなたのそばに」

そやったな。うちらは家族や。何も心配することはない。

は「ありがとう」

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

―海鳴市　市街地　ＰＭ７：４５

葵「どうだヴィータ？　見つかったか？」

ヴィ「いるような・・・いないような・・・・」

そこにいるのは闇のを抱え騎士服とグラーフアイゼンを構えているヴィータ。そして狼モードのザフィーラ。そして孤狐とパス契約を執行した私。ちなみにエクスとルミルには心の世界で闇の書につ

いてCNC（コスモ・ネットワーク・コンピューター）を使って調べてもらっている。

ヴィ「こないだから妙に出てくる魔力反応。あいつが捕まれば一気に20ページぐらいは行きそうなんだが」

ザ「分かれて探そう。ヴィータ、闇の書は預ける。それより、葵殿はいいのか？」

葵「・・・・背に腹は代えられない。はやての病状の悪化は目に見えるぐらい速い」

ザ「済まない」

ヴィ「本当は巻き込むつもりはなかったのに」

葵「謝る必要はない。私も覚悟の上で行っているんだ。終わったらはやてに謝ろう。それで許されるわけではないが分かってはくれるさ」

ザ・ヴィ「「あぁ（うん！）」」

葵「では参ろう」

―スッ

　一番無茶しそうだな、こいつは、

―ポン

ヴィ「な、なんだよいきなり／／／」

私はヴィータと頭に手を置き、

葵「無茶だけはするなよ。あの時みたいなのはごめんだからな」

ヴィ「／／／　分かった／／／」

葵「ならいい。では、私も行こう」

大丈夫だといいんだが、

ＳＩＤＥヴィータ

あのバカ、お前のあんな顔はもう二度と見たくねぇ。だから約束するよ。

あの時、あいつの顔は本当に心から怒っていた。でも、抱きしめたときあいつの顔は心から安心しきった安堵の顔だ。それと心配していた。その顔のせいで、胸を引き裂かれそうな気持になった。もうあんな気持ちは嫌だ。

ヴィ「封鎖領域、展開」

グ《Ｇｅ？ｆｎｇｎｉｓ ｄｅｒ Ｍａｇｉｅ》

ヴィ「魔力反応！　大物みっけ！　いくよグラーフアイゼン！！」

グ《Ｊａｗｏｈｌ》

結界を発動させ、魔力の持ち主を見つけるため飛んでいると、ビルの屋上でそいつを見つけた。

ヴィ「あいつか！」

迷わず、グラーファイゼンでそいつに向け、

ヴィ「テートリヒ・シュラーク」

攻撃を仕掛ける。

―ドガァアアアアアアン

爆発と爆風によってそいつは吹き飛ばされた。

？？？「アァアアア」

そのまま落下していく。だけど、あたしは追い打ちをかけるために追撃を始めた。

すると、

？？？「レイジングハート、お願い！」

レ《ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ　ｓｅｔｕｐ》

ちっ、起動させやがった。それでも、はやてのためだ。んなもん、関係ねぇ！

ヴィ「うぉらぁあああああああああ！」

グラーファイゼンをふりかぶり、追撃をするが、そいつは飛んで回避する。

少女「いきなり襲いかかられる覚えはないんだけど！？　どこの子！？　一体なんでこんなことをするの！？」

攻撃の構えに入ると、後ろから、

少女「教えてくれなきゃ、分からないってば！！」

おそらく放っていた魔力弾があたしの背中を捕え来る。

ヴィ「んっ、くぅう！？（誘導弾！？）」

一個は何とか回避したが、もう一個は防壁で耐えた。

ヴィ「このやろぉおおおおおお！」

レ《ｆｌａｓｈ　ｍｏｖｅ》

だが、それを異動魔法で回避し、

レ《Ｓｈｏｏｔｉｎｇ　ｍｏｄｅ》

少女「話を！」

レ《Ｄｉｖｉｎ》

まずい、あれはまずい。

少女「聞いてってば！」

レ《Ｂｕｓｔｅｒ》

―ズガァアアアアアアア

ピンク色の砲撃が放たれた。

そいつの砲撃はずれた。

ヴィ「くっ、あ、！？」

帽子が！？　はやてがくれた帽子が！？

ゆるさねぇ、ぜってぇ、ゆるさねぇ！！

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

この魔力・・・なのはとヴィータか？

葵「〈ザフィーラ、聞こえるか？〉」

ザ「〈あぁ、どうした？〉」

葵「〈ヴィータが戦闘に入った。おそらく援軍が来る。急ぐぞ〉」

ザ「〈心得た〉」

すぐに向かうと、

葵「これは、ヴィータの帽子？　けっこう破損しているな。修復」

ヴィータの魔法を直し終えると同時に、魔力も・・・三つか。増えたな。

葵（フェイト、ユーノ、アルフ・・・リニスとアリシア、クロノは来ていないか）

さらに、

葵「シグナム、お前も来たのか」

シ「あぁ。ヴィータだけだとああなるのが目に見えていたからな」

シグナムの視線を追うように私もそこをみると、バンドによって囚われの身となったヴィータがいた。

葵「ん？　・・・あのバカ。無茶はするなとあれほど言ったのに」

頭が・・・はぁ。

シ「失望したのか？」

葵「まさか、あぁ言ったところもあいつのいいところだろう。はやてのことになると特にな。おそらくもう一人の魔法使いにこの帽子を討ちおとされたのがよほど腹がたった。というところだろう」

シ「そうか。私は行くぞ」

葵「あぁ、ヴィータの拘束の破壊はこちらがやる。援護も任せろ」

そういってヴィータの救出作戦を開始した。

すると、アルフが、

アル「!?　なんかやばいよフェイト!」

気付かれたか。だが、

葵「狐火」

手に青い焔の塊を繰り、フェイトと、アルフ目がけ投げる。所詮牽制だがな。

フェ「!?　あなたは誰ですか!」

葵「この子の仲間。とだけ言っておきましょう」

多少なりと口調を変えないとばれるな。

フェ「なら大人しく武装解除をして投降「断ります」え!?」

葵「作戦もなしに突っ込むとでも思いですか?」

フェ「なに、言って・・・・!?」

タイミングが良いな。すると、下からシグナムが現れ、

シ「レヴァンティン、カードリッジロード」

レヴァ《Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ》

―ガシュゥン

すると、レヴァンティンの刃に炎がまとわり、

シ「紫電一閃！　はぁああ！！」

フェイトに斬りかかる。フェイトもとっさにバルディッシュで防ぐが、

フェ「！？」

―シャキィン

甲高い音共にバルディッシュが斬られる。さらに、シグナムは追い打ちをかけるが、

バ《Ｄｅｆｎｓｏｒ》

バルディッシュの障壁で防ぐ。だが、シグナムはそれさえも無視して障壁語とフェイトを叩きつける。

葵「こっちもやることをやりますか」

白桜を出し、バインドと呼ばれるモノを破壊する。

葵「無事か？」

ヴィ「うっせー！　これから逆転するところだったんだよ！」

葵「そうか、それは悪かったな。ところでヴィータ。私は人から蒐集はするなといったはずだぞ？」

ヴィ「ご、ごめんなさい」

ヴィータの顔が少し青いが大丈夫か？　ん？　私の後ろに般若の仮面？　そんなものがあるのか。まぁどうでもいい。それより、

葵「お前が傷つけば我らが主が悲しむんだ。気をつけてくれ」

ヴィ「わーってる」

葵「後これ」

そういってヴィータの頭に帽子をかぶせる。

ヴィ「これ、葵がか？」

葵「さぁ？　どうだろうな」

ヴィ「・・・ありがとう／／／」

葵「ん？」

ヴィ「なんでもない！」

葵「そうか。では、参ろうか」

ヴィ「あぁ！」

ＳＩＤＥはやて

は「ふ～んふふ～ん♪～～よし、と」

トゥルルルル♪ガチャ

シャ『もしもし？　はやてちゃん？　シャマルです』

は「あ、どうした？」

シャ『すみません　いつものオリーブオイルがみつからなくって・・・ちょっと遠くのスーパーまで買いに行ってきますから』

は「あ、別にええんよ　無理せんでも」

シャ『出たついでにみんなを拾って帰りますから』

は「そうか～？」

シャ『お料理お手伝い出来なくてすみません　』

は「アハハ　平気やって・・・（葵君がおらなシャマルの料理は危ない。これってもしかして死亡フラグやったんか！？　でも、か、

回避できたよな？）」

シャ『・・・はやてちゃん、今失礼なこと考えませんでした？』

は「！？　な、ナンノコトヤ？」

しゃ、シャマルがうちの心読んだ！？

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

ＳＩＤＥシャマル

シャ「なるべく急いで帰りますから」

は『あ。急がんでええから、気ぃつけてな？』

シャ「はい　それじゃ」

電話を切り、戦闘をしているシグナム達の方を向き、

シャ「・・・そう　なるべく急いで確実に済ませます　クラールヴィント　導いてね」

《Ｊａ　Ｐｅｎｄｅｌ　ｆｏｒｍ》

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

第一二話（後書き）

というわけで本格的に介入です！

第一三話（前書き）

最近志方あきこにはまった！
アルトネリコの謳う丘いいよね～

第一三話

第一三話

葵「さて、フェイトもなのはもかなり成長しているようだが、フェイトの相手がシグナムだとな・・・」

孤《相手が悪いね。あのフェイトって言う子だっけ？　かなり押されているね》

シグナムとフェイト、アルフとザフィーラ、ユーノとヴィータ。どれをとっても今現在はヴォルケンズに軍配が上がる。

孤《あのなのはって言う子だっけ!?　砲撃に入るよ!!》

・・・済まない、なのは。

葵「〈シャマル、今がチャンスだ。蒐集をしろ〉」

シャ「〈分かったわ!〉」

どうやらポイントは見つけていたらしい。後はどのタイミングかってところか。

あとは、あの戦闘に介入するか。

ＳＩＤＥフェイト

ダメだ。シグナム、彼女の方が全てにおいて私をはるかに上回っている。

葵が、葵がこんな時にいれば。

シ「はぁあああああ！」

フェ「くっ」

何度も何度もはをぶつければ明らかに自分が下だと気づかされる。でも！

―ガキィン

鉄と鉄がぶつかり合うような音。でも、その場にいたのはシグナムではなかった。

アルフのような耳に、九本のしっぽ、そして水色がかった白の髪としっぽの色。私やなのはと同い年の子が私とシグナムの間に割り込んだ。刀をバルディッシュにあて防ぎ、シグナムのほうは・・・素手で抑えた！？

フェ「さっきの！？」

？？？「・・・・」

シ「なにしに来た」

？？？「もうじき今回の戦いが終わります。撤退の準備を始めてお

いてください。殿は務めますから」

シ「・・・・良いのか？」

？？？「今の彼女たちにあなたたちを追跡できるほど余力は残らないと思いますよ」

そういって彼は刀を構える。

――ドグン

何この嫌な予感。なのはの方から・・・！？

なのはの方を見るとなのはの胸から腕が出ていた。

急いでなのはのところに行かなきゃ！

でも、

シ「ここから先には行かさん！」

葵「・・・・悪く思わないでください」

くっ・・・

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

シャ「リンカーコア捕獲。蒐集開始！」

すると、闇の書のページが埋まっていく。

レ《ｃｏｕｎｔ　ｚｅｒｏ》

葵「まずい」

な「・・・す、スタァ・・・ライト・・・ブレイカァアアア！」

あのバカ、また無茶を!?　今回は何も言えないか・・・。

シ「〈結界が破られた！　いったん離れるぞ〉」

ザ「〈心得た〉」

ヴィ「〈シャマルごめん。助かった〉」

シャ「〈うん。一旦散ってまたいつもの場所で集合。葵君、お願いしてい?〉」

葵「〈大丈夫だ。それに自ら申し出たんだ、気にするな〉」

シャ「〈うん。ありがとう〉」

葵「追跡阻害魔法展開。ファヌンレイヴ」

すると、シグナム達の身体一つ一つに黒い魔法がまとわる。

シ「〈これは?〉」

葵「〈念には念だ。管理局がバカじゃなければ追跡を行うはずだ。それを妨害する魔法をかけた。だが、安心はするな〉」

ザ「〈何から何まで済まない〉」

そういってシグナム達はその場を離れた。

ＳＩＤＥアースラ

エ「あぁ・・・逃げる・・・ロックいそい・・・！？　なんで、ロックができない！？」

局員「転送の足跡・・・・だめです！　こっちも妨害されました」

葵が展開した魔法によってロックができずただ指をくわえてヴォルケンズが逃げるのを見るしかなくなった局員たち。

すると、一つのモニターに闇の書が映し出された。

ク「なっ！？　あれは！？」

リ「いけないわ！　急いであっちに医療班を向かわせて！」

局員「ダメです。見たことない妨害魔法によって邪魔されて・・・・」

エイ「あぁん！　もう！　ごめん・・・クロノ君。しくじった・・・クロノ君？」

ク「第一級捜査指定遺失物ロストロギア【闇の書】」

エイ「クロノ君、知ってるの？」

ク「あぁ、知ってる。少しばかり、嫌な因縁があるんだ」

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

葵「お邪魔をします」

ユーノがなのはを必死に回復しているところに降り立つと当然フェイトとアルフが武器を構える。

葵「そこにいる者を治すだけです」

そういってなのはのリンカーコアがあるであろう場所に手を添え、

葵「〈孤狐、そっちの治癒魔法を使う良いか？〉」

孤「〈うん、いいよ〉」

葵「〈ありがとう〉彼者に恵みと祝福を与えたまえ、全ての傷を、すべての痛みを癒す風」

金色の光がなのはを包み、傷をいやす。

葵「傷は治しました。リンカーコアの方も直りは早くなるはずです」

フェ「待ってください！　何を考えているんですか！？」

葵「というのは？」

フェ「友達を、なのはを傷つけたと思ったら、その傷つけた物を治すなんて！」

葵「・・・・護るためです」

フェ「え？」

葵「聞きたいことはそれだけですか？」

フェ「え、えっと、その・・・」

ん？　管理局員が来たようだな。

葵「では、私はこの辺で失礼します。また会えるときに。金色の姫君」

そういって去った。

フェ「ふぇ！？」

ＳＩＤＥフェイト

金色の姫君って私のこと！？

アル「大丈夫かいフェイト？」

フェ「え！？　う、うん／／／」

何か葵みたいだったな。でも葵はいまスイスだし、そんなわけないよね。

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

―八神家

シャ「はやてちゃん。お風呂の支度できましたよ」

は「うん。ありがと♪」

シャ「ヴィータちゃんも一緒に入っちゃいなさいね」

ヴィ「は～い」

シ「明日は朝から病院です。あまり夜更かしされませんよう」

は「は～い」

シャ「では、よいしょ・・・と。シグナムはお風呂どうします？」

シ「私は今夜はいい。明日の朝にするよ」

シャ「そう」

ヴィ「お風呂好きが珍しいじゃん」

シ「たまにはそういう日もあるさ」

は「・・・ほんならお先に」

シ「はい」

―ガチャ　キー　バタン

ザ「今日の戦闘か？」

シ「聡いな。そのとおりだ」

ザ「お前の鎧を撃ち抜いたか」

シ「澄んだ太刀筋だった。よい師に学んだんだろうな」

―スッ

葵「怪我をしたのなら言え。お前も主を心配させるつもりか？」

シ「葵！？　無事だったのか！？」

葵「まぁな。それより」

私はシグナムの傷の場所に手を当て、回復魔法をかける。

ザ「これは・・・傷跡すら残っていない」

葵「孤狐、シグナムを連れて風呂に入ってくるといい」

そういって契約を解除した。

孤「葵は？」

葵「明日にする。今日はつかれた。寝るとしよう」

孤「は～い。じゃあ行こ、シグナム」

シ「助かった。葵」

葵「気にするな」

孤狐はシグナムを連れ風呂場に向かった。

ザ「すまん。助かった。礼を言う」

葵「構わん。風呂好きのシグナムが急にあんな態度をとるとはやても不思議がるだろうからな」

ザ「それよりお前の方は大丈夫なのか？」

葵「さて、なんのことやら」

ザ「右手。シグナムの太刀を素手で防いだそうだな」

そういって右手にはやけどの跡がいまだにくっきりと残っていた。

だが、これぐらいならすぐに完治する。

葵「・・・あれ以上するとおそらくシグナムも止まれなくなると判断しただけだ。今回の目的はあくまでも蒐集。変に火がついてらまずいだろ？」

そういって苦笑しながらザフィーラに聞く。

ザ「そうだな」

ザフィーラも鼻で笑いながらあきれていた。

――一方風呂場

孤「は～や～て～ちゃ～ん！」

は「孤狐！」

孤「ただいま～。そしておじゃまい～す！」

シ「待て孤狐。まず体を洗え！」

ヴィ「シグナム？　結局はいるのか！？」

シ「あぁ。孤狐から誘われ半ば強引にな」

孤「酷い！？　ボクのせいにされてる！？」

は「あかんで～孤狐」

孤「ぶ～。だってボクの長風呂に付き合えるのシグナムぐらいだもん」

は「そやったな」

シャ「〈シグナム怪我の方はいいの？〉」

シ「〈あぁ。神無月が治してくれた〉」

シャ「〈そう。良かったわ〉」

三時間後、ゆでダコのように真っ赤になったはやて、ヴィータ、シャマルが孤狐とシグナムに担がれてリビングに来た。

もう一二月にもかかわらず魔法で団扇を作り三人を扇いでいると、はやてとヴィータが私の膝の上に頭をのせてきたのでそのままそっと頭をなでながら団扇で扇いでやった。

その際、シグナムとシャマルと孤狐の視線が痛かったのはなぜ？

第一三話（後書き）

ということで一三話でした！
シグナムにはお風呂に参加してもらいました！　なぜかって？　いや案だけ勘のいい子だったら気づくでしょ普通。だからごまかすためにです！

感想・ご意見の待ちしてます。これからもよろしくお願いします。

第一四話（前書き）

思わずもう一作できちゃったので投稿！

今回はめちゃくちゃ早いあの人の登場です！

第一四話

第一四話

葵「管理局が本格的に動き出したか」

ＣＮＣの情報を駆使して今管理局がどう動くかをハッキングし調べた結果だ。なるほどな。アースラメンバーが全権を担うと言う感じか。で、アースラがアルカンシェルという魔法砲撃システムを搭載するためしばらく使えないっと。後は、なのはの家の近くに臨時作戦本部か。

葵「孤狐、今ヴォルケンズはどういうこととしてる？」

孤「ん～とね、みんなビルの屋上にいる感じ？」

葵「ビル？」

そこの映像を映し出すと、

―海鳴市街ビル

―ガチャ

シ「来たか」

ヴィ「うん」

シャ「管理局の動きも本格化してくるだろうから今までのようにはいかないわね」

シ「少し遠出することになるな。なるべく離れた世界での蒐集を」

ヴィ「今何頁で来てるっけ？」

シャ「３４０頁　この間の白い服のコでかなり稼いだわ」

ヴィ「おっし！半分は超えたんだな　ズバッと集めてさっさと完成させよう。・・・早く完成させてずっと静かに暮らすんだ　はやてと一緒に」

シ・シャ・ザ「「「・・・・・・」」」

ザ「行くか　もうあまり時間もない」

シ「ああ　いくぞレヴァンティン！」

レヴァ《Ｓｉｅｇ》

シャ「導いて　クラールヴィント」

クラ《Ａｎｆａｎｇ》

ヴィ「やるよ　グラーアイゼン！」

グ《Ｂｅｗｅｇｕｎｇ》

それぞれ騎士甲冑を身にまとい、

シャ「それじゃ夜明け時までにまたここで」

シ「ヴィータ　あまり熱くなるなよ」

葵『あぁ～、気合い入れているところ悪いがいいか？』

すると、そこに一つのスクリーンが出てきた。

ヴィ「なっ！？　葵！？」

シ「なにしに来た？」

葵『耳に入れといてほしい情報をね。管理局が本格的に動いているのは分かっているな』

シャ「えぇ」

葵『それでだ』

そして手に入れた情報を話すと。

葵『今日は私がはやてに付き合おう。だが、最初に提案した通り出来るだけ交代制にしてくれ。時間もないが失敗してつまずくわけにはいかない』

シ「分かった」

葵『あと、シグナム、ヴィータ。無茶をするな。こないだみたいになるぞ』

シ・ヴィ「「うっ・・・・」」

葵『シャマル、ザフィーラ。荷が重いかも知れんがあの二人の手綱をぜっったいに放すな』

シャ・ザ「「もちろん（心得た）」」

シ「シャマル!?　ザフィーラ!?」

ヴィ「な、何言ってんだ!?」

葵『はぁ、あと、お守りは?』

　すると四人ともつけているということを表すようにそれぞれの魔法色の羽根のお守りを出す。

葵『その羽根について教えておく。それは絶対防壁と呼ばれる防壁を張る特性がある。だが、あくまでもつけている本人の命にかかわる場合にしか発動しない。二つ目緊急回復魔法。これもさっき言ったように重傷を負った場合に発動するがあくまでも応急処置程度だ。怪我をした場合はシャマルか私にすぐに連絡しろ。いいな』

ヴォルケンズ「「「「・・・・」」」」

葵『どうした?』

シ「前々から思っていたがお前の魔法はどうなっているんだ?」

葵『この世に自然がある限り不可能はないぞ。多分。』

シャ「そう言えば私たちベルカやミッドとは根本から違うんでしたね」

葵『まぁな。治癒魔法ぐらいなら多分シャマルでも習得できるぞ』

シャ「本当ですか！？」

葵『条件があるがな。その条件を守るのと学ぶ意志があればいつでも教える。他の三人もな。あと、私に耳としっぽがある形態をとっている場合は孤狐といってくれ。じゃないと変に感ずかれる』

シ「わかった」

葵『ほれ、それより早くいかんとまずいんじゃないのか？』

ヴォルケンズ「「「「そうだった！」」」」

お前ら・・・

そういってまぁ、ヴォルケンズは飛び立っていった。

葵『羽根よ。彼らを守り通してくれ。私の代わりに』

さて、場所は変わり心の世界。

今現在私は久しぶりに紅茶を飲みながらくつろいでいます。はや

てはもうすっかり夢の中なのでちょっと研究をしていると、空に黒い空間が開きそこから、

―ドサ　ドサドサドサドサ・・・・

なんということでしょう。空から一三人の人間が降って来たではありませんか（某前後の建築番組）

葵「・・・・・誰？」

一人は紫色の髪をし、白衣をまとった男性。あとはすべて女性だ。成人、子供さまざま。

男「・・・ここはどこだ？」

葵「そういうお前は誰だ？」

男「・・・・！？」

なにやら私の顔を見て驚いていると、後ろからバトルナイフを突き付ける眼帯の少女がいた。

？？？「お前は何者だ？　そしｔ「あんたらこそ何者？」な！？」

すると、彼女たちの周りに狐火が燃え上がる。

男「ほぉ、興味深いなこの炎は」

葵「研究者の質か。とりあえず君の名前を教えてもらえないか？」

ジェ「そうだったな。私の名前はジェイル、ジェイル・スカリエッティだ」

葵「ＣＮＣ検索開始。ワード、ジェイル・スカリエッティ。・・・・・ほぉ。管理局広域指名手配犯」

ジェ「！？」

葵「それと同時に・・・なるほどね」

私は再び彼を見つめ。

葵「良いだろう。ここにいるといい。君たちは私が保護しよう」

全員「・・・・・は？」

葵「気分、気まぐれ、同情、憐み、そう言った類のモノだ」

ジェ「私がどういう存在か知りつつも保護すると言うのか？」

葵「管理局に【悪】になるために作られた人造生命体。プロジェクトＦの基礎理論を作った人間。そうだろ？」

ジェ「・・・あぁ」

葵「だが、お前は悪になりきれていない。もし本当にお前が悪だと言うなら、これで後ろの女子供を殺してみろ」

そういって一つの剣を出す。

ジェ「・・・・・」

スカリエッティは剣を拾うが、

ジェ「はぁあああ！」

後ろの子供たちではなく私の方へ突っ込んできた。

やはりな。

葵「消えよ」

すると、剣は砂のように消え去った。

ジェ「な、なんだこれは！？」

葵「お前が悪なら後ろの娘たちを殺すだろう。だがそれをしなかった。論より証拠」

それにしてもその格好はどうにかならんものか。

―パチンッ

指を鳴らし、後ろの子たちの服装を変える。

葵「お前の娘ならもう少し女らしい格好をさせろ」

ジェ「なぜ私の娘だと？」

その後、データにあった情報をそのままスカリエッティに伝える

と、

ジェ「フフフっ、ハハハハハッハッハ」

急に笑い出した。というかうるさい。

葵「黙れ」

―ガンッ

ジェ「グヘェ・・・」

久しぶりに殴ったなフライパンで。

葵「このバカの変わりで説明は誰がするんだ？　その前に起きている者以外は寝室に連れて行きましょうか」

そう。この状況においても7人の女の子はいまだに寝ているのだ。さすがにこのままでは風邪をひくので、近くの寝室に布団を敷き寝かせた。そして終わると、

葵「で、先ほどの続きは誰が？」

？？？「わ、私が・・・」

葵「あなたは？」

ウ「長女のウーノです」

葵「左様で。とりあえずこの今寝ているバカを含めあなた方を保護

します。この世界は管理局でもばれる恐れはないと思うので」

ウ「どうしてそこまで？」

葵「さぁ？」

ウ「私たちは人ではありません」

葵「・・・戦闘機人。ですか？」

ウ「！？　それもさっきの？」

葵「答えはイエス。それに人がどうかについてどうかというのなら私も人間じゃありませんよ？」

私と孤狐のことを説明すると、

ジェ「ほぉ、それは珍しいな」

葵「復活したか。速いですね。あと、紅茶などはいかがですか？」

そう言って人数分を出すと、全員が手を伸ばし飲み始める。

ジェ「ほぉ。これはなかなか」

葵「さてどうでしょう？　こちらとしてはあなたのような方をそのまま犯罪に手を染めさせ続けるのはもったいないと思うのですが？」

ジェ「管理局に復讐するといってもか？」

葵「ばかばかしい。復讐は負の連鎖の始まりでその連鎖はやむことを知らない。それを知って行うのか？」

ジェ「だが、それでも娘をこんなにしたんだ！　許せると思うか！？」

珍しく感情をあらわにしたな。というかあんたがしたんじゃないのか？

葵「それは誰がしたんですか？」

ジェ「レイシという「バギッ」なっ！？」

レイシだと？　ふざけるな。あいつは間違いなく殺した。そう、殺したんだ。

葵「確認までに聞く。それはこいつか？」

そう言って現れたのは零始の映像。

ジェ「！？　なぜ、こいつが・・・・」

葵「ククククッ、ははははっははは！　あいつが生きているだと？　傑作だ、これは傑作だ！　確実に私の手で殺したと思ったのにあいつはどこまでも生きどこまでも人を殺すのか！？　クソガァアアアアアアアアア！！！！！」

怒り任せに近くにあったテーブルを破壊した。

ジェ「な、どうした！？」

葵「・・・取り乱したな。済まない。さっき言ったな。私が実験材料にされ、人殺しをさせられたことを」

ジェ「あぁ」

葵「こいつだよ。その時指示、実行したのは。こいつが悪の中の悪。見るだけでも吐き気がする」

そう言ってすぐにモニターを消した。

葵「復讐するなら管理局よりこいつにした方がいい。管理局はそのうち自滅する」

ジェ「なぜそう言い切れる？　君はこいつがどんな人間なのか知っているのか？」

葵「人を作り悪へと引きずりこむ悪魔。実験のためならどんな物でも利用する。自分の親、妻、娘も容赦なく殺させる。管理局もおそらくな。お前にそこまでできるか？」

ジェ「・・・私には血縁者はいない。だが、娘はいるが、実験のためには差し出さない」

葵「なら、良い。そのままのお前でいろ。そうした方が娘たちにも好都合だろう。新たにお前たちのために世界を増築する。そこで暮らせ」

そういって世界構築を開始し、その場所まで案内する。ジェイルに実験室や塔への立ち入りや使用を許可した。あと、案内はエクス

とルミルに頼んだ。忠告としては二人に何かしたらフライパンでトラウマと言ったら首をものすごい勢いで縦に振り「分かった、分かったからあれは止めてくれ」といっていた。

その後私が男と言ったら全員に驚かれた。まぁ慣れたけど。あとは自己紹介を済ました。その後はなぜか眼帯の子、チンクから下の子は兄と呼ばれるようになった。

まぁ、親密を深めるのは良いが。

第一四話（後書き）

というわけでジェイルを始めナンバーズ登場！
ただ、このときのナンバーズの年齢が分からないのであまり登場させないと思います。
後最近気付いた・・・・アリシア、プレシア、リニスの出番が少ない・・・・どうしよう！？

第一五話

第一五話

ジェ「ふむ。君の世界の魔法はすごいな。理論はおろか根本から本当に違う」

葵「人工魔法、お前たちの世界の魔法もあるがあれは私がもといた世界だと九歳のときには手放すな。あくまでも自己防衛手段のためで一〇歳になると魔法も普通に使えるようになる」

ジェ「九歳で！？」

葵「あぁ。ところでウーノ。トーレたちはどうした？」

ウ「ハイ葵様」

葵「ウーノ、その様付けはどうにかならないのか？」

ウ「こちらの方が呼びやすいので」

葵「・・・はぁ分かった。で、」

ウ「はい。ドゥーエ達と一緒に訓練施設に。葵様もいかがですか？」

葵「いや、今日はあっちに戻る。一応闇の書についても調べてもらって良いか？」

ウ「はい」

葵「済まないな」

ジェ「葵。本当に私が幸せになってもいいのか？」

葵「知るか。幸せってのは自分自身で決めるモノだ。だが、私から見たお前はすでに幸せをつかんでるんじゃないのか？　お前の娘がその形じゃないのか」

そういって私ははやての家に戻った。

ＳＩＤＥジェイル

彼は本当に変わっている。人ではない。いや、厳密には半分人で半分精霊。娘たちを人質に研究を強要し、さらに改造した人間、いや、狂乱者によって改造された人間。そして復讐を成し遂げるために戦争を繰り広げ勝利した。だが、その力故に世界から恐れられ殺された。

ジェ「彼も被害者なのか」

ウ「ドクター？」

ジェ「昔の話を聞く限り彼は本来ならば英雄になっていた。なぜなら彼を倒したのだ。世界を敵に回してでも仲間を守ろうとしたのだ。私も、彼を見習うべきなのか。それに私の幸せがどのようなものなのかも分かったよ」

ウ（ドクターのこんなに優しい笑顔は初めてみました。葵さんまは本当に全てをいい意味で変えてくださった）

娘を守り通したい。娘たちとの幸せを守り通したい。彼を見ているとそう思っていしまう。

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

―朝ＡＭ６：３０　八神家

ＳＩＤＥはやて

―ピピピピピ　ガチャ

は「うーん・・・」

―パサッ

ヴィータの布団をかけ直して、

は「ん～・・・」

起こさんようにリビングに向かった。

あれ？　ソファーにだれか・・・ってシグナムにザフィーラ。　まったくこんなところで寝たら風邪ひくで？　毛布はどこやったっけ？

―数時間後

―トントントン♪

シ「ん、ん・・・」

は「ごめんな　起こした？」

シ「あ、いえ」

は「ちゃんとベットで寝やなあかんよ？　風邪ひいてまう」

シ「す、すみません」

は「シグナム、夕べもまた夜更かしさんか？」

シ「あ～その、少しばかり」

は「ふふ、あ、シグナム　はい　ホットミルク。暖ったまるよ」

シ「ありがとう、ございます」

は「ザフィーラにもあるよ。ほらおいで」

―ガチャ

シャ「すみません！　寝坊しましたぁ！！」

は「おはよう、シャマル」

シャ「おはよう・・・あ～もう！　ごめんなさい、はやてちゃん」

あ「ええよ」

ヴィ「・・・オハヨー」

は「うわぁ・・・めっちゃ眠そうやな」

ヴィ「・・・眠い」

シャ「んもう、顔洗ってらっしゃい」

ヴィ「う～ミルク飲んでから・・・」

シャ「はい」

シ「・・・暖かい、な」

は「そや。シグナム。悪いんやけど葵君起こしてくれへん。もう直ぐ朝食できるって」

シ「あ、はい」

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

ＳＩＤＥシグナム

―葵の部屋

シ「神無月朝だぞ？」

葵「ん、んぅ？　あさ？」

まだ完全に覚醒していないのだろう。目がまだ寝ぼけている。

シ「（な、なんだこの愛くるしい生き物は／／／）お、起きろ朝だ。主はやてが朝食を作ってくれている」

葵「ん～、わかぁったぁ」

布団から起きると同時に布団の方も滑り落ち、そこからは、

シ「・・・なっ、こ、孤狐！？」

孤「んにゃ？　あれ？　しぐなむ？」

シ「なぜお前がここに！？」

孤「なぜって、葵はボクの契約主ですからね。あれ？　もしかしてシグナムうらやましい？」

こいつ、神の癖に小悪魔的な笑みを浮かべている。背中に羽と悪魔の尻尾が見えるぞ・・・。

シ「ば、バカなことを言うな／／／！！」

孤「顔真っ赤だよ。かわあぃぃ～」

シ「孤狐！！！」

葵「しぐなむ、おはよぉ～」

いつの間にか着替え終えたようだが、まだ眠そうだ。昨日何があったんだ？

―ぽふっ

シ「＃＄％＆‘（）＋＊―？＞＜」

孤「あぁ～、葵、朝弱いんだよね」

か、神無月！？

なぜか私の方に向かって頭から倒れてきた。だが、私がいたので自動的に神無月が私にもたれかかるようになる形で受け止めた。

葵「す～す～」

な、なんだ。寝ているだけか。だが、こうやって見るとただの子供のようだ。

―ゴゴゴゴゴゴッ

シ「・・・・あ、主はやて？」

壊れたブリキのおもちゃのように首を後ろに回すと、

は「シグナム？　なにしとん？」

シ「え、えっとですね・・・・」

主はやてに事情を正坐をしながら説明し難を逃れた。あの後ろにいた鬼は正直もう見たくない・・・。

神無月は脇ですやすやと眠っていた。

―アースラ駐屯地

―ピピッ

エイ「ん？　はいは～い　エイミィですけど」

マ「あ、エイミィ先輩　本局メンテナンススタッフのマリーです」

エイ「あ、何？　どうしたの？」

マ「先輩から預かっているインテリジェントデバイス2機なんですけど・・・何だか変なんです」

エ「えっ？」

マ「部品交換と修理は終わったんですけど・・・エラーコードが消えなくて・・・」

エイ「エラー？　何系の？」

マ「ええ　必要な部品が足りないって・・・今データの一覧を」

―ピッ

エイ「あ、きたきた。え・・・足りない部品って・・・これ！？」

マ「ええ・・・これ何かの間違いですよね？」

『エラーコードＥ２０３必要な部品が不足しています。エラー解決のための部品　【ＣＶＫ－７９２】を含むシステムを組み込んで下さい』

マ「２機ともこのメッセージのままコマンドを全然受け付けないんです。それで困っちゃって」

エイ（レイジングハート、バルデッシュ、本気なの！？　ＣＶＫ－７９２・・・【ベルカ式カートリッジシステム】・・・）

レ・バ《お願いします》

第一五話（後書き）

というわけでスカさんを善の道に走らせて見せました！

・・・・ｓｔｒｉｋｅｒｓの時の敵どうしよう・・・・

第一六話

第一六話

葵「学校？」

は「せや。葵君は学校どないしとるんかなって」

葵「行く必要性は感じられないな。なにせ大卒の学力は普通にある。というか小学校でいまだに因数分解しないってどんだけ遅れているんだ」

は「いんすうぶんかい？」

その後因数分解の説明などをしていると、

は「そんなもんは高校生の範囲やろ！」

と、突っ込まれた。

は「と、こんなことはどうでもいいねん」

どうでもいいことを聞いたのか、君は。

は「気にしなさんな」

こ、心が読まれた！？

は「今度うちに友達が遊びに来るんよ。で、一緒にみんなも晩御飯どうかと思ってな」

シ「御友人ですか？　私は構いませんが」

シャ「私もです」

ヴィ「で、そいつどんな奴なんだ？」

は「ヴィータ、奴って失礼矢で。シャマルとシグナムはしっとるよ。ほら、図書館出会ったあの女の子や」

シ「あぁ、あの子ですか」

シャ「確か月村すずかちゃんでしたね」

葵「ブフゥー」

すずか！？　なぜあいつが！？

は「だ、大丈夫か葵君？」

葵「けほっけほっ。あ、あぁ、でどうやってその子と知り合ったんだ？」

その後、はやてとすずかの出会いを聞いて納得した。

まぁ、いまさら拒否や反対をすれば変に感ずかれるため避けるしかなかった。一応適当に嘘をついて、すずかと知っているということとした。

そして現在管理外世界。岩がごつごつしたような場所。

葵「亀だな」

なんと言ったらいいんだろうか。ワニガメを大きく成長させたような感じの魔法生物。

葵「・・・足は遅い。シグナムお前が相手をするか？」

シ「いや、これぐらいなら・・・そう言えば葵。お前は孤狐と白騎士以外にも何か持っているのか？」

葵「あぁ。ルミルの黒騎士。そう言えば最近使っていなかったな。ルミル、今大丈夫か？」

ル《はい。マスターの命ならいつでも》

すると、黒い光と共にルミルが現れた。

葵「久しぶり行くか。漆黒の闇夜へ誘う者、黒騎士」

エ「シンクロイン！」

そして黒騎士の姿になる。

葵「時間がもったいない。一気にけりをつける」

エ《イエスマスター》

そういうと両翼刀を構えるが、すぐに上に放り投げる。

葵「その翼に終わりはない」

ル《終わりがないことが悲しく》

手には再び両翼が現れていた。私は両翼刀を空に投げた。

シ「なっ！？」

葵「永遠に紡がれ、終えることを知らない」

ル《永遠に負の連鎖がつながる》

さらに上に投げ、さらに手に両翼刀が、

葵「神は憐れんだ」

ル《そしてその翼に使命を与える》

そして六枚の翼は魔物の周りを舞うようにあたりを囲んだ。

葵「咎人を裁く役目を」

ル《裁きの時は来た》

その詩が謳い終わることには白黒合わせて6本の翼が舞を舞っていた。

葵「翼による（ウィング・オブ）」

すると、剣の羽の部分が一枚ずつり白き羽と黒き羽が咎人めがけ一気に向かった。

――ザシュ　ザシュシュ

―グォオオオオオオオオオオ

硬い鱗にもかかわらず、まるで肉に刺さるような音が聞こえる。魔物の姿は白黒の羽に刺されて見るも無残な形になっていた。

葵「裁き（ジャッジメント）！」

爆発を起こし、魔物はそのままドスンっという音と共に倒れた。

シ「こ、殺したのか？」

葵「訓練用だ。死んではいない。蒐集もできるぞ――待てシグナム。蒐集はあっちだろ？」

目の前には目を輝かせたシグナムがいた。

シ「これが終わったら模擬戦をしてくれ！」

葵「・・・分かった。だから蒐集をしろ。急いで戻るんだろ。今日ははやての友人がくるんだ」

シ「はっ！　そうだった！」

オイオイしっかりしてくれ。

蒐集し終えたシグナムがこちらに向かってやって来た。

シ「神無月、さっきの技はなんだったんだ？」

葵「あぁ、あれ？　この両翼刀って言うのはさっき言ったように永遠に生成され永遠に失われることのない刀なんだ」

シ「つまり、先ほどみたいに6枚でもそれ以上でも可能というわけか」

葵「あぁ。で、この羽根一つ一つが強力な魔力刃で大抵のものは貫通するな。で、その魔力を爆発させるとあぁなると言うわけ」

シ「なるほど。だから羽根による裁きか」

私は持ってきた懐中時計を見ると、まだ一か所ぐらいは世界を回れると考えた。

葵「後一か所回っておくか」

シ「そうだな。お前のおかげで時間が「へシグナム！　葵君！　聞こえる！？〉シャマル？」

なにやら焦っている様子の声でシャマルからの念話がかかってきた。

葵「どうした？」

シャ「〈ヴィータちゃんとザフィーラが管理局の結界に閉じ込められて、それにあの白い子と黄色い子も参加しているみたい。それに知らない魔力反応も一つあるし〉」

葵「急いで戻るか」

シ「そうだな」

私の転送魔法で海鳴市に戻った。

第一七話（前書き）

今回は2話連続投稿！
ただ、最初は短め・・・すいません！

第一七話

第一七話

―時は少し戻って管理局本局

バルディッシュとレイジングハートが戻ったころ。

フェ「お姉ちゃんが修理!?」

アリ「うん」

な「だ、大丈夫なのかな?」

リン「その辺は問題ないかと。アリシアさんはデバイスマスターの資格を取ってもおかしくないほどの技術力です。それにマリエルさんも手伝っていましたし」

アリシアはその後技術の方で協力していくと良いこととデバイスマスターの資格を取ると言うことを話しつつエイミィとの通信が入った。

エイ『そうよかった。いまどこ?』

ユ「二番目の中継ポイントです。後十分ぐらいでそっちに戻れますから」

エイ『そう。こっちに戻ったらレイジングハートとバルディッシュについての説明を「ビービービー」あ!』

ユ「どうしたんですか？」

エイ『現れたみたい』

ＳＩＤＥヴィータ

油断した。戻ってきて早々管理局に囲まれた。

ザ「管理局か・・・」

ヴィ「でもちゃらいよ、こいつら」

見たところあの白いやつよりかは弱そうだ。

ヴィ「返り討ちだ！」

グラーフアイゼンを構えると、囲んでた連中が退いて行った。なんで？

ザ「上だ」

ザフィーラの一言で上を見ると魔法陣を展開させていた管理局の魔導師がいた。あいつら囮だったのか！？

ク「スティンガー・ブレイド　・エクスキューションシフト！」

ザ「ちぃ！！」

ザフィーラがとっさにシールドを展開し、

―ズガズガズガズガ！ズガァアアアアアアアンン！！！

ク「はぁはぁはぁ、少しは・・・通ったか・・・」

煙が晴れるとザフィーラの腕にいくつか刃が刺さっていた。

ヴィ「ザフィーラ！？」

ザ「気にするな。この程度でどうにかなるほど・・・ヤワじゃない！」

そういって腕に力を入れ刃をへし折る。

ヴィ「上等」

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

―管理局臨時駐屯地

エイ「武装局員配置終了。ＯＫクロノ君」

ク『了解』

エイ「それから現場に助っ人を転送したよ」

ク『え？　なのは、フェイト！？』

ＳＩＤＥなのは・フェイト・アリシア

な「レイジングハート」

フェ「バルディッシュ」

な・フェ・ア「ｓｅｔ　ｕｐ！」

いつものように光りに包まれる二人だが、何かが違った。

な「これって・・・・」

フェ「今までと違う？」

するとエイミィとアリシアから通信が入り、

エイ『二人とも落ちついて聞いてね。レイイジングハート、バルディッシュは新しい装備を積んでるの』

な「新しい・・・しすてむ？」

アリ『そう！　その子たちが選んだんだよ。その子たちの意思で、思いで。だから二人ともイメージして。そして読んであげて新しいその子たちの名前を』

な「新しい」

フェ「名前」

そして

な「レイジングハート・エクセリオン！」

フェ「バルディッシュ・アサルト！」

レ・バ《《Ｄｒｉｖｅ　Ｉｇｎｉｔｉｏｎ》》

光が晴れるとそこには新しい姿のなのはとフェイトがいた。

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

第一七話（後書き）

アリシアは戦闘ではなく、技術者として活躍させようと思います！
リニスとプレシアは・・・どうしよう・・・

第一八話（前書き）

では、もう一丁いってみよう～

第一八話

第一八話

さて、あの後孤狐と契約を執行し今結界の外に来ています。

シ「強装型の捕獲結界」

葵「どうやらシャマルの通信通りになったか」

レヴァ《Ｗ?ｈｌｅｎ　ｓｉｅ　Ａｋｔｉｏｎ!》

シ「レヴァンティン、お前の主はここで退くような騎士だったか?」

レヴァ《Ｎｅｉｎ》

シ「そうだレヴァンティン　今までずっとそうしてきた!」

葵「このまま突っ込む。結界の破壊は私がする。シグナム、お前は魔力温存しておけ」

シ「良いのか?」

葵「金色の娘と戦うんだろ?」

シ「分かった」

そして、

葵「いざ参る！」

白桜を取り出し、

葵「無名流、黒月十字！」

斬撃を二振りし十字架を描くように切る。すると、ちょうど中心点にあたる部分の結界が、

―パリーン

割れた。

葵「行くぞ」

シ「あぁ」

―結界内　ビル屋上

フェ「私たちはあなた達と戦いに来たわけじゃない。まずは話を聞かせて」

な「闇の書を完成させる理由を」

フェイト、なのははヴィータとザフィーラの説得を試みようとしているが、

ヴィ「あのさ、ベルカの諺にこういうのがあんだよ。【和平の使者なら槍をもたない】」

な・フェ「「？？」」

―ズガァアン

全員「！？」

葵「分かっていないようですねそこの二人。簡単に言うと話し合おうと言う人間なら武器は持ってこないと言うことですよ」

ヴィ「そういうことだ〈葵！？　なんで！？〉」

葵「〈シャマルから連絡があった。それに今日が何の日か忘れたわけじゃないだろ？〉」

ヴィ「〈そう、だったな〉」

　すると、なのはが怒りながら、

な「なっ！？　いきなり有無を言わさず襲ってきた子がいう！？」

ザ「それにそれは諺ではなく小話のオチだ」

　そうなのか。

ヴィ「うっせぇ！　良いんだよ細かいことは！」

葵「来たか」

―ズガァアアン

葵の後に続くようにきた人影、

フェ「っ！？　シグナム」

葵「・・・・それでは始めましょうか。一対一の戦いを」

そういって私は距離をある程度とりこの場で監視しているであろう管理局の動きを探る。

シ「〈お前はどうするんだ？〉」

葵「〈私はシャマルの元へ。おそらく彼女たち二人が引きつけている間にだれかがシャマルを探るだろう〉」

そういってあたりを確認すると、ユーノとクロノの姿がなかった。

シ「〈そうか。では頼む〉」

そういってシャマルの元へ向かう。すると、そこにはクロノがシャマルにデバイスを向け投降を呼びかけていた。

ク「捜索指定ロストロギアの所持、使用の疑いで貴方を逮捕します。抵抗しなければ弁護の機会があなたにはある。同意するなら武装の解除を！」

葵（まずいな・・・・おや？）

明らかにだれが見てもクロノの方が優位だ。化というわたしもそう思っていた。だが次の瞬間それは逆転する。忍びよる者によって。

すると、妙な魔力反応を感じた。そして次の瞬間、

葵「あの仮面の男、いや、あの猫か」

シャ「え・・・」

ク「？・・・・！」

すると突然クロノを誰かが蹴り飛ばし後ろビルのフェンスにくのが衝突する。

ク「ぐあ・・・・な、なかま・・？」

その男は仮面をかぶっておりどのような表情をしているかすら分からなった。

だが、葵は。

葵「はぁ～。クロノ。油断があだとなったか。勝って兜の緒を締めろと訓練中にあれほど言ったのに」

そして仮面の男はシャマルに向かって、

シャ「あなたは・・・・」

仮「使え」

シャ「え？」

仮「闇の書の力を使って結界を破壊しろ」

シャ「でもあれは！」

仮「使用して減ったページはまた増やせばいい。仲間がやられてしまっては遅かろう」

そういって闇の書の力を使うことを勧めた。

が、

葵「それではこちらが困るんだ」

そういって私は仮面の男に刀を突き付けた。

葵「言ったはずだぞ。介入はするなと。したらどうなるか分かっているのか？」

仮「！？」

葵「氷矢！」

私の周りを水色の魔法陣が展開しそこから氷の矢がいくつも出て仮面の者を襲う。

仮「くっ！？」

葵「凍てつけ、その凍土のように、永遠に忘れ去られた大地！」

仮「なっ！？」

すると、仮面の者の頭を除き全てが氷の塊に包まれる。

ク「貴様は！」

葵「・・・君も少し黙ってろ」

そういって仮面のやつとおんなじ魔法をかけた。

ク「これは！？」

葵「さて、シャマル。そこのバカ二人の魔力を蒐集しておけ」

シャ「はい！」

葵「では結界を破壊しますか。〈シャマル。全員に撤退合図を〉」

シャ「〈えぇ〉」

葵「今から歌うは闇に染まりし者の声」

葵は手のひらを上にするとそこには闇に染まった一つの球体が浮かび上がった。

シャ「・・・・・」

シャマルはそれをじっと見ているしかなかった。

葵「その嘆きは何のために？　その憎しみは誰に向けて？　その悲しみは誰のために？」

その詠唱は悲しみにあふれ、憎しみにあふれ、怒りに満ちていた。

葵「我が嘆きは誰にも聞かれず、ただ闇に葬り去られた」

まるで、誰かに大切なものを奪われたかのような憎しみ、

葵「これは、我が怒りの鉄槌なり！」

すると、闇に染まった球体状のものはえっ階の上に行き、巨大な闇の塊が浮かびそこから無数の闇の矢が結界に降り注いだ。

その矢はまるで雨のように降り注ぎ、

―ピキ、ピキキキキキ

結界が悲鳴を上げ、そして

―パリ――――――――ン

葵「さて、次は殿といきますか」

そういって結界内に移動した。

―結界内

シャ「〈みんな。今から葵君が結界を破壊するわ！　うまくかわし

て撤退を！〉」

シ「〈葵！　お前はどうするんだ！？〉」

葵「〈殿をする。何回か転移したのち心の世界に入れ。そこからはやての家に通るようパスをつないでいる〉」

ヴィ「〈だけどお前が！？〉」

葵「〈心配するな。すぐに戻る。なに、捕まりに行くわけじゃないんだ。分かったなら行け。今日がどういう日かすれたわけじゃないだろ？〉」

シャ「〈葵君の言うとおりに。ここは葵君を信じましょう〉」

シ「〈・・・・分かった。ちゃんと戻ってこい〉」

ヴィ「〈約束だかんな！〉」

ザ「〈頼む〉」

葵「〈あぁ〉」

シ「すまんテスタロッサ。この勝負預ける」

フェ「シグナム！？」

ヴィ「ヴォルケンリッター鉄槌の騎士ヴィータ。あんたの名は？」

な「なのは。高町なのは」

ヴィ「高町なぬ・・・なぬ・・・えぇい！　呼びにくい！！」

な「逆切れ！？」

ヴィ「ともあれ、勝負は預けた。次は殺すかんな！　絶対だ！！」

な「！　ヴィータちゃん！」

ザ「仲間を護ってやれ！　直撃を受けると危険だ！」

アル「え、えぇ？　あ、あぁ」

その後、結界は砕けヴォルケンリッター達はその場から去り結界があった場所には葵だけが残った。

第一九話

第一九話

ＳＩＤＥなのは

それは幻想的でした。三日月を後ろにたつ一人の少女。神主さんが来ている服と淡い水色がかった白い髪に九本の尻尾。それがお月さまの光を浴びて本当にこの世のものとは思えませんでした。

な「どうしてこんなことをするの！？」

少女「君たちに話す必要性がありません」

フェ「なにをやっているのか分かっているんですか！？　明らかに公務執行妨害ですよ！？」

すると彼女はクスクスとおかしそうに笑う。

少女「公務執行妨害ですか。ではあなた方は警察の方ですか？　この日本国の組織の一員なんですか？　それならあなた方はどう見ても労働基準法違反ですね」

な「うっ」

葵君も言ってたな。管理局は日本の組織じゃない。だからその活動を妨害しても公務執行妨害にはならないって。

ユ「・・・・それ以前に、君みたいにあやしいものが何を言うか！？」

ユーノ君がそう言い放つが。

少女「あやしい。それはどういう視点からですか？　私から見ればあなた方も十分怪しいと思いますよ？　それに私たちは私たちの活動をしているまで。それを邪魔するのであればあなた方を殺します」

な「あの！」

少女「はい。なんでしょう」

な「ありがとうございます」

少女「・・・・は？」

あの子が何言ってるの？　みたいな顔をした。周りを見るとみんなもそうだ。

フェ「な、なのは！？　あの一応敵なんだよ！？」

な「でも、キズ治してくれたんだよ！？」

少女「怪我をした女の子を放っておけるほど私も腐ってはいませんよ」

すると、ユーノ君が一歩前に出て、

ユ「君たちの目的はなんだ！　なぜ闇の書を完成させようとしている！！」

少女「・・・・大切な物をなくしたくないから。でしょうか」

な「え？」

少女「質問はそれだけですか？　なら私も「待ってください」なにか？」

な「・・・・名前を」

少女「ん？」

な「名前を教えてください！？」

孤「孤狐。孤独な狐と書いて孤狐。ではまた会いましょう。小さな姫騎士達」

そういって孤狐さんは消えた。

な「え、エイミィさん！？　彼女は！？」

エイ『だめ、完全にロスト・・・て、あれ？　え？　どうなってるの！？』

リ『どうしたのエイミィ！？』

エ『さっきの子供の反応が日本だけで北から南までで一四個の反応！　しかも全部バラバラ！？　地球規模だけで五〇は超えます！！

しかも同時展開！？』

孤狐さん。いったい何者なんだろう。あれ？　でもこんな感じの人どこかで知っているような・・・・

ＳＩＤＥＯｕｔ

―八神家　リビング

葵「さて、転移も終了。はやての魔力も感じますしどうやら間にあったかな？」

孤「ふわぁ～。ボクは眠いから先に寝るね」

葵「あぁ、今日もありがとう」

そういって孤狐は寝室に向かった。

あの後一応念には念であちこちに転移し、ついでに反応を同時に展開させたりと管理局の追跡を振り払った。気が付いたら深夜を回っていた。

葵「はやてには悪いことしたな。（でもここですずかにばれるといろいろまずいし）」

―ぱっ

葵「え？」

いきなり電気がつきその場にいたのは、

葵「・・・シグナムにヴィータ？　なぜまだ起きているんですか？」

シ・ヴィ「「・・・・・・・・」」

なぜ沈黙？　すると、急に宙に浮く感じがするとシグナムが胸ぐらをつかんでいた。

シ「貴様！　どれだけ私たちが心配したと思っているんだ！？」

ヴィ「お前の帰りが遅いから心配だったんだぞ！」

・・・悪いことしたな。

葵「すまん」

シ「・・・誠意がこもっていないな」

ヴィ「おい、シグナム？　何しようとしてんだ？」

葵「ではどうすればいいんだ？」

ヴィータが一瞬何かに気付きシグナムに問うと、シグナムが、

シ「簡単だ。こうすればいい」

すると、シグナムの唇と私の唇が・・・て、えぇえええええ！？

というか・・・

シ「んっ・・・んくっ」

葵「んんっ・・・・！？」

舌まで入れてきましたよ！？　大人のキスというやつ！？　そして、

―シュゥウウン

シ「痛っ・・・これは？」

ヴィ「・・・・りぃ」

シ「どうしたヴィータ？」

ヴィ「シグナムだけずりぃ！　あたしもする！」

止めてくれ、色々と私が危な「んっ！」・・・・

ヴィ「んっ・・んんっ・・・」

葵「んくっ・・・・ん」

―シュゥウウン

ヴィ「痛ぇ！　な、なんだこれ！？」

二人とも左手に私と同じ模様が浮かび上がったらしい。

葵「ははははっ。二人を、汚してしまった・・・あぁ、人としてどうなんだ、あぁ、私は取り返しのつかないことを・・・・」

シ「か、神無月？」

　すると、今まで部屋の隅っこで膝を抱えていたのに、行き成りバッと顔をあげて、

葵「シグナム、切腹の介錯を頼む」

シ「なぜ！？」

葵「二人を汚したのだ。その報いは受ける」

ヴィ「いやいやいや。あたしらが自分からすすでやったんだ！　葵はその、悪くねぇから死ななくていいんだよ！」

　そうなのか。でもどう責任を取れば・・・というか二人ともどこであんなキスの仕方を覚えたんだ？

シ・ヴィ「「孤狐から」」

　心読まれた。というかあいつが！？

葵「はぁ、まぁ今さらどうこう言うつもりもない。あと、その左手の模様ついてはシグナム知っているな？」

シ「・・・つまりこれで／／／」

ヴィ「な、なんだよ、これがなんになるんだ？」

ヴィータに簡単にパス契約のことを説明した。

ヴィ「つまり今までお前の姿やしっぽが出たり耳が変化したのは孤狐とパス契約を結んで執行したからか」

葵「そういうことだ。後、孤狐と同じことがお前たちにもできるようになった」

ヴィ「そ、そうか・・・／／／」

なんか二人とも顔が赤くなり自分の世界に飛び立ってしまった。

あれ？　なぜに？

とりあえず彼女たちにどんな能力が加わったの確認するために白書を出すと、

葵「・・・・！？」

私はあるところで目を疑った。

葵「ヴィータ、明日暇か？」

ヴィ「ん？　あぁ、暇だけど」

葵「明日パス執行の実験を行う」

そう言うと、シグナムが、

シ「私はしなくていいのか？」

葵「いや。そのうち行うが、それよりヴィータのところが・・・これはみてもらった方がいいな」

そういって白書の説明をしたあと、白書をシグナムとヴィータに渡すと、

シ「ほぉ、神無月。お前は孤狐と私たち以外にキスをしたのか？」

―ジャキン

ヴィ「てめぇ、いい度胸だな？」

―ガコン　ガシュゥウウウ

・・・・何気に命の危機だ！

葵「・・・・落ちつけ。シグナムよ、レヴァンティンを構えるな。ヴィータ、何気にカードリッジをロードするな。よく白書を見ろ。特にヴィータ。お前のところを見ろ」

ヴィ「ん？」

シ「そう言えばヴィータ。お前のページがないな」

ヴィ「いわれて・・・・ちょっと待てシグナム！　これ・・・・・」

シ「どうし・・・・はぁ！？」

葵「それの確認を踏まえて明日実験を行うんだ」

そういって時計を見ると結構時間がたったようだ。

葵「とりあえず今日はもう遅い。はやてを起こすわけにもいかないだろ。寝るとしよう」

シ「あぁ。そうだな」

ヴィ「おやすみ、葵」

葵「あぁ、お休み。良い夢を（ニコ）」

そういって笑いかけて自分の寝室に向かい寝た。

ＳＩＤＥシグナム

シ「ふぅ。これが、神無月とのつながり／／／」

自分の寝室に戻り、左手の甲にできた翼の模様を見る。

これが、あいつとのつながり。そして一つになれる資格／／／

シ「な、何を考えているんだ！」

顔が赤いのがわかる。なにせ、火でもつけたのかというぐらい熱いのだ。

シ「そうだ、こういうときは寝る！　そうだ寝るに限る！」

そういってベッドに入り眠りにつこうとした。だが、頭にはあいつの顔が浮かんでくる。なぜこうも悩まなければならないんだ。

シ「そう言えば、以前。主はやてが神無月が好きだといってたな」

―ズキンッ

すると、急に胸が締め付けられるように痛む。なぜだ？　なぜ痛むのだ。主の幸せを祝うのが騎士ではないのか。

―ズキンッ

だが、さらに痛む。それと同時に胸がもやもやする。なんなんだこの感情は・・・

シ「好き・・・か」

―ドキンッ

シ「／／／！？」

好き。そう言った瞬間、胸が急に暖かくなった。なんか、むずがゆくだが嫌ではない。

―好き

シ「そうか、私は、神無月が、好きなのか」

そう思うとさっきまでの痛みは消え、もやもやしていたものもど

こへ行ったのか。

シ「主はやてに悪いな。明日にでも伝えるか」

そう言って眠りについた。

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

ＳＩＤＥヴィータ

ヴィ「あいつとキスしちまったんだよな」

そういってあたしは自分の唇を抑える。

ヴィ「・・・嫌じゃない。むしろ嬉しかった／／／。あいつと一つになれた感じがした／／／」

そう。あいつとキスした瞬間胸が熱くなった。それとうれしかった。

以前からそうだった。あたしらが突然現れたときは敵だと思った。でもあいつが料理を作ったり、デザートを作ってくれたりした。それにいくらはやてのためとはいえ、こんなことに足を自ら突っ込んだ。それにあいつはあたしたちを守るって言ってくれた。

実際あたしは助けられた。心配もしてくれた。それだけじゃない。毎回自分は最後まで戦い、そして帰ってくる。でも、あんなのもう見たくない。あたしだってあいつを支えたい！　過去云々じゃない。

でも、なんでこんな感情になるんだ？

以前にはやてがあいつのこと好きって言ってた。

あたしもあいつの好きなのか？　ううん。そうじゃない。あたしもはやてと一緒だ。

あたしもあいつが好きなんだ！

ヴィ「でも、はやてに悪いな・・・」

そう。はやてもあいつが好きなんだ。

ヴィ「はやてに謝ろ。でもそれでもあいつが好きなんだ！」

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

第二十話

第二十話

ＳＩＤＥはやて

さて、みんなの朝食を作らな。

いつも通りベッドから車いすに乗りリビングに向かうといつもと違う光景が映った。

は「あれ？　シグナムにヴィータ。今日は早いな」

シ「・・・え、えぇ」

ヴィ「そ、その、はやて」

すると二人は何かを言いたそうやけど、その、何が言いたいのかがわからん。すると、

シ・ヴィ「「申し訳ありません（ごめんなさい）」」

は「は？」

何言っているのかわからん。謝られるようなことをしたんか？

でも、それやったら渡しに心当たりがあるはずなんやけど何もない。

は「二人とも何をしたん？　私には二人に何かされた覚えはないん

やけどな？」

ヴィ「はやて。はやては葵が好きなんだよな？」

・・・・え？

は「えぇえええええええええええ！？」

いきなりの衝撃発言にびっくりや！

は「そそそそ、そりゃ、確かに、私は葵君のこと好きや／／／　でも、なんで今さら？」

シ「それ、のことなのですが・・・私たちもその、神無月のことが・・・好きになりまして／／／」

ヴィ「はやてに、そのことを報告しようと／／／」

そ、そうなんか・・・でも！

は「別にええけど」

シ・ヴィ「「え！？」」

は「そやけど、うちが正妻やで！？　そこはええか！？」

シ・ヴィ「「は、はい！！」」

作者：のちに二人は語る。はやての後ろに鬼が、夜叉がいた。と。

黙り。必殺！　シャマルの料理！　行けぇえええ！

作者：え！？　どこからそれをグボォ・・・・うぎゃぁぁぁぁぁぁぁあ・・・・（昇天）

さて、悪も滅んだし。葵君にこのこと聞かなね。

シ「あと、それとですね」

すると、次のシグナムの発言が私の心の中にすむ何かを呼び起こした。

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

――ブルッ

なんだ、今の寒気は。背筋が凍るようなあの変な寒気は。あ、やばい。今変な汗が背中に。とりあえず起床時間なので起きるか。

寝巻から普段着に着替え、そのままリビングに向かうと、

葵「ん？　どうしたんだはや――――――！？」

目の前には黒いオーラを纏った誰かがいる。いや、はやてなのは間違いない。なにせこの家で車いすに乗っているのははやてだけだ。だが、はやてから出ているオーラが何とも・・・

は「おはようさん、葵君」

そういってこちらに振りかえって満面の笑みで朝の挨拶をしてくるはやて。だが、その笑みが何とも・・・・怖い。

葵「あ、あぁ、お、おはよ・・・」

ひ、久しぶりだこんな恐怖は。いや、下手をすればあの戦時下におかれた方がまだましだ。

は「なぁ、葵君？　今さっき二人から聞いたんやけど二人とキスしたっていう話・・・ほんま？」

なぜその話を!?　シグナム、ヴィータ!?

二人の方に視線を向けると、部屋の隅で二人が抱き合いガタガタブルブルとふるえていた。

そ、それよりも今はこれを回避せねば。

葵「あのな、はやて。確かに二人とはした。だが、それはあくまでも【事故】と【おまじない】だ」

は「へ？」

シ「〈おい神無月。あれを事故で済ませるのか!?〉」

ヴィ「〈おまじないって何だよ!?〉」

ご丁寧に念話で何か意見を言っているが、

葵「〈今のはやてに真実を伝えると、その私を含めお前ら二人も・・・・天に召されるぞ？　しかもその昇天方法がシャマルの料理かもしれないのだぞ〉」

　すると、彼女たちの顔がさらに青くなった。おそらく【昇天】と【シャマルの料理】というのが効いたのだろう。しかもあり得る話だ。

シ・ヴィ「「〈・・・・・回避しよう〉」」

　誰だってそうだ。真実捻じ曲げるｏｒ命が取られる。どっちがいい？　て聞かれたらもちろん前者だろう。

葵「事故はシグナムだ。私が帰って来たのを知って急いで玄関に来る途中に何かに躓いてその拍子にだ。ヴィータはそのまま寝ようとしたんだが恐い夢を見たらしくおまじないでキスした。それだけだ！」

　そう言って回避する。いや、するしかない！

シ・ヴィ（（く、苦しい。苦しすぎるいいわけだ！！））

　なら、君たちが考えてくれ！！

シ・ヴィ（（無理だ！））

は「そっか、それなら仕方ないなぁ～」

葵・シ・ヴィ（（（ごまかせたぁーーー！？））））

あまりにも予想外の方に転がったが・・・まぁ、そっからは、普通といっていいのかそのような朝食を食べた。

が、

シャ「あらシグナム。その傷・・・それって！」

は「どないしたん？　あ！　シグナム入れ墨はアカンよ！？」

シ「え！？　ち、違います！」

ザ「ヴィータにもあるな」

ヴィ「こ、これはその・・・」

これは助けるか。またさっきみたいになるかも知れんが。

葵「はやて、さっき話したことは覚えているか？」

は「ん？　シグナムとヴィータとキスしたこと？」

シャ「えぇえええええええ！？」

ザ「・・・本当か？」

シャマルが悲鳴みたいな叫び声を出し、ザフィーラは二人に確認をとるように見ると、

シ・ヴィ「「／／／」」

ザ「なるほど、本当のようだな」

葵「あとはやて。私がシグナム達とは違う魔法使いというのも知っているな？」

は「うん。しっとるで。あ、それ関連か？」

葵「察しが良くて助かる。まぁそういうことだ」

そういって紅茶を飲みながら簡単な説明をする。まぁ途中ではやてが

は「うちもそれほしい！」

と、言ったがまだ不明な点が多く全てが解明できたらな。と、あしらっておいた。

さて、場所は変わり心の世界・・・といいたところだったんだが携帯が鳴ったようなので一旦スイスに来た。シグナムとヴィータには待っているように言った。

葵「どうしたんだ。急に電話なんて」

ク『あぁ、君に一つ相談でな』

葵「管理局への勧誘は断るぞ。それ以外なら良いが」

ク『君みたいな人間が管理局へ入ってくれるのはありがたいが無理強いはしない。まぁそれとは別なんだがな。実は――』

どうやらクロノたちいわく闇の書の目的がわからないらしい。蒐集が目的なのは分かっているが、それ以上のことが何もわからないらしい。

葵「（まぁ、話すわけにもいかないからな）なるほど。なら、【不の者】事件と同様のことをすればいい」

ク『どういうことだ？』

葵「足を動かせ。つまり地道に資料探しだ。誰かそう言うのに適する者はいないのか？」

ク『そう言えばスクライア一族は・・・そうか！　ユーノがいた！』

葵「あと、クロノ。すまんが集めたデータは私にも渡しくれないか。力になれるかもしれない」

ク『あぁ、分かった』

葵「それと今回はお前ら単独行為なのか？」

ク『いや。グレアム提督が協力してくれる。でもどうしてだ？』

葵「いや、もしリンディ提督以外の協力者がいるのであればその者の了承を得てさらに調べれる範囲を拡大できると思ってな。だが一人いるのであればそのものにも頼んでみろ」

ク『あぁ。ありがとう』

そういって通信が切れた。

葵「グレアム。何かきな臭いな」

そう言って私はギル・グレアムについて調べると、

葵「ほぉ。面白いな。あってみるか」

管理局本局に座標を合わせ、

葵「どうも。ギル・グレアム提督」

ＳＩＤＥグレアム

？？？「どうも。ギル・グレアム提督」

ギ「な！？」

一人の少女がたっていた。

葵「彼女たち、あなたの猫から聞いていると思いますが、自己紹介を。神無月葵です。以後お見知りおきを」

そうか、彼女、いや彼は男の子だったな。彼が今回の計画のイレギュラーか。

ギ「ここがどこだか分かってるのかね？」

葵「えぇ。だから不可侵の結界を張らせていただきました。この中

ではいかなるものでも入ることができません」

いつの間にそんなものを・・・・

葵「さて、あなたに言っておきます。闇の書の蒐集の妨害をしないで頂きたい」

ギ「それはできない相談だ」

葵「・・・・復讐のため。ですか？」

ギ「！？」

葵「クロノの父、クライド・ハラウオンのため、その者の弔い合戦でもしようというんですか？」

ギ「・・・・・」

葵「ばかばかしい」

ギ「なんだと！？」

葵「一つだけ言っておきます。死んだ者が、クライド・ハラウオンが今回のことを知って喜びますか？」

ギ「・・・例え彼が喜ばなくても、いつかしなければ世界が滅ぶ！　君もそれぐらいは知っているだろ！？」

葵「えぇ。ですが世界が滅ぼうが私は大切な物を傷つけてまで助かりたくはない。助かるのであれば皆が喜ぶハッピーエンドを迎えた

い。そのためならあらゆる手段を探す。あなたはたった一つの方法しか見つけなかった。この十一年間その一つだけにかけてきた。でも、探せば他にもあったのではないのですか？」

ギ「そ、れは・・・」

葵「もう一度考えてみてください。本当にそれが世界のためなのか、死んでいった者のためなのか。あなたならできるのではないのでしょうか」

ギ「・・・もう、遅いんだよ」

葵「諦めるな！」

彼は私を鋭く睨みながら叫ぶ。

葵「諦めればそれで終わりだ。何もかも。全てが。諦めず、前を向いて進め！」

ギ「まるで、経験したような口だな」

葵「経験したよ。諦めたがために友が死んだ。それでも人々は世界が助かるための犠牲といった。でも私は違う！　彼が死んだことによって不幸に突き落とされた人がいたのを知っている！　その人は嘆き、悲しんだ！　あそこで私が諦めなければとなども後悔した！　犠牲なくして世界は助からないと言うやつがいるがそれは違う！　それはただ探すことを諦めたやつのいいわけだ！　探せばあるんだ！　それを忘れるな！」

そういって彼は私を突き放し、消えるように去っていった。

ギ「諦めるな・・・か。他に方法があるのかも知れんのか・・・」

私はすぐにロッテとアリアに調べ物を頼んだ。他の方法を探るように。

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

話してわかる相手ならいいが。

まぁ、それは置いといて私は心の世界にいます。一旦家に戻りシグナムとヴィータと合流しましたしね。今回の目的は、

葵「ヴィータのこのわけのわからない状態」

ヴィ「わけのわからないって・・・。でもそんなに不可思議なのか？」

葵「普通はその状態のままだ。私と孤狐がいい例だろう」

シ「確かに」

葵「まぁ、それを確かめるためと実力をはかるためというのある。というわけでヴィータ。少しこちっに」

そういってヴィータをこちらに呼んだ。

ヴィ「なんだ？」

葵「執行の方法を教える」

そういってやり方を教える。

ヴィ「なっ／／／！？　ま、まじなのか！？」

葵「・・・・はい。嫌なら行いません」

ヴィ「（でもこれで・・・）わかった」

そういって私はヴィータに抱きついた後、私の右手、ヴィータの左手、つまり模様がある手を握る。

葵「我、汝に問う。汝何のために力を欲す」

ヴィ「・・・・えっと」

葵「思ったことを言葉に。それだけでいいんだ」

ヴィ「はやてを、みんなを守るために！」

葵「それにウソ偽りはないか？」

ヴィ「ない！」

葵「汝の意志しかと受け止めた。契約執行。執行者神無月葵、契約者ヴィータ」

すると、赤い光が周りを包み、そこから出てきたのは。

ヴィ「うぉ！　すげぇ！　ほんとに視線が高い！」

大体１８ぐらいだろうか。シグナムより少し低いぐらいの身長ぐらいにまでなっている。それに体格が何というか・・・

ヴィ「おぉ！　胸もシグナムに負けてねぇなこれ！」

シ「ヴィータ・・・なのか？」

葵《間違いなくな》

シ「そう言えば葵はどこにいるんだ！？」

葵《えーっと簡単に言うとユニゾンデバイスってわかるか？》

シ・ヴィ「「あぁ（うん）」」

葵《簡単に言うと私がそのユニゾンデバイスみたいにヴィータの中にいるとでも考えてくれ》

シ・ヴィ「「えぇえーーーー！」」

ＳＩＤＥヴィータ

葵《簡単に言うと私がそのユニゾンデバイスみたいにヴィータの中にいるとでも考えてくれ》

そうか。だからさっきから胸がぽかぽかと暖かいんだ。

葵《ヴィータ。早速だがグラーフアイゼンを展開させてくれ》

ヴィ「あ、うん。グラーフアイゼン」

いつも通りにアイゼンを起動させると、いつもの騎士服じゃなかった。何と言うか多少露出もある。何と言うか葵の黒騎士とよく似ている。だけど黒じゃなくて赤だ（某弓兵女バージョンの全赤）。でも帽子はそのまんまだ。

葵《飛翔・・・鉄翼展開》

するとあたしの背中に鉄の翼が広がった（ストフリのスーパードラグーンで青が赤に変化）。

葵《ヴィータはいつも通りアイゼンに集中してくれ。サポートは私が全力でする》

ヴィ「おう！　シグナム！　そっちは良いか？」

シ「あぁ。来い！」

そして赤と紫の魔法色がぶつかった。やっぱ剣と鉄槌っていうのは相性が悪い。こっちは大きく振りかぶるが剣はそれを必要としない。

葵《ドラグーン分離。攻撃対象から防御のため魔法攻撃開始。照準よし。ファイヤ！》

すると赤い部分の羽がいきなり分離した。

ヴィ「おぉ！」

シ「あれは分離するのか！？　魔法陣・・・攻撃！？」

―バシュウ　バシュン　バシュ

すると、無数の赤い光がシグナムを襲う。

ヴィ「今のうちだ！」

シ「させる――なに！？」

シグナムもこちらに向かって切り込んでくるが、それを防ぐようあのドラグーンが攻撃をしシグナムの攻撃を停止させる。

葵《これのコントロールは私がしている。つまりヴィータは攻撃に専念しやすい環境を作るのが私だ》

―ガキィン

シグナムは避けようにも避けるとドラグーンの餌食になるらしい。こりゃ確かに戦いやすい！

ヴィ「なぁ、葵。必殺！　みたいなやつないのか？」

葵《あるにはあるが・・・試してみたいか？》

ヴィ「もちろんだ！」

葵《じゃあ少し待て。ドラグーン円形》

するとドラグーンが円を作りその中心に赤い魔力球を作りだす。

葵《まぁ、簡単にいえばあれをアイゼンでぶつけ砲撃にするんだ。リヴェル・ライトっていうあっちの世界じゃヴィータみたいな武器を使うやつが使う魔法だ》

ヴィ「じゃあ行くぞ！　グラーフアイゼン！」

グ《Ｅｐｌｏｓｉｏｎ》

葵・シ「《へ・・・》」

グ《Ｒａｋｅｔｅｎｆｏｒｍ！》

シ「待てヴィータ！　それはまずい！？」

葵《それはオーバ「ラケーテン！」って聞け！》

葵が何言ってるかはしらねぇけど！

ヴィ「リヴェル・ライトォオオオオ！！！」

ラケーテンハンマーの要領でそのまま赤い魔力球をぶん殴る。

葵《シグナム逃げろ！　明らかにオーバーキルだ！！》

シ「言われなくても！」

―キュゥウウウウイン

ラテーケンハンマーの影響なのか一旦魔力が収束し、そして

―ズガァアアアアアアアア！！！！

赤い光が砲撃となりシグナムがいた場所に放たれる。それが収まると、コロッセオの観客席の一部に大きな丸い穴が開いた。そしてその砲撃の通り道似あったであろう森林がク先一本越さず無くなっていた。

葵《・・・・想定外だ》

シ「これはお前の魔法で言うどれ位に想定するんだ？」

葵《私で例えるよりもっといいモノがあるぞ》

ヴィ「なんだそれ？」

葵「高町ってわかるか？　あの白い子だ」

シ「あぁ。分かる」

葵《単純に威力だけならあの子が結界破壊にはなった魔法。スターライトブレイカーの二倍》

シ「・・・・」

ヴィ「ちょ、ちょっと待て!?　それ明らかにオーバーキルだろ!?」

葵《だな。後契約を解除する》

そう言うと光と共にあたしの身体も元に戻り、葵も出てきた。

葵「多分だがラケーテンハンマーの威力が相乗効果をもたらしたんだろ。ある意味あれは封印指定なるぞ」

ヴィ「き、気をつける・・・」

すると、葵が白書のあたしのページに目を向けていた。

葵「ほぉ。ヴィータ。今雷系の魔法を使えるか?」

ヴィ「使えるわけねぇだろ。あたしは「良いかイメージしてみろ」わかったよ」

そういってあたしがイメージすると、

―バチッ

ヴィ「うおっ!?」

シ「なっ!?」

葵「なるほど。これはキープされるのか」

ヴィ「あたしは変換資質なんて持ってねぇぞ!?」

葵「付属でそのまま維持されたんだろ。私とヴィータが契約を執行されたときについた騎士称号にならってな」

ヴィ「なんだそれ？」

葵「これだ」

そういって葵はあたしのページを見せてくる。

―白書　【ヴィータの項目　神雷（しんらい）の騎士　ヴィータ】

葵「神の雷とはすなわち裁きの鉄槌だ。多分それにならって神雷というわけだろ。まぁヴィータにはぴったりだろ」

シ「それは私にもつくのか？」

葵「あぁ。何がつくかはわからんがな」

そういって葵は白書をしまう。

葵「それより今日は蒐集はいいのか？」

シ「いや。一時間ぐらいなら時間ができるからな。それが終わり次第だ」

葵「そうか分かった」

ヴィ「な、なぁ葵！」

葵「ん？」

ヴィ「今日の蒐集あたしといこうぜ／／／！」

シ「なっ！？　ヴィータ抜け駆けするつもりか！？」

ヴィ「へっ、シグナムは今日ザフィーラといくんだろ？」

シ「ならザフィーラをそっちに渡す！　だから葵、私と来い！」

なんだと！？

シ・ヴィ「「ぐぬぬぬぬ」」

―パンパン

葵の方を見ると手を叩きやめるように促していた。

葵「それまで。私はヴィータといこう。あとシグナム。ザフィーラと行く予定ならちゃんと行け」

ヴィ「よっしゃー！」

シ「仕方あるまい。だが今度は！」

葵「あぁ約束しよう」

まぁその後は葵の料理を食べて心の世界で一日経つのを待ち、あたしと葵は管理が異世界に向かった。

SIDE out

第二一話（前書き）

・・・ニュースです。
驚くことにいつの間にかＰＶが１００，０００越え・・・ユニークも万超えてました・・・。お気に入りも１００超えました・・・お、驚いてます・・・とても・・・いやはやどうも何と言ったらわかりませんが読んでくださっている皆様のおかげです。どうもありがとうございます！

第二一話

第二一話

ＳＩＤＥフェイト

学校から帰ってなのはとアルフと私は今私の部屋にいます。携帯電話などの使い方や昨日についてはなしています。

あと、葵はどうやら私と入れ違いでこの地球の別の国に【不の者】の調査のために行っているみたいです。でも国外にいても連絡手段として仕えるようなのであとで教えてもらおう。

フェ「そっか。アリサとすずかはヴァイオリンやってるんだね」

な「うん。メールでよくお稽古のお話してくれるんだよ」

フェ「そうなんだ」

―ガチャ

エイ「たっだいま～」

どうやらエイミィが帰ってきたみたいだ。

私となのははお手伝いをするためにキッチンに向かった。

―がさがさ

エイ「艦長、もう本局に出かけちゃった？」

そういってエイミィは私にかぼちゃを渡した。

フェ「うん。アースラの武装追加が終わったから試験航行だって。アレックスたちと」

エイ「武装ってぇと・・・アルカンシェルか。はぁ、あんな物騒なモノ最後まで使わずに済めばいいけど」

な「クロノ君もいないですし。戻るまではエイミィさんが指揮代行だそうですよ？」

ア「責任じゅ～だ～い」

アルフの言うとおり結構責任重大だ。でも、エイミィなら出来ると思うな。

エイ「うっ・・・それもまた物騒な」

エイミィはかぼちゃをなでるようにして、鷲掴みにするようにかぼちゃを片手でつかんだ。エイミィって見た目によらず握力すごいんだ・・・

エイ「ま、とはいえそうそう非常事態なんて起こるわけ・・・」

―ウーッ　ウーッ　ウーッ

非常事態の警告音が鳴り響いた。なんか葵が言ってたけど嫌な予

感ほどよく当たるって・・・・。このことかな。

エイ「・・・あっ」

―ごとっ

あ、エイミィがかばちゃ落とした・・・。

―モニター室

エイ「文化レベルゼロ。人間は住んでいない砂漠の世界だね」

モニターにはシグナムとアルフが戦ったあの守護獣もいた。

エイ「結界を張れる局員の終結まで最速で４５分。・・・うぅん、まずいなぁ～」

シグナムが相手なら。そう思いアルフと視線を合わせ、

フェ「（うん）エイミィ、私が行く」

アル「私もだ」

シグナムが相手なら私が！　おそらくアルフもあの守護獣が相手だからだろう。

エ「・・・うん、お願い！」

フェ「うん」

アル「おう」

エイ「なのはちゃんはバックス。ここで待機して」

な「はい」

私は部屋に戻りカードリッジと待機状態のバルディッシュを手にした。

フェ「行くよ。バルディッシュ」

バ《Ｙｅｓ　Ｓｉｒ》

今度こそ、彼女を・・・

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

ＳＩＤＥシグナム

―ウォオオオオオオ！

目の前にいる魔法生物は頭から体液が流れ出ているが、それでもまだ生きている。

シ「ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・フゥ、ヴィータが手こずるわけだ。少々厄介な相手だ」

葵はこれを一撃で倒したのか。さすがというかなんというか。私

も負けてられん！

―ウォオオオオオオオン！！！

シ「っ！？」

後ろからだと！？

―フォン　ヒュッ　ヒュヒュッ

シ「っ・・・しまった」

回避が間に合わず、魔法生物の触手につかまり縛られた。

―ギリギリギリ

シ「あぁぁっ！」

締めつけられ身動きが取れない。そしてもう一匹が襲いかかって来た。

？？？《Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｂｌａｄｅ》

―ズガァアア！　バチバチバチ！！

上空から無数の雷の剣が降り注ぎ、魔法生物に襲いかかった。

―グァアアアアアウオオオオ

上空を見るとテスタロッサがいた。

フェ「ブレイク！」

―ズドォォォン

テスタロッサがそう告げると剣が爆発し魔法生物は倒れて行った。

ＳＩＤＥ　ｏｕｔ

ＳＩＤＥザフィーラ

あの雷。誰かが介入したか。

アルフはフェイトと別れ、ザフィーラの元に現れる

アル「ご主人様が気になるかい？」

ザ「・・・おまえか」

アル「ご主人様は一対一　こっちも同じだ」

そう言い、彼女は構える

ザ「シグナムは我らが将だが・・・主ではない」

私も身構え臨戦体制に入る

アル「あんたの主は、闇の書の主って言う訳ね」

ザ「・・・・・」

ＳＩＤＥ　ｏｕｔ

ＳＩＤＥフェイト

エイ『フェイトちゃん！　助けてどうするの！？　捕まえるの！』

フェ「あ、ごめんなさい・・・つい」

シ「礼は言わんぞ。テスタロッサ」

フェ「お邪魔でした？」

シ「蒐集対象をつぶされた・・・」

シグナムはデバイスにカードリッジを装填した。

フェ「まぁ、悪い人のじゃまをするのが私の仕事ですし」

シ「そうか。悪人だったな・・・私は」

―ガシュゥ

弾を装填し終えると彼女はデバイスを構えた。

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

―モニター室

再びアラームが部屋中を鳴り響く。

そしてモニターに映ったのは、葵と闇の書を持ったヴィータだった。

エイ「本命はこっち！？　なのはちゃん！」

な「はい！」

力強くなのはうなずいた。

ＳＩＤＥ　シグナム・フェイト

シ「預けた決着は今しばらく避けたいが・・・速度はお前の方が上だ。逃げられないなら戦うしかないな」

フェ「はい。私もそのつもりできました」

互いにデバイスを構え、そして

―タッ　ガキィン

フェ「てえ！」

シ「ふっ！」

―キュゥィン　ガチバチガチバチ

お互いの攻撃をぶつけあうが障壁によって防がれる。

―ガシュゥン

レヴァ《Ｓｃｈｌａｎｇｅｆｏｒｍ》

シ「はぁぁ！」

シグナムはレヴァンティンを連結刃にしフェイトに追い打ちをかける。

フェ「っ！」

フェイトは何とかシグナムの攻撃を飛ぶことによって回避した。

―ガシュゥン　ガゴン

バ《Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ　Ｈａｋｅｎ　ｆｏｒｍ》

―ガチャ！バチバチ！

フェイトもバルデッシュをハーケンフォームに変型させ構える。

フェ「ハーケンセイバー！！」

シ「はぁぁぁ！」

シグナムは連結刃をフェイト囲むように螺旋状態にする。

フェ「はぁぁ！」

―ブフォン

フェイトはハーケンセイバーの魔力刃を連結刃の間を抜いて撃ち出す。

シ「てぇぇい！」

シグナムも魔力を込めると、フェイトの周りを囲っていた連結刃が一気にフェイトに迫る。

バ《Ｂｌｉｔｚ　ｒｕｓｈ》

さらに加速をし、

―ヒュン　ズガァアアアン

シグナムは上空に飛ブことによって加速された魔力刃をかわすが

シ「なっ！？」

フェ「はぁぁぁぁ！」

上空には、シグナムの攻撃を回避したフェイトがバルデッシュを振り下ろしてきた。

バ《Ｈａｋｅｎ　ｓｌａｓｈ》

―ガキッ！

しかしフェイトの攻撃は・・・

フェ「さ、鞘っ！？」

鞘でシグナムに遮られた。

シ「はぁあああああ！」

すると、一瞬で来た隙にシグナムがフェイトに向け蹴り飛ばす。

だが、フェイトも障壁でそれを耐えた。そして、

バ《Ｐｌａｓｍａ　ｌａｎｃｅｒ》

―バシュゥン！

飛ばされているにもかかわらずプラズマランサーでシグナムを撃った。

シ「なぁっ！？」

予想外の攻撃にシグナムも驚き反応が一瞬遅れる。

―ズガァアアアン！

バ《Ａｓｓａｕｌｔ　ｆｏｒｍ》

バルディシュをアサルトモードに変化さえたフェイト。

―ドカァアアン

攻撃を受けたモノのすぐに態勢を立て直したシグナム。

レヴァ《Ｓｃｈｗｅｒｔ　ｆｏｒｍ》

そして互いにデバイスを再び構え、　互いに魔法陣を展開させた。

フェ「プラズマ・・・・」

シ「飛龍・・・・」

フェ「スマッシャァアアアアアアア！」

―ドガァアアア！

フェイトからは黄色い砲撃が放たれ、

シ「一閃！！」

―ズガァアアア！

シグナムはレヴァンティンに魔力を込めた連結はを放った。

―ズガァアアアン！！！

だが、互いに互いの攻撃を相殺しあった。

―ヒュウン

そしてすぐに空中に飛び立ち、

シ・フェ「はぁあああああああ！」

互いのデバイスを再びぶつけあう。

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

ＳＩＤＥアルフ・ザフィーラ

―キィィィィ　ドガァッ！

一方アルフとザフィーラは互いの拳をぶつけ合っていた。

ザ「てえぇぃぃっ！！！」

アル「うっ！」

そして、距離をとって息を整えるとアルフが、

アル「あんたも使い魔、守護獣ならさあ、ご主人様の間違いを正そうとしなくていいのかよ！？」

ザ「闇の書の蒐集は我らが意志。我らが主は・・・我らの蒐集はご

存じない！」

アル「なんだって！？　そりゃいったい！？　それじゃあ孤狐は闇の書の主じゃないのか！？」

ザ「孤狐は我らが背負うはずの罪を共に背負うと言ってくれた。自ら罪に手を染めてまでも！」

―グッ

ザフィーラの拳は今まで以上に強く握られていた。

アル「じゃ、あいつは・・・・」

ザ「自らの手を血に染め、罪に染め、それでも主のためになるならといって自ら協力をしくれている！　それに、主が為ならば血に染まることも厭わなず。我と同じ守護の獣よ、お前もまたそうではないのか？」

そういってザフィーラは拳を構える。

アル「そうだよ・・・でも・・・だけどさ！」

アルフは悲しい目でザフィーラを見つめていた。

ＳＩＤＥＯｕｔ

ＳＩＤＥヴィータ・葵

ヴィ「〈シグナム達が！？〉」

葵「〈まずいな。どんな状況なんだ？〉

シャ「〈うん。砂漠で交戦してるの。テスタロッサちゃんとその守護獣のこと〉」

状況を聞く限り一対一。状況は均衡するだろうな。

ヴィ「〈長引くとまずいな。葵、どうする？〉」

葵「〈蒐集が終わり次第援護に向か・・・いや、こちらにも来た〉」

シャ「〈葵君？　まさか、そっちにも管理局が！？〉」

ヴィ「〈・・・あいつか〉

視線の先には、なの「高町なんとか！！」なんとかって失礼だな。

葵「〈・・・ヴィータ、帰ったら日本語を学ぼうな〉」

ヴィ「〈教えてくれるのか！？〉」

葵「〈あぁ〉」

な「ふぇ！　なのはだってばぁ！　な・の・は！　もぅ」

すると、なのはが真剣な目になり、

な「ヴィータちゃん、孤狐ちゃん。やっぱりお話聞かせてもらうわけにはいかない？　もしかしたらかもしれないけど、手伝えることがあるかもしれないよ？」

・・・本気か？　まず無理だろ。管理局は絶対に捕まえる。ましてや蒐集を手伝ってくれといってもまず不可能だ。

葵（なのはには世間の厳しさを教えるべきなのか・・・）

　すると、ヴィータが、

ヴィ「・・・っ！　うるせぇ！　管理局の人間の言う事なぞ信用できるか！」

な「わたし、管理局のひとじゃないもの。民間協力者」

　そういって手を広げ、優しく微笑む。

葵「・・・それでも信用できません。まず民間人であっても管理局に協力している。準管理局員の言うことですからね〈ヴィータ。確か蒐集は一人につき一回だったな？〉」

ヴィ「〈あぁ。だからこいつを倒してもページにはならねぇ〉」

葵「〈そうか。なら逃げるぞ。ヴィータははやてと合流。私はシグナム達の援護に向かう〉」

ヴィ「〈わかった〉」

葵「お話は終わりですか？　ではこれで」

手のひらに炎の球体を作り、

葵「炎孤流波（えんこりゅうは）！」

そういってそのまま炎をなのはに向け投げると、津波のように炎がなのはを襲う。

葵「〈距離を取れヴィータ。出来るだけ森の中に隠れたあと転移しろ〉」

ヴィ「〈なんでそんなこと!?〉」

葵「〈森の中に入れば障害物が多く砲撃もまともに撃てない。行け！〉」

ヴィ「〈あぁ！〉」

そういってヴィータは低空飛行を取り、距離を取った。

な「いくよ！　久しぶりの長距離砲撃」

レ《Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

―ガチャ　ゴシュ　ガチャ　ゴシュ

やっぱり来るか。

葵「我の声に応え、我の意に応え、我の命に従え（ヴィータはポイントについたか）」

ヴィ「次元転移・・・って葵が狙われてる!?　撃つのか、あんな距離から!?　葵!?」

―キィイイイイン

レイジングハートが魔力を集める。

葵（お手並み拝見と参ろうか）

レ《Ｄｉｖｉｎｅ　ｂｕｓｔｅｒ　Ｅｘｔｅｎｓｉｏｎ》

な「ディバイィィィィン・バスタアアアアアア！」

放たれた砲撃は一直線に私に向かってきた。

ヴィ「葵!?」

だけどこれぐらいなら、

葵「汝の力無力なり！」

そう唱えた瞬間・・・

―シュパァアアン

砲撃は一気にただのピンクの粒子になった。

な「えぇ!?」

ヴィ「なっ！？」

孤「〈いやぁ、あれ直撃したらトラウマものだね〉」

葵「〈だな〉さて、高町なのはさん。話し合おうと言っているにもかかわらず攻撃をするなんていい度胸ですね？」

な「え！？」

葵「反撃の開始。粒子よ再び我が下に集え！　あなたの技。そのままそっくりお返しします」

私の突きだした手の前になのはと同じピンク色の粒子が再び集まる。

葵「聖なる光の砲撃！！」

そういうとディバインバスターをそのままなのはに向けて放つ。

な「えぇえええええ！？」

なのは防御を選ばず回避を選んだか。まぁ、正しいがな。

な「・・・・・」

自分の魔法の威力に唖然とするなのは。

葵「あなたはさっきの魔法を人に向けたんです。少しは反省してください」

さて、ヴィータは、行ったか。ではシグナムの元へ行きますか。

ＳＩＤＥなのは

たしかに、あれはちょっとやりすぎたの。

レ《Ｓｏｒｒｙ　ｍａｓｔｅｒ》

な「ううん。わたしの油断だよ」

わたしはレイジングハートにそう言って二人のいなくなった空を見上上げるしかできなかった。

でも！　次こそはちゃんとお話を聞かせてもらうの！

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

第二一話（後書き）

というわけでフェイトＶＳシグナムでした！！　というか戦闘描写はいつまでたっても苦手だ・・・

後、葵のあの魔法はちゃんと欠点を考えてます！　あれ使うといろいろ厄介ですからね。まぁチート最高！　という小説ですけどあれはやりすぎだわ・・・・

第二二話

第二二話

ＳＩＤＥ　シグナム・フェイト

―ブォン　ガキィィン！

デバイスとデバイスがぶつかり合う音がその静寂鳴り響いていた。

お互いに至るところが傷だらけとなり、血が出ていた。

シ「ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・（此処にきてなお早い。目で追えない攻撃が出てきた・・・速めに攻撃を決めないとまずいな）」

フェ「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・（強い。クロスレンジもミドルレンジも圧倒されてばかりだ。今はスピードでごまかしているだけ・・・まともに食らったらたたきつぶされる！）」

そして再び互いにデバイスを構える。

シ（シュツルムファルケン・・・あてられるか・・・）

フェ（ソニックフォーム・・・やるしかないかな・・・）

そして、最後の一撃を食らわせるために駆けた。だが

―ズボッ

いきなりフェイトの胸から腕が突き出して来た。

フェ「あっ・・・」

フェイトの後ろには仮面の男がいた。

シ「テスタロッサ・・・」

フェ「あ、あああぁ！！」

男から魔力が放たれ、フェイトが苦しみだした。

シ「貴様っ！？」

そして男が握っていた手をほどくと、

シ「なっ！？」

男が手にしていたのはフェイトのリンカーコアだった。

そして男は冷たく、

仮「さぁ、奪え」

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

葵「大体この変なのだがな」

私が今来ているのはヴィータを助けたときと同じあの砂漠の惑星だ。

葵「孤狐。大体どのへんか分かるか？」

孤「〈ん～、あっ・・・・え！？〉」

葵「どうした？」

孤「〈ちょっと北に行ったらいる。でも、魔力反応が三つ〉」

葵「なっ！？」

そのままシグナムがいる場所まで一気に転移した。すると、その場には。

葵「・・・貴様か」

仮「お前か、イレギュラー」

葵「・・・〈ギル・グレアムの言った通りにしたのか？　猫娘〉」

仮「！？」

葵「・・・無視したのか。そうか・・・なら殺す」

そういって瞬時に仮面の背後に行き、

葵「円樹！」

仮面の腹部を狙って一気にけり飛ばす。さらに、

葵「炎火狐刃！！」

さらに無数の刃を作り、仮面の男への追撃を行う。

―ザシュ　ザシュ

仮「ぐっ・・・くそっ」

そう言い残し、男は去った。

葵「・・・シグナム、フェイトから蒐集をしたのか？」

シ「・・・あぁ」

振り返りシグナムを見ると、とても辛そうな顔をしていた。互いの誇りをかけ大切たな戦いを汚されたからか。

葵「・・・フェイトには悪いが「ぐっ・・・」え？」

変な声が聞こえたのでフェイトの方を見ると、

フェ「ごほっ・・・・」

吐血！？

シ「テスタロッサ！？」

フェイトの姿を見ると、シグナムとの戦いのせいだろう。体のあちこちがぼろぼろで体力の消耗も激しい。おそらくその状態で無理やりリンカーコアを抜いたせいだろう。

葵「くっ、彼者に恵みと祝福を与えたまえ、全ての傷を、すべての痛みを癒す風！！！」

全力でフェイトの治療に取り掛かる。だが、

フェ「くっ、かはっ」

また吐血。くっ、

葵「強化！」

だが、一向に良くなる傾向がない。

葵「・・・癒しの風よ」

孤「〈葵！？　それをしたら姿がばれちゃうよ！？〉」

葵「構わん！　姿がばれるのとこの子の命どちらが大切なんてはかるまでもないだろ！？　汝の力を持ってこの者の怪我を癒したまえ。ヒーリーングフール！！！」

ＳＩＤＥシグナム

葵「構わん！　姿がばれるのとこの子の命どちらが大切なんて図るまでもないだろ!?　汝の力を持ってこの者の怪我を癒したまえ。ヒーリーングフール!!!」

神無月がそう叫び、全力で治癒に当たる。そして、

―ブチッ

葵「くっ」

シ「神無月!?」

神無月の左腕の皮膚から血が垂れる。

葵「治れ、治れ、治ってくれ!!!」

そして、どれ位経っただろう。テスタロッサの表情もだいぶ穏やかになった。

すると、

アル「・・・・フェイトに何をした!?」

シ「・・・言い訳はしない。テスタロッサにすまないと伝えといてくれ」

アル「・・・・」

アルフは私を睨む。だが、

葵「言い訳をしても・・・ゴホッ！？」

手に口を当て、咳をした。すると、

―ポタ　ポタ

アル「あんた！？　血が！？」

シ「孤狐！？」

孤「〈葵！？　大丈夫！？〉」

葵「・・・気にするな。アルフ、一応フェイトの治療はした。だが、一応検査をしてもらってくれ」

そう言いながらもせきが止まらない、そして。

葵「くっ・・・がはっ」

膝をつき、吐血した。そのまま葵は地面に倒れ、意識が無くなっていた。

シ「孤狐！？　くっ、次元転送！」

急いでシャマルに見てもらわないと！　生きてくれ、神無月！

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

ＳＩＤＥ八神家

―心の世界

ヴィ「シャマル！　葵は大丈夫なのか！？」

場所はこの世界にある医務室。シャマルが葵の治療を行っていた。

は「シャマル、どないなん！？」

はやても葵が倒れたとヴィータから聞いて急いで駆け付けたらしい。

シャ「えぇ、問題はないんだけど・・・その、意識がいまだに回復しないの」

は・シ・ヴィ「「「！？」」」

ザ「原因は何かわかるのか？」

ザフィーラの問いにシャマルは首を横に振った。

シャ「分からない。孤狐さん、わかるかしら？」

シャマルの問いに皆の視線がここに集まる。

孤「原因はあの子を助けた際に全魔力を治癒魔法に変え注ぎ与えたこと。多分これで葵が保有している魔力が限界点に到達したことが原因だと思う」

は「え？　どういうこと？」

孤「簡単に言うと人助けをして、無理をした。こんな感じ？」

シ「あぁ、あってるな」

　すると全員が「まぁ、葵らしいな」といていた。

シャ「孤狐さん、解決方法ってありますか？」

孤「まぁ、単純に言うと魔力を注ぎ込めばいいんだけど、時間がね」

シ「時間？」

孤「葵の魔力保有量。つまりどれ位魔力を維持できるかって言うんだけど大体ここにいる全員が魔力をすっからかんにして葵に注ぎ込んでも足りないよ」

　その言葉に全員が沈黙した。ヴォルケンズの魔力は少なくてもＡ以上。それをすっからかんにしても足りないとなればそりゃだれでも驚くだろう。

シ「・・・ようやく納得した。だからあれだけ無茶しても大丈夫だったのか」

孤「で、解決方法としてはあんまりお勧めしたくないんだけど契約かな」

は「契約ってあの、ヴィータやシグナムがした？」

孤「そ。あれって一応神の前で行う神聖な儀式だからね。契約締結時は両者ともに汚れ無き状態になるわけ。だから魔力もほぼ満タンに「いただきます！」ちょ、はやてちゃん！？」

―ちゅっ

はやては契約を結べると知ったとたんに葵の唇を奪った。

―シュゥゥゥ

は「痛っ、これが契約か？」

はやての左手には葵やシグナム、ヴィータと同じ模様が浮かび上がった。

シ・ヴィ・シャ「「「（主）はやて（ちゃん）！？」」」

は「ごちそうさん。・・・あれ？　でも、葵君目覚めんな？」

孤「・・・ちゃんと説明聞いてね、はやてちゃん。はやてちゃんの魔力は確かにすごいけどまだ覚醒してないの。つまり無いとほぼ同じ。魔力が有り尚且つ覚醒している人間じゃないと葵の魔力は回復しないの」

は「へ？　じゃあまさかとは思うけど」

孤「・・・葵が起きたら何って説明すれば・・・まぁ、とりあえずシャマルさん。お願いね」

シャ「ふぇ／／／！？　わ、私ですか／／／！？」

孤「契約は一人一回。つまり魔力を持って契約できるのはシャマルとザフィーラ。だけど、いやでしょザフィーラ？」

ザ「・・・・退席しよう」

そういってザフィーラは外に出て行った。

シャ「え、えっと、その／／／・・・じゃ、行きます！」

そういってシャマルと葵の唇が重なった。

―ちゅっ

―シュウウウウ

シャ「これが、その証ですか？」

孤「そ。それより葵は？」

皆の視線が横になっている葵に視線を向けると、

葵「ん、ん・・・・あれ、ここは・・・」

どうやら葵も目覚めたみたいだ。その後葵に状況やフェイトのことを説明した。むろん、はやてにばれないようにある程度嘘を入れて。

葵「なるほど。だが不思議なことがある」

孤「なに？」

葵「魔力が空ならなぜ、魔力があるように感じるんだ？」

全員「・・・・・・／／／」

だが、皆の表所は赤い。そう、赤いのだ。

葵「風邪か？　ならはやく寝ることを・・・！？　はやて、シャマルその左手・・・どうした・・」

葵がはやてとシャマルの左手を見て驚愕していた。そのご、急いで白書を見てｏｒｚとなっていた。言った言葉が、

葵「私はついに子供にまで手を出したのか？　いや、違う何か理由があるはず。だが思い当たる節がない。無意識にはやてとシャマルを汚した・・・もしそれが真実なら・・・ははは。よし死のう」

孤「だめぇえええ！　あ、葵落ちついて！　理由はちゃんと話すから！」

その後八神家全員で葵の自殺を食い止めたとか。

葵「なるほど。フェイトを助けた際に。で、その後私が倒れそれを助けるためにパス契約を行ったと」

孤「そ」

葵「まぁ、感謝はする。ありがとう二人とも」

シャ「い、いえ。私も得をしましたし／／／」

は「せやな。葵君の唇をゲットできたしな／／／！」

そういって心の世界で一日過ごしたのち外に出た。まぁその子が重傷だったので緊急処置とはやてには言い訳をしていた。

第二三話

第二三話

ＳＩＤＥアースラ

　アースラにはいつものアースラメンバー（フェイトは治療中）にリーゼロッテがいた。

リン「フェイトさんはリンカーコアにひどいダメージを受けているけど命に別条はないそうよ」

な「わたしの時と同じように闇の書に吸収されちゃったんですね」

ク「アースラの稼働中でよかった。なのはの時以上に救援が速かったから」

ロ「だね」

エイ「二人が出動してからしばらくして、駐屯上のシステムがクラッキングであらかたダウンして・・・。それで指揮や連絡が取れなくて。ごめんね。わたしの責任だ・・・」

ロ「んなことないよ。エイミィがすぐにシステムを復帰させたからアースラに連絡が取れたんだし」

　そういってロッテはモニターを起動させた。そこに映っていたのは仮面の男がフェイトのリンカーコアを抜いている映像だった。

ロ「仮面の男の映像だって残せた」

リン「でもおかしいわね。向うの機材は管理局で使っていのと同じシステムなのに、それを外部からクラッキング出来る人間なんているのかしら？」

リンディは何かおかしいと考え込んでいると、

エイ「そうなんですよ！　防壁も警報も全部素通りでいきなりシステムをダウンさせるなんて・・・」

アレックスもあり得ないといい、二人とも何が起こったのか分からなかったらしい。

エイ「ユニットの切り替えはしてるけどもっと強力なブロックを考えなきゃ」

今後の対策を述べたエイミィはかなり意気込んでいるようにも見える。

な「それだけすごい技術者がいるってことですか？」

すると、ロッテは

ロ「うん。もしかしたら組織だってやってるのかもね」

ク「君の方から聞いた話でも状況や関係が分からないな」

クロノはアルフの方を見る。

アル「ああ、私が駆け付けた時にはもう仮面の男は居なかった。けど、アイツら・・・孤狐とシグナムが居て、シグナムがフェイトを抱き抱えてて「言い訳は出来ないが済まないと伝えてくれ」って。その後すぐだよ。孤狐が吐血をしたのは」

エ「そう。その後フェイトちゃんのバイタルが危険域までいったんだけど・・・あ、これこれ」

そういってエイミィは孤狐、もとい葵がフェイトを治療していた。その魔力量は半端なく使用している量からもかなりフェイトが危険な状態だったとわかる。

エイ「おそらく限界を超えたため吐血。でも、私たちは彼女たちから見たら敵なのに」

リン「それでも彼女たちがやっているのは犯罪。なら闇の書が完成する前に闇の書の捕獲、主の確保というわけになるわね」

その後、司令部をアースラに戻しなのはを一時帰宅させた。

ＳＩＤＥＯｕｔ

―八神家

現在蒐集メンバーを集め仮面の男に対する会議が開かれている。

シ「奴が闇の書の完成を望んでいるのは確かだな」

ザ「完成した闇の書を利用しているのかも知れんな・・・」

ヴィ「ありえねー！　だって完成した闇の書を奪ったって、マスター以外には使えないじゃん！！」

葵「分からんぞヴィータ。相手が何もなのか分からない以上はな。脅迫、洗脳、方法はいくらでもある。それにはやては子供だ。いくらでも手段はあるはずだ」

あの後、ジェイルに頼んでいた闇の書の過去を探ってもらった。するといろいろと情報が出てきた。過去のことも、そして何者かによって改変されたのかも。まぁ、ちょっと考えれば済むことだ。あとは、クロノ達がその答えに行きつくかどうかだ。

シ「いや、そうもいかん。闇の書を完成させた時点で主は絶対的な力を得る。洗脳や脅迫も効果がないはずだ」

シャ「まぁ、家の周りには厳重なセキュリティを張っているし、万が一にもはやてちゃんに危害が及ぶことはないと思うけど」

シャマルはそう言ったことが得意だ。だが、あくまでも魔法のみ。家のあちこちを調べてみたら監視カメラがわんさか出てきた。まぁさっさと破壊しておいたがな。

ザ「念のためだ。シャマルとあと一人は確実に主のそばにいた方がいいな」

シャ「うん」

カメラのことを考えると直接攻撃ということもある。そうなると、どうするか考えておく必要が出てきたな。

ヴィ「・・・ねぇ」

葵「どうしたヴィータ？」

ヴィ「あのさ、闇の書を完成させてさ、本当のマスターになってさ、それではやては幸せになれるんだよね・・・」

シ「なんだいきなり？」

シャ「闇の書の主は大いなる力を得る。守護者である私たちは誰よりもそれを知ってるはずでしょ？」

ヴィ「そうなんだよ。そうなんだけどさ・・・あたしは、あたしはなんか大事なことを忘れてる気がするんだ・・・」

葵「話すべきなのか・・・・」

ヴィ「葵は何か知ってるのか！？」

葵「・・・知ってると言えば知っている。だが「ガシャン」なんだ！？」

二階から何かが倒れるような音が・・・二階！？

葵「はやてか！？」

ヴィ「はやて！！」

ヴィータは真っ先にはやての部屋に向かい、その後を追うように私たちも急ぐ。

その場には胸を抑え苦しんでいるはやての姿があった。

葵「シグナム！　救急車を呼べ！」

シ「あ、あぁ！」

葵「ヴィータそこをどけ」

急いでヴィータを後ろに下がらせ、

葵「月の石よ、汝の魔力を解き放ち、この者に癒しを与え痛みを抑えたまえ」

誕生日プレゼントに与えたムーンストーンには魔力を込めている。いわば羽根のお守りのようなものだが宝石の分だけ魔力量は多い。

光が収まると、先ほどまでの苦しみに満ちた顔が一変し少し穏やかになった。

―ピーポーピーポーピーポー

どうやら来たみたいだな。

―海鳴大学病院

石「まぁ、大丈夫みたいね。よかったわ」

は「はい、ありがとうございます」

シャ「あぁ、ほっとしました～」

は「せやから、ちょっと眩暈して胸と手がつったただけやっていったやん。もぅみんなして大事にするんやから」

どんな状況だそれは・・・まぁ、無事ならいいが。

だが、やはり闇の書の影響が大きくなりつつあるのか。

葵「はやて、ベットから落ちた際に頭も打ってたんだ。何かあっては遅いんだ」

は「そうなんか？　それはごめんな」

ヴィ「はやて、よかったぁ～」

シ「はい。何も無くて」

石「まぁ、来てもらったついでに色々と検査したいから、もう少しゆっくりして行ってね」

は「はぁい」

石「さて、シグナムさん、シャマルさん。ちょっと」

やはりつっただけというには言い訳がきついのか。

シャマルとシグナムは石田先生に連れられて部屋を出て行った。

は「それにしても急に胸の痛みがのいたけどあれどないしてなん？」

葵「はやてに上げた誕生日プレゼント。あれはただの石ではなく、魔法が込められたいわゆる魔法石と呼ばれるモノなんだ」

ヴィ「それってすごいのか？」

葵「単純な石には魔力は宿らず、本物の宝石じゃないと魔力が込められない。しかし込められる量は大きさにもよって変わるが緊急時の治癒魔法や防御魔法にも転用が効くな」

ヴィ「それではやてを？」

葵「あぁ」

再び魔力を注ぎ込んでもらったとはいえさすがにいきなり使うのはきつい。暴走したら元も子もないため緊急時の魔法石を発動させた。

ル《マスター》

葵「ん？　なんだルミル？」

エ《久しぶりに聖歌を謳ってはいかがですか？》

は「聖歌ってあの教会とかで歌う？」

ル《えぇ。意味合いとしてはそっちの方が強いのですが、こちら、マスターがもともといた世界では聖歌とは精霊にささげる歌という意味が強い》

エ《マスターの歌もなかなかですよ?》

は「へぇ、それは聞きたいなぁ~。なぁヴィータ」

ヴィ「はやてが聞きたいなら」

葵「あまりうまくないのだがな。まぁ良いか久しぶりだしな」

―すーっ

少し息を吸い、

天空に孤独に浮かぶ月よ
あなたは何を思う
何を私に望み私にこのような試練を与える

――誰かに願うように静かに

私は弱い
決して強くない
にもかかわらずあなたは何を思う

――でも、その静寂を壊すことのない

人はわたしを弱いという

私もそう思う

――でも切なさが、哀しさが

でも彼女は違った

その者だけは違った

その者は言った

――でもその儚さまた美しさを

私は強いといってくれた

心がそれによって救われたと

その言葉に私は救われた。永遠の救いとなった

――終わりは何においても呆気ない。でも心の中にしっかりと刻まれた歌

歌が聞こえた。それもどこか悲しいのに心温まる歌が。

石「彼が？」

そういって石田先生の視線の先には葵がいた。

シ「・・・こんな歌は生まれて初めて聞いた」

シャ「えぇ」

石「本当はいけないんだけど、これは仕方ないわね」

石田先生の言葉に周りを見る二人。周りには先ほどまで泣いていた子供が泣きやみ、その曲に耳をすませた。

余談であるがこの日、海鳴大学病院では奇跡の一日と呼ばれた。植物状態の人間が意識を取り戻したり、不可能と呼ばれた手術が成功。その詩は人々に希望を与え、元気づけたとして奇跡の詩と呼ばれた。

第二三話（後書き）

というわけで今回歌を考えてみたんですが・・・歌詞乗せたらまずいかなと思い考えてみました・・・でも、おかしかった。
イメージがつかみにくいと思うので、神曲奏界ポリフォニカの挿入歌Ｌａ　Ｌｕｎａ［Ａｓｔｒａｅａ］をイメージしてください。
あれいい曲なんですよねぇ～。暇があれば是非とも聞いてもらいたいです！

第二四話（前書き）

今回は短めです

第二四話

第二四話

は「入院！？」

シャマルの口から出た言葉。おそらく石田先生と相談した結果だろう。

シャ「えぇ、そうなんです・・・」

はやてもヴィータもやはり顔が暗い。

シャ「あ、でも、検査とか、念のため、とかですから、心配ないですよ。ね？」

シャマルは同意を求めるためにシグナムの方を見る。シグナムは花瓶を近くの場所に置き

シ「はい」

は「いや、それはええねんけど、もし私が入院したらご飯は誰が作るんや？」

ヴィ「ん！？」

はやて、こういうときにボケに回るか。ヴィータもびっくりしてずっこけたぞ。

シ「それは、まぁ、葵もいますし」

葵「だな。安心しろ」

そういってほほ笑む。

は「／／／そか？」

ヴィ「毎日会いにくるよ！　だから・・・だいじょうぶ！！」

はやては心配そうにするヴィータの顔を見て頭を優しくなで、

は「ふふっ。ヴィータはええ子やな。でも毎日やのうてええよ。やることないしヴィータ退屈やん」

ヴィ「うっ・・・」

葵「はやて。無理はするなよ。何かあったら呼べ。私は、いや私達は君の家族なんだから遠慮はするな」

は「そやな。それに三食昼寝月の休暇やと思えばええしな」

本当にこの子は強いな。自分が死と隣り合わせなのかもしれないのにこんなにも明るくふるまえる。その強さが。

は「あ、あかん。すずかちゃんがメールくれたりするかも」

シャ「私が連絡しておきますよ」

は「うん・・・おねがい」

シ「では戻って着替えと、本を持ってきます。ご希望がありましたら」

は「う～ん、なんにしようかな」

そういって私たちは一旦家に戻ることにした。

葵「・・・・・すまん。忘れ物をした。先に戻っておいてくれ」

シ「忘れ物？」

葵「あぁ」

ＳＩＤＥはやて

は「うぅ・・・くっ・・・（あかん。みんなに迷惑がかかる。みんなに心配かけんようにせなあかんのに）」

ーガラッ

石田先生やろか。まずいところ「やっぱりか」

え？　この声・・・・

葵「少しじっとしていろ。癒しの風よ。汝の力を持ってこの者の怪我を癒したまえ。ヒーリーングフール」

葵君の手から緑色の光が輝きだし、その光が収まると、

は「・・・・苦しくない」

葵「このバカが」

―ズビシッ

は「あうっ」

葵君のチョップが脳天を直撃する。

葵「はやて。私たちとお前は家族だといったはずだ。迷惑をかけたくないとかそう言ったこともわかる。だがな」

そういってわたしを抱きよせてそっと抱き締めてくれる。

葵「別にいいんだよ。家族なんだ。迷惑をかけても、心配をかけても。そしたら助け合えばいいじゃないか。弱音を吐いてもいいんだ。ここまで頑張っているんだから」

は「ええん？　泣くよ？」

葵「あぁ、思いっきり泣け」

は「石田先生にも怒られるよ？」

葵「その時は私が説明してやる」

は「・・・う、うわぁぁぁぁぁぁあああああああ！　こ、恐い！　恐いんよ！　死ぬなんて嫌や！　かじょくができた！　せやのに、しにとうない！」

葵「大丈夫だ。絶対に君を死なせなんてしないから」

は「ほんまか？　ほんまにほんま？」

葵「あぁ約束しよう。この命と体に変えてでも」

葵君はその後も胸を貸してくれたり、息が詰まらんよう背中を優しくなでてくれた。

しばらくして、ようやく涙もおさまったけどヤッパ恥ずかしいから泣きやんでも胸を借りて、

は「あ、ありがとな、葵君／／／。でも服濡らしてもうてごめんな」

葵「これぐらい洗濯すればどうとでもなる。君の不安を取り除ける対価としたらやすすぎるぐらいだ」

は「ありがとな」

ホンマにありがとう。葵君がおるから生きていけるようなもんやで。

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

第二四話（後書き）

・・・・最近思うんです。なのはの話を書いてるはずなのに全く違う物語が思い浮かぶんです。で、それをなのはに入れようとしたらどうしても無理が出るんです！！
神よ！　私に文才を！！

神「無理！！」

即答！？　もう神なんか信じるかぁあああああああああああ！！
！　あ、嘘です。ちょっと信じてたり・・・どっちなんでしょうね・・・

第二五話

第二五話

シ「バカな!?　では我らがやっていたことは主はやてを苦しめていただけだと言うのか!?」

帰ってきてジェイルに調べてもらった資料をシグナム達に見せた。

葵「あぁ、だから君たちが闇の書を完成させた後の記憶がないのもそれが原因だ」

ヴィ「葵は知っていたのか?」

葵「つい最近な。独自で調べてみた」

シャ「じゃあどうすれば・・・」

シャマルは自分たちが原因ではやてを苦しめていたと知り泣いていた。

葵「このまま蒐集を続ける」

シ「貴様!」

孤「落ち着いてシグナム。葵にもちゃんと理由があるんだから」

そう。作戦はある。

葵「いいか。あくまでも完成はさせるな。六六五ページになってこちらに闇の書を渡してくれればいい。バグを除去する方法はある。すでにワクチンも完成させてある」

ヴィ「なら完成さえせる必要性がないじゃないか」

葵「闇の書、いや夜天の書に直接吸収させ内部から修復させる。それで元に戻るはずだ。だから頼む」

そういって頭を下げた。シグナム達もそれではやてが助かるのならと、蒐集をすることを再び決意した。

さて、ある日

ク『ということなんだ』

現在私はスイスにいる。なぜかと言うとクロノからの相談というか、報告だな。

闇の書。もともと夜天の魔導書と言われているもので、各地にいる偉大な魔導師の技術の収集・研究する魔導書らしい。

葵「今のところ分かっているのはそれが何者かによって改変され今に至る。か」

ク『あぁ。で、完成すれば』

葵「破壊の限りを尽くし、その後は・・・か。世界変わっても下衆はいるんだな」

ク『そっちでは何か変わった様子はないのか？』

葵「主に何も。もうしばらくしたらそっちに戻る」

ク『あぁ。分かった。ではまた今度』

いいところまで来ている。あともう少しだな。そういって私も八神家に戻った。

葵「さて、はやての見舞いにでも行くか。手ぶらでもなんだしケーキでも焼いて行くか」

家に戻っても誰もいないのでやることもない。今日の蒐集はヴィータ、ザフィーラ、シグナムで行っている。

―海鳴大学病院

葵「シャマル？」

その場にいたのはシャマルらしき人物。サングラスにコート。めちゃくちゃ怪しすぎるだろ。

その後シャマルは石田先生に連れて行かれた。

この魔力は、

葵「なのはとフェイトにアリシア。すずかが連れてきたのか」

確かにこれはまずいな。私も退くとしよう。

そう、思っていると、

―ガラッ

ＳＩＤＥはやて

すずかちゃんのお友達のなのはちゃん、フェイトちゃん、アリサちゃん、アリシアちゃんがお見舞いに来てくれました。

ア「それで、そいつフェイトとアリシアと入れ違いに行っちゃったのよ」

は「それは残念やったね」

フェ「うん。葵と一緒になれると思ったのに・・・」

アリ「そうだね～。わたしもがっかりだったな」

・・・葵君？　え、それって・・・

は「あ、なのはちゃんその子って今どこに？」

な「え？　確かベルリンだったかな？」

す「ちがうよ。ベルン。スイスの首都だよ」

す、スイスってメッチャ遠いな。人違いやろか？　あれ、でもベルンって最近どっかで・・・？

は「その子の名字って何？」

ア「神無月」

アリ「あと眼がすっごく綺麗なんだよ！　宝石みたいに青色で！」

は「・・・葵君なんか！？」

な「え？　知ってるの！？」

は「知ってると言うか、そこにおるわけやし」

全員「え！？」

すると、扉の近くにいたアリシアちゃんが思いっきり扉を開けると、そこには、

葵「病院では静かにしろ」

相変わらずクールやな。

葵「客人がいると知っていればもう少し作ってきたんだがな。はやて、お土産だ。お前らは茶でいいか？」

全員「え？　あ、はい」

そういって葵君は一回部屋から出て、すぐに戻ってくるとお湯の入ったティーポットにカップを人数分持ってきてそれぞれに配る。・・・・で、

全員（はやてを除く）「葵（君）はなんでいる（の）（のよ）！？」

葵「なぜって？　家族だから」

その後、スイスからの一時帰国と親戚である私が倒れたって聞いて駆け付けたと言っていた。あと、この間に、

葵「〈すまんはやて。話を合わせてくれ〉」

と、お願いされた。しゃぁないな。葵君のためやし。

葵「では、私はそろそろ帰るか。ケーキは食べていいからな」

そういって葵君は病室を出て行った。

その後は質問攻めやったな。まぁ、親戚やからの一言で全部済んだけど。

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

家に戻るとシグナム達も戻っており、怪我の治癒を行った。

葵「残り数十か」

シ「これではだめなのか？」

葵「すまん。技術不足でな」

ヴィ「でも、それではやてが死なずに済むなら！」

葵「まぁ、あと魔力を少し注ぎ込めば簡単なんだ」

シ「で、どんなのなんだ？」

葵「こんなの」

そういって取り出したのは。

全員「葵が二人いる！？」

まぁ、簡単に言えば魔力によって作った人型を取っている魔力の塊。なぜ人型なのかというと疑似リンカーコアをこの人型に埋め込み起動させる。そしてシャマルに頼んで蒐集。

葵「というわけだ。で、この中にはそのワクチンも入れている。それを蒐集した際魔力と同時にワクチンも吸収される。時間は約一週間ぐらいでバグは除去できる。だがここで重要な問題がある」

ヴィ「問題？」

葵「魔力行使をしないこと。攻撃、防御はむろん、回復などといった治癒もな」

シ「もし使用したら？」

葵「簡単に言うとワクチンも魔力で構成されている。それが使われる可能性がある。運が良ければ時間の延長。最悪は言わなくてもわかるはずだ」

シャ「でも一週間なんて長い気が・・・」

葵「忘れたか？　心の世界があることを。あそこなら七時間で済む」

ザ「なるほど。それなら」

シ「なぜお前はそこまでしてくれるんだ？」

シグナムは沈んだ顔でそう尋ねてくるが、何を当然なことを。

葵「私はハッピーエンドしか迎えたくない。はやてはむろん、君たち全員助けてみせる。家族なんだ。皆を助けるのは当然だろ」

そういって行ったん時計を見ると、

葵「さて、そろそろいい時間だ。晩御飯にするか」

ヴィ「お！　晩飯はなんだ！」

葵「今日は、オムレツにしてみた。卵安かったし」

まぁ、下ごしらえは終わっているから後は卵にくるむだけだ。

ＳＩＤＥヴォルケンズ

ヴィ「なぁ、葵が言ってたのって・・・」

シ「あぁ、本当だろう。だが、あいつには助ける方法があると言っていた」

シャ「みんなまとめて助ける。ハッピーエンドしか迎える気がない。なんて言ってましたね」

ザ「あいつのことだ。不測の事態に備えてたのかも知れん。それに出会ったときにも言ってたしな」

シャ「なんて？」

ザ「命あるモノには幸せになる権利も、未来を見る権利もある。我々のようなプログラムにもな―とな」

シ「それに神無月が蒐集に参加するときにもまとめて守るとも言っていたな。家族としても大切な存在なのだ。我々は神無月にとって」

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

第二五話（後書き）

というわけでついになのはたちにばれちゃいました。といっても「居る」ということだけですけどね。

さて、いよいよラストスパートです！　がんばっていきますよ～！

第二六話

第二六話

さて、月日は流れもうクリスマスイブ。

え？　いろんなもの飛ばし過ぎだって？　作者に言え作者に。

作：いやだってさ、なのはやフェイトにばれちゃいけないって考えたら結構省かなきゃいけないし。

結局ばれたがな。だがオリジナルストーリーとかあったのでは？

作：わたしにそんな才能は無い！

というわけでクリスマスイブ。現在久しぶりにみんなではやてのお見舞いに来ている。

―コンコン

す「こんにちは～」

すずか・・・ということは。シャマルとシグナムの方を見ると聞き覚えのある声に驚いた表情をしていた。

は「あれ？　すずかちゃんや。はぁ～い。どうぞ！」

な・フェ・ア・す・アリ「こんにちは」

ヴィ「あっ！」

ヴィータも入ってきた二人を見て驚いていた。

す「あっ！　今日は皆さんお揃いですか？　葵君も！」

そうか。すずかはシグナムやシャマルとは面識があったな。

ア「あんたもいたんだ。あ、こんにちは。はじめまして」

アリサは礼儀正しく挨拶した。

な・フェ「あっ・・・」

まずいな。シグナムがなのは達を睨み、少し場の空気が悪い。

葵「〈シグナム。落ちつけ。ここは病院だ。下手に争うなよ〉あぁ。しかし、今日はまたなんで？」

シ「〈むっ・・・そうだったな。すまん〉」

シグナムも落ちついたのか表情を戻した。

す「あの、おじゃまでしたか？」

葵「そんなことはない。ところで何か用があったのではないのか？」

ア「そうだった」

すると、すずかとアリサははやての前に行き、手にしていたコートに手をかけると、

―ぱっ

ア・す「「サプライズプレゼント～」」

は「うわぁ～～」

コートの下に隠されていたのはプレゼントだった。はやても満面の笑みだ。

す「今日はイヴだからはやてちゃんに、クリスマスプレゼント」

は「わぁ～、ほんまか。ありがとうな」

す「みんなで選んできたんだよ」

ア「後で開けてみてね」

はやてとすずか、アリサが話している間もシャマル、シグナムはずっとなのはとフェイトに警戒心を払い続けた。

最も問題なのは。

ヴィ「・・・・・」

ヴィータはずっとなのはを睨み続けていた。

はぁ。

―ぽむ

な・ヴィ「「え？」」

葵「すまんな。この子は人見知りが激しくてな。根はやさしい子なんだ」

―なでなで

ヴィ「・・・／／／」

な「そ、そっか」

シャ「あ、みんなコートを預かるわ」

クローゼットを開けてみんなのコートを預かるシャマルだが、やはりぬかりはないな。通信妨害の結界を張っている。

ＳＩＤＥシグナム・フェイト

フェ「・・・念話が通じない。通信妨害を」

フェイトもこのことに気付き、シグナムに聞こえるように言った。

シ「シャマルはバックアップのエキスパートだ。この距離なら造作もない」

シグナムはそれを当然のように答えた。

ＳＩＤＥＯｕｔ

葵「〈ヴィータ、もう少し視線をどうにかできないか？〉」

ヴィ「〈で、でも・・・〉」

葵「はぁ。まぁ、こういう子なんだ。我慢してやってくれ」

そう言いつつも撫で続ける。

ヴィ「・・・（だからって撫で続ける必要はないだろ／／／）」

な（ヴィータちゃん、ずるいの！）

フェ「お見舞い、してもいいですか？」

警戒されながらもやはりはやてが心配なのか、シグナムに許可をもらおうとした。

シ「あぁ」

日はどっぷりと沈み空は暗くなっていた。

す・ア「「さよ～なら～」」

な・フェ・アリ「「「・・・・」」」

すずかとアリサは手を振り、別れを告げる。

だが、なのはとフェイト、アリシアは黙って見送りに来ていたシャマルとシグナムを見つめる。

ＳＩＤＥはやて

時間はあっという間やな。特に楽しい一時はや。

すずかちゃん達の見送りのためにシャマルとシグナムは病室を出て行った。葵君も着替えを持ってくるといって一旦帰った。いまおるんは私とヴィータだけや。

は「ん？　どないした、ヴィータ？」

ヴィータはさっきから私を抱きしめとる。

ヴィ「なんでも・・・ないよ・・」

は「そっか？」

なんか不安そうなヴィータを葵君がしとったみたいに頭をなでる。

は「今夜は雪になるかな？」

ＳＩＤＥＯｕｔ

そして、屋上。

そこにはなのは、フェイト。そしてシャマルとシグナムがいた。

な「はやてちゃんが、闇の書の主・・・」

なのはとフェイトはそのことを知り、驚いていた。

シ「悲願はあと少しでかなう」

シャ「邪魔をするなら、はやてちゃんのお友達でも！」

敵意を明らかにした二人に、なのはは一歩前に出て、

な「まって、ちょっと待って！　話を聞いてください！　闇の書が完成したらはやてちゃんは――」

なのはが言葉を続けようとしたとき、

―ビュゥゥウウウウ

ヴィ「はっ！！」

グラーフアイゼンをふりかぶり、なのはに迫ろうとしていたヴィータがいた。

―ガチチイチチチ

なのはも障壁を出し防御をしたが、

ーバンッ！

な「きゃあぁあああああ」

障壁は破れ去り、なのはフェンスまで飛ばされた。

フェ「なのは！？」

フェイトはなのはの飛ばされた方を振り向くが、

―ジャキ

シ「おぉおおおおお！」

レヴァンティンを振りかぶったシグナムに攻撃された。だが間一髪のところで回避し、

フェイトもバルディッシュを構える。

シ「管理局に主のことを伝えられては困るんだ！」

シャ「私の通信防御範囲から出すわけにはいかない！」

フェンスの近くにいるなのはの前にヴィータが行き、

な「・・・ヴィータ・・・ちゃん」

ヴィータはバリアジャケットに切り替え、

ヴィ「邪魔すんなよ。もあとちょっとで助けられんだ。はやてが助かってあたしたちのところへ戻ってくるんだ！」

ヴィータの目に涙がたまり、震える声を抑えながらも言葉をつなげる。

ヴィ「必死に頑張ってきたたんだ。もうあとちょっとなんだから・・・・くっ」

そして、グラーフアイゼンを振りかぶり、

ヴィ「邪魔すんなぁあああ！！」

ーズガァアアア！

カードリッジで強化された一撃をなのはにぶつけた。

ヴィ「はぁ、はぁ、はぁ」

先ほどの一撃でぶつけた周辺は炎上した。

―コツコツコツ

しかしその中からはバリアジャケットを着たなのはの姿が現れた。

ヴィ「・・・悪魔め！」

な「悪魔で・・・いいよ・・」

そしてレイジングハートを起動させカードリッジをロードし、

レ《Ａｘｅｌ　Ｍｏｄｅ　Ｄｒｉｖｅ　ｉｇｎｉｔｉｏｎ》

な「悪魔らしいやり方で、話を聞いてもらうから！」

強い意志を抱き、ヴィータに向けレイジングハートを構える。

第二七話

第二七話

ＳＩＤＥシグナム・シャマル・ヴィータ・なのは・フェイト

シ「シャマル。お前は離れて通信妨害に集中していろ」

シャ「うん」

シグナムの言うとおり数歩下がり、バリアジャケットを纏ったシャマル。

フェ「闇の書は悪意ある改変によって壊れている・・・今の状態で完成させたらはやては・・・」

フェイトは言葉をつ告げようとするが、

―ジャキッ

シ「我々はある意味で闇の書の一部だ。それに神無月が手を打ってくれている！」

フェ「え！？」

―ジャギィィ　ズガガガッガガガ

上空ではヴィータとなのはが戦闘を繰り広げていた、

ヴィ「だから当たり前だ！　あたしたちが一番、闇の書の、夜天の書のことを一番知ってんだ！」

な「な、なんでそのことを！？」

自分たちしか知りえない情報をもう彼女たちも知っていた。ある意味では当然なのかもしれないが、彼女たちから見たら予想外だったのだろう。

シ「神無月が、我々に救いの手を差し伸べてくれた。本来なら消え行く運命であり、主はやてを苦しめ殺すかもしれないと思った。だが！」

ヴィ「そんなあたしらにでもあいつは、葵は手を差し伸べてくれた！　はやても、あたしらも助けやるって言った！」

シグナムがレヴァンティンを構え、バリアジャケットを展開させた。

シ「あいつなら、不可能なことでも可能にしてくれるのだ。わずかでも希望を与えてくれたのだ！」

フェ「くっ」

フェイトはバルデッシュを構えた。

バ《Ｂａｒｒｉｅｒ　ｊａｃｋｅｔ　Ｓｏｎｉｃ　ｆｏｒｍ》

―バチバチ！バン！

フェイトはバリアジャケットを纏い

バ《Ｈａｋｅｎ》

―ガチュィン！ガチャ！

カートリッジをロードしバルデッシュを構えた

シ「薄い装甲をさらに薄くしたか・・・」

シグナムはフェイトのソニックフォームの特徴を瞬時に理解した

フェ「その分、早く動けます」

シ「緩い攻撃でも当たれば死ぬぞ　正気かテスタロッサ？」

フェ「貴女に勝つ為です！強い貴女に立ち向かうには、これしかないと思ったから！」

シ「・・・・ッ！」

シグナムはいったん空を見上げ、

シ「こんな出会いをしていなければ、私とお前は一体どれほどの友になれただろうか」

フェ「まだ、間に合います！」

―ジャギ

だがシグナムはレヴァンティンを構え

シ「止まれん！」

―ガシュゥン！

シグナムはカートリッジをロード

その足元に魔法陣が現れ、そしてレヴァンティンを再び構えた

シ「我ら守護騎士、主の笑顔の為ならば騎士の誇りさえ捨てると決めた！もう止まれんのだ！！」

フェイトはデバイスを構えた。だが、

―シャァキィン

青いバンドがその場にいた全員をしばる。

そしてその場に現れたはあの仮面の男が【二人】いた。

な「！？　二人！？」

その光景に驚いてたなのは。

広いは自身の周りに多数のカードを広げ魔法を展開していた。

仮1「この人数だとバインドも防御もあまり持たん。早く頼む」

仮2「あぁ」

仮面の男が右手を上げると、

―ブォン

男の手に闇の書があった。

シャ「なぁっ！？　いつの間に！？」

―キィィィン

闇の書が輝くと同時に、ヴィータ、シグナム、シャマルのリンカーコアが現れ、

ヴィ「ぐぁ！　あぁ！！　ぐあぁあああああ！」

シ「ぐぅっ！うぅっ！！」

シャ「あっ、あぁぁああ」

仮2「最後のページは不要となった守護者自らが差し出す。これまでの幾度もそうだったはず」

ヴィータ達の魔力はそのまま闇の書に蒐集されていく。

だが、

―フワッ

仮1「あれは？」

ヴィータ達の胸元から彼女たちの魔法色をした羽根が宙に舞い上がった。そして、

《Ｈｏｌｄｅｒｓ　ｐｅｒｃｅｉｖｅ　ｌｉｆｅ　ｃｒｉｓｉｓ（保持者の生命危機を感知）》

《Ａｆｔｅｒ　ｕｎｐａｃｋｉｎｇ　ｍａｇｉｃ　ｄｅｆｅｎｓｅ　ｅｍｅｒｇｅｎｃｙ，ｔｈｅ　ｅｍｅｒｇｅｎｃｙ　ｓｔａｒｔ（緊急防御魔法展開後、緊急治療開始）》

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｖｅ　ｗｉｎｇ　ｅｘｐａｎｓｉｏｎ（翼の結界発動）》

―ブゥオォオオオン

すると、ヴィータ達が羽根に覆われ、蒐集もその結界によって強制的に阻まれた。

仮2「なにっ！？」

ザ「うぉおおおおお！」

仮1「そうか、こいつなら！」

そういって闇の書に蒐集をさせるが、

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｖｅ　ｗｉｎｇ　ｅｘｐａｎｓｉｏｎ（翼の結

界発動）≫

ザフィーラも同じように防がれた。

仮2「なぜだ!?」

???「なぜかって？　こういう時のために決まってるだろ」

仮2「貴様はあの時の!?」

SIDE　Out

―数時間前

私は家にいったん戻りはやての着替えをとると、

ザ「!?　これは・・・」

葵「どうした?」

ザ「シグナム達と通信が取れない」

葵「・・・まさか。急ぐぞ」

そういって飛び立った。

この感覚は・・・緊急防御魔法!?

ザ「どうかしたか？」

葵「ザフィーラ、飛ばすぞ。シグナム達の命が危ない！」

ザ「なっ！？　分かった！」

葵「ちょ、先行し過ぎた！」

その一言にザフィーラは私以上に速度を出す。

シグナム達の反応があった病院屋上につくと、ザフィーラにも緊急防御が展開されていた。

そしてその場にいたのは、あの仮面の男・・・いやリーゼロッテとリーザアリアか。

仮2「なぜだ！？」

葵「なぜかって？　こういう時のために決まってるだろ」

仮2「貴様はあの時の！？」

私はそのままヴィータとザフィーラを連れ屋上に降り立つ。

葵「無事か！？」

すぐに全員のバインドを破壊する。

シ「あ、あぁ。お前からもらったお守りがこんな形で役に立つとは思わなかったが」

シャ「本当に、感謝してもしきれないですね」

ヴィ「あ、葵。ありがとう」

ザ「あぁ、感謝する」

な「あ、葵君！」

フェ「あ、ありがとう」

無事でよかった。孤狐は後で【本体】と来るようにしてもらおう。

葵「・・・さぁ、お前ら、心の準備はいいか」

あぁ、切れよう。あの世への案内は私が務めるとしよう。

仮2「な、なにを・・・」

葵「黄泉路への案内、この神無月葵が務めましょう」

ＳＩＤＥアリア・ロッテ

葵からは尋常ではない怒りと殺気が出ている。

ロ「〈な、何あの殺気！？〉」

アリア「〈い、異常なほどの魔力も！？〉」

葵「地獄の業火は我が怒り、その炎に燃やせぬものは無し。塵も灰も残さない」

すると葵の両腕には赤黒い炎がまとわっていた。

葵「さぁ、始めよう。殺し合いだ」

すると一瞬で、その場から消える。

葵「フッ！」

―ドガッ

その炎を纏った炎をロッテを襲う。

葵「お前は格闘戦が得意だったな。そして後ろのクソ猫は魔法。業火よ矢となって彼者を刺しし殺せ！」

すると、無数の魔法陣が浮かび上がり、そして、

―シュバババッバッババババッバ

無数の矢がアリアを襲う。

アリア「プ、ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ！」

障壁を張る。だが、

―パリーン　ガガガガガガッガ

ア「ガッ、グッ、アアッァァァ」

矢は障壁を破り、容赦なくアリアを襲う。

葵「終わりにしてやる。獄炎拳嘗覇(ごくえんけんしょうは)！」

炎を最大限にまとわせ、

―ズドガッ　ベギッ

アリア「かはっ」

ロ「アリア！」

葵「！？」

葵の両手両足がバインドによって拘束された。

ロ「あんたの魔力をもらって使えなくしてやる！」

―ズブッ

すると、フェイトにしたときと同様に腕が葵のリンカーコアを取りだし、

ロ「全部もらってやる！　死ね！！」

葵「ア、アァッァァァッァアアアアアア！！！」

魔力の蒐集が終わる。だが、異変は次に起こった。

―パァァァァ・・・

いきなり葵の身体が粒子となりそのまま闇の書に吸い込まれた。

ＳＩＤＥＯｕｔ

ＳＩＤＥはやて

屋上で葵とあの姉妹たちが戦っている最中、

は「ん・・・うるさいなぁ～、病院は静かにせなあかんのに・・・」

なにやら爆発音みたいなものやら雄たけびみたいなものが叫ばれていた。どっかの患者が大音量で映画でも見とんやろ。

・・・まぁ、ちょうど用も足したかったしトイレにでもいこ。

そう思い、トイレに向かうと、壁になっ都かなあかん場所に大きな穴が出来とって、さらにそこらへん一帯が黒い炎が燃えとった。

は「・・・あかん、これは冗談でもないわ。やば、逃げよ」

そう思い、車いすのフルスピードでこの場から立ち去ろうとしたら、

―ガガガガガッガ

は「イヤぁあああああー！　ごめんなさい！　もう病院食なんてまずいもん食えるか！　みたいなこと思いませんから！」

って、私は誰に謝ってるんや！　と心の中でさみしく突っ込んでみる。最後のは忘れて。石田先生に怒られとうないし。

は「あれ？　そう言えばなんでこの病院私以外誰もおらへんの？」

見渡してみるけど看護師さんはおろか患者一人おらへん。

は「・・・もしかしてすっごいピンチ、私？」

これ、誰がやったんやろ。

？？？「終わりにしてやる！」

え？　この声って葵君！？

そう思い声の方に向かってみるとそこには仮面をかぶった男二人と葵君が戦っとった。

しかも手から炎を出して。あれやけどするんちゃう！？

でも、次の瞬間、私は自分自身の目を疑った。

仮面の男が葵君の胸を貫いた。

そして、

―パァァァァ・・・

粒子のように消えて行った。

え？　消えた？　誰が？　葵君が・・・・つまり

―死んだ

「ウソや、ウソやウソやウソやウソやウソや！」

葵君が死んだ。

信じられへんかった。

でも実際に見た。そして誰も答えへん。つまり、

―イヤアアア

第二七話（後書き）

どうも！　楽が一！　楽しいことが一番！　の楽一です！
というわけで今回は守護騎士蒐集失敗！　猫姉妹フルぼっこ！　葵消失！　でした！！

第二八話（前書き）

い、一大事です！！　いつの間にかユニークが１５０００超えてました！？
ＰＶも１２００００越え・・・驚きです！！
これからもがんばっていきますのでよろしくお願いします！！

第二八話

第二八話

ＳＩＤＥアリア

アリア「手こずらせた。でもこれで」

ロ「闇の書が「悪いがそれは返してもらうぞ」え？」

後ろを振り返ると、そこにいたのはあの守護獣みたいな女性と、
青を基調とした鎧の二十歳ぐらいの
男が立っていた。

？？？「さぁ、第二ラウンドだ。黄泉路への案内。忘れたとは言わせないぞ？」

アリア「なっ！？　こいつさっきの！？」

するとさっきのやつは一本の剣を出し、

葵「フッ」

―ブォオン　ゴスッ

ロ「グハッ！？」

かなり距離はあった。でもたった剣を一振りしただけで、ロッテをふっ飛ばした!?

孤「はあ～い。アリアちゃん！　よくもボクにとってかわいい家族達をいじめたね」

いつの間に!?

孤「吹っ飛びな。雷明嘗覇」

すると、雷を拳にのせ、

孤「あの子の後を連れってってあげるよ」

―ドスッ　ゴスッ　ゲシッ　ガスッ

殴る殴る殴る。永遠のサイクルのように。

孤「これはヴィータちゃん、これはシャマル、これはシグナム、これはザフィーラ、これははやてちゃん、そしてこれは・・・・」

すると、今まで以上に両手に雷を乗せ、

孤「葵の分!!!」

―ズガァアアアアアン！

ア「・・・・」

そのままアリアはロッテと同じ場所に落ちた。

ＳＩＤＥＯｕｔ

葵「・・・終わりだ。さて、無事かお前ら？」

そういってシグナム達に声をかけると、

ヴィ「だ、誰だお前！？」

シ「返答次第では「「葵（君）！！」」え？　あ、葵！？」

シグナムとヴィータがデバイスをこちらに向け構えた。だが、なのはとフェイトがいきなりこっちに走ってきて、そのまま抱きついてきた。

葵「いきなりな挨拶だな」

フェ「葵だ、葵だ葵だ葵だ！　さっき消えちゃったんだよ！」

な「大丈夫なの！？」

葵「あぁ、この通りな」

ヴォルケンズの方を見ると、状況がいまだに飲めていないようだ。

葵「どうしたお前ら？」

シャ「あ、あの本当に葵君なんですか？」

葵「あぁ。そうだな・・・・あぁそうかお前らにこちらの姿を見せたのは初めてだったな。なら、これで信じるか？」

そう言って右手を出す。すると、

ヴィ「じゃ、じゃあ、お前は本当に・・・」

すると、ヴィータ目に涙をため、

ヴィ「あ、葵ぃいいいいい！」

そのままヴィータが抱きついてきた。

ヴィ「ひっぐ、き、きゅうに、きえ、るから！」

葵「あぁ、心配かけたな」

そういってヴィータの背中をなでる。

シ「本当に神無月なのか・・・」

葵「あぁ。こっちが本当の姿なんだがな」

シャ「でも、無事でよかったです」

ザ「ではあれは？」

葵「ワクチンだ。うまく作動するといいんだが。それより」

そういって私は墜落したであろうあの二人を転移魔法で連れてきた。

葵「さて、どう愉しませてくれる」

全員「・・・・・」

全員があまりの葵の出す殺気の恐怖に声が出ていない。

葵「私の家族を傷つけたこと、大切なものたちを傷つけたこと、殺される覚悟ああってしたんだろ？」

アリア・ロ「・・・・・」

葵「まぁいい。武装を解除してもらう。あと、チェーンデストクレッシェンド」

そういってデバイスを没収した後、鎖が二人に巻きつき、

アリア・ロ「あぁあああああああ！？」

葵「その鎖はただの鎖だと思うな。魔力を吸い込み鎖自身の強度を強化する代物だ。さて、そろそろ正体がわかるか」

すると、仮面の男の姿が晴れそこからは、

な「アリアさん、ロッテさん！？」

地面にはカードの形をしたデバイスが落ちた。おそらくグレアムたちが考える封印方法に欠かせないものなのだろう。それを拾うと

一人がこちらを睨みつけて、

アリア「!?　それを返せ!」

葵「断る。小さい命を犠牲にし、自分たちだけが助かる世界の道具なんてない方がいいからな」

ロ「一人の命の犠牲で世界が助かるんだ!」

ク「ふざけるな!」

　すると横にクロノが降りてきた。ということは、

葵「この二人に指示を出したのは貴様か?　ギル・グレアム」

　すると、一つのモニターが映り、

ロ「違う!」

アリア「私たちの独断だ!　父さまには関係ない」

ギ『ロッテ、アリア良いんだ。クロノに、神無月葵君だったか。彼らはもうあらかたのことはつかんでる。違うかい?』

葵「そうだな」

　静かに言葉を言った。

葵「11年前の闇の書の事件の後、貴様は独自に書の転生先を探した。そして見つけた。八神はやてという闇の書の主を」

グレアムはむろん後ろの者たちも黙っていた。

葵「だが、闇の書を初期段階でとらえても意味がない。すぐに転生されるのが見えているからだ。だから監視をしながら闇の書の完成を待ち続けた。そして見つけた。闇の書の永久封印の方法を。たったひとつの命を犠牲にしたな」

な「それって・・・・」

フェ「・・・・どんなの」

二人が不安ながら聞いてきた。

葵「闇の書を完成させ、魔力を蒐集させる必要性のない状態にする。そうすれば転生する恐れが無くなる。そしてそのすきに主ごと封印する。その後は次元のはざまなりどこへなりに閉じ込めるといったところだな」

全員「!?」

グ『・・・両親に死なれ、体を悪くしていたあの子を見て心は痛んだが運命だと思った。・・孤独な子であればそれだけ悲しむ人が少なくなる』

ク「はやての父親の友人を語り援助をしていたのも」

ギ『永遠の眠りにつく前ぐらいせめて、幸せにしてやりたかった・・・偽善だな』

葵「・・・・・ちっ」

あまりにも吐き気のするような言葉に、つい舌打ちをしてしまう。

ク「封印の方法、その後の処理は葵が言ったとおりですね」

ギ『そうだ・・・それならば転生機能は働かない』

ロ「これまでの闇の書の主だってアルカンシェルで蒸発させたりだってしてんだ！　それと何にも変んない！！」

アリア「クロノ、今からでも遅くない、そいつにアタシ達を解放するように命令して！　凍結がかけられるのは暴走が始まる瞬間の数分だけなんだ」

だからどうした。方法はまだある。そう、まだ・・・

ク「その時点ではまだ闇の書の主は永久凍結をされるような犯罪者じゃない・・・違法だ」

ロ「その所為で！そんな決まりの所為で悲劇が繰り返されてんだ！クライドくんだって・・・アンタの父さんだってそれで！！」

葵「それで、そいつは報われるのか」

ロ「どういう意味だ！？」

葵「お前らはこの１１年という歳月をどう過ごして来た。たったひとつの可能性を見て浮かれてただけじゃないのか。なぜ他の方法を探さなかった」

嫌気がさす。他の方法を探さず、何もせず、それのみに賭けることに。

葵「大切な物ぐらい誰にだってある。それを守りたいという気持ちもだ。それは他人から見ればくだらないかもしれないが、自分だけがその価値を知っていればいい」

昔大切な者がいた。友がいた。でも、護れなかった。力がないがために、世界を救いたいと大きく出たがゆえに。自分の大切な者を失った。

葵「それにお前らがもしはやてを犠牲にして世界を助けたとしても、私やなのは、フェイト、ここにいる皆の気持ちはどうするんだ。悲しみは怒りを呼び、怒りは憎しみへ、憎しみはやがて殺戮へ向かう」

アリア「知ったような口を聞くな!!」

孤「知ってるんだよ! 葵は!!」

アリア・ロ「「!?」」

孤「世界を救うためにたちあがった。友を失ってもなお彼は世界を救おうとした! そして多くの犠牲を払って世界を救った!!　でも世界は結局裏切った。なんでだと思う?」

孤狐の眼にははっきりと怒りの目があった。

孤「殺した側にも殺された側にも大切な人がいたからだよ。憎しみ、怒り、悲しみそう言った憎悪が復讐心となり葵を殺す方向へとすす

ませた。あんたらには一生分からないよ。あんたらの殺しは誰かのためでもなければなんでもない。覚悟も何もない！　ただの自分勝手の殺人だ！」

私は、孤狐の言葉を停める。

葵「たとえどんな理由があっても殺しは殺しだ。それに変わりはない。だからいいわけもしない。だが、これだけは言わせてもらう。目の前ではやてにとって家族同然のヴォルケンズを、はやてにとって大切な物を奪おうとしたお前たちが取った行為は今までの【闇の書】と同じ行為だ」

アリア・ロ「「!?・・・・・あ、あぁ・・・」」

葵「クロノ、これはお前が使え。後この二人を邪魔にならない場所に。後二人に言っておく」

ロ「え?」

アリア「なに?」

葵「私も君たちのことは言えない。私は明日をつかみたいがために、未来をつかみたいがためにはやてと同い年の子を何人も殺して来た。前世だからといっていいわけもしない。私も君たちの気持ちがわからないわけじゃない。こんなとことが言えた義理ではないがはやてを救いだしたら彼女に謝るといい。グレアム。君もな」

ギ『だが・・・』

葵「彼女なら許してくれるだろう。きっとな」

そういって私はデュランダルを渡す。

ク「君は？」

葵「やるべきことをする。それだけだ」

ク「分かった」

そういってクロノは二人を連れていった。

葵「予定通りには事は進まなかった。はぁ、作戦は失敗。別の作戦に変更する」

シ「それはどういう意味だ？！」

葵「当初はシャマルあたりに疑似リンカーコアを摘出しそのまま闇の書に蒐集させる予定だったんだが、無理やり引き抜いたせいでプログラムがうまく作動していない。それに、どうやら動き始めたみたいだしな」

そういって病院の屋上の出入り口の方を見ると、ベルカ式の魔法陣が浮かび上がりそこから闇の書の管制人格が出てきた。

管「・・・また・・・全てが終わってしまった・・・・いったい幾度この悲しみを続ければいい」

管制人格は涙を流し、こちらをにらんだ。

葵「・・・暴走寸前までもっていく。そこが最後のチャンスだ」

剣を鞘におさめ、

葵「管制人格でいいか？」

管「お前は、そうか・・・お前が・・・」

葵「話し合う余地はないか？　出来ればはやてを解放してほしいのだが」

管「あなたが、それを言うか！？」

　すると、彼女の顔が怒りに染まる。

葵「は？　原因が私にあるようなことを言っているがなにが原因なんだ？」

管「あなたがあのような姿を見せたせいで、主はこれが夢であってほしいと思った！　貴方が事の発端だ！」

　何が原因かよくわからん。

葵「だが私はこう生きているのだ。それでいいのではないのか！？」

管「もう遅い！」

　エェ――――！？　どんな駄々っ子なんだ！？

管「ディアボリック・エミッション」

葵「そして容赦なしの広域攻撃!?　エクス白騎士!　全体防御、全員を守れる空間防御同時展開!」

葵の身体は白く染まり白色の球体状の防御魔法がその場にいた全員を包む。

管「闇に染まれ・・・」

それと同時に闇の書の闇が全員を包み込む。

葵「〈くっ、孤狐空間転移!〉」

孤「〈わかった!〉」

―シュン

闇が晴れると、その場にはだれもいなかった。

管「逃げたか・・・」

―ビルの陰

葵「ディアボリック・エミションだったか。白騎士の防御魔法にひび入れるとはな」

シールドを持っていた左腕の方を見ると、切り傷がついていてそこから血が出ていた。

葵「はぁ、どんだけ魔力の貯蔵できるんだあいつは?」

エ《おそらくですがなのはちゃん、フェイトちゃんの魔力も吸収しています。つまり二人を足したぐらいでは？》

・・・恐ぇ。久しぶりだな、こんな嫌な汗を背中で感じるのは・・・。

とまぁ、言ってますが実際は主人公も加担してますよ？

ユ「なのは！」

アル「フェイト！」

そこにユーノとアルフが来た。

ユ「葵！？」

アル「あんた、いつ帰って来たんだい！？」

葵「話したいことはいろいろあるだろうがその前に・・・ヴォルケンズに聞きたいことがある」

シ「なんだ？」

葵「魔力もそうだがお前らはあれの一部だったな」

ヴィ「お、おぉ」

葵「となると、あいつの命令もお前らは従うのか？」

シャ「はい。おそらくは」

つまり別世界に行けと言えば地球外に飛ばされる可能性もあると言うわけか。

ここで戦力のダウンは避けたいな。

葵「・・・やむえないか。一時的だがお前らを闇の書の制限下から外し私の管理下に置く」

ユ「そんなことができるの！？」

まぁ、こういうときに契約が役に立つとは。そう思い白書を取り出す。

葵「白書よ覚醒の時来たり。我、汝に名を与え、我がものとなれ」

白《はい。我が主》

葵「（明日はクリスマスか。なら安直だが）汝の名、聖なる夜に生まれし書、【聖夜の書】」

白《ありがとうございます。我が名は聖夜の書。我は常にあなたと共に》

葵「さて、我は聖夜の書の主。我が書に記されし者達よ。我が命に従い、我が意に服し、我と共に剣を抜け。これ我が命なり」

聖夜の書がぺらぺらとめくられ、

葵「神雷の騎士ヴィータ、聖炎の騎士シグナム、清風の騎士シャマル」

え？　ザフィーラがいない？　話を聞くとザフィーラから聞いたけど、「私にそっちのけは無いから安心しろ」と言われた。ほっとした自分がいたのは別だけど。

まぁ、そう言い終えるとそれぞれの騎士甲冑が別の騎士甲冑に変化する。

ヴィータのは以前契約を執行した際のに。シグナムは蒼騎士をそのまま葵部分を赤へ。シャマルは騎士甲冑は緑を基調としたモノ（三国無双６の星彩）。ちなみにヴィータの年齢は変化していません。

で、どうしてこれが私の管理下に置かれるかというと闇の書とのパスをいったん切り離しその代わりに聖夜の書の守護騎士とした。それだけだ。

ヴィ「これって・・・」

シャ「新しい騎士甲冑ですね♪」

シ「ヴィータのその格好を見る限り、どうやら葵の契約の執行時のものと見るが？　成長はしないのか？」

葵「私と契約を執行していないからおそらく劣化版だろ。だが威力はある程度プラスされてるはずだぞ」

な「ヴィ、ヴィータちゃんの格好が変わった！？」

フェ「二つデバイス持ってるんですか！？」

まぁ、二人には悪いが説明している時間もなさそうだ。なんでかって？　簡単だ。

孤「あの管制人格だっけ？　あれ、広域殲滅型だね」

な・フェ「「だれ！？」」

孤「孤狐だよ～」

な「え！？　じゃあ、あの少女はあなただったんですか！？」

孤「ん～。違うともいえるし、そうともいえるな」

フェ「えっとどういうことですか？」

孤「あれはね、葵とボクが合体した姿なんだよ」

な・フェ「「えぇえええーーー！？」」

まぁ、その後は簡単に説明した。

な「そ、そうだったんだんすか」

フェ「でもなんで退学を」

葵「まぁ、彼女たちに協力していると知ったら間違いなく君たちも何らかの干渉をすると思ったしな。特にフェイトこれは君のためでもある」

フェ「え？」

葵「君はおそらく今は局の監視下にあるんじゃないのか？」

フェ「うん」

葵「今回こちら側に協力すれば立場が危うくなる。それを回避するためだ。なのはも、これを知れば間違いなく犯罪者になるぞ」

な「うっ」

フェ「そ、それは・・・」

葵「まぁ、それでも彼女たちを助けたあとはこっちに有利にするがな」

―ビル屋上

管「主よ・・・あなたの望みを叶えます」

彼女がそう告げると、ベルカ式の魔法陣が展開される。

管「愛おしき者を傷つけた者たちよ・・・今破壊します」

闇の書が光り出し

闇《Ｇｅｆ？ｎｇｎｉｓ　ｄｅｒ　Ｍａｇｉｅ》

―ゴオオオオォォォォォォ

闇の書の管制人格を中心に結界がはられた。

葵「これは・・・結界!?」

アル「前と同じ閉じ込める結界だ!」

シ「閉じ込められたか・・・」

みんな冷静だな。そう思い再び管制人格の方へ視線を移すと、なにやら魔力を収束させていた。

葵「・・・まて、あの魔法ってまさか・・・・」

あの攻撃どこかで見たことあるぞ。ピンク色点がどんどん大きくなっていく。あれって・・・

な「スターライトブレイカー・・・・」

葵「全員散開!!　出来るだけ距離を取れ!!」

全員「了解!」

一気に全員がそう言って指示に従ってくれた。

私はなのはとフェイトの援護も兼ねて三人で全力で距離を取っています。

な「ちょっ!　フェイトちゃんこんなに離れなくても」

フェ「至近からくらった防御の上からも落とされる。回避距離を取らなきゃ」

さすがあの魔法を喰らった経験者がいうと説得力がある。

な「葵君！　こないだわたしの魔法を消して撃ちおとしたあれ使えば何とかなるんじゃないの！？」

葵「あれは一人の魔法につき一回の限定つきなんだ。魔法は万能じゃない！　覚えておけ！　ましてやお前のあの魔法の威力はバカにならん」

フェ「どういうこと？」

エ《一度だけなのはちゃんのＳＬＢを最初の結界破壊時の威力と想定して無に帰する刃（ルーンヴォルヴァ）をぶつけてみたんですが・・・・》

な「どうなったの？」

ル《刃を軽く呑み込んでこっちに攻撃してきた。しかも疑似的な物だから威力も弱まっている》

あぁ。あの時ほど死を恐れたことはなかった。多分なのは本人が撃った魔法だと・・・あれも役に立たないだろうな・・・。なのはそのうち悪魔とか呼ばれるんじゃないのか？

な「葵君。今変なこと考えなかった？」

葵「・・・ナ、ナンノコトデショウ？」

・・・心が読まれるほど私は顔に出やすいのか？

エ《マスター！！　左３００ヤードに生命反応あり！！》

葵「なに！？」

ル《これは・・・アリサとすずかです！！》

そういって視線で探すと、

葵「いた！」

ＳＩＤＥアリサ・すずか

道路に一人ポツンと佇むすずか。

す「あぁ・・・・」

その視線の先には桃色に輝く光の球体がある。

―タッタッタッ

すると、アリサがすずかの元へ戻ってきて、

ア「やっぱり誰もいないよ！　急に人がいなくなっちゃた・・・」

おそらく周りの様子の変化に気付き見てきたのだろう。

す「うぅ・・・・」

ア「あたりは暗くなるし、なんか光ってるし、一体何が起きてるの！？」

す「うーん・・・・」

困惑すずかを見て、ありさは、

ア「とりあえず逃げよ！　なるべく遠くへ！」

そういってアリサはすずかの手を取る。

す「あ、うん！」

ＳＩＤＥＯｕｔ

いまだに、闇の書はチャージを続けていた。

葵「一体どこまでチャージを続ける気だ・・・」

エ《距離、７０・・・６０・・・５０・・・》

エクスは二人までの距離をカウント形式で二人の距離教えてくれている。

フェ「葵、なのは、この辺」

な「うん」

そういってフェイトはなのはを離すと・・・離した!?

葵「え!?　なぜ!?」

ル《以外と大胆だな二人とも・・・》

冷静なルミルですら驚いているぞ?!

まぁ、結果を言えば煙を上げて停止したが、あまり心臓によろしくないぞ。一瞬心臓がひやっとしたぞ。

フェイトは信号機の上に着地した。これが日常だったら明らかに警察に御世話になるな。

私は空から二人を探すか。

葵「エクス、距離は?」

エ《20・・・18・・・》

ル《接近中だな》

フェ「えっと、う~ん・・・〈ごめん、ここからじゃわからない。葵、そっちは?〉」

葵「・・・〈なのはのまいた土煙のせいで分からん〉」

な「〈え!?　わたしのせい!?〉」

エ《13・・・11・・・》

葵「もう直ぐ来る。視認で確認するしかないな」

　すると、ビルの間から、二人が出てくるのを確認した。

葵「なのは、いた！」

な「あっ！　あの、すみません！　危ないですからそこでじっとしておいてください！」

ア「え？」

す「今の声って・・・」

　すると、煙もおさまり、なのはが姿を現す。

ア「・・・なのは？」

す「・・・フェイトちゃん？」

　やはり二人か。まずいな、この状態で発射でもされたら・・・

管「スターライトブレイカー・・・」

　・・・タイミング良すぎるな。

―ドゴオオォォォォ

ア・す「「あぁっ・・・」」

二人とも迫ってくる光に驚いている。

な「〈フェイトちゃん、アリサちゃんたちを〉」

フェ「〈うん！〉」

―ガシュン　ガシュン

カードリッジをロードし、

フェ「二人ともそこでじっとしてい」

すずかがアリサに抱きつくように佇んだ。

バ《Ｄｅｆｅｎｓｅｒ　ｐｌｕｓ》

すると、黄色のバリアが展開された。

さらにフェイトも二人の前にたちバリアを展開した。

な「レイジングハート」

レ《Ｗｉｄｅ　ａｒｅａ　ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

二発のカードリッジをロードしプロテクションを展開した。

葵「エクス。白騎士展開」

そういって私は白騎士を見にまとい、なのはの前にたち、

葵「防御魔法展開」

水色の魔法をアリサとすずかのいるあたりまで広げ、展開した。

そして、

―ズゴオオォォォォォバチバチ！！

魔力嵐とでもいうべきか？　スターライトブレイカが着た瞬間にすごい勢いの風で吹き荒れていた。

ユ「〈なのは、大丈夫！？〉」

ヴィ「〈葵！？〉」

アル「〈フェイト！？〉」

ヴィータ達から念話が入ったが、今それどころではない！　正直言ってこれはきつい。本当に将来有望な魔王だよ、なのはは！！！

な「〈葵君！　今失礼なこと考えてたでしょ！？〉」

葵「〈ソンナコトハナイ！〉」

フェ「〈カタコトで威張っても・・・〉」

葵「〈それより、アースラと連絡を取って二人を安全な場所まで退避させろ！　持たんぞ！？〉」

な「〈そうだった！〉」

オイッ！？　友達の命がかかってんだぞ！？

その後、なのはとでフェイトがアースラと通信してどうやらこの場所が安定するまで耐えてくれと言われたそうだ。

しばらくしてから砲撃もおさまり二人の方を確認したが、

す・ア「「うっうぅ・・・・」」

まぁ、あれだけ怖い体験をすれば、こうなるか。

フェ「もう大丈夫・・・」

な「すぐ安全な場所に運んで貰うから、もう少しジッとしててね」

なのはとフェイトが二人に話しかけた

す「あの、なのはちゃん？　フェイトちゃん？」

ア「ねぇ！　ちょっと・・・」

二人がなのは達に話しかけようとすると、アリサとすずかの下に魔法陣が浮かび上がりそして

―シュン

別の場所に移動した。

な「みられちゃったね・・・・」

フェ「・・・うん」

葵「話せばわかるんじゃないか？　あの二人なら」

フェ「葵もばれたんじゃないの！？」

葵「フェイト、私は今大人だ。つまり」

彼女たちは私の子の姿を知らないから私＝葵とはつながらないわけだ。

な「・・・なんかずるい！」

葵「まぁ、それが大人の特権ってやつだ。まぁ、話す時はこっちも自動的に話さなきゃいけなくなるから、一緒に話すとしよう」

フェ「ホント！？」

な「ありがとう！　葵君！」

そう言って抱きつくが、まぁ身長のせいもあってちょっと上目遣いになっていた。

葵「〈ユーノ、アルフ、ザフィーラ。二人を守ってやってくれ〉」

アル「〈でも葵！〉」

ユ「〈行こう、アルフ、ザフィーラさん〉」

ザ「〈あぁ。気がかりがあると他の連中も満足に戦えんだろう〉」

アル「〈・・・わかった〉」

葵「なのはとフェイト君たちに頼みがある」

な・フェ「「え？」」

二人は驚いているが私はそれを無視して作戦を話した。

葵「では頼んだぞ。飛翔」

エクスからルミルに変化させた。さて、私は行くか。あの駄々っ子の元へ。

そういって翼を出し、管制人格の元へ向かった。

第二九話

第二九話

ＳＩＤＥ管制人格

管「来たか」

私の目の前には漆黒を身にまとったかのような葵がいた。

葵「さて、もう一度お前に言う。大人しくはやてを返せ」

管「断る。貴方も闇に眠れ」

私の周りに血のような紅い剣をだし、彼もまた見たこともない黒色の魔法陣を展開させる。

管「穿て、ブラッティダガー」

葵「放て、ダークアロー」

―キィイン

だがいの矢が放たれ、そして、

―ズガァアアン

相殺する。

葵「ほぉ。あれを相殺するか」

相殺されたことを驚いているのか、目を見らいていたがどこか楽しそうだった。

葵「・・・闘いを愉しむ・・とはな。とことん私も・・堕ちたな」

管「？」

途中までしか聞き取れなかったがどこか暗い顔でそう言っていた。

葵「まぁ、今は関係ないか。両翼刀」

黒と白の翼の肩を出し構え、

葵「さて、参ろうか」

管「・・・・はぁ！」

そして、たがいに駆けだした。

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

ＳＩＤＥはやて

・・・・・ねむい

・・・・ねむい、なんやろ、このまま寝たらアカンのかもしれん。
でも、ただただねむい。

は「・・・うぅ・・・んっ」

うっすらとやけど目の前には知らん女性が。

???「そのままお休みを我が主。・・・貴方の望みはすべて私が叶えます。目を閉じて心静かに夢を見てください」

・・・懐かしい声。でも、誰か分からん・・・誰の声やったかも・・
・・

は「私は・・・何を望んどったんやっけ?・・・」

???「夢を見ること。悲しい現実は夢となる。安らかな眠りを」

・・・そう・・・なんか？・・・でも、もう・・・どうでもよくなってきた・・・

？？？「直にあの者も参ります」

あの・・・者・・・・・

？？？「葵も・・・いずれ」

・・・・・・・は？

は「えぇっと、そこのええおっぱいしとる姉ちゃん。今何っていった？」

？？？「え、えぇ。葵もいずｒ「ならあの剛腕男に胸ぶち抜かれて光りになったんは！？」えっと分かりませんが魔力で作った変わり身かと・・・」

な・・・ん・・やて・・。

は「生きとんやな！　葵君はほんなら生きとんやな！！」

ええおっぱいしとる姉ちゃんの腕をつかみながら何度も確認した。

？？？「え、えぇ。本当です」

は「よし。ほんならさっさとこんなわけのわからん場所におる理由もない！　さっさと出るで！」

？？？「えぇ！？」

こんな場所で寝れるか！　ぐっすり安眠するんやったらやっぱ葵君のそばやないと！！　葵君、私を泣かせた罪は重いで？　グフフフッ

そのはやての光景を見ていた管制人格は、

管「主が、主が壊れた・・・・」

ＳＩＤＥＯｕｔ

シ「はぁあああ！」

ヴィ「ラテ―ケンハンマー！！」

葵「鳳墜閃！」

あの後、シグナムとヴィータも加わり、一斉に攻撃を加えるが、

―ガキィィィン！

シ「はぁ・・はぁ・・・さすがに堅いな」

ヴィ「あぁ、さすがあたしらを含め伊達に魔力を奪ってるな」

葵「〈シャマル。あとどれぐらいの耐久性があるかわかるか？〉」

そういってシャマルに連絡を取ると、

シャ「〈えっと、およそまだ５０％残ってます〉」

ヴィ「あれで半分かよ！？」

葵「一気にけりをつけるか。ルミル、黒騎士パージ、エクス、白騎士シンクロ！」

あと、なのはとフェイトに通信を入れておかねば、

葵「〈そっちの準備はどうだ？〉」

な「〈ばっちりなの！〉」

フェ「〈いつでもいいよ！〉」

葵「〈よし。おそらくこれで壊れる。障壁破壊後は分かっているな？〉」

な・フェ「「〈うん！〉」」

葵「シグナム、ヴィータは援護を頼む」

シ・ヴィ「「あぁ（おう！）」」

葵「チャージ開始。目標６２％」

エ《了解。チャージ開始。終了予定およそ２２秒》

耐えろよ。頼むから。

ＳＩＤＥシグナム・ヴィータ

騎士甲冑だけじゃなくて本当に管理権限もすべて全く通じない。

ザフィーラもある程度離れていれば管理者権限が使えないらしい。

管「なぜ、私の命令が効かない」

ヴィ「へっ。今のあたしらは葵のモノだ。葵の命令にしか従わない」

シ「主はやてには悪いが。だが、主はやてを助けられるのなら！」

そういって二人ともデバイスを構え、

シ「ハアアアアアアアア！！」

ヴィ「ウオリャアアアアア！」

―ガキィイン

シ「（やはり堅い）レバンティン」

レヴァ《Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ》

―ガシュゥン

カードリッジをロード。そして、炎がレバンティンの刃を覆い、

シ「紫電一閃！」

―ギギギギ、ガキッ

すると、少し鈍い音がした。

ヴィ「葵！」

エ《マスターチャージ終了！》

葵「シグナム、ヴィータ離れろ」

二人が射線上から退避したのを葵が確認すると、

葵「光りの道は何を示す」

エ《人の歩むべき正しき道を》

葵「されどその道に外れるものも在り」

エ《神はそれを見て嘆いた》

葵「神はその者に罰を下す」

エ《人はそれ恐れ慄(おのの)いた》

葵「ギュリーノス・ブレイカー！」

そう言うと、本当に光の道と思うほどきれいな光りだった。

砲撃が管制人格に向かっていくと、

管「盾」

闇《Ｐａｎｚｅｒｓｃｈｉｌｄ》

シールドを展開し防ぐ。だが、

―ガガガガッガ・・・・パリィン

障壁の破壊を確認すると、

葵「なのは！　フェイト！」

葵が合図すると同時に、

な「ディバイン・・・バスタアァァァァ！」

フェ「プラズマ・・・スマッシャアァアァァァ！」

二人が放った砲撃はそのまま、管制人格に直撃し、爆煙が上がる。

葵「・・・このまま気絶してくれるとそのままワクチンを作動させるんだがな」

おそらくまだバグ除去のワクチンが生きており、先ほどの攻撃で停止したらワクチンを発動させたいのだろう。

管「・・・・」

爆煙の中からは多少傷ついた管制人格が現れた。

葵「そうは問屋が――――なっ！？」

シ「神無月！？」

葵の目の前に闇の書があり、

管「あなたも、我が内で眠るといい。永遠に」

葵「しまった！？」

―キィイイン

葵の身体が光り出し、そして消えた。

闇《Ａｂｓｏｒｐｔｉｏｎ》

―バンッ

開かれた闇の書はそう告げ本を閉じる。

ＳＩＤＥ　ｏｕｔ

闇の書に吸い込まれた葵はというと。

葵「油断したな・・・・しかし臭い。なんだこの悪臭は?」

自らに結界を張り、周りからの浸食を防いでいた。

葵「はぁ、邪魔」

溜息をつきつつも両翼刀で周りから迫る触手を斬りつけて行く。

???「なんで、どうして、私を作ったのは人なのに・・・」

ある程度歩むと奥の方に泣いている女性がいた。

葵「管制人格?」

？？？「え？」

ＳＩＤＥはやて

は「なるほどな。つまりここから抜け出るには外におる人に協力してもらって、ぶん殴ってもらう必要があると」

管「え、えぇ。まぁ・・・（ぶん殴るって、主よ。貴方も女の子なのですから言葉遣いには）」

は「でも、中からそんなこと頼めるんか？」

管「はい。ですが、私たちができるのは動きを止めることが限界です」

は「そこら辺は気合と根性や！　それから姉ちゃんではあかんから名前教えてもらえるか？」

　目の前の姉ちゃんはいきなり黙って、口を開けた言葉に私は切れた。

管「私に名前はありません。強いて言うなら【闇の書の管理人格】でしょうか」

―プチッ

は「名前がない？　ほんなら私が名前ぐらいつけたる！　しかも自分をモノ呼ばわりするようなことを言うん！？　あんたは生きとん

やろ！？　葵君が言とった。生きとし生ける者、命ある者には幸せになる権利も未来を見る権利もある！　もとならあんたにもあるんや！」

ま、葵君の受け売りやけど、こうやって口に出して言うとホンマにそう思う。

は「それに、貴方のマスターは今は私や！　マスターの言うことは気かなあかん！」

彼女のほほに手を当てると、足元に白い魔法陣が広がる。

は「それにもう、闇の書とか呪いの書とか言わせへん！　私は管理者や私にはできる」

管「主、はやて・・・」

涙を流す彼女。

は「名前をつける前に、することしよな。時間ないらしいし。その後や。名前をつけるのは！」

管「はい！」

涙をふき彼女の眼に再び意思が宿る。

は「ほなやろか。やるべきことを。わたしらがつかむ幸せと未来のために」

管「はい！　主」

私は深呼吸をし、念じるように、

は「とまって」

そう強く念ずる。

は「〈外の方！えと、管理局の方！こちらえと、そこに居る子の保護者、八神はやてです！〉」

な・フェ「「〈はやて（ちゃん）！？〉」」

は「〈え！？　なのはちゃんに、フェイトちゃん！？〉」

ヴィ「〈はやて！！〉」

シ「〈御無事ですか、主はやて！？〉」

孤「〈おぉ。聞こえるよ〉」

は「〈シグナムに孤狐、ヴィータも！？〉」

すると、隣で、

管「なぜかは分かりませんが私の制御から守護騎士たちが切り離されてしまいまして。おそらく葵の力なのかと」

あぁ～、葵君か。なんやろ、葵君ならむしろできて当然。って感じがする。でもまぁ、そこが葵君らしいんやけどな。優しくて強くて、自分が落ち込んだ時は支えてくれる。やから惚れたんや！

は「〈それから、今魔導師で一番強力な魔法使いを撃てる人って誰？〉」

フェ・シ・ヴィ・シャ・孤「〈・・・・・（クイッ）〉」

なんやろ、私は今声しか聞こえんけどなのはちゃん以外がみんななのはちゃんを指差したような気がする。

な「〈え!?　わたしなの!?〉」

ほら～。

は「〈ほな、なのはちゃん！　一番強力な魔法でこの人にでかい魔法ぶちかましてやって!!〉」

ヴィ「〈はやて!?〉」

シ「〈正気ですか!?〉」

シャ「〈お願いですはやてちゃん！　考え直してください!!〉」

孤「〈はやてちゃん!?　自殺する気!?〉」

あれ？　人選ミスった？　しかも孤狐の最後の言葉がメッチャ気になる・・・

な「〈うん！　任せてなの！　全力全壊でするの!!〉」

・・・本気でミスったような気がするってなのはちゃん？　今字

違ったよな!?

作者：誤字にあらず！　って、待て?!　はやてさん!?　それをどこから!?

　ふふふっ・・・関西人なめたらアカンよ?

作者：エセのくsあぁ冗談ですごめんなさいだからそのシャマル特性スープ：@［@;：ｏｋｉｊｈｕｈｌ；@［ｐ;＾［：／・・・・・・

は「（悪は滅びた!）しかし・・・なぁ、ほんまに私ら生きてここから出れると思う?」

管「し、信じましょう。彼女たちのことを・・・・（主よ・・・いったい誰を殺したんですか・・・）」

　そ、そやな。な、なのはちゃんのことを・・・・すると、胸のあたりから光が広がっていた。

管「暖かい光ですね。太陽の光のような、誰かに包まれているような」

　その光が出ている場所からモノを取り出すと、それは葵君がくれた宝石のペンダントだった。

管「この力は・・・葵の魔力、なら。主、これなら外の攻撃入りません!　今すぐ中断を!?」

は「マジかいな!?　なのはちゃんす「エクセリオンバスター・フォースバースト!ブレイクシュートォォォ!!!」ノォォォォ!!」

ストップというとしたがなのはちゃんの方が早かった。今さらだが、なのはちゃんに任せたうちのミスや。一生の・・・。

ま、まぁええわ。結局いい方向に入った・・・はず。

は「・・・ごほん！　次は姉ちゃんのほうやね。夜天の主の名において、汝に新たな名を贈る、強く支える者、幸運の追い風、祝福のエールリインフォース」

するとあたりを光が包み込む。

リ「新名称、リインフォースを認識。管理者権限の使用が可能になります

は「うん」

リ「ですが防御プログラムの暴走が止まりません。管理から切り離された膨大な魔力が直に暴れ出します」

は「うん。まぁ、なんとかしよ。いこかリインフォース」

私は目の前に現れた闇の書をそっと抱き締めた。

リ「はい。我が主」

な・フェ「「はやて（ちゃん）！！」」

脱出成功！

は「リインフォース。私の杖と甲冑を」

リ《はい》

リインフォースが私の杖と甲冑を準備してくれた。甲冑言うから西洋騎士みたいなものを思っとったんやけど違うみたいやな・

ヴィ「はやてー！」

すると真っ先にヴィータが抱きついてきた。

シ「主はやて。すみません」

シャ「はやてちゃん、私たち・・・」

多分、私に黙って蒐集したことやろ。

は「ええよ、みんなわかっとる。リインフォースが教えてくれた。そやけど細かいことは後や。今

は・・・お帰り、みんな」

そのまま優しくヴィータの頭をなでる。

な「はやてちゃん」

は「ごめんな。うちの子らが迷惑かけて」

フェ「ううん」

は「それより葵君は？」

全員「えっと・・・・その・・・・」

すると、空中にモニターが映って、・・・・どちらさん？

？？？『みんな気をつけて！』

フェ「エイミィ？」

ほぉ。エイミィさんいうんや。

エイ『あの球体から膨大な魔力反応が！』

全員「なに！？」

―ドパアアアアアン

目の前には、私と同じ格好をした『彼』がいた。

第三十話

第三十話

葵「管制人格？」

？？？「え？」

彼女が顔を見上げると確かに骨格や髪の色は似ているが唯一目の色が海のように青い瞳をしていた。

？？？「お、おまえは？」

葵「違うのか。はじめまして、神無月葵と言います」

？？？「なぜここに？」

葵「いやなに、貴方が吸収したのではないのですか？」

　すると、何か目を見開いて、急いで何かを検索用に目を閉じて考えだした。

？？？「バカな・・・お前には幸せという過去は無いのか。いや、人なら誰しも」

葵「あぁ～、確かにないな。所詮殺し殺し殺しの世界だったし。今日殺せば明日も殺す。そういった戦争続きだったし。それ以前は所詮『無』に近かったしな」

???「それを過去に経験したと言うのか・・・」

葵「だから今があるんだろ？　過去があり今があり未来がある。全てつながっている一本の道なんだ。未来も選択肢はあるが所詮選ぶのは自分だ」

???「そうか」

葵「で、お前は？」

防「私は闇の書の【防衛プログラム】だ」

葵「ほぉ。では、もう一つ。なぜ泣いていたのだ？」

防「え？」

いや、泣いていたじゃん。今も涙の跡があるし。

彼女の眼もとにたまった涙を指で拭き取り、

防「え！？　あ、ちょっと／／／」

葵「さて、ではここにいる必要性もないし。さっさと出るか」

そういって私は彼女の前に手を差し伸べた。

ＳＩＤＥ防衛プログラム

彼が、葵が私に向けて手を差し伸べてきた。だが私はそれに手を出すことはできない。

防「私はいけない。私が行けばこれはさらなる暴走をする。私がここに残れば」

だが。

葵「変だな。ではなぜ泣く？」

防「え？」

葵「生きたいのでしょ？」

防「・・・・」

彼は泣いていた私を抱きしめた。

葵「生きていいんだ。あなたには生きる権利もあれば未来を見る権利もある」

防「でも、私は、多くの人を」

葵「なら、一緒に償おう。もし道に迷いそうになったら一緒に迷ってやろう。そして一緒に元の道に戻ろう。倒れそうになったら支えてやろう」

防「だが、絶対に倒れる。それだけ私の犯した罪は――」

葵「なら、いっしょに倒れて青空でも見よう」

防「え？」

彼の予想外な言葉だった。彼はなぜそこまで優しくできる。

葵「倒れたら上を向いて空を見て、そしてまた立ちあがればいい。時に休憩は必要だ。歩きっぱなしは疲れる」

彼はずっと笑顔だった。　そして、

防「私は――」

葵「誰にも必要ないことはありませんよ。少なくとも、私はあなたの未来を見てみたい」

防「！！」

その言葉に私は何度救われたと思ったか。

葵「一緒に歩んでみませんか？」

その時私は思った。あぁ、彼となら一緒に歩める。いや、一緒に歩んでみたい。そして未来を見たい。そう心から思った。

葵「では行こうか」

防「・・・はい。我が皇よ」

葵「お、皇か・・・・まぁいっか。そう言えばお前に名前が必要だ

な」

防「いいのですか？」

葵「あぁ。新しい私の家族になるのだからな」

名前。私は今まで防衛プログラム以外で呼ばれたことがない。初めてだ。名前なんてもらうのは。

防「あ、ありがとうございます！」

そういって私はお礼を言った。

葵「ん～。では、お前の名前はヴェルだ！」

防（以後ヴぇ）「ヴェル？」

葵「祝福の鐘を告げる者、幸福を呼び寄せる者、新たな幸せを知らせる者。ヴェル」

私は膝をつき、

ヴェ「我、これより汝を皇と認める。我が名はヴェル。あなたのために剣となり、時に盾となる」

そして、彼は私の手を取り。

葵「行きましょう。ヴェル」

ヴェ「はい！」

そういって私がたちあがりその場から離れようとしたとき、

―ウネウネウネ

やはり私はここからは出られないようだ。今までの蒐集した生物たちが私を行かせまいとうごめいている。

葵「彼女の生きる道（未来）を邪魔するな！」

そういって彼が翼の形をした剣で触手を斬り裂く。

葵「さて、どうしたものか」

エ《マスター方法が一つだけありますよ?》

イヤリングのデバイスがそう告げる。

葵「今はぜいたくを言ってられないか。で、それは?」

ル《契約をし、完全にマスターのモノにすれば!》

・・・・皇のモノ・・・

―ぼんっ／／／

葵「・・・・・本気で言っているのか!?」

エ《本気ですとも!（マスターの正妻の座は誰が!?）》

ル《こんな状況で冗談は言わん（さてさて、誰がその栄光を？）》

エ・ル（（まぁ、私たちがマスターから離れることは絶対にないがな！！））

ヴェ「あ、あの契約とは」

葵「知らないか？　シグナムや、君たちの主と行った行為・・・」

・・・ま、まさかあれを！？

葵「まぁ、嫌なら別の方法を「い、嫌ではありません！　ぜ、ぜひお願いします！」そ、そうか？」

い、勢いで言ってしまた。でも、これで私もマスターと一つになれるのか・・・。

葵「で、では行くぞ？」

ヴェ「は、はひぃ！」

そして、唇が重なった。すると、

―シュゥゥゥ

ヴェ「痛っ。こ、これが皇との契約の証し」

葵「ま、まぁ。さて、聖夜の書」

聖《はい。ここに》

葵「我は聖夜の書の主。我が書に記されし者達よ我が命に従い、我が意に服し、我と共に剣を抜け。これ我が命なり。幸福の騎士ヴェル」

　すると、今まで黒の服だったものが白に変化した。

ヴェ「ありがとうございます。我が皇」

葵「その、まぁいっか。さて、どうやって出ようか」

ヴェ「なら、ユニゾンして出ますか？」

　そして、そのままユニゾンをした。（はやてと一緒の格好。スカートではなく長ズボンです）

葵「さて、参ろうか。夜天の書の主の元へ」

ヴェ《はい》

　翼を出して、飛び出した。

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

―ドパァァァァアン

葵「脱出成功か」

周りを見ると全員いるようだ。

シ「あ、葵なのか!?」

は「え!?　葵君って大人やったんか!?」

葵「まぁ、年齢は二〇歳だがな。あと、そっちもうまくいったようだな」

は「え、まぁ」

リ《葵、その、お前とユニゾンしているのは?》

ヴェ《久しいな管制人格》

リ《防衛プログラムか!?（誰にも従わず、永遠の孤独を選んだ彼女が彼を皇として認めたのか!?）》

ヴェ《今はヴェルだ。幸福を告げる者ヴェル。我が皇よりいただいた名だ》

葵「知り合いか?」

ヴェ《はい。我が皇。管制人格です》

あぁ、戦っていたあの。

葵「さて、神雷の騎士、聖炎の騎士、清風の騎士。契約解除」

私がそう告げると、シグナム達は元の騎士甲冑に戻った。

葵「管理者権限がどうやらはやてに移ったのだ。これ以上しばりつけておくのあれなんでな」

は「それにしても、葵君とお揃いやな！」

葵「ん？　まぁそうだな。リインフォースとヴェルはいわゆる双子（？）みたいなものなんだ。似ててもおかしくないだろう」

はやてのはミニスカートだが私のは長ズボン。せいぜい違いはそこぐらい。

な「む～～～。いいな、はやてちゃん・・・」

フェ「うん。葵と一緒のバリアジャケットか・・・」

ヴェ「はやていいな。でも、あたしにはこれがあるからいいや！」

そういって左手の模様をめでるように撫でる。

シ「た、確かに、これがあれば、いつでも、その・・・・」

シャ「はい♪　葵君と一つになれますし」

ヴォルケンズよ。問題発言は控えろ！？

な「にゃ！？　ヴィータちゃん、それ何！？」

フェ「シグナムどういうこと！？」

その後、ヴォルケンズが勝手にパス契約の説明をした。当然キスをして、その後一つになる権利も得られるということも。

な「どういうことかな？　葵君」

―ジャキ

なのは、レイジングハートをなぜこちらに構える。

フェ「私たちの時はそんなことしてくれなかったし言ってくれなかったよね？」

―ガシュゥン

フェイト、何気にカードリッジをロードするな。

ヴェ《・・・我が皇よどういうことだ？》

葵「〈お前としたことをあそこにいるメンバーにもしたんだ。というかお前は中から見てただろ！？〉」

ヴェ《・・・まぁ、私もしてもらいましたからよしとしましょう／／／》

ほっ。よかった。

な「で、どういうことかな？　かな？」

フェ「Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩしようか？」

まずい。世界がどうのこうのの前に、私の命が危ない！？

葵「ま、待て二人とも、この契約の理由はちゃんとある！」

な・フェ「「え？」」

その後、シグナムとヴィータの理由は、まぁはやてたちにした言い訳をそのまま使い、はやてとシャマルについてはそのままを伝えた。

な・フェ「「そうなんだ～」」

し、死ぬ。マジで死ぬかと思った・・・。

ク「済まないな、水を差してしまうんだが、時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ」

タイミングが良いな。・・・待てよ、ということは。

葵「クロノ、まさかとは思うが今まで修羅場を愉しんでいたとは言わないよな？　違うにしてももっと早く来れなかったのか？」

ク「・・・葵には後で聞きたいことが山ほどあるが、今は「クロノ、私の質問に」時間がないので状況を簡潔に説明「バギィ」グハッ」

人の話を聞けと私は言ったよな？

何をしたかって？　簡単だ、久々にフライパンの刑に処しただけだ。ちなみに今回のフライパンは一秒間に百発撃つマシンガンにも耐えられるフライパン。その光景に知らないヴォルケンズは震えて

いた。

は・ヴォルケンズ（は、般若が・・・般若の顔が・・・・）

な・フェ・アル・ユ（ひ、久しぶり見たけど大人バージョンだと余計に怖い（の）・・・・）

葵「さて、答えてもらおうか？　クロノ・ハラウオン君？」

ク「す、すみません！　見てました！　だ、だからその、フライパンを振り下ろさないで！？」

ヴェ《お、皇、今はそんなことより現状を打破する方に！》

葵「・・・チッ。命拾いしたな」

ヴェルの忠告がなければお前は再び海の藻屑になっていたのに。

葵「で、現状というかこの状況の打破する作戦でもあるのか？」

ク「・・・あそこの黒い淀み闇の書の防衛プログラムが後数分で暴走する」

ん？　防衛プログラムが暴走？

葵「クロノ。防衛プログラムならここにいるぞ？」

ク「は？」

そういって一旦ユニゾンを解除すると、

は「リインフォース！？」

葵「似ているが違う。ほら、瞳の色とか」

は「ほんまや・・・」

ク「で、ではあの淀みは？」

ヴェ「ただの亡骸、残骸、化け物。とでも言うべきでしょうか。あ。我が皇再びユニゾンしますね♪」

葵「あぁ。えらく楽しそうだな？」

ヴェ《皇の中は暖かくてとても落ち着くんです》

孤「あぁ、その気持ちわかるな」

葵「左様で。というか孤狐、今までどこに？」

孤「ザフィーラ達と共にね。あの二人護ってあげてたのよ」

どおりでいないわけだ。その後アルフトユーノ、ザフィーラも来た。

葵「で、話を戻すが、倒す方法は？」

ク「あ、あぁ。とりあえず。僕らは何らかの方法であれを止めなければならない。停止のプランは現在三つある。

一つ。きわめて強力な凍結魔法で停止させる。

二つ。軌道上に待機している艦船アースラの魔導砲アルカンシェルで消滅させる。
三つ。葵の魔法、とくに時の庭園時に見せたあの魔法で消滅させる。
これ以外に良い手は無いか？　闇の書の主と葵、そして守護騎士たちに聞きたい」

これ以上に良い手か・・・

すると、シャマルが、

シャ「えぇっと、最初のは多分難しいと思います。主のいない防衛プログラム、今はただの抜け殻みたいですけどそれでも魔力の塊であることには変わらないですし」

シ「凍結されてもコアがある限り再生機能が止まらん」

パターン1はシグナムとシャマルによって取り下げられた。

ヴィ「アルカンシェルもぜっったいダメ！！」

そういって手でバツを作り、却下した。

ヴィ「こんなところでアルカンシェル撃っちゃったらはやての家までぶっ飛んじゃうじゃんか！！」

ここからはやての家はかなり距離があるように見えるがそんなにすごいのか？

ヴェ《我が皇。アルカンシェルの威力は発動起点を中心に百数十キロ範囲の空間を歪曲させながら反応消滅を起こさせる魔導砲ですか

ら》

うわ～お。そりゃすごい。

な「あの！わたしもそれ反対！」

フェ「同じく、私も絶対反対！」

確かにそんなことをすれば、例えあれを倒しても、かなりの大規模の被害が生まれるな。

ク「僕も艦長も使いたくないよ。でも、あれの暴走が本格的に始まったら被害はそれよりもはるかに大きくなる」

ユ「暴走が始まると触れた物を浸食して無限に広がっていくから・・・」

な・フェ「「・・・」」

二人の説明になのはとフェイトが沈黙する。

エイ『はーい、みんな！　暴走臨界点まで後１５分きったよ！　会議の結論はお早めに！！』

ク「と、なると葵のあれか」

葵「使ってもいいが、ＡＢＰ（オーバーレヴォクンタズム）を使うと今言った三つの中の最悪の現象になるぞ？」

は「ど、どんな感じになるん？」

葵「まずここからあれに向かって撃つと、まずここから半径３００キロ圏内にクレータができる」

全員「・・・・は？」

葵「で、その次に衝撃波が大体地球をぐるりと一周から五周します」

全員「・・・・・え？」

葵「で、その衝撃は大体地殻まで行くから、結果はあら不思議。地球がここを中心に真っ二つになります」

全員「・・・・・」

葵「それでもいいなら撃つよ？」

ク「予定は変更しよう。というか君はそれを前世では何回使ったんだ！？」

クロノが顔を真っ青にしながら聞かなかったことにした。まぁ正しい判断だ。

葵「数百回以上。まぁ、全てが魔力でコーティングされていたから被害も大体なのはのＳＬＢを撃ってビルぶっ壊した程度になるんだがな」

それでも全員が口を開けっぱなしだ。ヴェルやリインフォースですら驚いているのが目に見える。

ク「もう少し穏便な手はないのか？」

シ「済まない。あまり役に立てそうにない」

ザ「暴走に立ち会った経験は我らにもほとんどないのだ」

シャ「でも、なんとか止めないと・・・はやてちゃんのお家が無くなっちゃうの嫌ですし！」

ク「いや、そういう問題の話じゃないんだが。・・・戦闘地点をもっと沖合にできれば」

シ「海でも空間歪曲の被害は出る」

ク「う～ん」

皆で打開策を考えていると、

アル「あ～、ゴチャゴチャ鬱陶しいな！　みんなでズバッとぶっ倒しちゃうわけにはいかないの！？」

・・・ブッ倒す・・・ん？　あれをあそこに移動させて、あそこであれを撃てば・・・

ク「あ、アルフ・・・」

ユ「これはそんな単純な話じゃ「それだ！！」え？」

するとみんながこちらを向いて。

葵「アルフでかした！」

―ガバッ

アルフに抱きつき頭をなでた。

アル「え、えぇ！？　あ、葵／／／」

そうだ。場所がないならぶっ飛ばせばいいんだ！

葵「エイミィ！　アルカンシェルはどこでも発射可能なのか！？」

エイ『え？　う、うん撃てるよ？　あっそう言うことか！　もちろん管理局の技術力舐めてもらっちゃ困るな！　撃てますよ～宇宙だろうがどこだろうが！』

葵「ならいけるか・・・賭けの部分が大きいがないよりかはましか」

な「え？どういうこと？」

葵「ではここでみんなに問題だ。地球上でアルカンシェルを撃てば地上に被害が出る。ではそれを回避するためには？　さっきの話で分かる奴は分かっているはずだ」

ク「・・・おい、まさか！？」

フェ「ここで撃つと被害が出る」

な「でもさっきの話だとアルカンシェルはどこでも撃てる。例え宇宙・・・そうか！」

は「宇宙空間なら被害は全く出ない！」

葵「正解だ」

ＳＩＤＥアリサ・すずか

二人は海岸沿いの道で海の向こうを見ていた。

ア「・・・光、収まった？」

す「うん、海にまだ黒いのがあるけど…」

ア「一体何なの？　まさかこんなのがこのままずっと続いたりしないよね？」

す「何となくだけど、大丈夫な気がするの」

ア「ん？」

す「きっと戦ってくれてるから」

ア「なのはとフェイトが？」

す「うん。それと一緒にいた人達も。それに二人を守った白色の人。葵君のような気がしたの」

ア「・・・すずかに真顔で言われると、なんかそんな気がするから

怖い。それに葵だって言う確率もあるかもね」

す「そうだね・・・」

ア「まぁ、それにしてもよ。ああもう！　訳分かんない！！！　楽しいクリスマスイヴに一体どういう事態なの！？　夢なら覚めて～～一刻も早く覚めてよ～～～！！！」

す「ア、アリサちゃん　落ち着いて！」

ＳＩＤＥ　ｏｕｔ

ＳＩＤＥアースラ

リン「なんとも、まぁ。相変わらずすごいと言うか・・・」

エイ「計算上実現可能ってとこがまた怖いですね・・・」

そう言いつつも手を動かすエイミィ

エイ「クロノ君！　こっちのスタンバイは準備はＯＫ。暴走臨界点まであと１０分！

いよいよ最終決戦までのカウントダウンが開始された。

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

ク「実に個人の能力だよりでギャンブル性の高いプランだが・・・まぁ、やってみる価値はある」

は「あの化け物のバリアは魔力と物理の5層式。まずはそれを破る」

5か、多いな。

だが、このときは思わなかった。バリアが六枚もある理由があいつにあると言うことを。そう。あの忌まわしい鳴き声を聞くまでは。

フェ「それで、バリアを貫いたら本体にむけて私達の一斉攻撃でコアを露出！」

な「そしたらユーノ君達の強制転移魔法でアースラの前に転送！」

リン『後は、アルカンシェルで蒸発――と』

エイ『うまくいけばこれがベストですね』

葵「さて、若者の力を見せていただくとしよう」

私は見学、というか支援に回ろうとしたが、

ク「葵。君に指揮権をゆだねたい」

葵「・・・正気か？　こういうときはお前の方がいいと私は思うが？」

ク「こう言っては何だが君は前世で大戦を生き抜いた。それもただ

生き抜いただけじゃない。大軍を率いて勝利したんじゃないのか？
　ユーラシア騎士連合盟主？」

は・シ・ヴィ・シャ「「「「そうなのか（んか）（ですか）！？」」」」

な「うん。たしか、その騎士団の盟主騎士団の一番偉い人！」

フェ「確か蒼穹の騎士団騎士団長だったはず」

葵「よく覚えていたな」

ク「だから頼む。ここは経験の差だ」

葵「・・・分かった。その誇りある仕事引きうけよう。これを終わりの戦いにしよう。闇を払い光りを我等の手に」

全員「おぉーーー！」

エイ『暴走開始まであと二分！』

あたり一面を闇に染めるか。でも、これで終わりにしよう。

は「あ、みんな」

全員「？」

は「シャマル！」

シャ「はい。全員の治療ですね。クラールヴィント、本領発揮よ」

クラ《Ｊａ》

シャ「静かなる風よ、癒しの恵みを運んで」

―きぃぃぃぃん

優しい風が吹くと同時に、キズがふさがっていく。

な「うわぁ・・・」

フェ「えぇ・・・・」

葵「ほぉ。これは・・・」

腕などを見ると完全にキズがふさがっていた。

シ「さすがだなシャマル」

ヴィ「うんうん。さすが回復要員だな！」

シャ「まぁね♪　湖の騎士シャマルと風のリング、クラールヴィント。癒しと補助が本領です」

フェ「すごいです！」

な「ありがとうございます。シャマルさん！」

葵「助かった。シャマル。ありがとな」

しかし防御壁が5枚か。仕方がない。

葵「ヴェル。サポートしつつこちらも参戦する」

ヴェ《我が皇の意のままに》

葵「作戦はアルフ、ザフィーラ、ユーノ、孤狐はサポート班に」

アル「あぁ任せな！　私らがあのうざいバリケードをうまく止めてやるよ！」

孤「任せといて！」

ユ「うん」

ザ「あぁ」

戦いの始まりの合図を告げるようにその触手たちの動きが活発になってきた。

ク「始まる」

ーズバァアアン！！　ズバァアアン！！

あちこちに闇の柱が宙に向かってそびえたった。

は「夜天の魔導書、呪われた闇の書と呼ばせたプログラム・・・闇の書の闇」

葵「だが、今その闇は光に進んでいる。あいつは――」

そういって闇の球体の方へ視線を受けると、球体が膨れ上がり、

―ギィィィィ　バァァアアン！

はじけるとそこからは化け物という言葉が似合いそうな生物。キメラのように色々な生物を合体させたようなものが出てきた。そう、あれは・・・

――アァア　アアァァァァァアアア

葵「――ただの化け物だ。生きている理由も意味もない。破壊の限りを尽くすだけの化け物」

は「えらいズバッといいきったな」

葵「ん？　言わなかったか？　私は助ける価値のある者は助けるが、殺すしか価値のないものは迷いなく殺す。それが私だ。まぁ、ここにいるメンバーは助けるだけでなく、護る価値もあるがな」

女性陣「・・・／／／」

ク「そう言うキザなせりふをよく言えるな」

ユ「それが葵だよ」

ザ「それだけ皆のことを思っていると言うことだろう」

さぁ、始めようか。最後の戦いを！

第三十話（後書き）

ということで防衛プログラムを加えてみました！
まぁ見た目はまんまリインフォース（アイン）です。瞳の色が赤ではなく青ですが。

第三一話

第三一話

闇の書の暴走が始まり、その暴走体が出現した。

アル「チェーンバインド！」

ユ「ストラグルバインド！」

孤「切り裂け炎狐刃斬（えんこはざん）！」

―ギィィィ　ジャギィィン！

アルフとユーノはバインドで魔法生物の足（触手みたいな）物を捕え切断し、さらに孤狐の焔の刃が追い討ちをかけるように触手を切り裂いて行く。

ザ「縛れ！　鋼の軛！！　デェェェヤ！」

―ゴゴゴッ！

そして、ザフィーラの魔法で残りを掃討していく。

―アァァァァァ！

その攻撃にまるで悲鳴のような声で、暴走体が声を上げる。

上空ではなのはとヴィータが攻撃のスタンバイに入る。

ヴィ「ちゃんと合わせろよ。高町なのは！」

な「ヴィータちゃんもね！」

ヴィータはグラーフアイゼンを構え、

ヴィ「鉄槌の騎士ヴィータと黒鉄の伯爵グラーフアイゼン！」

―ドキュゥン　ガシュゥン

グ《Ｇｉｇａｎｔ　ｆｏｒｍ》

グラーフアイゼンは鉄槌から巨大ハンマーに変わり、

ヴィ「轟天爆砕！　ギガントクラーーーケン！」

―ズドォォン

そのままハンマーは暴走体のシールドに当たり、そして、

―ギギギッ・・・バリィィン！

バリアが砕け散った。後四枚！

な「高町なのはとレイジングハートエクセリオン行きます！！」

レ《Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

―ガシュゥンガシュゥンガシュゥン

な「エクセリオン・バスタァァァーーーー！」

レ《Ｂａｒｒｅｌ　ｓｈｏｔ》

不可視のバインドで迫りくる触手を払いのけ、

な「ブレイク・・・」

―キィィィン

魔力を収束し、

―ドォン

四つの砲撃がまずバリアに当たる、さらに、

な「シューーート！！」

その間を通るように巨大な砲撃が放たれる。

―ドォォォォン！！！　バリィィン

砲撃でバリアが砕ける。残り三枚！

―アァァァあァぁ

シャ「次、シグナムとテスタロッサちゃん！」

シャマルが指示を出すと、背後に構えていたシグナムが戦闘態勢に入った。

シ「剣の騎士シグナムが魂。炎の魔剣レヴァンティン！　刃と連結刃に続くもう一つ姿」

―ガシュゥン

レヴァンティンに鞘を当てる。レヴァンティンは一つ薬莢を出すと、

レヴァ《Ｂｏｇｅｎ　ｆｏｒｍ》

レヴァンティンは弓の姿に変わった。

そして、シグナムは弓を引くと矢が現れ、弓からカードリッジが二発ロードされた。

シ「駆けよ！　隼！！」

レヴァ《Ｓｔｕｒｍ　ｆａｌｋｅｎ》

ーキィィィィン　ズバシュゥゥゥン！

魔力の込められた矢は一直線に暴走体に向かい放たれ、

―ズガァァァン！

爆発と共にバリアが破壊された。残り二枚。

フェ「フェイト・テスタロッサ、バルディッシュ・ザンバー、行きます！！！」

―ブゥオン　ガシュンガシュン

黄色い魔法陣が展開され、

フェ「ハァッ！」

大剣を一振りすると、衝撃波が周りの触手をなぎ払い、暴走体に命中する。

フェイトはバルディッシュを天高く抱えると、そこに雷が宿り、

フェ「撃ち抜け雷神！」

バ《Ｊｅｔ　ｚａｍｂｅｒ》

その黄色い刃が暴走体のバリアを貫通し、左部分ごと切り裂いた。

―アァァアアァァ！！

暴走体も応戦に出ようとしたのか、その足元に触手が生えて、そこから砲撃を放とうとしていた。

ザ「盾の守護獣ザフィーラ！　砲撃なんぞ撃たせん！！」

ザフィーラのはもうによって砲撃を放とうとしていた物はことごとく破壊された。

シャ「葵君！　お願い！」

葵「黄泉路への案内人。神無月葵と」

ヴェ《幸福を告げる者、ヴェル！》

杖を天高く掲げ、白い魔力がどんどん収束されていく。

葵「終焉を告げる鐘・・・」

―キィィィン

葵「ヴォルガレット・ブレイカァアアアアア！！！！」

白い砲撃は一直線に暴走体に向かい、直撃。

―ズガアォアアアァアン！

葵「・・・やりすぎたか？」

バリアと右部分の一部を破壊した。

シャ「はやてちゃん！」

隣にいるはやてに、シャマルが指示を出す。

葵「はやてならできる。安心しろ。そばに私がいる」

は「うん！」

はやては力強くうなずき、夜天の書を開き、

は「彼方より来たれ、やどり木の枝　銀月の槍となりて撃ち貫け！」

―キィィン

暴走体の目の前にはやてが展開した魔法陣が現れ、

は「「石化の槍！　ミストルティン！！」

光は一斉に放たれ、暴走体に突き刺さる。

―ガギガギガギガギ

暴走体はそのまま石化し、あの女性みたいなものも石化し崩れ去ると、

―ズバァン・・・グチュ・・ガガ・・・・グルガカッカッカカ

葵「!?　今の声・・・まさか・・」

今一瞬あいつの声が・・・いや、そんなバカな・・・気のせいだろ。

暴走体はそのまま再生をしようとしたが、もはや何の姿を取りたいのか分からない状態に陥っていた。

アル「うわっ！　なぁ・・・」

シャ「なんだか・・すごいことに・・・」

完璧なキメラだな。

エ『やっぱり並みの攻撃じゃ通じない！？　ダメージを入れそがばから再生されちゃう！』

ク「だが、攻撃は通っている！　プラン変更はなしだ！　行くぞ、デュランダル！！」

デュ《ＯＫ　Ｂｏｓｓ》

ク「悠久なる凍土、凍てつく棺なのかにて、永遠に眠りを与えよ」

―キィイン

クロノから放たれた冷気は海すらをも凍らせ、暴走体の周りの海も凍らせた。

ク「凍てつけ！！」

デュ《ＯＫ　Ｂｏｓｓ》

―パキパキパキ

一気に暴走体を凍らせた。だが、

―バリィーン

一瞬で暴走体は氷を破壊し再生を開始した。

葵「仕上げにかかるぞ。なのは、フェイト、はやて！」

な「うん！」

フェ「うんっ！」

は「行くで！」

なのはレイジングハートを構え、

レ《Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ》

な「全力全開スターライトォォ・・・」

―キィィィィィン

フェ「雷光一線！　プラズマザンバァァ・・・」

―ゴォォン　バヂバヂバヂ

―キヒュィィィン

は「ごめんな・・・おやすみな・・・くっ・・。響け！　世界の終焉の笛！　ラグナロク！」

―キィィン！　バチィチィ

な・フェ・は「「「ブレイカァァアアアア！！！！！」」」

―ズガァアアアアン！！！！

三人の砲撃が暴走体に向け放たれる。

葵「・・・あれだけで十分じゃないか？」

エ《念には念です！》

ル《油断は禁物だ》

ヴェ《二人の言うとおりです》

そうか、なら、

葵「人の業に神は怒った。これは神の怒りなり」

暴走体に黒い球体が浮かび上がり、

葵「時来たり・・・神の裁きの鉄槌！！！」

暴走体の頭上から黒い砲撃が一気に放たれた。

―ズガァアアアアン！！！！

四人の砲撃によってあたり一面に爆風と爆煙が広がる。

シャ「本体コア露出・・・」

シャマルは旅の鏡を使い、暴走コアの捕獲に取り掛かっていた。

そしてときは来た。

シャ「・・・捕まえた！」

ユ「長距離転送！」

アル「目標軌道上！」

二人の魔法陣がコアを囲み、

シャ・アル・ユ「「「転送！！」」」

―ゴゴゴゴゴッ　シュィィン！

そして、暴走体は空に向かって飛び出していった。

ＳＩＤＥアースラ

局員１「コアの転送！　きます！　転送されながら生体部品を修復中！　すごい速さです！」

エイ「アルカンシェル！　バレル展開！！」

―ギュゥゥゥイィィィィン

リン「ファイアリングロックシステムオープン」

―キュゥイン　キュオン

リン「命中確認後、反応前に安全距離に退避します！　準備を！」

局員「「了解！」」

リンディ提督が鍵を刺すと、ロックシステムが赤色に変わった。

そして、暴走体がアルカンシェルの射線上に出現すると同時に、

リン「アルカンシェル発射！」

―カチっ

―ズゴォォォォォン！　バチバチバチバチ！

アルカンシェルは暴走体に命中した。

―・・・カッカッカッカ

―地上

葵「やはり。エクス、ルミル。まだ終わらないようだ。作戦を対【異端児】戦用に」

エ・ル《《え！？》》

―軌道上

軌道上のアースラでは目標の完全消滅を確認していた。

エイ「効果空間内の物体・・完全消滅！　再正反応ありません！！」

リン「ふぅ。準警戒体制を維持、もうしばらく反応区域を観測します」

エイ「了解！・・・ふぅ」

エイミィは椅子にもたり掛かり安堵した

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

エイ『というわけで現場のみんな！　お疲れさまでした～！　状況無事に終わりました～！　この後残骸の回収とか、市街地の修復とか、色々あるんだけどみんなはアースラに戻って一休みしていって！』

な「あっ、アリサちゃんとすずかちゃんは？」

エイ『あぁ、被害がひどい場所以外は結界を解除しているから、元いた場所に戻っておいてもらったよ。大丈夫！』

葵「・・・・そうか。そいつは好都合だ」

な「葵君？」

シ「どうしたんだ神無月？　ずっと空を見上げているが」

葵「・・・第二ラウンドの幕開けだ・・・」

エイ『え？』

――グルルルルカッカッカッ

全員「！？」

さぁ、始めようか。第二ラウンドを。

第三二話

第三二話

ＳＩＤＥアースラ

リン「エイミィ！　今の鳴き声は！？」

エイ「わ、分かりません・・・え？　せ、生命反応あり！？　か、拡大します！」

そこに映し出されたのは【不の者】レベル１に近いものだったが目が四つ、赤い瞳をしていた。

リン「か、神無月君！？　これは！？」

葵『・・・異端児。研究時における子供の肉体を再利用した化け物。魔力、肉体、力、全てにおいて人を凌駕する魔生物』

エイ「え！？　あ、葵君！　そっちに向け異端児が降下！　およそ８分後にそちらに現れるよ！！」

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

異端児か。どこまでも厄介な物を作るな、あいつは！？

葵「ヴェル、ユニゾンアウト」

　すると、ヴェルをいったん切り離し、全員の方を向き、

葵「ここからは私一人でやる。お前らはアースラに戻れ」

は「そ、そやけ・・・ど・・・」

葵「はやて!?」

シャ「極度の疲労と、魔力の酷使が原因ね・・・でも、この状態ではもう戦うことはできないわ」

葵「・・・きっかけは十分だな。もう一度言う。全員アースラに戻れ」

エイ『え・・・転移？　あ、葵君!?　あの異端児とか言うやつが転移した!?』

―シュウン

葵「あぁ、こちらにおいでなすった」

―痛いイタイイタイイタイイタイ

シ「なっ・・・・」

ヴィ「・・・こども!?」

シャ「・・・あた・・まが・・」

フェ「なに、この声・・・」

な「直接あたまに・・・・・」

葵「・・・エクス、ルミル。青騎士」

エ・ル《・・・イエスマイマスター》

剣を構えると、

葵「・・・殺すか殺されるか。いざ――！？」

すると異端児の背中にある翼もどきがいきなり伸びて、

―グチャッザシュ

私の左腕を斬り飛ばした。

な「あ、葵君！？」

葵「チッ」

飛ばした左腕を右手でキャッチし、

葵「我が腕は槍、物質変換！」

すると、左腕だったものは赤い槍に変わり、

葵「ブリュフェング！」

その槍を、異端児に向けて投擲する、

―グオォォン！・・・ガチュ

槍は異端児の右肩に貫通した。

―ギャアッアァァアアアアァァァァアアア

葵「再構築開始」

すると、左腕はまるで一部パーツを回復するかのように再生された。

シ「・・・お、お前は一体」

葵「・・・時を司どる神の身業。タイムストップ！」

すると、異端児はまるでその場の身時が止まったかのようにピタッと止まった。

葵「・・・エクス、ルミル。魔力は何パーセント消費した？」

エ《ブリュフェングにより１２％》

ル《さらに、再構築により４２％消費。エクスルミオン、並びにＡＢＰを放つにはきついものがあります》

再構築は体の一部をそのまま再生する代わりに魔力消費が悪いか

らな。

葵「さて、どうしたものか・・・・」

一人で悩んでいると、まだ退避していなかった連中から。

シ「なぁ、神無月。契約を使うわけにはいかないのか？」

葵「・・・出来ればそれを避けたい。あの声を聞いただろ？」

ヴィ「あ、あぁ」

ク「あれはいったい何なんだ？」

葵「異端児。私の過去話はしただろ。まぁ、ヴィータ達は聞いたと言う方がいいか」

な「うん」

葵「その実験場で死んだ子供の身体を利用して兵器として再生されたのがあれだ。魂も成仏されていない状態でな。だからあの声はあの魂の叫びだ」

全員「！？」

葵「成仏させようにもほぼ不可能な状態になっている。だが、止めないと永遠の殺りくを繰り返す。なぜあれが暴走体から出てきたのは謎だがな」

とりあえずどうするか。

シ「だが、今のお前ではどうしようもないのだろ？」

葵「悔しいがな」

ヴィ「契約を使ったらどうなんだ？」

葵「まぁ、勝てる。あいつを倒すには核、お前らで言うリンカーコアにあたる部分を破壊すればいいだけだからな」

シ「なら、やろう！」

・・・シグナムさん。えらい輝いていませんか目が？　まぁ、こっちとしてはありがたいけど。

ヴィ「シグナムよりあたしの方が良いにきまってる！　あの時の砲撃がいい証拠だ！」

シャ「私は・・・戦闘向きじゃないから・・・」

なんだ、このカオス。今、確かすっごいピンチなのに・・・

葵「まぁ、なんだ。とりあえずお前らも戦うと言うことでいいのか？」

シ「あぁ無論だ！」

ヴィ「当たり前だ！」

葵「・・・なら、シグナム。頼めるか？」

シ「よし！」

ヴィ「な、なんでだよ！？」

シグナムはガッツポーズをひそかにとり、ヴィータは猛抗議をしている。

葵「戦略的なことでだな。一対複数戦になったらヴィータに頼むから。ね？」

ヴィータの視線までしゃがみ、微笑んだ。

ヴィ「うっ／／／／　わかった」

葵「良い子だ。ありがとな」

そういってヴィータの頭をなでる。

葵「シャマルははやてを連れて戻ってくれ」

シャ「はい！」

では行こうか。

葵「覚悟はいいかシグナム。はっきり言ってあいつとの戦いは暴走体と戦うのとは比べ物にならないぞ？」

シ「ふっ、むしろ望むところだ！」

そ、そう・・・。そうだった、シグナムはバトルジャンキーだったな。

葵「で、では・・・／／／」

そういってシグナムに抱きつき、右手と左手を重ねる。

全員（ヴィータ・孤狐・ザフィーラ除く）「あぁあああ――――！！！」

葵「我、汝に問う。何故力を欲す」

シ「主はやてのため、皆を守るため」

葵「それにウソ偽りはないか」

シ「無い」

葵「汝の意志しかと受け止めた。契約執行。執行者神無月葵、契約者シグナム」

―ブヲォォォ

あたり一面を炎がまとい、そこから出てきたのは葵が管理下に置いた時と同じ服装をしたシグナムが現れた。

葵《レヴァンティン、強化。炎翼展開》

―ゴォォォ

シグナムの背中に炎で形成された翼、それはまるで朱雀の翼のようなものが現れた。　レヴァンティンも【絶対的勝利を約束された剣】に似ている物になった。

葵《シグナムは強化だ。その名の通り力、防御、魔力全てにおいて強化されている。私は援護攻撃ぐらいしかすることがないがな》

シ「だが、ないよりありがたい（なるほど。ヴィータの感じていのはこう言ったものなのか。確かに暖かい）」

フェ「え？　あれ？　葵は！？」

な「葵君はどこに！？」

リ「どこにもいない！？」

葵《あーあー。聞こえるか？》

全員「うん（あぁ）！」

葵《リインフォース、ヴェル。私は簡単に言うとお前らみたいに現在シグナムと融合しているもんだ》

リ・ヴェ「「え！？」」

葵《詳しい説明は後だ。シグナム。戦闘態勢に入れ。もうじき動くぞ》

シ「あぁ！！」

それを合図に、異端児は動き出した。

―グルカッカッカッ

ＳＩＤＥシグナム

シ「はぁ！」

剣を一振りした。そうたったそれだけにもかかわらず。

―ガシュ

―グギャァァァアア

全員「は・・・・・」

葵《・・・これは予想外》

一振りの風圧だけで異端児の左腕が吹っ飛んだ。

―アァァァアアアアア

異端児も怒り狂ったのだろう。こちらに向け突っ込んでくるが、

葵《させると思うか？　一本の矢は十本の矢に、十本の矢は百本の矢に！　その者を穿て！　聖炎の矢！》

私の背中にミッドでもベルカでもないみたことともない魔法陣が浮

かび、

葵《撃ぇえええええ！！！》

すると、無数の焔の矢が異端児めがけ放たれる。

確かにこれは戦いやすい。相手の間合いに入れさせず、こちらに有利な戦況に持っていく。

―アァアアアアアアア！！！

シ「葵ばかりには任せてはいられない！　紫電・・・一閃！！」

迫りくる先ほどの黒い腕みたいなものを完全にたたき斬り、

シ「ハァアアアア！！！」

剣を振り下ろす。だが、

―ガキィン

シ「なっ！？」

腕にふさがれ、背中から、再び腕がこちらにめがけ放たれる。

葵《聖なる炎の盾！》

今度もまた知らない魔法陣によってその腕は遮られた。それだけでなく触れた部分から燃え溶かされて行く。

ＳＩＤＥＯｕｔ

ヴィ「あの戦い、すごすぎやしないか？」

な「う、うん・・・・」

そう、さっきからシグナム（葵ｉｎ　Ｖｅｒ．）と異端児はなのは達から離れた場所で戦っている。

フェ「速すぎて何がどうなっているのか分からない・・・」

エイ『クロノ君！　海上で戦ってるのって葵君!?』

ク「エイミィ？　いや、シグナムと葵がユニゾンしたようなものと異端児だが。どうした？」

エイ『なにそれ!?　いや、さっき計測器で測ったんだけど・・・Ｅｘってでまして・・・』

ク「はぁ!?」

ヴィ「そういやぁ、あたしも葵と合体した時の魔法の威力は高町なのはのＳＬＢの砲撃の二倍以上はあるって葵が言ってたっけ」

全員「・・・・」

ク「でたらめにもほどがあるだろ・・・・」

SIDEシグナム

このままでは埒が明かん。

葵《シグナム。今から唱える呪文を教える。それで蹴りをつけろ》

シ「あぁ！」

すると、頭の中にその呪文が流れ込んできた。

シ「Unsere ewige Flamme Lampe（我が炎は永遠の灯）

Das Licht kann ohne sie verloren（その光は消えうること無し）

Nein, es war nie mein Schwert zerbrochen（我が剣は決して折れること無し）

Da? diese m?chtigen（これすなわち無敵なり）」

すると、レヴェんティンの刀身は真っ赤に燃え始め、シグナムが最後の詠唱を口にする。

シ「Ｆｉｒｅ　Ｋａｍｐｆｇｅｉｓｔ　Ｓｃｈｗｅｒｔ　（闘気炎斬）」

彼女が振り下ろした炎に包まれた剣は暴走体の残骸を一気に灰と化した。その威力はすさまじく、海があった場所は完全に蒸発していた。そして海があったであろう場所は真っ赤に燃えた地面のみだった。

葵《エイミィ。異端児は？》

エ『・・・・え？　あ、はい！　完全に・・・完全に消失・・・』

リン『消失！？』

・・・これはやりすぎだろ。焼けた場所に再び海水が満たされたが、そこからは明らかいに尋常ではない量の水蒸気が上がっていた。

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

さて、では戻るとしようか。

葵《契約解除》

そういって私はシグナムとの契約を終了し、元の姿に戻る。

葵「おぉ。残骸の始末までしたか。やりすぎたか？」

シ「・・・おそらくな。ヴィータの時も思ったがこれは力の調整が

難しいのか？」

葵「いや。あれぐらいでは私がいた地球ではなんともないが？」

ＡＢＰを数百発撃っても実際ビルは壊れるが地球規模の被害は出ていない。

だが、これでようやく終わったのか？　それとも、始まりの序章戦でしかないのか？

この疑問はすぐに明かされることはなかった。あの真実を知るまでは。

第三三話

第三三話

場所は変わり現在はアースラの病室。

ベッドの上にはいまだに眠っているはやてがいる。そしてその周りにははやてを囲むようにヴォルケンリッターとリーンフォースがいた。

ＳＩＤＥヴォルケンズ・リインフォース

リ「やはり、破損が致命的な部分にまで至っている。防御プログラムは葵を皇としているため問題はない・・・だが、ゆがめられた基礎構造はそのままだ。私は、夜天の魔導書本体は遠からず新たな防御プログラムを生成し、また暴走を始めるだろう」

シ「やはりか・・・」

おそらくこのことを予想していたのだろう。シグナムがそう答えた。

シャ「修復はできないの？」

わずかな希望をリインフォースに尋ねるが、答えはむなしいものだった。

リ「無理だ。管制プログラムである私本体からも夜天の書本来の姿は消されてしまっている」

ザ「元の姿が分からなければ戻しようないと言うわけか・・・」

リ「そう言うことだ」

シグナムは悲しそうな眼をして、はやてを見て、

シ「主はやては大丈夫なのか？」

リ「なにも問題はない。私からの浸食は止まっているし、リンカーコアも正常稼働している。不自由な足も時を置けば自然治癒するだろう」

シャ「そう。じゃあそれならもう良しとしましょうか」

シ「あぁ、心残りは・・・ないな」

シグナムも、シャマルもやはり気になることはある。だがはやてが助かるのならと安堵していた。

ヴィ「防御プログラムがない今、夜天の魔導書を破壊するのは簡単だ。破壊しちゃえば、暴走することも二度とない・・・かわりにあたしらも消滅しちゃうけど」

夜天の魔導書を破壊すると言うことはすなわちその一部である彼女たちも消滅すると言うことだ。そしてもう二度とはやてに会うこともない。

シ「・・・すまないな、ヴィータ」

ヴィ「なんで謝まんだよ！　いいよ別に・・・こうなる可能性があったことぐらい・・・みんな・・・知ってたじゃんか」

？？？「いや、私は残念ながら知らなかったんだが？」

全員「！？」

その場にいたのは葵と後ろからヴェルがいた。

葵「さて、同じ家族に内緒で話すとはどういうことだ？　それにようやく家族になれたのに皆消えるだと？」

リ「違う。お前たちは残る。逝くのは私一人だ」

―ガスッ

葵は容赦なくリインフォースの頭にチョップを叩きこんだ。

リ「っ～～～～！？」

葵「そう言うことを聞いているんじゃない。なぜ皆が助かる方向を選ばない。この駄々っ子」

リ「え？」

葵「二時間、時間をくれ。その間に助ける方法を探す。その間に勝手なことをするなよ？」

そういって彼は鍵を取り出しそこから出現した扉に入ってヴェルを連れてどこかへ行ってしまった。

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

場所は心の世界　塔内部

葵「さて、探すとしましょうか」

エ「はい！」

ル「急ごう。時間がない！」

孤「頑張りますか！」

ヴェ「こ、これは一体・・・・」

ヴェルに簡単に説明をし、作業に取り掛かる。

いやだって、時間ないし。

葵「夜天の魔導書。闇の書・・・検索してもヒット数が大きすぎる。それに、やはり管理局が一枚絡んでいるな」

調べて行くうちにやはり浮き彫りになる管理局の腐敗。

葵「人はいつもこうだ。欲望のためなら他の犠牲をいとわない。命

さえも」

そうやって調べて行くがやはり手段がない。

葵「やはり確立されているのはあれか・・・・」

エ「みたいですね」

ル「ですがあれが一番生存率が高い」

孤「ん～。本当は嫌なんだけどな～」

ヴェ「あれとは？」

葵「・・・契約」

ヴェ「え！？」

葵「はぁ、あとはこれか」

そう言って取り出されたのは一冊の魔導書。だが、題名も何も書かれていない。

葵「だが、あまりにも賭けの部分が大きすぎる」

エ「！？　マスター！？」

葵「どうした？」

エ「アースラからリインフォースさんたちの反応が消えています！」

葵「はぁ！？」

時刻は大体一日が終わっているぐらい。つまり外では一時間しかたっていない。

葵「急いで出るぞ！」

エ・ル・ヴェ・孤「「「はい！」」」

急いで戻ると、アースラの病室にははやてもいなかった。

葵「ヴェル！　あいつらがどこにいるかわかるか！？」

ヴェ「お待ちください・・・・場所は、海鳴市の・・・丘です」

葵「詳しい座標を頼む」

ヴェ「はい」

目的地確認。場所認識・・・・移動！

―シュン

その場所にたどり着くと、はやてたちがいた。

どうやらはやてが必死にリインフォースに何か訴えている。

は「あかん！やめてリインフォース止めて！！　破壊なんかせんでええ！！　私がちゃんと抑える！！　大丈夫やこんなんせんでええ！！」

リ「主はやて、良いのですよ」

は「いいことない！！　いいことなんか、何もあらへん！！」

リ「随分と永い時を生きてきましたが、最期の最後で私は貴女に綺麗な名前と心を頂きました・・・騎士達も貴女の傍に居ます。何も心配はありません」

は「心配とかそんな・・・」

リ「ですから、私は笑って逝けます」

は「・・・ッ話し聞かん子はキライや！　マスターは私や！話し聞いて！！　私がきっと何とかする！　暴走なんかさせへんって約束したやんか！！」

だんだん言っていることがめちゃくちゃになってきたな。

リ「・・・その約束は、もう立派に守っていただきました」

そろそろ出るか。こいつにもだんだん腹が立ってきたしな。私との約束も守ってないし・・・

は「リインフォース！！」

リ「主の危険を払い、主を護るのが魔導の器の勤め「なら、主の願いを叶えるのもお前の役目じゃないのか？」え？」

―ガスッ

腹が立ったので持ってきた魔導書で駄々っ子で甘えん坊、略して駄々甘っ子に本でチョップしてやった。

ＳＩＤＥリインフォース

？？？「なら、主の願いを叶えるのもお前の役目じゃないのか？」

リ「え？」

―ガスッ

リ「っ～～～～～！？」

いきなり頭に猛烈な痛みが走り、にらみながら後ろを振り返ると、そこにいたのは葵だった。

は「あ、葵君！？」

主もほかの魔導士たちや騎士達もみな彼が急に表れたことによって驚いていたが、何より私が一番驚いている。なにせ、いきなり脳

天に激痛が走ったのだ。

葵「はぁ、なぜここにいる魔法使いは人の言うことを聞かない連中ばかりなんだ？　言ったよな私は。二時間待てと」

　すると、彼は魔法陣を壊して、新たな魔法陣を展開させる。

？？？「管制人格。いえ、今はリインフォースでしたね」

リ「防衛・・・いや、ヴェル・・・だったか？」

ヴェ「えぇ。貴方はよっぽどのバカですか？　我が皇が貴方のために助ける方法を見つけだして来たのにもかかわらず死のうだなんて」

　・・・今何といった？

シ「まて、今助ける方法を見つけたといったか！？」

は「ほ、ほんまか？　ほんまか葵君！？」

葵「あぁ。方法は三つ。まず一つ目は他の二つを拒絶した場合の最終手段だ。まぁ、簡単に言うとさっきしようとした方法だ」

シャ「つまり二つとも失敗した場合にということですか？」

葵「まぁ、そんなところだ。二つ目。闇の書を放棄し新たな魔導書の管制人格になる。幸いなことに夜天の書に類似した書物は複数ある。だが、その場合何かを失う確率がある。ユニゾンなどならまだいいが、感情などになるとさすがにまずい」

リ「成功率は？」

葵「極めて低い。相性などもあるからな。そして最後が・・・契約・・・」

全員「は？」

葵「契約だ。パス契約／／／　私を助けるときシャマルがしただろ？　パス契約について調べて分かったことなんだが、あれは双方に通じることで確実にバグ除去につながる。あと先ほど闇の書について調べてみたがユニゾン機能の損傷が激しいためこちらでユニゾン機能は破壊させてもらう」

なぜ、そこまでして・・・

葵「・・・私はもう誰かを失うのは嫌なんだ。どんな結末でも誰かを失ってまで幸せにはなりたくない。なら、皆が望む形で終わりたい。それだけだ。お前はどうしたいんだ。リインフォース」

リ「え？」

葵「お前ははやての家族の一員だ。なら助ける価値はある。それにお前は生きているんだ」

私は、

リ「・・・き・・たい・・・・・」

葵「もっと強く言え！」

リ「私は生きたい！　主と共に明日を見たい！　未来を見たい！　幸福をつかみたい！」

葵「なら掴め。自分で、その可能性を」

あぁ、そうだ。そのために彼は可能性をくれたのだ。

すると、彼はそっと私を抱きしめてくれた。

葵「お前は今という時を生きているんだ。なら未来を見る権利も幸福になる権利もある。自ら断つな。自ら幸福を未来をつかめ。そのためなら私はお前の支えになる。お前を守る盾にもなる。だから安心しろ」

リ「あ・・・あぁ・・うわぁあああああああ」

彼は私が息を詰まらせないようにそっとなでて続けてくれた。

葵「辛かっただろう。もういいんだ。背負ってきた重荷をおろしてもいいんだ。お前はその分幸せになっていいんだ。そうだろ、祝福の風リインフォース」

リ「ひっぐ、うぅっ」

私がしばらく彼の胸で泣き、ある程度時間がたち、

葵「あ、あの、もう離してもらっても」

リ「・・・もう少しこのままで／／／」

葵「はぁ、ご自由に」

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

回りからの視線が痛い。なんで？　ヴェルもそうにらむな！

葵「ところでどうするんだ？　方法は」

リ「契約の方法は？」

葵「あれ？　知らないのか？」

リ「・・・ま、まさか、あれを！？」

葵「ま、まぁな。いや「ならそれで」即決するか！？」

すると、周りの視線がさらにすごいことに。ただ、知らないなのはとフェイト、アリシアはどうやるの？　みたいな顔をしている。

葵「・・・なら、準備はいいか？」

リ「（こく）」

うっ／／／一瞬かわいいと思ってしまった。

まぁ、それはおいとこう。

葵「では、行くぞ」

リ「は、はい／／／」

そして、

―チュッ・・・・レロッ

なぜ舌まで入れてきた!?

な・フェ・アリ「「あぁあああああああああ!!?」」

―・・ンチュッ

まだ続けるの!?

リ「ぷはぁっ」

―シュゥゥゥ

リ「痛っ・・・これが?」

葵「あ、あぁ。契約の証し。それで、バグはどうだ?」

リ「・・・ユニゾン機能は破壊。その他の部位は・・・・バグが除去されている!?」

は「なら!!」

リ「は、はい。主はやて。これからは貴方と共に！！」

は「り、リィンフォース！！」

二人は互いの感触を確認し合うようにおもいっきりだき、涙を流していた。

シ「ありがとう、神無月」

ヴィ「ありがとな葵！」

そういってヴィータは抱きついてきた。

シャ「何とお礼を言ったらいいか」

ザ「お前には助けてもらってばっかりだな」

葵「気にするな。私たちは家族だろ」

―ゴゴゴッ

あれ、背中にすごい殺気が、

壊れたブリキのおもちゃのようにギギギッと後ろを振り返ると、そこには

な「なにをしたのかな？　かな？」

フェ「葵、私もしたこと無いんだよ？」

アリ「どういうことなの？」

金色の死神二人に魔王が降臨しなさった！？　というかアリシア、いつの間にデバイスがある！？

アリ「作った！」

・・・心を読むな。そして魔法を放とうとするな！！

ク『・・・済まないがいいか？』

クロノ、タイミングがいいと思いたいがまた見ていたのか？

ク『えっと。済まない葵』

葵「・・・まぁいい。今回は助かったのだ。で、要件は？」

ク『君と話をしたいと言っている人がいる』

誰？

葵「私の管理局員での友人は君たちだけと思っているが？」

ク『ギル・グレアム提督だ』

なるほど。

葵「ここはなかなか冷える。それに君たちも聞きたいことがあるのだろう。そちらに向かいたいから転送を頼む」

ク『あぁ。分かった』

しばらくして転送が終了し、アースラに久々に来た。

アースラの食堂にクロノに皆が案内されるとそこにいたのは、

葵「久しいな、グレアム。プレシアにリニスも久しぶりだな」

プ「えぇ。久しぶりね」

リニ「はい。お元気そうでなによりです」

ギ「本当にあの時の子供が君か！？」

まぁ、最初に私のこの姿を見せればそうだ。現にアリアとロッテも再び見て驚いている。

葵「あぁ。その前にすることがあるんじゃないのか？」

ギ「そうだったな」

グレアムははやての前に行き、

ギ「謝って許されることではないことは分かっている。だがこれだけは言わせてくれ。君たちを利用して済まなかった」

グレアムは頭を下げた。アリアとロッテもはやてに頭を下げた。

は「グレアムさん」

ギ「なんだ?」

は「今まで援助してくれてありがとうございます」

ギ「・・・え」

は「確かに貴方の言うとおりやったことは許されることやないことは分かります。でも、もし私のところに闇の書が、夜天の書がこんかったら私は永遠に一人ぼっちやた。新しい家族をくれてありがとうございます」

相変わらずだが、はやてらしい。

ギ「・・・くっ」

葵「言ったろ? はやてなら許してくれると」

ギ「あぁ。こんな子供に私は何をしたのだろう」

リン「立ち話もなんですし、皆さん座ったらどうですか?」

そう言ってみんなが座る。

葵「さて、聞きたいことがあるのでは?」

ギ「君がアリアやロッテに言っていた友人についてだ。聞いてはいけないことだと分かってはいるのだが。どうしても気になってな。最後に君の話を聞きたい」

・・・最後という言葉が気になるが、それよりも昔話ね。

孤「・・・葵、どうする？」

葵「良いだろう」

そういってゆっくり語りだした。昔の、私が護るべきものだったものの話を。

葵「あれは、まだ私が前世で生きていた時の話だ」

第三三話（後書き）

リインフォース救出成功！　彼女は本当に消えなくていい存在だと私は思います！

さて、次回は少し、というか大戦時のときの葵の過去に少しふれます。というかこれが主に葵が大切なものを守りたいという気持ちが大きくなった瞬間だと思ってください。

第三四話

第三四話

―葵がいた時の地球　場所は北米大陸

当時のここは狂王と言われた零始の支配下に置かれていた。蒼穹の騎士団がユーラシア騎士連合の盟主になり数年。

私は五大陸全ての騎士連合軍を率いて零始に宣戦布告をした。

そして、北米大陸戦争が始まった。

葵「さすがにきついですね・・・。海と空からの同時攻略。相手は地上からの応戦に加え、空からの【不の者】による攻撃」

???「仕方ないだろ？　だが、負けるわけにゃぁいかね」

そういって私の隣に常にいたのが七沼亮（ななぬまりょう）。蒼穹の騎士団創設以来からいて軍師兼副騎士団長を務める。

兵「騎士団長！　護衛艦ハディス沈黙！！」

本土決戦ということもあり今までの戦いとは違いやはり苛烈であり、苦戦を双方虐げられていた。

葵「まずいですか」

亮「しかたねぇ。オレと葵が出る！　準備を！」

兵「はっ！！」

騎士団長、副騎士団長そろってこの戦いに出たため上陸戦は数分足らずで騎士連合軍の勝利に終えた。

亮「呆気ねぇな。不気味だねぇ」

葵「えぇ。あなたならこの後どう考えますか？」

そういって近くに仮設テントを張り、机の上にここら辺の周辺地図を出す。

亮「この近くに町がある。ここで待ち伏せをして叩く。空爆を進めたいが街にまだ人がいるかも知れん」

葵「そうですね。偵察部隊を二個小隊送ってください！」

兵「了解！」

数分後、偵察部隊が帰ってきて街に誰もいないことが分かり空襲によってこの地区を突破。

その後も快進撃を続けていたが、これは亮がいたからといっても過言ではなかった。適切な指示、作戦の立案と実行。

シ「すごいな彼は」

シャ「葵君と同い年でそこまでの戦闘経験から作戦や今までの兆候を探り出すことなんて・・・」

葵「だから彼はこう言われていた。現代によみがえった孔明とか、鬼才の中の鬼才。彼の魔法は明らかに戦闘向け。だが、それにもかかわらず鋭い読みで何度も大きな戦いをくぐりぬけてきた正に英雄だ。それにあいつとは中学からの腐れ縁でな。本当の意味での親友だった」

そう、あいつがいたから今の私があった。そして存在の意味も。救われ助けられ、支えられた。

葵「話を続けるぞ。北米大陸攻略戦は太平洋側と大西洋側、南米側からの三方面作戦で実行されていた。当然この作戦も亮が提案したものだ。

五か月という長い戦いで大陸の四分の三を奪還したが、しだいに連合軍側が押され始めた」

ク「なぜだ？」

葵「こちらは人で戦っているのに対し、あちらは【不の者】だ。無尽蔵に作れる【不の者】と数に際限がある人。次第に数で押され始めてきたわけだ。これには亮も頭を悩ませていた。そして、あの作戦が提案された」

葵「二面作戦！？」

亮「あぁ」

彼が提示した作戦は二面作戦。だが、兵力が下がっている今ではかなりきつい作戦だ。

葵「だが、しかしなぜ今！？」

亮「先ほど偵察部隊か連絡があった。零始が本拠点としているデトロイトより、シカゴの方が兵力が上がっていると。おそらくスプリングフィールドをあいつらが奪還し部隊を二分する作戦だろ」

葵「・・・」

亮「まぁ、最後まで聞け。その奪還作戦のために今やつの本拠点であるデトロイトは手薄ここを叩く方が優先だ。そしてスプリングフィールドには南米から来た第８８騎士大隊がいる。お前がデトロイト奪還部隊を指揮しろ。その間にスプリングフィールドにオレが向かって指揮する」

葵「ですが、それだと飲み込まれる可能性があります！」

亮「そのための布石は打ってある」

彼の笑みは確実に勝てると保証しているようだった。

葵「分かりました。ちゃんと生きて会いましょう。このようなくだらない戦いを速く終わらせて」

亮「分かってるって！　オレだってこんなところで死にたくねェ」

翌日、日がのぼる前にデトロイト攻略部隊はデトロイトに向かい進軍を開始した。

しかし出立して1週間もせずに到着した。激しい戦闘もなく。

葵（おかしい。抵抗がなさすぎる。もう直ぐ出デトロイトのはずです）

兵「騎士団長！　報告します、先遣隊がデトロイの入りました」

葵「そうか。だが警戒を「報告します！！」どうした？」

後方から一人の兵士が傷だらけになってこちらに向かってきた。

兵「な、七沼副騎士団長の軍、す、スプリングフィールドにて交戦開始・・・ですが、明らかに兵力差が大きく、苦戦・・・」

この言葉に私は驚きを隠せなかった。だが、

？？？「どうかね？　？？。大切な物を奪われる気持ちは？」

急いで振り向くとそこにいたのはこの世で最も憎み、怨み、憎悪していたやつだった。

葵「零始ぃいいいいいい！！！！！！！！」

剣を抜きあいつの元まで一気に攻めかけた。だが、

零「ハハハハッハ。それぐらいでは死なないよ？　それにこの戦は所詮君を完成に近づけるために置いた布石なのだから」

葵「どういう意味だ！？」

零「分からないか？　大切なモノが奪わたとき人は悲しみに暮れ、やがて怒り満ち、やがてそれが憎しみに変わる。そしてそれが殺戮につながる！　最高の連鎖じゃないか！！」

葵「！？　まさか貴様！？」

零「ここはあげよう。だが、まだまだ君には活躍してもらわねばらない！　人の負という物を探求するために！！」

　すると、煙のようにあいつは消えて行った。

葵「・・・まさか。だが、いや今は考えるな。全軍急いでスプリングフィールドに向かいます！」

　その後デトロイトに少数の兵士を置き急いでスプリングフィールドに向かった。その際に通った道はデトロイトに向かうときと【不の者】は比べはるかに数が多かった。

　そして、その場所についたときに私が目にしたのは、

葵「・・・なんだ・・・こ、これは・・・」

　あるのは亮が率いていた部隊と第８８大隊の人間の死体。形が残っているのは少なくほとんどが原形をとどめていなかった。

葵「・・・りょ、りょうは・・・」

私は必死に探したのを覚えている。私を闇から助け、支えてくれ、共に歩んできた友を。

？？？「・・・うっ」

葵「！？　りょ、亮！」

亮「お、おま・・え・・・どう・・して・・」

葵「しゃべるな！　すぐに治療する！！」

亮「・・この・・・傷・・みえるか？・・・もう、む・・りだ・ゴボッ」

あいつの口からは大量の血が吐き出された。それでも私は治癒魔法をかけ続けた。

亮「い・・ま・・は・オレ・・よりみら・・いだろ！」

葵「お前がいない未来を見てどうなる！　私に、私たちに未来をくれたのはお前だ！」

私だけじゃない。零始の計画で被害にあったｆａｍｉｌｙ全員がこいつによって救われた。例え兵器として産まれた存在でもこいつはそんなことは関係ないと言ってくれた。お前らは幸せをつかみ、未来を見る権利も両方あると言ってくれた。数少ない理解者だった。

亮「・・・こんど・・は・・おまえ・・ら・が・・みらい・・を・つくる・・ばんだろ！」

葵「なんで！？　なんでお前なんだ！？　お前が何をした！？」

亮「・・・すまん・・」

葵「謝るな！　謝るぐらいなら生きてくれ！　頼む！　これからも私を、私たちを支えてくれ！！」

亮「・・おまえの・・・つく・・る・・みら・・い・・みてみ・・たかった・」

葵「見せてやる！　だから生きてくれ！！　生きてないと見れいないだろ！！」

亮「・・やく・・そく・・しろ」

葵「あぁ、何でも聞いたやる！」

亮「・・おまえ・・・みたいなひ・・とがあら・・・われたら・・・こんどは・・おまえ・・がた・・すけてやれ」

葵「あぁ。約束する！」

亮「・・・そう・・か・・あと・・たの・・」

葵「あ・・あ・・・あぁぁぁ

それがあいつの最後の頼みだった。

葵「神よ！　彼が何をした!?　彼が何を犯したと言うのだ！　なぜ彼が死ななければならない!!　我らを助け、我らを救い、我等のために共に戦ってくれた彼が!!　なぜ!?」

その後のことはほとんど覚えてない。ただただ泣き続けた。天に向かって吠えた。

葵「これが私が失った最初で最後の大切な者だ。友を失う気持ちはわかる。だが、その者の意思を汲んでやるのもまた生きている者の使命ではないのか?」

グ「あぁ。そうだな。本当に私はどうかしていたようだ」

そういってさめきったお茶に口の含み喉を潤した。

葵「さて過去話は以上だ。今度はクロノ達から質問があるんじゃないのか?」

そういうと、リンディが少し間を置き、

リン「・・・えぇ。これは私にしか知らされていないことです」

葵「ほぉ。トップシークレットか?　いいのかこれをこの場で話して」

リン「えぇ。神無月君、貴方に会いたがっている人たちがいます」

葵「・・・大方予想はできたが、まあ聞こう」

リン「はい。会いたいといってきている人たちの名前はミゼット・クローベル　本局統幕議長、ラルゴ・キール武装隊名誉元帥、レオーネ・フィルネス法務顧問相談役の三名です」

　管理局のトップが名を連ねたな。

管理局員・プ「伝説の三提督!?」

な「しってるの?」

ク「管理局の管理局黎明期を支えた、最大の功労者とされる3人だ。もはや英雄といっても過言じゃない」

　大方勧誘だろ。

リン「それで、翌日か明後日管理局本局に来てくれとおっしゃっていたわ」

　バカか?　自ら敵の本拠地に乗り込んだらなにされるか分かったもんじゃない。

葵「断る」

リン・エ・ク「「「えぇ!?」」」

葵「私が会いたいと言うのであれば赴くが、貴様らが会いたいと言

うのであれば貴様らが足を運ぶのが普通じゃないのか？　そのような礼儀もできんのか。ミゼット・クローベル、ラルゴ・キール、レオーネ・フィルネス。聞いているのだろ」

すると、三つのモニター映し出されると、管理局員は一斉に起立、敬礼を行った。

ラ『ほぉ、若いのにやるな』

レオ『まさかばれるとは思わなかったな』

ミ『えぇ。でもどうしてばれたの？』

葵「お前らのことだ。どうせ何らかの手段は打ってくると予測はしていた。お前らの考えはこうだろ。私を本局に連れ行き、そこで話し合い管理局に勧誘という名の強制入局。違うか？」

ラ『ほっほっほ。そこまではせんよ。だが、お前さんほどの力があれば局も変わると思うんだがの？』

葵「それはあんたらに力がないだけだ。暴走している管理局をおさえるには力で押しつぶすしかない。あんたらは優しすぎる。時には鞭を振るう覚悟も持て」

ミ『それで、話し合いには応じてくれないかしら？』

葵「・・・はやて、明日家を借りれるか？」

は「え？　え、えぇけど」

葵「なら明日、場所は八神家。管理局からはあんたら三人と、グレアム提督、リンディ提督、クロノ執務官、エイミィ執務補佐官、アリア、ロッテの以上の者だけを来させろ。録音機器や録画機器、記録媒体は一切持ち込みを禁止する。それを破った場合は本局とミッドチルダを塵にする。以上だ」

全員「!?」

最後の言葉に皆が反応して、驚いていた。

レオ『そ、それは脅しか?』

葵「そう取るかは自由だ。だが、人質は必要だろ? お前らが約束を破ったがゆえに死ななくていい人々が死ぬ。お前ら主導で話を勝手にすすめられては困るしな」

ミ『・・・分かったわ。その条件でそちらにお伺いします』

ラ『ミゼット!?』

葵「話がわかる人間で助かる。ではこれで」

そういってモニターを消した。

するとその場にいたアースラメンバーが。

リン「よ、よく、あの人々とまともにと言うから上から目線で話せたわね?」

葵「何を言っているんだリンディ? 所詮あいつらはジジィとババ

ァだろ。こっちは御三家と話をしたこともあるんだ。そっちの方が緊張する」

フェ「御三家？」

葵「珠洲之宮様、神之宮様、神楽之宮様のお三方だ」

ヴィ「どういう人たちなんだ？」

孤「人じゃないよ。神様たちだよ」

全員「は？」

葵「時の神、空間の神、生命の神。四聖神と呼ばれる偉大な神だ」

プ「神って・・・そんなばかな・・・」

葵「いるんだよ実際に。言ったはずだ。私がいた世界には精霊も神も悪魔もそして人も普通に暮らしている。言っていなかったが、連合騎士軍の連合の意味は騎士団の連合に意味ではないぞ」

ユ「じゃあ、どういう意味の」

葵「人、精霊、神族、魔族の種族連合軍というわけだ」

全員「・・・・・」

葵「第一に孤狐が神だ。実物が目の前にいるだろ」

孤「えっへん！」

そういって孤狐が大きな胸を強調して威張った。

ク「じゃあ、葵はその三人と出会ったことがあるのか？　その、御三家と・・・」

葵「あぁ。だから、所詮伝説だろうが、幻だろうが、あいつら人だ。何を恐れる必要がある？」

アル「何度も思ったけどあんたも、あんたがもといた世界もでたらめすぎる」

シャ「え、えぇ。今回のので余計にそう感じます」

シ「・・・もうなれたがな」

ヴィ「シグナムと同じ」

まぁ、こっちの世界になれると私もそう思うよ。

最終話（前書き）

A'ｓ編最終話です！

最終話

第三五話

さて、あの三提督との約束によって今八神家は過去類を見ない人口密度の高さを表しています！

まぁ石田先生には頼んでいったん帰宅を許してもらった。なのは達にそれを言ったらなぜかすずかとアリサにも伝わっていった。

葵「・・・やはり狭いか」

は「そやな。八神家だけでも八人やもん」

葵「さらに、なのはにテスタロッサ家、アースラ組。そして三提督」

計何人になるんだ？

葵「はぁ、仕方ない。心の世界に行くか」

リニ「あの世界ですか？」

久々の登場、リニスさん。

葵「あぁ」

そういって心の扉を開け、皆を案内すると、その景色に見んが感激していた。

な「きれい～」

フェ「うん。とっても」

アリ「すごい・・・」

リン「これは、何とも言えないわね・・・」

ク「えぇ。このような景色は初めてです」

ユ「初めてだこんな景色を見たのは・・・」

エイ「すごいですねぇ～」

プ「綺麗ね・・・」

アル「すごい、ほんとうにすごい・・・」

とまぁ、色々だね。そして、皆の前に出て、

葵「ようこそ。我が心の世界に」

軽くお辞儀をして、簡単にここの世界のことを説明した。

な「じゃあ、葵君の世界なんだ」

葵「あぁ。というか私はいつまでこの姿なんだ？　まぁ、こっちが本当の姿だからいいが」

そう、あれから一日は立っているはずなのに、いつまでたっても戻らない。

孤「あぁ、多分それヴェルとリインの影響じゃないかな？」

リ・ヴェ「「え！？　私のせいですか！？」」

まぁ、行き成り原因はあなた方ですと言われればだれでも驚くわな。

孤「契約の際多分だけど何らかのショックによってリミッターが外れたんじゃない？」

葵「まぁ、それしか原因がないか。ま、どうでもいいか」

そう思い、皆の方に話を振る。

葵「さて、管理局メンバーは私と話があるのだろ。あとプレシア、ユーノ。君も来てくれ」

プ「あら、私も？」

ユ「僕も？」

葵「あぁ。君たちは自由にしてくれ。施設の説明は孤狐とエクス、ルミルに任せる」

そういってエクスとルミルを具現化させる。

エ「お任せください」

ル「あぁ」

フェ「私たちはいいの？」

は「一応当事者なんやけどな」

葵「大人の話だ。君たちには少しまだ早いかもな」

な「ぶ～～～」

葵「後でちゃんと付き合ってやるから」

な「ほんと！」

は「ほんまか！」

アリ「やったぁ～！」

フェ「約束だよ！」

そういって管理局メンバー以外は全員がこの世界の見学に行った。

さて、場所は変わり寝殿。といっても上座みたいなものはなくただの宴会場みたいな感じに変えてある。

そして対面するように私と管理局側と別れて座った。

葵「あと、君たちに合わせたい人物がいる。入ってくれ」

そう言って襖があくと、

全員「!?」

かなり驚いているようだ。まぁそうだろうな。

葵「紹介しよう。私の親友のジェイル・スカリエッティだ」

ジェ「はじめましてと言うべきか？　管理局の諸君」

ク「葵！　これはどういうことだ!?　彼は犯罪者だぞ!?」

葵「クロノ落ちつけ。それを踏まえての会談だ。まずこちらから質問だ。はやてたちはどうなるのだ？」

すると、レオーネが、

レオ「八神はやては結果的に言えば無罪だ」

無罪？　罪があるように聞こえるが。

葵「まずそちらの被害は？」

レオ「ほぼ無い。被害は嘱託魔導師のフェイト・テスタロッサ、民間協力者の高町なのはの怪我のみ。だが、これも報告では君が治したと言うことで皆無といっていい」

葵「なら罪状は何なのだ？　罪なるモノがないではないか」

ミ「なにが言いたいのかしら？」

葵「私はこう言いたいのだ。罪もないのに無罪。おかしくないか？
あと今回の闇の書事件は貴様ら管理局が発端だとな」

ク「あり得ない！？　何を言っているんだ！」

葵「クロノ。では聞こう。君たちはどこまで闇の書のことを調べた？」

ク「ユーノやアリア、ロッテに手伝ってもらい無現書庫をくまなく調べた」

葵「ふむ。では、グレアム。お前は？」

ギ「提督権限で出来るところまでだ」

葵「それで闇の書のどういった内容のモノが出てきた？」

ユ「えっと、闇の書が関わった犯罪と夜天の書であること。そしてその作られた目的ぐらいかな」

ギ「私たちもそれぐらいだ」

やはり・・・か。そういってジェイルの方を見てうなずく。

レオ「・・・なるほどそう言うことか」

葵「お分かりか？」

レオ「これでも長年管理局の闇の部分と向き合ってきたんだ」

リン「どういう意味ですか？」

ジェ「こういうことだ。君たちは不思議に思わなかったかね？　なぜ夜天の書が闇の書になったのか？　またそれは誰が行ったのか？　いつ、だれが、どこでということが書かれた物が一個もないことに」

ク「そ、そういえば・・・・」

ユ「・・・確かに無かった」

葵「そしてこう結論付けれる。無いのではなく握りつぶされたのでは――と」

ク「誰がそんなこと――まさか・・・」

葵「そう。そんなことができるのは管理局しかないだろ。三権分立もしていない独裁体制の管理局なら簡単だ。そしてプレシアの件もそうだろ」

プ「な！？　まさかとは思っていたけど、やっぱり・・・・」

葵「その証拠がこれだ。あとジェイル・スカリエッティの件も書かれている」

そういって三提督の前にそれを置くと、三人はそれを読み、目を疑った。

レオ「バカな・・・」

ラ「腐っているとは思っていたが・・・」

ミ「ここまでとはね・・・でもどこで?」

葵「こちらの情報網を甘く見てもらっては困る。管理局程度のセキュリティなどこちら側だと小学生でも完璧に見破れる。ハッキングが犯罪だと言うなら私にも解析不可能なほどに仕上げてから言え」

その書類をリンディ達も見るとグレアムとクロノが立ち上がった。

葵「どこに行こうとしている?」

ギ「決まっている。こんなことをしている奴らを叩きに行く!」

ク「管理局がこんなことをしていていいわけがない!」

葵「落ちつけ。バカども。もしそんなことをすればお前たちも、そしてお前たちとかかわりのある人間が消されるぞ。そのための案もちゃんと用意してある」

その言葉を聞いて二人がもといた場所に座る。そして私は三提督の方を見ると、三人が驚いているところに私は、ある案を出す。

葵「さて、ここで私に君たちに提案がある」

ミ「何かしら?」

書類の衝撃がまだとれていないのかまだ顔色が悪い。

葵「私を管理局に入れる気はないか？」

レオ・ラ・ミ「「「え！？」」」

リン「い、いいの、神無月君？」

葵「ただし、条件がある」

ラ「聞こう」

葵「一つ、はやて、ヴォルケンズの罪は無かったことにする。無罪ではなく事件そのものをなくすんだ」

ク「そんなこと、出来るわけ「出来るだろ。今までもそうしてきたことをするだけだ」うっ」

葵「まぁ、それでも彼女は罪を償うだろうな。そのために局に入るのは目に見える。そしてなのはもフェイトも」

全員「・・・・」

葵「二つ目。ジェイルの罪をなくすこと。これは黒幕が別にいる」

ミ「えぇ。いいでしょう。これを見る限り彼に罪は無いですし、それに今まで行った罪も大したものはありませんから。それで黒幕とは？」

そういって私は四つのモニターを三人の前に出す。

葵「ここ最近でこの四つの化け物を確認した部隊はあるか？」

ラ「あぁ。数件ある。被害も出ている。武装隊も一個中隊でようやく一匹この右端のを倒せるぐらいだ」

そういってレベル1を指差す。

私はこの化け物の説明に入り、それを作ったもの、つまり零始が黒幕であると説明した。そして私が入局する最大の理由だ。こいつを倒すためにはどうしても力と人が必要となる。なら、それを利用させてもらうだけだ。

そしてこの正体のことを知った彼らは、

ラ「なんだと・・・」

レオ「そんなことが!?　バカな!!」

葵「落ち着いてください。それを防ぐために局の入局を認めてほしいんですから」

ミ「それで、他の条件もあるんでしょ」

葵「えぇ。まず管理局に入り取れる資格はすべて取らせていただきます。その試験の手はずをお願いします」

ラ「こちらで何とかしよう」

葵「三つ目。階級は少佐、局では三佐あたりに」

レオ「いいのか?　君なら将校でも」

葵「実力でそこまで行きますよ。一年もあれば大将クラスにはなれます」

その言葉に全員が耳を疑った。だが、彼なら可能だろう。間違いなく。

葵「四つ目。あなた方の直轄部隊として私直属の独立機動部隊の創設を。そして私の権限を誰にでも命令できることと誰の命令も聞かなくていいと言うことをあなた方の権限でつけてください」

ラ「だが、それでは・・・」

葵「市民の安全と命の保証と、組織のバランス。どちらが大切なのですか？」

ラ「うっ・・・、分かった、いいだろ」

葵「五つ目。私の魔法技術の提供を要求しないこと。これは局上層部の屑どもに悪用されたら困るからということです」

ミ「そうね。確かにそれはあるわ」

葵「条件は以上です。これらすべてが整い次第局に入りましょう」

レオ「分かった。すぐに手筈を整えよう」

ク「それのどこが解決案なんだ？」

葵「実力をつけ昇り詰めて一気に管理局の内部変革を行う。外から

壊してもいいが、今の管理世界の治安、内政そう言ったものが一気に崩壊する。そうすれば混乱を招く。なら、内側からじわじわと膿を取り除けばいい。そのために一年で大将クラスまで上り詰める。そしてある程度整ったところで若手の育成などに力を注ぐ」

そう言い放った。あぁ、そう言えば後一つ言い忘れてたな。

葵「あぁ。一つ言い忘れていました」

ラ「なんじゃ？」

葵「私に命令できるのはあなた方三人のみにしておいてください。あなた方なら信用に値すると言うことで」

三提督「「「・・・ふふふっ（（はははは っ））」」」

葵「・・・何かおかしなことを言いましたか？」

ラ「いや、君はさっきまでわしらと敵対しとるようなもんじゃったのに」

レオ「こうもあっさり信用してもらえるとわな」

ミ「そうね。あなたみたいな子なら息子としてほしいわ」

葵「・・・勘弁して下さい。それからあなた方もゆっくりしていくといい。ここで一日経っても外では一時間しか経ってませんから」

リン「・・・・本当にあなたの魔法は何でもアリなのね」

葵「この世に自然がある限りは」

そういって私はその部屋を後にした。

さて、私は皆の魔力を辿ってある場所に来た。それは一つの大きな丘。その上にはひときわ大きな桜の木があった。

葵「やはりここか」

全員「葵（君）（神無月）（（マスター））（皇）！」

始めてくる人間は大体ここに来る。実際八神家も屋敷を出てすぐにこれが目に入りここに来たぐらいだからな。

は「あの時はわからんかったけど、このお墓って」

葵「あぁ。私の友だ」

その墓にはこう刻まれていた。

葵「あの後騎士団のみんなと話し合ってここが一番だろって。あいつが一番好きな場所だったんだ。こんな野郎の心の世界に墓を作ってくれって生前言ってたからな」

本当は作る気なんてなかった。あいつは私と共に歩んでくれると思った。たがいに笑って互いに妻を作り家族ぐるみで付き合っていく。そう考えていた。

葵「見えるか、亮。ここにいる者たちの姿が」

そういって墓の前にしゃがみ、

葵「この者たちが私にとって大切な者たちだ。お前が言った未来の姿なのかもな」

そう。幸福を、家族を、私の力の意味をくれた。

葵「だから今一度誓おう。私はどんなことがあってもこの者たちを守る。

我が身体は大切な者を守るための盾となる

我が剣は大切な者に牙を向けた者を討つためにある

な「なに、その言葉？」

葵「誓い。蒼穹の騎士団の神への誓いだ。騎士団の存在意義はこういうことだ。みたいなね」

フェ「その、あ、葵の大切な者って？」

葵「ここにいるみんなかな。そのためなら体を盾にしてでも守る」

そういって友にもう一度誓った。

護るために力を手に入れ、手放したくないから力を手に入れ、無くしたくないから力を手に入れた。

自分勝手だと思う人もいるかもしれない。

でも、こう言った力の使い方もいいのではないのだろうか。

偽善と思うかもしれない。でも偽善でもいいのではないのだろうか。

―大切な者を守るための力を手に入れるのであれば

魔法少女リリカルなのは～黄泉路への案内人～A's編　終

最終話（後書き）

や、やっと終わった～・・・・

じ、次回からは日常編に入ります！

第一話

さて【闇の書事件】、または【異端児事件】と呼ばれる物が終わり、三提督との会談も終わった。心の世界で一日がたち、元の世界に戻り全員が時計を確認すると、

全員（八神家を除く）「・・・本当に一時間しか経ってない」

すると、クロノが私の手を握り、

ク「済まない葵！　後でここを使わせてくれ！！」

葵「別にかまわないが、どうかしたのか？」

えらい必死だな。戦い以上に必死な目をしていた。

エイ「あぁ、クロノ君今年中に終わらせなきゃいけない案件が大量にあるの。後葵君の魔法のこととかシグナムさんとのユニゾンの隠ぺいなどなど・・・・」

葵「あぁ。なるほど。迷惑をかけるな。そうか今年もあと五日だかな。つまりあの世界なら時間が大量にあるから片付けられるという寸法か」

ク「頼む！」

どこで覚えたのか土下座までしてきた。

葵「・・・おいおい、執務官、そこまでするな。じゃあ取引だ」

ク「・・・分かった」

葵「なに難しいことじゃない。私が受ける資格の分の過去3年間の試験を持ってきてくれないか」

ク「それでいいのか？」

葵「三年分もあれば出題傾向やどういった内容のモノが出るかがわかる」

ク「分かった。すぐに用意する！」

そう言った瞬間クロノは八神家を出て行った。多分アースラに戻ったんじゃないか。

葵「さて。次の問題はアリサとすずかか」

そう。先の戦いでアリサとすずかにばれたため魔法についての話をしなければならない。ちょうどクリスマスパーティーにお呼ばれしているためこのまま行く予定なのだが・・・

葵「私も行かなければいかないのか？」

なのはとフェイト、アリシア、はやてにそう聞く。

は「もちろんや！」

な「ちゃんと来てね」

フェ「一緒が良いな・・・」

アリ「うんうん。葵と一緒がいい！」

葵「はぁ、仕方がない。あと士朗さんたちにも話しておかないと。なのは、君が士朗さんや桃子さんに話すときに声をかけてくれ。私のこともついでで話しておく」

な「わかった！」

その後、三提督はそのまま本局に戻り、それと入れ違いにクロノが戻ってきてそのまま心の世界へ、エイミィもクロノの手伝いで心の世界へ。

プレシアとリンディは桃子さんと一緒にどうやら買い物へ行く約束をしたらしい。最近仲がいいとか。

結果パーティー参加メンバーはなのは、フェイト、アリシア、はやて、アルフ、シャマル、シグナム、ヴィータ、リイン、ヴェル、孤狐、エクス、ルミル、私となった。ザフィーラはおるすばん。なんかさみしくないのか？

ザ「気にせず楽しんでくるといい」

と、ザフィーラが言った。大人だ。

葵「晩御飯は冷蔵庫に入れてたる。無論、私が作ったのだ。安心して食べるといい」

シャマルの実験に最近付き合わされているらしくザフィーラの毛並みがだんだん色つやが無くなってきている・・・。

まぁそれはさておき、大人数でお邪魔するのでバスを使うことになった。

そして、月村邸にご到着。

孤「おっきぃ～」

葵「一度来たことあるがやはりなれんな」

なのはは何の迷いもなくインターホンを押すと、

す「いらっしゃ・・・・い？」

アリ「どうしたのよすず・・・か？」

二人は私を凝視し、その後から来た忍さんとファリン、ノエル、先に来ていた恭也さんも「誰？」みたいな反応をしていた。

葵「お久しぶりというべきかな。神無月葵です」

す・アリ・忍・恭・ファ・ノ「「「「「「えぇえええええええええ！？」」」」」」

その後、なのはとフェイトが魔法の説明をして出会いやきっかけなどを話した。

そしてはやてがシグナム達のことを話し、自分も魔法とかかわっていると言うことを話した。

す「そうなんだ・・・・」

アリ「にわかに信じがたいけどね」

忍「そう？」

恭「そうだな。葵がすでに魔法使いであることは知っていたからな」

全員（恭也、忍除く）「「「「えぇえええええ！？」」」」

今日は驚く人間が多いな。

葵「忍さんと恭也さんには既に説明してある。すずかにも多少は話したはずだが」

す「あ。あの時の？」

葵「あぁ。私がどういう存在かということの時に少しふれたともうが。まぁいい説明するぞ」

そういって過去自分にどういったことがあったか、どういう世界から来たかを説明した。

葵「で、こっちの姿が本来の姿」

忍「へぇ、なかなかいい感じじゃない♪」

葵「忍さん、貴方には恭也さんという立派な彼氏がいるんだ」

は「そやで！　葵君は私のもんや！」

葵「はやて。君と私では歳が「違うよはやてちゃん！　葵君はわたしのだよ！」なのは・・・」

フェ「違うよ二人とも。葵は私のだよ」

す「なにいってるの？　私だよ！」

ア「私のに決まってるじゃない！！」

アリ「みんな違うわよ！　わたしよ！」

・・・もういい。

そう思い、少し外の空気にでも触れようと思った時、

ヴィ「なぁ、葵。あ、あたしだよな／／／？」

ヴィータが私の服の裾をつかみ上目づかい＋涙目で聞いてきた。

これは卑怯だろ！？

葵「え、えっと・・・ヴィータ？」

そして、周りを見ると、シグナムやシャマル、リインにヴェルま

で加わっていた。

あれ？　エクスとルミルはなぜ加わって無いんだ？　こう言った時真っ先に来ていたんだが？

エ《私たちはマスターの神姫ですから！》

ル《常にマスターのそばに！》

そういってイヤリングで私の耳にいた。

葵「はぁ。そもそも私と君が仮につきあったとしても歳の差がありすぎだろ」

シ「ん？　なら私ならいいのか？」

葵「は？」

シャ「なら私もＯＫですね♪」

リ「では、私も」

ヴェ「無論私もそうなりますね」

なぜに？

シ「歳が理由なら私たちは問題なかろう」

いや、そういう問題では・・・

葵「私よりいい男なんて山のようにいるんだ。それに、君たちのような美人美女なんて男を選び放題だろ」

な「それでも葵君がいいの！」

全員「うん！」

エ《モテモテですねマスター》

ル《マスターだからな》

どういう意味だルミル？

その日一日は賑やかなクリスマスパーティーだった。

第一話（後書き）

少しアドバイスを受けたので一部変更しました。

第二話

第二話

クリスマスの日に、とりあえずなのは達に心の世界の鍵を渡し注意事項を説明した。

まぁ、今日もみんな揃っているわけだが・・・。

さて、クロノの持ってきた問題傾向を見て真っ先に思ったことは・・・

葵「なにこの簡単な試験問題？」

そう。あまりにも簡単すぎる。というかこんなんだったら魔法省のM．G．の入隊試験の方が難しい。

ク「なっ！？　これが簡単だって！？」

葵「なら、こっちの問題といてみるか？」

そういって指を鳴らすと、そこには一冊のノートぐらいの厚さの本があった。

ク「・・・こ、これは何年分だ？」

葵「は？　去年の問題だ。これ一冊分を４時間以内に解くという感じだ」

ク「無理だろ！？　しかも内容がさっぱりだ！！」

まぁそうだろうな。人工型魔法しか使わないお前らから見ればわからないことばっかりだろうな。

ヴェ「葵様。お客様です」

ヴェルがクロノに借している部屋に入ってきた。え？　呼び方が変わっている？　そりゃ皇でもないのに皇と呼ばれるの嫌だからね。無理やりにでも呼び返させた。

その時のが、

ヴェ「なぜ皇と呼んではいけないのですか！？」

葵「いや、皇族じゃないんだが・・・」

ヴェ「ですが私が認めた方は皇と呼ぶようにしています！それにですね――――」

さらにまだ続くのか。仕方がない。何を言われるかわからんが、

葵「・・・なら私を皇と呼ばない代わりに可能な範囲で言うことを聞こう」

すると、不満を述べていたヴェルの口が止まり、

ヴェ「本当ですか！？」

葵「可能な範囲だ。結婚やらそう言ったものはなしだ。それ以外なら」

その後何を頼まれたかというと・・・・

ヴェ「では今後一緒に寝てください！」

と言われた時、本当に脳処理が追い付かなくなった。その後ヴェルは本当に有言実行して何度も理性が吹っ飛びそうだった。

まぁ、それはさておき。

葵「客？」

ヴェ「はい。三提督に似ていますが、どこか違うような感じがしまして」

葵「・・・まさか！？　ヴェル、その方々は！？」

ヴェ「高町たちと遊んでいますが？」

ま、まずいか・・・・

葵「と、とりあえず急いで案内してくれ！」

ヴェ「は、はい」

急いでいると思われる寝殿に行くと、その場にいたのはなのはとハラウオン家、八神家の方々と・・・

な「あ！　葵く「お、お久しぶりです！　貞永宮様！　蓮鏡様！　統楽様！」え？」

急いでい頭を下げ、あいさつした。

その場にいたのは白いひげの長く、頭の髪は無い爺さん神之宮貞永。いつも笑顔を絶やさない婆さん神楽之宮蓮鏡、いまだに衰え知らずの身体にあちこち傷だらけの爺さん珠洲之宮統楽。いわゆる四聖神の三柱だ。

ＳＩＤＥ葵以外

あの葵が頭を下げ、いつもの気迫どころかよわよわしい。

葵「い、いつこちらにおこしになられたのですか？」

統「今先ほどだ」

蓮「貴方が生きていると言う反応をキャッチしましてね」

貞「来てみたら、まぁ、お前さんいつ結婚したんじゃ？　それにこんな別嬪さんがおるんじゃったらわしに紹ｋ「黙れ！　―ガゴンッ」ぐはっ・・・・」

貞永が葵のフライパンの餌食に・・・

葵「その者たちは私の妻ではありません、神之宮様。あといい加減その女性癖を治してくださいと何度も忠告しているはずです」

貞「ひ、久々に食らった・・・」

シ「か、神無月。こちらの三人が」

葵「あぁ、以前話した神々だ」

葵がそう説明したが、腑に落ちないところもあった。

ヴィ「でもよ葵。なんでお前そうも低姿勢なんだ？」

葵「・・・・・・なんだ」

フェ「え？」

葵「私の師匠たちなんだ」

全員「えぇえええええ！？」

ク「し、師匠って何のだ！？」

葵「統楽様は言わずとわかると思うが武術全般を、貞永様には魔法を、蓮鏡様には学を。今の私があるのはこの御三方のおかげだ」

統「ふむ。久しいな孤狐、エクス、ルミル」

孤「おっひさぁ～」

エ「はい。お久しぶりです」

ル「久しぶりだ」

　すると、蓮鏡は孤狐の左手を見てあらあらといい始めた。

蓮「あらあら。孤狐ちゃんは葵と契約したの？　でもおかしいわね。葵はｋｅｙが無いはずなのに？」

貞「転生の際に特典で貰ったんじゃろ。テンプレとしてはよくあることじゃ」

統「ふむ。それにしてもお前、いささか多すぎやしないか？　ざっと見た感じだと契約者に子供まで手を出しているようじゃないか」

葵「ぐっ・・・は、はい。それにもいろいろと・・・」

　そういって今までの経緯を話した。

統「なるほどな。まぁ、それなら仕方がない。それから葵今から鍛えるぞ」

葵「は？」

統「今から鍛えるといったんだ。ホレさっさと立たぬか！！」

葵「はいぃ！！！」

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

その後、コロッセオに移動。なぜか全員が・・・クロノ仕事はいいのか？

ク「こっちの方が興味がある」

左様で。

モードは黒騎士で両翼刀を展開せず手甲を展開した。

蓮「あらあら。統楽もかなり気合はっているわね」

貞「ほっほっほっ。死なない程度じゃろうが、今回は葵の骨がどれだけ持つかのう」

え？

葵「・・・いつも以上ですか？」

統「さぁな。さて殺り合うか！」

はぁ、覚悟を決めるか。しかも字が違うし・・・

そういって戦闘態勢に入る。

続く

第二話（後書き）

というわけでA'ｓ編で紹介した神様たちを出してみました。設定も少し前から考えていたものを出しました！

第三話

第三話

ＳＩＤＥシグナム

神無月の格闘戦は初めてみる。たがいに構えたまではいい。だがすぐにはやはり動かない。

貞「やはりさっさとは動かぬか」

蓮「そうでしょうね。でもあと三秒もすれば動くわ」

簡単にわかるモノなのか？　すると丁度三秒後に二人が消えた。

―ガキィイイン！

音がする方を見るとかなり上空で戦っていた。

葵「ハァアアアアア！！！」

統「ウォオオオオオオ！！！」

かなり強い衝撃波みたいなものを上げて戦っていた。

―ガキィン　ガゴォン

貞「葵もなかなか腕を上げおったな」

蓮「えぇ。ここが地球上だったら宇宙まで行ってたでしょうね」

な「宇宙!?」

フェ「そ、そんなところまで行ったんですか!?」

孤「確か葵と統楽の戦いは最大で月面で戦ってたこともあったな～」

つ、月で・・・どこまで規格外なんだ。

貞「ちなみに言っとくがあいつらは今魔法なんぞは使っておらんぞ」

孤「純粋に力と力のぶつかりあいだね」

ク「魔法を使っていないであの強さなのか!?」

蓮「あら坊や。あの子に言われなかった？　武術は最低限の力はつけておくようにって。魔法が使えなかったりとか、武器が無かったらとか、ありとあらゆる場合を想定して戦うことが普通だと」

貞「まぁ、葵もあそこまで行くのに血反吐を吐いてまで強化しまくったしな。じゃが、あ奴の眼は最後まで死ぬことは無かったのぉ。お、葵の左腕が折れたな」

蓮「統楽も苦戦しているわ」

シャ「ちょ、今左腕が折れたといいました!?」

は「と、止めんと!」

主はやてとシャマルが飛び立とうとすると、

貞「タイムストップ」

すると、ピタッと二人が止まった。

貞「安心せい。あの程度で死ぬバカではないわ」

上空を見ると、葵も統楽も再び拳と拳をぶつけ合っていた。

ＳＩＤＥＯｕｔ

葵「はぁ・・・・はぁ・・はぁ」

さすがは統楽様。隙が全くない。それだけじゃなくもう左腕が持って行かれた。

統「腕を上げたか。だが、この程度ではまだわしの域には届かんぞ！！」

葵「確かにまだまだ未熟者です。ですが確実に一歩は踏み込ませいただきます！！」

再び拳を構える。右腕でどこまでいけるかわからんが。

葵「はぁっ！」

蹴りを交わすが、統楽様はそれをやすやすと交わす。

統「甘い！」

そこに統楽様は右ストレートを持ってくる。それを交わし、私は左腕を遠心力を使い、

葵「フッ！！」

統「なっ！？　がっ！？」

それは見事に統楽様の右顔面に喰らわせた。

さらに攻勢を続けるために右ストレートを左肩部に撃ちこみ、蹴りで腰を狙う。

統「させん！！」

―ゴビャキッ

葵「グッ！？」

左足骨折。最低でもヒビは行った。

しかし　そのまま右腕で攻勢を崩さず攻撃する。そして、決着はついた。

統「甘いわ！！！！！」

一瞬にして後ろに回っていた統楽様によって右回し蹴りを防ぐこ

ともできず墜落。

―ズゴォォォォン・・・・・

ＳＩＤＥなのは・フェイト・はやて・アリシア

統楽はあの葵を圧倒的に押していた。

攻勢に出てもすぐに防御に回られ反撃を喰らう。

な「あ、葵君大丈夫かな・・・」

フェ「でも、葵に私たち一回も勝ったこと無いよ?」

は「あ、葵君のことやし勝てるんちゃうんか?」

アリ「う、うん」

でも、左腕折れてたし、それにさっき嫌な音がしたし・・・・

すると、葵が空から落ちてきた。

そして、

―ズゴォォォォン・・・・・

葵「イタタッ・・・ヤバいなこれ・・・」

葵はかろうじて立っていたけど。

アリ「あれって、もう右足でたってるのと大差ないよ・・・」

アリシアが言ったように左足はもう飾りとでも言うようにブランと垂れているだけにすぎない。なのは達も若干涙目だ。

統「まだやるか？」

葵「・・・」

葵はそれでもファイティングポーズを崩さなかった。

ＳＩＤＥＯｕｔ

私は再び立ち上がり拳を構える。

統「・・・根性も成長したな。まぁ今回はそれに免じて終わりにしよう」

そう言うと、葵は仰向けなって倒れた。

統「まったく、お前には驚かされてばかりだ。死んだと思ったら生きていて、さらに魔法も武術も成長しよる」

葵「己だけでも精進せよ。その力はいずれ役に立つ時が来る。その力はいずれ必要とする者が現れる。そう教えてくださったのは統楽様ですよ」

統「そうじゃったな」

貞「葵。わしらの目から見てもお前は数段強くなっている。必要としているモノが見つかったのか？」

葵「えぇ。まあ」

蓮「それはよかったわ。シャマルちゃん、治療お願いね」

シャ「は、はい！」

蓮「あともう少しであの子も来るから」

あの子？　誰だ？

シャマルが近くに来て左足、左腕と順に治療していく。

葵「助かった。ありがとうシャマル」

そういってシャマルの頭をなでる。

シャ「い、いえ。これぐらいしか私はできませんから／／／」

ん？　この反応は・・・・

アリ「葵、どうかしたの？」

葵「いや。どこか懐かしい魔力を感じたんだが・・・気のせいか？」

すると、後方から、

？？？「あ～お～い～！！」

後ろを振り返ると、

葵「精ｒ―グベハッ」

言葉を続ける前に彼女がそのまま鳩尾に突進をかまして来た。

？？？「葵だ！　この匂い、この感触間違いなく葵だ！！　生きてたんだ！！」

そういって彼女が私の感触を確かめるようになども頭をこすりつけてきた。

その美しい黒髪と、清楚感を出す服と、顔立ちによってまさに聖人といってもかまわない。

―ジャギン

ジャギン？

葵「！？　な、なぜお前らデバイスを構えている！？」

後ろを振り返ると、なのは達がデバイスを構えこちらに構えていた。

な「葵君、その人は誰なのかな？　かな？」

フェ「私という者がありながら。その人は誰？」

は「エェ度胸やな。正妻がおりながら！」

フェイト、私はいつから君のモノになったんだ！？　あとはやて君と結婚した覚えはないぞ！？

孤「あぁー！！　ニア！！！」

ヴィ「知り合いか？」

葵「精霊皇。ニア・フォン・アースヴェル。精霊の頂点に君臨する方だ」

全員「また大物が来た！！！？」

ニ「孤狐。あんたもいたの？」

孤「あんたこそなんでここにいるのよ！」

ニ「葵のいる場所私あり」

孤「葵はボクのモノだ！」

ニ「なんですって！？」

孤「なによ！？」

二人はにらみ合い火花を散らしていた。すると、孤狐が何かを思いついたらしく。

孤「でもボクは君に勝ってるもんね！」

ニ「なにを根拠に」

孤「これ！」

そういって左手を彼女に見せる。

ニ「なによこれ？　模様？　・・・・まさか！？」

孤「ふふん♪　これは葵との契約の証し！　あんたよりもボクの方が一歩も二歩もリードしてるもんね！」

ニアは一気にこっちに詰め寄ってきて私とも契約してだのなんだの言ってきた。それに触発されたのかなのはとフェイト、アリシアも詰め寄ってきた。

その後はニアは統楽様たちに引きずられながらもとの世界に戻った。

こちらに残されたのはなのは達の説得だった。

第四話

第四話

さて、精霊皇と御三家がくると言う私にとっての大事件も一件落着した日クロノから連絡があった。

ク「でだ、明日執務官、捜査官、教導官の試験を行うことが決定したらしい。それで、午前は筆記、午後は実技試験だ。分かったか？」

葵「あぁ」

という連絡があり、まぁそれで今は地上本部が置かれているミッドチルダ。

まぁ、案内はクロノがしてくれた。

ク「ここで筆記試験を行う。だが大丈夫なのか？」

葵「まぁ、不合格の時はまた来年にでも受けるよ」

試験開始まで他愛のない話をしていると、試験官がやってきた。

ク「では頑張ってくれ」

葵「あぁ」

試「準備はいいですか？　では問題用紙です。合図があるまで――」

その後は地球でも行われている試験と同様の諸注意を受け、そして、

試「では始めてください」

私はすぐに問題用紙をササッとみて、

葵（これぐらいなら解けない内容ではない。むしろこれぐらいのレベルで合否を出すのか？）

その後は問題用紙を見ずに答案用紙に応えを書いて行く。

ＳＩＤＥ管理局

ここは大会議室。普段なら管理局の上層部が今後の方針などを話し合うためにいるのだが、現在この場にいるのはミゼット・クローベル本局統幕議長、ラルゴ・キール武装隊名誉元帥、レオーネ・フィルネス法務顧問相談役などの伝説の三提督。

そして地上本部総司令にして首都防衛隊代表兼防衛長官のレジアス・ゲイツ中将、そしてリンディ・ハラウオン提督とその息子で葵を案内したクロノだ。

しかし今全員は葵の取った行動に口が空いて威厳のかけらもない表情だ。

ラ「あ、あれはどういうことじゃ・・・・」

ミ「問題用紙を一回だけ見てあとは答えているだけなんて・・・・」

レオ「ん？　どうやら試験官に何か聞いているぞ？」

そういって監視カメラの音声を上げるように指示を出す。

葵『申し訳ありません。この問題用紙は回収するのですか？』

試『い、いえ。回収はしません。お持ち替えるようにしてますが』

葵『そうですか。ありがとうございます』

すると彼は何かを問題用紙に書き始めた。

リン「何かしら？」

レジ「拡大しろ」

レジアスもやはり興味があるのか拡大するよう言うと、そこに書かれていたことに、

全員「！？」

驚きを隠せていなかった。

ク「あれって・・・魔法理論！？」

葵は問題用紙における魔法理論の問題点と改善点、さらには持論ではあるが組織の内部変革など様々なことを書き込んでいった。

レオ「・・・・彼は本当に何者なんだ・・・」

レジ「おい！　答案用紙の方を拡大しろ!!」

答案用紙の方を拡大すると、その紙にはすでにすべて埋まっており、ざっと見ただけでも合格は必然だった。

ミ「あ、ありえないわ・・・・」

全員がもう脱帽だった。

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

―三時間後

試験が終わり彼はクロノに案内されて食堂に来ていた。

昼食時なのか食堂は混雑していた。

葵「・・・・まずいな。適当に頼んで、適当に座るか」

そう言って安いものをたんだ。そして、近くにある椅子に座る。

葵（ミッドチルダにもかかわらずなぜ日本円が使えた?）

とまぁ、謎があったが彼は出題された問題用紙を見つつ、さらにそこに考え方の違いをかきこんでいく。

すると、

二人の女性がいた。

???「すみません。相席いいですか？」

葵「どうぞ。この時間ですから」

???「ありがとうね。私はクイント、クイント・ナカジマ。で、こっちが同僚であり親友の」

???「メガーヌよ。メガーヌ・アルピーノ」

葵「ご丁寧どうも。私は神無月葵と申します。失礼ですがナカジマさんは地球の出身ですか？」

クイ「えぇ。まぁ夫の方なんですけど、祖先がそうらしいわ。あなたはなぜここに？」

葵「（隠す必要もないか）試験を受けに来たんです」

メ「へぇ。何の試験を？　執務官かしら？」

葵「えぇ。執務官も受けましたね」

クイ・メ「「も？」」

葵「あと捜査官、教導官を受けました。まぁ自信はそこそこあるんですがね」

クイ「そ、それをいっぺんに？」

葵「えぇ」

メ「ならいい情報教えてあげましょうか？」

葵「？」

クイ「いいの？　隊長に怒られないかしら？」

メ「大丈夫でしょう。ゼスト隊長なら」

何やらかやの外になったな。

メ「貴方の実技試験の相手はおそらく【ストライカー】よ」

葵「ストライカー？」

クイ「【エース】と呼ばれているのが技術が優れていて、華麗に優秀に戦える魔導師。で、【ストライカー】というのは、その人がいれば、困難な状況を打破出来る、どんな厳しい状況でも突破できる、そういう信頼をもって呼ばれるの」

なるほど。

葵「信頼、信用。仲間が互いにそれを持っていないとできないことでもありますね。互いに信じ互いに信じあう。なるほど。ある意味

楽しみになってきました」

少し笑みをこぼすと、

クイ「・・・／／／／（か、かわいいわね。子供みたいだけどどこか大人の雰囲気もある・・・はっ！　ダメ、私には娘たちと夫が！）」

メ「／／／／（食べちゃおうかしら。ちょうど娘にもお父さんが・・・ダメダメ！）」

時計を見るとそろそろ時間なので、

葵「では失礼しますね。時間なので」

メ・クイ「「は、はい！」」

食堂をあとにすると、クロノと出会い、試験会場に案内された。

ＳＩＤＥメガーヌ・クイント

メ「はぁ～、あの子可愛かったわね・・・」

クイ「う、うん。娘にもいいかなって思っちゃったわ」

？？？「お前らいつまで食べてる！　時間だぞ！！」

メ・クイ「「は、はい！！」」

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

ＳＩＤＥ管理局

―数分前

ク「試験結果が出ました」

リン「それで結果は？」

ク「全科目において満点。過去最高得点です」

その言葉にもはや驚くのもバカらしいお思ったのか四人は溜息が出ていた。

レオ「彼はいったい何者なんだ・・・。で、相手は誰を用意したんだ？」

レジ「ふん、そう簡単に合格してもらっては困るからストライカーを二人、そしてそいつの部下二人だ」

ラ「相変わらず容赦ないなレジー坊」

ミ「あの子もかわいそうに。今回はダメかしら・・・」

そういってミゼットはリンディとクロノの方を見ると、二人は顔を青くしていた。

ラ「残念じゃが彼は「い、いえ、可哀そうなのは・・・おそらく試験官側・・・かと・・・」は？」

レジ「どういう意味だ？」

ク「か、彼は魔法なしでもSランク並みの魔導師と互角、いえ下手すれば圧倒して戦えます。実際彼と僕が戦った際、彼は魔法を一切使っていません」

ミ「も、もし彼が魔法を使ったらどうなるの？」

リン「時の庭園をご存知でしょうか？」

ラ「あ、あぁ」

リン「あれを一瞬で無にします」

ラ・ミ・レオ・レジ「「「「・・・・・・はぁ？」」」」

ク「あ、そろそろ時間なので彼を呼んできます」

クロノはおそらく管理局の上層部のこんな顔を見たくなかったのかさっさと退席した。

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

ク「というわけで四対一だ。分かったか？」

葵「あぁ。ところでクロノ。一ついいか？」

ク「なんだ」

葵「魔法を使わなくてもいいのか？　それとも絶対に魔法を使わなければいけないのか？」

ク「・・・その辺は任せる」

葵「了解」

まぁ、使う必要がなければそれまでだ。

私は試験会場の模擬戦ルームに入ると、

葵「あれ？　クイントさんにメガーヌさん！？」

メ「やっほ～」

クイ「昼食ぶりだね」

？？？「知り合いだったのか？」

なんか武士！　みたいな感じの人だな。

その隣では若いな。私と同じぐらいか？

葵「確か、そちらの方がゼスト・グランガイツ。管理局・首都防衛隊に所属。階級は二佐。ベルカ式カートリッジシステムを使っているため騎士の名がついた。装備は槍。その実力は一騎当千の力を持

っている。確かにストライカーの名に恥じない。で、もう一人の私と同い年でしょうか？　そちらが、ティーダ・ランスター。階級は一等空尉。精密射撃魔法を得意としており、ガンナーとして優秀な成績を残している。しかしそこだけではなく、戦術の上手さも目を見張るものがある。戦術は相手の二手、三手先を読む。そのため指揮官としても優秀」

ティ「よ、よく知ってるね」

ゼ「調べたのか？」

葵「どんな相手が来ても万全な用に。それに最低でもそれぐらいは来るだろうと想定してましたし」

まぁ、三職同時なんてまず前代未聞だろ。

エイ『やっほ～、葵君！』

葵「エイミィさん？」

エイ『今回私が審判務めるね！　勝敗の区別は倒すか倒されるか！　簡単かつシンプル！』

それでいいのか！？

葵「あ、あの質問していいですか？」

ゼ「なんだ？」

葵「さっき言ったことは本当でしょうか？」

ティ「あぁ。ま、倒せれればの話だがな」

まぁいいか。

葵「ストライカーの実力を見せていただきます」

そういって黒騎士を展開し手甲を出す。

葵「よろしくお願いします！」

そういって頭を下げた。

ＳＩＤＥなのは・フェイト・アリシア・八神家

は「ま、間にあったか？」

フェ「うん。今始まったところみたい」

ヴィ「相手は誰だ！？」

アリ「ちょっと待って・・・え・・・えぇ！？」

な「どうしたのアリシアちゃん」

アリ「相手・・・・ストライカー二人」

シ「ストライカー！？」

な「なんなんですか？　そのストライカーというの？」

シャ「簡単にえばどんな困難約何でもその人がいれば突破できるってい人のこと。それが二人なんて・・・」

リイ「厳しいな」

ヴェ「・・・そうでもないと思うぞ」

孤「うん、ボクもそう思うな」

　ヴェルと孤狐の一声に皆が「え？」という顔をした。

リイ「なぜそう思うのだ？」

ヴェ「葵様は強い。それも過去では管理局員が一生で体験することはまずないと思われるほどの戦線を生き抜いてきた英雄」

孤「それに、葵は合計で二回しか本気を出したこと無いよ。それに、本気を出したら試験どころじゃないけどね」

　そういって再び模擬戦会場を見る。

ＳＩＤＥＯｕｔ

第四話（後書き）

ということで今回は入局試験編！
相手はゼストさんとティーダ。そしてメガーヌさんにクイントさん！ちなみにこの二人は当然ハーレムには加えません！　というか加えたらまずいでしょぃいろいろと！？
ということでまた次回に～。

第五話

第五話

確かに伊達にストライカーをやっているわけじゃないな。仕方ない。司令を倒したいが、まずは。

ティーダだったか？　あいつの的確な射撃のあとにゼストとクイントの見事たな連携。さらに追い打ちにメガーヌの援護。

葵「（最低でも短時間にゼストさんかクイントさん。もしくはティーダさんかメガーヌさんの前後ろの一角を崩さないと）獄炎・・・」

腕に炎を纏わせた。

ティ「メガーヌさん！」

メ「えぇ！」

そういってメガーヌはフェイトのライトニング・アローに似た攻撃をしてきた。

葵「盾」

すると、青黒い焔によって遮られた。

それが消えると、

クイ「はぁあああああ！」

葵「ふんっ！」

クイントさんの拳と私の拳がぶつかる。だが、

葵「統楽様に比べれば軽い！！」

そのまま押し切る！

クイ「え・・・えぇえええええ！！？」

押し切られたことにそうと驚いている。

ゼ「はぁあああああ！」

次はゼストさんが後ろから。ティーダを見ると、メガーヌさんがいない。チャンスか！

葵（エクスは広域探索、ルミルは魔法位置情報を）

エ・ル《《イエスマイマスター！》》

・・・見つけた。

一気にティーダに攻め寄る。

ティ「それぐらいは分かって・・・え！？」

葵「残念」

すると、ティーダに攻め入っていた私が粒子となり消えた。

ゼ「なんだあれは！？」

そして、

葵「お久しぶりです。メガーヌさん」

メ「え・・・なんで！？　しかもＢＪが白色なの？！」

援護していたメガーヌさんを探し出し、そこで白騎士で攻撃。

葵「ギルノーシュ・ブレイカー！！！！！」

ゼロ距離砲撃。まぁＳＬＢに比べればまだまだ・・・・

葵「さて、メガーヌさんは落としましたよ」

ＳＩＤＥリンディ

レジ「開始、一分もたたずに一人が・・・」

ミ「な、なんだったのあの魔法は・・・」

ラ「突然消えた・・・粒子みたいに・・・」

レオ「・・・チートだな、もはや。彼が敵に回ったら管理局員を

全員ストライカーにしなければならないような気がしてきた」

私とクロノは彼の実力を知ってるが自分より格上の相手を本当に簡単に翻弄している。

リン（彼はおそらくだけど局員では勝てないような気がして来た）

ク「〈母さん。彼の師匠をご存知ですか？〉」

リン「〈い、いえ・・・クロノは知っているの？〉」

ク「〈はい。彼の師匠は神です〉」

私の息子が壊れた・・・・。神なんてこの世に・・・

ク「〈母さん。彼の世界は僕達が知っている世界とは違うんです。それに彼の師匠とも出会っています〉」

もう彼の存在がでたらめじゃなくて彼の世界そのものがでたらめのような気がしてきたわ。でも、それが逆に彼らにとっては普通なのよね。

S

IDE　Out

葵「獄炎拳嘗覇！！！」

炎を纏わせ、砲撃のようにクイントさんに放つ。

クイ「え!?　ちょ、それは!?」

有無を言わさずに撃破。

クイ「・・・オーバーキルじゃないけどきついわ・・・」

さて、残すはストライカー。

ＳＩＤＥゼスト・ティーダ

ティ「ゼストさん」

ゼ「なんだ、ティーダ」

ティ「俺達生きて帰れますかね?」

ゼ「・・・多分な」

葵「さて、残りは二人」

ゼ「すごいな君は。これほどの実力とは・・・」

ティ「見たことのない魔法だから気をつけろとはクロノ執務官に言

われたが・・・こうも差がひらくとは」

葵「正直にえば経験です。戦争、争い、闘争。血で血を洗う戦いを経験し、生き残れば嫌でもそう言う術を身につけます。局にはそう言った経験者がいないに等しい。立派なことですがね」

ゼ「そのような経験を君はしたのか？」

葵「ただ後方で臆病に震えていただけですよ」

ゼ（違うな。こいつは間違いなく・・・・）

ティ（ストライカーとかそういうレベルじゃない。彼は紛れもなくその世界の英雄クラスだ）

さて、こちらも少し本気で行こうか。ストライカー二人だ。

葵「エクス、ルミル。Ｗシンクロ！　二人に真の戦いを見せる！」

エ・ル《《イエスマイマスター！　Ｗシンクロ！！　モード青騎士！》》

青騎士の騎士甲冑に変更し、【絶対的勝利を約束された剣】を構える。

ＳＩＤＥなのは・フェイト・アリシア・八神家

葵が青騎士に装備を変更した。

は「やっぱ、あの騎士甲冑はきれいやな～」

シ「はい」

ヴィ「海と空。その青だっけ？」

シャ「黄金色に輝くのが太陽」

な「でもあの騎士甲冑似あうの多分、ううん。ぜったい葵君しかいないの」

フェ「うん。葵だから綺麗なんだよ。そして強い」

アリ「葵、頑張って」

リイ「・・・ヴェル。ひとつお願いがあるんだが」

ヴェ「ん？　なんだリイン？」

リイ「（ごにょごにょごにょ）」

ヴェ「なんで知ってるの！？」

小声でリインフォースに迫る。

リイ「知らないとでも？　お前ばかりずるい」

ヴェ「・・・分かったわ。いいだろ」

孤（二人とも苦労してるね。でもボクは葵のそばにいつでも寝ていいし。これ子狐になれる特権だよね♪）

後半は全く関係ないことで相談されていた。

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

ＳＩＤＥゼスト・ティーダ

ティ「・・・あり得ないだろあの魔力」

ゼ「あそこまで鍛えるのにどうやって・・・」

葵が剣を構えると、次の瞬間にはその場にいなかった。

ゼ「！？」

ティ「はや・・・ゼストさん！　後ろ！」

―ダンダンダン

魔力弾を三発撃つが、それを難なくかわす葵。それどころか、

ティ「なっ！？」

今度はティーダとゼストの間に入り、

葵「ハァアアア！！」

ティーダをそのまま蹴り飛ばし、後ろにいたゼストにはそのまま剣で槍を弾き飛ばす。

だが、ゼストはそれをうまく槍で防ぐ。

ゼ「き、君には驚かされてばかりだな」

葵「はるか上にいる人に教えられてますから・・・ですが、これで終わりではありませんよ？」

私の周りにはすでにいくつもの光りの矢が展開されていた。

ゼ「いつの間に！？」

だが、それすらも。

―ダンッダンッ

ティーダによって撃ちおとされる。だがこれも想定内。

ティ「そう簡単に・・・はぁ！？」

ティーダが自分の周りに展開されたモノに気付き驚愕の声をあげる。これは囮。本命は君がこれを撃ち落とすことを想定して君の場所を割り出すこと。そしてその後まわりに魔法の矢を展開すれば・・・

葵「ファイヤァー！！！」

ティーダがいたであろう場所に爆煙が起こりティーダは戦闘不能。
そして、剣先をゼストの首に当てる。
エイ『・・・・』
葵「エイミィ」
エイ『あっ！　しょ、勝者神無月葵。試験は以上です！　お疲れさまでした！！』
ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

第六話

第六話

葵「すみません、四人とも並んでもらえますか？」

ゼ「？」

そういって葵の言うとおりにして、

葵「癒しの風よ。汝の力を持ってこの者の怪我を癒したまえ。ヒーリーングフール」

そういって全員の治療を行った。

ゼ「これは・・・すごいな」

ティ「キズが一つもない」

クイ「治癒魔法も得意なんだ」

メ「こりゃ勝てるわけないわね」

四人とも葵のことを絶賛している。

ゼ「で、君はどうしてそのような力を手に入れたんだ？」

葵「護るため。でしょうか」

全員「？」

葵「大切な者を。家族、友人そう言った私にとってかけがえのない大切な者たちを守りぬくために」

ティ「そうか・・・。俺も妹がいるからその気持ちはわかるな」

クイ「えぇ。私にも家族がいるから」

葵「それから、今日はお忙しい中ありがとうございました」

そう言って頭を下げる。礼に始まり礼に終わる。

今まではなぜしなかったか？　忘れてたんだ。単純に。

汗をかいたので服を着替えていると、

ティ「・・・・・」

ゼ「・・・（若いのにこの傷・・・尋常ではない戦いを生き抜いてきたんだな）」

二人の視線が・・・あぁ、この傷か。

葵「この傷が気になりますか？」

ティ「す、すまん」

葵「いえ。最初に言いましたよね。臆病にも後方でおびえていた。

と」

ゼ「ウソだろあれ」

葵「・・・・（二人なら・・・話してもいいか）そうですね。私は前線で戦いました。何人もの人の命を奪いました。生き残るために、明日を見たいために、未来をつかみたいために」

そういうと、彼らはしんみりした。だが、

ゼ「ゼスト・グランガイツだ。お前と友になりたい」

ティ「ティーダ・ランスターだ。俺もお前とは仲良くやりたい」

葵「えぇ。喜んで」

そういって二人と握手を交わし友の約束を交わした。

その後、四人と別れると模擬戦を観戦していたなのは達と合流したが、クロノに彼と話があるから待つようになのは達は言われた。

その後リンディ提督がいる場所に案内される。

案内された部屋に入ると、

リン「クロノ執務官。ここからは我々五人の極秘会談になります。あなたは退室してください」

ク「・・・分かりました」

そういってクロノが退室したのを確認し。

葵「やはりあなた方でしたか。そしてはじめましてかな。レジアス・ゲイツ中将」

レジ「なぜわしの名を？」

葵「一通りは調べておきましたので。それで結果にはご満足いただけましたでしょうか？」

すると、四人とも、

ラ「満足も何もむしろ入ってくれといったのはこちらじゃからな。文句なしじゃ」

レオ「だが、階級が三佐では低すぎる。最低でも二佐、いや将校だな」

葵「謹んで遠慮します。最初の予定通りにお願いします。中将の方にもすでにお話が言っていると思いますが」

レジ「分かっている。だがそれではわしが損じゃないか？」

そう言うと思っていましたよ。

葵「はい。ですから私が作る部隊は【独立機動部隊】。つまり陸海空いずれにも属さないいわば第四勢力とでも言っておきましょう」

ラ・レオ・ミ・レジ「「「「なんだと（じゃと）（ですって）！？」」」」

そう、これがまず手はずだ。

葵「三提督。なぜミッドチルダの治安が負担低下ご存知ですよね？」

ミ「え、えぇ」

葵「それを防ぐためです。極力私が作る部隊は陸との連携を重視。空と海には戦力がかなりあるはずです。なら私は必要ないでしょう」

ラ「じゃが！？」

葵「私は言ったはずです。管理局を内部から改革すると。そのためにはどこにも属さないと言うことが一番なんです。ですがそれよりも優先すべきは治安回復。そのためには陸との連携を重視せざる得ない」

レジ「なぜ？　と聞いてもかまわないか」

葵「海の広域探索という名における侵略行為、本局による陸からの引き抜き。その影響で陸の局員の数は非常に少ない。そしてその割に合わない仕事の量。これが原因で結果治安低迷。最悪の負の連鎖ですね。なら、新設する部隊は地上か本局どちら寄りにするのと聞かれたらまず地上寄りにしていくべきでしょう。市民のためにも」

ミ「その心は変わらないのね」

葵「えぇ」

するとミゼットは一息つき、

ミ「了解しました。こちらで何とかしましょう」

葵「御迷惑をおかけします」

そういって一礼した。

その後、執務官、教導官、特別捜査官の三つを拝命したと同時に三佐の階級も貰った。何でも空を飛べるので三等空佐の階級になるらしい。

レジ「で、部隊名はどうするのだ？　もう一層この場で考えておけ」

葵「・・・・・三提督直轄になるので三提督直轄独立機動部隊になりますね」

ラ「味が無いのぉ～」

葵「は？」

ミ「もっとかっこいい名前にすればいいのよ！」

葵「・・・・何言ってんだ！？」

レオ「中二病だったか？　しかし、お前さんがおった国のアニメは面白いな！　あんな感じの名前そにしたらどうじゃ！？　ソレスタル〇ーングとか！」

ラ「そうじゃ！　フェ〇スでもいいぞ！」

・・・こいつら本当に上層部の人間か？　レジアスが頭を悩ませているぞ。名前ね。名前、名前・・・・これでいっか。

葵「・・・・Ｇｕａｒｄｉａｎ」

リン「Ｇｕａｒｄｉａｎ。守護者という意味ね」

葵「えぇ。まぁ最終目標ですね。私の」

そしてその日のうちに私を隊長とした独立機動部隊ガーディアンが誕生した。

第六話（後書き）

というわけでちょっとミッドに日本のアニメブームが起きているというちょっとした設定を加えてみました！

第七話

第七話

試験も終わり今日は一日ゆっくりしよう。そう思い心の世界に行くと、

葵「・・・・だれだ？」

コロッセオから魔法とも違う力を感じてそちらに足を運んだ。

そこには顔見知りもいた。だが、見知らない女性が約七人いた。・・・いや、この感じどこかで・・・

考えていると後ろから、

ウ「葵様？」

葵「ジェイルにウーノか？　この子たちはウーノ、君の妹か？」

そういってコロッセオで訓練している

すると、ウーノがかなり驚いた表情をしていた。

ウ「え？えぇ？　あ、葵様なのですか！？」

これは珍しいな。横のジェイルを見ると腹を抱えて笑っている。

葵「はぁ、ジェイル、お前教えていなかったのか？」

ジェ「ははははっはっはっは！！！」

この反応はわざと教えていないのか。・・・それにしてもうるさい。

葵「フンッ！！」

―ガベキッ

ジェ「ゲブラッ！？」

バカはさっさと始末すべきだろう。

ウ「あ、あの・・・葵様？」

葵「大丈夫だ。こいつは死んでいない。友人としてバカを矯正するのも仕事だろう。それより彼女たちは？」

ウ「そ、そうでしたね。彼女たちは私の妹達です。あと、貴方のことも多分知らない妹もいると思います。ですから、妹たちに教えてあげてください」

葵「分かった」

さて、このバカもつれて行かねばらないか。ジェイルの白衣と服の襟元をつかみ、そのまま皆がいる場所に下りた。

？？？「てめぇ、何もんだ！？」

赤髪で金色の瞳、えらく元気のいい子が拳を構えてこちらをにらんだかと思うと、

???「管理局の人間っすか!?」

今度はまた違う子か。元気は先ほどのことといいぐらいだが、明るい子だ。

なにやらその二人の子の合図と同時に私を知らない子たちが武器を構えるが、

チ「・・・・こ、この魔力は」

クア「・・・ま、間違いありませんわ・・・」

ト「だ、だがあいつは子供だったぞ!?」

ドゥ「確認するわね。あなたは葵?」

私を知っている者たちはどうやらすぐに分かったみたいだな。

葵「答えはイエスだ。さて、はじめましてといった方がいいか?私の名は神無月葵。この世界の保有者。とでも言っておこう」

???「では、姉さまたちを助けたと言うのも」

葵「まぁ、そうなるな。気にするな私の気まぐれだ」

あれ?　空から降って来たときに出会っているはずなんだが・・・

・あっ。そうか確かウーノ、ドゥーエ、トーレ、クアットロ、チンク以外は寝てたな。

　すると、チンクが、

チ「まぁ、気まぐれでも助かったのには違いが無い。それよりも自己紹介をしろ」

ウェ「はいはーい！　あたしはナンバーズ１１、ウェンディっす！　よろしくっす！」

セイ「私はナンバーズ６、セインだよ」

オ「・・・ナンバーズ８、オットーです・・・」

ディ「ナンバーズ１２、ディードです、よろしくお願いします」

セッテ「ナンバーズ７、セッテです」

ノ「ナンバーズ９、ノーヴェだ。さっきはすまなかった」

ディエ「ナンバーズ１０、ディエチです」

　自己紹介も終わり、ノーヴェが先ほどのことを謝っている。

葵「気にするな。こちらもいきなり現れたのだ。こちらこそ済まなかった」

　そういって頭を下げる。

ノ「い、いやいいって!!　あ、あたしが悪いんだから!!」

その光景を見ていたクアットロが、

クア「相変わらず不思議な方ですねぇ～。私たちが戦闘機人だと知っていていも普通の人として扱ってくれるのですから」

その言葉にナンバーズの子たちが驚いていた。

セッテ「知っているのですか？　・・・私たちは人ではありません」

葵「は？」

ウェ「そうっすよ！　普通はこう恐がるもんじゃないのかって思うっす・・・・」

葵「・・・・君たちはよっぽどのバカか、それともあほか？」

ノ「んだと!?」

葵「いいか。戦闘機人だろうが、一般人だろうが結局は同じ命の下に成立しているんだ。出生や経歴など関係無い。命は何においても平等に扱われなければならない」

クア「でも、それは所詮綺麗ごとなのでは？」

葵「だろうな。偽善だろうと綺麗ごとだろうと言われても結構だ。でもな。君たちが生きているのに偽りはないのだろ？」

すると、全員が首を縦にふる。

葵「ならそれで理由になるんじゃないか？　もう私の口癖みたいになっているが生きているならそれだけで幸福になる権利も未来をつかむ権利もある。君たちには特にな」

そう言うと、皆が唖然としていた。

ウェ「あ、あの葵兄は恐くないんすか？　私たちは人じゃないっすよ？」

葵「上の五人の姉にはいったが私も人ではない。正確には半分人だがな」

オ「では残りの半分は？」

葵「精霊だ」

ディ「・・・精霊？」

まぁ、過去話は好きではないが私のことを説明するとやはりこうなるか。過去のことを話し、

葵「これでも化け物だと思うか？」

すると、全員が首を横に振るう。今さらだが私でさえ自分のことを化け物と思っている。だが、私が出会った者たちはそのことを否定する。本当に救われているのは私なのではないのか。

葵「ありがとう。それと一緒だ。恐いという恐怖感情はない。それに君たちのようなかわいい子たちがそんなことを気にするな。君た

ちは君たちだ」

そういって近くにいたノーヴェとウエンディの頭をなでながら言った。

全員「・・・あ、ありがとう（ございます）（っす）／／／」

その後はジェイルと他愛もない世間話や、彼女たちの訓練につきあったりと色々とした。

そして今はジェイルとウーノと話をしている。

ジェ「しかし、なぜ君は管理局に入ったりしたんだ？」

葵「簡単にえば即戦力が必要であると言うこと、そして、偽りの正義を掲げる屑どもを排除するためだ」

ジェ「ははははっ！　管理局を崩呼ばわりとはえらい直球だな！」

ウ「偽りの正義？」

葵「正義を掲げる者が子供を戦場に送るか？　そもそも正義を語っているのに非人道的な行為をするか？　そう言った屑以下の者たちを排除するためだ」

ジェ「それはいい！　ぜひその排除作戦には私も加えてほしいものだ！！」

葵「そのつもりだ。まぁ今はあの四人が全力で君の罪を消すのに働いているだろうし、君の罪が消えれば私の下で働いてほしい。それ

に君の技術力はとても素晴らしい物だからな」

ウ「・・・再び戦乱を起こすのですか？　そのためにドクターを？」

葵「違う。彼の技術は方向性を変えれば医療の方で役にたつ。介護、義手、義足そう言ったものへのな。それに人はすぐに確保できそうだ」

　そういって私は何枚かの書類を見る。それは上層部の勝手で罪をなすりつけられた管理局員だ。

葵「この者たちは屑とか言われたり、無い罪で管理局を退職に追い込まれたものたちだ。だが、実際は違う。可能性を十分に秘めた者たちだ。これなら戦力の心配をする必要性はない」

　ジェイルとウーノはその書類を見ると、一件ただの局員ばかりのような感じがする。といってたが、

葵「こう言ったものは確かに魔法には才能がないのかもしれないが他のモノへの可能性がある。それを見つけだし適材適所におけばいい。それをするだけだ」

　余談だが、この計画の結果、葵が率いるガーディアンは海、陸、空と並ぶ第四勢力として十分やりあえるほどの実力をつけた。そして空や海が引き抜きをしようとスカウトを開始するが、恩を仇で返すものはゼロで、返り討ちにあうと言うことが多々あったとか。

まぁ、これはあと少しあとの話である。

第八話（前書き）

ＰＶ１７９，９５９アクセス　ユニーク２１，２８９人　・・・・
正直ビビりました。小説を書き始めて２か月がたち、ここまで来ました！！
まじ今まで読んでくれた方、そして読み続けている方、新しく読み始めてくれたかすべの人にありがとう！！！！

これからもがんばっていきますんでよろしくお願いします！

第八話

第八話

みなさん事件です！　事件って？　て言われても大変な事件です。それはどういうことかって？　それは場所から考えてください。現在は私の寝室！　そう【私の】寝室！

ヴェ「す～す～・・・」

私の右にはヴェルがいます。これは納得しています。なぜかって？　葵と呼ぶ代わりに一緒に寝ると言うことを約束しましたから。

ですが、

リ「ん・・・す～・・・」

なぜ左にリインフォースがいるんですか！？

葵「・・・お、起きよう。色々とまずい」

起きてリインフォースとヴェルにこのことを聞くと、どうやら、

リ「ヴェルばかりずるいじゃありませんか！　私だって葵と一緒に寝たい！」

ヴェ「私ばかりというのもあまり・・・その、よくないと思って。い、いいじゃないですか！　幸せになってもいいといったのは葵様

です！」

いや、確かにそうだけどさ。なぜリインフォースまで？

リ「あ、葵のそばにいると、その、安心するんだ。私は本来ならここにいてはならない。でも、存在の意味も、幸せをつかんでもいいって教えてくれた」

ヴェ「私もです。何度も何度も、過ちを繰り返した。でも、葵様はそれ一緒に背負うと言ってくれた。未来を見ていいといってくれた」

リ・ヴェ「「・・・・でもやっぱり不安なんです」」

二人声が重なった。でもやっぱり思っていることは一緒か。

葵「不安か。・・・・・なら大いに悩め」

リ・ヴェ「「え？」」

その答えが予想外だったのか二人とも驚いている。だが、それでも私は言葉を続ける。

葵「悩んで、考えて、行動して。そして最終的にお前らが幸せになれればそれでいい。不安をかき消そうなんてそんなの無理だ。私だって不安なことは大小さまざまある。だが、それが人生だろ。あと、お前らの名前を言ってみろ」

リ「強く支える者、幸運の追い風、祝福のエール」

ヴェ「祝福の鐘を告げる者、幸福を呼び寄せる者、新たな幸せを知

らせる者」

葵「それがお前らの意味だ。幸福を呼び寄せる者達。お前たちの犯した罪は確かに大きい。それを償うことはできないかもしれない。だが、償うんじゃなくてその分、他人を幸せにして見せろ。お前らの名の通りに」

リ「・・・出来るでしょうか？」

ヴェ「私たちに、そのようなことが」

葵「無理に一人で背負いこもうとするからそう考えるんだ。何のために私や家族がいるんだ。言っただろう、重荷が辛いなら共に背負ってやると」

ヴェ「・・・そうでしたね。葵様からいただい名に恥じぬように頑張ってみます！」

リ「私も主よりいただいたなに恥じぬように頑張ります！」

二人の眼はあまりにもまぶしかった。その目に迷いはなく決意に満ちていた。

この二人の人生という道を今歩み始めたのだろう。

葵「なら、これを渡しておこう」

そういって二人に紫色の羽のお守りを与えた。

ヴェ「これは？」

リ「羽根？」

葵「お守りだ。効力などは分かっていると思うが。一応念には念だ。渡しておく」

リ・ヴェ「「ありがとうございます！」」

だが、これで終わらせてはくれなかった。

これで終わればよかったのだ。そう、これで・・・・

葵「・・・なんでこうなった」

現在私は理性と戦っています！　なぜこうなった・・・

は「リインとヴェルばっかずるいやん！」

ヴィ「あ、あたしだって・・・葵と一緒に寝たい／／／！」

シャ「そうですね。私たちだって葵さんと一緒にいたら安心しますし／／／」

シ「別にかまわんだろ？　それとも、私たちでは不満か／／／？」

不満かどうかで聞かれると答えはＮＯ。間違い無くここにいる者たちは美人美女美少女の類だ。だが、その分私の精神と理性がすり減る。いろんな意味で・・・。

で、現状を皆さんと確認。左に、私の腕を枕にヴェルとリィン。右にはこれまた私の腕を枕にシグナムとシャマル。え？　はやてとヴィータはどこかかって？　私のお腹の上で寝てます。器用に二人が。

で、孤狐は私の枕になっています。狐の姿になって。

葵「〈孤狐、重くないか？〉」

孤「〈ん？　全然。むしろ幸せいっぱいだよ♪〉」

さ、左様ですか・・・。ちなみにベッドはとりあえず大きくしました、魔法で。はやてに迫られて・・・。

葵（・・・私が男だと忘れてないか？　というか寝よう。そうだ、寝よう。そうすれば色々と大丈夫だろう）

そう思い魔法で自分自身に睡眠魔法をかける。魔法ってこういうときは便利だ。・・・では・・・皆さんお休みなさい・・

ＳＩＤＥ八神家

葵が寝てすぐ、

は「葵君は寝たんか？」

孤「みたいだね」

ヴィ「むっ。寝ちゃったのか・・・」

シ「速いな。いつもこんな感じなのか？」

リ「いや、もっとこう話をしていたんだが・・・多分」

ヴェ「魔法を使ったな」

シャ「え？　なんで？」

孤狐が、その問いに答えた。

孤「理性が多分負けると判断したんじゃない？　みんな美人だし手を出しそうで怖かったんじゃない？　ほら葵鈍感だし。それに、彼もよく言ってるじゃん。「私よりいい男など山のようにいる」って。葵よりいい男を探す方が難しいよ」

すると、みんな「そうだ！」みたいなことといっていた。

シャ「そ、それに葵君の優しさに触れたら他の男性を探す気も無くしますしね／／／」

シ「そ、そうだな。あの優しさに何度も救われ、そこに惚れたし／／」

二人の言葉にさらにうなずく周り。

は「しかしまぁ葵君らしいんやけどさ、私ならいつでも手を出してもええのに・・・・」

シャ「は、はやてちゃん!?」

は「みんなもそやろ？　そ、それに・・・あ、葵君なら、は、初めてをあげてもええと思っとんちゃう／／／？」

全員「・・・・／／／」

すると言った本人もそうだが、その場にいた全員が顔を真っ赤にした。

は「ま、まぁそれよりも今回はこれだけにするけどな／／／」

―ちゅっ

全員「（主）はやて（ちゃん）！？」

は「まぁ、初めては互いの合意が大事やしな／／／。ほんなら別の形で。こんな絶好のチャンスを逃すわけにはいかんわけやし！」

その言葉に全員が、

ヴィ「そ、そうだよな。き、キスなら／／／」

シャ「そうですね。チャンスですし／／／」

シ「なにも葵から来なくても、こちらから行けば／／／」

リ「寝ている葵が悪いんだ／／／」

ヴェ「愛のあかしを葵様に／／／」

するとさらにここに爆弾を投下する者がいた。

孤「なら服脱がす？」

は「・・・なんで？」

その言葉に皆が唖然とした。キスするのに服を脱がす必要があるのだろうか？

孤「こういうこと」

孤狐の説明中・・・・・

全員「それだ！」

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

翌日早朝

もう一月に入ると言うことでだろうか？　少し寒さを感じ目を覚ました。

葵「・・・もう、朝か・・・痛っ」

やはり痺れたか。寝ている間もずっとしていたのか。男の腕枕なんてどこがいいんだ？

まぁ、とりあえずみんなを起こさないようにそっと抜けていると、ある疑問が浮かんだ。

葵（何だろ。この直接人肌で温められているような感じは？）

そう、肌をたがいに肌と肌を合わせている感じがしたのだ。だが、その答えはすぐに分かった。

葵「・・・はぁあああああああああああ！？」

な、ななななｎａｎａｎａ・・・・・

は「ん？　もぅ・・・あさか？」

ヴィ「んぅオハヨ葵・・・」

シ「もう朝か？」

シャ「おはようございます。葵君」

リ「おはようございます。葵」

ヴェ「おはようございます。葵様」

孤「ん？　ふわぁ～おふぁよう」

私の叫び声で起こしてしまったのだろう。だが、今はそんなことは関係ない。

葵「とりあえずおはよう皆。で、皆に質問だ。これはなんだぁあああ!?」

私は体中についている【キスマーク】について質問すると、

は「私らの愛の形や!」

ヴィ「う、うん／／／」

葵「い、いやだが「大丈夫や！　私らが進んでやったことや！　気にすることはない！」

・・・・」

もう何を言ってもむだなような気がした。それに全員が全員満面の笑み。下手のことを言えばいやな予感しか言えない。たとえばこういうの。

葵『こんなことをしてどうするんだ!?』

は『ならもっとすごいもんがほしいん?』

葵『え?』

は『あ、葵君やったらええよ』

策士はやてなら絶対に爆弾発言をする→触発されシャマル達も便乗→重大責任問題発生→ばれて魔王さま＋死神姉妹によるＯ☆ＨＡ

☆ＮＡ☆ＳＩ・・・・・

最悪な負の連鎖しかないな。うん。下手にしゃべらないほうがいいな。

そして私は話題を変えるため今の状況で思ったことを口にした。

葵「・・・それにしてもこの季節に裸で寝てよく私は風邪をひかなかったな」

すると、シグナムが、

シ「あぁ、それなら心配ない。私たちが体温で直接お前を温めたからな」

・・・今何って言った？　直接？　周りをよく見るとあちらこちらに散乱したパジャマがあった。私のもあればそれ以外のも・・・

葵「・・・一つ聞く。お前らパジャマは着とるんだろうな？」

は「なんや？　私の身体見たいん／／／？」

ヴィ「あ、葵なら別に・・・／／／」

シ「は、恥ずかしいが別にかまわんぞ／／／」

シャ「あ、葵君だいたんです／／／」

リ「み、見たいなら／／／」

ヴェ「お、皇に従うのは当然だ／／／」

孤「私のも見る／／／？」

よくみると、全員が布団やシーツを身にまとっている。

とりあえず急いで布団を出て、人数分の服、といってもなぜこういうときにＹシャツしかない！？

作者：私の妄想が「死ね！！」ぐべら！？

まぁ、ないよりましだ！

葵「これでも着ろ。無いよりマシだ」

そういって全員に作者が用意したＹシャツを渡した。

は「これ、葵君が着ていたもん？」

葵「ここには私の服しかない。というか他人のがあったら怖いわ！！」

なぜこうなったんだ！？

ＳＩＤＥはやて

葵君から受け取ったＹシャツをみんな黙っ着とるな。かくいう私もさっさと着替えた。

葵「・・・・私は昨夜何をした？　いや、すぐに寝たはずだ・・・一体何が・・・」

は「さて、私らからの葵君からも愛の形をもらおうか！！」

葵「・・・は？」

ヴィ「あ、あたしも・・・そのほしい・・・／／／」

ヴィータも参戦。あとはみんながどう出るかやな。

シ「・・・私も・・・できれば・・・／／／」

シャ「わ、私もかまいませんよ／／／」

リ「・・・ほしい。葵との・・・」

ヴェル「あ、愛のあかし・・・」

孤「よろしくね、葵／／／♪」

ふっふっふっ。逃げ場はないで、葵君。

葵「・・・・キスマークをつけろと？」

は「イエス！」

葵「・・・・・キスマークじゃないといけないのか？」

全員「は？」

葵「こういうことだ・・・」

葵君は私の前に来て、

―ンチュっ

は「・・・えぇ!?」

唇奪われました・・・。

葵「キスマークを残すといろいろと、ヤバいことが・・・魔王とか金色の死神シスターズとか・・・」

あ、葵君の眼がどんどん、暗くなっている。

葵「あのあと、ＳＬＢをゼロ距離から放たれた時は三途の川が見えたっけ。どこかバルディッシュやレイジングハートも楽しそうだったしな・・・主人にデバイスも似るのか?」

すると、ヴィータが葵の前に行き、

ヴィ「はやてばかりずるい！　あたしもする！」

そういって葵君の唇を奪った。積極的になったなぁ～。

その後は言わんでもわかるな。シグナム、シャマル、リイン、ヴェル、孤狐の順番でどんどんやって行きました！

SIDEOut

第九話

第九話

現在場所は翠屋。そして床に正座させられています。

目の前には、

な「これはどういうことなのかな？」

フェ「葵。私一緒に寝たこともキスされたこともないよ？」

アリ「葵。私もそうだよ？　なんではやてちゃんたちばかり優先されるのかな？」

目の前には魔王こと高町なのはさん。そして金色の死神姉妹ことアリシア・テスタロッサさんとその妹のフェイト・テスタロッサさん。

この状況に至るまでの回想は・・・

―葵が八神家の女性にキスし終わった数分後

葵「翠屋？」

は「そや。何でもリンディさんが今日にでもなのはちゃんの御両親に魔法に関してお話しするそうや」

葵「なるほどな」

は「で、それに関して葵君も説明するんやろ？」

葵「まぁな。それに私がいきなり翠屋に行って葵ですといっても高町家は大パニックだろ」

シ「確かに。私たちでも驚いたのだ。高町家でも神無月＝子供としか思っていなはずだ」

葵「まぁ、魔法で子供になっていましたといってら魔法の説明後だったら納得するしな」

そして、八神家総出で翠屋に行く。ちなみに今日の格好はハイネックの服を選んだ。

なぜかって？　簡単だ、首筋までキスマークがあるんだ。これを隠すのにハイネックはちょうどいい。

さて、翠屋に到着するとハラウオン家とテスタロッサ家がすでに到着していた。

葵「お邪魔します」

そういって翠屋に入ると、

士「いら・・・しゃい？」

桃「あ、あら？　どこかでお会いしました？」

美「えっと・・・どちら様？」

まぁ、こうなるわな。

な「あ。葵君！」

恭「久しぶりだな。クリスマス以来か？」

士・桃・美・「「「葵君！？」」」

葵「はい、神無月葵です。リンディ提督。どこまでお話は？」

すると、紅茶を飲んでいたリンディ提督が、

リン「大体のお話は済んだところよ。あとは葵君ね」

出来れば私がついたときに話を始めてほしかったが、まぁ、いいか。そして話をし始めた。

今さらだが何回過去の話をするんだ私は。いい加減慣れた。

葵「――というわけです。で、こちらの姿が本来の姿です」

そういって話を終える。まぁ、所詮は今までしてきたことと大差

ないが。

士「つまり君は魔法使いで、別の世界の別の地球から来たと？」

桃「な、なんとも御伽話みたいな話ね・・・」

美「う、うん」

葵「で、ここからはリンディ提督のお話ですが、何を話そうとしていたんですか？」

　すると、リンディ提督が仕事使用になった。目が明らかに今までとは違う。

リン「・・・なのはさんを管理局への入局を認めてほしいんです」

恭「なっ！？　子供を働かせるつもりか！？　なのははまだ小学生だぞ！？」

士「確かにそれに関しては私も反対だ」

　まぁ、そうなるだろうな。

　それから数十分説得に回り、さらになのはも自分のやりたいことを見つけたといって自分自身の意思を話した。

な「それに葵君もいるから大丈夫なの！」

　・・・この子は・・・

士「君もその、管理局だったか？　それに入ったのか？」

葵「えぇ。先ほど話した人間がこちらにイレギュラーとしているという情報をつかんだので。そいつを殺すために」

その直接的な表現に場が静かになった。

葵「まぁ、そのために局に入ったんですがね」

士「まぁ、葵君がいるなら大丈夫か。同じ新人何だろ？」

葵「えっと、同じ新人であることは間違いないですがね。まぁ本当なら私もなのは達には極力管理局に入ってほしくは無いんですがね」

理由は士朗さんや恭也さんと同じだ。子供が非殺傷設定とはいえ武器を持って戦うなんて見たくもないしさせたくもない。

葵「でもまぁ、彼女たちの意思を遵守するのであれば仕方がないのかもしれないがな・・・」

そう言って半ばあきらめた。

葵「ちなみに試験などはどうするんだ？」

リン「なのはさんは武装隊に、フェイトさんは執務官を、アリシアさんは技術系を目指すみたいよ」

葵「なるほどな。はやてたちは？」

は「クロノ君がなんとかしてくれたおかげで罪はないんやけど。と

いうより事件そのものがなかったことになかっとるし」

するとクロノが、

ク「一つだけ言っておこう。今回の事件と【不の者】事件において裏から手をまわしたのは葵だ。僕は名前を貸したに過ぎない」

フェ・は・な「「「そ、そうなん（なの）！？」」」

葵「まぁ、一応入局して三提督と与えられた権限をフルに利用してな。反対する者は黙らせたがな」

汚職した上層部の屑どもたちの罪を見せつけ情報機関に流させるぞと脅したら黙った。まぁそれで終わるわけもなくその後は社会的に抹殺してやった。

士「まぁ、葵君がいるから大丈夫じゃないか？」

葵「まぁ、全力で護らせてもらいますが」

桃「そう。じゅあなのはをよろしくお願いね」

プ「フェイトとアリシアも護ってあげてね」

葵「え、えぇ。もちろんそのつもりですが」

なぜいきなりこんなことを頼まれているんだ？

な・フェ・アリ「「「葵（君）に護ってもらう・・・／／／」」」

三人ともなぜか顔が赤いし、八神家の視線は痛いし・・・何この空気・・・。

士「しかしもう今年も終わりだと言うのに暑いな。葵君は暑くないのか？」

葵「まぁ、少し暑いですね。というか暖房のきかせすぎでは？」

そういって腕を少しまくりあげると、

な「あーーーー！？」

葵「どうした？」

なのはが何かに驚いたため周りを見渡すが驚くような要素は何もない。

な「あ、葵君その腕はんなの！？」

腕？　そういって自分の腕を見ると。そうだった！？　今朝のあれを忘れてた！？

すぐに袖を元に戻し、

葵「ナ、ナンノコトデショウ？」

すぐにこの場を立ち去ろうとしたが、

フェ「どうしたのなのは？」

な「フェイトちゃん！　葵君の腕にキスマークの跡があったの！！」

フェ「！？」

アリ「葵、本当なの？」

や、やばい・・・これは非常にヤバイ！！

は「あぁそれ？　私らがつけたんや！」

はやてぇえええええ！！

な「これはどういうことなのかな？」

フェ「葵。私一緒に寝たこともキスされたこともないよ？」

アリ「葵。私もそうだよ？　なんではやてちゃんたちばかり優先されるのかな？」

で、現在に戻ると。

傍から見れば異様な光景だ。小学生の前に大の大人が正座させられているのだから。

ク「・・・何ともシュールな光景だな」

えぇ。私もそう思う。正坐しても大して視線がなのは達と変わらない。

な「葵君！　わたしにもキスしてなの！」

フェ「あ、ずるい！　葵！　私にも！！」

アリ「二人とも抜け駆けはいけないよ！！　まずお姉ちゃんである私から！！」

ときどき思う。私はだんだんロリコンになっていないか？　止めよう、自分のことながら哀れになってきた。

その後ははやてやヴィータ達も加わり余計に悪化した。ただ私はその隙に抜け出し大人側に行った。

葵「・・・はぁ士朗さん。コーヒーを頼んでもいいでしょうか？」

士「あぁ。分かった。後君にならなのはを任せれそうだ」

葵「年齢を考えてください！　１１歳も年が離れていますよ！？」

孤「その辺は大丈夫だと思うよ？」

葵「なぜに？」

孤「葵、不老だもん」

おぉ。ここにきてまた新たな設定が・・・

孤「なんでも御三家がおまけでくれたみたいだよ？　ただ不老不死にすると神の領域、神聖領域に入るためそこまではできないって言ってたっけ」

葵「いや、十分不老でも神聖領域に入っていると思うが・・・」

ク「その神聖領域って何だ？」

葵「簡単に言うと不老不死や生命の創造、惑星（ほし）の構築などといった神の身業と呼ばれる物を総称してそう呼ぶ」

士「君のところの魔法もかなりでたらめな力だな。はいコーヒー。君はブラックだったね」

葵「ありがとうございます。まぁ神族も魔族も精霊もいますからね」

今さらながら確かにでたらめな世界だ。だが、私が生まれたときにはすでに魔法があると言うのが普通。そこに人、神族、魔族、精霊がそばにいるのも普通。御伽話やＳＦのような世界が普通になっているのだから。

な「葵君！　キスプリーズなの！」

フェ「はやてたちばかりずるい！！」

アリ「私たちにも愛を平等に欲しい！！」

は「だーから！　葵君は私らのもんやと何度言えば分かるねん！？」

まだあきらめてなかったのか・・・。まぁ一番驚いたのは今どきの子供は発展しすぎだろいろいろな意味で。

葵「どうすればよろしいのでしょうか？」

な・フェ・アリ「「「キスちょうだい（なの）！！」」」

葵「下手をすれば私警察に呼ばれるよな」

ク「黙秘権を行使する」

リン「息子と同じ」

目線を士朗さんと桃子さんに向けるとすっごい満面の笑み。そしてプレシアさんも。

ただ一人恭也さんだけはすっごい殺気を飛ばしている。

すると、なのはが私の目の前まで来て、

な「葵君・・・わたしのこと嫌いなの？」

葵「い、いやそんなことないぞ！？」

いきなり泣き出しそうななのはをなだめるためになのはの視線まで腰を下ろす。そう言って頭をなでた。だが、これが判断ミスだった。

な「なら大丈夫だね♪」

―ちゅっ

葵「・・・・・・はっ？」

今唇に何か触れませんでした？

―シュウウウウ

な「痛っ！　これが葵君との契約の証し・・・」

フェ「な、なのは何を！？」

アリ「そ、そうだよ！！」

な「じゃあ二人ともキスをすればいいの！　今が絶好のチャンスなの！」

フェ・アリ「「そうだね！」」

葵「はっ！！　私はなｎ「いただきます！」「フェイトに続いて！」は？」

―チュ

―ちゅっ

―シュウウウ

そして二人に刻まれた模様。

・・・あぁ、なんかだんだん私が・・・鬼畜に・・・

は「ずるいで二人とも！？　私かてする！」

ヴィ「あたしもだ！」

シ「なら参加しよう」

シャ「そうね」

リ「私も行くとしよう」

ヴェ「もちろん私もだ」

その後八神家も介入。あぁ、本当に私は幸せ者なんだろうが・・・
子供に手を出すなんて・・・

葵「あぁ、なんということをしたんだろう・・・」

私は部屋の隅で暗いオーラを出しながら。

士「あ、葵君？　大丈夫かい？」

葵「あぁ、そう言えば士朗さん。あなたは何か流派に入っていましたね？」

士「あ、あぁ」

葵「介錯お願いします・・・・」

士「いやいやいや。その必要はないから！　だから頼むからそのどこから出したか分からない包丁をしまいなさい！！」

士朗さんの必死の説得と恭也さんによる包丁没収により切腹は諦

めよう。

葵「・・・・はぁ、なぜ私はこんなことを・・・」

恭「そんなにオレの妹は不満か？」

葵「・・・想像してみてください。なのはぐらいの、あなたの妹と同い年の女の子にキスされた自分を」

恭「・・・・罪悪感があるな」

葵「まぁ、それよりも確認しますか。聖夜の書」

久々の登場聖夜の書。

そしてなのは達の項目を確認すると、

【閃光の騎士　高町なのは】【雷鳴の騎士　フェト・テスタロッサ】
【轟雷の騎士　アリシア・テスタロッサ】

なんともまぁぴったりな称号で・・・・。

その後はなのは、フェイト、はやて、アリシアの試験と、シグナム達の嘱託魔導師としての試験を受ける日時の通達が行われた。まぁこちらの文化や風習も考え三が日以降に実施することとなった。

第九話（後書き）

最近ｓｔｒｉｋｅｒｓが終わったら何しようとなど気が早いことを考えています。
というわけで真・恋姫？無双かＩＳ－インフィニットストラトスのどっちかに葵を飛ばしたいな～と考えています。
※友人に言われて気付きましたが期限を一週間とします。

ご意見などあればお願いします！

第十話（前書き）

現在ＩＳ２票！　真恋０！　さてどっちが勝つ！？

第十話

第十話

ＳＩＤＥアイン

リ「さて、どうしたものか」

私があることで悩んでいるとそこに、

ヴェ「ん？　リインフォースか。どうした？」

リ「ヴェルか？（ん。まてよ。確かヴェルも）」

ヴェ「ど、どうした？　私の顔をじっと見て」

リ「なぁヴェル。お前も確かユニゾンデバイスですよね？」

ヴェ「えぇ。葵様としかできませんが一応は」

リ「なら！　少しばかり手伝ってもらえないでしょうか！？」

ヴェ「？」

そして、ヴェルに主についについての説明と、今考えていることを離す。

ヴェ「ふむ。なら葵様にもご相談すべきでは？　あとお前自身のマスターにも」

リ「そうだな。説明だけはしておくか」

ＳＩＤＥｏｕｔ

私は今昼食をはやてと一緒に作り終え、皆がそろったのを確認し食べ始める。料理は朝食で余った鮭で作ったサケチャーハンと中華スープ、後サラダだ。

ヴェ「あの、葵様」

葵「ん？　どうした？」

急にヴェルが話しかけてきたので、何かあったのかと思うと、

ヴェ「リインから話があるようです」

リ「はい」

かなり真剣な目だな。

は「リイン？　抜け駆けとかちゃうやろな？」

シ「ブフゥー」

ヴェ「ごほっごほっ？！」

シャ「は、はやてちゃん!?」

孤「リイン、だいた～ん」

リ「ち、違います！　こ、これは皆にも話しておくべきことですので！」

全員顔真っ赤だな。抜け駆けってなに？

葵「落ちつけ。後シグナム、ヴィータ、水だ」

ヴィ「あ、ありがとう」

シ「すまない。ところでリイン。話とは？」

リ「あぁ。主のために新たなユニゾンデバイスを作ろうと思うのです。そのために主と葵のお力を借りようかと」

ユニゾンデバイスか。なら確かにはやて、ヴェル、リインは適材だな。だが、

葵「二つ質問するがいいか？」

リ「どうぞ」

葵「何故ユニゾンデバイスが必要なのか？　またそれを作る上で何故私が必要なのか？　この二点だ」

一つ目はいたって単純。はやては今シュベルトクロイツがあるは

ずだがそれではだめなのか。二つ目はデバイスを作る上で私は必要ないと思うのだが。

リ「一つ目ですが主の魔力は膨大です。少なく見積もってもSオーバー。騎士杖だけでは制御が間に合いません。そのため私の代わりとなるユニゾンデバイスを早急に作るのが上策かと」

ヴェ「二つ目は葵様は疑似リンカーコアを独自で作る技術を持っています。ならそれを持ってすれば簡単に作れるのではと思いまして」

葵「なるほどな」

シャ「でもユニゾンデバイスを早急に作る必要性はあるの？」

シ「おそらく主はやてが管理局に入局する意思を示したからだろう」

ヴィ「確かにな。細かい動きもできなきゃまずいしな」

葵「・・・一つ目は納得した。二つ目だがこれは止めておけ」

リ「何故だ？　あれなら簡単だと思ったんだが」

葵「ユニゾンデバイスというのは適合率というモノが関係してくるんだよな？　で、下手をすれば死に至る可能性もあると」

ヴィ「あぁ。でもよ、葵はヴェルとユニゾンできたよな？」

葵「まぁ、私がヴェルに合わせるように魔力を調整したからな。でだ、話を戻すが私が作る疑似リンカーコアがはやてのコアと適合するかどうかがわからない。云わば博打になるため止めておくことを

進める」

リ「ではどうすれば・・・・」

葵「一つだけ手はある」

は「なんや？」

葵「はやての体内でコアをコピーしそれをもとに作れば何とかならないか？　技術は管理局の者を使えば何とかなるだろ。私からも声はかけてみる。マリエルあたりが協力してくれるだろ」

リ「！　そうか。その手が・・・・」

ヴェ「さすがは葵様！」

は「そな、善は急げや！　八神家の新しい葵君と私の愛の結晶（家族）作り開始や！」

葵「おいはやて?!　今変なこと言わなかったか?!」

シ「そうです！」

おぉ。シグナムが珍しく反論「そこは私たちではないのでしょうか?!」おい!?

は「む～。しゃあないな。じゃあ私たちの愛の結晶作り開始や！」

ついに副音声も無くなった!?

全員（葵・ザフィーラ除く）「おー！」

ザ「・・・元気を出せ葵」

葵「ありがとうザフィーラ」

それから数日後心の世界をはやてたちに開放し、リイン、ヴェル、はやて、そして局から来たマリエルとで協力し新しいユニゾンデバイス政策を開始した。

ちなみにマリエルが、

マ「な、なんですかこの機械は！？　これって局で使っているより性能が上？！　それにこっちはまだ局でも開発中のより良い！　こっちはまだ開発どころか設計もされていない物が？！」

と、目が怖いぐらい輝いていた。比較はバトルマニアモード（シグナム）＜機械オタク全開（マリエル）といった感じだ。

その影響か本来なら心の世界に入っても一週間はかかるだろうと踏んでいたモノが、

マ「で、出来ました・・・・」

三日で完成しました。

葵「これがご都合主義というモノか・・・・」

は「あ、葵君！？　それは言ったらアカンって！」

葵「？　そうなのか？」

うむ。メタ発言は控えよう。で、今ここには、真っ白に燃え尽きたマリエルがイスに座って某ボクシングマンガみたいになっている。

で、その真っ白に燃え尽きたマリエルのそばにはカプセルの中に入ったリインフォース（子供ｖｅｒ．）がいた。

葵「・・・・シャマルに任せるか。頼めるか？」

シャ「はい。シグナム手伝ってもらっていいかしら？」

シ「あぁ」

そして、シャマルとシグナムはマリエルをベッドに寝かした後すぐに戻ってきた。理由は単なる過労だから少し寝れば元に戻るとのこと。

リ「では、主。これを」

そう言ってあるボタンを渡した。

リ「それを押せばこの子が目覚めます」

は「分かった。ほないくで！　ぽちっとな！」

―ポニッ

・・・何とも柔らかそうな音を出し、カプセルが開くと、

？？？「ふわぁ～。よくねたですぅ」

葵「・・・・リイン。お前寝言でああ言うのか？」

リ「い、言わない／／／！！」

そう言いながら顔を真っ赤にして反論するが、全く説得力無いぞ。

は「・・・・ええ」

葵「どうしたはやて？」

はやての方を見るとはやてはワナワナと震えていた。そして、その時が来た。

は「めっちゃかわえぇぇぇぇ！！！」

葵「うおっ！」

リイン「ふにゅっ！？」

そのままはやては猛ダッシュでリイン（子供）に抱きついた。

は「なんやこのかわいさ！？　反則やろ！！　もう、私これだけでご飯三杯いける！！」

葵「わけのわからんこと言ってないで少し落ちつけ」

―コツン

は「あうちっ」

軽くはやての頭を小突き、リンフォース（子供）の元へ行く。

葵「これから最後の確認の意味で質問をする。まぁ、当然のようなことを聞くがあまり気分を悪くしないでくれ」

リイン「はいです！」

葵「まず君の名前は？」

リイン「リインフォースツヴァイです」

葵「君のマスターは？」

リイン「わたしのマイスターははやてちゃんです！」

葵「ふむ。問題はなさそうだ。よろしくな」

リイン「ハイです！　パパ！」

葵「・・・・・え？」

は「なんで葵君がパパなんや？」

リイン「パパがパパだからパパです！」

葵「・・・もうわけがわからん。まぁ好きに呼んでいいが出来れば葵と呼んでくれ」

リイン「ハイ。葵パパ！」

・・・・もういいや。

その後、なのは達にリインの誕生を告げるとお祝いに来たが私がリインにパパと呼ばれた瞬間あの世に召されそうになった。

ちなみにリインフォースが二人いては呼びにくい胃だろうということでリインフォースアインをアイン、ツヴァイをリインと呼ぶことになった。

第十話（後書き）

というわけでツヴァイ誕生！　かなりゴリ押しですがその辺は気にしなぁ～い。時系列にも乱れが出ているがそれも無視！

第二一話

第二一話

さて、ツヴァイ誕生から数日がたち、今日は急な連絡によって翠屋にいます。どういう連絡かというと、

桃『あ、葵くん！　今日暇！？』

葵「え？　まぁ暇ですが」

桃『なら悪いんだけどお店手伝ってくれない！？　アルバイトの子が急に熱を出して今日お休みなの！　バイト代も出すから！！』

バイト代か。魅力的だな。あれ？　でも、

葵「なのははどうしたんですか？」

桃『それがフェイトちゃんのところに遊びに行っちゃって・・・・』

運が悪いとしか言いようがないな。

葵「分かりました。お引き受けしましょう」

桃『ホント！？　ありがとう、助かるわ』

はやてにこのことを伝え翠屋に向かった。

ＳＩＤＥ八神家

は「という連絡を葵君から頂きました」

アイン「主よ。それとこれから翠屋に赴くことと何か理由でも？」

リイン「葵パパはただお手伝いに行っただけじゃないのですか？」

は「甘い！　甘いでアイン、リイン！　砂糖に練乳をぶっかけ蜂蜜を投下した甘味料並みに甘いで」

ヴィ「おぇ。聞いただけで胸やけが・・・」

あの甘党のヴィータでもこの甘さはきついようや。

は「・・・うん。私も言とってい気分が悪い。まぁ、それは置いといて。えぇか？　よう考えてみ。葵君が今行く場所は？」

シ「翠屋。高町の御両親が経営する喫茶店ですね」

は「そうや。で、なのはちゃんの御両親は？」

ヴィ「確か高町士朗と高町桃子」

は「それで桃子さんの趣味は？」

シャ「・・・・は！？　まさかはやてちゃん！！」

ヴェ「おぉ。計算高い！」

ヴィ「どういうことだ？」

孤「簡単に言うと桃子さんの趣味は着せ替え。で、葵にも何かするんじゃないのかっていう話」

は「それを見んわけにはいかんやろ！　というわけで皆行くで！」

全員「おーっ！！」

ＳＩＤＥ　ｏｕｔ

―ブルッ

葵「・・・何だ今の悪寒は・・・」

桃「どうかしたの？」

葵「い、いえなんでもありません。それより桃子さん。本当にこれを着なければならないんですか？」

桃「えぇ。もちろん！」

はぁ、とりあえず着替えるか。

そして数分後。着替えも終わり接客をし始めるが、

葵「いらっしゃいませ。お嬢様」

女性客「ひゃ、ひゃい／／／！！」

葵「ご案内します。こちらへどうぞ」

そういって礼儀正しく接客をする。周りから「本物の執事！？」「どこの人！？」などと言われている。御三家の方々になぜかたたきこまれた。特に蓮鏡様がかなりノリノリだったっけ。

で、言葉から推測されるように桃子さんが渡した服は執事などが着る燕尾服だ。

葵「メニューのほうをどうぞ。御注文がお決まりでしたらお声をおかけください」

女性客「は、はい！　ど、どうも／／／」

葵「では失礼します（ニコッ）」

女性客「～～～～～ッ／／／」

営業スマイルなんだが。

その後も同じようなサイクルでやっているとなぜか女性客の割合がだんだん多くなり全員が全員顔が真っ赤だ。風邪か？

すると、団体客が来た。席は・・・あるな。

葵「いらっしゃいませ。お嬢様方」

な「あ、葵君！？」

フェ「ど、どうしたのその格好！？」

アリ「カッコいい／／／」

葵「あれ？　なのは、フェイト、アリシア？」

ア「どうしたのよ・・・って葵！？」

す「うわぁ～。似合ってるよ！　葵君！」

葵「ありがとな。さて、では小さいお姫さま方をお席までご案内いたします」

全員「・・・お、お姫様／／／」

葵「こちらへ」

そういって五人を案内し、メニューを渡し、

葵「では、御注文がお決まり次第お呼びください。では、失礼します」

一礼し一歩後ろに下がり、その場を去る。

ＳＩＤＥなのは・フェイト・アリシア・アリサ・すずか

な「あ、葵君の執事姿にあってたね／／／」

フェ「う、うん／／／」

アリ「か、カッコよかった～／／／」

ア「それに無駄のない動き。ほしいかも／／／」

す「アリサちゃん！？　ダメだよ。私もほしいもん／／／！」

な「な！？　だ、ダメだよ！！」

フェ「うん。葵は私たちに必要だもん！！」

アリ「フェイトの言うとおりだよ！」

なのは達の席はなにやらギャーギャーといい争っていると、

ＳＩＤＥｏｕｔ

は「葵君！　来たで！！」

いきなり扉を開けて入ってくるのは八神家の皆様。

葵「・・・い、いらっしゃいませ」

あまりの元気の良さにわたしも若干引いていた。

後ろの方を見ると孤狐やヴェルまで来ていた。

葵「ではお席の方までご案内いたします」

流れ的にはさほど変わりはない。だが、

葵「お決まりになりましたらお呼びください」

は「なら！」

食べるものが決まって来たのか？

は「葵君をオーダーするで！」

葵「・・・・はい？」

ヴィ「あたしもだ／／／！」

シ「わ、私も／／／」

シャ「な、なら私も／／／」

アイン「そうさせてもらおう／／／」

ヴェ「う、うむ／／／」

孤「じゃあボクも～／／／」

リイン「リインも葵パパと一緒が良いです！」

リイン・・・おそらくお前が考えているのよりもはるか上をお前たち考えている。だって、お前以外みんな顔赤いもん。

葵「待て・・・じゃなくて。お待ちくださいお客様。そのような品は当店では扱って「あら？　葵君。休憩に入ってもらっていいわよ」ＯＨ！　なんというタイミング・・・」

思わず本場並みの声で驚いてしまったじゃないか桃子さん！？

葵「・・・あっちもあっちで恐いし・・・」

後ろからはなのは達が黒いオーラを漂わせながらこっちを睨んでいた。

葵「ちょっと、待っててくれ」

そういって桃子さんに相談した結果一応ＯＫをもらった。

葵「ちょっといいか」

そういってなのは達の席とこちら側の席をくっつけた。

葵「これで文句はないだろ」

な「おぉ！」

その後は皆と仲良く休憩時間を満喫し、休憩が終わるとともにすぐに戻ると、

不良「そこの彼女達」

不良2「今暇？　なら一緒に遊ばないか？」

おいおい。翠屋でナンパとはいい度胸しているな。士朗さんを見てみろ。恐い笑顔でこっちを見てるぞ。しかも相手はシグナム達か。まぁ分からんでもない。なのは達はまだ子供だし。

葵「・・・お客様。申し訳ありませんが他のお客様の邪魔になりますのでおやめください」

不良「アァン？　テメぇ何様のつもりだ？」

葵「ここの店員でございます」

不良2「店員はすっ込んでろ！　痛い目見たくないならな！」

そういって折り畳み式のナイフを出す。

シ「葵！？」

葵「・・・邪魔だといっているのが聞こえなかったか？」

正当防衛だよなこれ。

不良「邪魔だっつってんだろ！」

一人が突っ込んでくるが、

葵「邪魔はお前らだろ」

相手の懐に入り、ナイフの腕をつかみ一本背負い。そして背中からもろに食らい、

不良「がっ」

葵「フン！」

ナイフの持っている手を踏みつけ、ナイフを手放せさせ奥の方へ蹴る。

そしてもう一人が突っ込んできたので、顔面に蹴り一発入れ、同様にする。

葵「おいガキども。次馬鹿げた行動を起こすというのであれば今度はただでは済まさない。肝に銘じておくんだな」

心の奥底から底冷えする殺気を屑ども二人だけに当て、

不良二人「ひ、ひぃいい！」

まぁ逃げる屑。

葵「申し訳ありません。お見苦しいところをお見せして」

客「おぉおおおおおおお！！！」

するといきなりあちらこちらで拍手の嵐。

葵「ど、どうも。それよりもお前ら怪我はないか？」

シ「あ、あぁ（あ、あの葵はとてもかっこよかった／／／）」

シャ「お、おかげさまで（はぅ～。とても頼りなんル姿でした／／／）」

アイン「む、無傷だ（カッコよかった／／／）」

ヴェ「さすが葵様だ／／／！」

孤「うんうん／／／」

その後はあの屑ども二人がくるよりも注文が殺到して翠屋始まって以来の売上高だったらしい。

第一二話（前書き）

お正月なのに短い・・・そして内容が薄い！　正月なんて寝てゴロゴロとしか暮らしたことがないから何書いたらいいかわかるわけねけだろ！！！

と、少し暴走しましたがどうぞ！

第一二話

第一二話

さて時刻はもう直ぐお正月。

場所は翠屋。どうやら今日は高町家、月村家、バニングス家、テスタロッサ家、ハラウオン家、八神家でお正月を祝おうと言うことになった。

しかしまぁ、こういうお正月は初めてだな。

葵「ほれ。年越し蕎麦だ」

そう言って人数分を用意した。準備をしたのは私、はやて、桃子さんだ。

な「ん！　このおそばおいしい！」

恭「確かに。そこらへんのソバ屋で作るのとは別格だな」

葵「そう言ってくれたら打ったかいがあった」

士「え・・・これは君が打ったのかい！？」

葵「えぇ」

忍「な、何でもできるのね・・・」

アリ「むしろあんたが不可能だと言える物を探す方が難しいんじゃないの？」

す「あ、アリサちゃん・・・」

は「そやな。葵君って何でもそつなくこなしそうやし」

まぁ、不可能なことはほぼ無いな。

それから皆が食べ終わると、

葵「さて、皆は初詣はどうするんだ？」

桃「私たちはこっちよ。あ。葵君は子供たちの保護者として一緒に行ってあげてね」

そういって机に出すのは日本酒にワインなどなどのお酒の種類。

葵「・・・士朗さん、恭也さん。頑張ってください」

士・恭「「あ、あぁ・・・」」

あの時の温泉旅行の時は本当に哀れだったな・・・。

―ゴォーン

全員「あけましておめでとう（なの）（ございます）。今年もよろしく（お願いします）（な（の）（な）」

さて、除夜の鐘もなったことだし、

葵「初詣に行くか」

桃「なら、着物を着なきゃね♪」

桃子の一言に女性陣が店の奥へ・・・。

葵「そう言えばユーノ。無限書庫の司書になるそうだな」

ユ「うん。あと葵・・・さんからもらった資料のおかげで試験も突破できそうだよ」

葵「呼び捨てで構わないよ。そっちで慣れたから今さら敬語というのもな。無論クロノもな」

ク「あぁ。そうさせてもらう」

そういって食後に出された緑茶を一口口に含むと、

ユ「今さらだけど葵はすごいね」

葵「ん？　どうした。本当に今さらだな」

ユ「うん。僕から見れば君は本当の英雄だと思う」

葵「英雄・・・ね。それが人助けなどであればそう言われても誇りに思ったかもな。でも戦争における英雄だ。言い換えれば殺人鬼だぞ」

ク「いや。それは違う。君は世界を救ったんだ。そしてこちらの世界でも君は何人もの人間を救った。フェイトやはやて。プレシアにアリシア、そして夜天の書の騎士たちやアインやヴェル。そしてリイン。多分君がいなかったら間違いなくこれのどれか、いや全てを失っていたかもしれない」

葵「私はただ失いたくないだけだったんだよ。過去に失い後悔し、嘆いた。そんな気持ちをもう二度としたくないと思い必死だったんだよ。それに今はこういうしっけた話はやめないか？　どうやら着付けも終わったみたいだ・・・し・・」

な「あ。葵君どう？」

フェ「に、にあってるかな？」

は「どや？」

アリ「・・・どうかな？」

皆が一斉に出てくるとは思わなかったし、その、みんなよく似合ってるし・・・

ユーノとクロノは顔を真っ赤にしていた。多分私もだろう。

葵「あ、あぁ。にあってるよ。それに、お前らは美人に入るんだ。むしろお前らに似合わない服を探す方が難しいんじゃないか？」

シグナム達も出てきた。やはりにあっている。その、まぁ美人だし・・・。

神社に到着。さすがは初詣ということもあってか屋台もあり、その周りも活気に満ちている。

は「はぁ～。やっぱり寒いな」

な「うん。息が真っ白なの」

二人が手に息をかけながら少しでもぬくくしていたので、

葵「なら手でも握るか？」

は・な「「いいの！？」」

葵「あぁ。ほら」

そういって手を差し出すと、二人とも手を握ってきた。

葵「冷たいかもしれないが、大丈夫か？」

な「ううん。とってもあったかいの！」

は「うんうん。手袋よりええかも」

すると、後ろからは、

フェ「なのはずるい！」

アリ「そうだよ！　私も寒いんだよ！？」

ヴィ「高町！　あたしと変われ！」

シ「む、私も寒いのだが？」

シャ「いいな。はやてちゃん」

アイン「うらやましい」

リイン「リインもパパと手を握りたいです！」

だが、やはり一人だけ違う発想の者がいた。

ヴェ「ふむ。ならこれでもいいか」

―ムニュ

葵「！？／／／」

孤「なら、もうひとつ！」

―フニュッ

いきなり背中に矢笑い感触があたり、振り向くと、

葵「ヴェ、ヴェル！？　こ、孤狐！？」

背中にはヴェルと孤狐が抱きついていた。

ヴェ「左右がふさがっているなら後ろに行けばいい。それだけだ」

孤「そして葵の背中は広いから二人ぐらい楽に収まる！」

周りの視線も痛い。

その後は皆で屋台巡りをしたり初詣の御祈りを済ませたと再び誰が左右後ろを抑えるかでひと悶着あった。

だが、これもまたにぎやかで楽しい新年の幕開けだった。

第一二話（後書き）

さて、次何書こうか・・・・

第一三話

第一三話

さて、あれから数日後。再び場所は翠屋。だが、今回はアルバイトというわけではない。というのも、もう直ぐヴァレンタインデー。で、今回翠屋もそれにあずかってチョコレートの販売をしようというわけになった。

ではなぜ男の私が行くのかというとどうも意見がほしいということらしい。

桃「で、試作品なんだけどどうかしら？」

机に合ったのは色とりどりのチョコレート。定番のもあれば、イチゴ、抹茶、アーモンド、ホワイト、ココアなど様々だ。あと・・・・紫か黒か分からない物も。というか食べモノが「ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”」なんていうのか！？

それはともかくとして、

葵「なぜ、お前らがいる？」

そう。ここには大抵の女性陣・・・というか全員がいる。

は「いやぁ～。もうそろそろあれがあるからそれに向けての準備な」

葵「？　あぁ。ヴァレンタインか。誰かあげる人が決まっているの

か？」

フェ「ふぇ！？　あ、えっと・・・うん／／／」

な「にゃははは・・・目の前にいるし／／／」

アリ「・・・にぶちん／／／」

ア「アリシア、しょうがないわよ」

す「うん。葵君だし・・・」

フェイトの方はどうやらいるらしい。はやてやなのは、アリシアの方を見ても顔が赤いのを見るとどうやらいるらしいな。というか最後何って言ったんだ？　聞こえなかったんだが？

というかアリサにすずかそれはひどいぞ。

葵「しかし、お前らも作ったのか？」

そういってみる方にはシグナム、ヴィータ、アイン、ヴェル、孤狐・・・で、シャマルのは言わなくてもわかるわな。

多分フェイトやアリシアはリニスに教えてもらったんだろ。形は少し歪だが初心者にしてはよくできた方だろ。なのはも桃子さんという強力な助っ人がいる。アリサとすずかは多分ファリンやノエルだろ。はやてについては言わなくてもわかる。で、はやてに教えてもらってできたのが彼女たちだろう。

葵「リニスとアルフは誰に上げるんだ？」

　すると、リニスは耳に小声で、

リニ「そ、その・・・・ザフィーラさんに／／／」

葵「・・・アルフもか？」

アル「・・・うん／／／」

葵「ふむ。ならあまり甘くないチョコを作ることを勧める。ザフィーラはあまり甘いモノが得意ではないようだからな」

　リニスとアルフにザフィーラの好みを教えると、

リニ「！　ありがとうございます！」

アル「よっしゃ！　がんばるぞ！」

　さて、視線を机に戻す。

葵「シグナムやヴィータはどうやって作ったんだ？」

は「・・・聞かんといて」

葵「へ？　シャマルより優しかっただろ？」

シャ「何でそこで私が！？」

ア「でも・・・ねぇ」

す「あれは無いと思う・・・・」

葵「あれ？　どんなこととしたんだ」

フェ「・・・熱を加えるためにレヴァンティン出して燃やしたり」

な「細かくするためにアイゼン出して砕いたり・・・」

葵「・・・・料理にデバイス使うなよ」

まぁその辺はなんとかクリアしただろ。明らかにまずいのは・・・これだけだし。

葵「でもなぜ私を？」

アイン「いや、その・・・・試食を」

葵「？　試食？」

シ「ほ、ほら！　男性の意見も聞くべきだろ！？」

ヴィ「お、女ばっかだとそう言うの聞けないし！」

シャ「異性である葵さんの意見も聞きたいなぁ～って」

必死だな。そんなに好きなのか。そいつは幸せモノだな。

ヴェ「わたしは葵様にあげるつもりなので」

全員「！？」

葵「私に？」

孤「うん！」

エ「いつもお世話になってますし！」

ル「恩返しと好意を持って！」

嬉しいもんだな。こういうのは。

その後は少し試食をしていく。だがやはりこういうときはなんというか。

葵「ん、これいいな」

そのチョコレートはリニスとアルフに進めた甘くないチョコだった。

は「お。やっぱ葵君はそういう方が好きか？」

葵「はやてが作ったのか？」

は「せや。葵君、いっつもコーヒーはブラックとか紅茶もストレートで飲むからもしかしたらって思ってな」

周りを見ると何やらメモを取っている女性陣。すると奥から。

桃「なら葵君。これも頼めるかしら？」

な「お母さんも葵君に!?」

フェ「きょ、強敵登場・・・・」

桃「あらやだ。違うわよ。士朗さんに上げるチョコの試作品。ただ、これはあなた達に食べさせるわけにはいかないの。・・・・それに、もしかしたらなのはのお婿さんになるかもしれない男性に手なんて出さないわよ。みんなもがんばってね」

全員「（ぼんっ）／／／」

子供達には早い・・・あぁ、ウィスキーボンボンか。あれ？　なんかみんなの顔が赤いような・・・気のせいか？

葵「なるほど」

そう言って一つ食べると、ほどよい感じのウィスキーの風味と味が口に広がる。だが、これはなかなか。

葵「桃子さん。士朗さんはお酒強いんですか？　風味だけでもかなり強く感じますが」

桃「あら大丈夫よ」

葵「何故そう言えるんですか？」

桃「酔った勢いという言葉知ってるでしょ？」

葵「・・・なのはに妹か弟をプレゼントでも？」

桃「ふふふふっ」

あぁ、だめだ。これ以上踏み込んだらだめだ。そう頭が警鐘を鳴らしている。士朗さん。頑張ってください。色々な意味で。

ＳＩＤＥ女性陣

は「そうか・・・その手が！！」

シ「主はやて？！」

ヴィ「ま、まさかとは思うけど・・・」

は「ふふふっ。酔った勢いで葵君に襲ってもらえれば」

フェ「しかも葵が襲うの！？」

な「でも、葵君のお酒強そうなの」

孤「実際強いよ？　確かアルコール度数高いのもストレートでいけるし」

は「甘いで・・・このチョコレートのように甘いで！」

アリ「何か作戦があるの！？」

は「ごにょごにょごにょ」

女性陣「・・・・（ぼんっ）／／／」

ＳＩＤＥ　ｏｕｔ

で、ヴァレンタインデー当日。再び翠屋。なんだろ、最近翠屋の出現率が高い。

な「あ！　葵君！」

葵「呼ばれたので来た。というかどうしたお前ら？　今日は誰かにあげるんじゃなかったのか？」

フェ「うん。だから葵。はい！」

葵「・・・私に？」

アリ「うん！」

ア「う、受け取るわよね！？」

す「お、お願いします」

まぁ、ここで拒否する理由もないからな。

葵「ありがたく受け取ろう」

は「ほんなら食べさせてあげるな！」

・・・・は？

葵「いや、一人で食べれるが」

ヴィ「まぁ座れ」

シ「そして食べろ」

　すると代表してシグナムが自分の作ったチョコを口にくわえ・・・

・え！？

葵「いや！？　それはまずいだろ！？」

シ「ん！」

葵「い、いやだから・・・」

シ「・・・」

　その黙って見つめるのをやめろ・・・あぁもう！

　その後は全員に同じことを要求されたので受け取った。体が熱かったのは酒からだと思う・・・そこ！　リヤ充死ねとか思うな！？

　ロリコンと思ったやつ出て来い！　私がこの剣のさびにしてくれる！！

第一三話（後書き）

さて皆さんに問題！　ヴァレンタインとくれば次は？　ヒントは男性から女性へ！

そして質問！ヴァレンタインって『ヴァ』？　それとも『バ』？

どっちなんでしょうね？

第一四話

第一四話

さて皆さんに質問だ。ヴァレンタインがあるのならその次に来るのは?

葵「ホワイトデーか」

士「いやぁ～、葵君もお菓子が作れるとは知らなかったよ」

恭「ん?　これはどうやるんだ!?」

ザ「・・・いまいちわからん」

士「このありさまだからね」

ザフィーラはリニスとアルフにお返し。恭也は言わずとも分かるが忍さん。士朗さんは奥さんの桃子さん。ちなみに士朗さんの話では、

士「・・・あの手段は二度と使わないでほしい」

と、お盛んだったようだ。

恭「だが、何故手作りで返さなければならんのだ?」

葵「いや、そりゃ相手が手作りで渡してくれたんだから、こっちも

それ相応に応えるべきだろ」

ザ「だが、私はこういったのは初めてなんだが」

士「そのために私や葵君といった強力な助っ人がいるじゃないか」

葵「それに初めてでも丹精込めて作れば相手も分かってくれるって」

そういって話していると恭也がある名言についての疑問を投げかけてきた。

恭「だが忍が言ってたんだが三倍返しは無いだろ」

葵「確かに。でもそれに期待する人はいないのでは？」

士「確かに。心をこめて作ればいいんだよ」

ザ「ふむ。だが、何故マシュマロかキャンディなんだ？」

葵「本の知識だがマシュマロは確か『託された思いを純白の思いで包んで返す』だったような」

士「ならキャンディーは？」

葵「あまり聞きませんね。でも多分」

恭也「多分？」

葵「『君への思いを甘い宝石にして贈る』とか？」

ザ・恭「「照れるな!?　そして甘い!!」」

士「ははははっ・・・うかつにお返しできないね・・・」

で、作業をつつがなく続行。シグナム、ヴィータの件もあったためザフィーラにそれとなくしてみると、

ザ「安心しろ。そんなことはせん」

と、作業中もちゃんと力を加減してやっていた。

ＳＩＤＥ女性陣

忍「そういえば」

す「どうしたのお姉ちゃん?」

忍「もうすぐホワイトデーでしょ?　その時に恭也に三倍返しでお願いって言ったけど・・・三倍って何を三倍にするのかしら?」

その言葉に全員が「えぇ～」といったモノのいざ考えてみると確かに何を?　という話になる。

フェ「量は・・・後が怖いね」

な「う～ん。でも質といわれると高いモノを渡されても・・・」

孤「確かに困るよね・・・」

アリ「なら内容？」

は「たとえば？」

す「う～ん。たとえばそうだね。何を返すべきか悩んでいる相手に『あなたが欲しいな』って言うのは？」

ア「さ、策士ね。すずか」

な「は、恥ずかしいよ／／／」

は「それや！」

フェ「ダメだよはやて」

と、こんな感じで流れているが、アリシアが挙手をして新たな案を出す。

アリ「はい！　こんなのどうでしょうか！？」

忍「はい。アリシアちゃん！」

アリ「・・・フェイトのソニックフォームで」

シ「？　何でそこでテスタロッサが出てくる？」

アリ「渡すスピードを通常の三倍で相手に渡す」

ヴィ「恐っ！？」

シャ「でも他に何かありますか？」

ア「いやいや、スピードは無いでしょ」

アイン「では、内容は内容でもこんなのはどうだ？」

ヴェ「どんなのだ？」

アイン「リップとか口紅みたいにチョコを唇に塗って・・・」

は「ストップ！　それはアカン！？　いろんな意味で！！」

孤「あれ？　でも似たようなことバレンタインしたよ？」

リニ「なら他には？」

アル「・・・・婚姻指輪？」

全員「えぇえええええ！？」

リニ「一気に飛躍しましたね！？」

　アルフの一言は全員を驚愕させるには十分すぎる破壊力だった。
だが、上にはやはり上がいた。

孤「なら婚姻届とかは？」

全員「上には上がいたよ！？」

忍「というかそれはいろんな意味でまずいでしょ！？」

ちなみにこの後葵達の手作りのキャンディとを受け取るとき、何気に葵がキャンディの時に言った発言『君への思いを甘い宝石にして贈るよ』と葵が言うと全員が顔を真っ赤にしたとか。

第一四話（後書き）

というわけでホワイトデー編を書いてみました。

第一五話

第一五話

さて正月やら、ヴァレンタインデーやらホワイトデーが過ぎ数三年がたった。

私は宣言どおり階級は中将にのし上がった。だが、まぁ大将だと行動しにくい部分もある。まぁ三提督、レジアス、リンディさん以外はいまだに三佐ということにしている。

あの後、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、リイン、はやては嘱託魔導師の試験に合格。なのは、フェイトもそれぞれ候補生となり訓練も終わった。

というかこんな短期間で訓練を終わらせるってどうなんだ？

それに度重なる無理な魔法の行使を見てなどもなのはに休むよう忠告もしたが彼女はそれを無視し続けた。

だが、そのつけがこんな形で来るとは予想外だった。

葵「なのは。顔色が悪いが大丈夫か？」

な「え？　う、うん平気なの！」

葵「何度も言っているが体は大事にしろ。いくらお前に膨大な魔力があるとしても体を壊せば待っているの破滅だ。・・・やはり今日の任務は休め」

な「だ、大丈夫だよ！　もう。葵君は大げさだな」

そういってなのははは走り出し現場に向かうため転送ポートに向かう。

葵「・・・・一度大きな挫折をその体で体験しないとダメなのか」

私はこの子の無茶に溜息をついた。荒療治かもしれないがここで彼女には必要なモノなのかもしれないな。

エ《よろしいのですかマスター？》

ル《間違い無くなのは無理をしている。いまとめないと》

葵「分かっている。だが今の彼女には大きな挫折と後悔を経験させねばらない。それが下手をすれば命取りになると言うことも。まぁ、なんとかなるだろう。私もついて行くし」

ＳＩＤＥなのは

一面真っ白で雪に覆われた世界。今回の任務地。何でもここでアンノウンが発見された見たいです。

でも、それよりも気になるのは葵君のこと。わたしは挫折もしな

いし、後悔もしない。

な（皆と、友達でいるために！　魔法が唯一のわたしと・・・皆をつなげる役目をしてるの。だからそれを奪われたら・・・わたしから魔法を取ったら何も残らない。だから！）

　すると、目の前に情報にあったアンノウンが現れた。わたしはすぐにレイジングハートを構え迎撃しようとしたけど、

な「え！？（か、体が・・・）」

ヴィ「な！？　なのは！？」

　目の前にはアンノウンがその刃を振り下ろそうとした。

な（間に合わ・・ない・・・・）

―ザシュ

　肉を切り裂く用の音がした。でも、私の体には一切痛みが無かった。

葵「はぁあああああ！！！」

―ギュシュッ

　鉄が鉄を切り裂くような音がし、その後目の前のアンノウンは爆発した。

　でも、その直後、

―フォン　フォン　フォン

無数の魔法陣が現れ再起ほどの戸はまた違うアンノウンが現れた。

葵「ヴィータ。なのはを連れて下がれ」

ヴィ「あ、葵!?　お前も!!」

葵君は左目を斬られており目から血が流れ落ちていた。

わたしは無理してでも立とうとし、

な「わたしは、大丈「いいから下がれ。お前がいても足手まといだ。今のお前で何ができる」」

ヴィ「でも葵が!」

葵「死なん。こんなところで死ねるか。ちゃんと生きて戻るから」

ヴィ「分かった・・・」

な「待って!　葵君が!!」

ヴィ「黙ってろ!　あいつはちゃんと生きてあたしらの元に戻ってくる!　あいつが言ったんだ!!」

ヴィータちゃんは泣きながらわたしを連れてそのまま転移した。

SIDE　Out

―病院

葵「はぁ。ようやく怪我前まで戻ったか」

あの後、現れたアンノウンはジャッジメントで完全に破壊した。
その後気を失った私はすぐに他の部隊に救出された。
診断結果は左目失明。及び左脳一部損傷による右半身麻痺。つまり右半身が動かなくなったと言うことだ。

まぁ、すぐに病院送りになったが人目を盗んで心の世界に入り御三家の協力によって怪我前と同様になるまでに回復した。これには医者達も驚いていた。

そして、同じ病院にいるなのはの見舞いに行くと、

フェ「ねぇ、嘘だよね！　そうでしょシャマル！！」

ん？　なんだ騒がしいな。

葵「どうした」

私が入ると、なのはを含め皆がこちらを見た。

リ「あ、葵！？　もういいのか！？」

葵「ん？　あぁ。治った」

な「・・・ねぇ、葵君」

なのはがこちらを見て口を開けた。

葵（これがなのはだと？　あの元気な少女なのか！？）

ベッドに寝ていたのはなのはのはずだ。だが、元気もなければどこか生きるなにもが失っていたるように見えた。

な「何でわたしを助けたの？」

葵「・・・なに？」

一瞬何を言っているんだと思った。

な「なんでわたしを助けたの！？　あそこで殺してくれれば一層楽だったのに！！」

ヴィ「高町お前何言ってやがる！？」

葵「なにを言っているんだお前・・・」

シャ「〈葵君・・・実は〉」

するとシャマルからいまのなのはの状況を説明された。いままでの無理な魔力の行使や訓練がたたって体に相当な負担がかかっていた。最悪歩けるかどうかという域まで来ていると言うことだ。

葵「〈シャマル。あいつの足が治るかなおらないかは最悪のケースなんだな〉」

シャ「〈えぇ。リハビリをすれば歩くこともできるし、空を飛べることもできる。でもそのためにはかなり辛いことになるわ・・・〉」

な「わたしには・・・もう、何の価値もない・・・」

私はなのはのそばに行き、

―パーン

な「・・・え」

フェ「あ、葵!?」

ヴィ「な、何してんだお前!?」

葵「黙ってろ。おい、なのは。お前何言ったか分かっているのか!?」

な「・・・・・」

葵「殺してくれ？　はっ。私はあれほど再三忠告したよな？　だがお前はそれを無視して任務に当たった。自業自得だ。だがな、あそこでお前が死ねば誰が悲しむ?」

な「・・・・それは・・」

葵「それに、お前が死ねば、痛い思いをしてでも、お前を生んだ桃子さんや、お前の父である士朗さん。お前を愛してやまない恭也さんや、美由紀さんを悲しませる！　それだけならまだしも友人であ

る八神家やテスタロッサ家、ハラウオン家、月村家やアリサ達、ユーノ達も悲しむんだ！？　それを分かって言ってるのか！？」

な「葵・・が・・る・・の？」

葵「なに？」

な「葵君に何がわかるの！？　怪我も左目だけで済んでるくせに！？」

その言葉に私はついに切れなのはの胸ぐらをつかみベッドに押し付ける。

シャ「あ、葵君！？　けが人に暴力は！？」

葵「黙ってろ。なのは、なら言わせてもらおうか。お前は辛いだろうがリハビリをすればもう一度空も飛べれば歩けることもできる。だがな」

そういって左目の包帯を取る。

すると、なのはがかなり驚いていた。

葵「だがな私の左目にはもう光は入らないんだ！　二度と、一生な！」

な「え・・・・」

葵「いいかなのは、よく聞け。二度と無理をするな。その無理が次はフェイト、ヴィータ、もしくは誰かを傷つける。お前が無理をす

るのはおそらく魔法が唯一お前とその周りの人間をつなぐ接点だと思ってるからだろう」

な「そ、それは・・・・」

葵「お前の悪い癖だ。お前の周りにいる人たちはそんなに薄情なのか？　フェイトもはやてもヴィータも、他の人たちも」

な「・・・葵君・・」

葵「お前はどうしたい。今後、一生魔歩を使わずにそのまま一生を終えるのか？」

な「・・・飛びたい・・・また、みんなといっしょに・・・空を飛びたい！！」

ようやく言ったか。

葵「なら、頑張ってリハビリに励め。そのために私も、友もいるんだ」

な「・・・私、出来るかな・・」

葵「なのは。出来るかできないかじゃない。やるかやらないかだ。諦めずにただがむしゃらにやってみろ。そうしたらもう一度お前の願いがかなうかもしれん」

な「・・・そう・・だね。わたし、頑張ってみるよ！！」

葵「そっか。がんば「神無月さん！　ここにいたんですか！？」げ

っ・・・」

　すると、そこにいたのは二人の看護士がいた。

看「はぁ、いいから病室に戻ってください。まだ安静にしていてくださいね」

葵「は、はい、すみません」

　そういって私は一人の看護士に連れられ病室に戻った。

ＳＩＤＥなのは

　葵君が看護士さんに連れら自分の病室に戻っていった。

看「はぁ。あの人には驚かされてばかりだ」

な「え？　あ、葵君に何かあったんですか？」

看「えっと・・・」

シャ「大丈夫ですよ。彼とはその、家族ですから」

看「そうですか。えっと神無月さんは高町さんをかばって左目を失明したんですよ」

な「はい。葵君から聞きました」

看「そうですか・・・。ですが、そこから刃が一部脳を損傷させていました」

え・・・脳を・・・

看「それが原因で右半身まひを起こしたんです」

フェ「え!?　で、でも葵歩いていましたよ!?」

看「えぇ。ですから驚いたんです。でもそのためには必死のリハビリに励んでいまして、起きて早々に右半身麻痺だと気付き、そこからは無茶をし続けまして、それで・・・」

ヴィ「・・・なんでそんなこと・・」

看「私も気になって聞いたら「この病院に助けた子がいてもし、この姿で彼女があったら心配するから。だから彼女に会うまでに怪我をする前の状態に戻さないと辺に罪悪感を抱かさないために、大切な者に心配をかけさせないために」って」

・・・あ、葵君がそんなことを・・・わたし、そんなことも知らずにあんなこと・・

な「わたし、頑張ってもう一度空を飛べるようにがんばる」

わたしは葵君のために、皆ともう一度空を飛べるようにするために頑張ることを固く決心した。

第一六話

第一六話

なのはが怪我をしてさらに月日がたった。まぁ、なのはの努力の賜で再び空を飛べるようになった。その時のあいつは泣きながら謝っていたが私は気にするなといった。泣きやむまで優しく抱いてやったが、あの後はやてたちが自分にもしろといってきたのは予想外だった。

葵「久しぶりだな。ティーダ」

ティ「葵か！　今回の協力者というのは」

葵「あぁ。あの試験の時はありがとう」

ティ「いやいや。こっちも学ぶ部分が大きかった。ゼストさんもそう言ってたしな」

いま私はガーディアンの仕事でティーダと共に犯罪者を追う仕事を行っている。

ティ「しかし本当にいいのか？　俺は一等空尉、葵は三等空佐だ。階級上は君の方が上だぞ？」

葵「そう言う階級は所詮お飾りだ。私自身階級で呼ばれたり、上官扱いされるのは嫌いだ。それに私と君は友だろ？　私と君だけの場合はそう言うのを取りはらってもいいと思うぞ」

ティ「ははははっ葵らしい」

その後、私とティーダは別行動となった。私はガーディアン。海や空からその制服の色から【白】と呼ばれている。そしてティーダは首都航空隊。こんなときに派閥争いしている場合か？

白局員「葵さん。違法魔導師を見つけたとのこと」

葵「分かった。今から向かう」

白局員「はっ！」

無茶をしなければいいのだが。

ＳＩＤＥティーダ

上司「〈いいか！　絶対に犯人を捕まえろ！！　あの新設部隊の【白】に手柄を取られるな！？〉」

手柄とかどうでもいい。だが、あの上司につくぐらいなら葵の下で働いた方がよっぽど正義に近いような気がする。目先のことしか考えず、手柄を取り出世。結局は自分たちのことしか考えていないような気がする。

ティ「っ！？」

考え事をしていると、犯人を見つけた。そのまま尾行し、隙をついて逮捕しようとした。

だが、

犯人「!?　ちっ!!」

ティ「しまった!　待て!!」

犯人が逃げ出したので、その後を追う、すると、

犯人「来るな!!　武器を下せ!?　差もねぇと子のガキがどうなってもしらねぇぞ!!」

犯人はおそらく近くにいたのであろう子供を人質にしていた。

ティ「くっ・・・分かった。だからその子供を解放しろ」

犯人「それはお前次第だな」

言われるままにデバイスを下ろした。俺のミスだ。あそこで捕まえておけばこんなことには・・・

ティ「これでいいだろ。解放しろ!?」

犯人「よし。このままおさらばしてもいいんだが、ちょうどいい。管理卿には恨みがあったんだよな。ここでその憂さ晴らしでもさせてもらおう」

ティ「なっ・・・グアッ!?」

犯人がそう言うと、非殺傷設定されていない魔法が、オレの左足

を貫いた。

ティ「ぐっ・・・」

犯人「そうそう。大人しくしておけよ。まぁ、次はっと・・・」

次に右足、そして左腕、右腕、その後はどこを貫かれたかはわらないが、

犯人「・・・なんでだよ・・」

ティ「その子を・・・かい・・ほう・・」

犯人「ちっ、いい加減死ねやぁあああああああ！！？」

少年「ひっ」

だが、そいつの魔法が俺に当たることは無かった。

葵「ディコシールド、展開」

犯人「なっ！？」

葵「さて、私の友を傷つけたのだ。それ相応の罰は背負ってもらうぞ」

そこに立っていたのはあの試験の時に見せた白い鎧姿の葵だった。

ＳＩＤＥＯｕｔ

葵「大丈夫か!?　ティーダ!!」

ティ「あ、あぁ・・・一応」

葵「癒しの風よ。汝の力を持ってこの者の怪我を癒したまえ。ヒーリーングフール」

ティーダに魔法をかけ、その後障壁を展開させる。

犯人「お、お前も管理局の人間か!?　こ、このガキが見えないのか!?」

葵「ガキ?　こいつのことか?」

そういって私は少年を見せた。

犯人「なっ!?」

少年「おにいちゃん!　あの悪い奴、あのお兄ちゃんをいじめてた!!!」

葵「そうかそうか。君は逃げるといい。あいつのことならしっかりと怒ってやらないとな。生きていることを後悔するほどに」

少年「うん!」

そういって少年は大通りに面する場所に向かって逃げて行った。

その後黒木に切り替え、

葵「貴様の黄泉路への案内。この私が務めよう」

犯人「くそっ！？」

葵「逃がすと思うか？　ダークアロー」

黒色の矢をカスの足に当てる。

―ズガシュ　ザシュ

二つとも両足に当たっている。無論殺傷設定だ。

犯人「ギャァアアアアア！！！」

葵「同じ痛みをティーダは背負ったんだ。お前も平等、いやそれ以上に背負わないとな」

その後は殴る、蹴る、魔法をぶつける。そして再び殴る、蹴る、魔法をぶつけるを永遠のサイクルのごとく繰り返す。

犯人「た、たすけ・・・」

葵「そうだな。そろそろ終わりとしよう」

六本の両翼刀を展開させ、

葵「ウィング・オブ・ジャッジメント！！！！！！」

その後、犯人は爆発と同時に気絶。ガーディアンの他のメンバー

が事後処理を行いこの事件は解決した。

あの後すぐにティーダは病院に送られた。ティーダの病室の中で彼が目を覚ますのを待っていると、

葵「ん？　君は？」

ティア「ティ、ティアナ・ランスター」

葵「ランスター。ということは彼の妹か？」

ティア「はい」

葵「そうか。ティアナちゃんか」

ティア「お、おにいちゃんは大丈夫ですよね！？」

葵「え？」

ティア「一人はいやです・・・おにいちゃん・・はやく・・おきますよね」

ティアなのかを見ると泣きそうになっていた。私はそっと彼女の

頭に手を置きなでてやる。

ティア「え・・・」

葵「ちゃんと目覚めるよ。こんな可愛妹さんをほったらかしにするわけないだろ。起きなくても私が叩き起こしてやる。私の友なのだから」

優しく語りかけるように彼女にそう言う。

すると、その後ろからおそらく彼の上司であろう者が現れた。

上司「ふん。役立たずが。犯人に人質は取られた揚句、別の部隊に手柄を取られるとは・・・」

葵「なっ・・・!?」

私が言い返そうとしたら、ティアナが一歩前に出て、

ティア「おにいちゃんは役立たずじゃない！　おにいちゃんは私が知ってる中で一番の強い魔導師だもん!!」

上司「一番強い？　はっ！　我が部隊で一番の役立たずが？　まっこいつはクビだがな。すでに辞令も出してある」

ティア「違う・・・違うもん！　おにいちゃんは・・おにいちゃんは!!」

上司はこちらに視線を移して来た。

上司「君も余り図に「黙れよ虫けらが・・・」なに？」

葵「所属部隊と階級を言え」

上司「君に名乗るつもりはないが、二等空佐だよ。三等空佐君？」

葵「・・ハハハッハハハッ」

上司「なにがおかしい！？」

葵「私の名前も言っておくか。三提督直轄独立機動部隊ガーディアン総部隊長。神無月葵。階級は【中将】だ。二等空佐君？」

上司「なっ！？」

葵「お前は今日付けで解雇だ。すでに今の言葉が三提督の方にも回っている。今日中にでも・・いや、いま来たみたいだな」

そのモニターを彼が見ると顔が真っ青くなった。

葵「部下の失敗は上司の失敗だ。そして上司の功績は部下の功績だ。それもわからず私利私欲に走り、局の本来の意味すらも忘れた屑以下のごみに用はない。とっとと失せろ。さもなくば」

そう言ってアルヴォをそいつのこめかみに当てる。

葵「私があの世へ送ってやろう」

上司「ひぃっ！？」

まぁ屑はそのまま病室を逃げるように去っていった。

葵「起きているんだろ、ティーダ」

ティ「・・・ばれたか？」

ティア「おにいちゃん！！」

ティアナはそのままティーダの胸に抱きついた。

ティア「おにいちゃん、おにいちゃん、おにいちゃぁあああん」

葵「全く、幸せ者だなお前は。こんな可愛妹に好かれて」

ティ「自慢の妹だ！」

・・・あれ？　一瞬ティーダと恭也さんが重なったような・・・

うん。気のせいだ。

ティ「だが、これからどうするべきか・・・」

葵「ふむ。その件だがすでに出してあるぞ。ほれ」

そういってモニターをティーダの前に出す。

ティ「！？　い、いいのか俺みたいな役立たずが！？」

葵「あほかお前は。お前の頭脳は私から見れば喉から手が出るほど欲しい。それだけじゃなく戦略眼や作戦の立案に関してもお前はあのゴミクズ以上のモノを持っている。私の部隊に入ってくれるなら

即戦力としても期待できるが？」

ティ「・・・分かった。友人の願いなら聞かねばな」

葵「感謝する」

私が頭を下げると、

ティ「よ、よしてくれ！？　お前は中将なんだ！　俺なんかみたいなものの」

葵「私は仲間を大切にする。部隊は一個の家族だ。上下何ぞ関係ない。それを忘れるな」

ティ「あぁ。分かった。これらもよろしく頼む。友よ」

葵「あぁ」

第一六話（後書き）

ティーダ救出！　あ～んど引き抜き成功！

第一七話（前書き）

アンケート結果を載せるの忘れてたので載せます！
結果はＩＳに葵を向かわせることになりました！！
ちなみに多少ＶｉＶｉｄをやってから向かわせようと思うのでお願いします！

第一七話

さて、ティーダの一件が終わり、さらに部隊への勧誘も成功した。
これはガーディアンにとってもかなり大きい。あと階級のことは黙っていてくれと口止めしておいた。

葵「で、まさかとは思っていましたが次はゼストさん達ですか・・・」

ゼ「協力者がいると言っていたがまさかお前とはな。それにその服装は【白】か」

葵「えぇ。それで、今回の任務は？」

ゼ「ここで違法研究がおこなわれていたという情報を聞きつけてな。それで調査をしようとしたんだ」

葵「なるほどね。で、こっちと内容がドッキングし協力しようと言いだしたわけか」

ゼ「そう言うことだ」

クイ「しかし【黄泉路への案内人】自らお越しいただけるなんて」

メ「確かに。ガーディアンの隊長自ら指揮を出すの？」

葵「まぁ、それが仕事ですから。というかその黄泉路への案内人ってなに？」

ゼ「クロノ提督やリンディ総務統括官が君が口癖のように言っていると言っていたが？」

葵「・・・あぁ。黄泉路への案内を務めるってやつ？」

クイ「それにティーダくんがから聞いたよ？　犯人をボコボコニしたって？」

葵「えぇ・・・まぁ」

　すると、後ろから、

ヴェ「葵様。準備が整いました」

孤「いつでも行けるよ！」

　孤狐とヴェルが合図をしてきた。

葵「今回は規模も大きい。油断しないように。班構成はゼスト、私、ヴェル。孤狐、クイント、メガーヌの二班構成にする。質問は？」

メ「何で部隊をバラバラに？」

葵「遠距離、中距離、近距離の攻撃バランスを考えて」

クイ「あ、なるほど。とりあえず来ましょうか。よろしくね孤狐さん」

孤「よろしく～」

そして研究室に入ると、

葵「血なまぐさいな。周りには研究者の死体か・・・」

途中でわかれ道があったので班を分けて捜索することとなった。

さらに奥へ奥へといくと数が増えてきて臭いもさらにきつくなっている。

ヴェ「・・・行き止まり？」

ゼ「みたいだな。どうする二班と合流するか？」

葵「ですね。そう〈葵聞こえる！？〉どうした？」

孤「〈こちら二班！　いまアンノウンと交戦中！　ただ数が多い上に局員が数名やられた！　至急増援を！！〉」

葵「ゼストさん」

ゼ「あぁ。行こう！」

ＳＩＤＥ孤狐

クイ「何で攻撃があたらないの！？」

メ「これって・・・まさかＡＭＦ!?」

なんだっけそれ？　確か魔力の結合を解いて無効化するってやつ？

孤「大変だねこっちの魔法使いは・・・狐火!!」

―ズガァアアン

ほい機械の丸焼き。おいしくなさそう・・・・

クイ「孤狐さんって私たちと違う魔法を使うんですね」

メ「ベルカでもミッドでもない・・・どこの？」

孤「え？　共同型だけど」

クイ・メ「「え？」」

孤「ん？」

話がかみ合わないな。何型って聞かれたからそのとおりに応えたんだけど？

すると、クイントさんの後からアンノウンが刃を振り下ろそうとしていた。

孤「危ない!?」

クイ「え？・・・っ!?」

葵「鳳墜閃！」

炎を纏った一対の剣がアンノウンを真っ二つにした。

葵「・・・まずいな。生命反応がここだけって・・・」

メ「隊長！　それに葵君にヴェルさんも！」

クイ「た、助かった・・・」

葵「これ以上長居するとまずいな。ここは撤退するか」

ゼ「だがほかの連中は！？」

葵「全滅している。いっただろ。生命反応があるのはここだけだと。それにこれ以上で戦うと・・・お客様のご到着だ」

全員「え・・・なっ！？」

ＳＩＤＥＯｕｔ

その目の前にいたのは

―ＧＡＡＡＡａａａａａａａａａ！！！！

【不の者】。レベルは2。対応できる範囲ではあるが数が・・・3か。

葵「孤狐は左、ヴェルは右、私が中央。ゼストさん達は援護。ＯＫ？」

全員「おう！」

葵「では、参ろうか！　ルミル黒騎士」

黒騎士にシンクロし、戦闘を開始した。

ＳＩＤＥゼスト

葵の合図と共に、一斉にあいつらは化け物めがけ一斉に切りかかった。

戦いを一言で言うと地獄絵図。しかも効率がいい。

葵「フッ・・・ハアァアアア！！」

―グシュ・・・ジャシュッ

まず両足を斬り、身動きが取れなくなった所に、さらに両腕を斬り抵抗できなくする。

化け物も抵抗するかのように魔法陣を展開する。

ゼ「な、なんだあの魔法陣は！？」

見たこともない禍々しい魔法陣。そこからは黒い魔法の砲撃が放たれる。

葵「盾！！」

葵はそれに抵抗するように砲撃をバリアで防ぎ、

葵「ヴェル、孤狐下がれ！」

ヴェ・孤「「了解」」

二人が安全件に退避したと同時に。

葵「その翼に終わりはない」

ル《終わりがないことが悲しく》

葵「永遠に紡がれ、終えることを知らない」

ル《永遠に負の連鎖がつながる》

葵「神は憐れんだ」

ル《そしてその翼に使命を与える》

葵「咎人を裁く役目を」

ル《裁きの時は来た》

葵「翼による（ウゥング・オブ）裁き（ジャッジメント）！」

合計六本の翼から無数の羽が三体の化け物めがけ襲いかかり、そして、

―ズガァアアアアアン！！！

爆発した。

ＳＩＤＥＯｕｔ

葵「終わったか。レベル２ならまだしも３、４って来たらまずいな。ゼスト、撤退する。後お前も話したい奴がいるんじゃないのか？」

―ＧＡＡａａａａａａａ

葵「まだ・・メガーヌさん後ろ！！」

メ「え？・・・」

―ザシュ

メガーヌさんの後ろにいた【不の者】が突き刺した腕がメガーヌさんの腹部を貫通した。

メ「・・がはっ・・・・」

口からは大量の血が出て、貫通した部分からも血が出ていた。

葵「貴様ぁあああああ！！！」

すぐにメガーヌさんの後ろにいた【不の者】を殺し、その後、メガーヌさんに治癒魔法をかけた。

葵「撤退を急げ！　転移魔法でガーディアンの隊舎へ行けるようにしろ！！」

孤「う、うん！　行くよゼストさん！」

ゼ「！？　・・・そうだな」

そういって孤狐が転移魔法の陣を開き、

葵「行くぞ」

ヴェ・孤「「はい！」」

その後、ゼスト、クイント、メガーヌもあとに続き入っていった。

第一八話

第一八話

あの後、隊舎にいたジェイルにメガーヌさんの治療を任せた。
その時ゼストとクイント、ジェイルとの間にひと悶着あったが命の保証は絶対するといって引きさがってもらった。

あれから数日がたちメガーヌさんがようやく目を覚ました。

ゼ「葵、なぜここに犯罪者がいる?」

葵「いや～、実はかくかくしかじかで」

ゼ「分かるわけないだろうが!?」

クイ「へぇ～。大変だったんですねジェイルさん」

メ「分かったの!?」

クイ「うん。えっとジェイルさんが管理局に作られた人造魔導師で――――」

ここからはジェイルの説明が入った。

ゼ「なるほど。だが、俺たちはどうすればいいんだ?」

葵「まずはゼストの要件を済ます。その後に考えていることを実行すればいい。それだけだ」

クイ「どうするの？」

葵「まず。メガーヌの娘を保護する」

メ「え？」

葵「お前は確か母子家庭だったな。なら今回のことを知っている確率のあるお前の娘を排除する確率がある。だからだ。そうでなくても魔力が高いなら管理局は手を出すだろう。そうなる前に――」

連れてきてメガーヌと保護すべきといい続けようとしたら、

ジェ「私が連れてきた！」

？？？「ママ～」

葵「・・・言う前に実行って、お前犯罪者に戻るぞ？　幼女誘拐で」

ジェ「なんかヤダ！　響き的にも内容的にもそれなら次元犯罪者の方がいい！！　幼女誘拐で広域指名なんていたいやつしかないじゃないか！？」

葵「それを実行したのはお前だろ」

クイ「私の娘たちは大丈夫なのかしら？」

葵「あそこにはゲンヤさんがいますから大丈夫でしょう。三佐でもありますからそう簡単には手を出せないでしょうし。で、次にあな

た方には私の部隊に入ってもらいます」

ゼ「君の部隊？」

葵「ガーディアン。現在そこの部隊長を務めています。階級は中将。孤狐、ヴェルは准将を務めています」

ゼ「なっ！？　いつの間にそんなところに・・・」

葵「ご存知ありませんか？　今管理局は不正を働いていた将校たちが次々と退職金なしの強制解雇においやられていることを」

クイ「知ってるわ。それで今現在話はクリーンに近い状態――まさか」

メ「それを行っているのって」

ジェ「あぁ、彼だ。だから中将にまでなっている。彼は管理局の再建と改革を実行しているからな。あと、葵。ほら新しい不正の証拠」

葵「あいよ。んじゃまた行いますか。あと、ゼスト。行くぞ」

ゼ「ん？　どこへだ？」

葵「レジアスの元へだ」

―地上本部

葵「よっ。レジアス」

レジ「葵か・・・何か用か？」

葵「お前に客人だ。いいぞゼスト」

レジ「バカも休み休み言え。あいつは「死んだといいたいか？」ゼ、ゼスト！？」

オ「ゼストさん生きてたんですか！？」

彼女は確かレジアスの娘さんか。さて、ここは二人にしてやるか。

葵「ドゥーエと、そこの君、退室するぞ」

ドゥ「あら？　ばれちゃった？」

葵「姿だけだったらきついが気や魔力で分かった。とりあえず退室するぞ。二人で話があるみたいだ」

ゼ「葵、君は残ってもらえないか？」

葵「・・・分かった」

ドゥーエはオーリスを連れて退室した。

ゼ「さて、レジアス。聞きたいことは一つだけだ。数日前俺と俺の部下たちを殺させたのはお前の指示で間違いないか？」

そこから取り出したのは二枚の写真。一番上にはゼストさんが率

いていた部隊の写真があった。

ゼ「ともに語った俺とおまえが語った正義はどこへ行った・・・」

二枚目にはゼストさんとレジアスが写っていた。

ゼストの声には怒りがこもっていた。共に戦ってきた戦友を失ったのだ。その怒りは計り知れないだろう。

レジ「・・・わしは、地上を、全てを守り通すために捨てた・・・友も全てを!!」

ゼ「そのために、俺の仲間を犠牲にしたのか!?」

レジ「・・・言い訳はせん。だが、わしはなども忠告した! あれがないと地上の治安は回復することは無い! それどころか衰退の一途をたどる!! そのために必要な犠牲だ!!! 地上の平和を守るための!!!」

・・・腐ってるな。このバカは。

葵「・・・馬鹿ばかしい」

レジ「なに!?」

葵「友を守れずしてそれよりも大きな地上を守る? お前はバカか。小さいものも護れず大きいものを守れるはずもない」

レジアスは先ほどの怒りはどこへ行ったのかむしろ、何かを悩んでいた。

葵「それに治安がどうだと言っていたが、いまの治安はどうだ？私の部隊と連携を行ったことで衰退どころか向上しているのがわからないか」

レジ「・・・だが！」

葵「いいかレジアス。お前が言っていることはただの言い訳だ。力がない？　ならなぜお前はここまで上り詰めてこれた。友がいたから支えてくれる者がいたから。そうじゃないのか！？」

レジ「・・・それは」

葵「組織にとって一番重要なのは人との連携だ。一人でできることなど無いに等しい。だが、多くの人と協力をすれば一人で不可能なこともできる。私は最初に言ったはずだ。地上との連携を重視すると。実際治安回復のために白と陸は連携し治安は向上している。お前はもう一度ゼストと語った夢とやらを思い出すんだな。夢を幻想を現実に結びつけるために」

そう言って私は部屋を後にしようとしたとき、

ティ『失礼します。葵中将』

ゼ「ティ、ティーダ！？」

ティ『ゼストさん！？』

葵「どうしたティーダ」

ティ『あ、はい。先ほど孤狐さんと共に最高評議会の破壊を行おうとしたんですが』

レジ「・・・そんなことをしようとしていたのか」

ティ『すでに何者かによって破壊。形跡から【不の者】と思われる。と孤狐さんが』

葵「そうか。周辺警戒後隊舎に戻ってくれ。お疲れティーダ」

ティ『おう！　んじゃ、またな！』

そう言うとモニターが消えた。

葵「お前をしばりつける者は無くなった。あとはどうするかは自分で考えろ」

そういって退室した。

ＳＩＤＥゼスト

ゼ「俺たちの夢はどこで間違えたんだろうな」

レジ「・・・そんなものなんぞ忘れたよ」

ゼ「・・・俺は覚えているぞ。地上に、地上の全てに真の平和を。それを守るために。まぁ、所詮幻想だったみたいだがな」

レジ「・・・そうかもな。だが、それをやって見せろとあいつは言って見せた。それにあいつは試験後わしらの元へ来た。そしてあいつは何と言ったと思う？」

ゼ「？」

レジ「治安の回復と局の内部からの改革。あいつはその二つとも今もなおこなしている。あいつの昇格が物語っているだろう。誰もが不可能だと思っていたことをやってのけている。完全とは言い難いがそれでも一歩ずつ前に進んでいることは間違いない」

ゼ「あんな若いのに何を背負ってきたのだろうな」

レジ「わしらの後を引き継ぐ若者たちにわしはわしにしかできないことをする。ゼスト、力を貸してくれないか。一度踏み外したが、お前と語った幻想を現実にするために」

ゼ「あぁ。構わない」

ＳＩＤＥＯｕｔ

葵「で、レジアスよ。なぜゼストをこちらに？」

　翌日ゼスト達の死亡扱いはそのまま維持しているが、その方が管理局の闇を払うためならいいだろうと言うことらしい。

レジ『お前の部隊の戦力、指導のためだ。それにお前の部隊なら安心できる』

葵「左様で。こちらもゼストさん達が加わると言うことはとてもありがたいですし。分かりました。その御話お受けしましょう」

ゼスト、メガーヌ、クイントはその後ガーディアンの部隊に招き入れ戦力向上を図り成功。地上との連携はうまくいき治安の回復にもつながった。

その後ガーディアンは【不の者】の討伐作戦を実行に移した。ミッドチルダ周辺に現れる【不の者】の数は多い。実際被害も出ている。だが、それでも行わなければならない。

その苛烈な戦いぶりを見てガーディアンの知名度、そして私自身にも再び【黄泉路への案内人】という二つ名がついた。

第一八話（後書き）

レジアスは実はいいやつだと思うんですよね。道を踏み外さなければ彼は原作でも結構人気が高かったと俺は思う！
というわけで、レジアス改心させました。

第一九話

第一九話

葵「違法研究所？」

レジ「うむ。何でも管理局が一枚絡んでいるらしい」

現在レジアスとの話で極秘裏で依頼したいという話をもらった。

葵「違法ね・・・人造魔導師か？」

レジ「それがこっちでもわからんのだ。だが、デバイスの研究をしているらしい」

葵「デバイス？　そんなに危険なモノなのか？」

レジ「なとも言えんな。だが、危険性が高いとしか言えんのだ。こちらも詳しいことはデータでしか無くてな。すまん。で、どうだ？」

葵「ふむ。分かった。場所は？」

そして、私は三日後、レジアスからもらったデータをもとにヴェルと共に参ることにした。

葵「ここか。確かに警備が固いな」

見たところ武装した局員が数名。だが、五名以下。

ヴェ「どうします？」

葵「・・・・ヴェル。お前はここで逃げる奴を捕えろ。殺すかどうかはお前に任す」

ヴェ「御意」

私は黒騎士を展開し、そして、

葵「・・・・ダークアロー！」

局員「な、なん！？」

局員２「がはっ！？」

局員３「貴様何者だ！？」

葵「答える義理は無い。大人しく死ね！」

局員３「ぎゃぁ！？」

局員４「ま、待ってくれ！？」

葵「・・・・・」

そして、そのまま残りの二人も殺した。

ヴェ「よ、容赦ないですね」

葵「仕方あるまい。それに、あいつの・・・零始の一件もある。だからこういう奴らは許せないんだ。命に何も感じないやつらがな」

ヴェ「では私は」

葵「そうしておけ」

そう言うと、ヴェルの姿が消えて行った。新しく機能としてステルスモードというのを加えてみた。意外と役に立つと本人も言っている。

そして、堂々と正面から入り。

葵「はぁ！！」

局員「ぎゃぁっ！？」

葵「せいっ！」

研究者「ひぃっ！？」

まぁ、出会う者を容赦なしに殺していくと、ある一室についた。

葵「邪魔だな。モード白騎士。破壊する！」

―ズガァアアアン

？？？「何事だ？！」

その場にいたのはメガネをかけ、髭を生やした男性。おそらくこいつがこの研究所の所長だろ。

葵「お前がこの研究所の責任者か？」

所長「いかにも。貴様。ここがどこだか分かってやっているんだろうな？」

葵「然り。だが、一つだけ言っておこう。お前も私が誰か知って言っているんだろうな？」

所長「はっ。知らんな貴様など」

葵「ん？　それは・・・・まさか」

所長「ほぉ。知っているかね？　そうだよ。これは古代ベルカの本物のユニゾンデバイスだよ！！」

葵「・・・それで、その子に今まで何をした」

所長「なにを？　研究だが？　実験や魔力投与など様々なね」

葵「・・・・その子は生きているんだろ」

所長「生きている？　君は何を言っているんだ！？　この子はデバイス！　モノだ！」

・・・・切れていいよな。あぁ切れよう。よし・・・・

葵「殺す」

所長「なにを言ってるんだ？　これが――――」

葵「なにをするかは知らんが瞬殺すれば意味無いだろ？」

何を言おうとしかは知らんが、次の瞬間にその下衆はただの屍になっていた。

葵「大丈夫か？」

？？？「・あ・・・・」

葵「すまん。今はこれしかない」

そういってハンカチを彼女に着せた。

葵「お前の名は？」

アギ「・・・アギト」

葵「そうか。良い名だな」

アギ「あ、ありがと／／／／　それよりお前、何でこんなことしたんだよ」

葵「ん？　なに、助けたかったから助けた。それだけだ」

アギ「管理局が黙ってねぇぞ！？　ここは管理局の施設だぞ！？」

葵「あぁ。知っている」

アギ「なら何で！？」

葵「ガーディアン。知ってるか？」

アギ「あ、あぁ。そいつらがよく言ってた。管理局の新しい部隊？
だったかで、確か黄泉路への案内人とか」

葵「そう。それが私だ。その新しい部隊の隊長も務めている」

アギ「な！？」

葵「お前は全力で私が護ってやる。安心しろ」

アギ「信じられ『葵様。よろしいでしょうか？』お前！？」

ヴェ『おや、珍しいですね。ユニゾンデバイスですか？』

アギ「闇の書の防衛プログラム！？」

ヴェ『おや。私をご存知ですか？　確かに私はかつてはそう呼ばれていましたね。今は葵様の家族です。葵様に助けていただきましたし』

アギ「・・・お前本当に何もんだよ」

葵「なぁに、ただのお人よしだ。ところでヴェル。状況は？」

ヴェ『逃げ出そうとしたモノたちを捕えました。どうします？』

葵「・・・施設内に放り込め」

ヴェ『？』

葵「すぐにわかる。ところでアギト。一緒に来るか？」

アギ「・・・うん。お前を信じて行く」

葵「ありがとな。後もうひと仕事するか」

そう言ってアギトを連れ転移魔法で外に出る。

葵「あいつらは？」

ヴェ「言われたとおり中に入れましたが？」

葵「いい。では」

そういってジャベリンを施設に向け、

葵「エクス出力５０％。むろん実践対応で殺傷設定で」

エ《了解！　出力５０％。・・・装填完了！　いつでもどうぞ！》

ヴェ・アギ「「えっ！？」」

接近戦用も装備しているがあくまでも非常事態専用。

葵「では！　光りの道は何を示す」

エ《人の歩むべき正しき道を》

葵「されどその道に外れるものも在り」

エ《神はそれを見て嘆いた》

葵「神はその者に罰を下す」

エ《人はそれ恐れ慄(おのの)いた》

葵「ギュリーノス・ブレイカー！」

放たれた砲撃は施設を完全に飲み込み、そこに残っていたのはただぽっかりと空いた穴だった。

アギ「あ、あいつら殺したのか？！」

葵「別に構わん。どうせ生きているだけむだな屑だ。悪は滅ぼす。アギト、一つだけ言っておく」

アギ「な、なんだよ」

葵「私は助ける価値のある者は助ける。だが、殺す価値しかない者は殺す。そしてあいつらは殺すしか価値の無いモノだ。そしてアギト、お前は助けるだけの価値がある。お前はいずれ誰かからか必要とされる。覚えておけ」

そういってアギトに微笑む。

アギ「おう！　分かった！　兄貴！」

葵「あ、兄貴！？」

アギ「ダメか？」

・・・この上目づかい＋涙目は止めろ?!　捨てられた仔犬か子猫みたいで・・・あぁ、もう駄目。

葵「抱きっ！」

アギ「ふみゅ!?」

そういってしばらく抱きしめた。

その後隊舎に戻ると、ルーテシアが大変このアギトを気に入ったご様子で、またアギトもルールーと呼び速くも打ち解けた様子だったので、アギトはルーテシアに預けることにした。

第一九話（後書き）

アギト救出！　そしてルーテシアとともにすることにしてみました。
本来はゼストが救出するはずでしたが葵にさせてみました。

第二十話

第二十話

あれから二年がたった。なのは達も中学校三年。管理局との同時並行でかなり悲鳴をあげていた。主に勉強で。そのため出会ったらテスト対策のための勉強会をしている。

で、現在なのは、フェイト、はやて、シグナム、ヴィータ、リインは別任務にあたっており私とは別行動をとっている。

終わり次第パーティーをするといってきているので少し早目に終わらせようと思っている。

ちなみに私は、ベルカ自治区にある聖王教会を訪れていた。

理由はというと、何でもクロノの友人である聖王教会の騎士、カリム・グラシアが脅迫を受けたらしく護衛を務めてほしいと言うことだ。

何でも若くして騎士の座についたらしい。だがその若輩者の分際でと思い妬むバカもいるからおそらく

その辺から脅迫を受けたのだろう。

???「失礼ですがどちらさまでしょうか?」

葵「時空管理局三提督直轄独立機動部隊ガーディアン所属。神無月葵二等空佐であります」

ヴェ「同部隊所属。ヴェル一等空尉であります」

あの後、ヴェルと孤狐をガーディアンの副隊長に任命した。現在着用しているのはガーディアンの制服（某プラントの白服）。で、なぜかレジアスのはからいで表向き使っている階級が一個昇格。裏の中将という階級も大将へと昇格。あと、レジアスと三提督がまだ裏で何か企んでいるみたいだ。

???「!?　よ、黄泉路への案内人!?」

葵「え、えぇ。それよりあなたは?」

シャッハ「し、失礼しました！　私の名はシャッハ・ヌエラと申します。シャッハとお呼びください」

葵「分かりました。シャッハ。あと私のことも葵でいいです。名字は呼びにくいでしょうから」

そういって騎士カリムのいる執務室に案内される。

―コンコン

カ「はい」

シャッハ「騎士カリム。今回護衛を務める方をお連れしました」

カ「そうですか。どうぞ、入ってください」

シャッハが扉を開け、入室する。

葵「失礼します」

ＳＩＤＥカリム

クロノが私の事情を知り護衛に知り合いを送ると言ってきた。

別に断る理由もないが、彼曰く今回護衛にあてる人間を敵に回すぐらいなら管理局を敵に回した方が楽だと言っているほどだ。

本当に誰なのかしら？

―コンコン

どうやらきたみたいね。

カ「はい」

シャ「騎士カリム。今回護衛を務めるお方をお連れしました」

カ「そうですか。どうぞ、入ってください」

扉を開け、部屋に入ってくるのは綺麗な黒髪に、海のように深い青の瞳をした女性。

？？？「失礼します」

そして、彼女から続いて入ってきたのは、

カ「リインフォースさん？」

でもどこか雰囲気が違う。

葵「はじめまして騎士カリム。独立機動部隊ガーディアン所属。神無月葵。階級は二等空佐です。名字が読みにくいので名前で結構です」

ヴェ「同部隊所属ヴェル。階級は一等空尉だ。ちなみにリインとは同じ書物の同胞だと思っていただければいい」

葵さん・・・そう言えばいましたね。三提督直轄の部隊の隊長・・・あれ？　確かあの方は男性では。

カ「失礼ですがあなたは男性ですか？」

葵「えぇ。そうですよ」

カ「・・・（なんだろ女性として負けてはいけないはずなのに負けたような感じが・・・）」

そしてもう一方は確か、ヴェルさん・・・彼女が闇の書の防御プログラムで誰も認めたなかった・・・でも今彼女は彼を皇として認めている。

カ「はじめまして。私はカリム・グラシア。はやてからいろいろと

お話を聞いています。かの有名な黄泉路への案内人が護衛についていただけるとは心強いです」

そうか。彼女が・・・違う違う。彼は男性よ。でも予想外ね。彼が、護衛についてくれるなんて。地上と白は強固な関係を築いているからてっきり本局から来ると思っていたのですが。

カ「葵さん、ヴェルさん。私のこともカリムで結構です」

葵「そうですか？　ではお言葉に甘えて。ではカリム。護衛を任された以上は我が身体を盾にしてでもあなたをお守りいたしますのでご安心を」

え！？

葵「カリム？　顔が赤いようですが、風邪ですか？」

カ「い、いえ！　ち、違います／／／（体を盾にしてでも護るって、そんなこと男性から言われたことないし・・・それに、この胸の動悸が速いような／／／）」

ヴェ（またライバルが増えた・・・）

ＳＩＤＥｏｕｔ

その後今後のカリムのスケジュールを確認すると、一番の確立があるとすれば聖王教会が運営している病院への訪問が一番危険性が高いと思われている。

シャ「・・・病人やけが人を巻き込むなんて」

カ「ですがどうやって捕まえるんですか？」

葵「相手が来ないなら来るように仕向ければいい。ここで来なかったら怪しまれるためこちらで捕まえればいい。来たら来たで策を練ってあるのでそちらを使用すればいい。まぁ簡単言うと――」

現在は白服ではなく黒一色のスーツを身にまとっている。白服だと目立つためこの格好にしている。

そして、予定通りに病院の入り口に来ると、

葵「ここですか？〈ちゃんと呼んでいただけました？　疑わしい者たちを〉」

カ「はい。設備もすごいんですよ？〈はい。右にいる司祭たちです〉」

ちらりと見るぐらいだが五人ぐらいか。

すると、一人の少女がこちらに近づき、

少女「これを渡すように言われました」

カ「ありがとう」

少女「開けてみて！」

？？？（これで邪魔な存在はいなくなる。後はこれで私が・・・）

そして、カリムがそれを開けようとすると、

―ポォーン

と、軽くはじけるような音がして、紙吹雪が舞い散った。

???「なっ!?　バカな!?」

ヴェ「あなたですか？　フルンフィル司祭」

フル「なっ、貴様は何者だ!?」

ヴェ「独立機動部隊ガーディアンの者です。あなたを殺人未遂で連行します」

フル「はっ、どこに証拠が?」

葵「これですよ」

そういって私は今回爆弾を作った犯人と司祭が交渉する姿を映った写真を出す。

葵「証拠写真です」

フル「くっ」

そう言って逃走しようとするが、

葵「往生際が悪いですよ。チェーンデストトクレッシェンド」

すると、鎖がその司祭を捕縛する。

ヴェ「公務執行妨害も加わりました」

フル「貴様に何ができる!?　たかだが二等空佐の分際で!?」

葵「おやおや。私はこういう者でしてね」

そういって身分証を出すと、司祭の顔がだんだん青くなり、

フル「・・・黄泉路への・・・案内人!?」

葵「はい。あなたを社会的に抹殺します。あと、収賄罪などもありますので局でしっかり聞かせいただきます。すでにこちらに白のメンバーが・・・来ましたね」

白局員「葵さん」

葵「こいつだ。埃まみれだからたたけば出てくるはずだ。そこから管理局員との関連性も探れ」

白局員「はっ！　ほら、さっさと歩け！」

葵「ミッションコンプリート。ヴェル、かえるぞ」

ヴェ「はい」

カ「あの！　ちょっと待っていただけますか？　お礼がしたいので」

その後、手招きをされたので近づくと、

カ「今日はありがとうございました」

―チュっ

―シュウウウ

カ「痛っ・・・これは？」

葵「・・・・・・・・」

カ「あ、葵さん？」

葵「・・・はぁ～。ついに聖人にまで手を出してしまった・・・あぁ、私はどうしてこうなんだ・・・」

ヴェ「あ、葵様・・・・」

その後数分ぐらいうつ状態に入った。その後なぜか聖王病院の精神科で色々と愚痴というか自分のふがいなさを語り、ちょっとすっきりした。

葵「というわけです」

その後はパス契約について説明。だが、見た限りカリムは戦闘向きではない。つまりそっち方面の強化だった。

ＳＩＤＥカリム

その後のカリム

カ「ふふ～ん♪」

シャッハ「騎士カリム。なにやら機嫌がいいですね。何かいいことがあったんですか？」

カ「実は――」

私にとっての初恋の始まりをシャッハに告げるとシャッハが彼にはライバルが多いと知った。その中にははやてやその騎士たちもいると知った。

でも、それぐらいでは諦めません！　たとえ相手がはやてでも！

ＳＩＤＥ　ｏｕｔ

第二十話（後書き）

・・・やっちまったよ！？　カリムは葵のハーレムに当初加える予定なかったのに！？　書いてたらこうなっちまった！？

・・・後悔はしない。よし。このまま突っ切るぜ！

第二一話

第二一話

その後、自宅に戻るとリンディさんが、

リン『あ。葵君今大丈夫かしら？』

葵「えぇ。大丈夫ですがどうかしましたか？」

リン『アースラに来てくれないかしら？　今からちょっとしたパーティーを開こうと思ってね♪』

葵「えぇ。それは構いませんよ。あ。ヴェルと孤狐もいいですか？」

リン『構わないわよ。じゃあまたあとで』

そういって通信が切れた。

葵「そういえば、任務前にも言ってたな。さて、じゃあ準備をしてから行きますか・・・あれ？　一応アースラだから制服で行った方がいいのか？」

少し悩んだ結果・・・・

葵「おじゃましま～す」

結局悩んだ末にガーディアンの白服でやってまいりました。

その場には八神家、テスタロッサ家、ハラウオン家、なのはがいた。

リイン「あ！　葵パパですぅ！」

そう言うとリインは特等席なのか私の肩の上に乗った。かなり上機嫌なのか鼻歌まで歌っている。

シ「来たか。ん？　その制服はどこの服だ？」

葵「あれ？　見たこと無かったか？」

ヴィ「あぁ。陸でもねぇし教導でもない」

フェ「かといって執務官でもないよね」

アリ「あれ？　でもどこかで・・・」

な「アリシアちゃんも？　ん～どこかで見たことあるような・・・」

は「あ！　ガーディアンや！」

シャ「ガーディアン？」

リイン「はやてちゃん。ガーディアンってなんですか～」

は「確か陸との連携を重視し治安回復に努めているって聞いとる。後、確か【不の者】もミッドに出現しとるからその討伐に力を注いどる今最も伸びとる部隊！」

リン「その部隊長が彼。確か階級は二等空佐だったかしら？」

葵「えぇ。そうだ。リンディさん。クロノに伝えといてください。頼まれたことはきっちりこなしたと」

リン「それだけでいいの？」

葵「えぇ。これだけでも十分彼には伝わると思うので」

　すると、後ろから、

は「あ、葵君がーディアンの部隊長やったんか！？」

な「すごいの！」

アリ「あれ？　そう言えばヴェルさんと孤狐さんも同じ制服を着ているような・・・」

アイン「どういうことだ、ヴェル？」

ヴェ「無論。私も葵様と同じ部隊にいる」

孤「もちろん、ボクもね」

な「なっ！？　ず、ずるいの！！」

ヴィ「葵！　あたしも入れろ！！」

葵「いや、ヴィータは他の部隊に所属してるだろ！？」

まぁ、その後少しばかり女性陣でなにやら言い争いをしていたが、

葵「そう言えばフェイト。あの子たちは元気か？」

フェ「え？　あ！　うんすっごく元気だよ！」

シ「あの子たち？」

シャ「ほら。あれよ。フェイトちゃんが仕事先で出会った子供達」

な「あ。そうかシグナムさん達は知らないんだったね。フェイトちゃん写真ある？」

フェ「うん。あ、そう言えば葵。あの子たちすっごく葵に会いたがっていたよ。特にエリオが」

は「あれ？　葵君はエリオのこと知ってるん？」

葵「あぁ。フェイトに連れられてな。そしたら兄のように慕ってくれてな。ある子供は父だと言われたがな」

アリ「でも、私もその子たちと同い年だったら葵のようなお父さんほしいかも」

葵「そうか？　ありがとなアリシア」

そういってアリシアの頭をなでる。いま思えばアリシアもそうだがなのは、フェイト、はやても成長したな。

フェ「それに資金援助の方もしてくれてるんだよ」

葵「別に使い道がないだけだ。なら子供たちの役に立つのであれば と思って。そう言えばエリオで思い出したが、エリオはお前が引き取ったんだってな」

フェ「うん。ちょっと前から保護者になってるの。法的後見人はウチの母さんとリンディさん」

な「元気で優しい子だよ」

は「フェイトちゃんが専門のロストロギアの私的利用とか、違法研究の捜査とかだと、子供が巻き込まれるコト多いからな～」

はやての言葉を聞いたフェイトは、次のように応えた。

フェ「子供が自由に未来を見れない世界は、大人もさみしいですからね」

ほぉ～。

フェ「あ、葵どうしてそんな顔をするの！？」

葵「いやぁ～。フェイトも大人な発言するようになったなと思ってな。こないだフェイトから携帯に電話があってな。理由を聞くとアリシアと一緒にホラー映画のＤＶＤを見たら怖くて寝れないからフ

ェイトが寝付くまでずっと電話の相手をしたんだがな～」

フェ「あ、葵／／／！？　それは秘密だって／／／」

　すると、それにシグナムが便乗し、

シ「そうだな。テスタロッサはなんだかんだで執務試験を二度も落ちたしな」

フェ「あぅ・・・／／／　シグナムも葵もそんなこと言ってると写真見せないよ！？」

　なのははそれを聞いて、

な「あの時期は大変ご迷惑をおかけしました」

　そして間髪いれず、

葵「全くだ」

な「はぅっ・・・・」

　その一言にグサリという効果音が似合いそうな感じになったなのは。

シャ「それを考えたらはやてちゃんはすごいですよね。上級キャリア試験を一発合格！」

ヴィ「あれ？　でもあの時期って葵がよくはやての部屋に行ってなかったっけ？」

葵「あぁ。あの時期な。はやてに泣きつかれて、試験勉強に付き合ってやったけ。まぁあれだけの過去問と私が作った試験対策問題を解いたんだ。むしろ受かって当然だろ」

は「あ、葵君！　そ、それは！」

それを聞いたフェイトが、

フェ「え!?　はやてずるい！」

まぁ、そんな感じで食事会は終わった。

ということもなかった。

は「というわけで私明日暇やから葵君。明日デートな！」

葵「ぶふぅううう」

ザ「うぉっ！？」

私が吹いたお茶が目の前にいたザフィーラにかかってしまった。

フェ「はやてそれはずるい！」

な「そうなの！」

シ「確かに。私たちもしたことがない！」

シャ「はやてちゃん。そう言うときは平等にです！」

ヴィ「あたしもしたい！」

アリ「無論わたしも！」

アイン「私もしたいです」

ヴェ「私もだ！」

孤「モチボクも」

というか今までそういう話がなかったのが不思議なんだが？

は「ふっふっふっふ。答えは簡単や！」

葵「・・・・なに？」

は「子供の時に行っても兄妹にしか見えん！　下手をすれば親子！！」

あぁ～なるほど。

その後どこからか聞きつけたのかアリサとすずかも参戦した。その後はリンディ作のクジで順番を決めた。

第二一話（後書き）

というわけで次回からはデート編です。さて、書けるかな俺に・・・

デート編　アリサ

デート編　アリサ

さて、一番手はアリサ。

葵「さて、待ち合わせ時間にはだいぶ余裕があるぐらいに来たんだが」

そして目の前の待ち合わせ場所には、

葵「早いな」

ア「ふにゃっ！？」

いきなり変な声を上げた。びっくりさせすぎたか？

ア「あ、葵？」

葵「あぁ。そうだ。しかし、まぁ」

ア「な、なによ／／／」

葵「なに。フェイトやなのは、はやてたちを見ても思った。お前も成長したなと思ってな」

ア「そ、そう「後綺麗なったな」ふぇ／／／」

はやてたち同様アリサも綺麗になっている。これは将来嫁としてもらう人がうらやましいな。

葵「さて、今日はどこへ行くんだ」

ア「近くにできたショッピングモールよ。そこの服屋さんがとてもお気に入りなの」

葵「そうか。では今日は一日お嬢様に御付き合いいたしましょう」

ア「う、うん。よろしく／／／」

そういって私の腕に彼女の腕をからませてきた。

葵「あ、アリサ／／／！？」

ア「な、なによ／／／！？　い、嫌とは言わせないわよ／／／！」

葵「ま、まぁ、男としては光栄の至りだな／／／」

その後歩いて数分の場所にリムジンが止まっていた。何でも待ち合わせ場所うが駐車禁止だったらしい。何故そんな場所を？

まぁそれはさておき来るまで数分後、

葵「はぁ～、大きいな」

ア「まぁまぁね。とりあえず目的に行くわよ！」

葵「あぁ」

そして目的地である洋服売り場に来た。

葵「何か買う物でも決めているのか？」

ア「ん～。ここのお洋服はどれもかわいいから、目移りしちゃうのよ」

そう言いながらもすでにかごには結構な数の服が入っているように思えるのだが？

ア「よし！　じゃあ試着するから意見お願いね」

葵「分かった」

だが、

ア「葵、どう？」

葵「にあってると思うよ」

そして、

ア「じゃあこれは？」

葵「うん。ぴったりだ」

さらに、

ア「ならこれ」

葵「おぉ・・・・」

ア「あんたまじめにやってるの？」

葵「あのなアリサ。君は間違いなく美人やきれいどころという分類に入る。そんな女性が何を来たってキレイなんだ。むしろ似合わない服を探す方が難しいと思うが？」

ア「そ、そう／／／！？（き、綺麗って・・・それに美人って・・・そんな／／／）」

その後いろいろと見て回り、

葵「そろそろ昼食時か。あそこにちょうどいいものがあるな」

ア「そうね。あそこにしましょうか」

そういって注文を一通りし、

ア「でも今思えばこうやって葵と二人でどこかに出かけるのなんて初めてかもね」

葵「そうだな。まぁアリサもけいこなどでいなかったり、私も私で用があったり。後はみんなで行動か」

いま思えば私は小学生を満喫したのは数週間だったな。

ア「それにいきなり再会したかと思えば２０歳だったし（でも、こっちの葵もこれはこれで／／／）」

昼食後もしばらくは店舗を見て回った。

葵「しかしこうもあるきまわると本当に広いなここは」

ア「そうね。喉もカラカラよ」

葵「そうか？　では近くの自販機で飲み物を買ってくるが何か要望はあるか？」

ア「そうね。炭酸以外で」

葵「了解」

ＳＩＤＥアリサ

葵が飲み物を買いに行ってすぐ、

男「へぇ、ねぇ君今一人？」

ア「いいえ。連れがすぐに戻ってくるので」

男2「男、女？」

ア「男です」

男3「そんな奴ほっといてどこか行かない？」

ア「結構です。ほっといてください」

男「別にいいじゃん。行こうぜ？」

男が私の肩に触れた瞬間、

ア「ほっといてっていたでしょ！」

男の手を払いのけた。すると、

男「いってぇ・・・ナニしやがんだこの女！？」

男2「優しくしてら、テメェ！？」

ア「ひっ」

ヤバい怒らせた。

男3「おい行くぞ！　さっさと来い！」

無理やり私の腕を引っ張り、

ア「痛い！　止めてよ！　止めてってば！（葵！）」

心のどこかで葵に助けを求めると、

？？？「人の連れが嫌がってるんだ。やめたらどうだ？」

男3「なにをイタタタッタタタタ」

ア「葵！」

葵「少し反省しろ」

男3「グベハッ」

　すると腕をつかんでいた男の手を離し、蹴り飛ばされた。軽く数メートルは飛んでいった。

ＳＩＤＥＯｕｔ

男「誰だテメェ？」

葵「この子の連れだ」

男2「関係ねぇ人間はすっ込んでろ！」

葵「だから連れだと・・・はぁ、そうやってすぐに暴力に打って出るのか？」

　男は有無を言わずに殴りかかってくるがこんな鈍足というよりも遅い攻撃など当たるほうがおかしい。それを私はやすやすと避ける。

　久々に飲みたかった炭酸飲料をおもいっきり振り、向かって来た男の眼をめがけて、

――プシュウウウウウ

男2「へっ、そんな・・・ウガヤアアアアアア目がぁぁぁあ」

強炭酸は目に入るとしみるぞぉ。

葵「どう考えてもお前とアリサじゃあ釣り合わないだろ。冷静になれ。そして、邪魔なのはお前らだ」

そういって再び蹴り飛ばした。

葵「ラスト一匹」

男「ひっ」

葵「チェェストォーーーー！！」

男「ギャヘアァ」

またどこへ。星にでもなってればいいのだが。

葵「行くぞアリサ。警備員が来たら面倒だ」

ア「う、うん！」

そのまま安全な場所まで来ると、アリサが。

ア「もうびっくりするじゃない！」

葵「いやすまない」

ア「でも、助かったし。これはお礼ね／／／」

―ちゅっ

葵「！？」

そして、契約が成立。

そして鬱モード・・・・。

数分後説明。

ア「へぇ。じゃあ何？　魔法使い組のほとんどがこれを持っているの？」

葵「あぁ。で、アリサにつけられた称号が・・・」

聖夜の書を取り出し、アリサのところを確認すると、

【灼炎の騎士　アリサ・バニング】

ア「つまり、その・・・これがあるとあんたと一つになれるのよね／／／」

葵「ま、まぁそうだな・・・」

ア「そっか♪」

その後来るまで八神家まで送ってもらいデートは終了。帰り際に、

ア「葵！　私、アリサ・バニングスは神無月葵のことが好きです！　なのは達にも負けないから！！」

そう宣言したアリサは終始ご満悦だったのがとても印象的だった。

デート編　フェイト&アリシア

デート編　フェイト&アリシア

ＳＩＤＥフェイト・アリシア

フェ「水族館のチケット？」

アリ「でもなんで？」

プ「えぇ。フェイトとアリシアが葵とデートをするとリンディから聞いてね。自慢の娘たちが惚れた相手だもの。応援しなくちゃ♪」

アリ「ありがとう！　お母さま！」

フェ「お、おおお母さん／／／！？」

プ「大丈夫よ。彼ならフェイトも、アリシアも任せれそうだわ」

フェ「ま、任せるって！？」

プ「あら？　結婚よ。結婚♪」

フェ「ふぇえええええええええ！？」

アリ「葵と結婚か～。うん、いいかも！」

プ「まぁがんばって彼をものにしなし！　いいわね！！」

フェ・アリ「「はい！」」

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

フェ「というわけで今日暇？」

アリ「暇だよね？　葵♪」

なに、この状況？　いま私は八神家にある自室で寝ています。で、起きたら私の上にフェイトとアリシアがいます。

葵「暇だが、よくはやてたちが許したな」

フェ・アリ「「休戦中だから！」」

なに？　戦争でもしているのか？　なら休戦じゃなくて1秒でも早く終戦しなさい。間違いなく地球の一個や二個壊れるから。冗談抜きで。

その後、寝巻から普段着に着替えると玄関で待っていた二人は、

フェ「あ、葵」

アリ「遅いよ葵！」

葵「すまんな。待たせて」

そういって二人の頭をなでる。

フェ「あ・・・・・／／／」

アリ「ふにゃ／／／」

葵「で、今日はどこへ出かけるんだ？」

フェ・アリ「「水族館！」」

そのまま私たちはバスに乗り、水族館の近くのバス停で降りる。

葵「へぇ、結構大きいもんだな」

アリ「うん。そうだね～。あっ。そうだった忘れるところだった」

フェ「え？　お姉ちゃん、何か忘れたの？」

アリ「ううん。そうじゃなくて・・・とりゃ！」

葵「うおっ」

アリシアはそのまま私の右腕を抱きしめるように自分の体を押し当ててきた。

葵「あ、アリシア！？　あ、当たってる、当たっちゃいけない物があたってる！」

アリ「ん～。何のことかな～」

フェ「・・・私も！」

するとフェイトも左腕に抱きついてきた。

アリ「えへへぇ～」

フェ「ふふふっ」

ま。この二人が幸せそうなら我慢するか。というか、役得みたいなもんだし。

そして、そのまま水族館へ。すると、周りの女性からはなにやら熱い視線が。男からは冷たい視線が。

何この温度差・・・。

すると、フェイトが、

フェ「ねぇ。こうやってしていると周りからちゃんと恋人同士って見られてるかな？」

葵「ん？　そうだな。見られているんじゃないか？　両手に花だけど」

フェ「・・・もう／／／」

アリ「花か。悪くないね／／／」

葵「さて、何から見る？　時間によって違うが、アシカショーにイ

ルカショー。その他もろもろと・・・というか多すぎやしないか？」

予定表を見たが、シャチ、ラッコなどはまだ分かる。だが、ワニノコ・・・うん。ワニの子供だからワニノコ。ゼニガメ・・・亀の一種だ。きっとそうだ。ミジュマル・・・多分名前だ。そうだ、そうに違いない。決して某国民的モンスター育成ゲームの物ではないと信じたい。

フェ「う～ん。私はアシカかな」

アリ「私も！」

で、場所はアシカショーの会場。

アリ「おぉ～。アシカって賢いんだね！」

フェ「すごい！　それに可愛い」

葵「そうだな」

あのぬいぐるみあるかな？

そして、アシカショーも終わりその後は色々な場所を見て回り、今はお土産売り場。

フェ「どれがいいかな？」

アリ「あ！　これなんてどう？」

アリシアが見つけたのは今日アシカショーに出ていたアシカそっ

くりなストラップ。

フェ「うん。これならみんな一緒にできるね♪」

アリ「うん。お母さまと私と、フェイト、アルフとリニス！」

私も何か・・・ん？

店員「ありがとうございました」

先に買い物を済ませているとあちらも終わったようだ。

そして水族館を後にし、現在は臨海公園。

葵「フェイト、アリシア」

フェ「なに葵？」

アリ「どうかしたの？」

葵「私からのプレゼントだ」

それぞれ一つずつ包装された袋を渡す。

フェ「え？」

アリ「開けてもいい！？」

葵「あぁ」

そう言って二人とも袋から物を取り出すと、

フェ「うわぁ～」

アリ「綺麗・・・」

取り出されたのはいるかの形をしたペンダント。

フェ「ありがとう葵！」

アリ「大切にするね♪」

葵「あぁ。どういたしまして」

そして楽しい時間はあっという間に過ぎて行く。もう日が暮れ始めているのだ。

その後フェイトとアリシアをマンションまで送り、

葵「今日は楽しかった。誘ってくれてありがとう」

フェ「ううん。私も楽しかったよ」

アリ「で、これは今日のお礼」

―チュッ

葵「ん！？」

アリ「葵。私はあなたのことが好き。絶対にあきらめないからね♪

またね、葵／／／」

フェ「・・・じゃあ私も」

―チュッ

フェ「・・・葵。私もあなたのことが好き。私にとって大切な者を助けてくれて、幸せをもう一度つかませてくれた。私もなのは達に負ける気はないから！　じゃ、じゃあお休み！　葵／／／」

葵「・・・」

エ《マスターフリーズしてますね》

ル《仕方ないだろう。だが、こうでもしないと振り向かないからな》

酷い言われようだ。

デート編　すずか（前書き）

メリークルシミマス！！　リア充共は爆！！！
何だクリスマスって！？　えぇ！？　実家帰ってみたらカップルいちゃらぶ共が多くて俺一人で買い物に行ってさみしかったよ！？

デート編　すずか

デート編　すずか

そして今日はすずかの番らしい。だが、その御出迎え方法はさすがお嬢様。

葵「・・・リムジンでお出迎えか」

八神家の前に停まっているのはすずかの家の車だ。

す「乗って葵君」

葵「あ、あぁ」

半ばあきれながら車に乗り。

葵「今日はどこへ行くんだ？」

す「うん。動物園に行く！」

葵「すずかは動物好きだな。そう言えばすずかともこうやって二人きりってのは初めてだな」

少し考えてみればそうだ。必ず三人以上ないし皆で行動していた。それだけ仲がいいのだろう。

す「う、うん／／／（今さらだけど恥ずかしくなってきた／／／）」

葵「ん？　顔が赤いが大丈夫か？」

私はすずかの熱を測るためおでことおでこをくっつけた。

す「ふにゃぁあああ／／／！？」

おぉ。すずかも猫化するのか。

そうこうしているうちに動物園に到着。

動物園に入ると、すずかが真っ先に向かったのは・・・

す「葵君、葵君！　ライオンだよライオン！　可愛い！！」

葵「相変わらず猫好きだなすずかは」

そしてフェイト、アリシア、アリサ達同様周りからは冷たい視線が・・・。そして痛い。

ＳＩＤＥすずか

葵「さて、次見て回るか」

す「えぇ～」

葵「ネコ科はライオンだけじゃないだろ？　ほら」

そういって葵君は私に手を差し伸べてくれた。

す「う、うん／／／」

葵君の手は取っても大きかった。

この手がいろんな人の命を救った。でも、過去ではこの手が多くの命を奪った。

でもそんなの関係ない。私は救われたんだ。彼は私が吸血鬼だと知っても一切態度を変えなかった。ううん。むしろ知っても知らなくても彼は多分関係ないといったはずだ。実際彼は私は私だと言ってくれた。

でも、もう少しは頼ってほしいな。確かに魔法も使えないけど葵君を支えたい。いっつも支えてばかりじゃなくて、少しでも葵君に喜んでもらったり笑ってもらいたい。

葵「どうかしたか？」

す「え！？　う、ううん、なんでもない！　それより行こ♪　次はトラさんだよ！」

葵「え？　ちょ、すずか！？」

そういって私は葵君の手を引っ張った。少しでも長くこの手とわたしの手をつなげていたかったから。

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

あの後、すずかの何かのセンサーがキャッチしたのかすぐにトラの場所からここに来た。

す「かわいいよ♪　ふかふかだよ♪」

葵「うむ。この毛並みはなかなか・・・たまりませんね♪」

二人揃って現在今年生まれた赤ちゃんとの触れ合いコーナーに来ている。そして今に至る。いやぁ～久しぶりの至福の時・・・。

その後記念撮影をした。

で、あの後も動物園内を回っているんだが、回る場所回る場所が全てネコ科の場所だ。

す「クロヒョウだって！　今までの子たちと違ってかっこいいよ！」

まるで子供のようにはしゃぐな。まぁ、まだ子供か・・・・。

その後、お土産売り場に行くとすずかが目を輝かせて何かを見ていた。

す「これ、かわいい！」

そういって見せてくるのはライオンの気ぐるみを来た女性のぬいぐるみ【セイ○ーライオン】と書かれている。・・・なぜ剣士の獅子？

葵「ふむ。なら記念に買ってやろう」

す「え！？　わ、悪いよそんな！」

葵「甘えておけ。甘えられるのは今のうちだ。まぁ、出会ったら出会ったで甘やかしそうだがな私も」

そういって買ってきた剣士の獅子をすずかに渡す。

す「あ、ありがとう／／／　大切にするね／／／」

葵「あぁ」

その笑顔でも買った甲斐があるってもんだ。

そして乗ってきた車に乗り、海鳴公園の前で下してもらった。

す「今日は楽しかったよ。付き合ってもらってありがとう♪」

葵「あぁ。こっちも楽しかった」

す「あ、あの葵君。ちょって来てくれるかな？」

車の窓なので少ししゃがみ、すずかの近くに顔を持っていくと、

す「今日は本当にありがとう」

―チュ

―シュゥゥゥ

で、契約成立。その後の説明は割愛！

聖夜の書には【夜空の騎士　月村すずか】

す「そう、なんだ・・・これで葵君とも・・・／／／」

葵「あ、あぁ」

す「それから後一つ」

葵「ん？」

す「私、月村すずかはあなたのことが大好きです。一人の女として。私負けないからね！　じゃ、じゃあまた／／／」

そういって車は去っていった。

葵「・・・すずかってあんなに大胆な子だっけ？」

ル《恋は女を変えると言うぞ》

エ《おぉ！　あのおしとやかなすずかちゃんですら変えるんですか！！》

ま、マジか・・・・

デート編　なのは

デート編　なのは

ＳＩＤＥなのは

な「うぅ～っ・・・いざ自分の番となると緊張するよ～」

今現在わたしは葵君をどこに誘うか必死で悩んでいます。というか本当にどこに行けばいいの～～～！？

桃「なのは～。ご飯よ～・・・ってあら？」

な「お母さん～助けて～」

桃「あらあら」

お母さんからその後のデートプランを聞いたらその後はお父さんとの惚気話になって・・・その、その後の展開とか・・・／／／／

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

葵「なのはからのメールでは確か十時だったはずなのだが？」

現在時刻は待ち合わせから約３０分経っている。

葵「何かあったのか？」

緊急任務。まぁありえなくはないが。事故。桃子さんや士朗さんから連絡があるはず。寝坊・・・一番だな。

な「お、おまたせなの～～～！！」

向こう側から必死に走ってくるなのはが現れた。

葵「別にかまわん。それより何かあったのか？」

な「え？　あ、えっと、その、寝坊です・・・」

葵「それならよかったが、心配するから連絡を一つこれからくれ。後走ってきて疲れただろ。これでも飲め」

そういって飲みかけだがペットボトルのお茶を渡した。

な「う、うん／／／／（こ、これって間接キスだよね／／／／！！）」

葵「それで今日はどこへ？」

な「ここ！」

そういってチケットを取り出す。それは最近できたプールのチケットだ。何でも温水プールなどもあり年中開いているらしい。

葵「ほぉ～。だが私は水着を持ってきていないぞ？」

な「その辺はぬかりないよ。そこ水着の貸し出しもしてるみたいだ

よ」

水着の貸し出し・・・まぁ、いいか。それよりも。

葵「その荷物は出は水着か？」

な「うん♪（気合い入れて新しいの買っちゃった。これで葵君をイチコロなの／／／♪）」

そして今まで通り腕を組んで、そのプールへ。

葵「へぇ。かなり種類があるな」

見渡す限りでもかなり種類が豊富だ。それにしても・・・・

葵「男性は着替えは速く、女性は準備に時間がかかると言うが本当だな」

な「お、おまたせ・・・」

葵「あぁ、そん・・・な・・に・・・・・」

な「ど、どうかな／／／？」

葵「・・・・」

なのはが身につけている水着は白のビキニ。だが、何ともなのはらしくよく似会っている。

な「あ、葵君？」

葵「は！　あ、いやなんでもない。う、うん、よくにあってる／／／」

にあってると言うか、なのはらしいと言うか・・・こういうのには慣れていないな私は、やっぱり。

ＳＩＤＥなのは

あ、葵君のあんな顔初めてみたかも。でも、ちゃんと女性として見てもらえているっていうことだよね。

葵「それよりもなのは。お前運動は苦手じゃなかったか？」

な「うん。それでね・・葵君。泳ぎ教えてなの！」

葵「そう言うことならお安いご用さ」

近くのプールに入り、その後は手を握ってもらい、泳ぎ方を教えてもらった。

葵君の手はやっぱり大きい。この手に何度助けてもらったかな。何度も何度も助けてもらって、支えてもらって・・・。でもこのままだといけないと思う。

わたしも葵君を助けたい。支えたい。護られるばかりは嫌だ。わたしも葵君を守りたい。

それからしばらく練習して、プールから出て、少し休憩。

な「葵君。あの時はごめんね・・・」

葵「あの時？」

な「左目・・・」

そう。葵君はあの事件の時わたしとヴィータちゃんを護るように体を盾にして守ってくれた。

アンノウンの刃はそのまま葵君の左目を刺し、左目に傷をつけ、失明。さらに右半身麻痺という傷を負わせた。

現に今も葵君は左目の傷を隠すため黒色の眼帯（鋼錬のマスタングが着用している物）をしている。

な「あの時、葵君の言うことをちゃんと聞いていたら葵君は左目も、体も・・・」

葵「気にするな。名誉の負傷だと思えばいい」

な「でも！」

葵「我が身体は大切な者を守るための盾。その大切な者にはお前も入ってる。まぁもうあんな無茶をしないでくれると助かる」

な「うっ・・・分かりました」

葵「それにお前はもう一度自分の足で歩き、もう一度空を飛んでい

るだろ。それでもう十分謝罪は受け取っている。それにその程度でお前を嫌うわけないだろ」

そういって葵君はわたしの頭を撫でてくれる。

な「うん。ありがとう／／／」

葵「さて、もうひと泳ぎして帰るとするか」

な「うん！」

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

その後、プールから出て帰る途中、

な「葵君。ありがとうね」

葵「？　あぁ今日のことか？　別にかまわない。私も楽しかったし」

するとなのはが立ち止り、

な「ううん。今までのこと」

葵「？」

な「わたしが魔法と出会っても多分どこかでくじけてたと思う。でも葵君が何度も助けてくれた。一緒にそばにいてくれたり、支えてくれたり、一杯いろいろなことをしてくれた」

葵「私は当然のことをしたまで何だが？」

そう。私はただこの子には笑っていてほしかった。だから、支えもしたし、助けた。

な「それでもだよ。それにちゃんと怒ってくれた。甘やかすだけじゃなかった。だから、これはお礼だよ」

すると、なのはが両手で私の両ほほを挟み、

―チュッ

だが、それでは終わらなかった。

な「・・・ん・・レロッ・・ンチュ」

葵「・・・ん・・」

十秒ぐらいだろうか。なのはが唇を離し、

な「葵君、わたし高町なのはあなたのことが大好きです／／／。絶対に振り向かせてみるからね／／／！」

なのはそのまま笑顔でかえり道を走っていった。

葵「・・・なのはもなのか・・・」

エ《孤狐様は多分言わずと分かりますが。この流れだと・・・》

ル《うむ。他の女性陣もだろうな》

エ・ル《《マスターはモテるな（ますね）》》

デート編　はやて

デート編　はやて

次ははやて・・・何だろうこうも立て続けにデートとは・・・

そうまだ重い目をこすりながら考えていると、

は「あ～お～い～く～ん！！」

―ドスッ

葵「ぐへっ」

いきなり腹部へのダイレクトアタックもといダイブ。

は「葵君今日暇か！？」

葵「あ、あぁ・・・」

本来なら病院へ行って内臓検査をしてもらいたいが・・・。

は「そうか！　なら今日私に付き合ってくれんか！？」

葵「わ、分かった。で、今日はどこへ行くんだ？」

もう、ここ数日での口癖だ。

は「今日はこれや！」

そう言って取り出したのは、

葵「【うまいもの市場ＩＮ北海道】？」

そう。そこにあったのはデパートのチラシだ。

は「あ、でもやっぱりデートらしい場所の方がええ？」

葵「ふふっ。いや、はやてらしいと言えばはやてらしい。それじゃあ着替えるら少し待っててくれ」

は「は～い」

そのまま着替えてデパートに向かおうとした。すると、

は「よっしゃ行くで！」

そのまま腕を組まれた。嫌じゃないのだが、その・・・

葵「はやて・・・その、やっぱりしなきゃいけないのか？」

は「もちろんや！　それにアリサちゃんにすずかちゃん、なのはちゃん、フェイトちゃん、アリシアちゃんとはしたんやろ？」

うっ。なにも言い返せない。それに今さらだが私はこういうのに免疫がない。

そしてデパートに到着。

ＳＩＤＥはやて

葵「はぁ～。しかしまぁなんというか・・・」

は「人多いな・・・」

チラシを見たときにある程度は予想しとったけど、こうも多いとは・・・

すると葵君が、

葵「はぐれないようにしろよ。そ、その・・・そのまんまでもいいから／／／」

若干顔を赤らめながらそう言う。珍しいな。葵君のこういう顔は。いっつもどこかクールで、でも優しい。その優しさに何度も助けられた。

は「うん／／／♪」

そういって離さんようにしっかりと腕に抱きついた。

いろいろ見て回ったけど北海道の海産物おいしいわ！

葵「ふむ。この豚肉を使ったら意外とヘルシーにカレー作れるんじゃないのか？　余分な油落として」

は「あ！　それ私も思った！」

葵「こっちの鮭はパスタに合いそう」

葵君と料理のレシピについて話し合っていると、

？？？「ヘイ、そこの夫婦！」

わ、私らのこと！？

葵「いえ、私たちは「夫婦です！」は、はやて！？」

今だけでも夫婦気分味わっとかな損やし！

は「で、おっちゃん何？」

おっちゃん「この根野菜シリーズどうだい！」

そう言って見せてくるのはじゃがいも、たまねぎ、ニンジンなど。

葵「いいものばかりだな。ざっと見てもこれ以上の値段はしそうだが」

あ、葵君、そう言った知識はどこから？

葵「昔市場でセリに参加したことがある。あの御三家に直接が良いと駄々をこねられて」

は「く、苦労しとったんやな」

葵「うむ。後これぐらい安くしてもらったら」

おっちゃん「!?　こ、これはアカンで!?　ならこれとこれを加えてこうだ!」

葵「いやいや。これならこうだろ」

そういって二人とも電卓で何かを争っていた。

そして、

おっちゃん「かーっ、負けたそれでいいぞ!　もってけ!」

葵「よし。勝った!　そして買った!」

そういって箱に野菜を詰め込んだ。当初の予定より白菜やキャベツなども加わっていた。

そして、人目のつかない場所で転送。

は「たのしそうやったな。葵君」

葵「あぁ。これもはやてのおかげだ。ありがとう」

そういって頭を撫でてくれる葵君。やっぱり気持ちええわ。

そして休憩にデパートの帰り道、私はある場所に来た。それは。

は「覚えとる葵君。ここ」

葵「あぁ。最初に君のうちに来た後ここで少し休んで君に対して君でいていいといった場所だろ？」

そう。私にとっては初めて葵君に励ましてもらった場所。

は「なぁ葵君」

葵「ん？　どうした？」

は「私幸せになっていいんやろか」

私が心配しとったんはこのこと。管理局にはいって少しでも罪滅ぼしになればと思っている。

葵「正直なところこれはお前が抱えるもんじゃない。酷い言い方かもしれないがあの罪はシグナム達や私が勝手に起こしたものだ」

は「でも！？」

葵「いいかはやて。あの時の君はまだ9歳、それに引き起こしたのは私たち。私たちがその罪を背負うのはわかるが、君は背負わなくていい罪を背負っているんだ。私自身君がこの道を選択するとは思っていた」

は「それでも家族の長は私や。皆の責任は私や！」

葵「そうだろうな。まぁほめられた行為ではあるが恨まれる行為ではない。それで恨まれるようであればそれはやつあたりだ。だが、君がそのままの性格だとその感情のせいでいずれ押しつぶされるぞ。

なのはのように」

は「！？」

葵「まぁ、そうなる前に助けてやる。後悔はもうしたくないからな」

葵君はそう言って珈琲を一口飲む。

葵「それに罪はどんだけ償っても記憶から忘れられることはない。加害者にしろ被害者にしろ。これはわかるか？」

は「・・・うん」

葵「償っても終わることはない。それは一生背負っていくものなんだ。罪というのは特にな。それにはやて。私は言ったはずだ。君は君だと。君は君の道を歩むといい。踏み外しそうになったら私や周りの人間が必ず戻してくれる。倒れそうになったら支えてやる。そのために私たちはいるんだ。なのはにも言ったがお前たちは一人じゃないんだ。互いに支える仲間がいるんだ」

は「・・・うん・・・ありがとな葵君。・・・私、元気でたわ」

葵「あぁ、お前はお前なんだ」

そういって葵君は軽く抱きしめてくれた。私が泣きやむまで。その時の葵君の胸の中はとっても暖かくて、心強かった。

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

葵「さて、そろそろ帰るか」

は「うん。その前に葵君」

葵「ん？　なんだ・・・ンムッ」

私が立ち上がり、はやてに呼ばれたのでそっちに振り替えるときなりキスされた。

は「えへへへ。今までありがとうな。私を支えてくれて。それからこれからもよろしくな」

葵「あ、あぁ」

は「私はここに宣言するで！　八神はやては神無月葵をぜっっっったいに彼氏にする！　もちろんその後もな！！」

葵「・・・（なんともまぁ、すごい宣言を・・・）」

は「返事はまだええ。でも、いつか聞かせてな。良い返事まっとるで。葵君♪」

そういって最初の時のように、いやそれ以上に密着して帰路についた。

後、家が一緒ということもありその夜ははやてと一緒に寝た。

は「えへへへへへ～／／／♪」

終始はやては寝るまでご機嫌のままだった。

エ《はやてちゃんがこれということは・・・》

ル《八神家全員はデートの後一緒に寝るというイベントがついてくるな》

・・・私の理性持つか・・・

デート編　はやて（後書き）

八神家だけ落ちは一緒に寝るという風にしたいと思います！
なぜか？　一緒に住んでるからです！

デート編　ヴィータ

デート編　ヴィータ

あぁ・・・何だろこのデジャブ・・・

現在、私の腹の上で寝ている赤髪を三つ網にしている少女・・・

まぁヴィータですね。

葵（昨日のはやてよりかはましか）

そう言いつつもヴィータの頭をなでる。隣を見るとどうやらはやてはもう起きたみたいだ。

葵「それよりも、そろそろ起こすか。ヴィータ。ヴィータ」

ヴィ「ん・・・・はっ！　ヤベッ寝ちまってた！」

おこしに来る予定だったのか？

葵「大丈夫だ。まだ9時だぞ」

自分で言っといて何が大丈夫なんだ？

ヴィ「そ、そうか／／／？（やっぱり葵と一緒に寝ると安心する／／／）」

よくよく考えればここ最近皆と一緒に寝るな・・・精神が！　理

性が危ないが！！

葵「今日は出かけるのだろ。どこへ行くんだ？」

ヴィ「お、おう。ここだ！」

見せてくるチラシは【新規オープン　３３】・・・・え？　三十一じゃないのこっち？

葵「分かった。では着替えるとしようか」

ヴィ「おう！　待ってるから早くしろよ！」

本当に元気だな。ようやくつかんだ幸せなんだろう。普通に笑って普通に出かけて。その普通を手につかめずようやくつかんだ日常。

葵「・・・そのためにも護ってやらないとな」

着替えを終えリビングに向かい朝食を食べ終えると、そのままヴィータに手をひかれて、外出へ・・・

葵「だが、驚いたな」

ヴィ「なにがだ？」

葵「いや、大したことじゃないんだが。てっきり待ち合わせでもするもんだと思っていたんだが」

ヴィ「い、いいじゃねぇか！　そんな細かいこと／／／！（一秒でも長く葵と一緒にいたいなんて言えるか／／／）」

そう言いながらもヴィータは握る手の力を少しだけ強めた。

ヴィ「でもホントは、はやてみたいに腕を組みたいんだけどな・・・」

葵「まぁ、それは仕方がないだろ。何ならお姫様だっこで一日過ごすか？」

冗談で言ってみたが、

ヴィ「い、いいのか！？」

あれ？　予想より斜め上の回答が・・・え、マジ！？

ヴィ「ダメ・・・なのか？」

この視線は反則だろ！？　上目づかいに涙目って・・・今さらだが私はこんなキャラだったか？

作者：そっちの方が面白いじゃ・・・まて、そのフライパンは・・・ギャアァアアアア

ヴィ「葵？　どうかしたのか？」

葵「いや、なんでもない・・・言い始めたのは私だ。本当にいいんだな」

ヴィ「あ、あぁ／／／（恥ずかしいけど／／／でも、葵といられるなら！）」

葵「わ、分かった／／／」

私も顔が熱いのがわかるが、言ったのは私だ。

そう思いながらもヴィータの身体を抱きかかえる。

葵「軽いなちゃんと・・・食べてたな」

食べてるかと聞こうとしたがヴィータはしっかり食べる料理は残さず食べている。

ヴィータの食事は作った側から見ればとても気持ちい食べっぷりだ。

ヴィ「はやてと葵の料理はギガうまだからな！」

話をしているといつの間にかそのアイス屋についていた。意外と話に夢中になっていたようだ。

葵「ちなみに何を頼むんだ？」

ヴィ「バニラにオレンジシャーベットに、あとは・・・このブルーハワイって何だ？」

何でかき氷のシロップが？

ヴィ「物は試しだ。あとはこのミント！」

葵「私は・・・これと、あとはホットの紅茶を二つ」

ヴィ「二つ？」

葵「私とお前とだ。体を冷やさないようにするための予防。ヴィータは女性なんだ。その辺はちゃんとしろよ」

そういって頭をなでる。

ヴィ「お、おう／／／（やっぱ葵の手は大きくて暖かい／／／）」

店員「お会計は」

葵「これで」

そういってお金を支払うと、

ヴィ「あたしが出すって！」

葵「ここは男にはらわせてくれ。女性にはらわせると言うのはなんか気が引ける。それにデートなんだろ？」

ヴィ「うっ。分かった／／／（あ、葵とデート／／／）」

店員（こんな人が彼氏さんってうらやましいかも・・・）

会計を済ませた後、席に着く。

葵「ふむ、なかなかだな」

ヴィ「ん～♪　ギガうまだぜ！」

葵「もう少し落ち着いて食べろ。ほら、口のまわりアイスがついてるぞ」

そうって置いてあるナプキンで口を拭く。

ヴィ「んっ。ありがとう／／／」

すると、ヴィータがこちらにスプーンを渡してきて、

ヴィ「なら葵が食べさせてくれよ／／／」

葵「あぁ。構わないよ。ほい。あーん」

ヴィ「あ、あーん／／／」

顔を赤くしながらもちゃんとアイスを食べるヴィータ。その顔はかなり幸せそうだった。

ＳＩＤＥヴィータ

あの後もう一回お姫様だっこをしてもらいそのまま移動。こ、これは恥ずかしい／／／

そして行きついた場所ははやてと来たことがあるおもちゃ屋。

葵「でもなんでここに？」

ヴィ「これだ！」

あたしは一枚のポイントカードを見せた。

それはこのおもちゃ屋である程度ポイントをためるとそのポイントと景品を交換してもらえる。

葵「ほぉ。で、その分はたまったのか？」

ここはおもちゃだけじゃなくお菓子、ジュースなどもうってるためポイントはたまりやすい。

ヴィ「おう！　だから今日はその交換だ！」

葵「そうか。（ん？　これは確か）」

葵はある処で止まり、何かを見ていた。

ヴィ「どうかしたか？」

葵「いや。持っていない新しいシリーズのぬいぐるみかと思ったが違ったようだ」

ヴィ「ま、まだ集めてるのか！？」

葵の部屋は今では三か所ほどメルヘンだ。あるのは一般的な机とイスに本棚。だが、三か所だけぬいぐるみが占めメルヘンというか、明らかにシンプルな部屋なのにそこだけ場違いなのだ。

葵「なにを言うか！　まだ集めるにきまっている！」

ヴィ「そ、そうか・・・」

それより交換だ！

店員「すまないね。それはもう交換の品が切れちゃってて」

ヴィ「な、なんだってぇ！？」

あ、あの【黒い呪いウサギ】が・・・

葵「ん？　どうかしたのか？」

ヴィ「あ、あおい・・・けいひんが・・・・」

その後、葵に状況を説明した。

葵「・・・あれ？　黒い呪いウサギって売ってませんでした？」

ヴィ「え？！」

店員「そうだったかね？」

葵は手に持っていたぬいぐるみを取り出すと。

葵「ほら。値札も。ちょっと埃がかぶっていますが」

店員「本当だね。じゃあポイントとこれを交換でいいかい？」

ヴィ「もちろんだ！」

その後はポイントと引き換えにぬいぐるみをもらった。

その後は家に向かって帰る。

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

さて、かえり道はヴィータのご要望により手をつないで帰っています。

ヴィ「葵。ありがとう」

葵「え？」

ヴィ「葵がこのぬいぐるみを見つけなかったらあたしは後悔してた。ううん、諦めてた」

葵「お、重いな・・・」

いきなりの発言はちょっと重かった。内心ではぬいぐるみ一つで？　と思ったが、次の言葉でその意味がわかった。

ヴィ「はやてを助ける時もそうだった。あたしたちだけだったら多分、ううん。絶対に後悔してた。闇の書の完成がはやてを苦しめ、それを突破できてもアインやヴェルが・・・え」

言い終わる前に私はヴィータの頭に手を置いた。

葵「気にするな。過去は過去だ。そして今ははやても自分の足で歩いてるだろ。アインもヴェルもいるだろ。それが現在（今）だ。そしてこれからの未来もな」

ヴィ「うん。あ、葵ちょっといいか」

手招きをされたので、腰を下ろすと、

ヴィ「今日はありがとな」

―ンチュッ

葵「！？」

ヴィ「あたしはお前が好きだ！　誰よりも！　そして誰にも負けるつもりはねぇ！！」

ヴィータは私にキスをしたのちそう宣言した。

ヴィ「じゃ、じゃあ帰ろうぜ／／／！」

そのまま手を引っ張られて帰路についた。

当然のようにその日、ヴィータと一緒に寝た。

ヴィ「ん～／／／　葵～♪」

と、夢の中でもどうやら私といるらしい。

エ《次は誰だと思う？》

ル《シグナム、シャマル、アイン、ヴェル。それに孤狐様か・・・シグナムと見た！》

エ《根拠は？》

ル《なんとなく。というか私たちにも順番が明かされていないとはどういうことだ！？》

そうだったのか。てっきりお前らは知ってるモノだと思っていた。

デート編　シグナム

デート編　シグナム

平和な朝だ。起床時間になり、隣で寝ていたヴィータを起こしリビングに向かうと、朝食を作っていたはやて。あわてて今起きてきたシャマル。あ、キッチンは行くなよ。新聞を呼んでいるシグナム・・・あれ？

葵「シグナム。新聞逆だぞ？」

シ「！？」

私がそう言うとシグナムは新聞を元に戻したが、すぐにたたみ、

シ「あ、葵。今日は何か予定はるのか？」

いつからかは知らないが、シグナムが私のことを神無月ではなく葵と呼ぶようになった。まぁそう呼んでもらった方が私もうれしいが。

葵「ん？　無いが？」

シ「そうか。なら付き合ってくれ」

そうか。今日はシグナムか。

葵「あぁ。良いぞ」

数分後互いに着替えを終え、出かける。
あの時はやてたちが何も言わなかったのがちょっと怖かった・・・。
で、今は腕を組まれて、その、シグナムの胸は凶器で・・・
シ「い、嫌か？」
葵「そ、そんなことはないんだが・・・その・・・／／／」
何で女性はこうも積極的なんだ？
葵「こんなことは他の男性にはするなよ」
多分自分のどこかしらの欲望だろうな。
シ「う、うむ／／／（こんなことお前以外にできるわけないだろ／／／）」
葵「で、今日はどこへ行くんだ？」
シ「いや、特に決めていない」
葵「ふむ。そうか」
シ「お前が決めてもいいんだぞ？」
葵「いや、私はこっちにくるまでそういう経験をしたことがないか

ら。すまんな、頼りなくて」

シ「頼りなくはないと思う・・・」

葵「え？」

シ「お前は頼りになる。その力で主はやてはむろん、我々だって助けられた。感謝しているんだ」

葵「そ、そうか」

シグナムにそう言われるとは思っていなかったな。

すると、こちらに熱い視線を送ってくる女性が、

女性「ふむふむふむ」

葵「えっと何か御用ですか？」

女性「え？　あっ。これは失礼しました。私こういうもんなんですが」

そう言って一枚の名刺を渡された。そこには

シ「【月刊ウェディング】？」

月刊ということは雑誌か？　で、ウェディングは結婚・・・結婚専門雑誌？

葵「そんなものまであるのか？　松西さん」

松「はい！　今結婚に一番近そうなベストカップルを探しているんです！」

　すると、シグナムがその言葉を聞いて顔が真っ赤になり、

シ「けっけけけけ結婚！？」

松「そこでですね！　是非参考までにあそこで彼女さんのウエディング姿と彼氏さんのタキシード姿を一緒にとって雑誌に掲載したいんです！！」

　す、すごい鼻息が荒い・・・

葵「ですが、私と彼女はカップｒ「分かりました！　お受けします！」では・・ってシグナム！？」

松「本当ですか！　ではこちらへ！」

　その後、松西さんによってシグナムと私はそのまま写真撮影の会場に連れられた。

ＳＩＤＥシグナム

　あの後松西という物と一緒に撮影会場に来た。そして、

松「シグナムさん胸おっきいですね～」

シ「え／／／！？」

松「彼とは長いんですか？」

シ「・・・もう三年以上になる」

松「えぇ！　じゃあ本当に結婚する勢いじゃないですか！？」

シ「だが、彼の周りには女性が多い」

テスタロッサに高町、そして主はやてやヴィータ、アインにヴェルに孤狐。他にも多いな。だが、葵はいつも「自分よりいいと男なんて山のようにいる」といっている。

松「ふむふむ。ならいい方法がありますよ！」

そういって松西は耳でその方法を教えた。

シ「な、なななな／／／」

確かに一度はした・・・一度だけではなかったな。あの後も何かとしていた／／／

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

編集長「しかし、いい男を本当に捕まえたわね」

葵「はぁどうも・・・」

ウエディングドレスがどんなもか知らないが、テレビでＣＭとかで見てるとやはり着るのは大変そうだな。だからこんなに時間を取るのか？

―ガチャ

どうやら着付けが終わったようだ。

葵「・・・・・・」

シ「ど、どうだ／／／？」

純白のウエディングドレスを着たシグナムに余計な飾りの言葉を必要としないほどだった。ただ単純に、

葵「・・・き、綺麗だ／／／」

そう。この言葉だけでいい。

編集長「あら、初々しいわね」

松「はい。編集長！　じゃあ撮影しますね！　後指示に従ってくださいね」

そういってカメラの前に立ち、

松「う～ん、ちょっと表情が硬いかな。あともうちょっと近寄って！　密着するぐらい！」

えぇ！？　そ、そんなこと！？

シ「こ、こうでいいのか／／／」

腕を組み、恋人握りという握り方をする。

松「グッド！」

―パシャ

松「じゃあ彼氏さん！　彼女さんをお姫様だっこしてみよう！！」

シ「え！？」

葵「・・・分かりました」

もうやけだ。そういって私はそのままシグナムを抱きかかえる。

シ「あ、葵！？　お、おろせ！　い、いや、やっぱりいい・・・／／／」

どっちだ？　まぁ最後にいいといったのだから止めなくていいんだろうが。だが、軽いな。

松「ベスト！」

―パシャ

松「じゃあ最後にキス行ってみよう！　モチ、そのままで！」

はぁ！？　それはさすがに「い、行くぞ葵／／／」

葵「え？　ングッ」

シ「・・・レロッ・・ングッ・・ンチュッ」

松「・・・おぉ・・エロい・・・でもいただき！」

―パシャ　カシャ

最後だけなぜ二枚撮った！？

その後シグナムは写真を松西さんからもらい腕を組んで帰路についた。

シ「そうだ葵」

葵「なんだ・・・ング」

再びキス。

シ「私はお前が好きだ。この気持にウソも偽りもない。お前を必ず振り返らせてみせるからな／／／」

で、その夜は当然のように・・・

シ「葵。また、一緒に出かけような／／／」

最後にシグナムはそう言って一緒に寝ました。

エ《次はシャマルさんかな？》

ル《エクス！　すぐに胃調薬を！》

エ《何で？　あ、そうか！！》

デート編　シャマル

デート編　シャマル

葵「今日はシャマルか？」

シャ「はい！」

シャマル。その元気な表現はいいんだが、私は怖いんだ。そう。その手にしてる弁当が。

どうやらシャマルはピクニックに行くらしい。それに近くの自然公園に行くと言っていた。

葵「まぁ、この季節なら風も気持ちいいしな」

シャ「そうですね。でも今思ったら葵君とこうやって二人きりって初めてですね」

葵「そうだな。そう言えば。というか私はあれから結構忙しかったしな、部隊とかで」

シャ「見かけによらず昇格しましたしね。次は一等空佐でしたか？」

葵「あ、あぁ（もうすでに大将です）」

シャ「でもできれば私もガーディアンで働きたかったです／／／」

葵「だがそれだと身内だからって思われるだろ？　公私混同をする気はないがやはり第三者から見るとね」

ちょっと仕事の話が入ったな。

葵「そう言えばシャマル料理の方はどうだ？」

シャ「えぇ。腕に磨きがかかってきましたよ！」

そういってガッツポーズをしているが、私がたまに帰ってくると泡を吹いているザフィーラ犬型「狼だ」・・・今ザフィーラの声が・・・まぁいい。いるのだが？

私は今日生きて帰れる・・・あ、そう言えば神からもらった能力があった。

そして目的地に着く。

葵「風が気持ちいな」

近くの芝生に腰を下ろす。こうやってゆっくりするのも久しぶりだな。

―ぐぅぅぅ～～

葵「・・・すまん」

シャ「いえいえ！　あ、じゃあちょっと速いですがお昼にしますか？」

・・・ついに来たか。胃の準備よし！　舌の準備よし！　さぁいつでも来い！

シャ「今失礼な準備しませんでした？」

葵「気のせいだ！」

シャ「そ、そうですか？　じゃあどうぞ！」

そういって弁当箱のふたを開けると、

葵「・・・これは本当にシャマルさんが？」

シャ「はい！　もちろんです！」

弁当箱の中は卵焼きに、焼き鮭、ポテトサラダ、鳥の唐揚げ。二段目はおにぎりとお漬物。見た目は完璧というか原型というか料理の形をなしている！！

だが、

葵「あれ？　お箸は？」

すると、シャマルがお箸を持ち、

シャ「あ、あの、あ、あーん／／／」

葵「・・・・え」

もう驚くことはないが、これは正直反則だ。シャマルは料理以外

はどこか母性を感じていたが、こうもされると。

シャ「あ、あの、嫌でした？」

涙目でそう言うシャマル。うっ、罪悪感が、

葵「い、嫌じゃないが、そ「じゃあどうぞ」・・分かった。あーん」

そして咀嚼。ん！　これは・・・

葵「普通においしい」

そう。普通の味なのだ。この成長はあの三途の川への常連であるザフィーラも喜ぶだろう。もう実験台にならなくて済むし。

その後は弁当を完食。実においしかった。

ＳＩＤＥシャマル

シャ「葵君。ありがとうございます」

葵「？　いきなりどうした」

シャ「いえ。この機会にでも言っておかないと」

葵君はそれでも何が？　みたいな感じで首をかしげます。

シャ「闇の書の事件。それとあの後なるべくはやてちゃんとシグナ

ム達と一緒に行動できるように計らったのは葵君ですよね」

そのことを聞いた葵君はかなり驚いていました。

葵「リンディさんあたりか？」

シャ「はい。リンディ提督とクロノ君から。はやてちゃんや皆と同じ部隊に配属された時は皆すごく喜びました。でもだんだん冷静になって考えたらおかしいと思ったんです。だから聞いたんです」

リンディさんいわく葵君が三提督と地上本部のレジアス中将を説得して私たちが同じ部隊での行動を認めるよう説得してくれたらしい。その代わり葵君がきつい仕事でも引き受けるという条件を出したみたいだ。

葵「家族がバラバラになるのは嫌だろ。私も彼女たちが悲しむ顔なんて見たくもない」

シャ「それだけじゃありません。私に回復魔法を教えてくれたりしてくれました。おかげでヴァリエーションも増えましたし」

葵「私はコツを教えただけだ」

シャ「料理も上達しましたよ」

葵「・・・それは何とも言えんな。ただ一つ言えるのは諦めず努力したからだろう」

シャ「むぅ。葵君。人の感謝は素直に受け取りましょうよ！」

葵「イヤ本当に何もしていないんだが」

そういう謙虚なところがまたいいところなんですけどね。でも、

シャ「私たちに未来を幸せをくれました。私たちは本来消えるはずだった。でもあなたは私に私たちに手を差し伸べてくれて希望の光を見せてくれました」

葵「・・・・・」

シャ「本当にありがとうございます」

葵「・・・そうか。ならよかった」

そう言って彼は優しく微笑んでくれた。この笑みに何度も救われた。

ＳＩＤＥＯｕｔ

日が暮れ始めたのでそろそろ帰ろうとしたとき、シャマルが、

シャ「あ、葵君！」

葵「ん？」

そういって振り返ると、

―ンチュッ

葵「!?」

シャ「私の初恋の相手ですからね、葵君は。初恋は実らないといいますが、絶対にそんな風にはしません。この恋は必ず実らせてみせますから!」

その後、腕を組んで帰路についた。

終始シャマルも私も顔が真っ赤だったが、夕日のせいでごまかせた。

まぁ、後はわかると思いますが今日はシャマルと一緒に寝た。

シャ「葵君。私絶対に諦めませんからね///」

と、最後に言ったな。

エ《さてお次は?》

ル《アイン、ヴェルあたりか》

エ《意外とダブルで来たりして♪》

ル《・・・否定できんな》

エ《え?》

デート編　アイン・ヴェル

デート編　アイン・ヴェル

ＳＩＤＥアイン・ヴェル

アイン「・・・どこに連れて行けばいいのだ？」

ヴェ「私に聞くな。そもそも、リンディもリンディだ。なぜ同じ番号をクジに入れる！？」

まぁ、見てくれた方なら分かるがクジにはデートの順番を示す数字が書かれた紙が人数分入っていた。だが、同じ番号が二組あった。一つはフェイトとアリシア。そしてアインとヴェルがそれを引いた。

ヴェ「それに私だってその・・・こういったことは・・・初めてなんだ・・」

アイン「・・・まさか人を好きになるなんて思ってもみなかったからな」

ヴェ「あぁ。それを言うなら私は助からずに消えていたかもしれないんだぞ？」

アイン「それらすべて含めて葵がいたからか・・・本当に彼には驚くばかりだな」

ヴェ「だが、そのおかげで私たちはこうやって幸せをかみしめることができている。彼がいなかったら私とアイン、共に消えていたかもな」

アイン「そうだな。ん？　ヴェル、これならどうだ！？」

ヴェ「・・・そうだな。これなら！」

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

葵「今日は・・・二人か？」

そう。シャマルを起こしリビングに行くとニコニコ笑っているヴェルとアインがいた。

アイン・ヴェ「「はい！」」

そして、今まで通り腕を組み目的地に向かう。

その目的地とは・・・

葵「遊園地か・・・何時以来だろう」

ヴェ「私たちは初めてですね」

アイン「でも、色々な物があるな・・・」

さて、はじめは何に乗ろうか。

すると、アインが、

アイン「あれなんてどうだ？」

そう言って指差す方向にあるのは・・・

葵「ジェットコースター？　結構きついぞ？」

アイン・ヴェ「「え？」」

葵「まぁ、見てればわかるか」

すると、頂上まで行った乗り物が急降下、そして、

「キャァアアアアアアアアアア――――・・・・」

葵「あぁなる。ま空飛んでんだから大丈夫か」

ヴェルとアインの方を見ると、少し顔が青いぞ？　え？　大丈夫だよな？　あんなに空を高速で移動してるんだから！？

ヴェ「い、行きましょう！　あ、葵様！！」

アイン「そ、そうだな！　い、行こうか！！」

葵「・・・・同じ足と手が出てるぞ？」

ヴェ・アイン「「！？」」

葵「・・・怖いなら「「恐くない（ありません）！！」」そ、そうか？」

その後、ジェットコースターに乗った二人はあまりの緊張感からか、恐怖感からか一言も言葉を発していない。両隣を見ると、

ヴェ「あ・・・あわ・・・わ・わわ・・・」

アイン「あ・・・は・・は・わわあ・・・」

葵「お前ら、普通に空飛んでいるのに何で恐がるんだ？」

―ガゴンッ

ヴェ「ふぇ？」

アイン「なぜここで・・・・・」

葵「いや、なぜって・・・」

そして、時は来た・・・

ジェットコースターは急降下する。

ヴェ「イヤァアアアアアア！！！！」

アイン「キャァアアアアア！！！！」

葵「おぉ～～！！！」

ジェットコースターから降りると、二人を近くのベンチに座らせた。

葵「だ、大丈夫か？」

明らかに来る前と顔色が違う。何と言うか病人顔負けなほど真っ青だ。

ヴェ「そ、空を飛ぶのと全然違う・・・」

アイン「あ、当たり前だろ・・・あれは私たちで調整できるのだから・・・・」

あぁ～。言われてみれば確かに。

葵「少しここで休んでろ。飲み物を買ってきてやるから」

そういって近くの売店に飲み物を買いに行った。

ＳＩＤＥアイン・ヴェル

アイン「ふがいないな・・・」

ヴェ「どうかしたのか？」

ヴェルがアインのつぶやきに少し気になって、聞いてみた。

アイン「いや。その、あんなものにあんな悲鳴を上げたり、葵に心

配させたり・・・」

ヴェ「そんなことか」

アイン「そ、そんなことって！？」

ヴェ「落ちつけ。いいかアイン。以前葵様が言ってただろ。甘えるときはしっかり甘えろと。感情を抑えたり、無理に抑制するな、と」

アイン「あ、あぁ」

ヴェ「解放しすぎるのもなんだが、アインのああいう表情も葵様から見れば新鮮なんだろ。葵様はよく私たちを見てくれている」

アイン「・・・確かにな。葵はよく見てくれているな。体調管理や栄養など・・・その母親的というか、なんというか／／／」

ヴェ「母親か・・・私たちには縁遠かったものだったな」

　すると、葵が飲み物を買って帰ってきたようだ。

葵「ほら。これでいいか？」

ヴェ・アイン「「ありがとう。お母さん」」

葵「・・・はぁ？」

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

飲み物を買って帰ってきたら母さんと呼ばれた・・・なぜ？

その後理由を聞くと、何かと気が利きまるでお母さんみたいだからと言われた。

葵「ははははっ！」

それを聞いて私は久しぶりに大爆笑だ。

ヴェ「な、何かおかしかったでしょうか？」

アイン「い、いや別に何も無いと思うが」

葵「い、いや、くくくくっ、そうか、私が母親か」

そうだったな。昔も、今もそう言う点では変わらないか。

葵「まぁ、家族なんだ。そう思われてもいいか」

ヴェ・アイン「「？」」

葵「気にするな」

その後は色々と回った。ただ、選ぶものが、メリーゴーランドとか、コーヒーカップとかかなり恥ずかしいものだった。

そして最後は観覧車と定番中の定番・・・なのか？

ヴェ「おぉ～。かなり高いところまで来た」

アイン「はい・・・。主の家もかなり小さいですが大体あそこらへんでしょうか」

まるで子供みたいだな。あながち二人が行った母というのも間違いじゃないのかも。

葵「・・・ふふっ」

ヴェ「どうかしましたか、葵様？」

ＳＩＤＥアイン・ヴェル

アイン「？　どうかしたか」

急に葵が笑いだしたのでそちらに振り替えると、

葵「いや、こうやって見ると本当に子供だなと思ってな」

すると、二人が黙って、

ヴェ「葵様。私たち二人は本来あの戦いの後消えるはずだった。防衛プログラムである私は暴走体と共に」

アイン「私はその後、主に被害を出さないために。だからこういう経験がないに等しい」

葵「なら、今から積み重ねていけばいい」

葵の言葉に顔をあげる。

葵「時間ならまだある。今からゆっくりでもいいから積み重ねて行くといい。幸せを、幸福を」

アイン「いいのでしょうか・・・私たちがそれをつかんで」

葵「いいに決まっている。今までお前らは重荷を背負いすぎるほど背負って来たんだ。その分幸せになってもいい」

ヴェ「ですが、世界が私たちを赦さないかもしれない」

葵「たとえ世界が否定しても私が認めよう。たとえ世界が、お前らに牙をむくと言うのであれば私が体を盾にしてでも護ろう」

その言葉に二人は黙り、そして・・・

アイン・ヴェ「「あ・・あぁあああああああ」」

葵に抱きつき子供のように泣き始めた。

葵「よしよし。もう大丈夫だ」

葵は息が詰まらないように優しく二人の背中をなでた。二人が泣きやむまで。

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

あの後、係員に頼んでもう一周頼んだ。その時、後ろの人から生温かい視線が何ともまぁ・・・

アイン「す、すまない。その／／／」

ヴェ「申し訳ありませんでした／／／！！」

顔を赤くしながらも、謝ってくる二人。

葵「いや、別にいいって。それに二人の心の声がちゃんと聞けたんだ。あまりため込むなよ」

そういって二人の頭をなでた。

すると、二人が顔を上げ、

アイン「・・・そうでしたね。葵が甘えてもいいといったんでしたね」

ヴェ「そうだった。葵様が甘えろといったんだ」

葵「・・・そうだが、なんだ？」

すると、二人の顔が迫ってきて、

―ンチュ

―チュッ

入れ違いに唇が奪われた。

アイン「葵。私はあなたのことが大好きです。ですからこの気持ちを伝えておきます」

ヴェ「主従など関係なく、葵様が好きです。この世で一番」

その後は腕を組み帰路についた。

そして、当然一緒に寝ることになった。

ヴェ「ん～／／／／葵様♪」

アイン「葵／／／」

そう言って彼女達は自分の頭を私の胸にこすりつけて、幸せそうにして眠った。

これを聞いたら他の人たちが何が起こるだろう・・・。止めよ肉片しか残っていない自分が想像できた・・・

ル《さて、残すは・・・・》

エ《孤狐様ですね・・・行く場所は大体予想できますが》

デート編　孤狐（前書き）

あけおめ～！　ハッピーニューイヤー！
今年もがんばっていきますのでよろしくお願いします！！
後今回は二本立てです！

デート編　孤狐

デート編　孤狐

さて、朝起きてアインとヴェルを起こし、リビングに向かう。もうパターン化してきたな。

葵「今日は孤狐か？」

孤「イエス！」

その後は朝食を「食べてる暇なんてない！」えぇ～。

そのままどこかへＧＯ！　で行きついた場所が、隣町のデパート。

葵「【世界の料理博覧会】？」

孤「そっ！　色々な料理があるんだよ！」

さて、まずやってきたのはアメリカ。

葵「メジャーにホットドックとハンバーガー」

孤「ファーストフードの鉄板！」

次はイタリア。

葵「ピザか。チーズだけでも結構な種類があるんだな」

孤「ん～。チーズだけじゃなくてトマトソースとか、このタバスコもなかなかいけるよ♪」

メジャーに中華

葵「饅頭の種類が多いな」

孤「うわぁ～目移りしちゃうよ～♪」

フランス。羊肉の包み焼き

葵「なんか気品あふれるもんだ。だがシンプルな物だな」

孤「うみゃ～～～～！！」

トルコ。

葵「はじめてケバブ食べた。これはなかなか」

孤「おいひぃ～」

などなど、食べて歩き回った。

ＳＩＤＥ孤狐

久しぶりだな。こうやって葵と出かけるの。

前世って言うのかな？　あの時はめったに出かけることもなかったな。

葵「ん？　どうかしたか？」

孤「ううん。ただ前世に比べて葵は明るくなったなって思っただけ」

葵「そうかもな。支えてくれるものがいる、共に戦う者がいる。あっちでもそうだったな。だが」

孤「規模が違う？」

葵「あぁ。世界を敵に回して今度は戦うなんて思わない。あの時の私はどこかあいつと同じ考えを持っていたのかもな。今の私なら世界すら征すれると」

孤「・・・」

葵「だが無理だ。私は人だ。半分精霊でも半分は人だ」

孤「ねぇ葵。初めてボクと出会った時のこと覚えてる？」

葵「あぁ。行き倒れているここを拾ったらいきなり人型になってそのまま唇奪われて契約・・・」

孤「あ、あははは っ」

乾いた笑いしか出てこない。確かにそうだ。簡単に略せば。

孤「でも葵は契約いきなりしても怒らなかったよね。ボクがどこのだれかも分からい。精霊なのか悪魔なのか神なのかもわからなかったのに」

　すると、葵は、

葵「終わったことだ。という感じで諦めていたっけ。それにあの時まさか自分と契約してくれるものがいること自体不思議だったからな」

孤「ウィザードゼロ。魔力値が一切ない。だっけ？　確かあの実験で魔法が嫌になって自分から精進することを捨てんたんだっけ」

葵「あぁ。あの後すぐだっけ。あいつがいると言うことを知り再び使い始めたの」

　あいつね。あいつのことは思い出したくもないからあいつでいい。

孤「でもそんな風に思ってたんだ・・・あれ？　でも契約解除なんかできないはずだよね？」

葵「私が勝手に強制的にした。死ぬのが目に見えてたしな」

孤「えぇ！？」

　契約の解除って確かどちらかに相当な負担をかけるんじゃ・・・ボクはどうでもなかった、つまり・・・・

葵「私がすべて負担した」

孤「・・・なんでそんなこととしたの？」

葵「お前は神様だ「それだけで！？」聞け」

孤「え？」

葵「神様だからという理由ではない。お前は私と初めて出会って何といった？」

孤「えっと、おいしいものありがとう？」

葵「あぁ。そうだ」

え・・・これなの！？

葵「孤狐。お前は私が捨て、再び手に入れた家族だ。契約者契約主関係ない。最初に食べさせた料理だって本来は私が食べる晩御飯の予定だった」

孤「ごめんなさい」

葵「それはいい。あの料理というよりお前と出会う以前の料理なんて所詮は栄養さえ取れればいい。そんなことしか思っていなかった。でも」

そういって葵は空を見あげ。

葵「お前のあの一言からどんどんお前の笑顔が見たいがために必死に作っていた自分がいた。家族のために作ろうと。そんなやつに負担をかけれるか／／／」

葵が少しだけ顔を朱に染めてそう言う。めっずらしぃ～。

でも、うれしいかな。今まで母様とも離れ離れだったし、それが嫌で人間界に下りて、空腹で倒れてたら彼に助けてくれた。

そこから毎日楽しかったな。

孤「でも、また家族だね♪」

葵「あぁ。増えたけどな家族」

孤「いいよ別に。楽しいし、料理美味しいから♪」

その後はまた食べ歩きだ！

ＳＩＤＥ　Ｏｕｔ

あの後、数十件・・・いや、制覇したなあの量は。というか二周したんじゃないかあの店の中を。

孤「ふぃ～。かえったらはやてちゃんの料理だ♪」

葵「うっぷ。そりゃ・・・よかった・・・」

はやての料理は確かにうまい。ヴィータがうまいの前にギガをつけるのも納得するぐらい。だが、今は・・・無理。

すると孤狐が振り返って、

孤「葵。ボクね、葵がいたから今のボクがあるんだよ」

葵「え？」

孤「葵はいろんな人を助けた。神も悪魔も精霊も関係なしに。その中には当然ボクも含まれている。だからこれはお礼」

―ちゅっ

葵「！？」

孤「えへへ／／／。葵、ボクは葵のことが、ずぅ～～～っと好きだよ！　過去も、今も、そしてこれからも！　誰にも負けないからね♪」

そういって孤狐は私の腕を組んで家に帰る。

その後ははやての料理を無理やり胃におさめ、

孤「ん～、葵／／／　いつまでも一緒だよ♪」

そして孤狐と共に寝た。

デート編　エクス・ルミル（前書き）

もう一本！

デート編　エクス・ルミル

デート編　エクス・ルミル

ＳＩＤＥエクス・ルミル

エ「ん～」

エクスが、なにやら考えていると部屋の扉が開き、

ル「？　どうしたんだエクス？」

エ「あ。ルミル。うんとね、今ままでマスターの御嫁三候補たちと距離縮める作戦でデートを公認したよね？」

ル「あぁ。確かに。おかげでマスターも少しずつ進んでいるしな」

エ「そうだね。そうなんだよね。でもさ」

ル「でも？」

エ「私もデートしたいよ！！　マスターとデート！！」

すると、エクスはまるで駄々をこねる子供のように地面でジタバタし始めた。

ル「お、落ちつけ！？　でも確かにそうだな。そうだ。ちょうどい

い」

エ「!?　何か思いついたの!?」

ル「これなんてどうだ?」

エ「どれどれ?　おぉ!　さすがルミル!!」

ＳＩＤＥｏｕｔ

葵「ん～。・・・あれ?　え、エクス!?　ルミル!?」

私が目を覚ますと、いつものはやてとヴィータの特等席にはエクスとルミルがいた。

葵「な、なんでお前らが!?」

ル「ん・・・あ、マスター・・・」

エ「ふわぁ～。おはようございます」

葵「あ、あぁ。おはよう。じゃなくて!?　なんでお前らが具現化しているんだ!?」

ル「何故とは愚問だな」

エ「今日は私たちとデートしてもらいます!」

葵「・・・は！？」

ル「で、今日はここに行くのだ！」

そういってルミルが取りだしたのは一枚の広告。そこには、

葵「海鳴温泉？」

エ「一度なのはちゃんとその一家で出かけたあの温泉です！」

ル「たまにはゆっくり休むのもいいかと思ってな」

葵「はぁ・・・でも今はお客さんもいっぱいだから「大丈夫だ！」え？」

ル「もう予約も済ませてある」

エ「大丈夫ですよ！」

なんという行動力・・・・。まぁ理由があるんだろうがな。

葵「・・・・で、実際はどうなんだ？」

エ・ル「「え？」」

葵「何年お前らとパートナ組んできたと思っているんだ。予想だが、大かたお前らなのは達の姿を見てデートをしたくなったというあたりか？」

エ「・・・さすがマスター」

ル「うむ。あたりだ」

葵「やっぱり」

エ「でもマスターの体を心配もしてるんですよ?!」

ル「私たちはマスターあっての身だ。だから休んでもほしいと思う」

その言葉に私は下手に断るわけにもいかず。

葵「はぁ。分かった。では準備していくか」

エ・ル「「は〜い!」」

その後、準備をして目指すは温泉地。

で、数十分後には到着。

え? 何をしたかって? 簡単だ。魔法で人気のない場所に移動して到着。簡単だろ?

仲居「いらっしゃいませ。えっと、何名様でしょうか?」

葵「えっと、予約していた神無月ですが」

仲居「神無月様ですね。・・・はい。確かに予約を承っています。ではお部屋にご案内いたします」

そう言って案内された部屋は・・・・

葵「・・・・マジでここなんですか？」

仲居「えぇ。確かにここで間違いないはずですよ」

部屋の外からは日本庭園が見え、外にはそれを一望できる露天風呂付き・・・え？　予算はどこから？！

エ「大丈夫ですマスター！」

葵「・・・本当に大丈夫なのか！？」

ル「マスターとは別にお給料はもらってますよ。これぐらい」

そう言ってルミルは給料明細を見せてくる。ざっと見ただけでもなのは達を簡単に上回っている。私よりかは下だが。

葵「・・・何ともまぁ」

ル「さて、では来て早速だが旅館といえば温泉だな」

エ「というわけで行きますよマスター！！」

葵「え？え？　えぇ！？」

と、言われるままに二人に両腕をつかまれ、ずるずると温泉の男女と分けるあの、のれんの前まで来てしまった。

エ「では行ってきます！」

ル「またあとでな。マスター」

葵「あぁ。楽しんでくるといい」

ＳＩＤＥエクス・ルミル

エ「る、ルミル。ほ、本当に大丈夫なの／／／？」

ル「だ、大丈夫だ！　ま、マスターは必ず来るはず・・・多分／／／」

　二人はまるで湯あたりしたかのように顔が真っ赤になっている。ちなみに例えで湯あたりと出したが、彼女たちはまだ脱衣所の中で、お湯にすらまだ使っていない。

エ「でも、でも！　マスター以外の人が来たら！？」

ル「抜かりはない」

エ「え？」

ル「マスター以外の人に反応するよう人よけの結界を張っておいた」

　この時エクスは思った。ルミルほど用意周到な神姫、デバイスはこの世にいるのだろうか？　まずなのは達が持っているレイジングハート達には無理。そして、アインやリインにもこのような状況でそこまで頭が回るとは思わない。つまりルミルを味方につけている

自分はかなり強い位置にいるのではと思ってしまった。

ル「と、とりあえず行くぞ！」

エ「う、うん！」

そして彼女たちは扉を開ける。戦場への。

ＳＩＤＥ　ｏｕｔ

私が脱衣所から出ると、まるで貸切のように人がまるっきりいない。

葵「・・・時間帯のせいか？」

時刻は四時を少し回ったぐらい。中途半端といえば中途半端だ。だが、客が一人もいないというのもまた不思議だ。

葵「お。露天風呂か。そう言えば、あの時はあの時は室内で終わったからな」

そういって私は体を洗い、露天風呂に向かった。

―ガラ・・・・

葵「え？」

エ「ど、どうも・・・・」

ル「・・・・」

―バタン！！！

おかしい。おかしいぞ。入口は男女別々。中のお風呂も別々。これは当然ともいえるだろう。なら、ならなぜ外の露天風呂にエクスとルミルがいる！？

葵「幻覚なのか？　いや、疲れがたまって・・・」

そして意を決し、もう一度開ける。

だが、やはりそこには、

エ「ま、マスター、閉めるなんてひどいじゃないですか！？」

ル「確かに」

葵「いやいや、普通考えないだろ。混浴なんて」

ル「とりあえず湯に使ったらどうだ？」

葵「そうさせてもらおう」

お湯に入ると、両脇には当然エクスとルミルが寄り添ってくる。

葵「・・・／／／」

その後はただ黙って外の景色を見ていた。どれ位湯につかっただろ

う。エクスが急に、

エ「あ、あのマスター」

葵「？」

エ「マスターはなんで私たちのマスターになろうと決めたんですか？」

葵「どういう意味だ？」

ル「確かにそれは私も気になる。変な意味ではなく、純粋にそう聞きたい。私たちは神姫。デバイスに近いモノだぞ？」

葵「・・・あの時の私は少しでも話し相手がほしかったんだろ。暗い牢屋に私一人しかいなくなり、話し相手もなにもいなかった。だがそんなある日お前たちに出会った。それで生きる希望と、心に多少のゆとりが出た。それだけでどれだけ救われたか」

エ「・・・・」

ル「・・・・」

葵「あの後もお前たちは私の心の支えだった。いつもそばにいて、いつも私をさせてくれ。当然のようにいて、当然のように話す。もう私の体の一部のようなものだな」

エ「マスター・・・・」

ル「その言葉だけで私たちも今を生きてきてよかったと思います」

すると、ルミルが私の顔に彼女の顔を近づけ、

―チュッ

エ「ルミル！？」

葵「！？」

ル「神姫なので契約はできませんが、私の気持ちです。私はマスターが大好きです。昔も、今も、そしてこれからも」

葵「る、るるるルミル！？」

エ「ずるい！　私も！」

―ちゅっ

葵「え、エクス？！」

エ「私もマスターが好きです。ただの好きじゃありません。一人の男性としてマスターを好いています！」

この後もエクスとルミルが離れることなく、寝るまで一緒にいた。

まぁ、帰宅すると、色々といた。魔王、死神姉妹、タヌキに、般若に、吸血鬼に、九尾、狂戦士に、ゴスロリハンマーに・・・・あぁ。思い出しただけで怖い・・・・。

デート編　エクス・ルミル（後書き）

今年もよい年でありますように！
ではまた次回に！

第二二話

葵「【不の者】についてですか？」

ガーディアンの執務室で書類整理をしていると、査察官のヴェロッサと騎士カリムからの連絡があった。

ヴェロ『あぁ。こっちでも調べて入るんだが対応の数が白が明らかに他の部署と比べて群を抜いてるからね』

彼の名前はヴェロッサ・アコース。管理局本局で査察官をしている。クロノ経由で友人となっている。

カ『そこで、対応戦などを教えていただければと思いまして』

対応戦ね。

葵「今からそちらに向かうのでそちらでお話ししましょう」

車を走らせ聖王教会本部に向かった。

葵「お久しぶりです。カリム、それにヴェロッサ」

シャッハ「いえ。それより今日は制服じゃないのですか？」

葵「今回はこの後レジアスと話があってな」

カ「ゲイツ中将と？」

葵「うちに来てまぁ飲むだけなんですがね」

ヴェロ「ゲイツ中将を家に招くのか！？」

葵「あぁ。どうせ一人暮らしだしな。というか脱線しまくりだぞ？」

カ「そ、そうでしたね。それでご連絡した時にも話したと思いますが、その【不の者】に対する対処法をお教えいただけませんでしょうか？」

とはいったモノの、

葵「一つお聞かせ願いたいのは、本局はどうやって対応しているんですか？」

ヴェロ「どうもこうも魔法で対応しているぐらいしかない」

それでは勝てるはずもない。魔法だけで勝てるのであれば世界が零始に負けるはずがないのだから。それに、こちらの魔法は非殺傷設定という【殺さない】ということを前提で戦っている。

だが、白は特別に殺傷設定で、【不の者】に対してだけ認可が下りている。

ヴェロ「葵のところは何か違う、特別な方法をしているんじゃないのか？」

葵「こっちは非殺傷設定ではなく殺傷設定で戦っている。大きな違いはそこと訓練だな」

その言葉に二人が驚いていた。

葵「あのな二人とも、驚いているところ悪いが相手は人間ではないんだ。化け物なんだ。ここをまず理解しろ」

カ「あの、葵さんは【不の者】についてかなり知識があるようにお見受けしますのですが」

葵「・・・他言無用。カリム、シャッハ、ヴェロッサ。ここいる三人は誰にも口外することを許さない。口外すれば・・・殺す」

その静かな殺気にその場にいた三人が顔を青ざめさせる。

ＳＩＤＥカリム

彼の静かな殺気は本当に口外すれば容赦なく命を取るという警告だろう。

ヴェロ「ちなみに聞くが、知っているのは？」

葵「はやてたちぐらいだろう。管理局には当然話していない。信用ならんからな」

カ「・・・そうですか。分かりました。お約束しましょう」

そういって彼は重い口を開けた過去のこと、そして【不の者】について話した。

彼が言うに【不の者】は人間の負の感情を餌に感情の赴くままに暴れまわる化け物。それだけではなく成長するに従い私たちが野菜や肉を食べるように人を餌として食べる化け物になるという。それを作ったのも人間で、狂王と呼ばれていたらしい。

彼はそれと戦い勝利した。でもその狂王は実は生きていてこちらの世界に来ている確率が大きいらしい。

ヴェロ「世界を、敵に回した・・・何故そんなことになったんだ！？」

カ「なぜですか！？　あなたは世界を救ったいわば救世主じゃないですか！！　そんな人が、そんな人がなぜ！？」

そして彼のように世界を助けるためにたち、事実救った。でも、なにもしなかったその世界の国家は葵さんを恐れた。その結果がこれなんて・・・

カ「あなたはそれで・・・よかったのですか・・・」

葵「カリム。一つ言っておこう。英雄、救世主。私がそう言われる存在なら私が殺した者たちの関係者は私をどう思うだろう」

カ「え？」

葵「私は人も【不の者】も殺した。全員が全員救われたわけじゃない。奪われた者、壊された者もいる。その者たちの負の感情が私を殺すよう導いたんだ。結局私がやったことは破壊の限りを尽くしただけの鬼だよ」

そう言って彼は静かに紅茶を飲む。確かに【不の者】については分かった。その対処法がまだ確立されていないが力押しでも何とかなる。ただ被害が大きくなるというデメリットを抱える。非殺傷設定では勝てないということも。

カ「・・・あなたがどう思うと私はその心までは分かりません。でも私はこう思います。あなたがいたことによって、あなたのいた世界は再び動き出せることができたんだと。なら、あなたの行った行為もむだではない。それだけは忘れないでください」

その言葉に葵さんもヴェロッサもシャッハもかなり驚いていた。

葵「ククッ。そう言われたのは始めただ。・・・あぁそうだな。人の考えは人それぞれだ。まさか今さら気付かされるとは」

そう言って彼は本当に楽しそうにお茶を飲んだ。

ＳＩＤＥ　ｏｕｔ

第二三話（前書き）

なぜか２３話が抜けていましたのでアップしました！

第二三話

第二三話

その後、カリムと共に執務室を出た。

葵「カリム。すまないが病院に寄りたいんだが」

カ「どうしてですか？」

葵「部下がこちらで世話になっているようでな。ついでに見舞いだ」

カ「お優しいのですね」

そう言いながら病院の方へ向かって歩を進めていると、

葵「・・・カリム。あの子供は？」

カ「え？　あぁ。彼女たち二人はある事件に巻き込まれて御両親が・・・その御亡くなりに」

葵「その事件というのは？」

カ「【不の者】です。あなたの言葉を借りれば」

！？　まさか・・・

葵「・・・すみません。彼女たちと少し話してきていいですか？」

カ「えぇ、構いませんよ。私もついていっても？」

葵「無論」

そういってその少女たちの前まで行く。

ＳＩＤＥカリム

葵「こんにちは」

一人はツインテールの淡い茶色の髪をした女の子。もう片方は黒色に少し紫がかったショートヘアーの女の子。ただ普通の女の子と違うのは目に光が宿っていない。おそらく親がいなくなった時のショックがまだ抜けていないのだろう。むしろこの子たちにそれを背負えと言う方が無理だ。

女の子「こ、こんにちは」

女の子「おにいちゃん、だれ？」

葵「私かい？　私の名前は神無月葵。葵でいいよ。君たちの名前は？」

そういって彼女たちの視線まで視線を下ろす。

リオ「リオです・・・」

コ「こ、コロナです・・・」

葵「リオに、コロナ。うん。いい名前だ」

リオ・コ「「あ、ありがとうございます／／／」」

そう言って二人の頭に手を置きなでる。

葵「あと、君たちに謝らなければならないことがある」

リオ・コ「「え？」」

葵「君たちの両親を襲った魔物、あれは私が被害が出る前に倒さなければならなかった。だが、君たちの両親を・・・。すまなかった」

彼はその姿勢のまま彼女たちに頭を下げた。

葵「恨んでもいい、憎んでもいい。だが、罪は罪だ。君たちの両親を直接ではないにしろ間接的に殺してしまったようなものだ。だから罪滅ぼしとして君たちが独り立ちできるまで面倒を見させてほしい」

彼はまた罪を背負うとしている。原因は彼ではない。【不の者】を作った者なのに。

リオ「葵さん。あなたのことはよく知っています」

コ「ガーディアンの隊長で地上本部との連携によって以前よりミッドの治安も良くなっています。それにあの化け物討伐作戦も展開していることは知っています」

調べたのかしら？　よく知っているわね。

葵「・・・君たちは強いな。でも時には弱さも見せていいと思うぞ？」

そういって葵さんは彼女たちを優しく抱きしめた。

葵「無理して笑わなくていい。泣きたい時に思いっきり泣きなさい。甘えたい時には思いっきり甘えなさい」

コ「で、でも・・・わたしたちは・・・なかないって・・・」

リオ「強くなるために・・・なか・・・ないって」

葵「君たちは子供なんだ。その権利はある。幸せになる権利も、未来を見る権利もむろん」

リオ・オ「「うわぁあああああああああああ」」

すると、彼は一回息を吸い、

―Ｈｅａｖｅｎ，ｆｏｒ　ｅｘａｍｐｌｅ　ｙｏｕ　ｇａｖｅ　ｔｈｅ　ｇｉｒｌｓ　ｈａｐｐｙ（天よ、彼女たちに幸せを与えたまえ）

どこの言葉かは分からない。

—Ｌｉｔｔｌｅ ｌｉｆｅ，ｔｈｉｓ ｂｌｅｓｓｉｎｇ ｔｏ ｔｈｏｓｅ ｗｈｏ（小さき命に、この者たちに祝福を）

でも優しい声で、

—Ｗｈｙ ｗｅ ｍｕｓｔ ｓｕｆｆｅｒ ｈｅｒ．Ｔｈｉｓ ｌｉｔｔｌｅ ｌｉｆｅ ｉｓ（なぜ彼女たちが苦しまなければならない。この小さな命が）

まるでこの現実を恨むかのように

—Ｉ ｎｏｗ ｅｖｅｎ ｔｅｍｐｏｒａｒｙ．Ｔｈｅ ｇｉｒｌｓ ｈｉｇｈ（いま一時でもいい。彼女たちに幸を）

太陽の光のように暖かく

—Ａｎｄ ｓａｄｎｅｓｓ，ｅｖｅｎ ｈａｔｒｅｄ，ａｎｄ ａｎｇｅｒ ｗｅ ｄｏ ｎｏｔ ｎｅｅｄ ｈｅｒ（悲しみも、憎しみも、怒りも彼女たちには必要はない）

自然と涙が流れる。

—Ｎｏｗ ｔｈｅ ｇｉｒｌｓ ｎｅｅｄ ｐａｒｅｎｔａｌ ｗａｒｍｔｈ，ｈａｐｐｉｎｅｓｓ（いま彼女たちに必要なのは親の温かさ、幸せ）

暖かい声。まるで子守唄のような。

―God, Heaven, somehow the girl's happy, grace, warmth example you gave（神よ、天よ、どうか彼女たちに幸せを、恵みを、暖かさを与えたまえ）

周りを見ると、人々がその声に歩を停めて聞いていた。

実際私もその声を聞いて涙を流していた。周りの人々もその歌声に涙していた。

歌い終わると彼は彼女たちに一つの提案をした。

葵「どうだろ？　君たち二人が良ければ私の養子にならないか？」

え？　えぇ！？

葵「嫌なら断っても「「わたし、葵さんの子供になりたい！！」」」

そ、そうか」

子供というのはすごいわね。先ほどまで目に光がなかったのに、今ではしっかりと目に光が宿っている。それとも彼がすごいのかしら。

葵「手続きがあるから少し待っていてくれ。用事もすぐに終わらせる」

その後書類を書き終えると、

カ「私が後見人になります！（擬似的でも葵さんと夫婦になれれば／／／）」

葵「そ、そうですか？　それよりカリム。顔が赤いようですが大丈夫ですか？」

カ「は、はい！　だ、大丈夫です！！」

その後、コロナとリオを正式に養子に迎え入れた。

その後、私もゲイツ中将との飲みあいに付き合うといって来た。

ＳＩＤＥ　ｏｕｔ

第二三話（後書き）

なんというかやっちまった感があるが気にしない！
というかコロナとリオの名字を知らないし・・・難か葵の娘にしたほうが後々やりやすいかなという予測のもとでやってみた！

第二四話

第二四話

レジ「で、なぜ騎士殿がおられるのだ？」

カ「別に構わないではありませんか」

なに、このカオス。

場所は一応ミッドの首都クラナガンから少し離れた場所。隊舎からもそう離れた場所ではない場所にマンションの一室を借りた。

葵「はぁ、ここは私の家なのだから変な争いを起こすなよ。後酒がまずくなるからいい加減やめろ。ここでは階級所属部隊など関係ないのだから。コロナ、リオ。ほら、座りなさい」

リオ・コ「「はぁ～い」」

そういって私のすぐ隣の席に座った。

料理といっても比較的日本の家庭的な料理だ。

カ「これ全部葵さんが？」

リオ「お父さんすご～い！」

コ「おいしそう～」

ヴェ「ただいま戻りました葵様」

孤「あれ？　今日来るのレジアスだけじゃなかったっけ？　カリムと、その子たちは？」

葵「私の子供だ」

レジ・ヴェ・孤「「「・・・・・・」」」

あれ？　フリーズした。

そして、あることに感ずいた。

葵「コロナ、リオ、カリム。今すぐに耳をふさげ。答えはすぐわかる」

そういうといわれた三人は黙って耳をふさぎ、私も防ぐと、

レジ・ヴェ・孤「「「なにィィいいい

!？　どこでその知識を・・・あぁ孤狐とかはやてか・・・。

葵「お、落ちつけ、三人とも。二人は養子だ養子！！」

　すると三人の動きがぴたりとやみ、

レジ・ヴェ・孤「「「そうだったのか～～」」」

葵「それよりもヴェルと孤狐はわかるとしてなぜレジアス。お前がそう言う表情をする」

　ジトーったレジアスを見る。

レジ「なに。お前に娘を嫁がせればと思ってな」

葵「ぶふぅー」

リオ「おぉ。虹だ！」

コ「真似しちゃだめだよ。リオ」

　コロナ、リオを止めてありがとう。

葵「なにを言っているんだ！？」

レジ「構わんだろ。それにお前のような骨のある男ならぜひ息子にほしいもんだ！」

葵「ミゼット議長みたいなことを言わないでくれ」

レジ「なに!?　ミゼット議長も言っておったのか!?　むむっこれは速く手を討たねば・・・」

葵「はぁ。コロナ、リオとりあえず好きな物を食べなさい。遠慮するな。家族なのだからな」

リオ・コ「「はい♪」」

あの後、夕飯も終わり、時刻もいい時間になったので孤狐とヴェルに頼んでコロナとリオを寝室に送り寝かせた。

レジ「がははは。だがあの年の子供を見ると小さいころのオーリスを思い出すわい」

その光景を見ていたカリムは信じられない光景を見たかのように唖然としていた。

レジ「ん?　どうかしたのか?」

カ「あ、いえ。その、ゲイツ中将はかなり、その、柔らかくなったというか、その」

私は空になったレジアスの盃に酒を注ぐ。

レジ「すまんな葵。グラシア、わしは今までの行いは全て地上の平和のためと思ってやってきた。だが、こいつと出会い全てが覆った。わしが本当にしたいと思ったこと、実現させたかったことを、いつの間にか道にそれていたということ。全てに気付かされた」

葵「大げさな。私はもう一度やみなおせといっただけだ」

レジ「それでもだ。わしに間違いがあるから見直せなんて言えるやつはそうおらんかった。それができるお前はすごいと思うがな。まぁ、それで今までの間違いに気づかされて改心するようになったというわけじゃ」

カ「・・・そうですか」

レジ「今までのこと全てにおいてすまなかった」

そういってレジアスは席を立ち頭を下げた。

カ「!?　ちょ、えぇ?!　も、もういいですから頭をあげてください!」

急なことなのでカリムもあせったのであろう。頭をあげるよう頼み込むほどだった。

葵（見てる分には楽しいな）

その後、たがいに和解をし、これからは互いに協力することでけりがついた。

第二四話（後書き）

ということでレジアスとカリムの和解をさせてみました。もう少したらｓｔｒｉｋｅｒｓを書き始めないと・・・・。

第二五話（前書き）

ＰＶ　３０１，９１４，ユニーク　３２，８７７人
ありがとうございます！　ま、まさかここまで来るなんて予想外なんです！！
これからもご期待に添えるかどうかはわかりませんががんばっていきますのでよろしくお願いします！

第二五話

第二五話

今はリオとコロナが私の膝に座っています。二人にはすでに羽根のお守りを与え、一応守りには問題はありません！

葵「さて、どうしたものか」

ヴェ「なにがですか？」

葵「はやてたちに説明するのと、あとこっちに拠点を構えるためミッドに移ろうと思っている」

孤「何で？　コロナちゃんとリオちゃんのことならべつに気にしないと思うよ？」

葵「いや、それは私も考えたんだがやはり仕事の方が」

そう、ここ最近部隊の仕事が多くなってきた。

葵「とりあえずは地球に行くか」

そういってなのは達に連絡を取ると、

―なのは

な「教導がちょうど終わっところなの」

葵「そうか。ということはミッドか？」

な「うん♪」

なら合流してから行った方がいいか。

葵「なら三時ごろに住所を教えるからそこに来てくれ」

な「わかったの」

―テスタロッサ家

フェ「え？　今ミッドだよ。ちょうど仕事が終わったところ」

アリ「わたしもいるよ！」

フェイトも？　なら、ここに集めるか。

葵「そうか。ちょうどいいか。なら住所を教えるから三時ごろに来てくれ。なのは達も来るように言ってあるから」

フェ・アリ「「は～い」」

―八神家

ヴィ「ん？　任務が終わって今ミッドだ。え？　はやてたちもいるぞ」

・・・何これ？　なんでみんなミッドにいるんだ？

葵「・・・ミッド？　なら住所を教えるからそこに来てくれないか。時間は三時ごろにでも」

ヴィ「わかった」

・・・タイミングが良すぎるが、まぁいいか。

そして、三時ごろ・・・。

―ピンポーン

葵「悪い、今手が離せないんだ。誰かでくれないか？」

今は茶菓子を作っている最中のため目が離せない。だがここでここかヴェルに頼むべきだった。

リオ「は～い」

コ「いまいきま～す」

―ガチャ

リオ「どちら様ですか？」

全員「・・・だれ？」

葵「リオ？　誰だった？　おっ来たか」

リオ「あ、お父さん」

全員「お父さん！？」

コ「お父さん。この人たち誰ですか？」

葵「あぁ、彼女たちは「あ、葵君！？　これはどういうこっちゃ！？」え？」

な「だ、誰の子供なの！？」

フェ「し、知らない人ともう・・・・」

アリ「ウソだよね！？　ねぇ！？」

シ「・・・そうか、もう・・」

シャ「あ、葵君！　ウソといってください！！」

ヴィ「葵！？　てめぇ、あたしという者がありながら！！」

アイン「ヴェルなのか？　ヴェルと私は何が違うんだ？！」

葵「い、いやそう言うつもりは「葵～お菓子まだ～？」孤狐タイミングが悪い」

コ「あ！　孤狐お母さん」

―ジャギィン

孤「うぉい！？　それはいくらなんでも恐いよ！？」

　すると皆が一斉にデバイスを構えた。ちなみにＢＪ、騎士甲冑装備済み。というか展開早くなったな！？

葵「待てお前ら！？　この子たちは養子だ！」

全員「え？　養子？」

　その後経緯を話し、皆が納得してもらった。

は「葵君。でもなんでそこで孤狐がお母さんになるん？」

リオ「え？　お母さんは孤狐お母さんとヴェルお母さん、カリムお母さんの三人いるよ？」

は「カリムも！？」

アイン「ヴェル、貴様・・・」

ヴェ「ま、まてアイン！？」

リイン「こういうのをシュラバって言うのですよね」

葵「三人には後見人になってもらっている。後カリムもな。というかリイン、そう言う言葉は忘れなさい」

リイン「はいです。葵パパ」

その後部屋に招き入れ話を始める。

葵「はやて、すまないが引越しをしようと思う」

は「え・・・・」

ヴィ「何でだよ!?　何が不満なんだよ!?」

葵「不満とかではなく最近こっちでの仕事が多くなってきた。帰る時間が取りにくくなってきているんだ」

そう。最近ミッドでもクラナガン周辺にまで【不の者】が現れたという情報が出始めた。地上との連携、教導強化も行っているので対応はすんなりいくとは思うが。

葵「それで地球に帰れる時間も限られてくる。といかお前らはよくあっちに帰れるな?」

その言葉になのは達も、

な「にゃははは・・・実はこっちもきつくて葵君と一緒のことを考えていたの」

フェ「あっ。なら私と一緒にすむ?」

アリ「それわたしも賛成!」

は「なにいっとるんや?　葵君は八神家の人間や!!」

その光景を見たコロナとリオが、

リオ・コロナ「「お父さんモテモテですね（だね）」」

葵「・・・はぁ」

ＳＩＤＥリオ・コロナ

リオとコロナは葵の膝の上に座ってかなりご満悦の様子だ。

コ「〈ねぇ、リオ〉」

リオ「〈なに？〉」

コ「〈お父さんの周りきれいな女性多いね・・・〉」

リオ「〈うん〉」

だが、

葵「なにをもめているんだが。私みたいな人間よりいい男はいるだろう」

そう言いながら膝に座っていた二人の頭をそっとなでる。

コ「う～ん／／／（気持い）」

リオ「ん～～♪（お父さんの手は大きくて暖かいです／／／）」

目を細めながら猫みたいな鳴き声を上げながら今は満喫していた。

ＳＩＤＥ　ｏｕｔ

な「あれ？　でもここは葵君が借りているんだよね？」

葵「あぁ。隊舎の寮が完成するまでな」

は「完成？　あれ、でも一応寮なかったっけ？」

ヴェ「あったにはあったのですが人員増加と、突貫による工事のせいで耐震強度などの問題で一から葵様が監修し建て直しているんです」

当初は設立して時間もたっていないということから小規模だったが今では中規模クラスまでになっている。そのため人員増加に伴い寮の部屋が足りないということ、そしてここまで増加するとは思っていなかったため急遽改築が決まった。

葵「あれは予想外だった」

ヴェ「えぇ。隊舎を出れば入隊希望者が津波のように押し掛ける」

孤「正直選抜するのに時間がかかったし、その上教導するために教導資格を持った人間がいて助かったよ」

上からの勝手な都合でクビにされた人間の中に教導資格を持っていいた者や他の部隊内の局員を使って徹底的に鍛え直した。

は「そう言えば、葵君も教導官の資格あったな。教えてないん？」

葵「教えているよ。主に魔法が使えない、武器がないということを想定してな」

こっちの魔導師は明らかに魔法に頼りすぎている。そのため入隊したらまず魔法を教える前に基礎体力や護身術、足の速度向上などを教えている。

葵「話がずれたな。えっと、隊舎の寮が完成するまで借りているだけだ。実際あと数日で完成するからそっちに移る。そのための引っ越しだ。まぁ、住まいについての件は以上だ。そっちからは何かあるか？」

すると、なのはから、

な「教導で思い出したんだけど、葵君。なんでわたしをガーディアンにスカウトしてくれなかったの？」

葵「は？」

フェ「そう言えば葵は確か私たちが訓練終了時スカウトに来なかったね？」

は「言われてみれば」

確かになのは達が入ればかなり戦力増加に加わるがそれとこれと

は話が別だ。

葵「理由は二つある」

シ「二つ？」

葵「一つはお前らはいわば身内に近い。コネや身内だから入隊できた、入局できたという噂が立つ。そうなれば部隊の信用はおろか地上との連携も崩れる。そしてお前らの名前にも傷がつく。だから避けたんだ」

シャ「そこまで考えてたんですね」

リイン「あれ？　でも主に葵パパの部隊が理由ですよねぇ？」

葵「リイン。私は一人の部隊の部隊長だ。部隊を指揮するものとして信用を落とし部下を路頭の迷わすわけにはいかんのだ。上司のミスが部下のミスにつながってはならない。部下のミスは上司のミス、上司の功績は部下の功績。これが組織が目指す位置だ。頭の片隅にでも覚えておくといい」

リイン「はいですぅ」

いい子だなリインは。そう言って私の肩に座っているリイン。どうやらかなりお気に入りの場所らしい。

葵「で、二つ目はお前らの志望している部隊に私が割り込んでかすめ取るわけにもいかんだろ」

シ「どういう意味だ？」

葵「なのはは戦技教導隊へフェイトは執務官へ。はやては特別捜査官として。アインとリインはその補佐、シグナムやヴィータは首都航空隊に。それぞれ理由があったんだろ。それを壊すわけにはいかんだろ」

アイン「そ、その理由をどこで！？」

葵「リンディさんからだ。もともとこちらからも手を出す必要もないと思ったからな」

ヴィ「そ、そうか（ちゃんと考えてくれてたんだ／／／）」

葵「しかし部隊の仕事の量何とかならんか・・・」

仕事に出張、書類整理、上層部の汚職などを摘発しクビに。過労死するぞ私。

は「ちなみに葵君は明日なんか用あるん？」

葵「あぁ一応な。といっても単純な仕事だからすぐに戻ってくる。部屋は用意するから今日は泊っていくといい」

は「ちなみに部屋は？」

葵「どうするか。私の部屋のベッドを入れて全員寝れるが。コロナとリオはどうする？」

リオ「私、お父さんと一緒がいい！」

コ「私もです！」

さて、どうしたものか。ソファーで寝るわけにもいかんし。

ヴェ「ふむ。なら葵様。私と孤狐、そしてリと、コロナが葵様の部屋で。後は私と孤狐の部屋、そして客間を使えばよろしいのでは？」

全員（孤狐・コロナ・リオ以外）「異議あり！！」

リイン「ほぇ？」

はぁ、また始まった。リインは分かっていないみたいだ。いいんだ。君は純粋であってくれ。この子たちのように私の心のありどころであってくれ・・・。

な「孤狐さんとヴェルさんはなんだかんだ言って葵君と一緒に寝てるよね！？」

フェ「私たちはまだ一度もしてないよ！！」

アリ「ここは未経験者に譲るべきだと思う！！」

それに対し八神家。

は「久々の家族との絆を深めるべきやろここは！！」

ヴィ「葵と寝るの久しぶりなんだぞ！？」

シ「それを奪うというのか！？」

シャ「いいじゃないですか久しぶりの葵君の感触を奪うんですか！？」

アイン「それに葵は私たちのモノだ」

それにひるむかと思ったが、

ヴェ「い、いいじゃないか！」

孤「これは一緒にすむ者の特権だ！！」

さて、どうなるか。出来ればコロナとリオだけにしおいてくれ。じゃないといろいろまずい。

勝負は真剣バトルへ向かいそうだったのでじゃんけんに変更させた。そして結果は

な「か、勝ったの！！」

フェ「や、やった・・・」

アリ「わ～い！」

勝者はなのはチーム。そして敗者たちは・・・

は「くっ、なんでや、なんであそこでグーを・・・」

ヴィ「くそ・・負けちまった・・」

シ「闘いで負けた時より悔しい」

シャ「またの機会にお願いしよ♪」

アイン「・・・ヴェル。今から私と変われ」

ヴェ「いやだ。葵様のそばにいるのは私だ！」

孤「子狐で行けば・・・」

などといっている。

葵「はぁ、気が向けばまた一緒に寝てやるから。というかそろそろ私離れしないのか？　もういい歳だろ？」

全員「そんなこと関係ない（の）（で）！！！」

で、今は夜。子供たちは私のすぐ隣でそれを挟んでなのは、フェイト、そして腹の上にはアリシアだ。

な「ん～。はやてちゃんはこれを毎日体験してたの？」

フェ「なんかずるい」

葵「仕方ないだろ。一緒にすんでいるし、逃げ場ないし」

アリ「ならわたしの家に来る？」

葵「そう言うつもりじゃないんだが・・・はぁ。とりあえず寝ろ。明日も早いんだろ？」

三人「はぁ～い」

そして、幸せ最後の日の就寝についた。

翌日あの日、あれをきっかけに事件は始まるとはだれも思っていなかった。

第二五話（後書き）

さて、次回からｓｔｒｉｋｅｒｓに入ります！

プロローグ（前書き）

ようやくといった感じでしょうか。Ｓｔｒｉｋｅｒｓ突入です！

プロローグ

プロローグ

さて、今私がいるのは臨界第８空港・・・のはずなんだが。仕事のためここを利用して管理世界に向かう予定だったんだが・・・・

――パチパチ　ゴォオオオ

なぜ一面炎に包まれているんでしょう？

エ《とにかく逃げ遅れた人がいないかの確認をすることをお勧めします》

ル《ここから少し行った場所に生命反応がある》

おぉ。こういうとき冷静な二人がいて助かる。私もそれで冷静さが戻ったし。

葵「行ってみるか。怪我とかで動けないのかも知れん」

そのまま行くと、何人かの人がバリアによって護られていた。

葵「管理局の者です。このバリアを張ったのは？」

女性「女の子です！　妹を探すといってあっちに」

葵「ありがとうございます。さらに少し強力な物を張っておきます。

救出部隊がくるまで少し待ってて下さい」

反応は、かなり奥だな。すると、

は『葵君！　聞こえるか！？』

はやてから通信が入った。

葵「はやて？　あぁ、聞こえるが」

は『ごめん、急いで第８空港に向かって・・・って！？　葵君！今どこにおるん！？　後ろメッチャ炎が燃えさかっとるけど！？』

葵「現在その火災現場だ。はやて、今すぐガーディアンにつないでくれ。あと、今いる場所わかるか？」

は『う、うん』

葵「そこに人がいる。救助を頼む」

は『了解や！　後葵君、つながったで！』

葵「ありがとうはやて。聞こえるか」

白局員オペレーター『その声は、隊長！？』

葵「そうだ。悪いがすぐに第８臨海空港に人員を派遣。災害救助に当たらせろ。すぐに動けるものから順にだ」

白局員オペレーター『了解。第４、８、１３部隊を派遣します。緊

急招集で後2分後にはさらに増援できるかと』

葵「分かった。あと、災害救助本隊も送らせるよう言っておけ。白局員の指揮権を八神はやて一尉に任す。指示に従うよう言っておけ」

白局員『了解』

ＳＩＤＥアイン・リイン

　指示用の車両にはリインとゲンヤ・ナカジマ三佐が指示を行っていた。

ゲ「補給は？」

リイン「後１８分で液剤補給車が7台きます。首都航空部隊も後一時間で主力部隊が出動予定です」

ゲ「おせぇな・・・も少し早くできねぇのか？」

アイン「限界いっぱいだ。近くの部隊にも救援を願っているが・・・」

　すると、急にモニターが映った。この服装は葵さんと一緒の物ですね。でもどうしてでしょう？

白局員オペレーター『現場指揮官、応答願います。こちらガーディアンの者です』

アイン「ガーディアン？　あ、葵の部隊の！？」

白局員オペレーター『はい。今そちらに部隊を派遣、もう直ぐ到着します』

それと入れ違いに緊急連絡が入り、

白局員「こちらガーディアン第４、第８災害臨時部隊。これより消火活動に参加する。液剤補給車も緊急招集のため少ないが９台つれてきた。自由に使ってくれて構わない！　指示を」

ゲ「はやいな！？　しかもこっちが今欲しいモノまで持ってきやがった！」

白局員オペレーター『あと６分後には災害救助部隊の本隊が到着します。なんとか持ちこたえてください』

リイン「了解です！」

アイン「主。いま葵の部隊が到着。消火活動に参加してくれます。６分後には白の災害救助部隊本隊が参加する予定です」

は『こちらでも確認した。というか、魔力がすごすぎやろ！？』

映像で見ると、全員のデバイスから水が放出されている。それもただの水じゃない。威力や放出量が地球のポンプ車並みだ。行動もちゃんと訓練されたエキスパート部隊だ。

ゲ「・・・あの坊主どんだけ訓練すればこんな部隊を作れるんだ？」

ＳＩＤＥ　ｏｕｔ

教えられた場所に向かって飛んでいると、

？？？『スバル！！』

葵「（この声は・・・近いな）ルミル、加速を」

ル《分かった》

現在は攻撃・速度を重視している黒騎士で移動中。声がしている方に向かうと、場所はらせん状になっている場所だ。

ＳＩＤＥギンガ

―ズガァアアン

ギ「キャァッ！！　スバル・・・スバル・・・いるなら返事して！！」

魔力もさっき使い、さらにどこか怪我をしたのか立つこともままならない。

ギ「お姉ちゃんが、今助けに行くから」

???「そこの子！　動くな、今助けに行くから！」

ギ「え？」

すると、その足場が崩れる。そのまま私は落下していく。もう・・・だめ。

ギ「キャァアアアア！！」

???「飛翔！」

???「大丈夫か？」

地面に落下したと思うと、

眼帯をした男性にだっこされていた。

???「怪我とかは・・・しているな。癒しの風よ。汝の力を持ってこの者の怪我を癒したまえ。ヒーリーングフール」

すると、緑色の光に包まれる。光が収まると怪我が無くなっていた。

ギ「え、えっと、あなたは？」

葵「ん？　私か？　私は『葵さん！　本隊到着しました！』分かった。消火活動に参加しろ。指揮は誰が行っている？」

白局員オペレーター『現在ゲンヤ・ナカジマ三佐が行っています』

葵「ならそれに従え。こちらはこちらで行う」

白局員『了解』

モニターが消える。え？　あ、葵って・・・

ギ「あ、あの、もしかしてガーディアンの神無月葵一等空佐ですか？」

葵「そうだ。何故・・・あぁ。さっきのか」

ギ「わ、私、ぎ、ギンガ・ナカジマ！　り、陸士候補生です」

葵「そうか。妹を助ける途中といっていたな。場所とかわかるか？」

ギ「おそらくですがエントランスホールに。あそこではくれたのでまだあそこにいるかと！　名前はスバル、スバル・ナカジマ。十一歳です」

葵「そうか。オペレータ。スバル・ナカジマは救助されたか？」

白局員『ダメです。まだのようです！』

葵「こちらで探ってみる。安心しろ。君も、君の妹も助けて見せる」

ギ「あ、ありがとうございます／／／」

その笑顔があまりにもきれいで、私は顔が熱くなるのが分かった。

？？？「あ、葵君！？」

後ろから女性の声がした。

葵「フェイトか。休暇中だろお前」

フェ「うん。でもいてもたってもいられなくて」

葵「なるほど。ではすまないが・・・いや一緒に来てもらった方が早いか。一緒に来てくれるか」

フェ「うん♪」

葵さんにだかれながら、エントランスホールに向かう。

ＳＩＤＥ　ｏｕｔ

ナカジマ。クイントさんの娘か。なにかの運命なのか。それに、この子は人ではないな・・・ということは妹もなのか。

すると、ギンガちゃんが私の服を強く握っていた。

葵「・・・大丈夫だ。君も君の妹も助ける。絶対だ」

ギ「・・・え？」

葵「今は我慢してくれ。妹さんを助けてすぐにここから安全な場所に移動する」

ギ「は、はい／／／！」

エントランスホールに続く場所に来たのだが、瓦礫によって遮られていた。

ギ「そ、そんな」

フェ「行き止まり・・・別の通路を探す？」

葵「時間がない。突破する。エクス、モード白騎士」

エ《了解》

白騎士に変化すると、

ギ「綺麗・・・」

葵「破壊する。ギルノーシュ・ブレイカァー！！」

瓦礫を破壊すると、そこにはスバルちゃんと思われる女の子がいた。

フェ「あれって！」

ギ「スバル！！」

ス「お、おねえちゃん？」

すると、彼女の横にあった女神像が彼女の元へ落ちそうになっていた。

葵「フェイト、ギンガを頼む」

フェ「え！？　あ、うん！！」

葵「間にあえよ！！」

エクスの全速力で一気にスバルの元へ駆け、

葵「ディゴシールド展開！！」

シールドを展開し、女神像の動きを一時止める。そして、

葵「ギルノーシュ・ブレイカー！！！」

砲撃によって女神像は完全に破壊された。

ＳＩＤＥスバル

ミットチルダ臨界第８空港

そこで起こった突然の爆発事故。見渡す限りどこを見ても火の海だ。

ス「おとうさん・・・・おねえちゃん」

私は火事に巻き込まれ何もできなかった。家族を見つけだすこと

すら。そして突然にあのときはやって来た。

ズドーン！

？？？「あれって！」

ギ「スバル！！」

え？　今の声って。そう思い声のした方を見ると、

ス「お、おねえちゃん？」

すると、隣あった女神像が、

スバル「――！」

もう声すら出なった、死を覚悟した。だが、来るはずの痛みが一向に来ない。

恐る恐る眼を開けるとそこには白い鎧を着た男性がいた。

そして、

？？？「ギルノーシュ・ブレイカー！！！」

像は跡かたもなく破壊された。

ス「あ、あの！」

？？？「ちょっと待ってくれ」

ス「え？」

そういうと、金色の髪をした女性がおねえちゃんを連れてこちらに向かって来た。あたしはその男性に抱きかかえられた。

？？？「それで何かな？」

ス「あ、あなたの名前は？」

葵「葵。神無月葵だ。ちょっと待っててくれ。誰か聞こえるか」

オペレーター『は、はい！』

葵「三提督直轄独立機動部隊ウィザード所属、神無月葵だ。訳あって二名取り残された子供を救助。今からそちらに向かう」

オペレーター『か、神無月ってあの【黄泉路への案内人】！？』

葵「そうだ。それよりも指示を」

オペレーター『りょ、了解しました。あ、そちらに一人局員が向かっています』

ス「あ、あれ・・・」

あたしが指をさすとそこには白い服を纏った女性がいた。

？？？「あ、葵君！？　フェイトちゃん！？」

フェ「なのは！」

葵「なのはか？　ちょうどいい。救護した子供たちを頼めるか。フェイトは引き続きギンガを頼む」

フェ「分かった」

な「う、うん。葵君は？」

葵「消火に当たる。頼むぞ」

そういって葵さんは翼を出し天に向かってはばたく用に飛び立った。

あたしはその時強く誓った。彼のように誰でも守れる存在になりたい。誰にも負けない強さがほしいと。

ＳＩＤＥ　ｏｕｔ

ＳＩＤＥはやて

燃え盛る空港を眼下に望みながらはやては、広域魔法を撃つ詠唱を行っていた。

は「この白き雪の王、銀の翼もて眼下の大地を白銀に染めよ！！」

詠唱を唱えると、はやての周りにキューブが四つ現れた。

局員「八神一尉！　指定ブロック避難完了です！」

局員２「お願いします！」

は「了解！」

はやては杖を空に掲げる。

は「来よ！　氷結の息吹！」

周りのキューブが回転し始め、そして。

は「アーテブ・デスアイゼ！！」

杖を地上に向けると周りのキューブが地上に降下、辺りを凍てつかせていく。

は「・・・よし！」

十秒足らずで、指定ブロックの火災は鎮火、というよりかは凍りついたという方が正しい。

局員「すっ、げぇ・・・」

魔法の威力からか局員達は白い息を吐いている。

局員２「これがオーバーＳランク魔導師の力・・・」

一方では防護服についた雪を払いながらオーバーＳランクの力に感心している者もまた数多くいた

はや「巻き添えごめんな！　私一人やとどうも調整とか下手で」

局員「あ、いえ・・・ありがとうございます」

局員2「次の氷結ブロックを・・・」

―ドガァアアン！！！

局員「なんだ！？」

空港の一部から大爆発が発生、凍てついた大地は再び火の海に戻った。

は「な、何が起こったんや！？」

オペレーター『八神一尉！　燃料タンクの一部に火が回りました！』

は「な、なんやて！？」

オペレーター『このままでは、他のタンクも連鎖爆発を起こす可能性があります！！』

は「そ、そんな・・・・」

あまりにも衝撃的なことで混乱していると聞き覚えのある声がした。

孤「おやおや、けっこう混乱してる？」

は「孤狐！？」

ヴェ「私もいるぞ。アイン、この空港の詳しいデータをくれ」
アイン『いいが、どうするつもりだ？』
ヴェ「葵様と共に鎮火するだけだ」
孤「その間の指揮はボクがするね」
そう言うと孤狐はモニターを出してすぐに災害部隊に指揮を執る。
細かい指揮などは孤狐が取り大まかな物をゲンヤがここに指示する。
すると、空港の穴から白い鎧を身にまとった葵が来た。

ＳＩＤＥ　ｏｕｔ

到着すると、ヴェルと孤狐がいた。
葵「ほぉ。準備が良いな。さっさと始めるか。ヴェル、ユニゾン」
白い光に包まれ、そこから現れたのははやてと同じ格好をした葵だった。
ヴェ《領域指定はすでに終わらせています》
葵「分かった。現場の局員に告げる。その場を動くな、動いたら一生凍土の中で暮らすことになると思え」
そう警告した。全員止まったな。凍結エリア指定。後あの中にはもう誰もいないな。

葵「凍てつけ凍土のごとく。忘れられし大地！！」

葵の周りにいくつものキューブが現れそして、火災地に向かっていく。

すると、一瞬にして火災地は凍土に変わり火災もおさまっていた。

局員「・・・あり得ねえだろ」

局員2「・・・あれが、黄泉路への案内人の力・・・測定不能者の意味がわかった気がするぜ」

葵「鎮火完了。御苦労だったなヴェル」

ヴェ《いえ、どういたしまして♪》

すると、空を見ると航空部隊が来たようだ。

局員『遅れてすまない』

葵「ようやくお出ましか」

局員『現地の局員とエース、それにガーディアンの方々には感謝する』

葵「こちらも引き続き援護する。一秒でも早く安全確保を」

局員『了解』

ＳＩＤＥはやて

はやては葵の方を見ていた。熱い視線とかではなく、まるで先生、お手本を見つけたかのように。

は（このままじゃアカン。今回の出動の出遅れもそうや。でも葵君の部隊はすぐに動けた。本局の部隊が来る前にかなりの大規模部隊の導入をやってのけた）

はやてが視線を下に移すと軽く数十人のガーディアンの服を着た局員がいた。それは本局がくるよりも前にこの救助作業に入っていた。

は（・・・やっぱり必要や。すぐに、素早く動ける部隊が）

はやては現実を見て、考えをまとめた。

自分の部隊を作るという夢を現実にするための。

第一話（前書き）

最近気づいたこと。何故三日に投稿しなかった俺？
こ、これが最近世に聞く若年アルツハイマー！？

んなわけねぇか。

第一話

第一話

葵「で、なぜここにいるんだはやて、フェイト、なのは？」

火災事故の鎮火が終わり現在私の家。あの後あまりにも疲れたのですぐに寝た。そう寝たのだが隣には先ほど言ったメンバーとコロナ、リオがいる。

は「別にかまへんやん！」

な「そうそう」

フェ「細かいこと気にしすぎだよ」

細かいか！？　朝起きたら隣に自分の娘以外の女性が三人もいることが！？

は「なぁ、葵君」

葵「ん？」

はやての方を見るとはやては真剣な目で私を見ていた。

は「葵君は最初部隊を作ったとき大変やった？」

葵「そうだな。だが、前世の経験で何とかなった。前世の時は周り

に頼ったっけ」

な「周り？」

葵「仲間だ。はやて、どうせお前のことだ。今回の事件を見て今のままじゃいけないと思って独自の部隊でも作ろうとしてるんだろ」

フェ「え？　そうなの」

は「うっ、鋭いな」

葵「アホ。じゃなきゃ部隊のことについて聞くか。はぁ、作るとき一声かけろ。バックボーンにある程度知人がつくように配慮してやる」

は「えぇの！？」

葵「私は付けないがな」

は「なんで！？（一番ついてほしいのに！！）」

葵「一等空佐がついてどうする。将校クラスにしておけ。頼むならクロノ、リンディさん、カリムこの三人だな。〈あと極秘裏に私が三提督、レジアス中将にも頼んでみる〉」

は「〈えぇの！？　そんな大物を！？　というかレジアス中将を説得！？〉」

葵「出来ればな（なんとかなるだろ。こないだ辞令がきたし。というかあの方々は私をどこにつかせたいんだ）」

まぁ、頑張ってみろや～ってことだろうな。

あの後、私は事後処理のため地上本部に向かった。で、場所は、

レジ「なるほど。でタヌキ娘が部隊を作るかもしれんと？」

レジアスの執務室。なにやら今回の事件と関連性がある資料を手に入れたという話らしい。

葵「タヌキ娘って。まぁ昔のお前から考えると成長か」

レジアスはレアスキルやら、犯罪者を局員とするのが気に入らなかった。後者は今だ気にくわないことはあるらしいが前者においてはそれなりに対処している。

レジ「まぁ、あの娘なら大丈夫だろうと思うから何とかしてみよう」

葵「そうか」

レジ「あのな、一応お前の方が上官なんだぞ。あのころもそうだが今では「失礼します」なんだ。オーリス」

オ「はい。そろそろコーヒーのお代わりをと思いまして。いかがでしょう？」

葵「いただこう。しかし、あれやっぱりそうなの？」

レジ「当たり前じゃ！」

落ち込む私を尻目にレジアスはある案件を取り出した。

レジ「それより最近またあれが出始めよったわ」

葵「・・・そうか。こちらでも対処しているんだが、数がな。あとこれもだ」

そういってレジアスが見せたのは一つの丸っこい機械。

葵「あのバカ（ジェイル）の話によるとこれはガジェット・ドローン。略してガジェット。ＡＭＦ、アンチマギリングフィールドと呼ばれる効果範囲内の魔力結合を解いて魔法を無効化するＡＡＡランクの高位防御魔法を保有。しかも魔法であれば攻撃や移動系なども妨害される厄介な代物らしい」

レジ「お前の魔法はどうだったんだ？」

葵「関係なかったな。というか管理局はなぜ質量兵器を採用しないんだ」

レジ「一言でいえば危険だからだろう」

葵「あほだな。確かに無いに越したことはないが、管理局の最大の武器は魔法だ。なら敵対している連中はそれをキャンセルさせる代物を考える。そうは考えなかったのか」

あきれながらそうつぶやく。

レジ「そう言えばあのバカの娘たちはどうするんだ？」

葵「あぁウーノ達か。全員採用だ。試験もなかなかいい結果だったしな」

そう。事件より一週間前なぜかジェイルの娘たちがガーディアンに入るという願書を出して来た。どこから手に入れてたかというとバカがもらってきたらしい。

まぁ試験をしてみたら合格ラインに届いていたので合格にした。

葵「今は部隊の訓練校に行かしている」

レジ「・・・あの特殊訓練校か？」

特殊訓練校。魔法だけではなく地球における武術なども教えるいわば魔法だけに特化せず魔法を使えない状況下におかれても防衛、逃避出来るように最低でもする学校。だが、あまりにもきつく【地上の地獄】とも言われている。まぁそれ以外も基本学習や講義などもきちんと行う文武両道校でもある

葵「地上の連中も何人か行ってたな。今はどうだ？」

レジ「魔力ランクが低いにもかかわらずそれよりも上のやつらを凌駕しよるわい」

葵「そいつは良かった」

後は他愛もない談笑をし、家に帰った。

第二話

第二話

あれから数年後

はやてが作った部隊【機動六課】が本格的に動き始めた。

部隊構成員ははやてを中心になのは、フェイトを分隊長。副隊長にシグナム、ヴィータを置いた。フォワード陣も未来有望な若者。子供が入っていたが何とも言えないな。

は『で、葵君の部隊からも何人かほしいんやけど・・・・』

葵「あほなことを抜かすな。こっちもいろいろと忙しいんだ。むしろこっちがほしいんだ」

【不の者】に加わってガジェットがさらに追加。現在その両面を倒していかねばならなくなっており陸、白両方は猫の手でも借りたい状況だ。

は『そこを何とか！』

そういってはやては拝むように頼んできたが、こちらもぎりぎりだしな・・・

―ピピピッ　ピピピッ

葵「すまん。通信が入った。後で連絡を入れる」

は『・・・はぁ～い』

そういってはやては渋りながら通信を切り、かかってきた通信を取るとそこに映っていたのは、

葵「久しぶりですねミゼット議長」

ミ『えぇ、久しぶりね。でも今は二人っきりなのだからその呼び方は止めない？』

葵「・・・わかった。義母さん」

ミ『えぇ♪』

本局統幕幕僚議長ミゼット・クローベル。伝説の三提督と名高き英雄で上司にも当たる。そして私に命令できる三人のうちの一人。で、なぜ私がそのえらい方を義母と呼んでいるかというと何かと会うたびに「義母と呼んでくれないかしら？」と、すごい笑みで、最終的に呼ぶまで部屋から出してくれなかったことがある。それからかな・・・・。

葵「御用件は？　何も無くただ談笑するためというわけではなさそうですが」

ミ『あら？　少しぐらいはいいのでは？』

葵「・・・御用件は？」

ミ『つれないわね。えっと一応六課のバックにあなたの名前を借りたわ。でも一応公表前だから極秘裏に進めているわ。当然はやてちゃんも知らないわ』

葵「左様で。それだけではなさそうですね。大方私を命令で六課に出向とでも？」

ミ『あら？　分かっちゃった？』

・・・マジか。

ミ『あと、孤狐ちゃんとヴェルちゃんもね』

葵「部隊はどうするんですか！？」

ミ『その辺はぬかりないわ。ティーダ君と、ゼスト君に任せるわ。後あなたも時々戻っていいわよ』

葵「拒否権はなさそうですね」

ミ『えぇ』

・・・もういいや。でもこれだけは、

葵「後理由はやはり」

ミ『・・・えぇ【不の者】よ』

葵「レリックとの関連性があると？」

ミ『そう。そのためにあなた達を派遣するのも理由の一つよ』

葵「分かりました。で、内容は？」

ミ『主にヴェルちゃんと孤狐ちゃんは各分隊長、副隊長の補佐。あなたは部隊長であるはやてちゃんを鍛えてあげて』

葵「了解。でははやてには私の方から伝えておきます」

ミ『えぇ。よろしく』

そういって通信が切れた。はぁ・・・・

葵「あ、はやて？」

は『葵君！？　どないしたんこの数分間で！？』

葵「え？　なにって？」

は『えらいやつれとるよ！？　ありとあらゆる生気を吸い取られたがごとく！』

葵「まぁ、日々の疲れがいその数分前に出たんだ。でだ、さっきの話だが」

は『う、うん』

葵「三人派遣することになった」

は『ほ、ほんま！？　さ、三人も！？』

葵「ただ、部隊の引き継ぎなどもあるから遅れる形になる。それでもいいか？」

は『か、かまんよ！！　ありがとな、葵君！！』

その時私は思わなかっただろう。この返事が始まりの鐘を告げる瞬間だとは。人はそれを何と思うのだろう。

第三話

葵「荷物はこんなものか」

ある程度荷物の整理を終え、後は六課の隊舎に向かうだけだ。

葵「ヴェル、孤狐終わったか？」

孤「終わったよ。コロナとリオも終わったみたいだし」

ヴェ「こちらも終了しました」

葵「そうか。では――」

移動するかと言おうとしたら、

ティ『葵！　大変だ！！』

葵「どうした？」

ティ『六課に出動命令が出た。どうやらレリックを積んだリニアが襲撃。六課が対応に当たっている』

葵「分かった。お前らはどうする？」

ヴェ「私たちは準備を引き続きしておきます」

孤「時間ができらた葵の分の引き継ぎもしてもらうよ。それにいざとなったら・・・」

そう言うと孤狐の目線はモニターのティーダに移り、

孤「未来有望なティーダ・ランスターがいるからね」

ティ『お、俺!?』

孤「大丈夫大丈夫。きっと君ならできるよランスター二等空佐」

ティ『そんなこと言わないで下さいよ!? 孤狐准将もヴェル准将も仕事量半端ないんですよ!?』

あの後、かなりの勢いで皆が昇進。ヴェルや孤狐はむろん、ティーダは二等空佐、ゼストさんも一等空佐へ。メガーヌさん、クイントさんは二等空佐へ。

葵「っと、そんなこと考えてる場合じゃなかった。それでは行ってくる。ティーダ、詳しい場所の座標を」

ティ『了解』

孤・ヴェ「「いってらっしゃい（ませ）」」

すぐに、ヘリポートから翼を展開し場所へ向かう。

場所は山岳地帯。降下している場所にはガジェット?型が展開していた。

葵「・・・・数が多いな。それにあれは」

崖から現れたのは一匹の龍とそれにまたがる少年少女。だが、

少女「フリード回避!」

龍「ガアアッ」

ガジェット?型に追われている。そして、狙いを定めたように攻撃態勢に入る。これはまずいな。

葵「エクス、白騎士展開後アルヴォとディゴシールドを頼む」

エ《了解!》

白騎士を展開し、一気に龍の背後につく。

―バシュゥ　バシュゥ

ガジェットから攻撃が放つ。

―ズガァアアアアン

???「エリオ!?　キャロ!?」

SIDEなのは

今日どうやら葵君が指揮している部隊から派遣される人がくるらしい。

でも、その前にアラートが鳴り響き現場に駆け付けた。当初の予定だとそれほどでもないと想定していたが、すぐに異変は訪れた。

な「!?　増援！　しかもこんなに!?」

フェ「フォワード陣が危ない！　なのは、一旦・・・くっ!?」

な「囲まれた・・・それにこれって・・・」

レベル１「キキキッニンゲン・・・コロス」

レベル１「オレタチノ・・・エサ！」

周りを見るとカジェットだけでなく【不の者】までに取り囲まれていた。リニアの方を見るとキャロがフリードを完全制御をおこなっているが完全に後手に回っている。

そして、ガジェットは完全にロックしたのか攻撃を開始した。そして、

―ズガァアアアアン

フェ「!?　キャロ!?　エリオ!?」

な「本部！　二人は!?」

だが、爆煙から、

―ダンッ　ダンッ　ダンッ

三発の魔弾がガジェットに向かい放出されそして三機のガジェットは墜落。

???「後ろの龍召喚使と少年。大丈夫か？」

え？　この声って・・・

ＳＩＤＥｏｕｔ

シールド攻撃を完全に防ぎ、その後アルヴォの至近距離で攻撃をした。全弾一機ずつに命中し三機は堕ちて行った。

葵「後ろの龍召喚使と少年。大丈夫か？」

龍の場所によると、そこには見知った顔がいた。

エリ「あ、葵さん！？」

葵「その声はエリオか？　大きくなったな！」

そう言って私は少し乱暴に頭をなでた。

エリ「くすぐったいですよ葵さん！　それよりどうして葵さんがこ

こに？」

葵「そうしたいのは・・・邪魔だ！」

そういって近くに来ていたガジェットにさらに一発放つ。

―ズガァアアアン！！

葵「話は少し後だな。私はあっちに行く」

そういって上を見上げると桃色と金色の光が見えた。

少女「なのは隊長とフェイト隊長ですね」

葵「君は？」

キャ「キャロ・ル・ルシエ三等陸士です！」

葵「元気でよろしい」

そういってエリオ同様頭をなでる。なるほど、フェイトとなのはか。あれ？　そう言えば、

葵「アリシアは出ないのか？」

キャ「アリシアさんは技術部門ですよ？」

あぁ、そっちに走ったか。

とりあえず、

葵「エリオ、キャロ下がっていろ。行くぞ、ルミル。白騎士パージ、黒騎士展開」

ル《イエスマスター》

葵「〈なのは、フェイトそこから離れろ〉」

な「〈あ、葵君!?〉」

フェ「〈どうしてここに!?〉」

葵「〈詳しい話は後だ。これよりガジェットを一掃する。回避を〉」

な・フェ「「りょ、了解!」」

レベル１「ナ、ナンバー?!?」

レベル１「・・・ヨミジヘノ・・・アンナイニン!!」

ほぉ。【不の者】もいるのか。なのはとフェイトの退避を確認し、両翼刀を宙に放り投げる。

葵「その翼に終わりはない」

ル《終わりがないことが悲しく》

葵「永遠に紡がれ、終えることを知らない」

ル《永遠に負の連鎖がつながる》

葵「神は憐れんだ」

ル《そしてその翼に使命を与える》

葵「咎人を裁く役目を」

ル《裁きの時は来た》

葵「翼による（ウゥング・オブ）裁き（ジャッジメント）！」

―ズガガガガガガガッ

レベル１「イタイイタイイタイイタイイタイイタイ」

レベル１「シニタクナイシニタクナイ・・・・」

全ての羽は上空にいるガジェットと【不の者】を一機も逃がすことなく羽根が刺さり、

―ズガァアアアアアアアン！！！！

爆発。

エ《上空にいる【不の者】、ガジェット殲滅。残りはあの？型のみです》

葵「久々に盛大にかますか。そこにいる二人とリイン、下がれ」

？？？「え？　りょ、了解！　あ、あれ？」

？？？「わか・・・りまし・・た」

リイン「了解ですぅ。葵パパ！」

？？？×２「「パパ！？」」

驚きながらもその場を退避していく二人。

葵「獄炎・・・・」

右腕に地獄の業火を纏わせ、ガジェットの？型の頭上から、

葵「業火波！！」

地獄の業火による砲撃。その炎はあたり一帯を包み、そして、地面さえも焼き払った。

葵「任務終了。残党は？」

エ《広域探索の結果反応無し》

ル《うむ。上出来だマスター》

いや、明らかにやりすぎだと思うが・・・。

な・フェ「「葵（君）！」」

―ガバッ

下の様子を見ていたらいきなりなのはとフェイトに抱きつかれた。

フェ「葵だ！　でもどうしてここに？」

葵「任務だ。それよりも、まずすべきことがあるだろ」

な「はっ！　そうだった！！」

話をいったん中断し、その後は私も加わりレリックの護送に回った。それから数十分後六課の隊舎に案内された。

第四話

葵「ここか？」

な「うん♪」

フェ「じゃあ入ろうか」

―コンコン

は「どうぞ～」

―シュゥン

部隊長の部屋のの扉が開き、

葵「失礼するぞ」

リオ・コ「「お帰りなさい！」」

葵「あぁ、ただいま」

今は白の服に着替え、はやての隊長室にいる。

そこには孤狐、ヴェル、リオ、コロナがいた。

な「孤狐さんにヴェルさん、お久しぶりです」

フェ「リオとコロナも久しぶり」

　すると、はやてがこちらに来て、

―ギュッ！

な・フェ「「ああっ！！」」

は「・・・久しぶりやな葵君」

な「はやてちゃんずるいの！！」

フェ「そうだよはやて！　離れて！！」

は「ふっ。私が知らんとでも？　二人とも出会ってそうそう葵君に抱きついたやろ？」

な・フェ「「うっ」」

は「でもなんでこんなに一気に大人数で？」

　質問しながらも、抱きついたままというこの現状。

葵「連絡はしたはずだぞ。白から三人局員を派遣すると」

は「なっ、え！？　じゃあ葵君らが！？」

葵「あぁ」

そういってはやての抱擁を一回解き、

葵「独立機動部隊ガーディアン所属神無月葵、階級は一等空佐。六課の要請により出向いたしました」

孤「同部隊所属孤狐。階級は三等空佐。右に同じ！」

ヴェ「同部隊所属ヴェル。階級は准等空佐。理由は二人に同じだ」

そういって私たちは敬礼した。

は「お、お疲れ様です！　って、私より上官ってどうすればいいん！？」

葵「名目上は隊長補佐兼教導。ビシバシしごいてやるからな」

は「お、お手柔らかに・・・・」

孤「フェイトちゃんはボクがやるよ～」

ヴェ「なのはは私だ」

は「一応皆に紹介するからロビーに集まってもらおうか」

いわれるがままにロビーに召集命令がかかり私たちも三人のあとを追うように向かった。すると、そこにはかなりの人数が集まっていた。

壇上にはすでにはやてが上がっており、説明を始めていた。

は「えっと、今日は新しい仲間を紹介します。引き継ぎなどで少し遅れましたけど、今日ようやく来ました！」

そういって壇上に上がり、

葵「神無月葵だ。よろしく頼む」

孤「孤狐で～す！　よろしく」

ヴェ「ヴェルだ。よろしく頼む」

そう言うと、周りでは

局員「神無月って・・・あの白の！？」

局員「たしか黄泉路への案内人っていう異名もちの！？」

局員「確か八神部隊長より上官じゃなかったかしら？」

などなどいろいろな話が出ていた。

葵「えっと、私は一応八神部隊長より確かに上官に当たる。だが階級で呼ぶのはなるべく控えてもらえるとありがたい。あまりそう言うのは好きではないのでな。フレンドリーに頼む」

そう言うと、皆があっけらかんとした顔をしていた。まぁ、その後は壇上から降りて、はやての解散を合図に持ち場に戻った。

すると、

エリ「お久しぶりです葵さん！」

葵「ここにいるということは魔導師になったのか？」

エリ「はい！」

葵「そうか。エリオ、お前はまだ子供だ。分からないことや知らないことがたくさんある。そう言った時は私やフェイト、皆を頼るといい」

エリ「でも、迷惑では？」

葵「知らないこと、わからないことを聞くことは恥でも何でもないし迷惑でも無い。むしろそのまま放置にした方が後々に大きく響く。それに聞くときはフェイトに聞くと良いだろうな。喜ぶだろうし」

頭をなでながら、頬笑みそういった。エリオは少し考え、

エリ「・・・分かりました！」

エリオと話していると、後ろからオレンジ色の髪と青色の髪をした女性が近づいてきた。

ス「あ、あの・・・・」

葵「スバル・ナカジマ。かな？」

ス「あ！　は、はい！　遅くなりましたけど、あの時はありがとうございました！」

葵「そうか。成長したな！」

そういって頭をなでる。

葵「そう言えばお姉さんの方は元気か？」

ス「は、はい／／／　お、おかげさまで姉ともども元気です／／／」

そしてスバルの隣にいたのは。

葵「ティアも元気そうで何よりだ」

ティア「はい。兄がいつもお世話になっています」

そういってティアナもスバル同様に頭をなでる。

な「あれ？　ティアナのお兄さんって？」

葵「部下だ。ティーダ・ランスター。我が部隊の頭脳だな。それにしても二人ともきれいになったな」

ス・ティ「「っ／／／／！？」」

葵「キャロ・ル・ルシエだったかな？」

キャ「は、はい！」

葵「エリオにも言ったが君たちはまだ子供だ。分からないこと知らないことばかりだと思う。皆を頼るといい」

エリオたちと同じように頭をなでる。

キャ「（なんかお父さんの手みたい）は、はい。ありがとうございます」

は「ほぉほぉ。ということはほとんどの子たちは顔見知りなんか？」

葵「そうなるな。エリオはフェイトから、スバルはあの時に、ティアは兄から。キャロもさっき自己紹介してもらったしな。あと隊舎内部の案内を頼めるとありがたい」

は「ならリインに任せよか」

リイン「はいですぅ！」

リインは私の右肩に乗り色々な場所を案内してもらった。

その後リインの案内のもと隊舎内部の構造を把握したため食堂に来た。

すると、そこには

ヴィ「あ、葵！？」

声がした方を見ると、

葵「ヴィータか。それにシグナムとシャマル、アインも。アリシアも久しぶりだな」

シ「ど、どうしてお前が！？」

アリ「あ、葵！？　なんで！？」

シャ「えっと、何か用ですか？　部隊関連で？」

アイン「シャマル、ならなぜ孤狐とヴェルまでいる。ん？　確か今日は白から派遣される者がくるといっていたな」

リイン「はいですぅ。アインお姉さま！　葵パパと孤狐さん、ヴェルお姉さまが今回六課に派遣されてきた局員ですぅ！」

まぁ、そんな感じだな。

葵「というわけだ。しばらくの間よろしくな」

孤「明日からはみんなと一緒の制服を着る予定だよ」

ヴェ「皆と同じ職場というのは初めてだな」

確かに。今までは別々の職場でこういった一団となるのは初めてだな。

第五話

第五話

・・・・私は今【女子】寮にいます。なぜ？

葵「はやて、なぜ私は女子寮にいるんだ？」

は「いやぁ～、こっちのミスでな。女性がくるもんやとおもっとったから。てへ♪」

そういってかわいらしく舌をペロッと出すが、謝罪する気あるのかお前は・・・。といか絶対わざとだろ！？

葵「はぁ、食堂のソファーででも寝るか」

そう言って部屋を出ようとすると、

―ガシッ

な「それはいけないよ」

フェ「そうだよ葵。私たちと一緒に寝よう」

アリ「恥ずかしがること無いよ。わたし達はいつでも準備ＯＫだから／／／」

葵「いや、だが・・・というかなんの準備！？」

孤「別にいいんじゃない。葵はそう言うところは無害だし」

ヴェ「そうだな。まぁコロナとリオがいるということもあるんだろうが。ところでリオ、コロナ。お前たちはどうしたい？」

リオ「出来ればお父さんと一緒がいいです」

コロナ「うん。わたしも。お父さんあったかいから！」

葵「ここでその言葉は・・・ううっ」

子供の言葉を利用するのは卑怯だろｏｒｚ・・・・・

すると、部屋の扉が開き、

アイン「ん？　主になのは、フェイト、アリシア？」

ヴィ「葵たちもどうしたんだよ？」

葵「あぁ、実は――」

こうなった経緯を話す。回避できるかも！　という甘い期待をしたが、

シ「主はやて！　それはずるいです！」

シャ「私たちも一緒に寝たいのに！！」

リイン「リインも一緒に寝たいですぅ！！」

なぜだ・・・なぜこうなる・・・。

すると、再び扉が開くと、救いの神再び降臨。

ス「あれ？　葵さん？」

ティア「何でここに？」

葵「はやてのミスで男子寮が取れなかったということだ」

エリ「あぁ、僕の時もそうでした」

キャ「でも葵さんがどうしてここに？」

二度目の説明・・・・そして、儚い希望を・・・

エリ「・・・葵さん。ごめんなさい〈実は僕もフェイトさんが…こっちにしたので女子寮にいるんです・・・〉」

キャ「わたし達では・・・説得は無理です・・・」

ス「あたしは別に葵さんなら・・・いいですけど／／／」

ティア「わ、私も・・・葵さんなら／／／」

な、なんですと!?　それ以前にエリオも!?　というかフェイトなのか!?

さ、最後の砦までもが・・・

は（むっ、あの反応、ティアナとスバルもなんか！？）

葵「とりあえず別の場所にしてくれ。じゃないといろいろとまずい」

は「じゃあ公平にクジでいこか！」

そういっていつの間に用意したのかあみだくじが書かれていた。

問いか公平じゃないだろ！？　明らかに女性と寝る一方通行しかないじゃないか！？

全員「おー！！」

あれ？　なぜにスバルたちまで！？

そんなクジに必死になる女性陣を見て、コロナとリオはコ・リオ（（お父さんってやっぱりモテモテですね））

で、当然のごとく私の意見は無視され・・・

ス「や、やったよティア！！」

ティア「う、うん／／／」

エリ「よ、よかったのかな？」

キャ「え、えっとフェイトさん？」

勝利を手にしたのはフォワード陣。そして、

フェ「え!?　う、うん。葵と一緒に寝ていいよ（・・・いいなキャロとエリオ）」

アリ「う、なんで右端を選んだんだろ・・・」

な「そんなぁ～～～」

は「こ、今回は譲ったる!!」

ヴィ「クソぉー」

シ「・・・なぜだ、なぜあそこを選ばなかったのだ!?」

シャ「・・・せっかく昔みたいに寝れるとおもったのに・・・・」

アイン「相手は子供だ。大丈夫・・」

ヴェ「今日一日の辛抱だ」

孤「そりゃ、ボクたちは毎日葵と一緒に寝るけど、やっぱり一緒に寝たいな」

などといっている。で、場所はスバルたちの部屋だ。というかいいのか？

というか人数的に無理だろ!?

ティア「あ。兄さんから聞きました。葵さんベッド大きくする方法知ってるんですよね？」

葵「・・・ティーダ！！！！！！！！！！」

そのあとどうしたか？　拡大しましたよ。えぇしましたとも！！？

ティア「私達は気にしませんから」

ス「はい！　葵さんなら大丈夫だって思って」

エリ「久しぶりに葵さんと寝れますし！」

キャ「わ、わたしは初めてです。そのお兄さんと一緒に寝るのは」

葵「そうか。まぁこういうのもたまにはいいのかな」

コ「ん～、お父さん」

リオ「大好きです～」

そう言いながらわたしの胸の上で頬ずりをする娘達。こういうのを幸せというのか。

しかし結婚もしていないのに娘二人か。ま、本人達が幸せならそれでいいが。

ちなみに翌日にはなんとか空き部屋を使えるようにしてもらい私とコロナ、リオ。そして別の部屋にはヴェルと孤狐とした。何でも私と一緒にして間違いを回避するためとか・・・。

あと、ティーダに本来私とヴェル、孤狐がしなければならない仕事を押しつけました。なぜか？　答えは簡単ですよ。妹に変な知識を教えた罰だ！！！！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2069x/

魔法少女リリカルなのは～黄泉路への案内人～

2012年1月10日01時46分発行